

3. 1 2 貝類

今回の見直し（改訂第3版）に掲載される種は以下のとおりである。

分類群	カテゴリー	絶滅 (EX)	野生 絶滅 (EW)	絶滅危惧 I 類		絶滅危惧 II 類 (VU)	準絶滅 危惧 (NT)	絶滅のおそれ ある地域個体群 (LP)	情報 不足 (DD)	合 計	
				I A 類 (CR)	I B 類 (EN)						
初版 1996		0		1	—	—	5	14	0	0	20
改訂第2版 2005		2	0	52	21	31	90	152	3	63	362
改訂第3版 2017		3	0	85	—	—	152	150	1	28	419

※初版のカテゴリーのうち、絶滅種は現行のカテゴリー名の絶滅と野生絶滅を集約することで示し、このほか絶滅危惧種は絶滅危惧 I 類、危急種は絶滅危惧 II 類、希少種は準絶滅危惧、地域個体群は絶滅のおそれのある地域個体群、未決定種は情報不足として現行のカテゴリー名に変換して示した。

(1) 本改訂でのおもな留意点

- ・分科会委員選定：分科会長は、沖縄県内外を問わず、前回改訂時の委員に加え、本県の貝類に関する保全・系統分類・生態学等に研究業績があり、比較形態学及び分子系統解析等に卓越した軟体動物学者 8 名へ参画を依頼し、内 6 名の委員就任承諾を得て、計 7 名の貝類分科会体制を確立した。
- ・候補種選定：前改訂および環境省レッドリストに挙げられた本県内に分布する全種に加え、前回改訂後の環境変化によって生息状況が憂慮される種や、それが分類学的未詳種であっても、保全上の優先性を鑑みて、必要と判断される種は、掲載候補に選定した。
- ・ランクにかかる取り決め：前回改訂時の絶滅危惧 I A 及び I B 類は総じて絶滅リスクが高まり、境界線が狭まったため、I 類へ統合した。また本県地域個体群は国レベルの地域個体群選定により、全て絶滅危惧種へ格上げした。準絶滅危惧種は今後の動向に資するため、可能な限り全項目について記載した。
- ・ランク検討：候補種毎に担当者を決め、担当者は客観的評価に必要な情報を整備し、チェックシートによるランク案を作成した。ランク案は、原則として委員全員による検討会での合意下で決定した。
- ・分類体系：国際的な最新の知見に基づき、福田宏委員が主導し、全分科会委員の意見も加味された斬新な体系が採用された。詳細は本編最後の解説と体系表を参照されたい。

(2) 本改訂で明らかになったこと

国内最大の広大な亜熱帯域を保有する本県には正確な種数把握が困難なほどの夥しい種数の貝類が生息し、その総数は 5 千種を上回ると考えられる。この中には地史的スケールで各島嶼において固有化した陸・淡水産貝類や、内湾域に遺存した大陸や温帯系個体群、水陸境界域での直達発生等による隔離と独自進化を遂げたと考えられる海産貝類等、極めて学術的価値の高い種が含まれる。本編では前回改訂時（2005 年）に未発達であった高度な遺伝子解析技術と比較形態学の連携によって、種レベルの系統関係や分離統合等が検討され、インターネット上で閲覧可能となった古典のアーカイブから最新文献、タイプ標本画像等の閲覧によって同定や知見整備も充実した。とりわけ分科会各委員の積極的かつ献身的な貢献により未公表情報の記載、徹底した文献探索とその内容確認等が可能な限り行われ、世界的な新掲載や初記録となる情報が幾多も鏤められた内容となった。この中には未記載種や分類学的所属が不詳なまま掲載された貝類もあるが、現在、県下の広汎な範囲で、陸および内湾域等の環境攪乱が遍く進行する状況下では、その危惧すべき実体の公示を優先した。以下、ごく軽易な概要を記す。

- ・リュウキュウカワザンショウとキルンが新たに内湾性貝類の絶滅種（EX）として認定された。
- ・キセルガイ上科、マイマイ上科等の陸産貝類、ニッコウガイ上科、マルスダレガイ上科等の内湾性二枚貝類等を中心に、総じてランクが上昇し、前回改訂時（2005 年）に比べ、絶滅危惧 I 類が 1.6 倍、II 類が 1.7 倍と甚だしく増大した。地域的には、沖縄島、宮古島、大東諸島、与那国島の固有陸・淡水産貝類や沖縄島の内湾性分布限定種が極めて深刻で、前者は移入種による捕食・競合、各種土地造成に伴う自然林の消失・荒廃、干ばつ等、後者は埋立てや底質悪化等が主な減少要因とされた。
- ・クビレガイ上科等の水陸境界線上の新記録または未記載種、ヤマタニシ、ベッコウマイマイ、マイマイ、アシヒダナメクジ各上科等の隠蔽種や未記載種等の陸産貝類が新たに 88 種掲載された。

執筆者 久保 弘文（沖縄県水産海洋技術センター・班長）

(3) 掲載種の解説

1) 絶滅(EX)

和名 : リュウキュウカワザンショウ
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科
 学名 : *Assiminea* sp.
 カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー : 絶滅 (EX)

図の解説 : p. 36. 名護 (国立科学博物館所蔵 NSMT Mo 38990). 撮影 : 福田 宏.
 形態 : 殻長 6 mm、殻径 4.2 mm。殻は円錐形、著しく厚質堅固で不透明、殻頂は尖る。殻表は淡黄褐色で、不明瞭な色帯を巡らし、やや粗い成長脈以外は平滑。殻口内唇～軸唇は幅広く、紫褐色に染まる。臍孔が狭く開く個体も見られる。蓋は半月形で革質、半透明、黄褐色。頭部-腹足 (乾燥標本に基づく) は頭触角を欠き、眼胞は明瞭で、背面と側面は黒色。

近似種との区別 : 北海道のアッケシカワザンショウ *A. sp.*、陸奥湾～種子島のヒラドカワザンショウ *A. hiradoensis* Habe, 1942、奄美大島のスミヨウカワザンショウ *A. sp.*、遼東半島～韓国のリョウトウカワザンショウ *A. liaotungensis* Habe, 1943 に似るが、それらより遥かに厚い。中国大陸産のヨスジカワザンショウ *A. lutea* (A. Adams, 1861) にも似るが、後種は螺層上部や縫合下に螺肋を持つ点で異なる。

分布の概要 : 沖縄島 (名護、那覇)、与那国島。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 南西諸島での近縁種はツブカワザンショウ *A. estuarina* Habe, 1946 とスミヨウカワザンショウのみが知られる。種子島以北にカワザンショウ *A. japonica* Martens, 1877、ヒラドカワザンショウなど多くの種が存在する。

生態的特徴 : 不詳。
 生息地の条件 : 近縁種の棲息状況から類推すると、恐らく集落内の小規模な河口に棲息していたと思われる、都市化に伴う河口の護岸・浚渫や流路変更、水質汚濁等によって全ての個体群が壊滅したと考えられる。
 個体数の動向 : 国立科学博物館所蔵の波部忠重・河村良介コレクション中にそれぞれ「那覇」「名護」産の標本 (Mo38980, 72806) があり、大阪市立自然史博物館所蔵吉良哲明コレクション中にも「与那国」産の標本 (#2852-2863) が現存する (以上すべて採集日不詳)。さらに、米国のフィラデルフィア科学アカデミーにも 1945 年 6 月 6 日採集の「N. side Naha」産 9 個体 (#193385) が所蔵されている。それらのいずれにも蓋と乾燥した軟体が残されているため、採集時は生貝であったと考えられるが、戦後の南西諸島では類似個体の確認例が皆無で、近年 (1950-60 年代?) になって絶滅した可能性が高い。

現在の生息状況 : 死殻の発見も含めて一切データがなく、絶滅したと考えられる。
 学術的意義・評価 : 未記載種。カワザンショウとその近縁種群の中で最も南に分布していた種として重要であり、他種との詳細な比較が必要。

生存に対する脅威 : 都市化や公共事業等に伴う河口の改変、マングローブ伐採、水質・土壌汚濁等によって、もともと狭い範囲にしか存在しなかった全個体群が壊滅したと推測される。

特記事項 : 日本産干潟・汽水棲腹足類の中で、現時点で唯一の絶滅種。
 参考文献 : 福田 宏, 2012. リュウキュウカワザンショウ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 49.
 福田 宏, 2014. リュウキュウカワザンショウ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 4.
 波部忠重, 1973. 軟体動物. “川村日本淡水生物学 増補改訂版”, 上野益三 (編), 北隆館, 東京, 309-341.
 波部忠重, 1990. 日本産非海産水棲貝類目録 (その2). ひたちおび, (55): 3-9.
 逸見泰久・伊谷 行・岩崎敬二・西川輝昭・佐藤正典・佐藤慎一・多留聖典・藤田喜久・福田 宏・久保弘文・木村妙子・木村昭一・前之園唯史・松原 史・長井 隆・成瀬 貫・西 栄二郎・大澤正幸・鈴木孝男・和田恵次・渡部哲也・山西良平・山下博由・柳 研介, 2014. 日本の干潟における絶滅の危機にある動物ベントスの現状と課題. 日本ベントス学会誌, 69: 1-17.

執筆者名 : 福田 宏

和名 : トクノシマケハダシワクテマイマイ
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
 学名 : *Moellendorffia (Trichelix) tokunoensis* Pilsbry & Hirase, 1905
 カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

〈貝類〉

- 形態 : 殻は中型(殻径約 23 mm)で、殻長は短く(約 12 mm)、分厚い円盤形で、殻頂・螺塔は陥没する。体層周縁は丸い。殻は赤褐色で、殻表にやや粗い毛が規則的にある。殻口は肥厚・反転し、黄白色。
- 近似種との区別 : 本種は、中型で、生殖器の鞭状器がやや長いことで、琉球列島の同属他種と識別できる。
- 分布の概要 : 徳之島と沖縄島北部からのみ知られている。
- 近似種との区別 : 本種は、中型で、生殖器の鞭状器がやや長いことで、琉球列島の同属他種と識別できる。
- 分布の概要 : 徳之島と沖縄島北部からのみ知られている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁なケハダシワクチマイマイ *M. (T.) eucharistus* とコケハダシワクチマイマイ *M. (T.) diminuta* は奄美大島に分布する。
- 生態的特徴 : 森林の倒木下に生息する地上性種である。
- 生息地の条件 : 人為的影響の極めて少ない自然度の高い湿性の森林。
- 個体数の動向 : 沖縄県内からは絶滅したと考えられる。
- 現在の生息状況 : 沖縄県内からは絶滅したと考えられる。
- 学術的意義・評価 : 本属の種は中国南部と台湾に分布し、宮古・八重山諸島に欠落するという中琉球に残存した群である。
- 原記載 : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1905. New land mollusks of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 57: 705-719. (p. 710, as *Moellendorffia eucharistus tokunoensis*. Type loc.: "Tokunoshima, Osumi")
- 参考文献 : 黒田徳米, 1958. 日本及び隣接地域産陸棲貝類相 (4). *Venus*, 20(1): 132-158.
湊 宏, 1980. 日本産陸棲貝類の生殖器の研究—XVI. 徳之島産トクノシマケハダシワクチマイマイ. *Venus*, 39(3): 190-192.
湊 宏・山本愛三, 1983. 沖縄本島で採集されたシワクチマイマイ属. *ちりぼたん*, 14(2): 29-30.
- 執筆者名 : 黒住耐二

和名 : キルン
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科
学名 : *Meretrix* sp. A
方言名 : キルン
カテゴリー : 絶滅 (EX) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 36. 佐敷干潟. 撮影 : 久保弘文.

形態 : 大型の亜三角形(ハマグリ型)の二枚貝類で最大殻長 110 mm に達する。殻厚は 5 mm 程度で重厚。以下、佐敷干潟の泥中から見いだした調査標本の特徴を記載する。殻頂の角度はやや鋭く、約 80 度であった。外套線湾入はやや浅く、先端部の突出は緩やかで腹縁とほぼ平行。絞歯は主歯及び前後側歯共に明瞭で、後側歯は長く、後背縁の 3 分の 2 程度まで伸びる。殻表には半透明の薄い殻皮を纏い、光沢がある。色彩は濁白色の地に赤褐色のジグザク模様と斑点が混在する。

近似種との区別 : 既往知見からチョウセンハマグリに近いとされているが、調査標本(沖縄県水産海洋技術センター所蔵標本)の特徴は外套線湾入および先端部が腹縁方向へ突出しない点でハマグリにも類似した特徴を具える。また殻頂の角度はハマグリ(約 70 度)より鋭く突出し、殻厚も重厚で、チョウセンハマグリ(約 85 度)に近い。

分布の概要 : 大正 10 年(1920 年)代に馬天(旧佐敷町)においてハマグリ類についての新聞資料が残っており、「蛤は昔から沖縄にあって其の味の佳良なる故、貴ばれたり、大正十 X 年の 3 月頃、佐敷村が蛤の種を三馬車位輸入して馬天の浜の一部に百坪位棚を設けて繁殖を計りつつあり。・・・殻は加工して基石を作るに使ふ」との記載がある。輸入したとあるが、馬車を用いたとあり、時代や文面から島外からの種苗移送の可能性は低いと推測する。先史時代にも貝塚時代中期(13 世紀頃)の中城湾南部(玉城城遺跡)やグスク時代(14~15 世紀頃)の金武湾に近接する、うるま市宮城島の高嶺遺跡等の貝塚をはじめ、同市宇堅のアカジャンガー貝塚からも類似のハマグリ類が多く出土しており、少なくとも沖縄島中南部東海岸の湾岸に広く生息していたと考えられ、沖縄島の在来個体群であったことが示唆される。また本種の生息していた沖縄島の中城湾や金武湾にはウスイロバイやヨロイノソデ等、日本本土に生息するバイやフドロ等の姉妹関係を示唆する別種の存在等も知られていて、本種も沖縄島に独立した種か、地域個体群の可能性が高いと考えられる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県には西表島固有のトゥドゥマリハマグリが分布するが、はるかに小型で形態も異なる別種と考えられる。

生態的特徴 : かつての中城湾南部の清浄な外浜干潟は、与那原町の記録では「きわめて静かで白い砂浜の続く入江を前にした浦辺の仙境」とされ、こうした原風景から類推して、本種は同属種と類似した潮間帯中~下部の狭い垂直分布で、砂浜域に浅く埋在する生態であったと推測される。

生息地の条件 : 上記から推測するに、きわめて清浄で栄養に富んだ砂質干潟。

個体数の動向 : 1940 年頃まで生息していたとの聞き取り調査に基づく報告があるのみで、少なくとも過去 50 年以上の信頼できる生息記録が無い場合、絶滅したと考えられる。

現在の生息状況 : 絶滅。

学術的意義・評価 : 絶滅したとは言え、沖縄島固有のハマグリ類の可能性があり、極めて重要である。今後、遺伝子解析技術の伸展により、殻皮や靱帯等のタンパク質が残存している標本から系統解明がなされる可能性もあり、こうした標本を公的に保存管理しておく必要がある。

特記事項 : 与那原湾標本(RUMF-ZM-03482)は佐敷干潟産より小型(殻長 69 mm)で、チョウセンハマグリに

- 図の解説 : p. 36. 糸満市. 撮影 : 久保弘文.
 形態 : 貝殻は本科中、やや大型で殻径 10 mm 内外に達する。笠形の貝殻が著しく扁平化し、むしろ反り返って、蓮の葉っぱのような形をした満月状の非常に特殊な形態を呈する。殻表には微細な顆粒状の放射肋を多数有する。殻内面には腹足と外套膜基部の筋肉を支持するための隆起が楕円状に発達する。内臓囊の結合部にあたる部位にも馬蹄形の痕跡が見られる。蓋は内在し、亜三角型で、核は端部に位置し、アマオブネ類特有の形状の蓋が核の部分に痕跡的に存在し、内側に極めて微小なペグが見られる。
- 近似種との区別 : 扁平な形として類似するハチジョウユキズメより、本種は更に扁平で大型化することで区別できる。
- 分布の概要 : 既存産地は沖縄島糸満市南部のみ。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種の所属するユキズメ科の貝類は広域分布種が多いが、本種は極めて特殊な環境に生息するため、他産地での発見はあまり期待できない。
- 生態的特徴 : アナジャコ的一种イワホリアナジャコ *Upogebia rupicola* Komai, 2005 の巣穴に共生する。
- 生息地の条件 : 泥岩に穿孔するイワホリアナジャコの巣穴の内側に特異的に生息する。
- 個体数の動向 : 既存の生息場所は沖縄島南部（糸満市）の極めて狭い範囲の泥岩露出場所（1 km 以下）のみで、都市部に隣接し、泥岩上への大量繁茂したアナオアサ被覆に伴う閉塞や海岸散策による場の踏みつけが激しく、生息環境は危機的状況となっている。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 未記載種である可能性が高く、イワホリアナジャコとの共生関係や、泥岩中における巣穴環境への特異な形態適応等、進化生態学的にきわめて興味深い貝類である。
- 生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所の消失。人為的なイワホリアナジャコ巣穴の破壊や攪乱。
- 特記事項 : 本種の生息する巣穴を掘るイワホリアナジャコも 2005 年に記載されたばかりの希少種で、同産地のみでしか見つかっていない。なおイワホリアナジャコをミナミアナジャコの異名とする見解もある (Poore, 2015)。
- 参考文献 : Komai, T., 2005. A new species of *Upogebia* (Crustacea: Decapoda: Thalassinidea: Upogebiidae) from Okinawa Island, Ryukyu Islands. *Species Diversity*, 10(4): 259–268.
 Poore, G.C.B., 2015. Thermoarcturidae, a new crustacean family of three genera (Isopoda: Valvifera). *Zootaxa*, 4007(3): 409–418.
- 執筆者名 : 久保弘文

和名 : マルタニシ
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 タニシ上科 タニシ科
 学名 : *Cipangopaludina laeta* (Martens, 1861)
 方言名 : ターシナ
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 図の解説 : p. 36. A : 久米島. B : 西原町. 生体 : 宮古島. 撮影 : 平野尚浩 (A, B), 福田 宏 (生体).
 形態 : 殻は大型で緑褐色、亜球形で螺層がよく膨らみ、螺塔がやや高まる。殻質は薄く、殻表はおおむね平滑だが、細い刻点状の彫刻を数条めぐらす。殻長 40 mm に達する。蓋は淡褐色。
- 近似種との区別 : 近似種オオタニシはより大型で、螺塔がより細まり、ヒメタニシはより小型で、殻底に角を有する。名義タイプ亜種シナタニシや、九州、朝鮮半島、台湾、中国、ベトナムなどに生息するいくつかのマルタニシ近縁種群とは殻形態での識別が困難な場合もあるが、塩基配列により識別が可能。
- 分布の概要 : 本系統の確実な分布域として沖縄島北部（福地ダム）、久米島。沖縄県外では北海道、本州、四国、福江島、徳之島、渡名喜島、宮古島（絶滅？）のものは未検討。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 山口県から移入した近縁な別系統の個体群（おそらくシナタニシに該当する）が西表島で確認されている（北野・他, 2015; Hirano *et al.*, 準備中）。この他九州や朝鮮半島、台湾、中国、ベトナムなどに近縁な別系統が分布する。
- 生態的特徴 : 雌雄異体の卵胎生で、殻径 8 mm 内外のそろばん玉状の稚貝を産出する。
- 生息地の条件 : 湿地や池、水田や流れの緩やかな水路などに生息する。
- 個体数の動向 : かつて生息が確認されていた島々（与那国島、石垣島、西表島、伊平屋島など）では近年の調査では生息が確認されていない。石垣島では 2016 年の調査で一つの水田周辺で古い殻が 2 つ、宮古島では青柳（2009）と同様の地点で古い殻の欠片が確認されたのみである。これらの系統が何に属するのかは未解明。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 沖縄島のマルタニシは北野・他（2015）で確認されているものを除くと、九州や朝鮮半島、台湾、大陸のものとは異なり日本本土のものと近縁である。日本本土からの移入の可能性も否定できないため今後の網羅的遺伝解析による固有性の確認が必要だが、現存する産地は非常に限定的で、簡単に減少してしまう恐れがあり予防原則により絶滅危惧 I 類 (CR+EN) とする。
- 生存に対する脅威 : 外来のリンゴガイ科貝類による農業被害を減らすため、対抗策として水田に農薬を散布することがあり、これが本種にも影響を与える可能性が危惧される。さらにリンゴガイ科貝類との種間競争も本種を減少させる要因になりうる。この他水質汚染や生息環境の埋め立て、改修も生存に対する脅威と考えられる。
- 特記事項 : 分子系統解析により、現存する沖縄島のマルタニシは日本本土のものと近縁で、北野・他（2015）で

確認されているものや、九州本土、朝鮮半島、台湾、大陸のものとは異なる系統であることが明らかになった (Hirano *et al.*, 準備中)。

- 原 記 載 : Martens, E. von, 1861. Die Japanischen Binnenschnecken im Leidner Museum. Malakozoologische Blätter, 7: 32-61. (pp. 45-46, as *Paludina laeta*. Type loc.: "Japan")
- 参 考 文 献 : 青柳 克, 2009. 宮古島で再確認されたマルタニシ. ちりぼたん, 39: 73-76.
- 知念盛俊, 1996. 陸・淡水産貝類 マルタニシ. "沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 447-448.
- Hirano, T., Saito, T. & Chiba, S., 2015. Phylogeny of freshwater viviparid snails in Japan. Journal of Molluscan Studies, 81: 435-441.
- 福田 宏・青柳 克・亀田勇一, 2017. 沖縄県渡名喜島の非海産貝類相. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
- 北野 忠・渡辺健太・崎原 健・北條芳隆・河野裕美, 2015. 西表島におけるマルタニシの利用と西部のミナピシ地区で確認された個体群の由来. 東海大学沖縄地域研究センター所報 西表島研究, for 2014: 44-49.
- 増田 修・小野正人, 1988. 与那国島の淡水産貝類. 神奈川自然保全研究会報告書, (7): 52-60.

執 筆 者 名 : 平野尚浩・久保弘文

和 名 : オキナワムシオイ
 分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
 学 名 : *Chamalycaeus okinawaensis* Uozumi, Yamamoto & Habe, 1979
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

図 の 解 説 : p. 36. 大宜味村. 撮影: 久保弘文.
 形 態 : 貝殻は大宜味村産 20 個体の実測では長径約 3.89±0.18 mm、短径 3.19±0.14 mm であった。殻口はやや下降する個体から直線的に延長する個体まで変異が大き。次体層側は弱く括れ、縫合下に虫様管と呼ばれる呼吸管を持つ。殻表の縦肋は細かく規則的だが、頸部では弱く、縫合下は更に微弱となる。

近似種との区別 : 本種は、オキナワムシオイ類似種とされたことがあるが、変異が大きく、その範疇にタイプ標本の形態が包含されることから、オキナワムシオイと同種と見なした。

分布の概要 : 沖縄島大宜味村ネクマチヂ山周辺の他、名護市久志大川上流や国頭村の一部から知られている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島に分布するムシオイ類として、他に比較すべき種は知られていない。

生態的特徴 : 産卵や成長、摂餌生態等詳しいことは殆ど判っていない。

生息地の条件 : 生息場所は山間部の落葉溜り等に潜んでいる。ムシオイガイ類にはやや乾燥した場所を好む種も少なくないが、本種は湿潤環境を好む。しかし、完全に水気でベタベタした場所ではなく、落葉間が適度に湿気ていながら、隙間を維持しているような微視的環境が必要と思われる。常に狭く、かつ個体数も少ない。

個体数の動向 : 2010 年まではネクマチヂ山麓部でも少ないながら、落葉間から見いだされ、大保川上流でも生息地があったが、2012 年の調査では前所で僅か 1 個体、後所では全く見いだすことが出来なかった。

現在の生息状況 : 2015 年 11 月のネクマチヂ岳調査では終日調査にも関わらず、生貝は山頂付近で雄 1 個体のみ確認されたに過ぎない。

学術的意義・評価 : オキナワムシオイは、沖縄島南部の石灰岩の裂罅堆積物から化石として発見、記載され、かつては沖縄島に広く生息したと推測される。しかし、現在は沖縄島北部の自然度の高い場所のみで生きながらえている。今後の分子系統解析などの結果によっては沖縄島固有の希少種であるだけでなく、大陸遺存等新知見が明らかになる可能性があり、生物地理、進化生物学等の学術的価値が極めて高い。

生存に対する脅威 : 分布域が沖縄島北部に広く分散しているが、既往産地自体は極めて少なく、その範囲も非常に狭いので、未発見の生息場所がおそらく残っていると考えられる。しかし、そうした場所は、認識すらされずに、様々な開発によって消失している可能性がある。しかし、本種は微小で落葉の隙間に隠れており、簡易なアセスメント調査では確認困難で、森林伐採等の開発前には綿密なリター調査が必要である。

原 記 載 : 魚住賢司・山本愛三・波部忠重, 1979. 沖縄本島産化石ムシオイガイの新種. Venus, 38(3): 167-168. (pp. 167-168, figs 1-2, as *Chamalycaeus okinawaensis*. Type loc.: "沖縄本島的那覇市末吉宮跡")

参 考 文 献 : Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.

知念盛俊, 1989. 沖縄島北部の陸産貝類・淡水産貝類. "昭和62年度沖縄島北部地域調査報告書 南西諸島における野生生物種の保存に不可欠な諸条件に関する研究", 環境庁自然保護局 (編), 環境庁自然保護局, 東京, 433-451.

知念盛俊・治井正一・儀間一恵, 1995. 大宜味村の陸・淡水棲貝類. "大宜味村の自然, 大宜味村動植物調査報告書, 大宜味村文化財調査報告書, (4)", 大宜味村教育委員会 (編), 大宜味, 295-327.

久保弘文, 2012. 陸生貝類調査. "平成23年度地域生物多様性保全計画 (大宜味村地域連携保全活動計画) 策定調査業務報告書", 環境省・大宜味村 (編), 環境省・大宜味村, 大宜味, 56-64.

黒住耐二, 2005. オキナワムシオイ類似種. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物

編)「レッドデータおきなわ」, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 313-314.

執筆者名: 久保弘文

和名: ヒラセアツブタガイ
分類: 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
学名: *Platyrhaphe hirasei hirasei* (Pilsbry, 1901)
カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

図の解説: p. 37. A: 南城市. B: 土粒付着個体 糸満市. 生体: 恩納村. 撮影: 久保弘文.
形態: 最大殻径 11 mm に達する平巻状の白い殻と石灰質の厚い蓋を持つ。生時には貝殻に泥を付着させてカモフラージュする。

近似種との区別: 沖縄島に本属は本種のみ産し、本島内では他の陸産貝類と容易に区別できる。
分布の概要: 沖縄島中南部、慶良間諸島、渡名喜島、久米島に広く分布し、沖縄島の名護市以北でも分布記録があるものの、近年の調査では未見である。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 同属の種が沖縄県各島嶼に分布しているが、それぞれ形態的に非常に類似している。台湾産の個体もヒラセアツブタガイと同種として扱われているが、分類学的再検討が必要である。

生態的特徴: 生時には貝殻に泥を付着させてカモフラージュし、降雨時には石灰岩上で殻を立てて匍匐する。
生息地の条件: 落葉や土壌の堆積する石灰岩上の窪み等に生息する。
個体数の動向: 沖縄島南部全域、中部では恩納村南部、沖縄市、うるま市等の石灰岩地に産地が点在するが、2010年以降では極めて確認事例が少なく、特に沖縄島南部では激減している。

現在の生息状況: 同上。
学術的意義・評価: ヒラセアツブタガイ類は奄美群島では記録が無いにも関わらず、沖縄島～台湾に分布し、中琉球から台湾という特異な地理的分布をもち、特に本種は分布の北限にあたるため、生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威: 沖縄島中南部においては広大な石灰岩地が広がっているが、宅地や墓地等の造成により直接的な生息場所の破壊が進行し、城趾や古いウタキ周辺の森のみで生きながらえている状況である。しかし、その周辺地域においては、さらに公園化や集合墓地、遊歩道の造成等で森林環境が改変されており、予断を許さない。

原記載: Pilsbry, H.A., 1901. New land shells from the Loo Choo Islands and Japan. *The Nautilus*, 15: 18-24. (p. 22, as *Cyclous Hirasei*. Type loc.: "Loo Choo Is.")

参考文献: Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). *Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands*, 3: 127-149.
知念盛俊, 1992. 中城城跡と周辺の陸産貝類. "中城村史 第二巻 資料編1", 中城村史編集委員会(編), 中城村役場, 中城, 238-243.
福田 宏・青柳 克・亀田勇一, 2017. 沖縄県渡名喜島の非海産貝類相. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
李彦錚・陳文徳, 2003. 自然観察図鑑3 蝸牛. 親親文化事業有限公司, 台北, 287 pp.
久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. "恩納村誌 第1巻 自然編", 恩納村誌編さん委員会(編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
久保弘文, 2012. 陸産貝類調査. "平成23年度地域生物多様性保全計画(大宜味村地域連携保全活動計画)策定調査業務報告書", 環境省・大宜味村(編), 環境省・大宜味村, 大宜味, 56-64.
久保弘文, 2017. 陸産貝類. "名護市史 自然編", 名護市史編さん委員会(編), 名護市教育委員会, 名護, 印刷中.
黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録(頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106 pp., 3pls.
黒住耐二, 2005. ヒラセアツブタガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 412.

執筆者名: 久保弘文

和名: ゴマガイ属の一種
分類: 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ゴマガイ科
学名: *Diplommatina (Sinica)* sp. A
カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 該当なし

図の解説: p. 37. 1(参考): ヤエヤマゴマガイ 石垣島. 2: ゴマガイ属の一種 魚釣島(国立科学博物館 波部忠重標本). 3(参考): リュウキュウゴマガイ 石垣島. 撮影: 亀田勇一.

形態: 貝殻は微小で殻長約 2 mm, 螺塔は高く、殻頂はやや尖る。太短い紡錘型で殻径は次体層で最大となる。螺管はやや膨らみ、縫合は刻まれる。殻は淡橙色で、殻表には細かい縦肋が密生する。殻口は円形に近いが、殻軸側の底面は弱く角張り、殻口縁は広がり肥厚する。殻口内には軸歯があり、体

層内面の殻口直上には長い腔壁が1本ある。

近似種との区別： 琉球列島に生息するゴマガイ類とは外形が太短いこと、腔壁が長いこと、尖閣諸島に分布することで区別できる。

分布の概要： 尖閣列島（黄尾島、魚釣島）のみに生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 他のゴマガイ類との類縁関係は不明であり、現時点では比較が困難である。

生態的特徴： 自然林の落葉下に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 現地調査が長らく行われていないが、野生化したヤギによる自然植生の破壊が進行しており、個体数は減少していると思われる。

現在の生息状況： 現地調査が長らく行われていないため、現在の生息状況は不明である。野生化したヤギの食害による生息環境の悪化が懸念される。

学術的意義・評価： 尖閣諸島の固有種であり、ヤギの食害による影響が懸念されるため、保全の重要性は極めて高い。

生存に対する脅威： 野生化したヤギの食害による自然植生の破壊、林床の乾燥化、土壌流出による生息地の消失。

特記事項： 未記載種と思われる。

参考文献： 知念盛俊, 1979. 尖閣列島の陸産貝類. 沖縄生物学会誌, (17): 19-27, pls 1-3.
横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5(1/2): 1-12.

執筆者名： 上島 励

和名： アマミカワニナ

分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニツノガイ上科 トゲカワニナ科

学名： *Stenomelania costellaris* (I. & H.C. Lea, 1850)

カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態： 殻は大型で、非常に高い塔状、やや堅固、老成すると縫合直下の螺層が張り出す。殻表は平滑で漆黒色だが、赤褐色の酸化鉄皮膜に被覆されることがある。殻表は微細な螺条を多数めぐらす。殻長 60 mm に達する。蓋は黒褐色。

近似種との区別： 近似種スグカワニナはより大型で、螺塔の細まりがより強く、直線的。アマミカワニナは螺塔がより急激に細まり、各螺層がやや膨らみ、縫合部が張り出す。

分布の概要： 沖縄島北部の数河川、西表島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 沖縄産トゲカワニナ類中、カリントウカワニナ、ムチカワニナに次いで生息地点数が少なく、生息個体数も限定される。

生態的特徴： 汽水性で川底の砂泥に潜りこみ、デトライタスや水草の屑等を摂食する。両側回遊性で生活史初期に浮遊幼生期（ベリジャー）を経る。

生息地の条件： 流れの緩やかな河川中流の水草や葦類等の沈水植物が随伴する砂泥底に生息地が形成されるが、水質が清浄で安定している水域に限定される。

個体数の動向： 沖縄島中南部では、かつて湧水由来の河川に広く分布していたが、現在は風化した死殻が稀に見いだされるのみで、全く生息せず、絶滅した可能性が高い。

現在の生息状況： 沖縄島北部 3 河川のみ狭い範囲にわずかな個体数が生残しているにすぎない。西表島では北部 2 河川、南部 1 河川で、確認個体は数個体に留まっている。

学術的意義・評価： 浮遊幼生期を経ながらも分布域が限定されることから、両側回遊性の分散・着底に関する生態学的研究の解明に重要な貝類である。移動性に乏しく、大型種で成長に要する時間も数年を要すると考えられるため、長期的な自然度の高い河川環境の生物指標としても重要である。

生存に対する脅威： 河川床の直線的改変や河川改修、都市排水や畜産排水等の過剰流入による水質汚染、ダム造成や利水等による渇水、貝食の非在来魚コイによる被食。

原記載： Lea, I. & Lea, H.C., 1850. Descriptions of a new genus of the family Melaniana, and of many new species of the genus *Melania*, chiefly collected by Hugh Cuming, esq., during his zoological voyage in the East, and now first described. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1850: 179-197. (pp. 184-185, as *Melania costellaris*. Type loc.: "Small streams in the islands of Negros, Tanhay, Siquijor, Philippines")

参考文献： 福田 宏, 1996. 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
久保弘文, 2012. アマミカワニナ. “日本ベントス学会編 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 32.
黒田徳米, 1929. 日本産カワニナ類について. ヴェキナス, 1(5): 179-193, pl. 4.

執筆者名： 久保弘文

和名： ムチカワニナ (タケノコカワニナ)

分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニツノガイ上科 トゲカワニナ科

学名： *Stenomelania crenulata* (Deshayes, 1838)

カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態： 殻は大型で、高い塔状、典型的な個体は殻表に石畳状の彫刻があるが、平滑な部分が多い個体も確

認められている。殻色は黒褐色～灰褐色で、赤褐色の酸化鉄皮膜に被覆されることがある。殻長 60 mm に達する。蓋は黒褐色。

近似種との区別： 亜成貝までは殻表に石畳状の彫刻が顕れやすいが、老成すると摩滅し、形態での区別が難しくなる。

分布の概要： 奄美大島、沖縄島北部に限られた河川。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 沖縄産トゲカワニナ類中、カリントウカワニナに次いで生息地点数が少なく、生息個体数も限定される。

生態的特徴： 汽水性で川底の砂泥に潜りこみ、デトライタスや水草の屑等を摂食する。両側回遊性で生活史初期に浮遊幼生期（ベリジャー）を経る。

生息地の条件： 流れのある河川中流の砂泥底に生息地が形成されるが、水質が安定している水域に限定される。

個体数の動向： 沖縄島北部の満名川では、1990年代までは若齢貝から老成貝まで高密度に生息していたが、食用としての大量採取や河川改修があり、大幅に減少した。大浦川産は形態が日本本土のタケノコカワニナに類似した個体群で元々個体数が少ない。残り数河川で少ないながら生息するが、生棲息範囲が狭く、保全上の観点から公表を避ける。

現在の生息状況： 同上。

学術的意義・評価： 浮遊幼生期を経ながらも分布域が限定されることから、両側回遊性の分散・着底に関する生態学的研究の解明に重要な貝類であり、移動性に乏しく、大型種で成長に要する時間も数年を要すると考えられるため、自然度の高い河川環境の長期的な生物指標としても重要である。

生存に対する脅威： 河川床の直線的改変や河川改修、都市排水や畜産排水等の過剰流入による水質汚染、ダム造成や利水等による渇水、食用、鑑賞用などによる乱獲、貝食非在来種コイによる被食。

特記事項： 遺伝子や幼生生態の研究が進展しており、同種群は分散能力に長けていることが判明したが、生息場所の攪乱や減少は著しい。タケノコカワニナと遺伝的に同じクレードに入るため、同種の可能性がある。

原記載： Deahsytes, G.P., 1838. Histoire naturelle des animaux sans vertèbres: présentant les caractères généraux et particuliers de ces animaux, leur distribution, leurs classes, leurs familles, leurs genres, et la citation des principales espèces qui s'y rapportent : précédée d'une introduction offrant la détermination des caractères essentiels de l'animal, sa distinction du végétal et des autres corps naturels, enfin, l'exposition des principes fondamentaux de la zoologie, Tome 8, 660 pp. (pp. 434-435, as *Melania crenulata*. Type loc.: "...")

参考文献： 福田 宏・木村昭一, 2012. タケノコカワニナ (レベックカワニナ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 33.

Hidaka, H. & Kano, Y., 2014. Morphological and genetic variation between the Japanese populations of the amphidromous snail *Stenomelania crenulata* (Cerithioidea: Thiaridae). *Zoological Science*, 31: 593-602.

久保弘文, 2012. ムチカワニナ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 32.

久保弘文・中井克樹, 2014. ムチカワニナ. “レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 48.

増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

執筆者名： 久保弘文

和名： カリントウカワニナ

分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニノツノガイ上科 トゲカワニナ科

学名： *Tarebia* sp.

カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説： p. 37. 1, 生体：沖縄島北部. 2：奄美大島. 撮影：久保弘文.

形態： 殻は本科では中型で、やや長い紡錘形。和名の由来である黒糖花林糖に似た黒褐色の殻は、奄美産と比べて沖縄産は殻色がやや淡い。比較的堅固、肩部から体層中部には瘤状の螺肋が発達するとともに多数の螺溝をめぐらす。殻長約 40 mm。蓋は黒褐色。

近似種との区別： 近似種イボアカワニナはより膨らみが強い紡錘形で、彫刻が細かく、布目状となることで区別できる。

分布の概要： 沖縄島北部の 1 河川。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 沖縄産トゲカワニナ類中最も生息地点数が少なく、生息個体数も限定される。

生態的特徴： 汽水性で川底の砂泥に潜りこみ、デトライタスや水草の屑等を摂食する。両側回遊性で生活史初期に浮遊幼生期（ベリジャー）を経る。

生息地の条件： 流れの緩やかな河川やマングローブ林内の水草や葦類等の沈水植物が随伴する砂泥底に生息地が形成されるが、沖縄では河川のみに見られる。

個体数の動向： 2015年に沖縄島北部の 1 河川の極めて狭い範囲に、小規模な個体群が存在することが判明した。

現在の生息状況： 沖縄島北部の 1 河川の狭い範囲にわずかな個体数が生残しているにすぎない。

学術的意義・評価： 浮遊幼生期を経ながらも分布域が限定されることから、両側回遊性の分散・着底に関する生態学的研究の解明に重要な貝類であり、移動性に乏しいと考えられるため、自然度の高い河川環境の長期的な生物指標としても重要である。奄美大島に大きな個体群があり、多産地もあるが、遺伝的分析の結果、沖縄個体群は奄美個体群と同質な遺伝集団ではなかった（日高・狩野両氏私信）。

生存に対する脅威： 沖縄島北部の 1 河川では過去に外来種で貝類を捕食するマゴイが放流され、河床の浚渫なども行わ

特記事項： 現況、沖縄島北部の1河川では生態系保全への認識が高まりつつあり、2016年に鯉の駆除や勉強会などが始まっている。

参考文献： 福田 宏, 2012. カリントウカワニナ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 34.

福田 宏・中井克樹, 2014. カリントウカワニナ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 51.

Hidaka, H. & Kano, Y., 2014, Morphological and genetic variation between the Japanese populations of the amphidromous snail *Stenomelania crenulata* (Cerithioidea: Thiaridae). *Zoological Science*, 31: 593–602.

執筆者名： 久保弘文

和名： カトゥラプシキタダミ
 分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カチドキシタダミ科
 学名： *Coliracemata katurana* Ponder, Fukuda & Hallan, 2014
 カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説： p. 37. 標本, 生体 (右上以外) : 西表島浦内川河口 (パラタイプ; Australian Museum 所蔵 AMS C.445414). 右上: 西表島大原. 撮影: J. Studdert (標本), 福田 宏 (浦内川, 生体), 久保弘文 (大原).

形態： 殻長 0.5 mm、殻径 1.3 mm。殻は低平な円盤状、暗赤褐色で不透明、殻頂は凹まず多少突出し、螺層には螺状稜角を欠く。殻表に多数の明瞭なジグザグ状螺肋を巡らす。殻口外唇は僅かに肥厚するが縦張肋は形成されない。臍孔は広い。蓋は円く、革質半透明で多旋型。頭部-腹足は無色半透明で、黒色斑はなく白点を散在するのみ。足の後端は尖らない。

近似種との区別： ヤイマカチドキシタダミに似るがはるかに小さく、殻頂は凹まず、螺状稜角を欠く。また頭部-腹足は無色で、足の後端の形態も異なる。

分布の概要： 西表島固有種。浦内川河口浦内橋附近 (旧名カトゥラ; タイプ産地) からのみ知られていたが、2015年12月、大原小学校附近の無名河川から、久保弘文氏によって2箇所の産地が発見された。

近縁な種及び群との分布状況の比較： プシキタダミ属 *Coliracemata* Ponder, Fukuda & Hallan, 2014 は香港・オーストラリア北部・インド北東部から4種が知られ、いずれも熱帯のマングローブに産する。本種は現時点で同属の世界最北の種であるが、奄美大島住用川河口にも本種に近縁と思われるやや大型の別種が産し、今後の検討が必要である。

生態的特徴： 棲息環境以外未詳。

生息地の条件： マングローブ湿地内の砂泥底で、干潮時に生じる浅い水溜まり中の緑藻間や落葉下に、ヤイマカチドキシタダミと共に見られる。

個体数の動向： 既知産地は世界でも西表島の2箇所のみで、分布域・棲息範囲が極端に狭いだけでなく、総個体数も著しく少ないと推測される。ヤイマカチドキシタダミよりさらに稀少性が高い。

現在の生息状況： 浦内川・大原の2産地とも、極めて狭い範囲 (約20×20 m以下) に少数が棲息するのみであり、個体群は極めて脆弱である。

学術的意義・評価： ヤイマカチドキシタダミの項を参照。また本種は、世界のプシキタダミ属及びカチドキシタダミ科全種の中で、最も体サイズの小さい種である。

生存に対する脅威： ヤイマカチドキシタダミと同様であるが、本種はその産地の極端な少なさから、より危機的な状況にあると考えられる。また、本種はヤイマカチドキシタダミよりさらに小さいため、よほど精度の高い調査を行わなければ見過ごされる可能性が高い。

特記事項： 西表島は国立公園であり、自然公園法で開発規制されている。

原記載： Ponder, W.F., Fukuda, H. & Hallan, A., 2014. A review of the family Clenchiellidae (Mollusca: Caenogastropoda: Truncatelloidea). *Zootaxa*, 3872: 101–153. (pp. 134–137, figs 16–18, 21, 23, 24, 26, as *Coliracemata katurana*. Type loc.: “Among green algae on sandy mud bottom around the roots of mangrove trees, the Urauchi River Estuary, just below the Urauchi Bridge, Iriomote Island, Taketomi-chô, Yaeyama-gun, Okinawa Prefecture, Japan. 24°24'10" N, 123°46'34" E”)

参考文献： 福田 宏, 2012. カトゥラプシキタダミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 41.

福田 宏, 2014. カトゥラプシキタダミ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 61.

久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック—レッドデータおきなわ—第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—2. 西表島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

山下博由・名和 純・福田 宏・奥田夏樹, 2005. 西表島浦内川流域・トゥドゥマリ浜の貝類相 (予報). “西表島浦内川河口域の生物多様性と伝統的自然資源利用の総合調査報告書 II”, 西表島浦内川流域研究会 (編), 西表島浦内川流域研究会, 竹富, 47–61.

執筆者名： 福田 宏

〈貝類〉

和名 : **ガタチンナン**
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 イソコハクガイ科
学名 : *Sigaretormus* cf. *planus* (A. Adams, 1850)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

図の解説 : p. 37. 羽地内海. 撮影 : 久保弘文.
形態 : 殻長 2.3 mm、殻径 4 mm。殻は螺塔低平な円盤形、薄質半透明、無色であるが生時は褐色の附着物で覆われる。殻表は鈍い光沢を持ち、細いが明瞭な螺脈を密に巡らす。体層周縁は丸い。臍孔は広い。殻口唇は薄くて鋭く、極端に前傾。蓋は亜円形、革質で黄色半透明、核を中心に持つ多旋型。頭部-腹足の全体が紅色で、頭触角は細長い。腹足前端は左右に広がって突出し、後端は中央が彎入して短く二分する。外套縁右端に短い一対の外套触角を持つ。

近似種との区別 : 従来 *S. planus* は、記載者 Adams 自身が後年 (1863: 75, *Adeorbis plana* として)、「Gotto」(長崎県五島列島)産個体を同種としたことから本州~九州産のイソマイマイに相当するとされてきたが、イソマイマイは香港の *S. planus* や沖縄県産個体より遥かに大形で、明瞭な周縁角を持つため別種と考えられる。国内には他に大分県中津市に未詳種が産するが、それら以外に同属と考えられる種は知られていない。

分布の概要 : 国内は沖縄島羽地内海のみ。*S. planus* が同種ならば香港、フィリピンにも分布することになる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : イソマイマイは房総半島・能登半島~九州に分布し、南西諸島での確実な記録はない。

生態的特徴 : 内湾の砂干潟の砂中に潜るタテジマユムシの巢孔中に見られるが、宿主との関係や食性は未詳。香港産の *S. planus* はスジユムシの巢孔中に棲み、同じ巢孔に棲む二枚貝の殻上に卵嚢を産みつけることが報告されている。

生息地の条件 : 宿主が多産することが可能な、内湾奥の波穏やかで清浄な砂干潟の中~低潮帯。同じ巢孔の中にはナタメケボリも産する。

個体数の動向 : 2011年羽地内海でタテジマユムシの巢孔を中潮帯で12個体・低潮帯で28個体分調査した結果、本種の発見率は中潮帯で83%、低潮帯で21%であり、中潮帯に分布が集中していた。

現在の生息状況 : 国内では羽地内海からしか知られず、しかも個体群は狭い範囲に限られ、存続基盤は極めて脆弱である。宿主に強く依存すると考えられることから、タテジマユムシの保全が必須である。

学術的意義・評価 : *S. planus* と同種か否か確定する必要がある。またユムシ類との関係は生態学的に興味深い研究課題であるだけでなく、イソコハクガイ科の生態は多くの種が未解明のままであるため、本種の存在は貴重である。

生存に対する脅威 : 護岸・埋立・海底浚渫等海岸環境の改変、水質汚濁。

特記事項 : 黒田他 (1971) が *S. planus* のタイプ産地を五島列島としたのは誤り。

原記載 : Adams, A., 1850. Monographs of *Cyclostrema*, *Marryat*, and *Separatista*, Gray; two genera of gasteropodous mollusks. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1850: 41-45, pl. 8. (pp. 43-44, as *Cyclostrema plana*. Type loc.: "in insulis Philippinis", "Dumaguete, island of Negros")

参考文献 : Adams, A., 1863. On the genera and species of *Liottiinae* found in Japan. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1863: 71-76.

久保弘文, 2014. ガタチンナン. "レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 299.

久保弘文・福田 宏, 2012. ガタチンナン (和名新称). "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 43.

黒田徳米・波部忠重・大山 桂, 1971. 相模湾産貝類. 丸善, 東京, xvi+3+741+489+51 pp., 121 pls., 1 map.

名和 純, 2005. イソマイマイの一種. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 356.

名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

Ponder, W.F., 1994. The anatomy and relationships of three species of vitrinelliform gastropods from Hong Kong (Caenogastropoda: Rissoidae). "Proceedings of the Third International Workshop on the Malacofauna of Hong Kong and Southern China", Morton, B. (ed), Hong Kong University Press, Hong Kong, 243-281.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : **ナガヤマヤマトソ**
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンシウ科
学名 : *Allepithema nagayamai* Kuroda, 1960
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

図の解説 : p. 37. 1a: 波照間島 (シンタイプ; 西宮市貝類館所蔵 NCKG 00937). 1b, 1c: 波照間島. 2: 中城城趾 (1973年採集; NCG 32644). 3: 与論島. 撮影: 亀田 (1a, 1b, 2, 3), 和田 (1c).

形態 : 殻長 2.6 mm、殻径 2.4 mm、高い円錐形。殻は僅かに透ける程度に薄く、黄褐色で、殻表に細かい螺

状脈と不規則な成長脈を持ち、生時には殻表に泥を付ける。螺管の断面はほぼ円に近い涙滴形で、縫合は深い。螺層は5層弱、うち胎殻は約2.5層。殻口縁は薄く、反転しない。臍孔は開く。蓋は中央に大きな核を持ち、少旋型、石灰質で厚く、外側は中央に向かって窪む。頭部-腹足は無色半透明で白色の色素胞を散らし、特に眼の後方には集中する。頭触角は黒色で細長く、頭部をあまり出さずに石灰岩上に匍匐する。

- 近似種との区別** : 同属と思われる種としてイトマキヤマトボ (未記載種) があるが、形態に関する情報が乏しく比較はできない。同所的に棲息し、大きさの似るゴマオカタニシ類は、臍孔が閉じることで識別できる。
- 分布の概要** : 沖永良部島・与論島・沖縄島・波照間島で記録があるが、現在棲息が確認されているのは与論島と波照間島のみ。両島の個体群は遺伝的に大きく隔たっており、将来的に別種とみなされる可能性もある。その場合本種は波照間島固有種となる。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 台湾の蘭嶼に類似種のイトマキヤマトボが分布する。属のタイプ種はフィリピン産であるが、蓋が石灰質である以外の共通点に乏しく、別属となる可能性が高い。
- 生態的特徴** : やや自然度の高い森林の石灰岩上に棲息場所とする。乾燥時には岩礫下や石灰岩の隙間に潜り込むため、条件が悪いと生貝の確認は難しい。与論島では同所的に棲息するゴマオカタニシ類とともに、ホソアシヒダナメクジ科の貝に捕食されている。
- 生息地の条件** : 同上。湿り気のある土壌や石灰岩を必要とし、蒸れや乾燥には弱い。
- 個体数の動向** : 県内では波照間島の1つの林 (0.07 km²未満) でのみ棲息が確認されている。豊見城での記録 (14世紀の堆積物)、および中城産の標本 (1973年採集) が存在し、沖縄島にも近年まで棲息していたのは確実である。
- 現在の生息状況** : 棲息地ではまとまった数が見出されるが、林内でも限られた区域にしか生存していない。
- 学術的意義・評価** : 内陸部に棲息する *Omphalotropidinae* は日本にはごく限られたものしか分布しておらず、生物地理学的に極めて重要。隠蔽種を含む可能性があり、他地域の個体群・近縁種ともども、詳細な分類学的検討も必要である。
- 生存に対する脅威** : 県内唯一の産地は島内で僅かに残された林で、石灰岩礫の豊富な湿った環境である。面積的にも棲息基盤は非常に脆弱で、人為的な改変や温暖化の進行で乾燥化が進めば、速やかに絶滅する可能性が高い。
- 原記載** : 黒田徳美, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 沖縄, iv+106 pp., 3pls. (p. 73, as *Allepithema nagayamai*. Type loc.: “八重山、波照間島”)
- 参考文献** : 黒住耐二, 1984. 与論島の陸産貝類相. 特にナガヤマヤマトボの記録, ちりぼたん, 15(2/3): 60-64.
黒住耐二・金城亀信, 1988. 豊見城村の長嶺, 保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類. “豊見城村の遺跡 <豊見城村文化財調査報告書 3>” 豊見城村教育委員会 (編), 豊見城, 137-153.
湊 宏, 1979. 日本最南端・波照間島の陸貝. 南紀生物, 21(2): 107-110.
- 執筆者名** : 亀田勇一・福田 宏

- 和名** : ヘドクリイロカワザンショウ (新称)
- 分類** : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科
- 学名** : *Angustassiminea* sp. A
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 図の解説** : p. 37. 辺戸岬石碑周辺. 撮影・描画 : 亀田勇一 (標本), 福田 宏 (生体).
- 形態** : 殻長 3 mm, 殻径 1.7 mm. 殻は円錐形で著しく螺塔が高く、赤色半透明、光沢が強い。螺層の膨らみと縫合のくびれは弱く、輪郭は直線的。殻長に比して殻口が極端に小さい。縫合下に明瞭な螺溝を巡らす。臍孔は閉じる。蓋は種子形で革質、半透明な黄褐色。頭部-腹足は無色で、頭触角は左右とも低い隆起状の痕跡が残るのみ。眼胞は長く、先端に黒色斑を持つ。腹足は短く、全長が約 1.5 mm しかない。
- 近似種との区別** : サツマクリイロカワザンショウに殻色や質感が似るが、遥かに螺塔が高く、殻口の占める割合が目立って小さく、螺層の膨らみも弱いため識別は容易である。
- 分布の概要** : 沖縄島国頭村辺戸岬 (崖上の石碑周辺) の固有種。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 本種と同所的に見られる同属の他種は存在しない。南西諸島に広く分布するサツマクリイロカワザンショウはより海に近い環境に見られる。ティンダハナタクリイロカワザンショウは本種と類似した環境に産するが、これは与那国島固有種である。南大東島のウファガクリイロカワザンショウは淡水の池のほとりに棲む。
- 生態的特徴** : 棲息環境以外未詳だが、終生水のない環境で暮らし、恐らく直達発生。
- 生息地の条件** : 崖上 (標高約 20 m) の石灰岩露頭間乾燥地において、植物の根元の僅かに湿った砂礫間や岩盤の隙間に、ウスイロヘソカド、クビキレガイとともに棲む。周囲はかつてキカイキセルモドキ、ヘリトリケマイマイが多産していた場所である。
- 個体数の動向** : 1箇所の極めて狭い範囲からのみ知られる。過去にはより広く分布していた可能性もあるが、文献記録は一切ない。
- 現在の生息状況** : 沖縄島北部の海岸の断崖には、辺戸岬以外にも類似した環境は見られるものの、本種は確認されていない。
- 学術的意義・評価** : 未記載種。日本産クリイロカワザンショウ属のうち数少ない完全な陸棲種で、ティンダハナタクリ

イロカワザンショウに次いで標高の高い場所に産する。南西諸島のこの属は同一属内で海岸潮間帯・河口汽水域・淡水域・瀬海陸地に異なる種が見られ、海から陸地への進出が複数回、それぞれ独立に生じたことは明らかであり、進化的に極めて重要な研究対象となりうる。

生存に対する脅威： 唯一の産地は観光名所であり、公園整備等の改変がなされると棲息地が破壊される恐れがある。また乾燥地の中で僅かに保湿された微棲息環境に特異的であるため、温暖化の進行によって気候に大きな変化が生じるとバランスが崩れ、短期間で絶滅する可能性もある。

特記事項： 1990年代に発見されたが、本種の存在が文献公表されるのは今回が初めてである。

執筆者名： 福田 宏

和名： ティンダハナタクリイロカワザンショウ
分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科

学名： *Angustassiminea* sp. B
カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 37. 与那国島ティンダハナタ. 撮影・描画：亀田勇一（標本），福田 宏（生体）。
形態： 殻長 3.2 mm、殻径 2 mm。殻は円錐形で螺塔が高く、黄褐色～濃茶褐色、薄質半透明、光沢が強い。螺層はやや膨らみ、縫合は多少くびれる。縫合下に明瞭な螺溝を巡らす。臍孔は閉じる。蓋は種子形で革質、半透明な黄褐色。頭部-腹足は無色だが背面の一部は黒色となる。頭触角は左右とも低い隆起状の痕跡が残るのみ。眼胞は長く、先端に微細な三日月形の黒色斑を持つ。腹足は全長約 2mm。
近似種との区別： 殻はヘドクリイロカワザンショウに似るが、螺層の膨らみと縫合のくびれがやや強く、色も赤味が弱い。

分布の概要： 与那国島祖納のティンダハナタの固有種。
近縁な種及び群との分布状況の比較： 本種と同所的に見られる同属の他種は存在しない。沖縄島辺戸岬の固有種ヘドクリイロカワザンショウは同様に石灰岩の崖上に産するが、より乾燥した環境に見られる。

生態的特徴： 生態のほとんどは未詳だが、恐らく直達発生である。
生息地の条件： 石灰岩の断崖（標高約 70 m）のクレバス内において、地下水が湧出して濡れた露頭の表層を匍匐し、陸産貝類とも淡水産貝類とも見ないうる。周囲の湧水中にはヨナグニカタヤマガイが見られ、乾燥した岩盤上にはドナンオカチグサが産する。

個体数の動向： 1 箇所の極めて狭い範囲からのみ知られる。過去にはより広く分布していた可能性もあるが、文献記録は一切ない。

現在の生息状況： 島内には他に類似した環境がなく、ヨナグニカタヤマガイが産する場所でも本種は確認されていない。

学術的意義・評価： 未記載種。日本産クリイロカワザンショウ属のうち数少ない陸棲または淡水棲種で、最も標高の高い場所に産する。南西諸島のこの属は同一属内で海岸潮間帯・河口汽水域・淡水域・瀬海陸地に異なる種が見られ、海から陸地への進出が複数回、それぞれ独立に生じたことは明らかであり、進化的に極めて重要な研究対象となりうる。

生存に対する脅威： 唯一の産地は観光名所であり、公園整備等で改変がなされると棲息地が破壊される恐れがある。また湧水で濡れた岩盤上という特異な微棲息環境に限定されるため、温暖化の進行によって気候に大きな変化が生じるとバランスが崩れ、短期間で絶滅する可能性もある。

特記事項： 生貝は 2015 年 1 月に初めて発見された。
参考文献： 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島, Molluscan Diversity, 5: 印刷中。

執筆者名： 福田 宏

和名： ウファガリクリイロカワザンショウ
分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科

学名： *Angustassiminea* sp. C
カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 37. 南大東島大池. 撮影・描画：福田 宏。
形態： 殻長 2.8 mm、殻径 1.9 mm。殻は卵円錐形で、黄褐色～濃茶褐色、薄質半透明、光沢が強い。螺層はよく膨らみ、縫合は明瞭にくびれる。縫合下に明瞭な螺溝を巡らす。臍孔は僅かな隙間状に開く。蓋は種子形で革質、半透明な黄褐色。頭部-腹足は無色だが背面の一部は黒色となる。頭触角は左右とも低い隆起状の痕跡が残るのみ。眼胞は長く、先端より多少後方に三日月形の黒色斑を持つ。腹足は全長約 2 mm。

近似種との区別： 殻はティンダハナタクリイロカワザンショウに似るが、さらに薄質透明で色も淡く、螺層の膨らみは強く臍孔が僅かに開くことから、別属のヨシダカワザンショウを想起させる。

分布の概要： 南大東島大池の固有種。

ク レッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
 黒住耐二, 1992. 北大東島の陸産貝類. “ダイトウオオコウモリー保護対策緊急調査報告書. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第31集”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 73-90.
 黒住耐二, 2005. キビオカチグサ類似種. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 314.
 増田 修・宇野 明・中原ゆうじ, 2015. 沖縄県大東諸島の陸産貝類の現状. かいなかま, 49(2): 21-44.
 下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第14集 沖縄県洞穴実態調査報告 I”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 75-112.

執 筆 者 名 : 福田 宏・亀田勇一・黒住耐二* *前回改訂版 (2005) における黒住による記載内容を一部引用した。

和 名 : ドームカドカド
 分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科
 学 名 : *Ditropisena* sp. A
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図 の 解 説 : p. 38. 今帰仁村大井川河口. 撮影: 福田 宏 (生体), 久保弘文 (標本).
 形 態 : 殻長 1.8 mm, 殻径 2 mm. 殻はドーム形で厚質、不透明で象牙色。螺層は膨らみ、殻表に斜めの粗い縦肋を持つ。周縁に強い螺肋を巡らし、深い臍孔の周りも強く角張る。蓋は円く、革質で黄色半透明、核を中央に持つ多旋型。頭部-腹足は無色半透明で、頭触角は細長く、後方へ多少彎曲する。触角の基部に黒い眼がある。

近似種との区別 : デリケートカドカドに似るが、より大形で螺塔が高く、縦肋が強い。ミニカドカド・エレガントカドカド・小笠原諸島のインフレカドカド (新称) は縫合と周縁角との間にも明瞭な螺肋がある。

分布の概要 : 沖縄島 (恩納村仲泊、今帰仁村仲宗根の大井川河口)。国頭村辺戸岬から本種に似た死殻 1 個が得られているが軟体の情報がないため同種か否か断定できない。与那国島にも近似種が産するがやや螺塔が低く、分布が飛び離れている点から別種の可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島にはミニカドカドも産するが、本種と同所的に見られる場所はない。デリケートカドカドは宮古島と伊良部島、エレガントカドカドは石垣島と西表島に固有で、同一産地に同属の 2 種以上が見られることはない。

生態的特徴 : 直達発生。水分をたっぷり含んで崩れかけた朽木を分解して養分を摂取している。少なくとも 2 年は生存する。晴天時は地中深く潜るため見出しにくい、雨後は表層に這い出す。

生息地の条件 : 河口マングローブ辺縁や海岸の飛沫帯上部において、陸側に生じた樹木または岩盤が水辺側へオーバーハングして日陰を形成し、砂礫底が昼間も直射日光に晒されず保湿され、その地中にまとまった量の死珊瑚片と朽木が深く埋もれていることが、本種の個体群維持に必須である。

個体数の動向 : 最初の発見地である恩納村仲泊の産地が埋立により消失して以来、沖縄島では健在産地は知られていなかった。与那国島では比川南東と空港北西で確認されていたが、比川ではその後再発見されなかった。

現在の生息状況 : 2015 年、大井川河口で生貝が遂に再発見され、絶滅していなかったことが明らかになった。しかし依然として、沖縄島の現存個体群はこの 1 箇所しかない。与那国島の空港北西では 2015 年の調査でも確認されたが、棲息範囲は極端に狭い。

学術的意義・評価 : カドカドガイ属はカワザンショウ科の一員とは到底思えない形態を持つとともに、同科の中でも系統上の位置がいまだ明確でなく、この科の適応放散の著しさを象徴する存在として稀有で貴重な一群である。

生存に対する脅威 : 分布域が著しく狭く、個体群は河口の埋立・護岸等の改変、マングローブ伐採、水質・土壌汚染の影響を直接被る。

参 考 文 献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
 福田 宏, 2012. ドームカドカド. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 52.
 福田 宏, 2014. ドームカドカド. “レッドデータブック 2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 60.
 Fukuda, H. & Ponder, W.F., 2003. Australian freshwater assimineids, with a synopsis of the Recent genus-group taxa of the Assimineidae (Mollusca: Caenogastropoda: Rissosoidea). Journal of Natural History, 37: 1977-2032.
 久保弘文, 2005. ドームカドカド. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 352.
 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.

執筆者名： 福田 宏・久保弘文

和名： **ダイトウオカチグサ (ダイトウヘソカド)**
 分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科

学名： *Paludinellassiminea daitoensis* (Habe, 1942)
 カテゴリ： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ： 該当なし

図の解説： p. 38. 1: ホロタイプ, 大東島 (国立科学博物館所蔵 NSMT Mo 39844). 2: 南大東島バリバリ岩. 3a, b: 北大東島長幕. 撮影・描画: 福田 宏.

形態： 殻長 4.8 mm, 殻径 3.3 mm. 殻は卵円錐形で螺塔が高く、殻表は弱い光沢のある明るい橙色で半透明、成長脈以外は平滑。螺層はよく膨らむ。臍孔は狭く開き、螺状稜角で囲まれる。頭部-腹足の地色は灰白色で、口吻と頭部背面が黒色の個体が多い。頭触角は長い。蓋は革質半透明、黄色、少旋型で、表面に石灰の顆粒を沈着させることがある。

近似種との区別： 殻ではウスイロヘソカド等との区別は困難だが、左側の雑搬溝後方の縁取りが前端においてゴルフクラブ状に前方へ突出し、これは本種だけが持つ特徴である。

分布の概要： 北大東島と南大東島の固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較： ウスイロヘソカドは喜界島〜八重山諸島に広く分布する一方、与那国島のドナンオカチグサと同様、徳之島・沖繩島・多良間島等の各島から殻や頭部-腹足に独特の形質状態を持つ個体が見出され、それぞれの島ごとに別種が存在する可能性がある。

生態的特徴： 直達発生。林床の黒い腐葉土を摂食し、養分を得ると考えられる。

生息地の条件： 海岸から内陸にかけて見られ、広葉樹根元の石灰岩岩盤の隙間や地表の落葉・転石間に棲み、高温時に匍匐する。海岸ではクビキレガイ、サツマクリイロカワザンショウ、ヒメヒラシイノミ等、内陸ではオカクビキレ、ウフアガリゴマオカチグサ、ダイトウジマスナガイ、ケンガイ類等が同所的に産する。

個体数の動向： 20世紀末までは島内各所に点々と多産地があったと推定されるが、2000年代半ばごろ以降衰退傾向に転じ、死殻しか見られない産地が現れ始めた。

現在の生息状況： 北大東島では長幕の森林内と海岸数箇所、南大東島ではバリバリ岩と海岸数箇所に個体群が現存するが、局所的で棲息範囲は著しく狭い。2005年頃まで多産していた南大東島の秋葉神社・大東神社では壊滅した可能性があり、同様に最近15年間で個体群の消滅が多発している。

学術的意義・評価： 本種を含むウスイロヘソカド種群は島ごとに分化している可能性が高く、進化的に重要。

生存に対する脅威： 人類入植以前はより広範囲に棲息していた可能性が高く、開墾に伴う森林伐採によって狭い範囲に追い詰められたと考えられる。その上、近年の温暖化と過剰乾燥が大きな脅威となっている。さらに大東諸島では近年ニューギニアヤリガタリクウズムシが侵入・急増し、陸産貝類全体が捕食されて激減しており、本種も食害されている可能性がある。

特記事項： ウスイロヘソカドの異名とされることが多いが、別種である。それどころか北大東島と南大東島、またはそれぞれの島内に複数種が混在している可能性もあり、精密な検討が必要。

原記載： 波部忠重, 1942. 日本産カハザンショウガヒ科. ヴキナス, 12: 32-56, pls 1-4. (p. 49, pl. 1bis, fig. 12; pl. 4, fig. 16, as *Paludinella daitoensis*. Type loc.: “沖繩縣大東島”)

参考文献： 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖繩県レッドデータブック レッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
 黒田徳米, 1960. 沖繩群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106 pp., 3 pls.

黒住耐二, 1992. 北大東島の陸産貝類. “ダイトウオオコウモリー保護対策緊急調査報告書. 沖繩県天然記念物調査シリーズ第31集”, 沖繩県教育委員会 (編), 沖繩県教育委員会, 那覇, 73-90.

黒住耐二, 2005. ダイトウヘソカドガイ. “改訂 沖繩県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) -レッドデータおきなわー”, 沖繩県文化環境部自然保護課 (編), 沖繩県文化環境部自然保護課, 那覇, 410.

増田 修・宇野 明・中原ゆうじ, 2015. 沖繩県大東諸島の陸産貝類の現状. かいなかま, 49(2): 21-44.

執筆者名： 福田 宏・黒住耐二* *前回改訂版 (2005) における黒住による記載内容を一部引用した。

和名： **ミヤコオカチグサ**
 分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科

学名： *Paludinellassiminea miyakoinularis* (Minato, 1980) **n. comb.**
 カテゴリ： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ： 該当なし

図の解説： p. 38. 宮古島野原岳. 撮影：久保弘文. 描画：福田 宏.

形態： 殻長 6 mm, 殻径 4.8 mm. 殻は円錐形で螺塔が高く、薄く壊れ易い。殻表は藁色で光沢は鈍く半透明、

成長脈以外は平滑。縫合が明瞭にくびれて階段状となる。殻口縁は薄い。臍孔は開き、螺旋稜角はない。頭部～腹足の地色は灰白色半透明、頭触角はこの属としては太短く、先端は暗色となる。右側の雑襞溝の縁取りは前後とも明瞭。蓋は革質半透明、黄色、少旋型。

近似種との区別： ドナンオカチグサは本種に最も似るが、本種ほど螺旋塔が高まらず、縫合が階段状とならない。また、ヘソカドガイ属の大半の種は本種やドナンオカチグサより厚質堅固で、臍孔の周囲に螺旋稜角がある。またそれらの種はいずれも、本種より頭触角が長い。キバオカチグサは象牙色でより螺旋塔が高く、周縁が角張る。ウスイロオカチグサは殻表に螺旋肋を多数巡らし、また明瞭な頭触角を欠き、ヘソカドガイ属とは系統的に遠い。

分布の概要： 宮古島野原岳の固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較： ウスイロヘソカド種群は南西諸島に広く分布し、その中には本種と同様、一つの島の固有種も複数含まれる。ヘソカドガイとオオウスイロヘソカドは種子島以北の本州・四国・九州に限られる。キバオカチグサは小笠原諸島母島に固有。

生態的特徴： 恐らく直達発生で、同属の他種と同様に林床の黒い腐葉土を摂食し、養分を得ると推測される。

生息地の条件： 内陸部森林内の日陰において、石灰岩露頭の隙間に棲息する。

個体数の動向： 記載以来生貝が発見されず絶滅種と見なされてきたが、2014年2月、生貝が初めて発見された。野原岳以外では知られていない。

現在の生息状況： 個体群は1箇所のみ存在する。そこでは個体数は少なくないが、棲息範囲は極めて狭い。

学術的意義・評価： ヘソカドガイ属の南西諸島における島ごとの種分化と、陸上進出過程を考える上で重要である。特に本種は同属の中でも独特の形態を示す特異な存在である。

生存に対する脅威： 土地造成や公園整備、道路設置等で棲息地の樹木が伐採されたり、石灰岩露頭が掘削されれば個体群は瞬時に消滅するであろう。また近年の温暖化に伴う過剰乾燥は大きな脅威である。さらにニューギニアヤリガタリクウズムシが侵入すればことごとく捕食されて絶滅する可能性がある。

特記事項： これまでハマチグサ属 *Paludinella* Pfeiffer, 1841 に属すとされてきたが、生貝の検討の結果、ヘソカドガイ属の一員であることが確定した(本稿で新組み合わせ)。また宮古島に隣接する伊良部島でも、久保氏によって別種の可能性がある死殻が見出されており、さらに検討を要する。宮古島市自然環境保全条例保全種(ミヤコオカチグサガイ) (2005年)。

原記載： 湊 宏, 1980. 宮古群島の陸産貝類相. *Venus*, 39: 83-99. (pp. 85-86, 94, fig. 6, as *Paludinella miyakoinsularis*. Type loc.: “宮古島野原岳”)

参考文献： 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, xvi+344 pp., 80 pls.
黒住耐二, 2005. ミヤコオカチグサ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編) -レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 312.

執筆者名： 福田 宏・久保弘文・黒住耐二* *前回改訂版(2005)における黒住による記載内容を一部引用した。

和名： タマグスクオカチグサ (新称)

分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンシウ科

学名： *Paludinellassiminea* sp. A

カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 38. 南城市玉城城址南. 撮影・描画: 福田 宏.

形態： 殻長 5.5 mm、殻径 3.5 mm。殻は螺旋塔が高く、縫合が明瞭にくびれて階段状となり、臍孔が広く開いてその周囲に螺旋稜角を欠く点でミヤコオカチグサに酷似するが、より濃い橙色で、成熟個体では厚質堅固となる。頭部-腹足の地色は灰白色半透明から濃い黒色まで変異がある。頭触角は長く、暗色。雑襞溝の縁取りや蓋の形態はミヤコオカチグサと同様

分布の概要： 沖縄島南城市玉城字玉城の玉城城址南(標高 170 m)からのみ知られる。

近縁な種及び群との分布状況の比較： ダイトウオカチグサ・ミヤコオカチグサの項を参照。沖縄島ではこの属の種は従来、ウスイロヘソカドしか知られていなかった。

生態的特徴： 恐らく直達発生。

生息地の条件： 石灰岩の断崖(恐らく石灰洞窟の天井が崩落して生じた谷状の地形)の下部において、日陰の乾いた露頭表層の窪みに見られ、雨後に表層に這い出す。夏季(7月末)に森林外部が酷暑に見舞われる状態においても気温が相対的に低く、かつ高温な空気塊が溜まっている場所に限られる。

個体数の動向： 2016年以前には全く存在が知られていなかった。同年7月に玉城産イトマンマイマイの死殻中から褪色した死殻1個が得られ、さらに同年11月の調査で生貝14個体が確認された。

現在の生息状況： 生貝は約2×2mという極端に狭い範囲からのみ知られる。過去には沖縄島南部の石灰岩地により広く分布していた可能性もあるが、現時点で未詳。

学術的意義・評価： 未記載種。日本産ヘソカドガイ属の既知種のうち、最も標高の高い場所に産する。ダイトウオカチグサ・ミヤコオカチグサ同様、ヘソカドガイ属の南西諸島における島ごとの種分化と、陸上進出過程を考える上で重要である。徳之島・沖縄島・伊良部島・多良間島等から採集されている他の未詳種ともども、詳細な再検討が必要である。

生存に対する脅威： 唯一の産地は観光名所であり、公園整備等で改変がなされると棲息地が破壊される恐れがある。また日陰の岩盤上という特異な微棲息環境に限定されるため、温暖化の進行によって気候に大きな変化が生じるとバランスが崩れ、短期間で絶滅する可能性もある。

特記事項：本種が独立種として文献公表されるのは今回が初めてである。これまで沖縄島から報告されたウスイロヘソカドの大半は海岸から記録されており、また本種に同定可能な標本も知られていないため、従来のウスイロヘソカドの文献記録に本種が混在していた可能性は低い。

執筆者名： 福田 宏・亀田勇一

和名： **ドナンオカチグサ**
 分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科
 学名： *Paludinellassiminea* sp. B
 カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 38. 与那国島ティンダハナタ. 撮影・描画：亀田勇一（標本），福田 宏（生体）.
 形態： 殻長 5.2 mm、殻径 3.5 mm。殻は円錐形で螺塔が高く、薄質。殻表は淡橙色で光沢は鈍く半透明、成長脈以外は平滑。螺層は弱く膨らみ、縫合は多少くびれ、周縁は弱く角張る。殻口縁は薄い。臍孔は広く開き、螺状稜角は欠くか極めて弱い。頭部-腹足の地色は灰白色半透明、頭触角は長く、暗色。右側の雑搬溝の縁取りは前後とも著しく発達する。蓋は革質半透明、黄色、少旋型。

近似種との区別： 臍孔が広く臍域を囲む螺状稜角を欠く点でミヤコオカチグサに似るが、螺層の膨らみがやや強く、頭触角も長い。

分布の概要： 生貝は与那国島祖納のティンダハナタのみで知られる。同島田原水園産の死殻 1 個体（久保採集、矢野重文氏所蔵）も本種の可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較： ダイトウオカチグサ・ミヤコオカチグサの項を参照。与那国島の海岸や低地にはウスイロヘソカドが産する。

生態的特徴： 恐らく直達発生。

生息地の条件： 石灰岩の断崖（標高約 25~70 m）のクレバス周辺において、日陰の乾いた露頭表層の窪みで見られる。周囲の湧水で濡れた岩盤上にはティンダハナタクリイロカワザンショウ、湧水中にはヨナグニカタヤマガイが見られる。

個体数の動向： 2002 年 3 月芳賀拓真氏によりティンダハナタで採集され、2009・2015 年の調査でも同じ場所で確認された。生貝は極めて狭い範囲からのみ知られる。過去には島内により広く分布していた可能性もあるが、現時点で未詳。

現在の生息状況： ティンダハナタ以外で確認されず、田原水園でも生貝・死殻とも追加個体得られない。海岸に近づくウスイロヘソカドしか見られないため、本種の棲息範囲は島内でも著しく限定されることは疑いない。

学術的意義・評価： 未記載種。ダイトウオカチグサ・ミヤコオカチグサ同様、ヘソカドガイ属の南西諸島における島ごとの種分化と、陸上進出過程を考える上で重要である。徳之島・沖縄島・伊良部島・多良間島等から採集されている他の未詳種ともども、詳細な再検討が必要である。

生存に対する脅威： 唯一の産地は観光名所であり、公園整備等で改変がなされると棲息地が破壊される恐れがある。また日陰の岩盤上という特異な微棲息環境に限定されるため、温暖化の進行によって気候に大きな変化が生じるとバランスが崩れ、短期間で絶滅する可能性もある。

特記事項： 増田・小野 (1988: 53, 55) の「ヘソカドガイ属の 1 種」は本種であろう。また湊 (1976: 165) の「ウスイロヘソカドガイ」も本種を含んでいたかもしれない。

参考文献： 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
 増田 修・小野正人, 1988. 与那国島の淡水産貝類. 神奈川自然保全研究会報告書, (7): 52-60.
 湊 宏, 1976. 与那国島の陸産貝類相. Venus, 35: 163-184.

執筆者名： 福田 宏・亀田勇一・久保弘文

和名： **ヨナグニカタヤマガイ**
 分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 イツマデガイ科
 学名： *Gammatricula shini* (Habe, 1961)
 カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 II 類 (VU)

図の解説： p. 38. 与那国島ティンダハナタ. 撮影：福田 宏.
 形態： 殻長 3 mm、殻径 1.5 mm。殻は縦長の卵円錐形、半透明で鈍い光沢を帯び、淡い飴色~乳白色。殻表の彫刻は弱い成長脈のみで、螺層の膨らみと縫合のくびれは明瞭。殻頂は鈍く尖り、成貝では欠落する個体が多い。殻口は楕円形で広く、唇縁は僅かに肥厚反転する。臍孔は閉じる。蓋は卵形、革質、半透明な黄褐色、少旋型。頭部-腹足は淡灰色の地に微細な黒斑を多数散らし、眼の後方等に白点群がある。雑搬溝は体の右側に痕跡的に見られるのみで、左側にはない。上足褶は明瞭。蓋葉の左右両端は黒色に染まる。

近似種との区別： 沖縄県には近似する種はいない。ヌマツボ科 Amnicolidae Tryon, 1863 のミジンツボ属 *Akiyoshia*

Kuroda & Habe, 1954・ホラアナミジンナ属 *Moria* Kuroda & Habe, 1958 の諸種はやや殻形や色が異なるが、いずれも殻長 2 mm 以下とはるかに小形である。カワツボ科 Tateidae Thiele, 1925 の外来種コモチカワツボ *Potamopyrgus antipodarum* (Gray, 1843) は本種より大きくて厚く、殻頂が細まり、頭部-腹足の大部分が黒い。

分布の概要： 与那国島固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較： *Gammatricula* Davis, Liu & Chen, 1990 には他に 2 種が知られ、いずれも中華人民共和国に産する。本種の姉妹種は福建省の山間部に産する *G. fujianensis* (Liu, Zhang & Wang, 1983) である。

生態的特徴： 直達発生。水中の付着藻類等を食べていると思われる。

生息地の条件： 山間の湧水によって日陰に形成された小規模な水溜りや水路等に限定され、浅い止水の中に沈んだ落葉や転石等の上を匍匐する。流水や水深の深い河川には見られない。

個体数の動向： 過去に記録のある場所の大半（タイプ産地を含む）で再発見できない。棲息環境がもともと繊細かつ脆弱で、乾燥・湧水が続くと容易に失われるので、既に多くの産地が消失したことは疑いが無い。

現在の生息状況： 現在確実に棲息が確認できるのは、ティンダハナタの崖上のクレバス間に生じた小規模な湧水など僅かしかない。今や、日本の淡水産貝類全体でも、棲息範囲が最も狭い種の一つとなった。

学術的意義・評価： 本種は遺存種と考えられ、生物地理学的に貴重である。Triculinae Annandale, 1924 に属する日本唯一の種でもある。

生存に対する脅威： 山間の斜面において、崖の掘削・洞窟破壊・樹木の伐採や、湧水の護岸・浚渫・流路変更等の改変を行うと棲息環境はたちまち消失する。また、近年の温暖化に伴う過剰乾燥によって、小規模な湧水の枯渇することが強く懸念される。

特記事項： 原記載での和名は「ヨナクニ〜」であるが、ここでは湊 (2014) に倣って「ヨナグニ〜」とした。ティンダハナタは国の名勝に指定されている。

原記載： 波部忠重, 1961. 八重山群島与那国島のタイワンカタヤマガイの 1 新亜種. *Venus*, 21: 278-281. (pp. 279-281, fig. 1, as *Katayama formosana shini*. Type loc.: “与那国島久部良岳と比川間の湿田の土手”)

参考文献： Davis, G.M., Liu, Y.Y. & Chen, Y.G., 1990. New genus of Triculinae (Prosobranchia: Pomatiopsidae) from China: phylogenetic relationships. *Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia*, 142: 143-165.

Kameda, Y. & Kato, M., 2011. Terrestrial invasion of pomatiopsid gastropods in the heavy-snow region of the Japanese Archipelago. *BMC Evolutionary Biology*, 11: 118.

久保弘文, 2005. ヨナクニカタヤマガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 471.

久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック - レッドデータおきなわ 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告書-1. 与那国島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

湊 宏, 2014. ヨナグニカタヤマガイ. “レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 294.

執筆者名： 福田 宏・亀田勇一・久保弘文

和名： オカクビキレ

分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 クビキレガイ科

学名： *Truncatella oogariensis* (Kuroda, 1960)

カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 38. 標本：南大東島 (タイプシリーズ; 西宮市貝類館所蔵 NCKG00604) 生体：北大東島長幕. 撮影：福田 宏.

形態： 殻長 8.5 mm、殻径 3 mm。殻は細長い円筒形、朱色で半透明、光沢が強い。螺層はやや膨らみ、縫合は明瞭に縊れる。体層に約 30 本、次体層に約 28 本の細い縦肋を狭い間隔で並べる。殻口外唇は反転するが、外側に縦張肋状の肥厚はない。胎殻は繊細だが明瞭な縦肋を規則的に並べる。蓋は長卵形、革質で厚く、表面中央部が厚く石灰化して隆起する。

近似種との区別： クビキレガイに似るがより細く、縫合の縊れは明瞭で、縦肋が少なく間隔も広い。大東諸島にはアソブイトクビキレとカイゲンボウクビキレも産するが、共にオカクビキレより小さく、前者は縦肋が多くて間隔が狭く、後者は蓋が石灰化しない。

分布の概要： 北大東島と南大東島 (タイプ産地) に固有。

近縁な種及び群との分布状況の比較： クビキレガイは種子島以南のインド-太平洋熱帯域に広く分布し、他の沖縄県産の他種も複数の島から記録されているが、本種は大東諸島からのみ知られる。

生態的特徴： 飼育下で幼貝を生じ、直達発生。林床の黒い腐葉土を摂食し、養分を得ると考えられる。

生息地の条件： 広葉樹林で覆われた石灰岩断崖下の地表の落葉・転石間に棲み、高湿時に匍匐する。原記載では南大東島の「海岸から 50 乃至 300 m の内陸に棲息」とされ、現在北大東島に見られる個体群も海岸から最短で 600 m の林内に見られる。同所的にダイトウオカチグサ、ウフアガリゴマオカチグサ、

- ダイトウジマスナガイ、ケシガイ類等が産する。
- 個体数の動向** : 南大東島では原記載以後明確な採集記録がなく、1970年代頃までには絶滅した可能性がある。21世紀に入ってからの同島では死殻の採集例すらない。
- 現在の生息状況** : 2016年3月の調査では、北大東島の長幕の一部(長さ約2km)に辛うじて生存しているのが確認されたが、生貝が見られたのは僅か3箇所、死殻のみの場所が多い。現在も個体群は衰退傾向にあると考えられ、明らかに絶滅寸前である。
- 学術的意義・評価** : 日本産クビキレガイ科の中で最も内陸に産する種で、同科の陸上進出過程を考える上で重要。
- 生存に対する脅威** : 人類入植以前はより広範囲に棲息していた可能性が高く、開墾に伴う森林伐採によって狭い範囲に追い詰められたと考えられる。その上、近年の温暖化と過剰乾燥が大きな脅威となっている。さらに大東諸島では近年ニューギニアヤリガタリクウズムシが侵入・急増し、陸産貝類全体が捕食されて激減しており、本種も食害されている可能性がある。
- 特記事項** : 西宮市貝類館所蔵黒田徳米標本(NCKG00604, 3個体)がタイプシリーズの一部と考えられる。国立科学博物館の波部忠重標本(NSMT-Mo 55774)も同一ロットから派生したものであろう。
- 原記載** : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録(頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106 pp., 3 pls. (pp. 10, 72-73, as *Taheitia oagariensis*, Type loc.: “南大東島”)
- 参考文献** : 安藤保二・波部忠重, 1981. 陸産貝類図説(2). クビキレガイ属 *Truncatella* とクビキレガイモドキ属 *Cecina*. ちりぼたん, 12: 79-82.
東 正雄・東 良雄, 1994. 大東島の陸産貝類相. *Venus*, 53: 161-173.
福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科(新生腹足類: クビキレガイ上科)の再検討に向けて. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
黒住耐二, 1992. 北大東島の陸産貝類. “ダイトウオオコウモリー保護対策緊急調査報告書. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第31集”, 沖縄県教育委員会(編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 73-90.
黒住耐二, 2005. オカクビキレガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 409.
増田 修・宇野 明・中原ゆうじ, 2015. 沖縄県大東諸島の陸産貝類の現状. *かいなかま*, 49(2): 21-44.
大原健司・大谷洋子, 2002. 西宮市貝類館所蔵黒田徳米博士標本目録(1) 非海産腹足類. 西宮市貝類館研究報告, (1): i-iv, 1-140.

執筆者名 : 福田 宏・黒住耐二* *前回改訂版(2005)における黒住による記載内容を一部引用した。

- 和名** : アソブイトクビキレ
- 分類** : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸殻上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 クビキレガイ科
- 学名** : *Truncatella* sp. A
- カテゴリー** : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) **環境省カテゴリー** : 該当なし
- 図の解説** : p. 38. A: 久米島仲村渠. B: 南大東島 西(国立科学博物館所蔵 NSMT Mo 52054). 撮影: 福田宏(A), 亀田勇一(B).
- 形態** : 殻長8mm、殻径3mm。殻は細長い円筒形、淡紅色で厚く不透明、光沢が強い。体層に約27本、次体層に約25本の緩く彎曲した細い縦肋を狭い間隔で並べる。螺層は膨らみ、縫合は明瞭に縊れる。殻口外唇は反転するが、外側に縦張肋状の肥厚はない。胎殻の縦肋と蓋の石灰化はオカクビキレ等と同様。
- 近似種との区別** : クビキレガイに似るが際立って小さく、螺層の膨らみと縫合の縊れが目立ち、縦肋数(後種は体層で約35本、次体層で約33本)も少ない。アマミクビキレはほぼ同じ大きさであるが、本種の方が縦肋数が多く、間隔も狭い。これら3種の縦肋の数や間隔の幅の差は、体層よりも次体層や第3体層で明瞭であり、識別には次体層・第3体層での縦肋数に注目するとよい。
- 分布の概要** : 久米島(仲村渠の具志川城跡西の海岸)、南大東島(西)。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : クビキレガイやアマミクビキレが南西諸島の広範囲に分布するのに対し、本種は上記2島2箇所しか記録がない。
- 生態的特徴** : 恐らく直達発生。
- 生息地の条件** : 久米島では内湾に面した隆起珊瑚由来の石灰岩岩礁飛沫帯において、粗砂底の転石間にサツマクリイロカワザンショウ、ウスイロヘソカド、クビキレガイ、ハマシイノミ属等と共に見られた。
- 個体数の動向** : 南大東島からの採集日不明の波部忠重標本(国立科学博物館所蔵 NSMT-Mo 52054)しか過去の産出の証拠が現存せず、もともと産地は少なかったと推測される。
- 現在の生息状況** : 南大東島では再発見されていない。近年は2009年4月に久米島で生貝が確認されたのみであり、極端に稀産で、現存個体群が1箇所しかない点はロウタキクビキレと同様である。
- 学術的意義・評価** : 最近ようやく存在が明確化された種である。本種に限らずインド-太平洋産クビキレガイ科貝類の分類は著しく遅れており、本種の認知が同科の研究推進の端緒となることが期待される。
- 生存に対する脅威** : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。

特記事項 : 本種は本書および福田他 (2017) 以前には一度も文献上に図示されたことがない。
参考文献 : 福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科 (新生腹足類: クビキレガイ上科) の再検討に向けて. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
黒田徳米, 1950. クビキレガイ類 (附 Clench・Turner 著 クビキレガイ科の目録紹介). 夢蛤, (49): 1-2.
黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106 pp., 3 pls.

執筆者名 : 福田 宏・亀田勇一

和名 : カガヨイクビキレ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 クビキレガイ科

学名 : *Truncatella* sp. B
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

図の解説 : p. 38. 宮古島狩俣 撮影: 福田 宏.
形態 : 殻長 6 mm、殻径 1.5 mm。殻は円筒形、橙色～朱色 (稀に白色)、半透明で生時は軟体が透けて見え、光沢が著しく強い。螺層は膨らみ、縫合は明瞭に縊れる。縦肋は細くて間隔が狭く (体層で約 34 本、次体層で約 32 本)、縫合下を除き平滑となる個体もある。外唇は反転するが外側に縦張肋状の肥厚は生じない。胎殻の縦肋と蓋の石灰化はオカクビキレ等と同様。

近似種との区別 : アソブイトクビキレに似るが小さく、縦肋は繊細で数が多く、光沢が強い。従来はヤマトクビキレ (沖縄県には分布しない) と混同されてきたが、後種は縦肋が太くて数が少なく、光沢も鈍く、蓋は石灰化しない。

分布の概要 : 沖縄島 (塩屋湾、恩納村山田、那覇港外)、宮古島、石垣島。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : クビキレガイやアマミクビキレが南西諸島の広い範囲に見られるのに対し、本種は上記 3 島のみで不連続的に記録されている。

生態的特徴 : 恐らく直達産生。
生息地の条件 : 内湾奥の岩礁地潮間帯上部砂泥底に半ば埋もれた転石下において、キザハシクビキレ、カドカドガイ属、ブタハマチグサ、コデマリナギサノシタタリ等と随伴する。水分を多く含んで崩れかけた朽木やその下の腐植土の中に深く潜る習性がある。海岸にまとまった量の漂着物や朽木等が堆積していない場所には個体群が形成されず、乾燥に弱いと考えられる。

個体数の動向 : クビキレガイに比べて産地数・個体数とも格段に少ない。過去の文献記録や標本も少数しかなく、もともと寡産であったと推測される。
現在の生息状況 : 現存産地は合計僅か 5 箇所以下で、どの個体群も小規模である。那覇港外の記録は黒田徳米標本のアマミクビキレに混在する個体に基づき、この個体群は消滅したと考えられる。

学術的意義・評価 : アソブイトクビキレと同様。
生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。塩性湿地の朽木等の漂着物が撤去・焼却されると個体群に致命的打撃を与えることがあるので、無思慮にゴミ掃除をすべきでない。

特記事項 : 黒田徳米は本種をアマミクビキレの「var.」と考えていたことが西宮市貝類館の標本とラベルから読み取れる。また長谷川 (2000: 170, pl. 85, fig. 2) の「ヤマトクビキレガイ」の図のうち右から 2 番目の個体と、増田・内山 (2004: 111) が「ヤマトクビキレ」とした石垣島産個体は本種である。ボルネオ産 *T. marginata* Küster, 1855 は本種に近似するが、現時点で関係は未詳。

参考文献 : 福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科 (新生腹足類: クビキレガイ上科) の再検討に向けて. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
福田 宏・久保弘文, 2012. カガヨイクビキレガイ (和名新称). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 54.
長谷川和範, 2000. クビキレガイ科. “日本近海産貝類図鑑”, 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 170-171.
黒田徳米, 1950. クビキレガイ類 (附 Clench・Turner 著 クビキレガイ科の目録紹介). 夢蛤, (49): 1-2.
黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106 pp., 3 pls.
増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : キザハシクビキレ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 クビキレガイ科

学名 : *Truncatella* sp. C
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

図の解説 : p. 39. 宮古島平良久松. 撮影 : 福田 宏.
 形態 : 殻長 6.8 mm、殻径 2.9 mm。殻は円筒形、淡い紅色がかった象牙色で厚く不透明、体層・次体層それぞれ約 17 本の強い畝状の縦肋を広い間隔で並べ、縫合下は強く角張って階段状を成す。殻口外唇付近で縦肋は弱まって平滑に近づくが、外唇外側は強い縦張肋状に肥厚する。殻底に稜角状の著しく強い縋帯を巡らし、殻口軸唇との間が遊離して偽臍孔状となる。胎殻の縦肋と蓋の石灰化はオカクビキレ等と同様。
 近似種との区別 : ロウタキクビキレは本種に最も似るが、極端に小さく、縦肋の数がより多い。カイグンボウクビキレは小形で殻底に偽臍孔を形成せず、胎殻の表面は平滑で、蓋は石灰化しない。アマミクビキレは殻質や色調は似るが縫合下が階段状とならず、より光沢が強い。
 分布の概要 : 宮古島、石垣島。国立科学博物館にはフィリピン・サンボアン産の本種に似た個体 (NSMT- Mo 55763 と 55769 の一部) が所蔵されている。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : クビキレガイやアマミクビキレが南西諸島の広範囲に見られるのに対し、本種は先島諸島の 2 島のみで不連続的に記録されている。石垣島では同じ海岸でロウタキクビキレも確認された。
 生態的特徴 : 恐らく直達発生。
 生息地の条件 : 内湾奥の岩礁地潮間帯上部砂泥底に半ば埋もれた転石下において、アマミクビキレ、カイグンボウクビキレ、カドカドガイ属、ブタハマチグサ、コデマリナギサノシタタリ等と共に見られる。カガヨイクビキレやロウタキクビキレほど朽木中や地中に深く潜らないものの、まとまった量の漂着物や朽木等が堆積していない場所には個体群が形成されず、やはり乾燥に弱いと考えられる。
 個体数の動向 : 既知産地数・個体数ともクビキレガイ・アマミクビキレより遥かに少なく、カガヨイクビキレやカイグンボウクビキレと比べてもさらに稀産と言える。
 現在の生息状況 : 現存産地は合計 5 箇所以下しかなく、どの個体群も小規模で、埋立や護岸等がなされると容易に失われかねない。
 学術的意義・評価 : アソブイトクビキレと同様。
 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。
 特記事項 : 福田・久保 (2012) が分布域に挙げた「奄美大島、久米島、渡名喜島、伊良部島」はアマミクビキレ、「沖縄島、伊良部島」はカイグンボウクビキレの誤同定に基づいており、それらの島ではいまだ本種の確実な記録はない。また久保 (2014) が本種として図示した沖縄島恩納村山田海岸産個体はカイグンボウクビキレである。
 参考文献 : 福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科 (新生腹足類: クビキレガイ上科) の再検討に向けて Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
 福田 宏・久保弘文, 2012. キザハシクビキレガイ (和名新称). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 55.
 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : **ロウタキクビキレ**
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 クビキレガイ科
 学名 : *Truncatella* sp. D
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 39. 石垣島梶海富野. 撮影 : 福田 宏.
 形態 : 殻長 4.8 mm、殻径 2.1 mm。殻は短い円筒形、光沢を帯びたクリーム色 (螺層中央に不明瞭で幅広い淡褐色帯を持つ個体が多い) で不透明、体層に約 21 本、次体層に約 24 本の強い縦肋を狭い間隔で密に並べ、縫合下は角張って階段状を成す。縦肋間は微細な螺脈を刻む。殻底の螺状稜角状の縋帯が著しく強く、縦肋がその上で板状に立ち、殻口の軸唇との間は深い偽臍孔状となる。外唇外側は強い縦張肋状に肥厚する。胎殻の縦肋と蓋の石灰化はオカクビキレ等と同様。
 近似種との区別 : キザハシクビキレに似て縫合が階段状となるが、遥かに小さく、縦肋は数が多くて間隔が狭く、螺層がほとんど膨らまないため輪郭は直線的となる。縋帯上で縦肋が顕著に立つ点も本種独特の特徴である。カイグンボウクビキレにも似るが色彩・胎殻の彫刻・蓋の石灰化の有無が異なる。
 分布の概要 : 石垣島 (梶海富野) のみ。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県産クビキレガイ科の他種はいずれも 2 つ以上の島で記録されているのに対し、本種は現時点で石垣島の 1 箇所ではしか知られていない。
 生態的特徴 : 恐らく直達発生。
 生息地の条件 : 内湾奥の砂浜辺縁の礫地において、潮間帯上部の砂泥底に深く埋もれた転石間に、ブタハマチグサ、コデマリナギサノシタタリ等と共に見られる。同じ場所のより浅く埋もれた転石間からはクビキレガイに加え、アマミクビキレ、キザハシクビキレ、カイグンボウクビキレも確認されている。
 個体数の動向 : 福田・久保 (2012) 以前に文献記録や博物館標本は一切ない。いまだ石垣島の 1 箇所からしか知られておらず、そこでの棲息範囲も僅か十数 m 程度と著しく狭いため、稀少性の極めて高い種と考え

<貝類>

- られる。過去にはもっと広く分布していたものの存在が知られないままに大半が壊滅した可能性もある。
- 現在の生息状況 : 現在沖縄県で棲息が確認されているクビキレガイ科のうち、最も稀な種である。ただし地中に深く潜る習性があるので見つけにくい種でもあり、今後の調査で新たな個体群が見出されるかもしれない。
- 学術的意義・評価 : アソブイトクビキレと同様。
- 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀕海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。
- 特記事項 : 福田・久保 (2012) の「キザハシクビキレガイ」の写真のうち、右端の石垣島梶海富野産個体は本種である。カロリン諸島産 *T. thaanumi* Clench & Turner, 1948 は殻形・色ともに似るが、この種は殻長 5.5 mm に達し完全には一致しない。
- 参考文献 : Clench, W.J. & Turner, R.D., 1948. A catalogue of the family Truncatellidae with notes and descriptions of new species. Occasional Papers on Mollusks, 1: 157-212.
福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科 (新生腹足類: クビキレガイ上科) の再検討に向けて. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
福田 宏・久保弘文, 2012. キザハシクビキレガイ (和名新称). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 55.
- 執筆者名 : 福田 宏

和名 : アラムシロ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 エゾバイ上科 オリイレヨフバイ科
学名 : *Hima festiva* (Powys in Sowerby & Powys, 1835)
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)

- 形態 : 殻は本科中、やや小型、長細い卵球形、殻表は小結節を持った粗い格子状彫刻と縦張筋を有する。殻口外唇内側に小歯が 3~4 個並ぶ。殻長 10 mm 内外。
- 近似種との区別 : 近似種ナミヒメムシロは彫刻がより細かく、殻色が淡色である。
- 分布の概要 : 沖縄島北部 (羽地内海、塩屋湾)。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本本土温帯域に広く分布するアラムシロが、奄美群島を飛び越して沖縄島北部 (羽地内海、塩屋湾) のみに隔離分布する地域個体群と見なされ、先島諸島には分布しない。
- 生態的特徴 : 魚やカニ等の死体に集合して摂食する腐肉食性であるが、完全に腐敗したものは摂食しない。
- 生息地の条件 : 潮間帯の砂底~砂礫底に生息するが、場所は限定される。
- 個体数の動向 : 2010 年頃までは、羽地内海の一部に比較的多産する場所が残っていたが、2015 年現在、非常に個体数が減少している。塩屋湾では小さな個体群が残っているが、局所的である。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 本個体群は分子系統学的検討の結果、約 5~10 万年以前に日本本土から個体群が到達した個体群が沖縄島北部で定着した集団であると推測されている。隔離集団として学術的意義がある。
- 生存に対する脅威 : 減少要因が不詳であるが、羽地内海や塩屋湾は陸域開発にともなう大量の陸土流入が確認されており、周辺からの畜産排水等の影響による水質悪化にも曝され、これらの悪影響を受けた可能性も否定できない。
- 原記載 : Sowerby, G.B. & Powys, W.L., 1835. Characters of new species of shells collected Mr. Cuming. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1835: 93-96. (p. 95, as *Nassa festiva*. Type loc.: “ad Panamam et ad Sanctam Elenam”)
- 参考文献 : 香取祥人・坂田 健・林 誠司・久保弘文, 2016. 東アジア地域に生息するアラムシロ *Nassarius festivus* の分子系統学的研究. 御所浦白亜紀資料館報, (17): 15-20.
久保弘文, 2012. アラムシロ (沖縄島). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 66.
久保弘文, 2017. 第5節 海の貝類. “名護市史「自然と人」”, 名護市教育委員会 市史編纂室 (編), 名護市教育委員会, 名護, 印刷中.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
名和 純, 2000. 沖縄県における干潟と低湿地の貝類の現状. “特殊鳥類等生息環境調査 XI”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 103-129.
名和 純, 2005. アラムシロ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 359-360.
- 執筆者名 : 久保弘文

和名 : ヤシマイシン近似種
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 原始的異鰓類 ミズシタダミ上科 カクメイ科
学名 : *Tomura cf. yashima* Fukuda & Yamashita, 1997
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) (ヤシマイシン)

図の解説 : p. 39. 石垣島崎枝. 撮影 : 福田 宏.

- 形態** : 殻長 0.8 mm、殻径 1.4 mm。殻は螺塔の低いシタダミ様で白色半透明、体層が大きく、臍孔は広い。殻表は弱い成長脈を除き平滑。蓋は円く革質半透明、多旋型。頭部・腹足は無色半透明で頭触角は細長く、口吻の先端が二叉する。足の前端は左右に突出し、後方は深く二叉する。外套腔右端から長い外套触角を生じる。
- 近似種との区別** : ヒメシマイシンより小形で縫合のくびれが弱く、歯舌の形態も異なる。同じ科の別属であるカクメイ属 *Cornirostra* Ponder, 1990 の種も和歌山・三重・兵庫各県から知られるが、同属は外套膜の表面に顕著な黒斑を持つ。
- 分布の概要** : タイプ産地は山口県上関町八島古浦。外形形態の近似した個体が石垣島崎枝で確認されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 神奈川県、浜名湖、タイプ産地对岸の長島（上関原子力発電所建設予定地内）、田辺湾、因島、秋徳湾、大分県中津等でも近似した個体の産出が報告されているが、産地ごとに殻や歯舌の形態が異なり、同種か別種か断定できない。狭い範囲の固有種が多数存在する可能性もある。
- 生態的特徴** : 螺旋形の卵塊を固い基質上に産み、浮游幼生期を経ると推測されるが、その他の生活史は未詳。
- 生息地の条件** : 潮通しの良い海岸転石地の潮間帯に生じたタイドプールにおいて、砂泥に半ば埋もれた転石下の還元環境に産する。石垣島ではウシオコハクカノコ、タオヤメユキスズメ、ニセゴマツボ、ミジンゴマツボ等と同所的に見られた。
- 個体数の動向** : 上記各産地の個体が別種であった場合、各々の分布域は著しく狭いことになる。
- 現在の生息状況** : 現時点での沖縄県唯一の産地である石垣島崎枝では、砂泥干潟上部に転石と湧水が点在する場所に個体群が見られ、棲息範囲はごく狭い。
- 学術的意義・評価** : カクメイ科貝類は異鰓類の共通祖先に近く、腹足綱の系統進化を研究する上で重要である。本種はヒメシマイシンとともに、北西太平洋で最初に発見・記載された同科の種である。
- 生存に対する脅威** : 本種群が産する転石下の還元環境は脆弱で、護岸・埋立等海岸開発や水質汚濁によって容易に損なわれる。
- 特記事項** : 愛知県レッドリストに「イシン属の一種」が情報不足として掲載されている。
- 原記載** : Fukuda, H. & Yamashita, H., 1997. Two new species of the family Cornirostridae (Gastropoda: Heterobranchia: Valvatoidea) from the Seto Inland Sea, western Japan. *The Yuriyagai*, 5: 1-16. (pp. 2-8, figs 2-8, 18, 20-21, 24-34, 44-51, as *Tomura yashima*. Type loc.: "Furu-ura, Yashima Island, Kaminoseki-chô, Kumage-gun, Yamaguchi Prefecture, Japan (33°45'30" N, 132°09'08" E)")
- 参考文献** : Bieler, R., Ball, A.D. & Mikkelsen, P.M., 1998. Marine Valvatoidea - comments on anatomy and systematics with description of a new species from Florida (Heterobranchia: Cornirostridae). *Malacologia*, 40: 305-320.
 福田 宏, 2012. ヤシマイシン. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 79.
 福田 宏, 2014. ヤシマイシン. "レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 77.
 Fukuda, H., Asami, T., Yamashita, H., Satô, M., Hori, S. & Nakamura, Y., 2000. Marine molluscan and brachiopod fauna of Tanoura, Nagashima Island, Kaminoseki-chô, Yamaguchi Prefecture, Japan. *The Yuriyagai*, 7: 115-196.
 早瀬善正・大賞貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 2015. 前島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相一特徴的な16種の記録. *ちりぼたん*, 45: 105-122.
 木村昭一・三長孝輔・三長秀男, 2012. 和歌山県田辺湾産カクメイ科イシン属貝類の歯舌形態. *かきつばた*, (37): 48-49.
 三長孝輔・三長秀男, 2006. 和歌山県田辺湾奥部干潟に生息する貝類. *かきつばた*, (32): 7-14.

執筆者名 : 福田 宏

和名 : オキナワヌカルミクチキレ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 トウガタガイ上科 トウガタガイ科
学名 : *Pyramidellidae* gen. & sp.
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 図の解説** : p. 39. 佐敷干潟. 撮影 : 久保弘文.
- 形態** : 殻長約 3 mm。殻は全体が灰褐色で、やや光沢が有り、螺層は 7 階を数える。軸唇は斜めでややねじれ、臍孔部分が白く色が抜ける。
- 近似種との区別** : 日本本土産のヌカルミクチキレは、臍孔部分の色が白く抜けない。
- 分布の概要** : 沖縄島佐敷干潟のみから見出されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 近似種ヌカルミクチキレは瀬戸内海、大阪湾口等の内湾潮間帯に分布する。
- 生態的特徴** : 河口付近の干潟泥底にエドガワミズゴマツボやココオキナガイと同所的に個体群を形成する。同科には寄生種が多いことから、本種も何らかの無脊椎動物に寄生している可能性があるが、詳細は不明。
- 生息地の条件** : 小規模なマングローブ域に隣接した泥干潟の軟泥底。
- 個体数の動向** : 1990 年代には 1000 個体規模の個体群が確認されているが、2006 年以降生貝が確認されておらず、2011 年にも詳細な調査を実施したが、確認されていない。
- 現在の生息状況** : 生息場所が著しく狭い上、近年、全く確認されておらず、最も絶滅の危機に瀕した種のひとつである。
- 学術的意義・評価** : 沖縄島固有の未記載種であり、分類学的、生物地理学的に極めて重要である。
- 生存に対する脅威** : 分布域が非常に限定的であるため、さまざまな環境変化によって、個体群が影響を受けやすい。佐敷干潟には陸域開発にともなう大量の陸土流入が確認されており、周辺からの畜産排水等の影響に

よる水質悪化に曝されているほか、特に2010年10月に起きた重油流出事故では大量の重油が、同干潟の護岸に1~2 m幅で漂着したとされ、個体群に致命的なダメージが生じた可能性がある。

- 参考文献：久保弘文, 2012. オキナワヌカミクチキレ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 89.
久保弘文, 2014. オキナワヌカミクチキレ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 81.
名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, pls 1-2.

執筆者名：久保弘文

和名：カワコザラ
分類：腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 水棲目 ヒラマキガイ上科 ヒラマキガイ科
学名：*Ferrissia cf. nipponica* (Hirase & Kuroda, 1949)
カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー：該当なし

図の解説：p. 39. A: 西表島古見. B: 西表島南風見仲. 撮影：齊藤 匠.
形態：殻長2 mm前後。殻は平たい笠形で、極めて薄く脆い。殻表面は平滑、色彩は非常に薄い黄褐色であるが場合により付着物に覆われ黒褐色となる。

近似種との区別：近似の移入種である *F. fragilis* (Tryon, 1863) メリケンコザラ (和名新称) に酷似する。沖縄県下の個体はメリケンコザラと比べ、上下均等な楕円形で殻高が低い傾向にあると思われるが、メリケンコザラの殻形態は産地により変異が大きく殻形態のみで完全に識別できるかについては検討が必要である。

分布の概要：北海道~八重山諸島。近似種との区別が困難で近年の記録のほとんどが上記の外来種メリケンコザラの誤同定である可能性がある。現在のところ、遺伝的特徴から本種であることが確認される個体群は沖縄県下では西表島の2地点のみである。

近縁な種及び群との分布状況の比較：複数の近縁種が北アフリカ、インド~東南アジア、中国南部、オーストラリア、ニュージーランド、北アメリカなどに分布すると思われる。また奄美大島からも近縁の別種と思われる個体が発見されている。

生態的特徴：直達発生と思われる。水中に沈んだ落ち葉を付着基質としていることが多い。
生息地の条件：沖縄県下では流れの緩やかな河川溪流部支流の淵や湧水で、付着基質となる落ち葉が多く存在する場所が主な生息地であると思われる。

個体数の動向：同定の困難さから確実な産出記録がほとんどないため不明である。
現在の生息状況：西表島の1産地では溪流の支流にヒラマキミズマイマイやヒメヒラマキミズマイマイと混生していたが、生息数は水中に沈んだ落ち葉20枚につき1個体程度であった。

学術的意義・評価：近縁種が広くインド~環太平洋地域に広く分布し、生物の分散や移入の過程を考える際に興味深い試料である。

生存に対する脅威：近縁の外来種が侵入しており、競合した場合、駆逐される可能性がある。両種が同所的に見られる産地は今の所知られていないが、これが元来の生息環境の差異によるものか、競争による絶滅が生じているためかは不明である。さらに、生息水域そのものの開発による消失や、周辺地域の開発による水源の枯渇、流路の変更、水質汚濁なども脅威となりうると考えられる。

特記事項：本属は殻形態での識別の難しさから蓄積された産出記録がどの種に当たるのか判然としないことが殆どで、過去のデータを有効に活用することが困難である。

原記載：平瀬信太郎・黒田徳米, 1949. かほこざら. “日本動物図鑑”, 内田清之助(編), 北隆館, 東京, 1060. (p. 1060, as *Protancylus (Laevapex) nipponicus*. Type loc. 指定なし)

参考文献：Hubendick, B., 1970. Studies on Ancyliidae. The palearctic and oriental species and formgroups. Acta Regiae Societatis Scientiarum et Litterarum Gothoburgensis Zoologia, 5: 1-52.
名和 純, 2005. カワコザラの一種. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 432.

執筆者名：齊藤 匠

和名：エリマキガイ
分類：腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 サナギガイ上科 キバサナギガイ科
学名：*Ptychalaria dedecora* (Pilsbry, 1902)
カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 II 類 (VU)

図の解説：p. 39. 北大東島. 撮影：久保弘文.
形態：貝殻は微小(殻長約1.6 mm)で、殻径はやや幅広く(約1 mm)、卵形、堅固。螺塔はやや低い。体層は小さく、周縁は丸い。殻は赤褐色で鈍い光沢を持ち、平滑。殻口は卵形で、肥厚・反転し、後方の体層に隆起部を持つ。殻口内部に多くの歯を持ち、外唇側面に溝を持つ。

- 近似種との区別： 日本産の本科の種とは、卵形、堅固であり、殻口も強く肥厚し、殻口内部の腔壁も長いことで識別できる。
- 分布の概要： 小笠原諸島と南北大東島にのみ分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 日本産は一属一種であり、同属の種はヨーロッパの化石種と北マリアナ諸島に分布する。
- 生態的特徴： やや自然度の高い森林の林床の落葉下に生息する。
- 生息地の条件： 湿性の森林が保たれていること。
- 個体数の動向： 20世紀末から現在の間に激減した。
- 現在の生息状況： 南大東島での調査では生貝は確認できず、北大東島の長幕の自然林で僅かに認められているだけである。
- 学術的意義・評価： 小笠原諸島との共通種。
- 生存に対する脅威： 森林伐採や農薬の散布。
- 特記事項： IUCN カテゴリー： Vulnerable (VU)。
- 原記載： Pilsbry, H.A., 1902. New land Mollusca from Japan and the Bonin Islands. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 54: 25-32. (p. 31, as *Nesopupa dedecora*. Type loc.: "Hahajima, Ogasawara")
- 参考文献： 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, xvi+343 pp., 80 pls.
東 正雄・東 良雄, 1994. 大東島の陸産貝類相. Venus, 53(3): 161-173.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
黒住耐二, 1992. 北大東島の陸産貝類. "沖縄県天然記念物調査シリーズ第31集 ダイオウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書", 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 73-90.
- 執筆者名： 黒住耐二

- 和名： **キカイキセルモドキ**
- 分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 キセルモドキ上科 キセルモドキ科
- 学名： *Luchuena reticulata* (Reeve, 1849)
- カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) (キカイキセルガイモドキ)
- 形態： 殻長 20 mm、殻径 9 mm、太い紡錘形で縫合はほとんどくびれない。殻はやや厚質、薄い黄褐色～赤褐色で、白い火炎彩ないしは縞状の模様をもつ。殻皮は鉛色で光沢は弱い。殻表には弱い成長脈を持ち、不規則な螺旋脈ないしはそれが細かく途切れた漣状の彫刻を生じる。臍孔は狭く浅い。殻口はよく反転して肥厚し、内唇には滑層が発達する。
- 近似種との区別： 本種は殻径が大きく、太い紡錘形となることで他の同属種から区別される。
- 分布の概要： 喜界島・沖永良部島・与論島・沖縄島および羽地内海周辺の島に分布し、沖縄島では辺戸岬から読谷村にかけての海岸に近い石灰岩地帯に棲息が限られる。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 奄美群島から沖縄諸島には本種とオオシマキセルモドキ種群・ウスチャイロキセルモドキ種群が棲息するが、後者は沖永良部島付近をそれぞれ分布の南限・北限としており、全体に分布するのは本種のみである。
- 生態的特徴： 基本的に樹木を生活の場とする樹上棲種であるが、地表に近い草本植物や人工物（手すり、コンクリート壁）、石灰岩の岩壁など、様々な立体構造物を利用する。
- 生息地の条件： 同上。湿度が高く、やや暗い自然林を好む傾向があり、それらに隣接するコンクリート製の建造物も積極的に利用しているようである。
- 個体数の動向： 2000年代中頃までは樹幹や遊歩道の手すり、墓地の壁などに百個体以上が鈴りになる様子が観察されていたが、そのような多産地でも近年は確認数が一桁以上減少している。読谷村や恩納村ではとりわけ確認が困難となっており、場所によっては絶滅した可能性も考えなければならない。
- 現在の生息状況： 同上。
- 学術的意義・評価： リュウキュウキセルモドキ属は琉球列島内で大きな遺伝的分化を生じており、諸島あるいは島嶼ごとに固有な系統が多く存在し、系統地理学的に重要なグループである。また、本種は奄美群島と沖縄諸島の間には存在する動物分布の境界線をまたいで分布する数少ない陸産貝類のひとつであり、生物地理学的重要性が高い。
- 生存に対する脅威： 本種群は基本的に森林棲かつ樹上棲であり、開発等による森林の減少・分断は直接的な脅威となる。しかし、人の手も入っておらず、一見環境の変化も少なそうな森林においても確認数は減少しており、温暖化やそれに伴う乾燥化、降水パターンの変化、強い台風の増加といった環境変化が棲息に影響を及ぼしている可能性が高い。
- 特記事項： 辺戸岬周辺の大型個体群にはマダラキカイキセルモドキ *L. r. variegata* (Ancey, 1906) の名が与えられているが、種内変異である。
- 原記載： Reeve, L. A., 1848-1850. Monograph of the genus *Bulimus*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 5: pls.1-89. (sp.443, pl.64, fig.443 (1849), as *Bulimus reticulatus*. Type loc.: "West Africa" [error])
- 参考文献： Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.

- 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
久保弘文, 2017. 第4節 陸産貝類. “名護市史「自然と人」”. 名護市教育委員会市史編纂室 (編), 名護市教育委員会, 名護 (in press).
湊 宏, 1995. 古宇利島の陸産貝類. ちりぼたん, 26(2): 44-48.
湊 宏, 1999. 日本のキセルガイモドキ科貝類の概説. ちりぼたん, 30: 49-58.

執筆者名 : 亀田勇一

和名 : 沖縄島のウスチャイロキセルモドキ類似種群
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 キセルモドキ上科 キセルモドキ科
学名 : *Luchuena* spp.
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) (ウスチャイロキセルガイモドキ*)
*本改訂(沖縄県)は類似種群として扱った。

図の解説 : p. 39. 1: 嘉津宇岳. 2: 照首山. 3: ネクマチヂ岳 (3b: 殻表の螺旋脈). 撮影: 早瀬善正 (3a), 亀田勇一 (1, 2, 3b).
形態 : 殻は殻長 14~19 mm、殻径 5.5~7 mm で薄質、紡錘形で螺層の膨らみは弱い。臍孔は狭く浅い。殻皮は黄褐色で火炎彩はないか、ほとんど目立たない。殻表にはほぼ全面に不規則な螺旋脈をもつ。殻口は薄く反転し、肥厚は弱い。生時には泥などで殻表を覆っていることもある。
近似種との区別 : 本種は殻表全面に不規則ながら明瞭な螺旋脈を持つ点がウスチャイロキセルモドキと共通するが、より小型で薄質、殻口の肥厚反転も弱い個体が多い。オオシマキセルモドキやリュウキュウキセルモドキとは、明瞭な螺旋脈をもち、ほぼ単色で模様を欠くことで区別される。
分布の概要 : 沖縄島と伊江島で確認されているが、地域間での遺伝的分化が大きく、分布の狭い複数の種を含んでいる可能性が高い。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : ウスチャイロキセルモドキ・クメジマキセルモドキを含む単系統群として、中琉球(沖永良部島~久米島)に分布すると考えられる。同属のオオシマキセルモドキ種群は沖永良部島以北、キカイキセルモドキは沖縄島~喜界島、リュウキュウキセルモドキは先島諸島に分布する。
生態的特徴 : 自然度の高い森林の樹木を棲息場所とする樹上棲種である。飼育下ではマット状に生えるカビを好んで摂食する様子が観察されており、野外でも菌類を餌としている可能性がある。
生息地の条件 : 同上。樹上棲で乾燥には比較的強いが、日差しが遮られ、ある程度湿度の高い林を好む傾向がある。
個体数の動向 : もともと稀産で、安定して棲息が確認できる場所は少なく、偶然見つかることが多いため、全体的な動向の把握は難しい。しかし、以前は1本の木に複数個体が見られたような場所では、近年では個体数が減少している。目につきにくい高所まで登ることもあるため、一概にいなくなっていると断言することは出来ないが、調査時の発見頻度は確実に減少傾向にある。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : リュウキュウキセルモドキ属は琉球列島内で大きな遺伝的分化を生じており、諸島あるいは島嶼ごとに固有な系統が多く存在する。本種群は沖縄島の中でも複数種に分かれている可能性があり、分類・生物地理・進化生態学の各面からの研究が必要である。
生存に対する脅威 : 本種群は基本的に森林棲かつ樹上棲であり、開発等による森林の減少・分断は直接的な脅威となる。しかし、人の手も入っておらず、一見環境の変化も少なそうな森林においても確認数は減少しており、温暖化やそれに伴う乾燥化、降水パターンの変化、強い台風の増加といった環境変化が棲息に影響を及ぼしている可能性が高い。
参考文献 : Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
知念盛俊, 1989. 佐敷町産陸棲貝類. “佐敷町史 三 自然”, 佐敷町史編集委員会 (編), 佐敷町役場, 佐敷, 324-334.
湊 宏, 1977. 沖永良部島産キセルモドキ科の新種とリュウキュウキセルモドキ属の再検討. Venus, 36: 14-18.
湊 宏, 1999. 日本のキセルガイモドキ科貝類の概説. ちりぼたん, 30: 49-58.

執筆者名 : 亀田勇一

和名 : センカクコギセル
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
学名 : *Euphaedusa senkakuensis* Kuroda, 1960
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)
形態 : 貝殻は小型(殻長約 13 mm)で、やや細く(殻径約 3 mm)、細長い塔型。殻は暗褐色で、殻表には明瞭で細かい成長肋を密に持つ。殻口は洋梨形で突出し、殻口縁は広がる。殻口内の上板と下軸板は

発達するが、下板は殻口からほとんど見えない。プリカは側面に位置し、主髯は短く、月状髯を欠き、短い上腔髯を持つ。

近似種との区別： 琉球列島産のキセルガイではスターズギセル、イリオモテコギセルが最も近縁であるが、貝殻が著しく小さいことと、分布域が異なることで容易に区別できる。

分布の概要： 尖閣諸島の魚釣島と南小島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： スターズギセルが石垣島に、イリオモテコギセルが西表島に分布し、セリダニギセルが台湾に分布する。

生態的特徴： 自然林の落葉下に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 現地調査が長らく行われていないが、野生化したヤギによる自然植生の破壊が進行しており、個体数は減少していると思われる。

現在の生息状況： 現地調査が長らく行われていないため、現在の生息状況は不明である。野生化したヤギの食害による生息環境の悪化が懸念される。

学術的意義・評価： 尖閣諸島の固有種であり、ヤギの食害による影響が懸念されるため、保全の重要性は極めて高い。

生存に対する脅威： 野生化したヤギの食害による自然植生の破壊、林床の乾燥化、土壌流出による生息地の消失。

特記事項： 最近の生息状況は不明であり、早急な現地調査が必要である。

原記載： 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106 pp., 3 pls. (pp. 78-79, pl. 2, figs 19-21, as *Euphaedusa senkakuensis*. Type loc.: “尖閣列島南小島”)

参考文献： 知念盛俊, 1976. 尖閣列島の陸産貝類. 沖縄生物学会誌, (17): 19-27.
湊 宏, 2014. センカクコギセル. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 325.
横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5: 1-12.

執筆者名： 上島 励

和名： タカラノミギセル

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科

学名： *Hemizaptyx takarai* (Kuroda, 1960)

カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 II 類 (VU)

図の解説： p. 39. 1: タカラノミギセル 尖閣諸島. 2 (参考): サキシマノミギセル 石垣島. 3 (参考): ヨワノミギセル 石垣島. 撮影: 久保弘文.

形態： 貝殻は小型 (殻長約 13 mm) で、やや細く (殻径約 2.5 mm)、細長い塔型で先端はやや尖る。殻は暗褐色、殻表は滑らかで弱く細かい成長肋がある。殻口は洋梨形で著しく歪み、強く縊れた瓢箪型で、殻口縁は弱く広がる。上板は発達するが、殻口から見えにくい。下軸板は殻口縁に現れる。プリカは側面に位置し、強く発達した月状髯があり、短い上腔髯に接する。

近似種との区別： 八重山に分布するサキシマノミギセルに似るが、殻口が著しく歪むこととプリカが側面に位置することで容易に区別できる。

分布の概要： 尖閣諸島の魚釣島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： ツヤノミギセル近似種が西表島、ヨワノミギセルが石垣島に、サキシマノミギセルが西表島、石垣島に分布する。

生態的特徴： 自然林の落葉下や倒木下に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 現地調査が長らく行われていないが、野生化したヤギによる自然植生の破壊が進行しており、個体数は減少していると思われる。

現在の生息状況： 現地調査が長らく行われていないため、現在の生息状況は不明である。野生化したヤギの食害による生息環境の悪化が懸念される。

学術的意義・評価： 尖閣諸島の固有種であり、ヤギの食害による影響が懸念されるため、保全の重要性は極めて高い。

生存に対する脅威： 野生化したヤギの食害による自然植生の破壊、林床の乾燥化、土壌流出による生息地の消失。

特記事項： 最近の生息状況は不明であり、早急な現地調査が必要である。

原記載： 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 沖縄, iv+106 pp., 3 pls. (p. 78, pl. 2, figs 16-18, as *Zaptyx* (*Tyrannozaptyx*?) *takarai*. Type loc.: “尖閣列島魚釣島, 落葉下”)

参考文献： 知念盛俊, 1976. 尖閣列島の陸産貝類. 沖縄生物学会誌, (17): 19-27.
湊 宏, 2014. タカラノミギセル. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 327.
横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5: 1-12.

執筆者名： 上島 励

和名： キンチャクギセル

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科

〈貝類〉

科

学 名 : *Luchuphaedusa callistochila* (Pilsbry, 1901)
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

図の解説 : p. 39. A: 大宜味村. B: 名護市. 撮影 : 久保弘文.
形態 : 殻長 21~26 mm、殻径 5.8~7.2 mm、やや腹太の紡錘形。殻はきわめて厚く、殻皮は黄白色で光沢を持ち、殻表には密な成長肋をもつ。殻口はよく反転肥厚するが、体層から離れて突出はしない。内唇の上板から下軸板付近にかけては強い皺状となる。上板と下軸板は明瞭で唇縁に達し、下板も明瞭。主襞は縫合と平行で、体層の 3/4~1 周ほどの長さ。上腔襞は体層の 1/4 ほどの長さで、やや傾いて終端は主襞からかなり離れる。下腔襞は太く長く、短い弧状の月状襞と連結して奥側は二股状となるが、腹面観では内唇の反転肥厚部に隠れて月状襞の始端が僅かに見えるのみである。

近似種との区別 : 沖縄島に分布するツヤギセルやリュウキュウギセルとは、肋の粗さや腔襞の形態および内唇縁が皺状に刻まれることで区別される。本種のタイプ産地は国頭であるが、原記載と湊 (1994) の報告にある沖縄島南部の個体では腔襞や殻の形態にかなりの違いがあり、別種となる可能性もある。

分布の概要 : 沖縄島固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄諸島には本種とリュウキュウギセル・ツヤギセル・オキナワギセルが分布し、ツヤギセル以外は沖縄島固有。近縁なものではほかに 3 種が奄美諸島北部に分布し、屋久島以北にも数種が分布する。

生態的特徴 : やや自然度の高い森林の倒木下や礫間等に生息する地上性種である。卵生。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : もともと個体数の多い種類ではないが、一度の調査で複数個体を見出すことは困難になっている。沖縄島北部では夜間や雨天時には道路沿いの岩壁や樹幹を匍匐していることもあり、潜在的な棲息環境は比較的広いと考えられる。しかしながら沖縄島南部においてはごく限られた場所では確認できなくなっており、絶滅寸前の状態にある。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 琉球列島中部から九州西岸にかけて分布し多様化しているグループの一員であり、生物地理学的にきわめて重要。

生存に対する脅威 : 基本的に森林棲であり、開発等による森林の減少・分断は直接的な脅威となる。林縁付近まで棲息していることから、林道拡張など局所的な改変も重大な脅威となりうる。しかし、人の手も入っておらず、一見環境の変化も少なそうな森林においても確認数は減少しており、温暖化やそれに伴う乾燥化、降水パターンの変化、強い台風の増加といった環境変化が棲息域全体に影響を及ぼしている可能性が高い。

原 記 載 : Pilsbry, H. A., 1901. The land mollusks of the Loo Choo islands: Clausiliidae. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 409-424, pls.22-23. (pp.413-414, pl.22, figs.1-4, as *Clausilia* (*Luchuphaedusa*) *callistochila*. Type loc.: "Province Kunchan, Okinawa")

参 考 文 献 : 知念盛俊, 1965. 沖縄産陸産貝の採集と標本の作り方 (I). 沖縄生物学会誌, 2(4): 77-88.
Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.

知念盛俊, 1989. 佐敷町産陸棲貝類. "佐敷町史 三 自然", 佐敷町史編集委員会 (編), 佐敷町役場, 佐敷, 324-334.

知念盛俊・治井正一・儀間一恵, 1995. 大宜味村の陸・淡水棲貝類. "大宜味村の自然, 大宜味村動植物調査報告書, 大宜味村文化財調査報告書 (4)", 環境省・大宜味村 (編), 大宜味村教育委員会, 大宜味, 295-327.

久保弘文, 2017. 第4節 陸産貝類. "名護市史「自然と人」", 名護市教育委員会市史編纂室 (編), 名護市教育委員会, 名護, 印刷中.

湊 宏, 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究. Venus, suppl. 2: 1-212, 5 tables, 74pls.

下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. "沖縄県天然記念物調査シリーズ第14集 沖縄県洞穴実態調査報告 I", 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 75-112.

執 筆 者 名 : 亀田勇一

和 名 : リュウキュウギセル
分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科

学 名 : *Luchuphaedusa inclyta* (Pilsbry, 1908)
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説 : p. 40. 生体 : 今帰仁村. 標本 : 大宜味村. 撮影 : 久保弘文.
形態 : 貝殻は本科においては大型 (最大殻長 33 mm) で堅固。殻は淡い黄白色で、殻表には規則的で粗い縦肋を等間隔に有する。殻口は白く反転し、キンチャクギセル属に特有の巾着袋を締めた様な襞を形成する。

近似種との区別 : 分布域が重複する同属のキンチャクギセルは、小型で膨らみが強く、螺肋が細かいことから、明瞭に区別できる。

- 分布の概要： 沖縄島の中・北部の石灰岩地にのみ分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 沖縄島における同属のキンチャクギセルの分布は沖縄島全域に及ぶが、本種は沖縄島中北部の、特に本部半島と大宜味村の古期石灰岩塊を中心とした地質帯に多い。しかし、類似した地質帯である辺戸岬周辺には分布しない。
- 生態的特徴： 自然度の高い森林の石灰岩洞窟入り口付近の苔むした岩の隙間や、溪流沿いの空中湿度が維持された石灰岩地の凹所等に生息する。
- 生息地の条件： 同上。
- 個体数の動向： 1990年代に1産地に十数単位の個体数生息が確認されていた本部半島の本部町伊豆味、伊野波、今帰仁村シイナグスク等の個体群は2016年現在、全く確認出来ず、今帰仁城跡周辺では局所的に生存しているのみである。名護市嘉津宇岳の個体群は2012年まで確認済みであるが、2015年の調査では死殻すら見つからなかった。大宜味村押川の石灰岩地では古い死殻のみで絶滅した可能性が高い。現在、辛うじて確認できる個体群は名護市、今帰仁村、大宜味村、宜野座村のそれぞれ1箇所ずつで、計4箇所であり、このうち、宜野座村と大宜味村の個体群は極めて狭い範囲に留まっている。
- 現在の生息状況： 同上。
- 学術的意義・評価： 沖縄島北部の石灰岩地に広く生息していたと推測されるが、現在は数地点の限られた石灰岩地のみで確認されるのみである。本種は周辺地域に形態の類似した種が見られず、沖縄島固有の希少種であるだけでなく、生物地理、進化生物学等学術的価値が極めて高い。
- 生存に対する脅威： 本種の生息場所は範囲が限定されている上、殆どが様々な自然観察の場にもなるような保護区や世界遺産対象地域の中にあつて、局所的に形成される石灰洞入口や、樹冠の閉じた豊かな森林、溪流沿いの湿度が安定した、極めて脆弱な空間である。たとえ直接的な場の変更でなくとも、その周辺における林道、遊歩道、公園整備等の造成によって、瞬間に不可逆的な個体群消滅をもたらすことが危惧される。こうした移動性に乏しく、生息環境のデリケートな種の保全については、一切の環境変更を許さない包括的な保護地域の設定が望まれる。
- 原 記 載： Pilsbry, H.A., 1908 (for 1907). New Clausiliidae of the Japanese Empire—XI. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 59: 499–513, pls 32–34. (pp. 499–500, pl. 32, figs 1–4, as *Clausilia (Luchuphaedusa) inclyta*. Type loc.: “Ogimi, prov. Kunchan, Ryukyu (Okinawa)”)
- 参 考 文 献： 知念盛俊, 1965. 沖縄産陸産貝の採集と標本の作り方 (I). 沖縄生物学会誌, 2(4): 77–88.
知念盛俊, 1976. 陸産貝類. “生態写真集 沖縄の生物”, 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212–243.
Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127–149.
加藤次雄, 1959. 沖縄の陸棲貝. 三重生物, (9): 73–75.
久保弘文, 2012. 陸生貝類調査. “平成23年度地域生物多様性保全計画 (大宜味村地域連携保全活動計画) 策定調査業務報告書”, 環境省・大宜味村 (編), 環境省・大宜味村, 大宜味, 56–64.
久保弘文, 2017. 第4節 陸産貝類. “名護市史「自然と人」”, 名護市史編さん委員会 (編), 名護市教育委員会市史編纂室, 名護, 印刷中.
黒住耐二, 2005. リュウキュウギセル. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) —レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 369–370.
黒住耐二, 2012. 第8節 非海産貝類 今帰仁城跡周辺とシイナグスクから確認された非海産貝類 国指定史跡今帰仁城跡周辺附シイナ城跡の自然—自然調査報告書—. “今帰仁村文化財調査報告書第31集”, 今帰仁村教育委員会 (編), 今帰仁村教育委員会, 今帰仁, 106–120.
- 執 筆 者 名： 久保弘文・亀田勇一

- 和 名： **サカヅキノミギセル**
- 分 類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
- 学 名： *Selenoptyx inversiluna* (Pilsbry, 1908)
- カ テ ゴ リー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)* 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- *本改訂(沖縄県)は沖縄島産の本種またはミカヅキノミギセルに同定されている個体群を「沖縄島のサカヅキノミギセル」として分けて扱った。

- 形 態： 殻は殻長 10 mm 前後、殻径 3 mm 弱の紡錘形。殻表は黄褐色で、弱く細かい成長肋を持つ。殻口縁は厚く、上板と下軸板は明瞭で唇縁に達するが、下板は見えない。主襞は長く、体層の 3/4 周ほどになる。上腔襞と月状襞は連続し、体層右端付近から主襞とはほぼ平行に奥へ伸び、体層径の 1/3 付近で強く曲がり、上板のやや右側付近で滑層下に達する。生殖器では陰茎後端部に瘤状～長さ 0.5 mm ほどの陰茎付属肢を有する。
- 近似種との区別： 本属は上腔襞と月状襞が連続してひとつの弧を描くことで他の属と区別される。同属のミカヅキノミギセルとは、腔襞がより奥に位置することや、陰茎付属肢が小型であることで区別される。
- 分布の概要： 久米島と渡嘉敷島で確認されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 同属のミカヅキノミギセルが伊平屋島に分布するほか、本種またはミカヅキノミギセルに同定されている個体群が沖縄島の数ヶ所で記録されている。
- 生態的特徴： 自然度の高い森林の倒木下等から採集される一方、久米島では非常に乾燥した松林やススキの根元からも見つかり、これまで考えられていた以上に人里近くに棲息している可能性もある。

〈貝類〉

- 生息地の条件 : 上記のように相反する環境で確認されており、真に好適な条件は不明である。
- 個体数の動向 : 不明。記録に乏しく、いずれの島でも過去に数回、僅かな個体が見つかったにすぎない。個体数が非常に少ない稀産種と考えられる。
- 現在の生息状況 : 死殻すら確認されることは稀であり、僅かな個体数で細々と個体群が存続していると考えられる。
- 学術的意義・評価 : キセルガイ類としては数少ない沖縄諸島固有のグループであり、詳細な分類・生態・系統地理学的研究によって実態の把握に努める必要がある。
- 生存に対する脅威 : 開発等による森林面積の減少が悪影響を及ぼしている可能性がある。また、福田・多々良 (2009) が示唆する通り、ススキ原のような開けた場所を好むとすれば、道路拡張や農地整備によって甚大な被害を受けている可能性がある。
- 原 記 載 : Pilsbry, H. A., 1908 (for 1907). New Clausiliidae of the Japanese Empire.— XI. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 59: 499-513, pls.32-34. (p.511, pl.34, figs.43-44, as *Clausilia (Selenoptyx) inversiluna*. Type loc.: “Kumejima, Ryukyu”)
- 参 考 文 献 : Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
- 福田 宏・多々良有紀, 2009. 久米島のサカヅキノミギセル (有肺目: キセルガイ科). Molluscan Diversity, 1: 1-4.
- 湊 宏, 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究. Venus, suppl, 2: 1-212, tables 5, pls. 74.
- 魚住賢司・山本愛三・品川和久・反田栄一, 1980. サカヅキノミギセル *Zaptyx (Selenoptyx) inversiluna* とミカヅキノミギセル *Zaptyx (Selenoptyx) noviluna* の比較的研究. 九州の貝, (15): 5-12.

執 筆 者 名 : 亀田勇一

和 名 : ミヤコオキナワギセル
分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科

学 名 : *Stereophaedusa striatella* (Pilsbry, 1901)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 II 類 (VU)

形 態 : 殻は細長い塔型であるが、成貝では幼層が欠失し、殻頂部が折れた形状となる。中型 (殻頂欠損での殻長 24.5~29.5 mm 程) で、殻径はやや太い (約 6.5~7.0 mm 程)。色彩は濃茶褐色で、殻表の繊細な成長肋により、光沢はなく曇る。殻口縁は薄いが広く拡がり、殻口内の上板・下板・下軸板は明瞭である。腔襞は、主襞がやや短いほか、月状襞を欠き、短く同程度の長さの上腔襞と下腔襞を持つ。

近似種との区別 : 本種の殻は、小型で濃褐色であること、宮古島のみの分布であることにより、沖縄島のオキナワギセル、スジイリオキナワギセルとは殻の色彩や大きさおよび分布域で区別できる。

分布の概要 : 現在の分布は、宮古島の野原岳の限られた範囲のみである。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種の分布は、宮古島ののみであり、近縁のオキナワギセルやスジイリオキナワギセルの分布は沖縄島に限定される。

生態的特徴 : 比較的自然度の高い石灰岩地の森林環境に見られる。樹幹に付着する樹上性種である。卵胎生。

生息地の条件 : 人為的な改変行為がなされない良好な森林環境の維持が必要。

個体数の動向 : 開発など人為的な改変行為などに伴う生息環境の悪化と並行して減少傾向にある。最近では、僅かな生息環境の人為的な改変行為により生息個体数も著しく減少しており、本種個体群の存続の危機的な状況にある。

現在の生息状況 : 上比屋森や野原岳の比較的広い範囲にも死殻の記録が見られる。かつては、宮古島内に広く生息していたと考えられるが、現在は野原岳の限られた範囲に生息するのみの種となっており、危機的な状況である。さらに最近の公園整備により、その僅かな範囲の生息環境さえも著しく狭められ悪化している。

学術的意義・評価 : オキナワギセル群の分化過程や生物地理を考察する上できわめて重要な種である。

生存に対する脅威 : 限られた生息地ののみとなっており、その地も公園整備に伴い深刻な影響を受けている。

特 記 事 項 : 雄性器官の内部構造は、オキナワギセルやスジイリオキナワギセルとの明瞭な相違が認められず、近縁性を示した。原記載ではオキナワギセルの「var.」(変種、現在の亜種に相当)とされたが、ここでは明瞭な殻の形態差により別種とする。最近では、僅かな生息地の人為的な改変行為により本種は危機的な状況にある。この事態改善と種の保護のため、早急に対策の検討と実施が必要である。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。

原 記 載 : Pilsbry, H.A., 1901. The land mollusks of the Loo Choo Islands: Clausiliidae. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 409-424, pls 32-33. (p. 411, as *Clausilia (Stereophaedusa) valida* var. *striatella*. Type loc.: “Loo Choo”)

参 考 文 献 : 知念盛俊, 1976. 陸産貝類. “生態写真集 沖縄の生物”, 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212-243.

Chinen, M., 1976. Land shells of Miyako-jima and adjacent islands. Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 2: 89-94.

久保弘文, 2016. 宮古諸島における陸産貝類相の現状と課題. 日本貝類学会平成28年度大会 (習志野) 研究発表要旨集, 日本貝類学会, 東京, 23.

湊 宏, 1988. 日本陸産貝類総目録. 日本陸産貝類総目録刊行会, 白浜, x+294 pp.
 湊 宏, 1980. 宮古群島の陸産貝類相. Venus, 39(2): 83-99.
 大原健司, 1994. 宮古諸島の陸産貝類相. かいなかま, 28(3): 1-7.

執筆 者 名 : 早瀬善正

和 名 : **ダイトウノミギセル**
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
 学 名 : *Zaptyx daitojimana* Kuroda, 1960
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

図 の 解 説 : p. 40. 北大東島. 撮影: 増田 修 (生体; 1995年), 久保弘文 (標本).
 形 態 : 殻長 9.0 mm、殻径 2.2 mm、膨らみの弱い紡錘形。殻は半透明でやや薄く、茶褐色で光沢がある。殻表には弱い成長脈を持ち、殻口手前ではやや強く密になる。殻口はよく肥厚するが、体層から離れて突出はしない。上板は薄く小さいが明瞭で、下軸板とともに唇縁に出る。下板は殻口からは見えにくい。主襞は短く、体層の 1/3 ほどで、腹面右側に 2 個の縫合襞をもつ。主襞はごく短く、それに接する月状襞は「ノ」字形となり、軸唇上端付近に向かって伸びる。

近似種との区別 : 沖縄島などに分布するノミギセルとは、やや太短く薄質で、殻口が体層から離れないことで区別される。

分布の概要 : 南大東島・北大東島の固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種を含むノミギセル種群としては、大東諸島のほか、沖永良部島から沖縄島周辺にかけて分布しており、幾つかの学名も与えられている。

生態的特徴 : 幕下やドリーネ等の、比較的自然度が高く湿度の高い森林に棲息する。地上棲。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 2000 年代中頃までは多数の個体が棲息していたが、2015・2016 年の調査ではやや新しい死殻は無数に見られたものの、生貝を全く確認できなかった。既に絶滅している可能性も否定できない。

現在の生息状況 : 南大東島では元々産地・個体数ともに限られていたが、調査では古い死殻が少数採集されたのみであった。北大東島では多産地であった長幕でも大量の死殻を残して姿を消している。死殻は崖下の最後まで水分が残るような場所に集中しており、近年の過剰乾燥から逃れるために湿度を求めて集まり、最終的に耐えきれず死滅した可能性がある。また、確認された死殻のほとんどが成貝であり、幼貝の殻は極めて少ないのも特徴である。

学術的意義・評価 : 広義のノミギセル種群から派生した大東諸島固有種であり、系統分類・生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 産地が局限された最大の要因はヒトの入植に伴う開墾であると考えられる。近年では温暖化と過剰乾燥による棲息環境の悪化に加え、ニューギニアヤリガタリクウズムシヤツヤオオズアリなどの強力な捕食者の侵入によって、絶滅寸前にまで減少していることは間違いない。速やかに対策がとられなければ、数年以内に絶滅する可能性が高い。

原 記 載 : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106 pp., 3pls. (pp. 77-78, as *Zaptyx daitojimana*. Type loc.: “北大東島”)

参 考 文 献 : 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック ーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.

黒住耐二, 1992. 北大東島の陸産貝類. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第31集 ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 73-90.

増田 修・宇野 明・中原ゆうじ, 2015. 沖縄県大東諸島の陸産貝類の現状. かいなかま, 49(2): 21-44.

湊 宏, 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究. Venus, suppl. 2: 1-212, tables 5, pls. 74.

執筆 者 名 : 亀田勇一

和 名 : **カズマキノミギセル**
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
 学 名 : *Zaptyx dolichoptyx* (Pilsbry, 1908)
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図 の 解 説 : p. 40. 1: カズマキノミギセル 国頭村宜名真 (1b: 腔襞, 1d: 殻(SEM)). 2 (参考): ノミギセルの腔襞. 撮影: 久保弘文.

形 態 : 殻は殻長 12.5 mm、殻径 3 mm、細長い棍棒状。殻表は栗褐色で光沢があり、不規則な成長脈をもつ。殻口は肥厚反転するが比較的小さく、上板も小さく不明瞭。下板は殻口からほとんど見えず、下軸板も唇縁に出ない。主襞は短く、体層の 1/4 程度。上腔襞は非常に長い。月状襞は「ノ」字型で、上腔襞の始端付近に接する。腹面右側に 2 個の縫合襞をもつ。

近似種との区別 : 分布の重なる同属のノミギセルとは、上腔襞が長いことで区別される。

〈貝類〉

- 分布の概要： 辺戸石山等、沖縄島北部の石灰岩地で確認されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 同属のノミギセルが沖縄島周辺に分布している。ノミギセルは種群と呼べるほどに大きな遺伝的分化を生じており、本種もそのなかに含まれる可能性もある。
- 生態的特徴： やや自然度の高い森林の石灰岩礫下に生息する地上性種である。
- 生息地の条件： 不明。石灰岩の崖下に多数の死殻が堆積していることがあるが、そのような場所では生貝は極めて少ない。
- 個体数の動向： 分布域が極めて狭く、周辺の観光開発等で減少している可能性があるが、実態の把握は困難。本種の記録の中には誤同定されたノミギセルが混じっていることがあり、実際の確認事例はもっと少ない可能性もある。
- 現在の生息状況： 同上。近年の確認は極めて稀である。
- 学術的意義・評価： 沖縄島北部の石灰岩地では、本種に殻の形がよく似た細長いノミギセル個体群も確認されており、これらとの関係や本種の起源についても解明が望まれる。
- 生存に対する脅威： 石灰岩地の自然林に棲息するため、周囲の開削や観光開発等が悪影響を与えると考えられる。しかし、人の手も入っておらず、一見環境の変化も少なそうな森林においても陸産貝類の総数自体が減少傾向にあり、温暖化やそれに伴う乾燥化、降水パターンの変化、強い台風の増加といった環境変化が棲息に影響を及ぼしている可能性が高い。
- 原 記 載： Pilsbry, H. A., 1908. New Clausiliidae of the Japanese Empire—XI. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 59: 499-513, pls.32-34. (p.507, pl.34, figs.30-33, as *Clausilia (Zaptyx) dolichoptyx*. Type loc.: “Heda [sic], Kunchan, Ryukyu”)
- 参 考 文 献： 知念盛俊, 1976. 陸産貝類. “生態写真集 沖縄の生物”, 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212-243.
- Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
- 知念盛俊・治井正一・儀間一恵, 1995. 大宜味村の陸・淡水棲貝類. “大宜味村の自然, 大宜味村動植物調査報告書, 大宜味村文化財調査報告書, (4)”, 大宜味村教育委員会 (編), 大宜味村教育委員会, 大宜味, 295-327.
- 湊 宏, 1980. 日本産陸産貝類の生殖器の研究—XIV. キセルガイ科 (3) 琉球列島の4種. Venus, 39 (1): 56-62.
- 下謝名松栄, 1979. 沖縄島および周辺離島における洞窟動物. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第16集 沖縄県洞穴実態調査報告 II”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 97-153.
- 執 筆 者 名： 亀田勇一

- 和 名： コメツブダワラ
- 分 類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ネジレガイ上科 タワラガイ科
- 学 名： *Sinoennea denscostata* (Böttger, 1892)
- カ テ ゴ リ ー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 II 類 (VU)
- 形 態： 貝殻は日本産タワラガイ類中最大で、殻長約7mmに達する。寸胴な俵形で、殻頂部はやや平巻き状。殻質は一見堅固だが、脆く、超音波洗浄にかけるとバラバラに壊れてしまう。殻口は複雑な歯状突起が発達し、殻内にも襞を有する。殻表には繊細で明瞭な縦肋が等間隔に刻まれる。
- 近似種との区別： 沖縄島に本属は1種のみで、独特の俵形の形状は他の陸産貝類とは明瞭に異なる。
- 分布の概要： 本種は、沖縄島中部以北の石灰岩地に点在して分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 宮古島にはミヤコダワラが、与那国島にはヨナグニダワラ、西表島にタワラガイの一種が分布する。
- 生態的特徴： 乾燥期には赤土混じりの石灰岩下や礫間に半ば埋込して確認され、雨後でも石灰岩上を這い回らず、隠蔽生活をおくっている。肉食性で、ノミガイ類の殻口から吻を突っ込んで、軟体全体を消化液で溶解させて貪食する事例を確認した。
- 生息地の条件： 石灰岩地帯に限定され、一見乾燥していても安定した森林環境に囲まれて、石灰岩下が適度な湿気で保たれた環境に限定される。土壌が顆粒状で隙間が比較的空いていたり、地中に石灰岩が完全に埋没していない場所を好む。
- 個体数の動向： 1990年代まで沖縄市やうるま市では少なからず観察されたが、現在、生息確認が困難な状況である。恩納村では極めて狭い範囲に限定され、かつ個体数も非常に少ない。国頭村では局所的に確認可能箇所があるものの、広範囲に公園整備が進行し、生息場所周辺での環境変化の影響が危惧される。
- 現在の生息状況： 同上。
- 学術的意義・評価： 沖縄島中北部の石灰岩地に広く生息していたと推測されるが、現在は数地点の限られた石灰岩地のみで確認される。本種は沖縄島固有の希少種で、生物地理、進化生物学等の学術的価値が極めて高い。
- 生存に対する脅威： 本種の生息場所はジオパークや世界遺産候補地域の中にあつて、自然度の高い森林に裏打ちされた安定した湿度と餌生物(微小陸産貝類)が豊かに保持されている局所的な場所に限定され、例えば、直接的な場の改変でなくとも、その周辺における林道、遊歩道、公園整備等の開発が不可逆的に個体群消滅をもたらすことが危惧される。こうした移動性に乏しく、生息環境のデリケートな種の保全については、一切の環境改変を許さない包括的な保護地域の設定が望まれる。

- 原 記 載 : Böttger, O., 1892. Die Meeresmollusken der mittleren Liukiu-Inseln. Nachrichtenblatt der Deutschen Malakozoologischen Gesellschaft, 24(9/10): 153–168. (pp. 159–160, as *Ennea (Microstrophia) densecostata*. Type loc.: “Kimmura auf Okinawa, Mittlere Liukiu-Inseln”)
- 参 考 文 献 : Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127–149.
- 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
- 久保弘文, 2017. 第4節 陸産貝類. “名護市史「自然と人」”, 名護市教育委員会市史編纂室 (編), 名護市教育委員会, 名護, 印刷中.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
- 黒住耐二, 2005. コメツブダワラ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 373.
- 湊 宏, 2014. コメツブダワラガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 347.

執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : ミヤコダワラ
- 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ネジレガイ上科 タワラガイ科
- 学 名 : *Sinoennea miyakojimana* (Pilsbry & Hirase, 1904)
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)
- 図 の 解 説 : p. 40. 1 (参考): タワラガイ属の一種 西表島 (上島原図複写). 2: ミヤコダワラ. 宮古島野原岳. 撮影: 久保弘文.
- 形 態 : 貝殻は本属中、大型の部類に属し、殻長約 5 mm に達する。寸胴な俵形で、殻頂部はやや円錐状に高まる。殻質は若いうちは透明感があり、老成すると白濁するが、いずれも脆い。殻口は複雑な歯状突起が発達し、殻内にも襞を有する。殻表には繊細で明瞭な縦肋が等間隔に刻まれる。軟体部は白い。
- 近似種との区別 : 宮古島に本属は 1 種のみで、独特の俵形の形状は他の陸産貝類とは明瞭に異なる。
- 分布の概要 : 宮古島の、森林が残っている数地点にのみ分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島にはコメツブダワラが、与那国島にはヨナグニダワラ、西表島にタワラガイの一種が分布する。
- 生態的特徴 : 乾燥期には赤土混じりの石灰岩下や隙間にはまり込んでいる状況が観察され、雨後でも石灰岩上を這い回らず、隠蔽生活をおくっている。肉食性でノミガイ類の殻口から物を突っ込んで食する事例が観察された。
- 生息地の条件 : 安定した森林環境に囲まれて、石灰岩下が適度な湿度が保たれ、土壌が顆粒状で隙間が比較的空いており、地中に石灰岩が完全に埋没していない環境に限定される。
- 個体数の動向 : 宮古島では野原岳以外では極めて少なく、かつ狭い範囲に留まる。野原岳でも確実に観察できる場所は 2013～2014 年の調査では 3 地点のみで、いずれも 50 m² 程度の狭い範囲に限られている。
- 現在の生息状況 : 2013 年以降の宮古諸島 103 箇所での定性調査で、本種が見つかったのは 12 箇所であった。なお、伊良部島、池間島では見つかっていない。
- 学術的意義・評価 : 本種は宮古島固有の希少種で、形態がヨナグニダワラや西表島のタワラガイの一種に近いこと、八重山との類縁関係や生物地理、進化生物学等の学術的価値が極めて高い。
- 生存に対する脅威 : 本種の生息場所は自然度の高い安定した湿度と餌生物 (微小陸産貝類) が保持されている局所的な森林に限定され、例え、直接的な場の改変でなくとも、その周辺における遊歩道、基地、公園整備等の開発が不可逆的に個体群消滅をもたらすことが危惧される。こうした移動性に乏しく、生息環境のデリケートな種の保全については、一切の環境改変を許さない包括的な保護地域の設定が望まれる。
- 特 記 事 項 : 宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。
- 原 記 載 : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1904. Descriptions of new land snails of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 56: 616–638. (p. 630, as *Ennea iwakawa miyakojimana*. Type loc.: “Miyakojima, Riukiu”)
- 参 考 文 献 : 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, xvi+343 pp., 80 pls.
- Chinen, M., 1976. Land shells of Miyako-jima and adjacent islands. Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 2: 89–94.
- 久保弘文, 2017. 陸産貝類. “宮古島市史 自然編”, 宮古島市教育委員会 (編), 宮古島市教育委員会, 宮古島, 印刷中.
- 黒住耐二, 2005. ミヤコダワラ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 373-374.
- 湊 宏, 2014. ミヤコダワラガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 348.
- 大原健司, 1994. 宮古諸島の陸産貝類相. かいなかま, 28(3): 1-7.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : タワラガイ属の一種
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ネジレガイ上科 タワラガイ科

学名 : *Sinoennea* sp.
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 40. 1 : タワラガイ属の一種 西表島 (上島原図複写). 2 (参考) : ミヤコダワラ. 宮古島野原岳. 撮影 : 久保弘文.

形態 : 貝殻は微小で殻長約 3 mm、螺塔は高く円筒型。最終 3 層はほぼ円筒型であるが、殻頂は尖らない。殻は白色で、殻表には強い縦肋が密に分布する。殻口は楕円形で、殻口縁は広がって厚くなり、殻口内には 3 つの強い歯があり殻口は狭まる。

近似種との区別 : ヨナグニダワラとは殻頂が丸いことで異なり、ミヤコダワラ (fig. YYY. B) よりはやや小型である。

分布の概要 : 西表島のみから知られる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 宮古島にミヤコダワラが、与那国島にヨナグニダワラが分布する。

生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 1980 年代に数個体が採集されたが、その後再発見されていない。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 八重山諸島のタワラガイ類は地域ごとに固有種になっており、生物地理学的に重要。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項 : 未記載種の可能性があり、再発見が望まれる。

執筆者名 : 上島 励

和名 : イトカケマイマイ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 イトカケマイマイ上科 イトカケマイマイ科

学名 : *Plectopylis (Sinicola) hirasei* Pilsbry, 1904
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説 : p. 40. 宮古島野原岳. 撮影 : 久保弘文.

形態 : 貝殻は小型 (殻径約 6 mm) で、殻長は短く (約 3 mm)、円盤形で、螺塔は僅かに高まり、螺層数は多い。臍孔はやや狭く、殻径の 1/3 程度。やや薄質。殻表には厚い濁褐色の殻皮を持ち、規則的に殻皮が突出し、周縁部では毛状となる。殻口は肥厚・反転し、内唇部に明瞭で厚い半月状の隔板を持つ。殻口内部の体層内壁には数個の腔壁を持つ。

近似の種と区別 : 本種は、小型で、臍孔が狭く、殻口の肥厚が弱いことで、中国南部から知られる同属の種と区別できる。中国貴州省の *P. diptychia* (Möllendorff, 1895) とは、本種では突出する殻皮が細かく、内唇部の隔板が厚いことで、また台湾のタイワンイトカケマイマイ *P. ishizakii* (Kuroda, 1941) と同、内唇部の隔板が厚く明瞭であることで区別できる。

分布の概要 : 宮古島と伊良部島にのみ分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種は宮古島と伊良部島にのみ分布し、同属の種は、台湾および中国南部に分布する。

生態的特徴 : 湿度の高い森林の落葉下に生息する地上性種である。

生息地の条件 : 湿性の森林が保たれていること。

個体数の動向 : 20 世後半には、いくつかの生息確認地点が存在したが、現在では 1 か所のみからしか知られていない。

現在の生息状況 : 現在では、野原岳の一画だけが生息地となっている。

学術的意義・評価 : 台湾や中国南部に同属の種が分布するものの、八重山諸島には本属の種は生息しておらず、分断された分布を示す。

生存に対する脅威 : 森林伐採や農薬の散布。

特記事項 : 近年、石垣島の約 2 万年前の堆積物から、本種の化石が発見され、更新世末から完新世にかけての八重山諸島の環境変遷を示す好材料と考えられる。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。

原記載 : Pilsbry, H.A., 1904. *Plectopylis* in the Riukiu Islands. The Nautilus, 18: 58-59. (pp. 58-59, as *Plectopylis (Sinicola) hirasei*. Type loc.: "Miyakojima, Riukiu")

参考文献 : Chinen, M., 1976. Land shells of Miyako-jima and adjacent islands. Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 2: 89-94.

知念盛俊・治井正一・儀間一恵, 1996. 陸・淡水産貝類 “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 447-456.

湊 宏, 1980. 宮古島の陸産貝類相. Venus, 39(2): 83-99.

大原健司, 1994. 宮古諸島の陸産貝類相. かいなかま, 28(3): 1-7.

執筆者名： 黒住耐二

和名： リュウキュウウラジロヒメベッコウ (新称)
 分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Chalepotaxis kenjii* Azuma, 2007

カテゴリー：

絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 40. 沖永良部島 (千葉県立中央博物館 CBZM). 撮影：黒住耐二.

形態： 貝殻はこの科としては中型 (殻径約 6 mm) で殻長はやや長く (約 4 mm)、卵形で、螺塔はやや高く、螺層数も多い。最終層は急激に広くならない。螺塔は僅かに突出し、その膨らみは弱い。体層周縁には角を持たない。殻表はほぼ平滑で、周縁に 1 本の細い褐色帯を持ち、他は白色半透明。臍孔は狭いが明らかに開く。殻口縁は肥厚・反転しない。

近似種との区別： 台湾に分布するウラジロヒメベッコウ *C. spadix* とオビウラジロヒメベッコウ *C. cincta* と比較して、本種は臍孔が狭いことによって識別できる。

分布の概要： 沖縄県では死殻ではあるが比較的新鮮な個体が辺戸石山から確認されており、タイプ標本は与論島の約 4500 年前の化石である。近年、沖永良部島からも極めて新鮮な死殻が確認されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 近縁種のウラジロヒメベッコウとオビウラジロヒメベッコウは台湾南部の高雄周辺からのみ報告されている。

生態的特徴： 近縁種を含め、その生態は報告されていない。

生息地の条件： 石灰岩地に生息するものと考えられる。

個体数の動向： 個体群密度は極めて低い。

現在の生息状況： 詳細は不明だが、極めて危機的な状況にあると考えられる。

学術的意義・評価： 本属で最北端に分布する種である。

生存に対する脅威： 生息地である石灰岩地の森林伐採を含む開発。

特記事項： 沖縄県では生貝は未確認であるが、沖永良部島では極めて新鮮な死殻がごく最近に確認されているので、沖縄県でも絶滅とは判断できないものとした。

原記載： Azuma, Y., 2007. Three new species of fossil terrestrial Mollusca from fissure deposits within the Ryukyu Limestone in Okinawa and Yoron islands, Japan. *Paleontological Research*, 11(3): 231-249. (pp. 241-243, fig. 10-1-6, as *Chalepotaxis kenjii*. Type loc.: "Nishiku, Yoron-cho, Yoron island, Kagoshima Prefecture")

参考文献： 知念盛俊, 1989. 沖縄島北部の陸産貝類・淡水産貝類. "昭和62年度沖縄島北部地域調査報告書. 南西諸島における野生生物種の保存に不可欠な諸条件に関する研究", 環境庁自然保護局 (編), 環境庁自然保護局, 東京, 433-451.

波部忠重, 1943. 日本産ベツカフマイマイ科の再検討 (1). *Venus*, 13(1-4): 92-96.

波部忠重, 1945. 日本産ベツカフマイマイ科の再検討 (2). *Venus*, 14(1-4): 22-29.

Pilsbry, H.A., 1901. New Mollusca from Japan, the Loo Choo Islands, Formosa and the Philippines.

Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 193-210.

執筆者名： 黒住耐二

和名： クメジマベッコウ

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Nipponochlamys kumeensis* (Pilsbry & Hirase, 1905)

カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説： p. 40. 撮影：上島励.

形態： 貝殻は小さく (殻径約 5 mm)、螺塔は低い。螺層はやや密に巻き、体層周縁は丸い。殻口は三日月形で、殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。殻は褐色で、殻表には細かい成長線が密にあり、曇った外観を呈する。臍孔はほぼ閉じる。

近似種との区別： 琉球列島産のキヌツヤベッコウ属は長らくトクノシマベッコウ 1 種とされていたが、多数の隠蔽種が存在することが判明した。本種を含むこれらの近似種はいずれも生殖器の形態で区別できるが、外見での区別は一部の種の組み合わせを除いて極めて困難である。

分布の概要： 久米島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： *N. spp. 1-2* が沖縄島、*N. spp. 3-5* は伊平屋島、*N. sp. 6* が石垣島、ヨナグニベッコウは与那国島に分布する。

生態的特徴： 自然林の湿った落葉下、倒木や石の裏に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 過去の記録はないが、本種の至適な生息環境は減少、悪化しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況： 生息地は少なく、いずれの場所でも個体数は少ない。

学術的意義・評価： キヌツヤベッコウ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要なグループである。

生存に対する脅威 : いずれの種も狭い地域の固有種であり、保全の重要性は高い。
特記事項 : 森林の伐採および林床の乾燥化。
原記載 : 本種はながらくトクノシマベッコウのシノニムとされてきたが、独立種である。
参考文献 : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1905. New land mollusks of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 57: 705-719. (p. 714, as *Macrochlamys kumeensis*. Type loc.: "Kumejima, Ryukyu")
参考文献 : 平瀬与一郎, 1908. 日本陸産貝類図説備考 (六). 介類雑誌, 2(12): 406-409, p1. 22.
執筆者名 : 上島 励

和名 : キヌツヤベッコウ属の一種 (2)
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
学名 : *Nipponochlamys* sp. 2
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 40. 撮影 : 上島励。
形態 : 貝殻は小さく (殻径約 5 mm)、螺塔は低い。螺層はやや密に巻き、体層周縁は丸い。殻口は三日月形で、殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。殻は褐色で、殻表には細かい成長線が密にあり、曇った外観を呈する。臍孔はほぼ閉じる。

近似種との区別 : 琉球列島産のキヌツヤベッコウ属は長らくトクノシマベッコウ 1 種とされていたが、多数の隠蔽種が存在することが判明した。本種を含むこれらの近似種はいずれも生殖器の形態で区別できるが、外見での区別は一部の種の組み合わせを除いて極めて困難である。

分布の概要 : 沖縄島北部にのみ生息する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : クメジマベッコウは久米島、ヨナグニベッコウは与那国島、*N. sp. 1* が沖縄島、*N. spp. 3-5* は伊平屋島、*N. sp. 6* が石垣島に分布する。

生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下、倒木や石の下に生息する。
生息地の条件 : 同上。
個体数の動向 : 過去の記録はないが、本種の至適な生息環境は減少、悪化しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況 : 本種の至適な生息環境は減少、悪化している。同所的に生息する *N. sp. 1* よりも分布域が狭く、湿った環境を好むので、より脆弱と思われる。

学術的意義・評価 : キヌツヤベッコウ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要なグループである。いずれの種も狭い地域の固有種であり、保全の重要性は高い。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。
特記事項 : 未記載種。
執筆者名 : 上島 励

和名 : キヌツヤベッコウ属の一種 (3)
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
学名 : *Nipponochlamys* sp. 3
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 40. 撮影 : 上島励。
形態 : 貝殻は小さく (殻径約 5 mm)、螺塔は低い。螺層はやや密に巻き、体層周縁は丸い。殻口は三日月形で、殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。殻は褐色で、殻表には細かい成長線が密にあり、曇った外観を呈する。臍孔はほぼ閉じる。

近似種との区別 : 琉球列島産のキヌツヤベッコウ属は長らくトクノシマベッコウ 1 種とされていたが、多数の隠蔽種が存在することが判明した。本種を含むこれらの近似種はいずれも生殖器の形態で区別できるが、外見での区別は一部の種の組み合わせを除いて極めて困難である。伊平屋島に生息する他の 2 種とは外見からは識別できない。

分布の概要 : 伊平屋島にのみ生息する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 伊平屋島には本種の他に *N. sp. 4* および *N. sp. 5* が分布し、クメジマベッコウは久米島、ヨナグニベッコウは与那国島、*N. sp. 1* および *N. sp. 2* が沖縄島、*N. sp. 6* が石垣島に分布する。

生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下に生息する。
生息地の条件 : 同上。
個体数の動向 : 過去の記録はないが、本種に至適な生息環境は減少、悪化しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況 : 伊平屋島内の 3 地点でのみ生息が確認されている。島内でも生息地は少なく、周辺の開発によって林床の乾燥化が進むと絶滅する危険が高い。

学術的意義・評価 : キヌツヤベッコウ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要なグループである。いずれの種も狭い地域の固有種であり、保全の重要性は高い。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項 : 未記載種で伊平屋島の固有種。

執筆者名 : 上島 励

和名 : キヌツヤベッコウ属の一種 (4)

分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名 : *Nipponochlamys* sp. 4

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 40. 撮影 : 上島励。

形態 : 貝殻は小さく (殻径約 5 mm)、螺塔は低い。螺層はやや密に巻き、体層周縁は丸い。殻口は三日月形で、殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。殻は褐色で、殻表には細かい成長線が密にあり、曇った外観を呈する。臍孔はほぼ閉じる。

近似種との区別 : 琉球列島産のキヌツヤベッコウ属は長らくトクノシマベッコウ 1 種とされていたが、多数の隠蔽種が存在することが判明した。本種を含むこれらの近似種はいずれも生殖器の形態で区別できるが、外見での区別は一部の種の組み合わせを除いて極めて困難である。

分布の概要 : 伊平屋島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 伊平屋島には本種の他に *N. sp. 3* および *N. sp. 5* が分布し、クメジマベッコウは久米島、ヨナグニベッコウは与那国島、*N. sp. 1* および *N. sp. 2* が沖縄島、*N. sp. 6* が石垣島に分布する。

生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 過去の記録はないが、本種に至適な生息環境は減少、悪化しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況 : 伊平屋島内の 2 地点でのみ生息が確認されている。島内でも生息地は少なく、周辺の開発によって林床の乾燥化が進むと絶滅する危険が高い。

学術的意義・評価 : キヌツヤベッコウ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要なグループである。いずれの種も狭い地域の固有種であり、保全の重要性は高い。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項 : 未記載種で伊平屋島の固有種。

執筆者名 : 上島 励

和名 : キヌツヤベッコウ属の一種 (5)

分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名 : *Nipponochlamys* sp. 5

カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 41. 撮影 : 上島励。

形態 : 貝殻は小さく (殻径約 5 mm)、螺塔は低い。螺層はやや密に巻き、体層周縁は丸い。殻口は三日月形で、殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。殻は褐色で、殻表には細かい成長線が密にあり、曇った外観を呈する。臍孔はほぼ閉じる。

近似種との区別 : 琉球列島産のキヌツヤベッコウ属は長らくトクノシマベッコウ 1 種とされていたが、多数の隠蔽種が存在することが判明した。本種を含むこれらの近似種はいずれも生殖器の形態で区別できるが、外見での区別は一部の種の組み合わせを除いて極めて困難である。

分布の概要 : 伊平屋島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 伊平屋島には本種の他に *N. sp. 3* および *N. sp. 4* が分布し、クメジマベッコウは久米島、ヨナグニベッコウは与那国島、*N. sp. 1* および *N. sp. 2* が沖縄島、*N. sp. 6* が石垣島に分布する。

生態的特徴 : 広葉樹林の落葉下に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 過去のデータがないため、不明。分布域がきわめて狭い上、個体数も少ない。

現在の生息状況 : 伊平屋島北部の 1 地点のみで生息が確認されている。この生息地は林床がやや乾燥しており周囲の環境が変わると絶滅する危険が極めて高い。

学術的意義・評価 : キヌツヤベッコウ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要なグループである。いずれの種も狭い地域の固有種であり、保全の重要性は高い。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項 : 未記載種で伊平屋島の固有種。琉球列島に生息する陸産貝類で最も分布域が狭い種のひとつで、絶

滅する危険がきわめて高い。

執筆者名： 上島 励

和名： カサシタラ

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Sitalina hirasei* (Pilsbry in Pilsbry & Hirase, 1905)

カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 41. 名護市穴窪川上流. A: 貝殻. B: 原殻拡大. 撮影: 久保弘文.

形態： 貝殻は微小で、殻径約 4 mm、螺塔は高く（殻長約 3 mm）、円錐形で、体層周縁は強く角張る。臍孔は閉じる。殻は薄質で淡褐色、殻表には微細な螺状彫刻がある。

近似種との区別： マルシタラに似るが、螺層周縁は強く角張り、円錐形であること、殻表の彫刻が布目状にならないことで区別できる。

分布の概要： 台湾の固有種とされていたが、沖縄島からも発見された。沖縄島では生息地は南部の 1 箇所、北部の 2 箇所のみが確認されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 近縁と思われるカドシタラは台湾に分布する。

生態的特徴： 樹上性で、葉の裏に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 沖縄島南部の生息地ではかつて多産したが、最近の調査では再発見されなかった。人家近くの開けた森林にも生息するが、このような環境は開発等で消失することが多く脆弱性が高い。同島北部の 1 産地では死殻が 1 個体得られたのみである。

現在の生息状況： 同上。

学術的意義・評価： 台湾と沖縄島にのみ分布し、生物地理学的に興味深い。沖縄島南部では激減しており、早急に保全すべき種である。

生存に対する脅威： 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項： 日本新記録種。

原記載： Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1905. Catalogue of the land and fresh-water Mollusca of Taiwan (Formosa), with descriptions of new species. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 57: 720-752. (pp. 744-745, as *Sitalina hirasei* Pilsbry. Type loc.: "Sammaipo, Taiwan")

参考文献： 平瀬与一郎, 1908. 日本陸産貝類図説 (十五). 介類雑誌. 2(9): 288-292, pl. 20.

謝伯娟・黃重期・吳書平合, 2013. 台湾蝸牛圖鑑 3rd. ed., 臺行政院農業委員會林務局, 台北, 381 pp.

執筆者名： 上島 励

和名： オオカサネシタラ

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Sitalina* sp.

カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説： p. 41. 撮影: 上島励.

形態： 貝殻は微小で殻長約 2 mm、円錐形で縁は強く角張り、大型の個体では次体層の周縁角が殻口の縫合を超えて突出する。殻は薄質で壊れやすく、表面には細かい螺状彫刻がある。

近似種との区別： カサネシタラに誤同定されていたが、より大型で生殖器の形態も異なる。

分布の概要： 与那国島の固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 近縁と思われるカサネシタラは本州に分布し、カドシタラは台湾に生息する。

生態的特徴： 自然林の落葉下に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 森林の乾燥化により減少している。

現在の生息状況： 与那国島内でも生息地はきわめて少ない。

学術的意義・評価： 与那国島の固有種であり、保全の優先度は高い。

生存に対する脅威： 森林の伐採、林床の乾燥化。

特記事項： 湊 (1976) でカサネシタラに同定されたが、未記載種である。

参考文献： 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第 2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.

湊 宏, 1976. 与那国島の陸産貝類相. Venus, 35(4): 163-184.

上島 励, 2014. オオカサネシタラ (新称). "レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 163.

執筆者名： 上島 励

和名 : **グードベッコウ近似種**
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
 学名 : *Takemasaia* aff. *gudei* (Pilsbry, 1901)
 カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ : 該当なし

近似種との区別 : グードベッコウに酷似するが、別種 (固有種) と思われる。
 分布の概要 : 尖閣諸島にのみ生息する。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : グードベッコウは奄美大島から沖縄島にかけて分布する。八重山諸島に近似種はいない。
 生態的特徴 : 自然林の落葉下に生息する。
 生息地の条件 : 同上。
 個体数の動向 : 現地調査が長らく行われていないが、野生化したヤギによる自然植生の破壊が進行しており、個体数は減少していると思われる。
 現在の生息状況 : 1980年代に生息が確認された。現地調査が長らく行われていないため、現在の生息状況は不明である。野生化したヤギの食害による生息環境の悪化が懸念される。
 学術的意義・評価 : 尖閣諸島の固有種であり、ヤギの食害による影響が懸念されるため、保全の重要性は極めて高い。
 生存に対する脅威 : 野生化したヤギの食害による自然植生の破壊、林床の乾燥化、土壌流出による生息地の消失。
 参考文献 : 横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5: 1-12.
 執筆者名 : 上島 励

和名 : **ヘリトリケマイマイ**
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
 学名 : *Aegista marginata* (Pilsbry & Hirase, 1903)
 カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態 : 貝殻は辺戸岬では小型 (殻径約 17 mm) になり、辺戸石山周辺では中型 (殻径約 25 mm)。殻の輪郭はソロバン玉形、螺層はやや膨らみ、厚質。体層周縁の角は明瞭で竜骨状に突出する。殻皮は淡黄褐色で、殻表に明瞭な殻皮の鱗片状突起を持たない。殻口は肥厚し、反転する。臍孔はやや狭く、その縁は角立たない。
 近似種との区別 : 本種は周縁角が竜骨状になり、殻表に明瞭な鱗片状殻皮を持たないことで、琉球列島の同属の種から識別できる。
 分布の概要 : 沖縄島北部の石灰岩地である辺戸石山・辺戸岬周辺に分布する。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 奄美諸島にはマルテンスオオベソマイマイとその亜種やオオシマフリーデルマイマイ、マメヒロベソマイマイが分布する。沖縄諸島には、トウガタホソマイマイ、ウロコケマイマイ、イトマンマイマイが分布するが、沖縄島北部の石灰岩地で同所的に生息することはおそらくない。この他台湾にも近縁種が分布する。
 生態的特徴 : 石灰岩が発達した森林や藪内において、石灰岩表面やくぼみ、落葉中に生息する。殻口が反転し外唇が比較的発達した個体でも性成熟を十分にしていない場合がある。
 生息地の条件 : 同上。石灰岩が生息地に必要。
 個体数の動向 : 辺戸石山山麓部では、2000年代前半と比べても減少が著しく、確認できる個体数は1/5以下になったと考えられる。大石林山では観光開発により、石灰岩を削った部分では著しく減少した。かつて本部半島で確認された産地で今は確認することができない。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 本種を含めた近縁種群は互いに表現型の差が著しく、近縁種間の表現型多様化を研究する上で良いモデルである。加えて本種を含めた近縁種群は一部の台湾の種と単系統となるが、八重山諸島には近縁種は見られない (Hirano *et al.*, 準備中)。このように中琉球の系統は遺存的であると考えられ、また本種は沖縄島北部のみで現生種が見つかることから、進化生物学的に保全すべき価値が高い。
 生存に対する脅威 : 生息地から考慮して比較的乾燥に強い種類と考えられるが、石灰岩の存在に依存していると考えられる。そのため石灰岩の採掘は個体群に直接的なダメージを与える可能性が高い。生息域のうち大石林山は管理された環境であることから本種の生存に与える脅威は他地域に比べて低いかもしれないが、目立つ種のためマニアによる採集圧も脅威となりうる。
 特記事項 : うるま市の一部では、本種に類似した種の化石が産出するが (平野・他, 準備中)、現生個体は未確認。
 原記載 : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1903. Notices of new Japanese land shells. The Nautilus, 17: 44-46. (pp. 44-45, as *Eulota (Plectotropis) marginata*. Type loc.: "Kunchan, the northern province of Riuki Island")
 参考文献 : Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
 知念盛俊, 1989. 沖縄島北部の陸産貝類・淡水産貝類. "昭和62年度沖縄島北部地域調査報告書, 南

西諸島における野生生物種の保存に不可欠な諸条件に関する研究”，環境庁自然保護局（編），環境庁自然保護局，東京，433-451。
 知念盛俊・治井正一・儀間一恵，1996. 陸・淡水産貝類，“沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータおきなわ”，沖縄県環境保健部自然保護課（編），沖縄県環境保健部自然保護課，那覇，447-456。
 波部忠重，1955. 日本産陸産貝類の解剖学的研究（3）. *Venus*, 18: 221-234.
 Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171-181.
 湊 宏，1979. 沖縄本島産ケマイマイ亜属3種の生殖器知見. *南紀生物*, 21: 19-21.

執筆者名：平野尚浩・黒住耐二* *前回改訂版（2005）における黒住による記載内容を一部引用した。

和名：イトマンマイマイ
 分類：腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
 学名：*Aegista scepasma* (Reeve, 1854)
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN） 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

形態：殻径 22 mm 内外で、ソロバン玉形、螺塔は低く、螺層はやや膨らむ。体層周縁の角は明瞭だが竜骨状に突出しない。殻皮は濃褐色で、細かい鱗片状突起を持つ。殻口は肥厚し、反転する。臍孔はやや狭い。

近似種との区別：本種は中型で周縁角が明瞭なこと、殻表に鱗片状突起を密に持つことで、琉球列島の同属の種から識別できる。

分布の概要：沖縄島や伊平屋島など、沖縄諸島の島嶼に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：奄美諸島にはマルテンスオオベソマイマイとその亜種トクノシマオオベソマイマイやオオシマフリーデルマイマイ、マメヒロベソマイマイが分布する。沖縄諸島には、トウガタホソマイマイ、ウロコケマイマイの他、最も近縁な種で鱗片状突起を持たないヘリトリケマイマイは沖縄島北部の石灰岩地にのみ分布し、本種と同所的に生息することはおそらくない。この他台湾にも近縁種が分布する。

生態的特徴：林床の倒木下や落葉下、石灰岩などの岩の表面やくぼみに生息する。

生息地の条件：同上。

個体数の動向：2015年に行われた沖縄島北部の調査では減少傾向が確認された。沖縄島南部では、20世紀後半に本種あるいは類似の種が絶滅したと考えられる。

現在の生息状況：同上。

学術的意義・評価：本種を含めた近縁種群は互いに表現型の差が著しく、近縁種間の表現型多様化を研究する上で良いモデルである。加えて本種を含めた近縁種群は一部の台湾の種と単系統となるが、八重山諸島には近縁種は見られない (Hirano *et al.*, 準備中)。このように中琉球の系統は遺存的であると考えられ、また本種は沖縄諸島のみで見つかることから、進化的生物学的に保全すべき価値が高い。

生存に対する脅威：森林の伐採や採石による乾燥化、生息地破壊や、マニアによる収集圧。

特記事項：うるま市や南城市の一部では、本種に類似した種の化石が産出するが（平野・他，準備中）、現生個体は未確認。これらの古い死殻中には、20世紀になって絶滅した個体も含まれている可能性がある。

原記載：Reeve, L.A., 1854. Monograph of the genus *Helix*. *Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals*, 7: pls 1-210. (sp, 1293, pl. 186, fig. 1293, as *Helix scepasma*. Type loc.: “—?”)

参考文献：Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). *Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands*, 3: 127-149.

知念盛俊，1989. 佐敷町産陸棲貝類，“佐敷町史 三 自然”，佐敷町史編集委員会（編），佐敷町役場，佐敷，324-334。

知念盛俊・治井正一，1976. 伊平屋島・伊是名島の陸・淡水貝類（予報）. *沖縄生物教育研究会誌*, (9): 37-43.

波部忠重，1955. 日本産陸産貝類の解剖学的研究（3）. *Venus*, 18: 221-234.

Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171-181.

久保弘文，2017. 第5節 貝類，“名護市史「自然と人」”，名護市教育委員会 市史編纂室（編），名護市教育委員会，名護，印刷中。

上門清春，1991. 古宇利島の倍脚類と陸産貝類について. *沖縄県立博物館総合調査報告書*, (8): 7-14.

執筆者名：平野尚浩・黒住耐二* *前回改訂版（2005）における黒住による記載内容を一部引用した。

和名：タカラホソマイマイ

分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科

学 名 : *Aegista takarai* (Kuroda, 1960)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 : 貝殻は小型で螺塔は高く(殻長約 7.5 mm)、高円錐形、殻頂はやや尖る。螺層は細かく巻き、体層周縁は丸い。殻口は弱く肥厚し、反転する。臍孔は狭く開く。

近似種との区別 : ナガシリマルホソマイマイよりも小型で、トウガタホソマイマイとは体層周縁が丸いことで、他種と区別できる。また、分布域も異なる。

分布の概要 : 尖閣列島の魚釣島にのみ分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ナガシリマルホソマイマイは八重山諸島に分布し、トウガタホソマイマイは沖縄島周辺に分布する。

生態的特徴 : 不明。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 現地調査が長らく行われていないが、野生化したヤギによる自然植生の破壊が進行しており、個体数は減少していると思われる。

現在の生息状況 : 現地調査が長らく行われていないため、現在の生息状況は不明である。野生化したヤギの食害による生息環境の悪化が懸念される。

学術的意義・評価 : 尖閣諸島の固有種であり、ヤギの食害による影響が懸念されるため、保全の重要性は極めて高い。

生存に対する脅威 : 野生化したヤギの食害による自然植生の破壊、林床の乾燥化、土壌流出による生息地の消失。

特記事項 : 最近の生息状況は不明であり、早急な現地調査が必要である。

原 記 載 : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録(頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106 pp., 3 pls. (pp. 81-82, pl. 1, fig. 25, as *Buliminopsis takarai*. Type loc.: “尖閣列島魚釣島”)

参 考 文 献 : 知念盛俊, 1979. 尖閣列島の陸産貝類. 沖縄生物学会誌, (17): 19-27.
黒住耐二, 2005. タカラホソマイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 443.
湊 宏, 2014. タカラホソマイマイ. “レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 367.
横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5: 1-12.

執 筆 者 名 : 上島 励

和 名 : ヘソアキアツマイマイ

分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科

学 名 : *Nesiohelix omphalina omphalina* (Hirase, 1915)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

図 の 解 説 : p. 41. 北大東島. 撮影: 久保弘文。

形 態 : 殻は殻径約 24 mm、低い卵円錐形で厚く、周縁は丸い。様々な色帯型を持つが、必ず臍孔周辺には色帯を欠き、白～淡黄褐色となる。殻表はほぼ平滑で顆粒はなく、細かい成長脈のみを持つ。殻口は白～小豆色で強く肥厚し、反転する。臍孔はやや狭いが明瞭に開く。軟体の頭部背面は黒みの強い褐色、足の背面はやや色が薄くなる。生殖器には膣後端付近に矢嚢と粘液腺をもつ。陰茎後端に verge や陰茎付属肢を持たず、陰茎本体との境界はややくびれるが、外観では不明瞭。陰茎本体は陰茎より長く、後半は不規則なコイル状に折り畳まれる。鞭状器は単純で、膣とほぼ同長。

近似種との区別 : オオアガリマイマイとは周縁が丸く、殻表がより平滑になることで識別される。アツマイマイやエラブマイマイはより大型で低平な殻を持つことで区別される。

分布の概要 : 北大東島固有亜種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 南大東島に亜種オオアガリマイマイが分布する。国内では同属のエラブマイマイが沖永良部島に、アツマイマイが尖閣諸島に現生する。

生態的特徴 : 北大東島の自然度の高い森林の林床に棲息し、堆積したピロウの落葉の裏面などに附着して休眠する。オオアガリマイマイと比べて樹木などの利用頻度は高く、かつては植物上で鈴なりになる様子も観察されていた。

生息地の条件 : 同上。古い死殻は島内各地で見られることから、かつてはほぼ島全体に棲息していたと考えられる。

個体数の動向 : 2000年代中頃までは長幕の自然林に多産し、1日で100個体以上を見出すことも容易であったが、近年激減し、2015、2016年の調査ではわずかな個体しか確認されていない。古い死殻は島の各所で見出されるが、生貝が確認されたのは長幕でもごく狭い一角のみである。長幕一帯には死後2、3年以内とみられる真新しい死殻が大量に転がっており、捕食者であるニューギニアヤリガタリクウズムシの侵入などにより短期間で激減した可能性が極めて高い。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 大東諸島固有種であり、かつ琉球列島では遺存的なグループである *Nesiohelix* の一員として、生物地理学的に極めて重要である。

生存に対する脅威 : 産地が局限された最大の要因はヒトの入植に伴う開墾であると考えられる。近年では温暖化と過剰

乾燥による棲息環境の悪化に加え、ニューギニアヤリガタリクウズムシなどの強力な捕食者の侵入によって、絶滅寸前にまで減少していることは間違いない。速やかに対策がとられなければ、数年以内に絶滅する可能性が高い。

- 原 記 載 : 平瀬與一郎, 1915. 貝千種 (3). 芸艸堂, 京都, 4pp., pls. 41-60. (pl. 50, fig. 248, as *Mandarina omphalina*. Type loc.: “大東島”)
- 参 考 文 献 : 東 良雄・東 正雄, 1994. 大東島の陸産貝類相. *Venus*, 53: 161-173.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
黒住耐二, 2005. ヘソアキアツマイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 442.
増田 修・宇野 明・中原ゆうじ, 2015. 沖縄県大東諸島の陸産貝類の現状. *かいなかま*, 49(2): 21-44.
湊 宏, 2001. 大東諸島のアツマイマイ属とダイトウジママイマイ. *南紀生物*, 43: 117-122.
下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第14集 沖縄県洞穴実態調査報告 I”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 75-112.

執 筆 者 名 : 亀田勇一

和 名 : オオアガリマイマイ (サメハダヘソアキアツマイマイ)
分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
学 名 : *Nesiohelix omphalina bipyramidalis* Kuroda & Emura, 1943
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

図 の 解 説 : p. 41. 南大東島 (右下は殻表の顆粒状彫刻). 撮影: 亀田勇一.
形 態 : 殻は殻径約 27 mm、厚質、丸みのあるソロバン玉形で周縁角は明瞭。様々な色帯型を持つが、必ず臍孔周辺には色帯を欠き、白～淡黄褐色となる。微細な顆粒が殻全面を被う。殻口は白～褐色で強く肥厚し、反転する。臍孔はやや狭いが明瞭に開く。

近似種との区別 : ヘソアキアツマイマイとは周縁角が明瞭で、殻表に顆粒を有することで識別できる。ヘソアキアツマイマイと同種にされることもあるが、両島に産する化石でも同様の特徴が見られており、少なくとも数万年以上隔離されていると考えられるため、亜種として扱う。サメハダヘソアキアツマイマイは島内での個体変異である。

分布の概要 : 南大東島固有亜種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 北大東島にヘソアキアツマイマイが分布する。国内では同属の種が沖永良部島と尖閣諸島に現生する。

生態的特徴 : 南大東島の自然度の高い森林の林床に棲息し、堆積したピロウの落葉の裏面などに付着して休眠する。活動時は樹木や着生シダなどの植物上で見られることもあるが、基本的には地上棲である。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 2000年代中頃までは島内各地の林に棲息し、畑に囲まれた小規模な林でもまとまった個体数を見出すことが出来た。近年では産地・個体数とも激減し、2016年の調査では新東や池之沢周辺の、かつて多産した場所でも棲息を確認できないこともあった。死後 2、3 年以内とみられる新しい死殻が見つかる場所は多く、捕食者であるニューギニアヤリガタリクウズムシの侵入などにより短期間で激減している可能性が高い。

現在の生息状況 : 同上。幕の斜面林以外では特に確認が困難になっている。

学術的意義・評価 : 大東諸島固有種であり、かつ琉球列島では遺存的なグループである *Nesiohelix* の一員として、生物地理学的に極めて重要である。

生存に対する脅威 : 産地が局限された最大の要因はヒトの入植に伴う開墾であると考えられる。近年では温暖化と過剰乾燥による棲息環境の悪化に加え、ニューギニアヤリガタリクウズムシなどの強力な捕食者の侵入によって激減していることは間違いない。また、外来種ミヤコマイマイとはハビタットが重複しており、影響を受けている可能性がある。ヘソアキアツマイマイに比べれば確認地点・個体数ともに多いが、速やかに対策がとられなければ、近い将来絶滅する可能性が高い。

特 記 事 項 : レッドデータおきなわ第二版ではサメハダヘソアキアツマイマイ *N. o. proximata* として掲載されているが、学名の優先権は同時に記載された *N. bipyramidalis* の方が高く、こちらが有効名である (Kameda, 2016)。

原 記 載 : 黒田徳米・江村重雄, 1943. 新属アツマイマイ属に就いて. *Venus*, 13(1-4): 18-34. (pp. 26-27, 32-33, text-figs. 6-9, as *Nesiohelix bipyramidalis*. Type loc.: “南大東島”; pp. 25, 31-32, text-figs. 10-11, as *Nesiohelix omphalina proximata*. Type loc.: “南大東島”)

参 考 文 献 : 東 良雄・東 正雄, 1994. 大東島の陸産貝類相. *Venus*, 53: 161-173.
Kameda, Y., 2016. The valid names for some land snail taxa in the Ryukyu Islands. *Venus*, 74: 89-93.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

- 黒住耐二, 2005. サメハダヘソアキアツマイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 442.
- 増田 修・宇野 明・中原ゆうじ, 2015. 沖縄県大東諸島の陸産貝類の現状. かいな, 49(2): 21-44.
- 湊 宏, 2001. 大東諸島のアツマイマイ属とダイトウジママイマイ. 南紀生物, 43: 117-122.
- 下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第14集 沖縄県洞穴実態調査報告 I”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 75-112.

執筆者名 : 亀田勇一・黒住耐二* *前回改訂版 (2005) における黒住による記載内容を一部引用した。

和名 : **アツマイマイ**
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科

学名 : *Nesiohelix solida* Kuroda & Emura, 1943
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態 : 殻径約 40 mm の大型のマイマイ類で、殻長はやや短く (約 30 mm)、殻は厚く、体層周縁は角張らない。殻色は濃赤褐色で、色帯はない。殻表には粗い成長脈に沿った皺があるが、顆粒状にならない。殻口は強く肥厚し、反転する。臍孔はやや狭いが明瞭に開く。

近似種との区別 : 大型で周縁が丸く、皺状彫刻を持ち、色帯を持たないことによって、同属の他種と識別できる。

分布の概要 : 尖閣列島の黄尾嶼と魚釣島にのみ分布。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ヘソアキアツマイマイは大東諸島、エラブマイマイは沖永良部島、スインホウマイマイは台湾に分布する。

生態的特徴 : 森林の林床に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 現地調査が長らく行われていないが、野生化したヤギによる自然植生の破壊が進行しており、個体数は減少していると思われる。

現在の生息状況 : 現地調査が長らく行われていないため、現在の生息状況は不明である。野生化したヤギの食害による生息環境の悪化が懸念される。

学術的意義・評価 : 尖閣諸島の固有種であり、ヤギの食害による影響が懸念されるため、保全の重要性は極めて高い。

生存に対する脅威 : 野生化したヤギの食害による自然植生の破壊、林床の乾燥化、土壌流出による生息地の消失。

特記事項 : 最近の生息状況は不明であり、早急な現地調査が必要である。

原記載 : 黒田徳米・江村重雄, 1943. 新属アツマイマイ属に就いて. *Venus*, 13(1-4): 18-34. (pp. 27-29, 33-34, text-figs 12-14, as *Nesiohelix solida*. Type loc.: “尖閣列島黄尾嶼”)

参考文献 : 知念盛俊, 1979. 尖閣列島の陸産貝類. 沖縄生物学会誌, (17): 19-27.

黒住耐二, 2005. アツマイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 443.

湊 宏, 2014. アツマイマイ. “レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 365.

横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5: 1-12.

執筆者名 : 上島 励

和名 : **アマノヤマタカマイマイ**
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科

学名 : *Satsuma amanoi* Kuroda, 1960
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説 : p. 41. A, B, C: 南城市玉城百名 (タイプ産地). D: 糸満市摩文仁. 撮影: 亀田勇一 (A, B, C), 早瀬善正 (D).

形態 : 殻は殻径約 22 mm で螺塔の高い円錐形、体層周縁には弱い角を持つ。殻表は光沢のある淡黄白色で、色帯を持たない。臍孔は狭く開く。殻口は肥厚・反転する。軟体部の背面は乳白色で、外套膜縁は灰色。生殖器には本属に共通する特徴として、陰茎付属肢と鞭状器を有する。陰茎が著しく長いのが特徴で、殻径の 2.5-5 倍に達する。

近似種との区別 : 本種の殻形態は日本産の陸産貝類としては極めて特異であり、国内に形態の似る種は存在しない。台湾産の同属の樹上棲種とは殻の形が似るが、本種の方がはるかに大型であるため混同することはない。

分布の概要 : 沖縄島南部の固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 琉球列島中部で多様化している樹上性の系統の一員で、沖縄島南部には本種とシラユキヤマタカマイマイ・オキナワヤマタカマイマイ (ヤンバルヤマタカマイマイを含む) の 3 種が分布し、後者は同所的にも棲息する。

〈貝類〉

- 生態的特徴 : 樹上棲で、樹冠が発達して照度や乾燥が抑えられた森林内の樹木を主な棲息場所とする。
- 生息地の条件 : ハマイヌビワやガジュマルなどの大径木を有する、石灰岩地の自然林を好む。沖縄島南部ではこのような環境が残されている丘陵地の斜面林や古い墓地、御嶽、城跡などを中心に棲息している。
- 個体数の動向 : 2000年代前半までは生貝を確認できる場所が多かったが、2015～2016年の調査では古い死殻ばかりで生貝を確認できない場所が増えている。また、集合墓地や宅地等の建設、公園整備などにより棲息地である森林自体の縮小・消滅が急速に進んでおり、個体群が消滅した場所も存在する。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 琉球列島で多様化を遂げた固有の系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものとして生物地理学的・進化生物学的にきわめて重要である。
- 生存に対する脅威 : 本種は樹上棲であり、棲息に適した森林の消失や急激な変化は大きな脅威となる。遊歩道の建設、林縁の枝打ち、被覆する蔓植物・下草の過剰な除去も林内の風通しをよくし、林内の乾燥化をもたらす要因となる。かつては城跡や墓地は好適な棲息地の代名詞とも言えたが、世界遺産整備に伴う樹木の伐採や、墓地の密集化により、生存が脅かされている。また、台風による地面への落下や、樹木の倒壊に伴う林内の照度の増加は捕食圧の上昇に繋がるため、こうした自然災害の頻度や規模の増加も大きな脅威である。さらに、本種は日本の陸産貝類としては極めて特異な殻形態を有し、マニアの間での人気も高いため、採集圧も大きな脅威のひとつと考えられる。
- 特記事項 : 国内希少野生動植物種 (2017年)。
- 原記載 : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, vi+106 pp., 3pls. (p. 80, pl. 3, fig. 31, as *Satsuma (Luchuhadra) amanoi*. Type. loc.: “島尻地方玉城村百名”)
- 参考文献 : Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
- Kameda, Y. & Kato, M., 2008. Systematic revision of the subgenus *Luchuhadra* (Pulmonata: Camaenidae: *Satsuma*) occurring in the central Ryukyu Archipelago. *Venus*, 66: 127-145.
- 黒住耐二, 2005. アマノヤマタカマイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) -レッドデータおきなわ-”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 377-378.
- 竹内将俊・青野倫行, 2010. 公園内の二次林における沖縄産絶滅危惧陸生貝類アマノヤマタカマイマイとオキナワヤマタカマイマイ (有肺目: ナンバンマイマイ科) の生息環境. *Molluscan Diversity*, 2: 42-48.
- 竹内将俊・小峰幸夫・野村昌史, 2001. 琉球列島に固有なオキナワヤマタカマイマイ類の地理的分布と生息環境. *野生生物保護*, 6: 91-107.
- 執筆者名 : 亀田勇一

- 和名 : ヨナグニマイマイ
- 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
- 学名 : *Satsuma caliginosa picta* (Pilsbry & Hirase, 1909)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 図の解説 : p. 41. 与那国島. 撮影 : 亀田勇一。
- 形態 : 殻は殻径約 28 mm 前後、螺塔はやや低く、体層周縁は丸い。成貝の殻口は横長の楕円形、底唇部はやや直線的で、殻口の反転する手前でわずかに内側に張り出して突起を形成する。臍孔は狭いが明瞭。地色は鉛色で、周縁とその上下、臍孔部に計 4 本の色帯を持ち、上 2 本は時に接して幅広い 1 本の色帯となる。
- 近似種との区別 : 名義タイプ亜種イッシキマイマイとは、より小型で、殻口の変形が弱いことで識別される。姉妹種タンスイマイマイはより低平で殻口に弱い突起を持ち、臍孔も広いことで識別できる。
- 分布の概要 : 与那国島固有亜種。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 石垣島・西表島に名義タイプ亜種イッシキマイマイ、台湾北部にタンスイマイマイが分布する。
- 生態的特徴 : やや内陸部の森林に棲息し、夜間や降雨時に這い出して林床や石灰岩上を這い回る。乾燥時には湿った石灰岩の隙間や倒木・落葉下に潜り込んで休眠する。
- 生息地の条件 : 同上。
- 個体数の動向 : 島中央部の自然林一帯には広く分布しているが、個体群密度はかなり低下している。2000年代中頃までは、夜間調査で多数の個体が這い出ているのが確認できていたが、2015年調査時にはごく少数の個体しか観察されなかった。また、棲息地の大半には同属の外来種であるシュリマイマイやミヤコマイマイが侵入しており、影響が懸念される。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : シュリマイマイ類とは系統的に離れており、日本で唯一、狭義の *Coniglobus* (ドングリマイマイ類) の系統に属する種として生物地理学的に重要である。
- 生存に対する脅威 : 本種の主な棲息地は自然林であり、開発による森林面積の減少・分断が個体数の現象に繋がっている。近年の温暖化や乾燥の進行も林内の湿度を下げ、棲息環境を狭めている可能性が高い。本種とシュリマイマイやミヤコマイマイは生態的にも類似点が多いため、ある程度乾燥等にも強いこれらの外来種との競合によりいっそう個体数を減らしているおそれがある。

- 原 記 載 : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1909. New land Mollusca of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 60: 586-599. (pp.591-592, as *Eulota (Euhadra) picta*. Type loc.: “Yonakuni-jima, Ryukyu”)
- 参 考 文 献 : 知念盛俊, 1970. 八重山の陸産貝類. 沖縄生物教育研究誌, (4): 26-30.
 知念盛俊, 1990. 西表島の陸産貝類. “南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究 平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書”, 環境庁自然保護局(編), 環境庁自然保護局, 東京, 267-275.
 波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls.1-3.
 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
 黒住耐二, 2005. ヨナグニマイマイ (ヨナクニマイマイ). “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 440.
 湊 宏, 1976. 与那国島の陸産貝類相. Venus, 35: 163-183.

執 筆 者 名 : 亀田勇一

和 名 : オキナワヤマタカマイマイ
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科

学 名 : *Satsuma eucosmia eucosmia* (Pilsbry, 1895)
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

図 の 解 説 : p. 41. A : 中城村泊. B, C : 那覇市首里. D, E : うるま市浜比嘉島. F : 南城市玉城. 撮影 : 亀田勇一.

形 態 : 貝殻は中型(殻径約 27 mm)、螺塔の高い円錐形で、殻頂はやや尖る。薄質。体層周縁には弱い角を持つ。殻皮は光沢を持つ。色彩には変異があり、地色が白色系の個体でも殻底と縫合下は黄色みを帯びる。臍孔は狭く開く。殻口は白色で、弱く肥厚し、反転する。

近似種との区別 : 沖縄島北部に棲息するヤンバルヤマタカマイマイとは、殻がやや大型で螺塔が低く、周縁角が強いことや、生殖器の陰茎がより長く、陰茎付属肢が短いことで区別される。

分布の概要 : 沖縄市以南の沖縄島と周辺の小島嶼からのみ知られている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 琉球列島中部で多様化している樹上性の系統の一員で、沖縄島と周辺の小島嶼には本種(ヤンバルヤマタカマイマイを含む)とアマノヤマタカマイマイ・シラユキヤマタカマイマイの3種が、沖永良部島には亜種オキノエラブヤマタカマイマイが分布する。

生態的特徴 : 樹上棲で、樹冠が発達して照度や乾燥が抑えられた森林内の樹木を主な棲息場所とする。

生息地の条件 : ハマイヌビワやガジュマルなどの大径木を有する、石灰岩地の自然林を好む。沖縄島南部ではこのような環境が残されている丘陵地の斜面林や古い墓地、御嶽、城跡などを中心に棲息している。

個体数の動向 : 2000年代前半までは一度の調査で多数の個体を確認できる場所が多かったが、2015~2016年の調査では一様に棲息密度が低下していた。また、集合墓地や住宅等の建設、公園整備などにより棲息地である森林の縮小・消滅も急速に進んでおり、個体群自体が消滅した場所も存在する。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 琉球列島で多様化を遂げた固有の系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものとして生物地理学的・進化的生物学的にきわめて重要である。

生存に対する脅威 : 本種は樹上棲であり、棲息に適した森林の消失や急激な変化は大きな脅威となる。遊歩道の建設、林縁の枝打ち、被覆する蔓植物・下草の過剰な除去は林内の風通しをよくし、棲息場所の乾燥化をもたらす要因となる。かつては城跡や古い墓地は好適な棲息地の代名詞とも言えたが、世界遺産整備に伴う樹木の伐採や、墓地の密集化により、生存を脅かされている。また、台風による地面への落下や、樹木の倒壊に伴う林内の照度の増加は捕食圧の上昇に繋がるため、こうした自然災害の頻度や規模の増加も大きな脅威である。

特 記 事 項 : レッドデータおきなわ前版で「オキナワヤマタカマイマイ」として扱われていたものは、現在では分類学的再検討の結果、本種とシラユキヤマタカマイマイの2種に分けられている。さらに、沖縄島北部の本種個体群は形態的分化が見られるため、分けて扱った。

原 記 載 : Pilsbry, H. A., 1895. Catalogue of the Marine Mollusks of Japan, with Descriptions of New Species and Notes on Others Collected by Fredrick Stearns. F. Stearns, Detroit, 186 pp., 11pls. (p.161, pl.10, fig.14, as *Ganesella largillierti* var. *eucosmia*. Type loc.: “Yaeyama Island, the largest of the middle Loo Choo group, often known as Okinawa”)

参 考 文 献 : Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.

Kameda, Y. & Kato, M., 2008. Systematic revision of the subgenus *Luchuhadra* (Pulmonata: Camaenidae: *Satsuma*) occurring in the central Ryukyu Archipelago. Venus, 66: 127-145.

黒住耐二, 2005. オキナワヤマタカマイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 379-380.

竹内将俊・青野倫行, 2010. 公園内の二次林における沖縄産絶滅危惧陸生貝類アマノヤマタカマイマイとオキナワヤマタカマイマイ (有肺目: ナンバンマイマイ科) の生息環境. *Molluscan Diversity*, 2: 42-48.

竹内将俊・小峰幸夫・野村昌史, 2001. 琉球列島に固有なオキナワヤマタカマイマイ類の地理的分布と生息環境. *野生生物保護*, 6: 91-107.

執筆者名: 亀田勇一

和名: **ウラキヤマタカマイマイ**

分類: 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科

学名: *Satsuma hemihelva* Minato, 1980

カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説: p. 41. 野原岳. 撮影: 亀田勇一.

形態: 殻は中型 (殻径約 25 mm) で薄質、螺旋のやや高い円錐形で、殻頂は鈍い。体層周縁は丸い。螺層はややくすんだ白色、殻底は黄褐色で光沢を持つ。無帯または周縁に 1 本の色帯を有する。臍孔は狭く開く。殻口は白色で、弱く肥厚し、反転する。生殖器では陰茎と陰茎本体が長く、殻径の 1.5 倍程度に達することに加え、輸卵管が著しく長い (他種の 3-5 倍) ことが特徴である。

近似種との区別: 琉球列島産の同属の樹上棲種とは、薄質で周縁が丸く、殻底が濃い黄色になることで識別できる。

分布の概要: 宮古島と伊良部島の固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 琉球列島中部で多様化している樹上性の系統の一員で、宮古諸島はその分布の南限にあたる。姉妹種であるオモロヤマタカマイマイは久米島に分布する。

生態的特徴: 森林内の樹木等を棲息場所とする樹上棲種で、産卵は樹幹や石灰岩塊の窪みに行く。樹冠が発達して照度や乾燥が抑えられた森林の樹木を主な棲息場所とするが、やや風通しのよい林縁部にも出現し、森林に隣接する公園の樹木などにも多産することがある。

生息地の条件: 同上。

個体数の動向: 2000 年代前半までの調査では数地点で確認され、一度の調査で数十個体を確認できた場所もあるが、近年では棲息地自体がごく限られてきている。野原岳では工事により棲息地の森林が削られている上、棲息密度も著しく低下している。

現在の生息状況: 同上。

学術的意義・評価: 琉球列島で多様化を遂げた固有の系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものとして生物地理学的・進化的生物学的にきわめて重要である。

生存に対する脅威: 本種は樹上棲であり、棲息に適した森林の消失や急激な変化は大きな脅威となる。直接的な伐採はもちろんのこと、遊歩道の建設、枝打ち、被覆する蔓植物・下草の過剰な除去は林内の風通しをよくし、棲息場所の乾燥化をもたらす要因となる。恒常的に乾燥が続けば、乾いた樹洞などにはアリが営巣することになり、本種をはじめとする樹上棲種の産卵場所や隠れ場所が失われ、個体群の縮小に繋がりをうる。また、台風による地面への落下や、樹木の倒壊に伴う林内の照度の増加は捕食圧の上昇に繋がるため、こうした温暖化・乾燥化の進行や自然災害の頻度・規模の増加も大きな脅威である。

特記事項: 国内希少野生動植物種 (2017 年)。宮古島市自然環境保全条例保全種 (2005 年)。

原記載: 湊 宏, 1980. 宮古群島の陸産貝類相. *Venus*, 39(2): 83-99. (pp. 90-91, 95, pl. 1, figs. 3-4, pl. 2, figs. 7-8, as *Satsuma hemihelvus* [sic]. Type loc.: “宮古諸島伊良部島豊見親比屋地御嶽”)

参考文献: Kameda, Y. & Kato, M., 2008. Systematic revision of the subgenus *Luchuhadra* (Pulmonata: Camaenidae: *Satsuma*) occurring in the central Ryukyu Archipelago. *Venus*, 66: 127-145.

久保弘文, 準備中. 陸産貝類. “宮古島市史 自然編”, 宮古島市史編さん委員会 (編), 宮古島市教育委員会, 宮古島.

黒住耐二, 2005. ウラキヤマタカマイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ -”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 378-379.

湊 宏, 1980. 宮古群島の陸産貝類相. *Venus*, 39(2): 83-99.

大原健司, 1994. 宮古諸島の陸産貝類相. *かいなかま*, 28(3): 1-7.

竹内将俊・小峰幸夫・野村昌史, 2001. 琉球列島に固有なオキナワヤマタカマイマイ類の地理的分布と生息環境. *野生生物保護*, 6: 91-107.

執筆者名: 亀田勇一

和名: **イヘヤヤマタカマイマイ**

分類: 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科

学名: *Satsuma theyaensis* (Pilsbry & Hirase, 1905)

カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説: p. 41. 伊平屋島. 撮影: 亀田勇一.

形態: 貝殻は殻径約 23 mm で螺旋のやや高い円錐形、殻頂はやや鈍い。体層周縁には弱い明瞭な角を持

つ。殻皮は弱い光沢を持つ。地色は乳白色～淡黄白色で、周縁には 0～2 本の色帯をめぐらす。臍孔は狭く開く。殻口は白色で、やや強く肥厚し、反転する。

近似種との区別： 本種は、琉球列島産の同属の樹上棲種とは、小型でやや厚質、周縁角が明瞭であることによって識別できる。姉妹種シラユキヤマタカマイマイとは殻の雰囲気相似的だが、周縁角を持つことと、生殖器各部の肥厚が弱く、陰茎も細く長いことで区別される。

分布の概要： 伊平屋島固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 琉球列島中部で多様化している樹上性の系統の一員で、伊平屋島には本種のみが分布する。姉妹種シラユキヤマタカマイマイは沖縄島と沖永良部島に分布する。

生態的特徴： 完全な森林棲かつ山地棲で、森林内の樹木等を棲息場所とする樹上棲種である。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： もともと稀産であり、公表されている棲息記録では 1990 年代以降に数件、1～4 個体ずつが確認されたにすぎない。動向は不明であるが、近縁種に比べ圧倒的に記録が少なく、確認が困難な種であることは間違いない。他の島に棲息する近縁種は大型台風などの影響で軒並み減少しており、本種も少なからず打撃を受けている可能性が高い。

現在の生息状況： 概ね標高 100 m 以上の樹林帯に棲息しており、山麓や林縁部では確認できない。条件の良い大木では複数個体を確認できることもあるが、連続的に見出されるわけではないため、パッチ状に点在する棲息に適した環境を中心として低密度な個体群が維持されていると考えられる。賀陽山では 2016 年調査でも少数ずつ複数の地点で見出された。また、アサ岳でも 1997 年に 4 個体が確認されており、他の山にも棲息している可能性がある。

学術的意義・評価： 琉球列島で多様化を遂げた固有の系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものとして生物地理学的・進化生物学的にきわめて重要である。

生存に対する脅威： 本種は樹上棲であり、棲息に適した森林の消失や急激な変化は大きな脅威となる。棲息域の下限付近と考えられる標高 100 m 前後にはダムや道路が建設されており、影響が懸念される。台風による地面への落下や、樹木の倒壊に伴う林内の照度の増加は捕食圧の上昇に繋がるため、こうした自然災害の頻度や規模の増加も大きな脅威である。また、本種は日本の陸産貝類の中でも希少価値が高く、棲息する木まで特定されている山頂付近では、マニアの採集圧も脅威となる。

特記事項： 国内希少野生動物植物種 (2017 年)。

原記載： Pilsbry, H. A. & Hirase, Y., 1905. New land mollusks of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 57: 705-719. (p.710, as *Ganesella sororcula* var. *iheyansis*. Type loc.: "Iheyajima, Ryukyu")

参考文献： 東 良雄, 2000. 伊平屋島で再発見されたイヘヤマタカマイマイの生殖器について. ちりぼたん, 31: 85-89.
Kameda, Y. & Kato, M., 2008. Systematic revision of the subgenus *Luchuhadra* (Pulmonata: Camaenidae: *Satsuma*) occurring in the central Ryukyu Archipelago. Venus, 66: 127-145.
黒住耐二, 2005. イヘヤマタカマイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) —レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 332-333.
竹内将俊・小峰幸夫・野村昌史, 2001. 琉球列島に固有なオキナワヤマタカマイマイ類の地理的分布と生息環境. 野生生物保護, 6: 91-107.

執筆者名： 亀田勇一

和名： クメジマイマイ
分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科

学名： *Satsuma mercatoria kumejimaensis* M. Azuma, Y. Azuma & Hirata, 1992
カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) **環境省カテゴリー：** 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説： p. 42. 久米島町仲地. 撮影：亀田勇一。
形態： 貝殻は殻径 30 mm 弱、螺塔はやや低く、比較的厚質。周縁は丸く、螺層は少し膨れ、球形に近い印象を与える。上面に規則的で弱い皺状彫刻がある。殻皮はほとんど光沢を持たず錆色で、周縁に細い黒帯を巡らす。臍孔は狭く開く。殻口も同色で、やや強く肥厚し、反転する。生殖器は陰茎が比較的短く、陰茎本体の長さを超えない。陰茎付属肢は 10 mm 内外でシュリマイマイ種群としては長く明瞭。鞭状器は短い。

近似種との区別： シュリマイマイやミヤコマイマイとは、螺塔が比較的高く周縁角を持たないことや、殻皮に光沢がないことによって識別できる。生殖器の形態では、シュリマイマイは陰茎本体より陰茎の方が通常長く、ミヤコマイマイは陰茎本体と鞭状器がほぼ同長であるため区別される。

分布の概要： 久米島固有種。
近縁な種及び群との分布状況の比較： 琉球列島中部で多様化しているグループの一員であり、久米島には他にシュリマイマイ、ミヤコマイマイ、リュウキュウヒダリマキマイマイが棲息している。本種は久米島北西部の自然林や二次林にのみ分布し、ミヤコマイマイとは共存することがあるが、シュリマイマイとはほぼ側所的な分布を示す。

生態的特徴： 林床の倒木下や落葉下に生息する地上棲種で、湿度の保たれた自然林や二次林の林床に棲息する。
生息地の条件： 同上。
個体数の動向： もともと棲息範囲は局限されており、多産することもないが、近年では森林面積の減少や温暖化・

〈貝類〉

異常乾燥による林床の荒廃で棲息可能な環境が限られてきており、個体群の縮小が進んでいると考えられる。

現在の生息状況 :

同上。

学術的意義・評価 :

琉球列島で多様化を遂げた系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものである。特に本亜種はシュリマイマイから種分化しつつあると考えられ、生物地理学的・進化生物学的にきわめて重要である。

生存に対する脅威 :

ドリーネや低標高の林のような人里に近い環境を棲息場所としているため、集落周辺の開発に伴う林の縮小・消失など、人間の活動による棲息環境の破壊が最大の脅威となる。また、久米島特産かつ稀産であるため、マニアの採集圧も無視できない。分布の重なるミヤコマイマイは国内外来種の疑いもあり、近年久米島でも増加傾向にあると考えられるため、生態的な競合や交雑が懸念される。

特記事項 :

分子系統学的にはシュリマイマイの一集団となるが、シュリマイマイとは分布が側面的で、交雑の痕跡も乏しいため、生殖隔離のある別種である可能性を考慮する必要がある。

原記載 :

東 正雄・東 良雄・平田義浩 1992. 久米島の陸産貝類相. Venus 50: 264-269. (pp. 265-268, figs. 1-3, as *Satsuma (Coniglobus) mercatoria* O 1-*kumejimaensis. Type loc.: “久米島具志川村宇江城”)

参考文献 :

亀田勇一, (準備中) シュリマイマイ類の分布と国内移入状況. Molluscan Diversity, 5.
黒住耐二, 2005. クメジママイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 333.
湊 宏, 2001. シュリマイマイ種群とオオシママイマイ種群の種類とその分布. ちりばたん, 32: 24-31.
湊 宏, 2014. クメジママイマイ. “レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 202.
品川和久, 1978. 沖縄県久米島における陸貝採集記録. かいなかま, 12(2): 4-14.

執筆者名 :

亀田勇一

和名 :

サキシマヒシマイマイ

分類 :

腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンパンマイマイ科

学名 :

Satsuma sakishimana Kuroda, 1960

カテゴリー :

絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態 :

殻は殻径約 24 mm で薄質。螺塔の低いソロバン玉形で、周縁角は明瞭であるが竜骨状にはならない。殻表はほぼ平滑で淡赤褐色。殻口はやや厚く肥厚し、反転する。臍孔は明瞭に開く。生殖器は陰茎後端部に陰茎付属肢を欠き、代わりに verge を有する。鞭状器はごく短く、円錐形。

近似種との区別 :

ウスヒシマイマイ *S. mellea* は、殻口底部に弱い歯状突起を持つことや、陰茎と陰茎本体がともに短く、陰茎付属肢を持つことで区別される。

分布の概要 :

宮古諸島(宮古島、伊良部島)固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 :

姉妹種のウスヒシマイマイが台湾北部に分布する。

生態的特徴 :

地上棲で、林床の倒木下や落葉下を好むと考えられているが、実際には林縁部や草地においても棲息可能であり、森林環境への依存度は比較的低い。

生息地の条件 :

同上。

個体数の動向 :

かつては野原岳などの森林内でも確認することが出来ていたが、工事などでその面積が削られていることに加え、湿度の保たれた林内ではニューギニアヤリガタリクウズムシが蔓延しており、生具を見出すのは極めて困難になっている。林縁部~隣接する草地などには棲息しているが、季節や年による消長が著しく、安定して多数の個体を確認することは難しい。

現在の生息状況 :

同上。

学術的意義・評価 :

琉球列島で多様化を遂げた系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものである。特に本種はシュリマイマイ類の中でも最も古くに分岐した種のひとつであり、生物地理学的・進化生物学的にきわめて重要である。

生存に対する脅威 :

自然林とそれに隣接する草地や、耕作地周辺の草地など棲息可能な環境は比較的広いが、開発により森林面積は減少しており、また草地では草刈りや薬剤散布など人為的な改変を受けやすく、長期的に安定した個体群を維持できる場所は非常に限られてきている。また、ニューギニアヤリガタリクウズムシの侵入により本種をはじめ多くの陸貝が減少しているうえ、生態的に競合する可能性のある外来種ミヤコマイマイが急速に棲息範囲を広げているなど、外来種の影響も強く受けていると考えられる。

特記事項 :

陰茎付属肢を欠くことを根拠に *Camaena* に分類されていたが、*Satsuma* の一員であり、琉球列島で多様化している地上棲系統(シュリマイマイ類)の中で古くに分岐したもののひとつである。宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)。

原記載 :

黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録(頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106pp., 3pls. (pp. 80-81, as *Satsuma (Coniglobus) sakishimana*. Type loc.: “宮古島西原”)

参考文献 :

Chinen, M., 1976. Land shells of Miyako-jima and adjacent Islands. Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 2: 89-94.
久保弘文, 準備中. 陸産貝類. “宮古島市史 自然編”, 宮古島市史編さん委員会(編), 宮古島市教育委員会, 宮古島.

黒住耐二, 2005. サキシマヒシマイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 371-318.
 湊 宏, 1980. 宮古群島の陸産貝類相. *Venus*, 39(2): 83-99.
 大原健司, 1994. 宮古諸島の陸産貝類相. *かいなかま*, 28(3): 1-7.

執筆者名: 亀田勇一

和名: タダマイマイ
 分類: 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
 学名: *Satsuma tadai* Kuroda, 1960
 カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

図の解説: p. 42. 尖閣列島 (増田修氏所蔵標本). 撮影: 久保弘文.
 形態: 貝殻は左巻きで、小型 (殻径約 20 mm) で、殻長はやや長い (約 14 mm)。螺層は細かく巻き、体層周縁は丸い。殻は黄褐色であるが、体層周縁に褐色の色帯があり、その上下に幅広い赤褐色の色帯がある。臍孔はやや広く開く。

近似種との区別: 八重山に分布するクロイワヒダリマキマイマイに似るが、小型で螺塔が高いことで区別され、分布域も異なる。

分布の概要: 尖閣列島 (魚釣島、黄尾島) にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 同属別種との類縁関係は不明であるが、最も近似したクロイワヒダリマキマイマイは八重山諸島に分布する。

生態的特徴: 自然林の落葉下に生息する。

生息地の条件: 同上。

個体数の動向: 現地調査が長らく行われていないが、野生化したヤギによる自然植生の破壊が進行しており、個体数は減少していると思われる。

現在の生息状況: 現地調査が長らく行われていないため、現在の生息状況は不明である。野生化したヤギの食害による生息環境の悪化が懸念される。

学術的意義・評価: 尖閣諸島の固有種であり、ヤギの食害による影響が懸念されるため、保全の重要性は極めて高い。

生存に対する脅威: 野生化したヤギの食害による自然植生の破壊、林床の乾燥化、土壌流出による生息地の消失。

特記事項: 最近の生息状況は不明であり、早急な現地調査が必要である。

原記載: 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106 pp., 3 pls. (p. 81, pl. 3, figs 28-30, as *Satsuma (Coniglobus) tadai*. Type loc.: “尖閣列島”)

参考文献: 知念盛俊, 1979. 尖閣列島の陸産貝類. 沖縄生物学会誌, (17): 19-27.

黒住耐二, 2005. タダマイマイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 440.

湊 宏, 2014. タダマイマイ. “レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 425.

横畑泰志・横田昌嗣, 2000. 尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題について. 野生生物保護, 5: 1-12.

執筆者名: 上島 励

和名: ヒメシイノミミガイ
 分類: 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
 学名: *Cassidula paludosa* (Garrett, 1872)
 カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態: 殻長 10 mm、殻径 5 mm。殻は紡錘形、厚く不透明で濃い小豆色、殻表は多数の細い螺溝を巡らし、繊細な殻毛を具える。殻頂は白色の胎殻が乳頭状に突出する。殻口外唇内側に強い歯状突起を持ち、その後方は彎入する。内唇の 2 個のバリエタル歯は弱く、軸唇の褶は強い。繃帯は強い螺状稜角を成す。

近似種との区別: クリイロコミミガイに似るが、同種は殻表の螺溝がより粗く、殻毛を欠く。

分布の概要: 奄美大島、沖縄島、先島諸島、台湾、東南アジア、フィリピン、パラオ、フィジー、ウベア、サモア。

近縁な種及び群との分布状況の比較: 沖縄県産オカミミガイ科の他種に比べ、より不連続で局所的に分布する。

生態的特徴: 泥上の有機物等を摂食すると思われる。紐状の卵塊を固い基質上へ螺旋状に産みつける。

生息地の条件: マングローブ林辺縁の塩性湿地の潮間帯中～上部において、礫混じりの湿った軟泥底の転石や朽木、廃棄されたビニール袋等、遮蔽物の下に潜む。

個体数の動向: 沖縄島や石垣島宮良川の塩性湿地では近年産地の大半が消失し、個体数は極端に減少した。棲息可能な場所は益々限定的になりつつある。

現在の生息状況: 現存産地は沖縄島・先島諸島の合計 10 箇所以下である。既知の個体群はいずれも小規模で、わずかな環境変化によって容易に失われかねない。

<貝類>

- 学術的意義・評価 : 沖縄県を含む南西諸島は本種の分布の世界的北限である。
- 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸、道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、水質・土壌汚染。特に、塩性湿地の朽木や廃棄された毛布・ビニール袋等の漂着物が撤去・焼却されると、個体群に致命的打撃を与えることがあるので、無思慮にゴミ掃除をすべきでない。温暖化に伴う湿地の乾燥化も懸念される。さらに、国内産個体は稀少価値が高く、標本蒐集家や販売業者が乱獲する恐れがある。
- 特記事項 : 「Kunchan, Ryukyu」(琉球国頭)から記載された *Cassidula paludosa nigrobrunnea* Pilsbry & Hirase, 1905 は、「Viti」(Fiji)産 *Ophicardelus paludosus* Garrett, 1872 の殻色が「yellow or light brown」なのに対し、「deep chocolate brown」であることだけを根拠に別亜種とされたもので、両者は同物異名と考えられる。
- 原記載 : 鹿児島県レッドリスト掲載種 (絶滅危惧 I 類)。
Garrett, A.J., 1872. Descriptions of new species of land and freshwater shells. American Journal of Conchology, 7: 219-230, pl. 19. (p. 220, pl. 19, fig. 3, as *Ophicardelus paludosus*, Type loc.: “Viti, Wallis and Samoa Islands”)
Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1905. New land mollusks of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 57: 705-719. (p. 719, as *Cassidula paludosa nigrobrunnea*. Type loc.: “Kunchan, Ryukyu”)
- 参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 宮古島 平良市久松漁港 (久貝)~久松松原; 石垣島 宮良川 (石垣市宮良)・磯辺川河口 (石垣市磯辺). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114-115.
久保弘文, 2005. ヒメシイノミミガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 361.
久保弘文, 2012. ヒメシイノミミガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 93.
久保弘文, 2014. ヒメシイノミミガイ. “レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 88.
増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : ナズミガイ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Cylindrotis quadrasi* Moellendorff in Quadras & Moellendorff, 1895
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態 : 殻長 9 mm、殻径 2.5 mm。殻は前後に長いシリンダー状ないし棍棒状、殻表は緩く彎曲する成長脈以外は平滑、光沢が強く、淡い緑色がかった黄金色。殻頂はドーム状、縫合は不規則に波打ち、くびれは弱い。殻口外唇は老成すると多少肥厚し、内側中ほどが低く隆起する。内唇のパリエタル歯は 1 個で強く、軸唇に低い褶を 1 個持つ。

近似種との区別 : 極端に細長い比類のない殻形を示し、日本産オカミミガイ科で類似する種はない。ナガオカミミガイは殻色が似るが、より大きく、殻頂が尖り、光沢が弱い。ナラビオカミミガイも殻色や光沢は似るが、殻形が短卵形で、殻口軸唇の褶は 2 個。

分布の概要 : 沖縄島北部西岸 (塩屋湾、羽地内海、今帰仁村大井川河口)、フィリピン、タイ。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属の他種はタイに *C. siamensis* Brandt, 1974 が知られるのみ。

生態的特徴 : 湿潤な環境の朽木や泥上の、有機物等を摂食すると考えられる。生活史は未詳。
生息地の条件 : 河口マングローブ林周辺の塩性湿地において、高潮帯の軟泥底礫間に棲息し、朽木・転石等遮蔽物が豊富な環境に限られる。崩れかけた朽木や発酵した植物遺骸の中に潜り込んだり、転石下の甲殻類の巣穴の中を匍匐するなど地中で生活し、雨後や大潮干潮時に表層へ出て活動する。

個体数の動向 : 国内では沖縄島北部の西岸 3 箇所に産地に限られ、しかも各産地は不連続で互いに孤立している。個体数も非常に少ない。最初の発見地である塩屋湾大保大川河口の産地は消滅した。

現在の生息状況 : 国内の現存産地は僅か 3 箇所、そのすべてが狭く小規模であり、環境変化が生じると容易に失われかねない。

学術的意義・評価 : 沖縄県は本種の分布の世界的北限であり、他国でも記録例は著しく少ない。
生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸、道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、水質・土壌汚染。特に、塩性湿地の朽木や廃棄されたビニール袋等の漂着物が撤去・焼却されると、個体群に致命的打撃を与えることがあるので、無思慮にゴミ掃除をすべきでない。温暖化に伴う湿地の乾燥化も懸念される。さらに、国内産個体は稀少価値が高く、標本蒐集家や販売業者が乱獲する恐れがある。

特記事項 : かつてこの属はオカミミガイ科の中で最も原始的なヒラシイノミミ科に属すと考えられてきたが、塩屋湾大保大川河口産の本種をもとに系統上の位置が再検討された結果、同科で最も派生的なオカミミガイ亜科の一員であることが判明した。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

原記載 : Quadras, J.F. & Moellendorff, O.F. von, 1895. Diagnoses specierum novarum ex insulis Philippinis. Nachrichtenblatt der Deutschen Malakozologischen Gesellschaft, 27: 73-88. (p. 77, as *Cylindrotis quadrasi*. Type loc.: “in insulis Masbate, Negros et Culion”)

- 参考文献 : Fukuda, H., 1994. The anatomy of *Cylindrotis quadrasi* from Okinawa Island, Japan and the subfamilial position of the genus *Cylindrotis* Moellendorff, 1895 (Archaeopulmonata: Ellobiidae). *Journal of Molluscan Studies*, 60: 69-81.
- 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島 国頭郡大宜味村塩屋 大保大川河口 (塩屋湾奥). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 113-114.
- 久保弘文, 2005. ナズミガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 316-317.
- 久保弘文, 2014. ナズミガイ. “レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 91.
- 久保弘文・福田 宏, 2012. ナズミガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 95.
- 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
- 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : コハクオカミミガイ
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
 学名 : *Ellobium pallidum* (Sowerby II, 1839)
 カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態 : 殻長 30 mm、殻径 10 mm。殻は縦長の紡錘形で殻頂は尖り、厚質、不透明、殻表は鈍い光沢を帯びた淡黄白色で色帯を欠く。やや粗い成長脈を持ち、縫合下に微細顆粒列がある。殻口外唇内側は僅かに肥厚する。内唇前方に 1 個の強いバリエタル歯を持ち、軸唇の褶は前後に長い。

近似種との区別 : 本州～九州に産するオカミミガイはより大型で卵形、濃茶褐色の厚い殻皮で覆われる。ナガオカミミガイは殻の色や質感が似るが、本種よりはるかに小さく細長い。

分布の概要 : 沖縄島、宮古島、西表島、台湾澎湖島、フィリピン、グアム、パラオ、東南アジア。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県では 3 島のみで知られ、不連続的かつ局所的に産する。

生態的特徴 : 湿潤な環境の朽木や泥上の、有機物等を摂食すると考えられる。紐状の卵塊を産み、恐らく浮游幼生期を持つ。

生息地の条件 : 河口・マングローブ林周辺の塩性湿地の高潮帯に棲息し、適度な湿気と、倒木や廃棄されたビニール袋等の遮蔽物がある環境に限られる。特に幼貝は崩れかけた朽木等、発酵した植物遺骸の中に埋もれて過ごす。

個体数の動向 : 沖縄島周辺の塩性湿地では埋立、護岸等で多くの産地が消失し、個体群数・個体数ともに著しく減少した。宮古島嘉手苅のマングローブ湿地周辺では 1990 年代後半まで比較的まとまった個体数が認められたが、近年は減少傾向が顕著である。

現在の生息状況 : 現存産地は合計 10 箇所以下で、その大半が小規模であり、環境変化が生じると容易に失われかねない。

学術的意義・評価 : 沖縄県は本種の分布の世界的北限である。

生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸、道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、水質・土壌汚染。特に、塩性湿地の朽木や廃棄された毛布・ビニール袋等の漂着物が撤去・焼却されると、個体群に致命的打撃を与えることがあるので、無思慮にゴミ掃除をすべきでない。温暖化に伴う湿地の乾燥化も懸念される。さらに、国内産個体は稀少価値が高く、標本蒐集家や販売業者が乱獲する恐れがある。

特記事項 : 属名を *Auriculodes* Strand, 1928 とすることもあるが、これは *Ellobium* Röding, 1798 の異名の可能性が高い。*E. incrassatum* H. & A. Adams, 1854 と *Auricula (Leuconia) opportuna* Gould, 1859 は異名 (後者のタイプ産地は琉球列島)。

原記載 : Sowerby, G.B. II, 1839. Molluscous animals, and their shells. “The Zoology of Captain Beechey's Voyage”, Beechey, F.W. (ed.), H.G. Bohn, London, 143-155, pls 34-44. (p. 146, pl. 38, fig. 27, as *Auricula pallida*. Type loc. not designated)

Adams, H. & Adams, A., 1854. Monographs of *Ellobium* and *Melampus*, two genera of pulmoniferous Mollusca. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1854: 7-13. (p. 8, as *Ellobium incrassatum*. Type loc.: “Loon, island of Bohol”)

Gould, A.A., 1859. Descriptions of new species of shells. Proceedings of the Boston Society of Natural History, 7: 40-45. (p. 40, as *Auricula (Leuconia) opportuna*. Type loc.: “Loo Choo Is.”)

参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島 羽地内海 (名護市屋我地島南岸/名護市羽地～国頭郡今帰仁村我部井). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114.

久保弘文, 2005. コハクオカミミガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 329-330.

久保弘文, 2012. コハクオカミミガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 96.

- 久保弘文, 2014. コハクオカミミガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 92.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 生態/検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 那覇, 264 pp.
- 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
- 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : コベソコミミガイ (マルコミミガイ)
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Laemodonta* sp.
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

形態 : 殻長 5 mm, 殻径 3 mm. 殻は紡錘形または雫形、淡黄褐色から白色、薄質で壊れやすい。螺層はよく膨らみ、縫合のくびれも明瞭。殻表は狭く低い螺肋を多数巡らし、それらは明瞭な成長脈で切られる。外唇内側の歯は低い隆起状。内唇に 1 個のバリエタル歯と軸唇に 1 個の褶を持つが、いずれも同属の他種と比べて貧弱で、小さな牙状となる。殻底に目立った螺状稜角はない。

近似種との区別 : 丸みを帯びた殻形・白っぽい殻色・殻口内の歯状突起の貧弱さは、日本産コミミガイ属の中でも独特で、他種から際立っており容易に識別可能である。

分布の概要 : トカラ列島 (宝島)、奄美大島、沖縄島 (本部町備瀬、恩納村美留川、南城市馬天、糸満市西崎)、敷地島、宮古島 (久松)、石垣島 (崎枝)、八重山黒島、西表島 (古見)。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本産コミミガイ属の種の大半はインド-太平洋の熱帯域に広く分布するが、本種は国外から記載された種の中に合致するものが見当たらない。国内の同属ではカドバリコミミガイ・イササコミミガイに次いで産出例の少ない稀種である。

生態的特徴 : 泥上の有機物等を摂食すると思われる。胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。

生息地の条件 : 内湾奥部の河口マングローブ辺縁の砂泥底転石地や、海岸岩礁地高潮帯の底泥に埋もれた石の下面にシュジュコミミガイ等と共に見られる。

個体数の動向 : 産地・個体数ともに極めて少ない。多くの場合死殻が見られるのみで、生貝が確認された産地は僅かしかない。

現在の生息状況 : 例外的に石垣島崎枝・西表島古見等では同一箇所複数年に亘って確認され、様々な成長段階の生貝が見られるので、カドバリコミミガイ・イササコミミガイと異なり明らかに定着している。しかしその割には発見例が著しく少なく、個体群の維持には限定的な環境条件が要求されると思われる。

学術的意義・評価 : 未記載種の可能性がある。

生存に対する脅威 : 河口・海岸の護岸や埋立、マングローブ伐採、水質汚濁等によって各個体群は容易に壊滅に至るであろう。

- 参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 宮古島 平良市久松漁港 (久貝)~久松松原; 石垣島 宮良川 (石垣市宮良)・磯辺川河口 (石垣市磯辺); 石垣島 崎枝. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114-116.
- 福田 宏, 2014. コベソコミミガイ (マルコミミガイ). “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 313.
- 福田 宏・久保弘文, 2012. コベソコミミガイ (マルコミミガイ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 98.
- 池辺進一・吉田 誠, 2006. 池辺進一コレクション 貝類標本目録. 和歌山県立自然博物館, 海南, 164 pp.
- 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
- 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
- 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
- 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 : 福田 宏

和名 : イソスジサルボウ
分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 フネガイ目 フネガイ上科 フネガイ科
学名 : *Tosarca vellicata* (Reeve, 1843)
カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 42. 金武湾. 撮影 : 久保弘文.

形態 : 最大殻長約 7 cm の非常に良く膨らむ箱形の二枚貝類。蝶番は多数の絞歯が並び、殻表には約 45 本

- の放射肋を有する。貝殻周縁に蓑状の厚い殻皮を纏うが、乾燥すると剥がれやすい。殻色の地色は灰白色であるが、底泥の色を沈着させ、黒ずむ。
- 近似種との区別 : リュウキュウサルボウとは貝殻が整った箱形で非常に膨らみ、殻質もやや薄いことから区別される。
- 分布の概要 : 金武湾、フィリピン、ベトナム等の東南アジア～紅海。
- 生態的特徴 : 湾奥部の泥底に浅く潜って、プランクトン等をろ過して摂食すると考えられるが、詳細は不明。
- 生息地の条件 : 生貝は金武湾の水深約8～12 mの泥底からのみ確認されている。死殻は中城村浜沖や羽地内海からも見いだされており、生息している可能性もある。
- 個体数の動向 : 2003年頃から継続して実施している金武湾の漁獲物調査によって、2006年に金武湾（石川沖）で大型の殻皮付きの合弁個体が確認され、生息していることが明らかとなった。しかし、その後も調査を継続しているが、全く見つかっていない。湾内の浚渫などではしばしば確認されることから、かつては少なからず産出していた可能性がある。
- 現在の生息状況 : 調査での産出結果から非常に稀少な貝類であり、底質悪化が進行する金武湾においては、僅かな現存個体群が健全な状態で保持されているとは考えられない。
- 学術的意義・評価 : 金武湾で遺存的に存在しているとすれば、学術的にきわめて貴重な個体群である。
- 生存に対する脅威 : 港湾水路浚渫や埋立て等、沖縄島の内湾奥部潮下帯の泥底域における人為的攪乱。
- 原記載 : Reeve, L.A., 1843. Monograph of the genus *Arca*. *Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscosus Animals*, 2: pls 1-17. (sp. 33, pl. 5, fig. 33, as *Arca vellicata*. Type loc.: “—?”)
- 参考文献 : Huber, M., 2010. *Compendium of Bivalves, 1. A Full-Color Guide to 3'300 of the World's Marine Bivalves: A Status on Bivalvia after 250 Years of Research*, ConchBooks, Hackenheim, 901 pp.
- 執筆者名 : 久保弘文

和名 : ヒナキンチャク
 分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 イタヤガイ目 イタヤガイ上科 イタヤガイ科
 学名 : *Decatopecten plica* (Linnaeus, 1767)
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

- 形態 : 殻長約40 mmの扇形に近い三角形。太く不明瞭な5-9本程度の放射肋と、細く殻縁で明瞭になる多数の放射肋を有し、色調は白地に橙や褐色、さらには淡紫色まで多様な雲状彩を飾る。内面は白色。
- 近似種との区別 : 日本本土に生息するキンチャクガイより肋が弱く、膨らみも弱い。一方、リュウキュウキンチャクはキンチャクガイに類似し、更に丸みが強く、膨らむが、個体変異も大きく、両種は分類学的検討を要する。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、インド-西太平洋。
- 生態的特徴 : 人影を察知すると、活発に殻を開閉し泳ぐ行動が見られ、浅い水深のアマモ場間を頻繁に移動していると考えられる。幼貝期までは足糸で海底のサンゴ礁や貝殻に付着し、定在化する個体が多いが、成長すると自由生活を営む。
- 生息地の条件 : 自然度が高く、種多様性が豊かなアマモ場に生息し、特に潮通しの良い環境を好む。垂直的には低潮線～水深10 m内外まで生息するが、主な生息圏は刺網漁獲物における混獲率の低さや発見例が多いことから低潮線付近と考えられる。
- 個体数の動向 : 沖縄島の金武湾（海中道路）、中城湾（泡瀬）のアマモ場に、1990年代前半まで、少ないながら観察された。しかし、その後、両海域では大規模な海浜改変が実施され、その頃より殆ど確認できなくなった。一方、2007年に金武湾から幼貝が、2012年泡瀬で老成貝が唯一個体再確認された。
- 現在の生息状況 : 2012年以降も、沖縄島大浦湾、金武湾、中城湾共に生貝の生息が殆ど記録されず、復活の兆しは全くない。
- 学術的意義・評価 : 捕食者の多い熱帯域のアマモ場で遊泳行動を獲得して表在的に生存している二枚貝類で、生態学的に興味深く、生物地理学的にも先島諸島から記録が無く、沖縄島のみ隔離分布していることから遺伝的に分化している可能性があって、貴重な貝類である。
- 生存に対する脅威 : 泡瀬では埋立て、与那城海中道路では海岸道路拡張後に激減しており、アマモ場の人為的攪乱、陸土の大量流入や都市排水などの水質汚濁による清浄環境の消失が生育阻害をもたらしたと考えられる。
- 特記事項 : 本種の学名記載年を「1758」としている文献が多いが、正しくは1767である。
- 原記載 : Linnaeus, C. von, 1767. *Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis*. Ed. 12, reformata. Tome 1, pars 1-2. Impensis Direct, Laurentii Salvii, Holmiae, 1327+40 pp. (p. 1145, as *Ostrea plica*. Type loc.: “O. Indico”)
- 参考文献 : 久保弘文, 2012. ヒナキンチャク. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 115.
 久保弘文, 2014. ヒナキンチャク. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 216.
 水間八重・山下博由, 2002. 泡瀬干潟における機械による大規模な海草移植実験の現状について—主に海草場に生息する貝類に注目して—. 九州の貝, (59): 42-62.
 名和 純, 2005. ヒナキンチャク. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) —レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 319-320.

執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

和名 : コオキナガイ
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 異韌帶上目 スエモノガイ上科 オキナガイ科
 学名 : *Laternula impura* (Pilsbry, 1901)
 カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態 : 殻は透明感があり、薄質で、横長の卵形で前後端は開く。後端は伸展し、狭まり、くちばし状となる。殻表は微細顆粒が散在し、貝殻縁辺及び水管部は薄い黄土色の殻皮を被る。
 近似種との区別 : オキナガイは後端が狭まる点で類似するが、くちばし状とならず裁断状となる。
 分布の概要 : 日本本土から中国大陸沿岸の内湾に分布し、沖縄島は隔離分布。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : オキナガイは後端が狭まる点で類似するが、くちばし状とならず裁断状となる。
 生態的特徴 : 先行研究で類縁関係の強いソトオリガイ類がプランクトンのみならず陸地起源の有機物を消化できる酵素を持っているとされ、本種も類似した摂餌生態を有すると考えられる。
 生息地の条件 : 沖縄島中南部の島尻マージ(泥岩)を由来とする微細なシルト性の軟泥底のみに生息する。
 個体数の動向 : 中城湾の川田干潟、泡瀬干潟最奥部は埋立て、あるいは橋梁建設などで生息場所自体が大幅に減少し、佐敷干潟でも大規模埋立て後に泥質干潟が縮小、更には陸域からの栄養負荷によって底質が悪化して、激減した。
 現在の生息状況 : 現在、佐敷干潟において僅かな個体群が残存する他は壊滅的状况となっている。
 学術的意義・評価 : コオキナガイは南西諸島全域においても中城湾のみに分布する遺存的な個体群であり、生物地理学的意義が極めて大きい。
 生存に対する脅威 : 埋立てが最大の脅威であるが、すでに事後の状況であり、現状では佐敷干潟の包括的な保全しか方策は見当たらない。
 原記載 : Pilsbry, H.A. 1901a. New Mollusca from Japan, the Loo Choo Islands, Formosa and the Philippines. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 193–210. (pp. 208–209, as *Anatina impura*. Type loc.: “Kamakura, province of Sagami”)
 参考文献 : 加藤 真・福田 宏, 1996. 二枚貝綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 65-73.
 木村昭一, 2012. コオキナガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 168.
 木村昭一, 2014. コオキナガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 254.
 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
 名和 純, 2005. コオキナガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) —レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 326-327.
 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.
 Pilsbry, H.A. 1901b. New Japanese marine, land and fresh-water Mollusca. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 385–408, pls 19–21.
 庄啓謙, 1982. 中国近海鴨嘴蛤科の分類研究. 海洋及湖沼, 13(6): 553-561.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ジャングサマテガイ
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 無面目 マテガイ上科 マテガイ科
 学名 : *Solen soleneae* Cosel, 2002
 カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説 : p. 42. 沖縄市泡瀬干潟. 撮影 : 久保弘文.
 形態 : 最大殻長 50 mm 程のマテガイ類である。本科中ではやや寸胴で、太短い。不明瞭な淡灰紅色の班紋を有し、灰黄色の殻皮を纏う。生時、新鮮な個体の貝殻はピンク色を帯びるが、死後は時間と共に退色する。
 近似種との区別 : 近似種バラフマテガイに似るが、より太短く、班紋が不明瞭で、後端がより裁断状となる。ホソバラフマテガイは著しく細まり、殻皮が薄いため班紋が明瞭で、殻が非常に薄い。
 分布の概要 : 沖縄島金武湾、中城湾、羽地内海(中城湾で最も多くの個体数を確認)の他、アモイ(タイブ産地)、香港、マレーシアに分布する。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : バラフマテガイは日本本土温帯域に分布し、分布の重複は知られていない。
 生態的特徴 : 強力な斧足を用いて、砂〜砂礫に垂直に潜掘し、他のマテガイ類と同様、刺激を与えると水管を自切し、防御反応の一種と考えられる。
 生息地の条件 : 潮通しの良い中潮線〜低潮線付近までのマツパウミジグサ・リュウキュウスガモ等のアマモ場とそれに隣接する細砂底に生息する。
 個体数の動向 : 沖縄島は隔離分布地であり、水平・垂直ともに分布の幅も狭い。1980年代後半までうるま市海中道路や沖縄市泡瀬周辺ではごく普通に確認されたが、現在、海中道路ではほぼ消滅、泡瀬では特に近年の埋立て後にアマモ場環境が荒廃して生息数が激減し、個体群の存続が危ぶまれる。現在、中城湾の一部で少なからず観察できる場所が残っているが、生息範囲は非常に狭い。羽地内海ではきわめて稀で、絶滅した可能性もある。

- 現在の生息状況 : 最大生息地である泡瀬では依然、減少した状態のまま、復活の兆しはない。羽地内海では2000年以降記録がない。
- 学術的意義・評価 : 沖縄島は隔離分布地であり、大陸遺存種として遺伝的に固有集団を形成している可能性が高く、生物地理学的に極めて重要である。
- 生存に対する脅威 : 泡瀬では埋立て、与那城海中道路では海岸道路拡張後に激減しており、アマモ場の人為的攪乱、陸土の大量流入や都市排水などの水質汚濁による清浄環境の消失が生育阻害をもたらしていると考えられる。羽地内海では富栄養化によるアナアオサの大発生に伴う底質被覆や還元化で、酸欠状態となり、しばしば二枚貝類の大量斃死が確認されてきたが、こうした現象の繰り返しが壊滅的な個体群消滅をもたらした可能性がある。
- 原 記 載 : Cosel, R. von, 2002. Seven new species of *Solen* (Bivalvia: Solenidae) from the tropical western Pacific, with remarks on other species. *Collectanea Malacologica: Festschrift für Gerhard Falkner*. Falkner, M., Groh, K. & Speight, M.C.D. (eds), ConchBooks, Hackenheim / Friedrich-Held-Gesellschaft, München, 301–341, pls 31–38. (pp. 306–308, figs 6–8, pl. 32, figs 1–3, as *Solen soleneae*. Type loc.: “Xiamen Island (formerly Amoy), tropical Chinese coast”).
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ジャングサマテガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 171.
久保弘文, 2014. ジャングサマテガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 256.
水間八重・山下博由, 2002. 泡瀬干潟における機械による大規模な海草移植実験の現状について—主に海草場に生息する貝類に注目して—. 九州の貝, (59): 42–62.
名和 純, 2005. ジャングサマテガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 342.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : ヒレナシジャコ
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ザルガイ上科 ザルガイ科
- 学 名 : *Tridacna derasa* (Röding, 1798)
- 方 言 名 : マーギーラ
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー: 該当なし
- 形 態 : 殻は本科中、大型で、非常に厚質で重く、後方に延びた亜三角形、殻表には太い肋が隆起するが、肋状のヒレの発達が乏しく、概ね平滑で、成長輪脈が刻まれる。色彩は白色。足糸開口は非常に狭く、僅かに隙間が開く。殻長約 60 cm に達する。
- 近似種との区別 : 近似種ヒレジャコは殻に鱗上突起が発達し、シラナミ、ヒメジャコとは背縁部が開口することにより区別される。
- 分布の概要 : 宮古島、多良間島、石垣島名蔵湾、石西礁湖。
- 生態的特徴 : 外套膜に渦鞭毛藻類を共生させ、その光合成産物を栄養として摂取する。
- 生息地の条件 : サンゴ礁内の水深 1~10 m 付近のサンゴ礫~サンゴ底に腹縁を上にして横臥する。
- 個体数の動向 : 元々、個体数が非常に少なく、かつ著しく大型化する種であるため発見されやすく、多くが採捕されてしまったと考えられる。再生産を立証できる若貝の記録も全くないため、海流によって先島諸島に到達し、ごく稀に着底後、成長に成功した個体が、長期に渡って蓄積されてきた個体群の可能性もある。
- 現在の生息状況 : 多良間島で2000年に1個体、宮古島で2009年に1個体大型老成個体が確認された他は、野生種の生息記録がない。一方、人工作出種苗から多数の成貝を川平湾に畜養しているが、周辺での自然発生個体は見つかったことがない。大型種で漁業対象となっているにもかかわらず、新規定着が全く発見されてない。
- 学術的意義・評価 : 沖縄県最大の二枚貝類であり、水産学上重要であるのみならず、分布の北限として、生物地理学的にも重要である。
- 生存に対する脅威 : 人による捕獲。極めて稀な産出個体を確実に保護する必要がある。
- 特 記 事 項 : 少なくとも数十個体のレベルで川平保護水面内において人工繁殖され、殻長 30 cm 以上に成長した個体群が生残している。IUCN カテゴリー: Vulnerable (VU)。
- 原 記 載 : Röding, P.F., 1798. *Museum Boltenianum sive Catalogus cimeliorum e tribus regnis naturae quae olim collegerat Joa. Fried. Bolten, Pars Secunda. Typis Johan, Christi, Trappii, Hamburgi*, 199 pp. (p. 172, as *Tridacnes derasa*. Type loc. not designated)
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. ヒレナシジャコ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”. 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 337.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : オガタザクラ

〈貝類〉

- 分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
- 学 名 : *Aeretica tomlini* (E.A. Smith, 1915)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 形 態 : 最大殻長約 25 mm。シジミ型の膨らみのある丸い二枚貝類で、同心円状の細い成長輪肋を等間隔に刻む。殻色は、生時は紫色を帯びるが、死後は時間と共に紫色が抜けて薄い黄褐色となる。
- 近似種との区別 : ヨセギザクラはやや類似するが小型で、沖縄県ではいまだ記録が無い。
- 分布の概要 : 和歌山県、高知県、沖縄島東海岸（大浦湾、中城湾）、東南アジア、フィリピン。
- 生態的特徴 : 水管が長く、微細藻等の堆積有機物食と考えられるが、詳細は不明。
- 生息地の条件 : リーフの未発達な河口域に隣接する、泥分の少ない非サンゴ礁性細砂質の外浜干潟の潮間帯下部に生息する。
- 個体数の動向 : 1990年代前半まで沖縄島東海岸の大浦湾、与那原湾、中城湾に多産したが、与那原湾では埋立てによって個体群が消滅した。中城湾では生息確認がきわめて困難で、1990年代以降、記録が全くない。名護市大浦湾では近年まで健全な個体群が見られたが、2007年頃より個体数が激減した。
- 現在の生息状況 : 2010年以降も、金武湾、中城湾共に生貝が全く記録されていない上、大浦湾でも生息確認が困難となっており、全生息地で危機的状況にと言わざるを得ない。
- 学術的意義・評価 : 本種は先島諸島から記録がなく、大陸遺存の可能性もあって生物地理的に非常に重要であるほか、サンゴ砂の卓越する沖縄において、非石灰岩質の外浜干潟に適応し、生態学的にも興味深い二枚貝類である。
- 生存に対する脅威 : 埋立て、陸土の大量流入や都市排水などの水質汚濁が最大の減耗要因と考えられる。
- 原 記 載 : Smith, E.A., 1915. Note on *Tellina splendida* of Anton. Journal of Conchology, 14(11): 339-340. (pp. 339-340, as *Strigilla tomlini* (new replacement name for *Tellina splendida* Hanley, 1846, not of Anton, 1839)
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. オガタザクラ (オガタザラ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 119.
- 久保弘文, 2014. オガタザクラ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 227.
- 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
- 名和 純, 2005. オガタザクラ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 322-323.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

-
- 和 名 : ナミノコ
- 分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 フジノハナガイ科
- 学 名 : *Latona cuneata* (Linnaeus, 1758)
- カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 殻長約 3 cm でアサリ型の形状。殻は厚く、殻の後部に布目状の彫刻を有する。
- 近似種との区別 : 近縁種と同様の環境に生息するリュウキュウナミノコとは、本種はより大型で殻の後部に布目状の彫刻があることで容易に区別できる。
- 分布の概要 : 沖縄島（金武湾を代表する東海岸）、伊良部島、西表島に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : リュウキュウナミノコに比べ、本種の分布域は非常に限定的である。
- 生態的特徴 : 清浄な砂浜海岸の細砂底に生息し、潮汐に合わせ砂浜を上下に移動する。
- 生息地の条件 : 河口付近に発達する砂浜海岸の細砂底に生息する。
- 個体数の動向 : 西表島のトゥドゥマリ浜では、2016年の調査で生貝（新鮮な死殻も含め）は確認されていない。沖縄島の金武湾や大浦湾の産地では、2016年の調査で生貝が数個体見つかる程度に密度が低下している。
- 現在の生息状況 : 西表島のトゥドゥマリ浜では、生貝は確認されていない。沖縄島の金武湾や大浦湾の砂浜海岸では、近年生貝は稀に見つかる程度であり、県内の個体群の絶滅が危惧される。
- 学術的意義・評価 : ナミノコの生息する細砂からなる砂浜海岸は、現在の沖縄県では非常に限定的な沿岸環境であり、そのような環境を代表する指標種と位置づけられる。
- 生存に対する脅威 : 沿岸域の開発や護岸整備などによる底質（粒度の変化も含む）の変化、底質の供給量の変化、水質の悪化。
- 原 記 載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cumcharacteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823pp. (p.683, as *Donax cuneata*. Type loc. not designated)
- 参 考 文 献 : 名和 純, 2005. ナミノコガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 338-339.
- 山下博由・久保弘文, 2012. ナミノコ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 131.

執筆者名：小澤宏之

- 和名：オオズングリアゲマキ
 分類：二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 キヌタアゲマキ科
 学名：Azorinus scheepmakeri (Dunker, 1852)
 方言名：イーミナー
 カテゴリ：絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ：絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 図の解説：p. 42. 大宜味村塩屋湾。撮影：小澤宏之。
 形態：殻長 9 cm。長楕円形、前後端が開く。殻表には、黄褐色の殻皮が発達する。殻頂からは腹縁にかけ弱い溝が発達する。
- 近似種との区別：近縁種のズングリアゲマキ及びホソズングリアゲマキは、オオズングリアゲマキより小型で、殻質は薄く、生息環境も異なる。なお、これらの種の生息域は重ならない。
- 分布の概要：沖縄島の羽地内海、塩屋湾。これまで羽地内海のみが国内産地として知られていたが、2015年に塩屋湾でも生息が確認された。
- 生態的特徴：内湾干潟の低潮線付近の砂泥底に生息する埋在性種。生息孔は底質表面に近い部分は Y 字型に分岐しており、それより下は直径約 3 cm の滑らかな楕円形状を有する。採取する際には、巣穴の奥深くに素早く潜る。
- 生息地の条件：泥分の多い底質環境。潮間帯下部に多いが、潮下帯に生息する可能性も考えられる。
- 個体数の動向：詳細は不明であるが、地元で本種を選択的に採取する住民へのヒアリングによると、以前 (20-30 年前) よりは、確実に個体数が減少しているとのことである。
- 現在の生息状況：産地が極めて限定的で、かつ本種が生息する泥底の範囲は極めて狭い。
- 学術的意義・評価：国内では産地が極めて限定的であり、保全に向けた基礎的生態の解明は急務である。
- 生存に対する脅威：陸域からの土砂の流入や航路浚渫、護岸整備など、底質環境に変化を及ぼす行為。
- 特記事項：現地住民は、昔から備中鍬を用い器用に本種を採取し、祝いの席などの食材として利用してきた。採取の際は、泥干潟表面の水管孔の形状から存在を見極め、鍬で底質ごと採取する方法をとっている。なお、採取する際に深く潜られた場合には、労力があるので掘り出すことはないそうである。水管孔の形状については、他の埋在生物のものとははっきりと見極めているようである。
- 原記載：Dunker, G., 1852. Diagnoses molluscorum novorum. Zeitschrift für Malakozoologie, 9: 49-62. (pp.56-57, no.11, as *Macha Scheepmakeri*. Type loc.: "ignota")
- 参考文献：久保弘文, 2012. オオズングリアゲマキ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 137.
 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
 名和 純, 2005. オオズングリアゲマキ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 323-324.
 山下博由, 2008. 羽地内海の貝類とその利用. “羽地内海うむしるむん図鑑”, 羽地内海の自然を守り育む会 (編), 羽地内海の自然を守り育む会事務局, 名護, 15.

執筆者名：小澤宏之

- 和名：ナガタママキ
 分類：二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 バカガイ科
 学名：*Mactra* cf. *opposita* Reeve, 1854
 カテゴリ：絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリ：絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 図の解説：p. 42. 与那原町与原ビーチ 1992 年採集。撮影：久保弘文。
 形態：殻長約 30 mm の横長二等辺三角形を呈する小型二枚貝類。殻表は平滑で光沢が有り、うっすらと灰褐色の殻皮を纏い、褐色放射彩を飾る。殻頂は中央。
- 近似種との区別：近縁種トウカイツママキは、殻長 15 mm 程度とより小型で、放射彩が太く、殻頂がやや前方に寄る。
- 分布の概要：紀伊半島以南との記載があるが、具体的な産出情報がほとんど無く、種子島～奄美大島、沖縄島、西表島が分布の中心と考えられる。国外では台湾に分布し、類似種が大陸 (ベトナムや中国南部沿岸) に分布する。
- 生態的特徴：砂中に浅く埋在して、海水ごと植物プランクトン等を吸い込んで、鰓でろ過して摂食する。水管は短く、風の上げ潮時には砂底にいよる「貝の目」として水管が確認されることがある。
- 生息地の条件：やや外洋に面した非石灰岩性の細砂質の干潟や浜 (サンゴ礁由来の白砂ではなく、より比重が重い陸由来の砂) の中潮線～水深 1 m 付近までに確認され、近似種トウカイツママキより垂直分布の幅が狭い。
- 個体数の動向：沖縄島では 1990 年代まで与那原町に、島内で最も広範囲でかつ健全な個体群が存在したが、埋立てにより全て消失した。羽地外海では 2000 年前半まで健全な個体群があったが、畜産排水や赤土流入等の底質悪化により、個体数が激減した。大浦湾の干潟では 2007 年頃から、個体密度が激減した。これには同時期に行われていた河川や橋梁工事による影響が否定できない。
- 現在の生息状況：同上の状況から改善する兆候はほとんど無い。西表島でも 2015 年 12 月の調査では未確認で、打ち

- 上げられた死殻すら確認されない。
- 学術的意義・評価：バカガイ類は地理的分化が著しいグループで、分子系統解析によって地方亜種や地域個体群が数多く認識される可能性が高く、今後の研究が期待される。本種はサンゴ砂の卓越する沖縄において、非石灰質の外浜干潟に適応し、生態学的にも興味深い二枚貝類である。
- 生存に対する脅威：埋立て、陸土の大量流入や都市排水などの水質汚濁が最大の減耗要因と考えられる。
- 特記事項：レッドデータおきなわ前版のアダンソタママキと同じ種にあたる。久保・山下 (2012) で cf. 表記 (同種の可能性があるが同定未確定) とした *Maetra luzonica* Deshayes in Reeve, 1854 は殻長 5 cm に達する中型のバカガイ類で、東南アジアから知られる別種である。Huber (2010) の示す *M. opposita* はマダガスカルから知られる種で、これも別種の可能性があるため、今回も同種と断定せず cf. 表記にとどめた。
- 原記載：Reeve, L.A., 1854. Monograph of the genus *Maetra*. Conchologia Iconica: or, Illustrations of the Shells of Molluscan Animals, 8: 125 pls 1–21. (sp. 95, pl. 18, fig. 95, as *Maetra opposita*. Type loc.: “Island of Luzon, Philippines”)
- 参考文献：Dautzenberg, P., 1929. Contribution à l'étude de la faune de Madagascar. Mollusca 2. Mollusca marina testacea. Faune des Colonies françaises, 3: 321–636, pls 4–7.
- Huber, M., 2010. Compendium of Bivalves. A Full-color Guide to 3,300 of the World's Marine Bivalves. A Status on Bivalvia after 250 Years of Research. ConchBooks, Hackenheim, 901 pp.
- 久保弘文, 2014. ナガタママキ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 232.
- 久保弘文・山下博由, 2012. ナガタママキ (アダンソタママキ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 141.
- 名和 純, 2005. アダンソタママキ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 320–321.

執筆 者 名：久保弘文

和名：タイワンシラオガイ
分類：二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科
学名：*Circe scripta* (Linnaeus, 1758)
カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー：絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態：殻長約 40 mm の扁平なおにぎり形で、殻は厚く、重たい。殻表には殻頂部を挟んで左右に分岐状の彫刻があり、漣状となる。殻色は白く染分け状となる型や褐色の矢筈模様を彩る型などバリエーションがある。

近似種との区別：トモシラオガイは更に小型で膨らみが強く、区別される。

分布の概要：国外は台湾、海南島、中国南部、ベトナムに分布し、国内では沖縄島のみ。

近縁な種及び群との分布状況の比較：日本本土にはシラオガイが生息する。

生態的特徴：砂中に浅く埋込して、海水ごと植物プランクトン等を吸い込んで、鰓でろ過して摂食する。水管はやや短く、潜砂行動は不活発で、成貝は殻が厚く重たいことから、一旦、掘り出されるとすぐ元に戻れず、しばしば干潟に転がっている状態も見受けられる。

生息地の条件：沖縄島全域の大規模なアマモ場が形成される潮通しの良い内湾に生息する。潮間帯の粗砂底に分布の中心があるが、金武・中城両湾の水深 15 m 付近までの潮通しのよい粗砂底にも、場所により生息が確認されている。

個体数の動向：1980 年代後半まで沖縄島では市場で販売されるほど多産し、特にうるま市や沖縄市、糸満市、豊見城市等では多産したが、現在、いずれの海域ともに生息数が激減した。減少傾向は沖縄島全域に及ぶが、特に海浜開発の著しい沖縄島中南部では健全な個体群はまったく認められない。

現在の生息状況：泡瀬では埋立て事業後、著しく減少したが、2014 年の調査では沖縄市泡瀬北岸で、台風後に複数の合弁死殻が確認されている。また、名護湾、大浦湾でも合弁個体の打上げは見つかっている。しかし、いずれも、かつての出現状況とは比較にならないほど減少しており、絶滅寸前の状態からは脱していないと考えられる。

学術的意義・評価：奄美大島、先島諸島に分布しないことから、沖縄島固有の遺伝集団の可能性があり、生物地理学的重要性が高く、かつての多産状態から類推して食物連鎖や生態的機能へも大きな影響を及ぼしている可能性がある。

生存に対する脅威：埋立てにより本種の個体群の多くは生息地ごと消失しており、今後の更なる埋立ては本種の壊滅的な打撃となろう。清浄な環境でのみ見つかるため、陸域からの過剰栄養や土壌微粒子の負荷増大で、本種はさらに減少すると考えられる。

原記載：Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cumcharacteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 689, as *Venus scripta*. Type loc.: “Indiis”)

参考文献：加藤 真・福田 宏, 1996. 二枚貝綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 65–73.

久保弘文, 2014. タイワンシラオガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 236.

久保弘文・山下博由, 2012. タイワンシラオガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 146.
 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
 名和 純, 2005. シラオガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 346.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : トウドウマリハマグリ
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科
 学名 : *Meretrix* sp. B
 カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

図の解説 : p. 42. 西表島浦内川河口. 撮影 : 久保弘文.
 形態 : ハマグリ型の二枚貝類で最大 6 cm に達する。殻表は薄く半透明の殻皮を纏い、光沢がある。色彩は白地にハの字の黒褐色の太い放射条を 2 本有する典型的なハマグリ模様の他、赤褐色や灰色など変異に富む。

近似種との区別 : 日本産ハマグリ属の中では最も小型で、ハマグリと比べると殻の丸みが弱く、チョウセンハマグリと比べると殻頂が丸く、膨らみがある点で区別される。

分布の概要 : 既往産地としては西表島浦内川河口 (浦内橋より下流側) とトウドウマリ浜で確認されているに過ぎない

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本産ハマグリ属の中では最も分布域が狭く、推定 0.7 km² で、分布上比較すべき種はない。

生態的特徴 : 砂中に浅く埋込して、海水ごと植物プランクトン等を吸い込んで、鰓でろ過して摂食する。水管はやや短く、風の上げ潮時には砂底にいわゆる「貝の目」として確認されることがある。斧足は良く発達しており、潜砂行動は活発で俊敏。

生息地の条件 : 外洋に面した河口域の非石灰岩性の細砂質の干潟や浜 (サンゴ礁由来の白砂ではなく、より比重が重い陸地由来の砂) の中潮線～低潮線付近に確認され、非常に垂直分布の幅が狭い。

個体数の動向 : 2010 年時点の生息密度は、0.13 個/ m² であった (山下博由・松本貢ほか, 未発表)。

現在の生息状況 : 主生息域 (トウドウマリ浜) での最新調査 0.1 個/ m² (小菅, 2015) や、2015 年 12 月の浦内川河口調査でも本種の生息密度 0.01 個/ m² と著しく低い状態で、絶滅の危機的状況は一層深刻な様相を見せている。

学術的意義・評価 : 沖縄のみならず、日本でも最も生息範囲の狭いハマグリ類で、種の保存上や生物地理学的に極めて重要であり、日本産海産貝類の中でも屈指の要保全

対象種と考えられる。

生存に対する脅威 : 減少要因については水質、底質汚濁が考えられるが、現状は繁殖集団として再生産が期待できない危険なレベルに達している可能性が高い。

特記事項 : 今後、生息海域の徹底した環境保全と共に、親資源を用いた人工繁殖とそれによる稚貝の種苗生産による資源再生の試みや採捕禁止措置を検討する必要がある。

参考文献 : 小菅丈治, 2003. 西表島浦内川河口に生息するチョウセンハマグリ. 南紀生物, 45(2): 128-131.
 小菅丈治, 2015. トウドウマリハマグリ (軟体動物門, 二枚貝綱, マルスダレガイ科) の生息状況 -2003~2015年. 南紀生物, 57(2): 121-122.
 久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック ーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告-2. 西表島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
 名和 純, 2005. トウドウマリハマグリ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 325-326.
 山川 (矢敷) 彩子・今井秀行, 2013. 東アジアにおけるハマグリ類の遺伝的多様性と集団構造. 日本生物地理学会会報, 68: 65-83.
 山下博由, 2012. トウドウマリハマグリ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 150.
 山下博由, 2014. トウドウマリハマグリ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 239.
 山下博由・佐藤慎一・金敬源・逸見泰久・長田英己・山本茂雄・池口明子・水間八重・名和 純・高島 麗, 2004. 沈黙の干潟ーハマグリを通して見るアジアの海と食の未来. 高木基金助成報告集 市民の科学をめざして, 1: 85-91.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ツキカガミ
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科

〈貝類〉

- 学 名 : *Phacosoma aspera* (Reeve, 1851)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 図の解説 : p. 42. 西表島. 撮影 : 久保弘文.
形態 : 殻長 25 mm、満月のように丸い形状で、膨らみはやや弱く、白色で光沢があり、明瞭で密な成長輪がある。
- 近似種との区別 : 普通種オノカガミとは殻に模様が全くないことで明確に区別される。
分布の概要 : 中国大陸南部～ベトナム、フィリピンに分布する。
生態的特徴 : 砂中に浅く埋在して、海底に水管を出し、海水ごと植物プランクトン等を吸い込んで、鰓でろ過して摂食する。
- 生息地の条件 : 内湾・河口干潟の中・低潮帯付近の砂底・砂泥底に生息する。
個体数の動向 : 2005年は2個体/m²と報告されているが、2015年12月に浦内川河口においてFixed Time法(一定時間探索法)で調査し、時間を調査面積に換算した結果、約0.06個/m²という非常に希薄な状況が算出された。しかし確認された個体6個中4個体が幼貝で、再生産していることは示唆された。一方、白浜港での浚渫砂内に高密度な死殻の蝸集が確認され、高密度に生息できる種であることが推測された。従って、現在見られる非常に希薄な産出状況は、過去に何らかの原因で生じた大幅な個体数減少に起因する可能性もある。
- 現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 八重山諸島を北限とする希少種で、生物地理学的に重要である。カガミガイ属は多くの種が潮通しの良い砂、あるいは砂泥に生息圏をもつが、本種は特異的にマングローブ周辺河口域に適応した生態を有している。
- 生存に対する脅威 : 河口付近の生息地における水質及び底質悪化、埋立てや航路浚渫による攪乱。
特記事項 : 石垣島での調査では伊原間湾で確認しているが、その他の情報はほとんど無い。与那国を除く、八重山諸島の河口細砂域での綿密な調査が必要と思われる。
- 原記載 : Reeve, L.A., 1851. Monograph of the genus *Artemis*. Conchologia Iconica: or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 6: pls 1-10. (sp. 49, pl. 9, fig. 49, as *Artemis aspera*. Type loc.: "Manila (in sandy mud at low water)")
- 参考文献 : 久保弘文, 2014. ツキカガミ. "レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 405.
久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック—レッドデータおきなわ—第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—2. 西表島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
名和 純, 2005. ツキカガミ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)—レッドデータおきなわ—", 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 397-398.
山下博由・久保弘文, 2012. ツキカガミ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 147.
庄啓謙, 1964. 中国近海簾蛤科の研究. 海洋科学集刊, 5: 43-106, pls 1-10.
- 執筆者名 : 久保弘文

3) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

- 和 名 : ユキスズメ
分 類 : 腹足綱 アマオブネ型亜綱 Cycloneritimorpha 目 アマオブネ上科 ユキスズメ科
学 名 : *Phenacolepas crenulata* (Broderip, 1834)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形 態 : 殻は本科中では大型、やや低い円錐笠形、殻表には縮れた毛を伴う放射状殻皮を被り、殻自体には細かい放射状の顆粒状彫刻を有する。軟体は赤橙色。殻長 20 mm 程度。
- 近似種との区別 : 近似種ミヤコドリはより小型で、縮れた毛状の殻皮を欠く。
分布の概要 : 沖縄全域(大東島海域等強外洋域を除く)。
生態的特徴 : 埋没した岩盤の下で殆ど移動しないと考えられ、アマモ場のアナエビ類と同所的にみられ、共生関係にあると考えられる。
- 生息地の条件 : 豊かな自然度の保たれたアマモ場やこれと隣接するサンゴ礁の深く埋まった岩盤の下(埋もれ石)の存在が生息条件となる。
個体数の動向 : 沖縄島中南部など開発の進んだ沿岸域を中心に本種の生息場所である埋もれ石下の環境が、都市下水や畜産排水などの富栄養化と赤土沈積で、著しく悪化し、死殻は見られるが、生貝が殆ど見られなくなっており、多くの個体群が死滅したと考えられる。同様の環境悪化は先島海域の、特に石垣島南部や宮古島西部においても拡大している。また、かつては本種の好適な生息環境が広がっていた沖縄島中南部のアマモ場は、埋め立てによって、多くが生息場所ごと消失した。
- 現在の生息状況 : 同上で多くが消失・死滅している中、人的改変のほとんど無い自然海岸に少ないながら棲息している。

- 学術的意義・評価 : アナエビとの共生関係や、埋れ石下環境への適応等特異な生態から学術的に重要な貝類である。
- 生存に対する脅威 : 富栄養、微粒子沈積等底質悪化による埋れ石下環境の荒廃、埋立てによる生息場所の消失。
- 原 記 載 : Broderip, W.J., 1834. Description of a new genus of Gastropoda. *Proceedings of the Zoological Society of London*, for 1834: 47-49. (p. 48, as *Scutella crenulata*. Type loc.: "ad insulam Anään (Chain Island)")
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. ユキスズメ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー". 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 408.
- 久保弘文, 2012. ユキスズメ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 26.
- 久保弘文, 2014. ユキスズメ. "レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 261.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : オカイシマキ

分 類 : 腹足綱 アマオブネ型亜綱 Cycloneritimorpha 目 アマオブネ上科 アマオブネ科

学 名 : *Neritodryas cornea* (Linnaeus, 1758)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形 態 : 殻は大型で、亜球形、殻表は黄土色で多数の螺条を巡らす。また個体によっては、紫褐色の小斑紋を散在させる。内唇は白く、蓋は黒色。最大殻径約 30 mm。

近似種との区別 : 国内に同属の近縁種は知られていない。

分布の概要 : 沖縄島中北部、石垣島、西表島、与那国島。

生態的特徴 : 岩盤や貝殻上にドーム上の卵嚢を産み付け、卵嚢からベリジャー幼生が浮出し、海へ下って、成長し、再び河川を遡上すると考えられている。

生息地の条件 : 本種は遡河性アマオブネ類中、最も上流部に生息し、河口域から源流までのトータルな遡上可能環境 (被食回避も含む) が無くては、まとまった個体群が維持できないと考えられる。特に水量の長期的維持には水源涵養機能の高い森林、また鳥類による捕食回避には樹幹が閉じた森林に覆われる等河川床が低照度である必要があると考えられる。

個体数の動向 : 沖縄島では産出例がきわめて少なく、1990年代まで中部の1河川に生息していたが、上流部の河川改修後に消滅した。また、与那国島では1990年代前半までは多産したが、2014年に大濁水に見舞われて著しく減少した。

現在の生息状況 : 石垣島では限られた少数の川を除いて、その生息数は少ない。西表島では規模の大きな河川の源流部では、個体数は少なくない。

学術的意義・評価 : 両側回遊性で生態学的研究上、重要な研究材料であり、移動性に乏しく、大型種で成長に時間も数年を要すると考えられるため、長期的な河川環境の安定性を鑑みる指標としても重要である。

生存に対する脅威 : 狭い範囲に生息し、大型化することから収集家によって捕獲されやすい。

原 記 載 : Linnaeus, C. von, 1758. *Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cumcharacteribus, differentiis, synonymis, locis*. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 777, as *Nerita cornea*. Type loc.: "...")

参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. オカイシマキ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 350.

久保弘文, 2012. オカイシマキ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 23.

久保弘文, 2014. オカイシマキ. "レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 260.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : ウミヒメカノコ

分 類 : 腹足綱 アマオブネ型亜綱 Cycloneritimorpha 目 アマオブネ上科 アマオブネ科

学 名 : *Smaragdia* sp.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形 態 : 殻長 3.5 mm、殻径 4 mm。殻は球形で厚く、殻表は平滑で光沢をもち、象牙色の地に黒色のジグザグ模様を走らせるとともに、短い黒条を等間隔に並べた帯を2本螺状に巡らす。蓋は半月形で石灰質、象牙色、顕著な突起 (ペグ) を持つ。

近似種との区別 : キンランカノコは殻の螺塔がより高く、輪郭は縦長となり、殻表の模様は赤と黄色から成る。クサイロカノコは殻のほぼ全体がエメラルドグリーンを呈し、白色斑を並べる。また恩納村等からはこれらの種とは異なる種名未詳の2種が確認されている (久保, 2014: pl. 8)。

分布の概要 : 房総半島・油谷湾〜八重山諸島。国外の記録は知られておらず、日本周辺固有種の可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : キンランカノコは浜名湖・油谷湾〜オーストラリア北部、クサイロカノコは奄美

〈貝類〉

- 生態的特徴： 大島以南のインド-太平洋の広範囲に分布し、本種の分布範囲より遥かに広い。生貝は海草のウミヒルモ類を摂食し、その葉・茎上や根元周辺に見られる。周囲の固い基質上に、卵囊（円く扁平な無色透明のカプセルに約120個の卵が螺旋状に並ぶ）を産みつける。
- 生息地の条件： 内湾潮下帯～水深20m付近までの砂底・砂泥底のアマモ場において、ウミヒルモ類がまとまって繁殖していることが必須である。
- 個体数の動向： 最近20年間での生貝の確認例は著しく少なく、特に九州以北では5箇所以下にとどまる。
- 現在の生息状況： 沖縄島から西表島にかけて比較的広い範囲に複数の産地が存在し、他県ほど深刻な衰退傾向にはないが、個体群はウミヒルモ類に強く依存し、海岸開発によるアマモ場の減少が個体群の存続に直接的な打撃を与えるため、決して安泰ではない。
- 学術的意義・評価： 良好なアマモ場の環境指標種として有用である。未記載種の可能性があり、また沖縄県は本種の分布南限に相当するかもしれない。
- 生存に対する脅威： 埋立や海底浚渫などの海岸開発、水質汚濁。
- 特記事項： かつてはキンランカノコと種自体が混同され、さらに近年までキンランカノコとレモンカノコは学名が取り違えられていた。
- 参考文献： 愛知・岡山・熊本各県レッドデータブック掲載種。
福田 宏, 1996. 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子(編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
福田 宏・藤野睦子・江田伸司, 2014. 岡山県倉敷市高洲で生貝が見出されたウミヒメカノコ(腹足綱:アマオブネ科), ならびに同種とキンランカノコ・レモンカノコを巡る同定の混乱. 倉敷市立自然史博物館研究報告, (29): 29-38.
久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会(編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
山下博由, 2014. ウミヒメカノコ. “レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 261.
山下博由・久保弘文, 2012. ウミヒメカノコ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 24.
- 執筆者名： 福田 宏・久保弘文

和名： **イリオモテムシオイ (新称)**
分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
学名： *Chamalycaeus* sp.
カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

- 図の解説： p. 42. 西表島南部. 撮影：久保弘文。
- 形態： 貝殻は小型(殻径約4mm)で、殻長は短く(約1.8mm)、やや円盤形で、螺塔は低く、縫合は深い。殻口から約1/5のところにくびれた頸部を有し、この部分はほとんど平滑で光沢がある。虫様管は長い。殻口は円形で、角を持たず、二重にならない。
- 近似種との区別： 奄美諸島に分布する本属の種とは、彫刻が著しく細かいこと、頸部はほぼ平滑に見え、光沢があること、蓋は低円錐状であること等によって区別できる。タイワンムシオイとも彫刻が細かいことによって区別は容易である。
- 分布の概要： 西表島のみ固有種。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 多少、殻形態の類似した同属の複数種が、奄美諸島と台湾に分布する。特に、奄美諸島ではいくつもの種に分化している。
- 生態的特徴： 低山部の林床の落葉下に生息する。
- 生息地の条件： 湿性な環境の森林が保たれていること。
- 個体数の動向： 20世紀後半には数か所で確認され、1か所では比較的高密度であった。
- 現在の生息状況： 過去に高密度であった地点では現在生息が確認できていない。
- 学術的意義・評価： 比較的広い分布を示す属の中で、八重山諸島では、この種のみが知られている。
- 生存に対する脅威： 森林伐採や薬剤散布。

執筆者名： 黒住耐二

和名： **ヒメオキナワヤマトニシ (新称)**
分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
学名： *Cyclophorus* sp. 2
カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

- 図の解説： p. 42. 撮影：上島励。
- 形態： 貝殻はヤマトニシとしては小型(殻径20mm前後)で、螺塔はやや高く、臍孔は狭い。殻はやや厚い。螺層は膨らみ、縫合は深く窪み、体層周縁は弱く角張る。殻色は淡橙色で、体層周縁に暗褐色の色帯を持つことが多く、底面に細くて弱い色帯を複数持つことがあり、上面には多数の斑点を持つ。殻表は平滑。殻口は全縁で丸く、殻口縁は少し広がり肥厚する。
- 近似種との区別： 琉球列島のヤマトニシ類は形態が酷似した種が多数存在する一方で、種内変異が激しく、形態に基

づく識別は極めて困難である。本種は、伊平屋島と伊是名島の固有種で、伊平屋島に広く生息するイヘヤヤマタニシとは分布域を異にする。

分布の概要：伊平屋島の南部、野甫島と伊是名島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：伊平屋島には本種の他にイヘヤヤマタニシが生息し、沖縄島から宮古島にかけてリュウキュウヤマタニシ、沖縄島にクニガミヤマタニシ、イトマンヤマタニシ、オキナワヤマタニシ、八重山諸島にはヤエヤマヤマタニシ、台湾には *C. friesianus* 他数種が分布する。

生態的特徴：主として自然林の落葉下に生息するが、林縁や道路脇などの開けた環境にも生息する。

生息地の条件：同上。

個体数の動向：伊平屋島では個体数は多い。野甫島と伊是名島では死殻が散見されるが、生息地はきわめて少ないため、個体数は大きく減少したと考えられる。

現在の生息状況：伊平屋島では個体数は多いが、野甫島と伊是名島では生息地はきわめて少なく重点的に保全する必要がある。

学術的意義・評価：ヤマタニシ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要。

生存に対する脅威：開発による森林の伐採および林床の乾燥化、近縁種との交雑。

特記事項：未記載種。琉球列島産ヤマタニシ類の中で最も分布域が狭く、2つの島では生息地が減少しているため重点的に保全する必要がある。

参考文献：上島 励, 2014. 伊是名島のオキナワヤマタニシ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 432.

執筆者名：上島 励

和名：オキノエラブヤマトガイ

分類：腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマタニシ上科 ヤマタニシ科

学名：*Japonia tokunoshimana okinoerabuensis* Minato, 1974

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

図の解説：p. 43. 生体：恩納村. 標本：名護市. 標本 (殻皮拡大)：恩納村. 撮影：久保弘文.

形態：殻は小型でヤマタニシ形である。沖縄島の個体群においては、殻長約 4.8~6.1 mm、殻径約 5.0~6.0 mm である。殻の体層周縁に2列の殻皮毛を有する。沖縄島産の本種の殻皮毛は、中心軸の左右が僅かに薄い葉状に広がる程度のより細長い花弁状となる。

近似種との区別：沖縄島では、殻皮毛が細く毛状のケハダヤマトガイ種群も生息するが、殻皮毛の形状が異なるので区別できる。

分布の概要：奄美大島、沖永良部島、沖縄島に分布記録が見られる。沖縄島では、大宜味村、恩納村、南城市で分布確認されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較：殻皮毛が幅広い花弁状となる名義タイプ亜種のトクノシマヤマトガイは徳之島のみ分布する。殻皮毛が同形状であることより同一種と判断される個体群は、沖永良部島 (タイプ産地) と奄美大島に分布する。

生態的特徴：林床の保水性が高い土壌に生息する。降雨時には地表を這い、比較的活動的な姿も見られるが、晴天時は殻皮に泥を付け、土壌にまぎれる様に生息している場合が多い。

生息地の条件：良好な森林環境の林床落葉層下の保水性の高いリター層に生息する。

個体数の動向：もともと個体数が少ない種であるが、開発により良好な自然林環境が減少していると考えられ、それに伴い、本種の個体数も減少傾向にあると思われる。

現在の生息状況：良好な自然林の林床に生息する。湿り過ぎず、適度な湿度が保たれる保水性の高い土壌に少数個体が生息する。生息密度は低く、生息範囲も限られている場合が多い。

学術的意義・評価：現状では殻皮毛の形状のみで分類されているが、今後、解剖学および分子レベルでの解析が進むことにより、各地域個体群とされていたものの固有性がより高く評価される可能性がある。

生存に対する脅威：沖縄島では比較的広範囲に分布するものの、生息地はきわめて限られており、近年の急速な開発の影響が懸念される。

特記事項：殻皮毛の形状により本種に同定しているが、今後、沖縄島の個体群と沖永良部島の典型的な本種個体群との分子生物学的検討が必要であろう。

原記載：湊 宏, 1974. 沖永良部島産ヤマトガイ属の新亜種. *Venus*, 33(2): 47-50. (pp. 47-50, textfig. 3, pl. 3, figs 1-3. Type loc.: “鹿児島県沖永良部島大山・昇竜洞付近”)

参考文献：早瀬善正, 1997. 奄美大島で採集されたトクノシマヤマトガイ. *かきつばた*, (23): 10-11.

早瀬善正, 1998. 「奄美大島で採集されたトクノシマヤマトガイ」の追加報告. *かきつばた*, (24): 15.

早瀬善正・尾形綾子, 2009. 沖縄本島で確認されたオキノエラブヤマトガイ. *かきつばた*, (34): 46-47.

久保弘文, 2012. 陸生貝類調査. “平成23年度地域生物多様性保全計画 (大宜味村地域連携保全活動計画) 策定調査業務報告書”, 環境省・大宜味村 (編), 環境省・大宜味村, 56-64.

久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.

執筆者名：早瀬善正

和名 : ヨナグニヤマトガイ (新称)
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
学名 : *Japonia* sp. 1
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 43. 与那国島比川. 撮影 : 早瀬善正.
形態 : 殻は小さく(殻径約 4 mm)、螺塔は高く(殻長約 4 mm)、円錐型。体層周縁は丸みを帯びる。殻口は薄く、反曲せず、肥厚しない。縫合はくびれる。殻は薄く、赤みを帯びた褐色で、成長線に沿った弱い淡色縦列が不規則に出現する。殻表には弱い縦肋状の殻皮の張り出しが密に並び、弱い螺状脈もあるが、幼層でのみ顕著。体層周縁には毛の列が2列あるが、短い。臍孔はやや広く開く。蓋は革質で薄い。

近似種との区別 : 本種は沖縄県産のヤマトガイ類よりも螺塔が細長く、毛が短いこと、殻色で識別される。分布域は与那国島に限定される。

分布の概要 : 与那国島にのみ分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 西表、石垣島にはヤエヤマヤマトガイが分布し、沖縄島周辺にはケハダヤマトガイ種群が分布する。

生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 森林の乾燥化により減少している。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : ヤマトガイ類は琉球列島内で多数の種に分化していると考えられ、与那国島に固有の本種は生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項 : 未記載種。

参考文献 : 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島, *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
湊 宏, 1976. 与那国島の陸産貝類相. *Venus*, 35(4): 163-184.

執筆者名 : 上島 励

和名 : ヤエヤマヤマトガイ (新称)
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
学名 : *Japonia* sp. 2
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 43. 撮影 : 上島励.
形態 : 殻は小さく(殻径約 4 mm)、螺塔は高く(殻高約 4 mm)で円錐型。体層周縁は丸い。殻口は薄く、反曲せず、肥厚しない。縫合はくびれる。殻は薄く、褐色、殻表には弱い縦肋状の殻皮の張り出しが密に並び、弱い螺状脈も見られる。体層周縁には長い毛の列が2列あり、底面では短い毛の列が螺状脈に沿って並ぶ。臍孔はやや広く開く。蓋は革質で薄い。

近似種との区別 : 琉球列島産ヤマトガイ類とは遺伝的に異なるが、貝殻で識別することは困難である。

分布の概要 : 西表島、石垣島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 与那国島にはヨナグニヤマトガイ、沖縄島周辺にはケハダヤマトガイ種群が分布する。

生態的特徴 : 標高の高い自然林の湿った落葉下に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 過去の記録はないが、個体数は非常に少なく、至適な生息環境が減少しているため、減少していると思われる。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : ヤマトガイ類は琉球列島内で多数の種に分化していると考えられ、八重山に固有の本種は生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項 : 未記載種。

執筆者名 : 上島 励

和名 : ケハダヤマトガイ種群
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
学名 : *Japonia* spp.
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧種 (NT) (ケハダヤマトガイ) ※

※本改訂(沖縄県)はケハダヤマトガイに複数の隠蔽種が存在するとして種群として扱った。

形態：殻は小さく（殻径約 4～6mm）、螺塔は高く（殻長約 5mm）で円錐型。体層周縁は丸みを帯びる。殻口は薄く、反曲せず、肥厚しない。縫合はくびれる。殻は薄く、褐色、殻表には弱い縦肋状の殻皮の張り出しが密に並び、細かい螺条を多数有する。螺条に沿って毛（殻皮の突出）の列があり、体層周縁の毛（2～3列）は特に長い。臍孔はやや広く開く。蓋は革質で薄い。

近似種との区別：オキノエラブヤマトガイとは毛の先端が細いことで区別されるが、ケハダヤマトガイとされてきたものには複数の隠蔽種が含まれ、それらは形態では識別が困難である。

分布の概要：沖縄島および周辺の島。

近縁な種及び群との分布状況の比較：“ケハダヤマトガイ”は、形態学的に識別が困難な隠蔽種を複数含んでいることが判明している。それぞれの隠蔽種は沖縄島および周辺の島の狭い地域に固有と思われる。

生態的特徴：自然林の湿った落葉下に生息する。

生息地の条件：同上。

個体数の動向：分類が確定していないため十分なデータがないが、ヤマトガイの生息地は限定され、至適な生息環境が悪化（特に沖縄島南部）しているため、減少していると思われる。

現在の生息状況：同上。

学術的意義・評価：狭い地域に固有の隠蔽種が複数あり、保全の優先度は高い。

生存に対する脅威：開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項：多数の隠蔽種を含む種複合体であり、個々の隠蔽種はきわめて狭い分布域を持つと思われるため、絶滅の危険度はさらに高く評価すべきものであろう。奄美以北の近似種を含めた分類学的な再検討が必要である。

執筆者名：上島 励

和名：ヤエヤマゴマガイ
 分類：腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマタニシ上科 ゴマガイ科
 学名：*Diplommatina (Sinica) insularum* Pilsbry, 1901
 カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ：該当なし

図の解説：p. 37. 1: ヤエヤマゴマガイ 石垣島. 2 (参考): ゴマガイ属の一種 魚釣島 (国立科学博物館 波部忠重標本). 3 (参考): リュウキュウゴマガイ 石垣島. 撮影: 亀田勇一.

形態：殻は日本産ゴマガイ類としては中型で、殻長 2.8 mm、殻径 1.4 mm。螺塔は膨れた紡錘形、縫合は深い。琥珀～角色で螺層にはやや細かい明瞭な成長肋を持つ。殻口は円形で肥厚反転し、二重となる。軸唇下部はやや尖る。腔襞はやや長い。

近似種との区別：殻の外観は日本本土産のウゼンゴマガイに似るが、やや細身で、軸歯もやや弱い。分布の重なるリュウキュウゴマガイはより小型で、螺塔が直線的な円錐形になることで区別される。

分布の概要：石垣島と西表島の固有種。特に石垣島では既往産地が少なく、普遍的に分布しない。

近縁な種及び群との分布状況の比較：宮古諸島にミヤコゴマガイ、久米島にクメジマゴマガイが分布する。

生態的特徴：比較的自然度の高い森林の林床落葉下に生息する。同所的にリュウキュウゴマガイも棲息している。

生息地の条件：同上。

個体数の動向：湿度の高い自然林で棲息が確認されるが、まとまった個体数が見出される場所は減少傾向にある。

現在の生息状況：同上。

学術的意義・評価：琉球列島では中型～大型のゴマガイ類は島ごとに種分化して固有種となっており、進化的・生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威：比較的自然度の高い森林に棲息するため、開発等による森林の減少・荒廃で棲息地が狭められている。また、年間を通じて湿った落葉堆積層に棲息することから、温暖化や乾燥化が進んで林床が乾燥すれば、急速に個体群が消滅する可能性もある。

特記事項：波部・知念 (1974)、湊 (1976) など、1970 年代以降の報告等で記録されている「ヤエヤマゴマガイ」の多くはリュウキュウゴマガイの誤同定である。石垣・西表両島においてはリュウキュウゴマガイは普遍的に認められるが、本種自体の記録は乏しいため、産地・個体数とも局限される可能性が高く、実態の把握が必要。

原記載：Pilsbry, H. A., 1901. New land shells from the Loo Choo Islands and Japan. *Nautilus*, 15: 18-24. (p.22, as *Diplommatina insularum*. Type loc.: “Yaeyama, Loo Choo Islands”)

参考文献：波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls. 1-3.
 湊 宏, 1976. 与那国島の陸産貝類相. *Venus*, 35: 163-183.

執筆者名：亀田勇一

和名：ヤンバルゴマガイ
 分類：腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマタニシ上科 ゴマガイ科
 学名：*Diplommatina (Sinica) sp. B*
 カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ：該当なし

図の解説：p. 43. 光学顕微鏡写真：恩納村. 電子顕微鏡写真：名護市. 生体：大宜味村. 撮影：久保弘文.

〈貝類〉

- 形態 : 殻長 2.3 mm、殻径 1.3 mm、太い紡錘形で縫合はよくくびれる。螺塔は丸みのある円錐形。淡い黄褐色～赤褐色で規則的な成長肋を持ち、体層ではやや粗くなる。殻口はほぼ円形で反転肥厚する。軸唇はやや直線的で、下部は少し角張る。軸歯は弱い。腔襞はやや長く、殻径の 1/3 程度。
- 近縁種との区別 : 本種の殻口の方が若干小さいものの、殻がハラプトゴマガイとよく似ているため、区別は難しい。大ききの似るリュウキュウゴマガイは、腔襞がごく短く、螺塔もより直線的な円錐形となることで区別される。
- 分布の概要 : 沖縄島の、本部半島を除く恩納村以北で確認されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 殻形態が類似し、近縁種の可能性があるハラプトゴマガイは奄美大島に分布する。他に近縁と考えられるクメジマゴマガイは久米島に、ネムリゴマガイはトカラ列島にそれぞれ分布する。
- 生態的特徴 : 比較的自然度の高い山間部の森林に棲息する。地上棲で湿った落葉の間に棲息するが、雨水が溜まったり流れたりする場所や、雨で流されてきた砂混じりの落葉溜まりは棲息に適さない。
- 生息地の条件 : 同上。
- 個体数の動向 : 恩納村以北の自然度の高い森林から点々と記録されているが、産地・密度とも多くはない。クニガミゴマガイやオオシマゴマガイと混棲することもあるが、それらの種と比べても少産である。一方、リュウキュウゴマガイとの分布重複は恩納村、名護市における 200 箇所以上の調査結果においても記録されていない。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 琉球列島では中型のゴマガイ類は島ごとに種分化して固有種となっており、進化的・生物地理学的に重要である。
- 生存に対する脅威 : 自然度の高い湿潤な環境を好むため、伐採だけでなく林道建設・拡張などの局所的な森林の改変でも棲息に悪影響を及ぼしかねない。また、温暖化や乾燥化が進んで林床の環境が変われば、分布域全体で急速に減少する可能性もある。
- 特記事項 : 沖縄島北部からリュウキュウゴマガイを記録している報告は、ほとんどが本種と考えられる。
- 参考文献 : 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第 1 巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
久保弘文, 2017. 陸産貝類. “名護市史 自然編”, 名護市史編さん委員会 (編), 名護市教育委員会, 名護, 印刷中。
- 執筆者名 : 亀田勇一

和名 : マドモチウミナ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニノツノガイ上科 キバウミナ科
学名 : *Terebralia sulcata* (Born, 1778)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態 : 殻長 60 mm 内外の長円錐形で、西表・石垣島に分布するキバウミナに次ぐ大型種である。貝殻は光沢の少ない灰褐色を呈し、殻口外縁が円弧を描いて伸展する。殻表は明瞭な螺溝を巡らす他、波状の縦肋を飾る。
- 近縁種との区別 : 同属のキバウミナとは成貝では殻口外縁が円弧を描くことで他種と区別できるが、殻口が形成されていない幼貝での区別は難しい。ただし、県内に両種が同所的に存在する場所は知られていない。
- 分布の概要 : 現生個体は先島諸島、奄美諸島には分布せず、沖縄島のみ。沖縄島は、本種の北限分布地である。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 八重山諸島のマングローブ林内にはキバウミナが分布する。
- 生態的特徴 : 本種の幼生浮遊期間は約 10 日とされる。同属のキバウミナはヒルギ類の葉を活発に摂食するが、本種は樹皮や底質表面の微細藻類を摂食する。
- 生息地の条件 : マングローブ環境に依存する。
- 個体数の動向 : 近年、生息数の減少が著しく、特に沖縄島西海岸の名護市屋我地島（羽地内海）ではマングローブ内の生息数が大幅に減少し、沖縄島東海岸の金武町億首川でも、個体群が縮小している。また東村等中心にマングローブ林周辺においては、赤土の堆積による陸化が進行し、ソナレシバが繁茂して、生息域が減少している。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 沖縄島のマドモチウミナは、太平洋北西海域における隔離個体群として生物地理学的にきわめて重要であり、マングローブ生態系特有の種としても生態的価値が高い。
- 生存に対する脅威 : マングローブ環境の攪乱や鑑賞・標本用またはペット用採取による乱獲。
- 原記載 : Born, I.E. von, 1778. Index rerum naturalium Musei Caeasarei Vvindobonensis. Verzeichniss der Natürlichen Seltenheiten des K.K. Naturalien Kabinets zu Wien. Erster Theil, Schalthiere. Parst 1. Testacea. Ex officinal Krausiana, Vindobonae, 40+458+82 pp. (p. 324, as *Murex sulcatus*. Type loc. not designated in the original description, but restricted to Ambon by Houbriek, 1991: 318)
- 参考文献 : Houbriek, R.S., 1991. Systematic review and functional morphology of the mangrove snails *Terebralia* and *Telescopium* (Potamididae; Prosobranchia). *Malacologia*, 33: 289-338.
久保弘文, 2012. マドモチウミナ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 30.
久保弘文・増田 修, 2014. マドモチウミナ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 278.
名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. *WWF Japan Science Report*, 4: 1-44.

名和 純, 2005. マドモチウミナ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) — レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 418.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ヨシカワニナ
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニノツノガイ上科 トゲカワニナ科
 学名 : *Stenomelania juncea* (L. & H.C. Lea, 1850)
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

形態 : 殻はやや大型で、非常に高い塔状で螺塔は著しく細まる。殻表は赤褐色で多数の螺条を有する。蓋は黒褐色。殻長 70 mm に達する。

近似種との区別 : 近似種スグカワニナは螺層が括れず、直線的に高まり、殻質が堅固、殻表が平滑。
 分布の概要 : 国内では現在、与那国島田原川、西表島 2 河川、渡嘉敷島 1 河川、沖縄島北部 2 河川のみ分布 (西表島の 1 生息地は宅地造成で消滅した : 増田修氏私信)。

生態的特徴 : 昼間は川底の砂泥に潜りこみ、夜間に這い出してデトライタスや水草の屑等を摂食する。両側回遊性。

生息地の条件 : 汽水性で中流の流れの緩やかな泥底に生息し、水草や葦類等沈水植物がある場所に生息する。

個体数の動向 : 与那国島では、2014 年の大干ばつで渇水し、個体数が減少した。

現在の生息状況 : 与那国島田原川、西表島では個体数は少なくないが、生息範囲は限定されている。他に国内で生息記録のある河川は殆どなく、その生息範囲は著しく狭い。

学術的意義・評価 : 浮遊幼生期を経ながらも分布域が限定されることから、両側回遊性の分散・着底に関する生態学的研究の解明に重要な貝類であり、移動性に乏しく、大型種で成長に要する時間も数年を要すると考えられるため、長期的な自然度の高い河川環境の生物指標としても重要である。

生存に対する脅威 : 主要な生息場所でも 2 河川のみで有り、渇水や淡水化など河川環境の変化が、絶滅リスクとなる。

特記事項 : シャジクカワニナ (ヨレカワニナ) は分類学的課題があり、より詳細な遺伝的検討を要する。
 原記載 : Lea, I. & Lea, H.C., 1851. Description of a new genus of the family Melaniana, and of many new species of the genus *Melania*, chiefly collected by Hugh Cuming, Esq., during his zoological voyage in the East, and now first described. *Proceedings of the Zoological Society of London, for 1850: 179–197.* (p. 189, as *Melania juncea*. Type loc.: “Lake of Taal, province of Batanos, and small streams in Luzon, Philippines”)

参考文献 : 福田 宏, 2012. シャジクカワニナ (ヨレカワニナ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 33.

福田 宏・青柳 克・亀田勇一, 2017. 沖縄県渡名喜島の非海産貝類相. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

Hidaka, H. & Kano, Y., 2014. Morphological and genetic variation between the Japanese populations of the amphidromous snail *Stenomelania crenulata* (Cerithioidea: Thiaridae). *Zoological Science*, 31: 593–602.

久保弘文, 2012. ヨシカワニナ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 33.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

久保弘文・中井克樹, 2014. ヨシカワニナ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 49.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : スグカワニナ
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニノツノガイ上科 トゲカワニナ科
 学名 : *Stenomelania uniformis* (Quoy & Gaimard, 1834)
 方言名 : カーンナ
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

形態 : 殻は非常に高い塔状、殻表は平滑で漆黒～黒褐色だが、赤褐色の酸化鉄皮膜に被覆されることがある。蓋は黒褐色。最大殻長 90 mm に達する大型種。

近似種との区別 : 近似種ヨシカワニナはより小型で、殻表に多数の螺条を有する。沖縄産トゲカワニナ類中最も大型化する。

分布の概要 : 沖縄島北部、久米島、石垣島、西表島、与那国島の限られた河川。

生態的特徴 : 汽水性で、昼間は川底の砂に潜りこみ、夜間に砂上で、デトライタスや水草の屑等を摂食する。両側回遊性で生活史初期に浮遊幼生期 (ベリジャー) を経る。

生息地の条件 : 流れの比較的早い河川中流の砂泥底に棲息地が形成されるが、水質が安定している水域に限定される。

個体数の動向 : 沖縄島北部の 1 河川では、1990 年代までは若齢貝から老成貝まで高密度に生息していたが、食用としての大量採取や河川改修があり、大幅に減少した。沖縄島中部の個体群規模は小さい。石垣島では、生息範囲、個体数ともに限定され、島東岸の数河川では河川改修後に個体数が著しく減少した。与那国島では、1 河川にのみ生息し、2014 年の大干ばつで渇水し、激減した。

〈貝類〉

- 現在の生息状況 : 沖縄島中・北部の数河川に纏まった個体群が数カ所認められる以外は、殆どの生息場所で限られた個体群が生残しているにすぎない。
- 学術的意義・評価 : 浮遊幼生期を経ながらも分布域が限定されることから、両側回遊性の分散・着底に関する生態学的研究の解明に重要な貝類であり、移動性に乏しく、大型種で成長に要する時間も数年を要すると思われるため、自然度の高い河川環境の長期的な生物指標としても重要である。
- 生存に対する脅威 : 河川床の直線的変遷や河川改修、都市排水や畜産排水等の過剰流入による水質汚染、ダム造成や利水等による渇水、食用などによる乱獲、貝食非在来種コイによる被食。
- 特記事項 : IUCNカテゴリー : Data Deficient (DD)。
- 原記載 : Quoy, J.R.C. & Gaimard, P., 1834. Voyage de Decouvertes de l'Astrolabe, exécuté par ordre du Roi, pendant les années 1826–1827–1828–1829, sous le commandement de M. J. Dumont d'Urville. Zoologie, Tome 3: Mollusca. J. Tastu, Paris, 366 pp., 26 pls. (pp. 154–155, pl. 56, figs 30–33, as *Melania uniformis*. Type loc.: “l'île Célèbes, à Manado”)
- 参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11–63.
- Hidaka, H. & Kano, Y., 2014. Morphological and genetic variation between the Japanese populations of the amphidromous snail *Stenomelania crenulata* (Cerithioidea: Thiaridae). Zoological Science, 31(9): 593–602.
- 久保弘文, 2012. スグカワニナ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 34.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
- 久保弘文・中井克樹, 2014. スグカワニナ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 50.
- 黒田徳米, 1929. 日本産カワニナ類について. ヴェナナス, 1(5): 179–193, pl. 4.
- 黒住耐二, 2003. 13章 軟体動物. “琉球列島の陸水生物”, 西島信昇 (監修), 西田 睦・鹿谷法一・諸喜田茂充 (編), 東海大学出版会, 東京, 167–180.
- 増田 修・小野正人, 1988. 与那国島の淡水産貝類. 神奈川自然保全研究会報告書, (7): 52–60.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : タマキビ
- 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 タマキビ上科 タマキビ科
- 学名 : *Littorina brevicula* (Philippi, 1844)
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)
- 形態 : 本科中やや小さく、殻長約8 mm。丸みを帯びたソロバン玉型。殻頂はやや尖り、殻表には斑状色調の螺肋を巡らし、体層において、約8本を数える。個体によっては体層中央に白帯を1本巡らす。殻底はやや広い縫帯を巻く。蓋は革質で黒褐色。
- 近似種との区別 : コンペイトウガイやタイワンタマキビ等殆どのタマキビ類は顆粒や小棘を散在させるが、本種はこれを欠く。
- 分布の概要 : 日本本土、沖縄島北部 (羽地内・外海、塩屋湾)、台湾、韓国～中国沿岸。
- 生態的特徴 : 潮間帯上部に棲息し、下げ潮時の岩盤が濡れているタイミングに活発に摂餌する。
- 生息地の条件 : 内湾潮間帯上部の岩盤上に生息するが、サンゴ礁性の岩盤には見られない。
- 個体数の動向 : 羽地内海では1990年代前半まで普通であったが、2000年以降は非常に減少した。塩屋湾の一部に比較的確認しやすい場所が残っているが、海岸線1 km未満の非常に狭い範囲に過ぎない。
- 現在の生息状況 : 2010年以降も、羽地内・外海では稀で、復活の兆しは見られない。
- 学術的意義・評価 : 日本本土では普通種であるが、南西諸島においては奄美群島と先島諸島で欠落し、沖縄島のみで限定的に分布する。本種は浮遊期間が長いこと、物理環境が生息を制限している可能性もあるが、類似した海洋物理条件を持つ沖縄島北部東海岸では確認されておらず、生物地理学的意義が大きい。
- 生存に対する脅威 : 陸土流入や富栄養による生息場所 (岩の表面) の汚染。
- 原記載 : Philippi, R.A., 1844. Descriptiones testaceorum quorundam novorum, maxime chinensium. Zeitschrift für Malakozoologie, 1: 161–167. (p. 166, as *Turbo* (*Littorina* [*sic*]) *breviculus*. Type loc.: “China, ad ostium fluminis Yang-tse-kiang”)
- 参考文献 : 久保弘文, 2012. タマキビ (沖縄島). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 35.
- 久保弘文, 2014. 沖縄島北部のタマキビ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 433.
- 名和 純, 2005. タマキビ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”. 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 416.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ヤイマカチドキシタダミ
- 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カチドキシタダミ科

- 学名 : *Clenchiella iriomotensis* Ponder, Fukuda & Hallan, 2014
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU)
- 図の解説 : p. 43. 西表島浦内川河口 (パラタイプ; Australian Museum 所蔵 AMS C.445413). 撮影 : J. Studdert (標本), 福田 宏 (生体).
- 形態 : 殻長 0.8 mm, 殻径 2 mm. 殻は平たい円盤状で暗赤褐色 (稀に白色)、殻頂は窪み、縫合下と臍孔の周りに鋭い稜角を巡らす。殻表には多数の細い螺脈が走る。殻口外唇は強く肥厚して縦張肋を形成する。臍孔は広い。蓋は円く革質半透明で多旋型。頭触角は細長く、先端附近に幅広い黒色帯を持ち、口吻も多数の黒条で彩られる。足の後端が尖る。
- 近似種との区別 : カトゥラプシキシタダミに似るがより大きく、殻頂は窪み、強い螺状稜角を 2 本持つ。また頭部・腹足が黒色素斑で彩られ、足の後端の形態も異なる。
- 分布の概要 : 西表島 (浦内川 [タイプ産地]、仲良川、前良川、大原集落内の小河川) の固有種。石垣島等近隣の島嶼からは見出されていない。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : カチドキシタダミ属 *Clenchiella* Abbott, 1948 は本種以外に台湾・香港・フィリピン・オーストラリア北部から 4 種が知られ、いずれも熱帯のマングローブに見られる。本種は同属の世界最北に分布する種。
- 生態的特徴 : 棲息環境以外未詳。
 生息地の条件 : マングロープ内の潮間帯軟底泥において、干潮時に生じる浅い水溜まり中に沈んだ落葉・朽木・漂着物等の下や緑藻の間等に付着する。浦内川と大原ではカトゥラプシキシタダミも共に見られる。
- 個体数の動向 : 既知産地は世界でも西表島の 4 箇所のみで、分布域・棲息範囲が極端に狭い。
 現在の生息状況 : 4 産地とも、極めて狭い範囲に少数が生息するのみであり、個体群は極めて脆弱である。
 学術的意義・評価 : カチドキシタダミ科の諸種は長らくミズツボ科に含められていたが、比較解剖や分子系統解析の結果、ワカウラツボ科やイソコハクガイ科等に近縁なことが最近明らかにされたばかりである。
- 生存に対する脅威 : 西表島では近年リゾート開発等が進み、河口の埋立・護岸等の改変、マングロープの縮小、水質や底質の悪化等の影響が強く懸念される。また本種はその微小さのため、大雑把な貝類相調査では見落とされる恐れがあり、精緻な調査が求められる。
- 特記事項 : 西表島は国立公園であり、自然公園法で開発規制されている。
 原記載 : Ponder, W.F., Fukuda, H. & Hallan, A., 2014. A review of the family Clenchiellidae (Mollusca: Caenogastropoda: Truncatelloidea). *Zootaxa*, 3872: 101–153. (pp. 123–126, figs 1, 3, 4, 11–14, as *Clenchiella iriomotensis*. Type loc.: “In shallow tide pools on the back marsh with mangrove trees of the Urauchi River Estuary, 1500 m SW from the Urauchi Bridge, Iriomote Island, Taketomi-chô, Yaeyama-gun, Okinawa Prefecture, Japan, 24°23'53" N, 123°45'53" E”)
- 参考文献 : 福田 宏, 2012. ヤイマカチドキシタダミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 40.
 福田 宏, 2014. ヤイマカチドキシタダミ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 291.
 久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック—レッドデータおきなわ—第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—2. 西表島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
 山下博由・名和 純・福田 宏・奥田夏樹, 2005. 西表島浦内川流域・トゥドゥマリ浜の貝類相 (予報). “西表島浦内川河口域の生物多様性と伝統的自然資源利用の総合調査報告書 II”, 西表島浦内川流域研究会 (編), 西表島浦内川流域研究会, 竹富, 47–61.

執筆者名 : 福田 宏

- 和名 : ジーコンボツボ
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 ワカウラツボ科
- 学名 : *Chevallieria* sp.
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)
- 図の解説 : p. 43. A : 沖縄島国頭村座津武, B : 久米島島尻島の口. 撮影 : 福田 宏.
- 形態 : 殻長 2 mm, 殻径 0.7 mm. 殻は細長い塔形、硝子質で淡黄色半透明、殻表は成長脈以外平滑。胎殻はドーム形で殻頂は平坦。殻口は種子形で、外唇は反転する。蓋は革質で黄褐色半透明、少旋型。頭部・腹足は無色半透明で、頭触角は細長い。
- 近似種との区別 : ゴマツボモドキは殻長 5.5 mm と遙かに大形で、殻表に明瞭な螺脈を多数巡らす。ミジンゴマツボは強い螺肋を巡らす。ニセゴマツボは殻長 2.7 mm と大きく、螺肋と縦肋が交わって格子目状彫刻となり、蓋の成長脈は同心円状。
- 分布の概要 : 三浦半島・北長門海岸～九州、沖縄島、久米島、宮古島。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ニセゴマツボとミジンゴマツボは紀伊半島以南、南半球まで分布し、ゴマツボモドキもフィリピン～オーストラリア北部に産するとされるのに対し、本種は日本のみで知られ、沖縄県は現時点で分布の南限。この科にはウチノミツボなど本州～九州のみに産する種も存在するため、本種も日本およびその周辺の固有種かもしれない。
- 生態的特徴 : 胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。継続的雌雄同体 (雄性先熟) の可能性がある。
 生息地の条件 : 外洋に面した海岸と、内湾奥や河口汽水域の砂泥干潟とにまたがって産する。比較的大きな岩石 (多くの場合、黒っぽい玉石) で敷き詰められた岸辺の、飛沫帯に積み重なった転石を順に取り除いて

- ゆき、底の砂層に埋もれた石に行き着いた時、掘り起こして裏面を見ると附着している。
- 個体数の動向** : 本州～九州では点々と産地が知られるが、沖縄県での記録は3島に限られ、久米島では1個体、宮古島では2個体が確認されたのみ。
- 現在の生息状況** : 既知の個体群はすべて小規模で、著しく狭い範囲に限定され、個体数も少ない。ただし深く埋もれた岩石下に潜むので見つけにくく、未知の個体群が存在する可能性はある。
- 学術的意義・評価** : 未記載種。北半球のこの属の他種はすべて化石で、本種は唯一の現生種。
- 生存に対する脅威** : 護岸・埋立・海底浚渫等海岸環境の改変、水質や底質の汚濁。特に埋もれた岩石下の棲息環境は、陸土微粒子の大量流入により目詰まりを生じやすい。
- 特記事項** : 長崎県レッドリスト掲載種 (準絶滅危惧 (NT))。
- 参考文献** : 福田 宏, 1996. 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
福田 宏, 2012. ジーコンボツボ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 37.
福田 宏・青柳 克, 2017. 沖縄県渡名喜島の非海産貝類相. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
Fukuda, H., Asami, T., Yamashita, H., Satô, M., Hori, S. & Nakamura, Y., 2000. Marine molluscan and brachiopod fauna of Tanoura, Nagashima Island, Kaminoseki-chô, Yamaguchi Prefecture, Japan. The Yuriyagai, 7: 115-196.
福田 宏・多々良有紀, 2010. 徳島県伊島から新たに確認された非海産貝類一特にタナゴジマスミアゴル (新称; 腹足綱: 有肺目: スミアゴル科) の発見. Molluscan Diversity, 2: 11-24.

執筆者名 : 福田 宏

-
- 和名** : **ゴマツボモドキ (シリオレミジンニナ)**
- 分類** : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 ワカウラツボ科
- 学名** : *Hyalia cf. bella* (A. Adams, 1853)
- カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態** : 殻長 5.5 mm、殻径 2 mm。殻は細長い蝸形、硝子質で薄く、無色半透明、殻表に微細な螺脈を多数巡らす。胎殻はドーム形で殻頂は平坦。殻口は種子形で、外唇は反転する。蓋は革質で黄褐色半透明、少旋型。頭部-腹足は全体が淡紅色で、頭触角は細長い。沖縄島・石垣島の個体は殻口縁が顕著に広がり、別種の可能性もある。
- 近似種との区別** : ニセゴマツボは螺肋と成長脈が交わって格子目状彫刻を成す。ミジンゴマツボとジーコンボツボはともに殻長 2 mm と小形で、前者は強い螺肋を巡らし、後者は成長脈以外の彫刻を欠く。
- 分布の概要** : 宮城県万石浦～九州、沖縄島 (豊見城市与根)、石垣島、朝鮮半島。フィリピン～オーストラリア北部に広く分布するとも言われているが、国外産が日本産と同種かどうかは不明。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : ニセゴマツボとミジンゴマツボは紀伊半島以南、南半球まで分布するが、ジーコンボツボは日本からしか知られず、またウチノミツボなど本州～九州のみで知られる近縁種も存在するため、本種が日本周辺固有種であっても奇異ではない。
- 生態的特徴** : 未詳だが、胎殻の形態から推定して、恐らく浮游幼生期を経る。
- 生息地の条件** : 内湾に面した海岸岩礁潮間帯に生じるタイドプール内の、砂泥に埋もれた岩石下等の還元的環境に産する。外洋の砂浜にも死殻が打上げられ、潮下帯にも棲息する可能性がある。
- 個体数の動向** : 近年生貝が確認された場所は全国でも僅かで、沖縄県では沖縄島と石垣島でしか確実な記録がない。ただし砂泥底に深く埋もれた岩石下に潜むので見つけにくく、未知の個体群が存在する可能性はある。
- 現在の生息状況** : 既知の個体群はいずれも小規模で、狭い範囲に限定され、個体数も少ない。
- 学術的意義・評価** : 分類は検討の余地があり、特に沖縄県産は未記載種の可能性もある。またニセゴマツボ、ヤシマイシン近似種等と同様に還元環境を好む特異な貝類群集の一員と考えられる。
- 生存に対する脅威** : 護岸・埋立・海底浚渫等海岸環境の改変、水質汚濁。
- 特記事項** : 学名や属の所属については福田 (2012, 2014) を参照。岡山・熊本両県レッドデータブック掲載種。
- 原記載** : Adams, A., 1853. Descriptions of sixteen new species of *Rissoina*, a genus of marine gasteropodous mollusks, from the Cumingian Collection. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1851: 264-267. (p. 267, as *Rissoa bella*. Type loc.: “Philippine islands”)
- 参考文献** : 江川和文, 1993. 奄美大島産リソツボ科 Rissoidae 貝類の図説. 九州の貝, (40/41): 75-117.
福田 宏, 1996. 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
福田 宏, 2012. ゴマツボモドキ (シリオレミジンニナ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 37.
福田 宏, 2014. ゴマツボモドキ (シリオレミジンニナ). “レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 292.
波部忠重, 1961., A. Adamsの記載したBritish Museum (Natural History) 所蔵の日本産の貝類 (第1報). “榎山次郎教授記念論文集”, 榎山次郎教授退官記念事業会 (編), 榎山次郎教授退官記念事業会, 京都, 191-205, pls 1-4.
久保弘文, 2005. ゴマツボモドキ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) -レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 417.

Ponder, W.F., 1984. A review of the genera of the Iravadiidae (Gastropoda: Rissoacea) with an assessment of the relationships of the family. *Malacologia*, 25: 21-71.

執筆者名： 福田 宏・久保弘文

和名： **サザナミツボ**
 分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 ワカウラツボ科

学名： “*Nozeba*” *ziczac* (Fukuda & Ekawa, 1997)
 カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

形態： 殻長 1.8 mm、殻径 1 mm。殻は卵円錐形、薄い硝子質で無色半透明、光沢が強く、殻表に明瞭なジグザグ状の螺溝を多数巡らす。胎殻は膨らみ、表面は平滑。殻口は種子形。蓋は革質、少旋型、周縁のみ半透明で中央は不透明。頭部・腹足は無色半透明で白斑を散在し、頭触角は細長い。外套触角や後足触角を欠く。

近似種との区別： ジグザグ状の螺溝や中央が不透明な蓋は本種に特異的で、類似する種はない。

分布の概要： 陸奥湾・男鹿半島～九州、奄美大島、沖縄島（羽地内海）、朝鮮半島。

近縁な種及び群との分布状況の比較： *Nozeba* Iredale, 1915 の他種はオーストラリア産で、形態も完全には一致しないため、本種はこの属に属さない可能性がある。同様に、現在同属とされているキツキツボ “*N.*” *lignicola* Hasegawa, 1997 も所属を再検討する必要がある。

生態的特徴： 未詳だが、胎殻の形態から推測し、恐らく浮游幼生期を経る。

生息地の条件： 内湾奥部河口汽水域の砂泥底において、干潮時に生じた水溜りなど止水水中に見られ、砂泥に半ば埋もれた岩石下に付着する。砂泥底の表層を匍匐することもある。

個体数の動向： 本州～九州では点々と産地が知られているが沖縄県では稀少で、羽地内海の2箇所（鏡平名、呉我）でしか確実な記録がない。名和（2009）は鏡平名では普通、呉我では少産と記している。

現在の生息状況： 既知の個体群はいずれも小規模で、狭い範囲に限定される。ただし深く埋もれた岩石下に潜むので見つけにくく、未知の個体群が存在する可能性はある。

学術的意義・評価： 沖縄県は分布の南限である。また上記の通り、属の所属は再検討の余地があり、*Nozeba* 属に属さないとしたら本種に対して新たな属を創設するべきかもしれない。

生存に対する脅威： 護岸・埋立・海底浚渫等海岸環境の改変、水質や土壌の汚染。

特記事項： 宮城・千葉・愛知・三重・岡山・長崎各県レッドリスト掲載種。記載時はサザナミツボ科 *Elachisimidae* Ponder, 1985 に属すとされたがこれは誤りで、サザナミツボ科にサザナミツボが含まれない奇異な事態となったため、*Elachisimidae* の和名はフロリダツボ科に改称された（福田, 2012）。

原記載： Fukuda, H. & Ekawa, K., 1997. Description and anatomy of a new species of the *Elachisimidae* (Caenogastropoda: Rissooidea) from Japan. *The Yuriyagai*, 5: 69-88. (pp. 69-88, figs 1-38, as *Elachisina ziczac*. Type loc.: “Nagusanohama Beach, Wakayama City, Wakayama Pref., central Honshu”)

参考文献： 福田 宏, 1996. 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
 福田 宏, 2012. サザナミツボ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 40.
 Golding, R. E., 2014. Molecular phylogeny and systematics of Australian ‘*Iravadiidae*’ (Caenogastropoda: Truncatelloidea). *Molluscan Research*, 34: 222-257.
 長谷川和範, 2000. サザナミツボ科. “日本近海産貝類図鑑”, 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 164-165.
 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名： 福田 宏

和名： **ヒメシラギク (ミジンシラギク)**
 分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 イソコハクガイ科

学名： *Pseudoliotia asteriscus* (Gould, 1859)
 カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

図の解説： p. 43. 石垣島名蔵湾。撮影：久保弘文。

形態： 殻長 1.3 mm、殻径 2 mm。殻は螺塔の低いシタダミ形で、殻頂は多少突出し、厚質堅固、不透明。殻表は白色であるが生時は濃褐色の附着物で覆われ、強い縦肋と螺肋（体層で4本）が交わって格子目となる。臍孔は広く開く。殻口は円く、唇縁は厚く肥厚する。蓋は円く、厚い革質、半透明黄褐色で、核を中央に持つ。

近似種との区別： シラギクは本種より大きく、さほど殻頂は突出せず、縦肋と螺肋の交点は鋭く尖る。リュウキュウシラギクはさらに一回り大きく、より平たい円盤状で、縦肋の間隔が狭いため格子目状彫刻も細かい。

分布の概要： 沖縄島（羽地内海、金武湾、中城湾）、久米島、宮古島、石垣島（名蔵湾、川平湾）、台湾（淡水）、

香港、東南アジア。瀬戸内海等からの記録はシラギクの誤同定。

近縁な種及び群との分布状況の比較： シラギクは本州～九州と朝鮮半島に産する温帯域の種で、リュウキュウシラギクは沖縄島以南の熱帯太平洋から知られる。

生態的特徴： 胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。

生息地の条件： 内湾奥部マングローブ辺縁に生じた礫地の高潮帯において、砂泥に埋もれた岩石の下から、ジーコンボツボ、カドカドガイ属、ヒミツナメクジ、サカマキオカミミガイ、イササコミミガイ、シュジュコミミガイ等と共に見出されている。

個体数の動向： 1990年代に宮古島平良久松では多産していたが、2008年に同地を調査した際は全く見出されなかった。もともと産地が局限される種と思われる。

現在の生息状況： 現存産地は10箇所以下しかなく、棲息範囲は狭い。ただし深く埋もれた岩石下に潜むので見つけにくく、未知の個体群が存在する可能性はある。

学術的意義・評価： これまで存在自体がほとんど知られず、文献記録も僅かしかない稀少種である。

生存に対する脅威： 護岸・埋立・海底浚渫等河口や海岸の環境改変、マングローブ伐採、水質や底質の汚濁。特に埋れ石下は陸土微粒子の大量流入により目詰まりを生じ、場自体が閉塞する。

特記事項： 従来日本の文献では本種の種小名はもっぱら *astericus* とされてきたが、正しくは *asteriscus* である。
原記載： Gould, A.A., 1859. Descriptions of new species of shells brought home by the North Pacific Exploring Expedition. Proceedings of the Boston Society of Natural History, 7: 138-142. (p. 142, as *Liotia asteriscus*. Type loc.: "Hong Kong")

参考文献： 福田 宏, 1996. 腹足綱; 宮古島 平良久松漁港 (久貝)～久松松原. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114-115.

福田 宏, 2012. ヒメシラギク (ミジンシラギク, シラギクマガイ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 42.

福田 宏, 2014. ヒメシラギク (シラギクマガイ). “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 298.

長谷川和範, 2000. イソコハクガイ科. “日本近海産貝類図鑑”, 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 172-179.

Kuroda, T., 1941. A catalogue of molluscan shells from Taiwan (Formosa) with descriptions of new species. Memoirs of the Faculty of Science and Agriculture, Taipei Imperial University (Taiwan), 22(4) Geology, 17: 65-216, pls 8-14.

執筆者名： 福田 宏・久保弘文

和名： ツブカワザンショウ (ヒメカワザンショウ)

分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科

学名： *Assiminea estuarina* Habe, 1946

カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

図の解説： p. 43. A, B: 今帰仁村湧川我部井. C: 名護市羽地. 撮影: 福田 宏.

形態： 殻長5mm、殻径3mm。殻は球形～卵円錐形であるが、老成すると前方に伸長して蛹形となる。殻表は明るい黄褐色で、体層で2または3本の明瞭な橙色帯を巡らす。螺層上部が平滑な個体と、顕著な螺肋を巡らす個体がある。臍孔は狭く開く。蓋は半月形で革質、半透明、黄褐色。頭触角を欠き、眼胞は短い。頭部～腹足の背面と側面は黒色で、外套膜表面の黒地の水玉模様が殻を透過して見える。

近似種との区別： リュウキュウカワザンショウより遙かに小形で、臍孔が開く。オイランカワザンショウやアシヒダツボは共に高円錐形、濃赤褐色で、前者は殻底に白色帯を巡らす。

分布の概要： 宮城県志津川湾～九州、奄美大島、沖縄島 (塩屋湾、羽地内海)、韓国南部。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 南西諸島での近縁種はリュウキュウカワザンショウと、奄美大島住用のスミヨウカワザンショウのみが知られる。種子島以北にカワザンショウ、ヒラドカワザンショウなど多くの種が存在する。

生態的特徴： 干潟表層の藻類等を摂食すると推測される。恐らく浮游幼生期を経る。

生息地の条件： 内湾奥砂泥干潟の辺縁に生じた礫地において、高・中潮帯の転石側面に付着する。沖縄県ではマングローブ林周辺の塩性湿地に見られる。乾燥に弱く、水辺にまとまった数の岩礫や朽木等が散在して常に濡れていることが個体群維持に不可欠である。

個体数の動向： 九州以北では点々と産地が知られるが、沖縄県では極めて稀で、沖縄島の2箇所では知られていない。

現在の生息状況： 塩屋湾・羽地内海ともに個体群は極めて小規模で、棲息範囲も狭く、個体数も少ない。少数の蛹形の老成個体だけが見られることもあり、このような個体群は新規加入がなく消滅を待ただけの状態かもしれない。

学術的意義・評価： 沖縄島は本種の分布の南限である。

生存に対する脅威： マングローブ伐採、河口や海岸の護岸・埋立、水質や底質の悪化。

特記事項： ツブカワザンショウは螺層上部が平滑な個体に対する名で、螺肋を持つものはヒメカワザンショウとして区別されてきたが、分子系統解析の結果、両者は同種と見なされた。

IUCN カテゴリー： Data Deficient (DD)。

- 原 記 載 : 波部忠重, 1946. 汽水産貝類新種 *Assiminea estuarina* ツブカハザンシヨウ. 貝類学雑誌, 14: 217-218. (pp. 217-218, fig. 2, as *Assiminea (Assiminea) estuarina*. Type loc.: “和歌山縣東牟婁郡下里町浦神”)
- 参 考 文 献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島 羽地内海 (名護市屋我地島南岸/名護市羽地~国頭郡今帰仁村 我部井). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114.
- 福田 宏, 2012. ツブカワザンシヨウ (ヒメカワザンシヨウ). “干潟の絶滅危惧動物区鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 48.
- 久保弘文, 2005. ヒメカワザンシヨウ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 351-352.
- 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執 筆 者 名 : 福田 宏・久保弘文

和 名 : **ホラアナゴマオカチグサ種群**
 分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンシヨウ科
 学 名 : *Cavernacmella* spp.
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

図 の 解 説 : p. 43. 標本: 宮古島. 撮影: 亀田勇一 (標本), 福田 宏 (生体). 描画: 福田 宏.
 形 態 : 殻長 1.6 mm, 殻径 1.2 mm. 殻は卵円錐形, 薄質, 光沢が強く無色半透明. 螺層は膨らみ, 縫合は深くくびれる. 殻表は弱い成長脈以外は平滑. 殻口外唇はやや肥厚する. 臍孔は狭く開く. 蓋は種子形で革質, 半透明, 黄褐色. 頭部-腹足は無色半透明. 頭触角は右側の痕跡のみで, 眼胞は太短く, 眼は黒色で明瞭.

近似種との区別 : ホラアナゴマオカチグサは多数の隠蔽種を含む多系統群であり, 殻の形態では識別が困難で, 同定には軟体の検討や分子系統解析が必須である. 日本本土のホラアナゴマオカチグサや沖縄島のホラアナゴマオカチグサ類似種群とは, 眼に黒い色素を持つことで区別できる.

分布の概要 : 沖縄諸島・久米島・先島諸島の主要な島の石灰洞窟で記録されている.

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ウフアガリゴマオカチグサと同様. 沖縄県においても, 少なくとも各島ごとに別種に分化している可能性が極めて高い.

生態的特徴 : 直達発生. 湿度の高い洞窟内の, 貧栄養な湿った岩壁や泥上に棲息し, 壁面や泥中の微生物などを栄養源としていると考えられる.

生息地の条件 : 同上.

個体数の動向 : 死殻は多数見られるものの, 生貝の密度は極めて低い場所が多い. ある程度増減を繰り返していると考えられるが, 洞内が乾燥する場所では, 干からびた肉の残った殻がかたまっで見出されることもある.

現在の生息状況 : 同上.

学術的意義・評価 : *Cavernacmella* は単一の属内で海岸・林床・溪流・洞窟内に進出した全動物中唯一の属であるうえ, 特に琉球列島では各島で独立に洞窟適応を果たした可能性が高く, 進化生態学的にも重要である.

生存に対する脅威 : 貧栄養かつ湿った環境が必要であり, 観光開発での照明の設置による乾燥化・植物の繁茂, 外気からのカビや有機物の持ち込み, 人の往来に伴う微生物相の変化も棲息に悪影響を与える可能性が高い. 近年の温暖化や過剰乾燥, 洞周辺の開発や伐採によって洞窟内でも乾燥化や水量の減少が起こっており, 小規模な石灰岩地や地表に近い洞窟では特に個体群維持が困難になっている.

- 参 考 文 献 : 伊藤良吉, 1963. ホラアナゴマオカチグサの分布について. 秋吉台科学博物館報 (4): 83-87.
- 亀田勇一・川北 篤・加藤 真, 2008. 「ホラアナゴマオカチグサ」は洞窟ごとに別種である. 日本貝類学会創立80周年記念大会 (東京) 研究発表要旨, *Venus*, 67: 99.
- 下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第14集 沖縄県洞穴実態調査報告 I”. 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 75-112.
- 下謝名松栄, 1979. 沖縄島および周辺離島における洞窟動物. “同 第16集 沖縄県洞穴実態調査報告II”. 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 97-153.
- 下謝名松栄, 1980. 先島 (宮古諸島・八重山諸島) の洞窟動物. “同 第19集 沖縄県洞穴実態調査報告III”. 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 103-142.

執 筆 者 名 : 亀田勇一・福田 宏

和 名 : **ミニカドカド**
 分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンシヨウ科
 学 名 : *Ditropisena* sp. B
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 図の解説** : p. 43. 標本, 絵: 羽地内海. 生体: 塩屋湾. 撮影・描画: 福田 宏 (標本, 絵), 亀田勇一 (生体).
- 形態** : 殻長 1.3 mm, 殻径 1.6 mm. 殻はドームカドカドに似るが小形で、螺塔がより低い。ため殻の概形は算盤玉形となり、また縫合と周縁角との間にも強い螺肋を持つ。縦肋もドームカドカドのそれより細かい。蓋と頭部-腹足はドームカドカドと同様。
- 近似種との区別** : エレガントカドカドに似るが、より螺塔が高く、縦肋が強い。ドームカドカドとデリケートカドカドは縫合と周縁角との間に螺肋がない。小笠原諸島のインフレカドカドはより大形でやや螺塔が高く、螺肋・縦肋ともにより強い。
- 分布の概要** : 沖縄島北部 (塩屋湾、羽地内海)。久米島兼城港白瀬川河口でも類似した個体が確認されているが、同種か別種か結論が出ていない。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 沖縄島にはドームカドカドも産するが、同所的に見られる場所はない。
- 生態的特徴** : ドームカドカドと同様。
- 生息地の条件** : ドームカドカドと同様。
- 個体数の動向** : 既知産地は合計 5 箇所以下で、それら全個体群が極めて狭い範囲に限定される。同様の小規模な個体群がかつては沖縄島の広範囲に点在していたと思われるが、既にその多くが消失した可能性がある。
- 現在の生息状況** : 産地の大半が幹線道路・橋または集落に隣接した河口や海岸であり、各個体群はコンクリート護岸の切れ目に辛うじて残った岸辺で細々と生き延びている。今後、護岸の新設や道路・橋梁の拡張などで瞬時に壊滅する可能性は高く、個体群存続が甚だ危ぶまれる。
- 学術的意義・評価** : ドームカドカドと同様。
- 生存に対する脅威** : ドームカドカドと同様、分布域が著しく狭く、個体群は河口の埋立・護岸等の改変、マングローブ伐採、水質・土壌汚染の影響を直接被る。
- 参考文献** : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島 羽地内海 (名護市屋我地島南岸/名護市羽地~國頭郡今帰仁村我部井). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114.
福田 宏, 2012. ミニカドカド. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 51.
福田 宏, 2014. ミニカドカド. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 287.
Fukuda, H. & Ponder, W.F., 2003. Australian freshwater assimineids, with a synopsis of the Recent genus-group taxa of the Assimineidae (Mollusca: Caenogastropoda: Rissosoidea). *Journal of Natural History*, 37: 1977-2032.
名和 純, 2005. ミニカドカド. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 328.
- 執筆者名** : 福田 宏・名和 純* *前回改訂版 (2005) における名和による記載内容を一部引用した。

- 和名** : **デリケートカドカド**
- 分類** : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科
- 学名** : *Ditropisena* sp. C
- カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 図の解説** : p. 44. 標本, 生体 (右下を除く) : 宮古島久松松原. 生体 (右下) : 伊良部島サバ沖井戸前. 撮影: 福田 宏.
- 形態** : 殻長 1.1 mm, 殻径 1.6 mm. 殻はドームカドカドに似て縫合下に螺肋を欠くが、より小型で螺塔が低く、薄く半透明で、縦肋も遥かに繊細である。蓋と頭部-腹足は同属の他種と同様。
- 近似種との区別** : ドームカドカドとの識別点は上記の通り。ミニカドカド・エレガントカドカド・小笠原諸島のインフレカドカドは縫合と周縁角との間にも明瞭な螺肋がある。
- 分布の概要** : 宮古島 (狩俣、平良松原、平良荷川取下崎、咲田川河口、嘉手苺入江) とその属島である伊良部島 (サバ沖井戸前) からしか見出されておらず、宮古諸島の固有種。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : ドームカドカドを参照。同一産地に同属の他種が見られることはない。
- 生態的特徴** : ドームカドカドと同様。
- 生息地の条件** : ミニカドカドとほぼ同様であるが、本種は外洋寄りの環境にも棲息可能である。宮古島平良松原では与那覇湾内の河口マングローブ内に棲息するのに対し、狩俣と平良荷川取下崎では外洋に面した岩礁の間に形成された砂浜の辺縁に見られる。伊良部島においても、宮古島との間の海峡部に面した海岸飛沫帯の、岩礁間の粗砂底で確認された。
- 個体数の動向** : 同属の他種と同様に分布域が著しく狭く、既知産地は合計 5 箇所のみである。そのうち咲田川河口の個体群は近年の緩傾斜護岸建設により消滅したとされる。
- 現在の生息状況** : ミニカドカドと同様、産地の大半が道路・橋または集落に隣接した河口や海岸であり、いつ壊滅しても不思議でない状態にある。咲田川河口での個体群消滅はその典型例であり、これで現存産地はもうあと 4 箇所しか残っていない。
- 学術的意義・評価** : ミニカドカドと同様。
- 生存に対する脅威** : ミニカドカドと同様、分布域が著しく狭く、個体群は河口の埋立・護岸等の改変、マングローブ伐採、水質・土壌汚染の影響を直接被る。

- 参考文献： 福田 宏, 1996. 腹足綱; 宮古島 平良市久松漁港 (久貝)~久松松原. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114-115.
- 福田 宏, 2012. デリケートカドカド. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 52.
- 福田 宏, 2014. デリケートカドカド. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 288.
- Fukuda, H. & Ponder, W.F., 2003. Australian freshwater assimineids, with a synopsis of the Recent genus-group taxa of the Assimineidae (Mollusca: Caenogastropoda: Risssooidea). *Journal of Natural History*, 37: 1977-2032.
- 名和 純, 2005. デリケートカドカド. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 470.

執筆者名： 福田 宏・名和 純* *前回改訂版 (2005) における名和による記載内容を一部引用した。

和名： エレガントカドカド
 分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科
 学名： *Ditropisena* sp. D
 カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

図の解説： p. 44. 標本：石垣島磯辺川河口. 生体：石垣島梶海富野. 撮影：福田 宏.
 形態： 殻長 1 mm, 殻径 1.6 mm. 殻はミニカドカドに似て縫合下に螺肋を持つが、ミニカドカドより更に螺塔が低く、縦肋も細かい。蓋と頭部-腹足は同属の他種と同様。

近似種との区別： ミニカドカドとの識別点は上記の通り。ドームカドカドとデリケートカドカドは縫合と周縁角との間に螺肋がない。

分布の概要： 石垣島 (磯辺川河口, 崎枝, 川平, 梶海富野) と西表島 (仲間川河口) の固有種。名和 (2005) は「西表島浦内川河口域でも見出されている」と記しているが、これは琉球大学資料館 (風樹館) 所蔵標本 RUMF-ZM-05999 (名和, 2011: 77) に基づいており、そのラベルの「浦内川」は仲間川の誤記。

近縁な種及び群との分布状況の比較： ドームカドカドを参照。同一産地に同属の他種が見られることはない。

生態的特徴： ドームカドカドと同様。

生息地の条件： ドームカドカドと同様。

個体数の動向： 同属の他種と同様に分布域が著しく狭く、既知産地は合計 4 箇所のみである。そのうち石垣島磯辺川河口の産地は 1990 年代末に実施された橋の改築工事の影響で状態が悪化し、その後は 2004 年 11 月に生貝 1 個体が見られたのみであり、現在も棲息しているかどうか明らかでない。

現在の生息状況： デリケートカドカドと同様、産地の大半が道路・橋または集落に隣接した河口や海岸であり、いつ壊滅しても不思議でない状態にある。磯辺川河口での棲息環境悪化はその典型例であり、他の 3 箇所も個体群が維持されるかどうか危ぶまれる。

学術的意義・評価： デリケートカドカドと同様。

生存に対する脅威： デリケートカドカドと同様、分布域が著しく狭く、個体群は河口の埋立・護岸等の改変、マングローブ伐採、水質・土壌汚染の影響を直接被る。

特記事項： 石垣島・西表島は国立公園であり、自然公園法で開発規制されている。

参考文献： 福田 宏, 1996. 腹足綱; 石垣島 宮良川 (石垣市宮良)・磯辺川河口 (石垣市磯辺). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114-115.

福田 宏, 2012. エレガントカドカド. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 52.

福田 宏, 2014. エレガントカドカド. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 287.

Fukuda, H. & Ponder, W.F., 2003. Australian freshwater assimineids, with a synopsis of the Recent genus-group taxa of the Assimineidae (Mollusca: Caenogastropoda: Risssooidea). *Journal of Natural History*, 37: 1977-2032.

池辺進一・吉田 誠, 2006. 池辺進一コレクション 貝類標本目録. 和歌山県立自然博物館, 海南, 164 pp.

久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック—レッドデータおきなわ—第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—2. 西表島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

名和 純, 2005. エレガントカドカド. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 470.

名和 純, 2011. 琉球大学資料館 (風樹館) 多板綱・腹足綱・掘足綱・頭足綱標本目録. 琉球大学資料館 (風樹館) 収蔵資料目録, (6): 1-254.

執筆者名： 福田 宏・名和 純* *前回改訂版 (2005) における名和による記載内容を一部引用した。

- 和名 : ウラウチコダマカワザンショウ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科
- 学名 : *Ovassiminea* sp.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 図の解説 : p. 44. A: 西表島浦内川, B: 石垣島名蔵湾, C: 西表島浦内川. 撮影: 久保弘文.
形態 : 殻長 3 mm, 殻径 2.2 mm. 殻は卵円錐形、厚質堅固、殻表は明るい檸檬色。後成層上部及び体層縫合下に複数の強い螺溝を巡らす。臍孔は明瞭に開く。頭部-腹足は白色で、眼胞は太短い。蓋は革質半透明で、内面にアマオブネ科の種を想起させる明瞭な突起(ペグ)を持つ。
- 近似種との区別 : 殻はツブカワザンショウに似るが、螺状色帯を欠く。蓋のペグはコダマカワザンショウ属 *Ovassiminea* Thiele, 1927 の共有派生形質であり、日本産のカワザンショウ科の種では本種だけが持つ特徴である。
- 分布の概要 : 石垣島(名蔵)と西表島(浦内川、古見、仲間川)の固有種。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属の他種は日本では知られておらず、台湾、香港、タイ、フィリピン、北オーストラリア等熱帯域に分布する。
- 生態的特徴 : 生活史や発生様式は未詳。
生息地の条件 : マングロープ内や辺縁の塩生湿地の潮間帯砂泥底に堆積した落葉や朽木の下に限られ、西表島ではコーヒーイロカワザンショウやヤイマカチドキシタダミ等と同所的に見られる。
- 個体数の動向 : 既知産地は僅か4箇所、分布域が狭く個体数も少ない。石垣島名蔵の棲息地は僅か10×10 m程度の範囲しかない。同様の小規模な個体群がかつては八重山諸島に点在していたと思われるが、既にその多くが消失した可能性がある。
- 学術的意義・評価 : 未記載種。また、コダマカワザンショウ属の種のうち、世界で最も北方に分布する種として貴重である。
- 生存に対する脅威 : 水質や底質の汚染、マングロープ縮小、護岸や埋立等の影響が強く懸念され、特に近年のリゾート開発等によって各個体群は脅威に晒されている。
- 特記事項 : 石垣島・西表島は国立公園であり、自然公園法で開発規制されている。
参考文献 : 福田 宏, 2012. ウラウチコダマカワザンショウ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 53.
福田 宏, 2014. ウラウチコダマカワザンショウ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 288.
早瀬善正, 2004. 西表島産カワザンショウガイ科の一種. かきつばた, (29): 12-14.
久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック—レッドデータおきなわ—第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—2. 西表島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相(2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.
- 執筆者名 : 福田 宏・久保弘文・早瀬善正・亀田勇一

- 和名 : アシヒダツボ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科
- 学名 : “*Rugapedia*” sp.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 図の解説 : p. 44. 標本, 生体(上段, 左下): 豊見城市漫湖. 生体(下段中, 右): 石垣島名蔵. 撮影: 福田 宏.
形態 : 殻長 3 mm, 殻径 2 mm. 殻は円錐形で、半透明、厚質、赤茶褐色で、縫合下に明瞭な螺溝を巡らす。臍孔は狭く隙間状。殻底に螺状陵角を持ち、殻口前端が鋭く尖る。蓋は種子形で革質、半透明、黄褐色。頭部-腹足の背面と側面は黒点を散在するが、蓋葉と臍面は無色。眼胞は長く、腹面に細長い黒斑を持つ。腹足は全長約2 mmで、臍面は約15本の顕著な横向きの溝で等間隔に刻まれる。
- 近似種との区別 : 臍面の溝は *Rugapedia* Fukuda & Ponder, 2004 に固有の特徴である。殻はサツマクリイロカワザンショウに似るが、螺層の膨らみがより弱く、殻口前端の突出が強い。オイランカワザンショウにも似るが殻底に色帯を欠く。
- 分布の概要 : 沖縄島、久米島(白瀬川)、石垣島(名蔵)、西表島(浦内川、船浦)。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : *Rugapedia* 属はタイ、フィリピン、北オーストラリアから数種が見出されているが、タイプ種フタナリアシヒダツボ(新称: *R. androgyna* Fukuda & Ponder, 2004)を除きすべて未記載である。
- 生態的特徴 : 未詳。
生息地の条件 : 河口マングロープ内や辺縁の砂泥底・泥底の転石や落葉、朽木等の下に見られ、沖縄島と久米島ではオイランカワザンショウ、西表島ではウラウチコダマカワザンショウやコーヒーイロカワザンショウと同所的に産する。小規模な河口や粗い砂泥底には見られず、大規模なマングローブのない宮古島と与那国島では見出されていない。
- 個体数の動向 : 沖縄島では複数の産地があり、一部(漫湖等)では多産するが、他の3島では1箇所のみで知られ

る。
現在の生息状況 : 現存産地は 10 箇所以下しかなく、沖縄島以外では棲息範囲は狭く、個体数も少ない。西表島では 2015 年 12 月に久保弘文氏の調査で初めて見出された。
学術的意義・評価 : 未記載種。最近の分子系統解析 (亀田・福田, 未発表) によると、国外の *Rugapedia* 属とは単系統群を形成せず、本種には新しい属を創設する必要がある。
生存に対する脅威 : マングローブ伐採、河口や海岸の護岸・埋立、水質や底質の悪化。
特記事項 : フタナリアシヒダツボは雄性先熟で継続的雌雄同体であるが、本種は雌雄異体である。
参考文献 : 福田 宏, 2012. アシヒダツボ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 54.
 Fukuda, H. & Ponder, W.F., 2004. A protandric assimineid gastropod: *Rugapedia androgyna* n.gen. and n.sp. (Mollusca: Caenogastropoda: Rissooidea) from Queensland, Australia. *Molluscan Research*, 24: 75–88.
 久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー2. 西表島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

執筆者名 : 福田 宏

和名 : コーヒーイロカワザンショウ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科
学名 : *Assimineidae* gen. A & sp.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

図の解説 : p. 44. A: 西表島大原. B: 西表島浦内川. 撮影: 久保弘文.
形態 : 殻長 3.5 mm、殻径 2 mm。殻は高円錐形で濃茶褐色、光沢が強い。周縁は鈍く角張り、他の部分より僅かに色が薄い。臍孔は狭く隙間状に開き、その周囲に螺状陵角を巡らす。縫合下の螺溝は明瞭。蓋は革質で黄褐色半透明。頭部・腹足の前方は黒色色素で覆われ、後方及び蹠面は灰色。眼胞は短い三角形で、眼の後方に三日月形の黒斑を持つ。

近似種との区別 : 陸奥湾～種子島に分布するクリイロカワザンショウに似るが、殻表の光沢が強い。南西諸島に多いサツマクリイロカワザンショウは赤みが強く半透明で、螺層はより膨らむ。

分布の概要 : 西表島 (浦内川、西ゲーダ川、ユチン川、前良川、仲間川、大原小学校附近の無名河川) から知られる。石垣島名蔵川河口神田橋からも記録がある (名和, 2009, 2011) が、その証拠標本 (琉球大学風樹館所蔵 RUMF-ZM-05319) は別種の可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 西表島では同所的にサツマクリイロカワザンショウ、アシヒダツボが見られることがある。

生態的特徴 : 棲息環境以外未詳。

生息地の条件 : マングローブ内や辺縁の塩性湿地の潮間帯砂泥底に堆積した落葉や朽木等の下に棲息し、ヤイマカチドキシタダミ、ウラウチコダマカワザンショウ等と同所的に見られる。

個体数の動向 : 西表島固有種の可能性が高く、既知産地は世界でも同島の数箇所のみで、分布域・棲息範囲が極端に狭いため、総個体数も少ないと推測される。

現在の生息状況 : 現存する全個体群が極めて狭い範囲に存立しており、埋立や護岸等がなされると容易に失われる。また漂着物などが消失すると個体群も壊滅する可能性が高い。

学術的意義・評価 : 歯舌や生殖器の特異な形態や分子系統解析の結果から、本種に対して新属の創設を必要とする (有明海・玄界灘・韓国南西岸に分布するオオクリイロカワザンショウのみからなる新属の姉妹群)。

生存に対する脅威 : マングローブ伐採、河口や海岸の護岸・埋立、水質や底質の悪化等の影響が強く懸念される。近年のリゾート開発等によって個体群は脅威に晒されている。

特記事項 : 石垣島・西表島は国立公園であり、自然公園法で開発が規制されている。

参考文献 : 福田 宏, 2012. コーヒーイロカワザンショウ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 47.

福田 宏, 2014. コーヒーイロカワザンショウ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 285.

久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー2. 西表島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

名和 純, 2011. 琉球大学資料館 (風樹館) 多板綱・腹足綱・掘足綱・頭足綱標本目録. 琉球大学資料館 (風樹館) 収蔵資料目録, (6): 1-254.

山下博由・名和 純・福田 宏・奥田夏樹, 2005. 西表島浦内川流域・トゥドゥマリ浜の貝類相 (予報). “西表島浦内川河口域の生物多様性と伝統的自然資源利用の総合調査報告書 II”, 西表島浦内川流域研究会 (編), 西表島浦内川流域研究会, 竹富, 47-61.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文・亀田勇一

和名 : 沖縄島のホラアナゴマオカチグサ類似種群
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科

〈貝類〉

ウ科

学 名 : Assimineidae gen. B & spp.

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

図 の 解 説 : p. 44. 1: 金武町金武. 2: 南城市玉城. 撮影: 亀田勇一.

形 態 : 殻長 1.4 mm、殻径 1.2 mm。殻は卵円錐形、薄質、光沢が強く無色半透明。螺層は膨らみ、縫合は深くくびれる。殻表は弱い成長脈以外は平滑。殻口外唇はやや肥厚する。臍孔は狭く開く。蓋は種子形で革質、半透明、黄褐色。頭部・腹足は無色半透明。頭触角は右側の痕跡のみで、眼胞は太短く、眼は黒い色素を持たない。

近似種との区別 : ホラアナゴマオカチグサ種群とは殻の形態が酷似しており、同定には軟体の検討や分子系統解析が必須である。直腸がゴマオカチグサ属のように複雑に曲がることはなく、外三つ折り状になることで識別できる。また、琉球列島産のホラアナゴマオカチグサ種群とは、眼に黒い色素を持たないことも区別点となる。

分布の概要 : 沖縄島からのみ確認されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 現時点では沖縄島のみから見つかった系統で、近縁なグループも不明である。明確に本種群であることが判明しているのは金武町と南城市の2洞窟の個体群のみであり、過去の記録にある分布地も本種群とホラアナゴマオカチグサ種群のものが混在している可能性は否定できない。

生態的特徴 : ホラアナゴマオカチグサ種群と同様。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 洞窟棲かつ微小種であるため、少数が記録されているのみである。他県では観光開発による乾燥化で激減した場所もあり、本種群も個体群が縮小している可能性が高い。

現在の生息状況 : 南城市の洞窟は多数の人が訪れる観光洞で照明も多く、棲息域・個体数とも限られており、外来種であるジャワザンショウも侵入している。金武町の洞窟も人に利用されてはいるが、洞内の水量は豊富で、今のところ概ね良好な環境が保たれている。

学術的意義・評価 : *Cavermacmella* とは独立に洞窟適応を果たし、形態的収斂を生じている可能性が高い。また、沖縄島以外からは記録されておらず、進化生態学的・生物地理学的に極めて重要である。

生存に対する脅威 : ホラアナゴマオカチグサ種群と同様。

参 考 文 献 : 伊藤良吉, 1963. ホラアナゴマオカチグサの分布について. 秋吉台科学博物館報, (4): 83-87.

亀田勇一・川北 篤・加藤 真, 2008. 「ホラアナゴマオカチグサ」は洞窟ごとに別種である (日本貝類学会創立80周年記念大会 (東京) 研究発表要旨). *Venus*, 67: 99.

下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第14集 沖縄県洞穴実態調査報告Ⅰ”. 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 75-112.

下謝名松栄, 1979. 沖縄島および周辺離島における洞穴動物. “同 第16集 沖縄県洞穴実態調査報告Ⅱ”. 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 97-153.

執 筆 者 名 : 亀田勇一・福田 宏

和 名 : アマミクビキレ

分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 クビキレガイ科

学 名 : *Truncatella* sp. E

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省カテゴリー : 該当なし

図 の 解 説 : p. 44. A: 那覇港外 (西宮市貝類館所蔵 NCKG00590). B: 渡名喜島渡名喜港. C: 伊良部島国仲. 撮影: 福田 宏.

形 態 : 殻長 8 mm、殻径 3 mm。殻は細長い円筒形、淡紅色～象牙色で厚く不透明、光沢は鈍い。体層に約 24 本、次体層に約 21 本の緩く彎曲した太い縦肋を広い間隔で並べる。螺層の膨らみと縫合の縊れは弱い。殻口外唇は反転するが、外側に縦張肋状の肥厚はない。胎殻の縦肋と蓋の石灰化はオカクビキレ等と同様。

近似種との区別 : クビキレガイより小形で、縦肋は少なく間隔が広い。

分布の概要 : 奄美大島、加計呂麻島、徳之島、沖縄島、渡名喜島、久米島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 多くの産地でクビキレガイに随伴する。

生態的特徴 : 直達発生で、水のない飼育下でも産卵し、幼貝が現れる。

生息地の条件 : 内湾奥～湾口に面した岩礁地飛沫帯において、砂泥底の転石等の下に見られ、クビキレガイより海寄りに産する。

個体数の動向 : 南西諸島の広範囲に産するものの、クビキレガイより産地数・個体数とも少ない。

現在の生息状況 : どの島でも産地は1～数箇所に限られ、合計 20 箇所以下しか知られていない。

学術的意義・評価 : 最近ようやく存在が明確化された種である。本種に限らずインド-太平洋産クビキレガイ科貝類の分類は著しく遅れており、本種の認知が同科の研究推進の端緒となることが期待される。

生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、水質・土壌汚染。

特 記 事 項 : 本種の学名は *T. amamiensis* Kuroda & Habe in Habe, 1961 とされてきたがこれは誤り。黒田徳米標本 (西宮市貝類館 NCKG00591、00594) を見ると、本来その学名で記載される予定であったのは確かに本種であるが、*T. amamiensis* のホロタイプに指定された徳之島鹿浦産個体 (NSMT Mo 49778) は

クビキレガイであるため、本種はいまだ学名を持たない。安藤・波部 (1981: pl. 1, fig. 2) が本種として図示した奄美大島名瀬産、増田・内山 (2004: 111) が「ヤマトクビキレ」とした久米島産生体、久保 (2014: 291, pl. 1, fig. 13) が「ヤマトクビキレガイ」とした恩納村山田海岸産は全て本種である。

- 参 考 文 献 : 安藤保二・波部忠重, 1981. 陸産貝類図説 (2). クビキレガイ属 *Truncatella* とクビキレガイモドキ属 *Cecina*. ちりぼたん, 12: 79-82.
- 福田 宏・青柳 克・亀田勇一, 2017. 沖縄県渡名喜島の非海産貝類相. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
- 福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科 (新生腹足類: クビキレガイ上科) の再検討に向けて. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
- 波部忠重, 1961. 続原色日本貝類図鑑. 保育社, 大阪, 4+xii+182+46 pp., 62 pls.
- 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
- 黒田徳米, 1950. クビキレガイ類 (附 Clench・Turner 著 クビキレガイ科の目録紹介). 夢蛤, (49): 1-2.
- 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+106 pp., 3 pls.
- 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

執 筆 者 名 : 福田 宏・久保弘文

和 名 : **カイゲンボウクビキレ**
 分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 クビキレガイ科
 学 名 : *Truncatella* sp. F
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

図 の 解 説 : p. 44. 標本 : 宮古島平良荷川取成川. 生体 : 南大東島海軍棒. 撮影 : 福田 宏.
 形 態 : 殻長 5.3 mm, 殻径 2.3 mm. 殻は円筒形、淡紅色～象牙色で不透明、光沢を帯び、体層に約 19 本、次体層に約 20 本の強い縦肋を並べ、縫合下は階段状を成す。殻底の縞帯と軸唇の間は遊離せず偽膺孔状にならない。外唇外側が縦張肋状に肥厚する。胎殻の表面は目立った彫刻がない。蓋は石灰化せず薄く半透明、楕円形で扁平。

近似種との区別 : 沖縄県産クビキレガイ科貝類のうち、蓋が石灰化せず、胎殻の表面が平滑な唯一の種である。キザハシクビキレやロウタキクビキレに似て縫合が階段状となるが、殻底に偽膺孔を形成しない。大きさはそれら 2 種の間である。

分布の概要 : 沖縄島 (恩納村山田)、宮古島 (平良荷川取成川・下崎)、伊良部島 (サバ沖井戸)、石垣島、北大東島 (江崎港)、南大東島 (海軍棒)。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : クビキレガイやアマミクビキレが南西諸島の広範囲に分布するのに対し、本種は上記 6 島 7 箇所でしか記録がない。

生態的特徴 : 飼育下の水を欠いた状態で幼貝を生じ、直達発生。転石に附着した藻類等を摂食する。
 生息地の条件 : 内湾奥または外洋に面した海岸飛沫帯において、岩礁の窪みに溜まった粗砂底間や転石・落葉下に見られ、同所的にキザハシクビキレ、ブタハマチグサ、カドカドガイ類、ヒミツナメクジ等が産する。

個体数の動向 : 既知のどの産地も棲息範囲が僅か数 m 程度と著しく狭い。
 現在の生息状況 : 過去にはより広く分布していたものの大半が壊滅した可能性がある。ただし地中に深く潜るため見つけにくい種でもあり、今後の調査で新産地が見出されるかもしれない。

学術的意義・評価 : アマミクビキレと同様。
 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。

特 記 事 項 : 増田・内山 (2004) が「ヤマトクビキレ近似種」として図示した沖縄島恩納村・石垣島産個体や、福田・久保 (2012) の「キザハシクビキレガイ」の写真のうち中央の宮古島平良荷川取成川産、及び久保 (2014) の沖縄島恩納村山田海岸産「キザハシクビキレガイ」は本種である。

- 参 考 文 献 : 福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科 (新生腹足類: クビキレガイ上科) の再検討に向けて. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
- 福田 宏・久保弘文, 2012. キザハシクビキレガイ (和名新称). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 55.
- 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
- 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック ーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
- 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

執 筆 者 名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : ヨロイノソデ
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 スイショウガイ上科 スイショウガイ科
 学名 : *Margistrombus septimus* (Duclos in Chenu, 1844)
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 該当なし

図の解説 : p. 44. 金武湾. 撮影 : 久保弘文.
 形態 : 殻は本科中、中型で、丸みを帯びた亜方形、外唇は大きく張り出し肥厚する。殻表は平滑で殻口外唇内壁は白色で、多数の襞を有する。体層背面の殻色は淡褐色の地に茶褐色の矢絛紋を装う線条を4~5本めぐらす。蓋は褐色、細い爪形で片側が鋸歯状。殻長 50 mm 内外。

近似種との区別 : 日本本土に分布するシドロより殻が前後に短く寸胴で、フドロより外唇が伸展し、螺層が高まる。すなわちシドロとフドロの中間的特徴を有する。

分布の概要 : 本邦では沖縄島のみ。国外ではフィリピン、インドネシア、ニューカレドニアから知られている。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本本土に近縁のシドロとフドロが分布するが、沖縄には両種の記録は無い。

生態的特徴 : ヒメウミヒルモ等の生えた内湾砂泥上の微細藻類を摂食していると考えられる。
 生息地の条件 : 規模の大きな湾域（金武湾）の水深約4~12 mの砂泥底に生息。
 個体数の動向 : 沖縄島では金武湾に限られた範囲でしか確認されており、刺網漁獲物での混獲個体数は2005年以降、大きく減少している。

現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 国内では他に全く報告例がなく、沖縄島の内湾で隔離された固有の遺存個体群の可能性がある。
 生存に対する脅威 : 本種の餌となる砂泥上の微細藻類は適度な栄養と高い透明度に支えられており、富栄養や陸土流入による水質および底質の悪化が絶滅リスクを増大させる。

特記事項 : フドロの亜種または一型ともされるが、形態がシドロとも類似して、明らかに識別できる。
 原記載 : Duclos, P.L., 1844. Genre *Strombus*. Illustrations conchyliologiques, ou, Description et figures de toutes les coquilles connues vivantes et fossiles, classées suivant le système de Lamarck modifié d'après les progrès de la science et comprenant les genres nouveaux et les espèces récemment découvertes, Tome 4, Chenu, J.C. (ed.), A. Franck, Paris. (p. 7, pl. 13, figs 9-10; pl. 15, fig. 11; pl. 26, fig. 2. Type loc. not designated)

参考文献 : Abbott, R.T., 1960. The genus *Strombus* in the Indo-Pacific. Indo-Pacific Mollusca, 1(2): 33-146.
 Abbott, R.T.・Dance, S.P. (波部忠重・奥谷喬司監修・訳), 1985. 世界海産貝類大図鑑, 平凡社, 東京, 443 pp.

執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

和名 : オハグロガイ
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 スイショウガイ上科 スイショウガイ科
 学名 : *Strombus urceus* (Linnaeus, 1758)
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は本科中、小型で、やや角張った紡錘形、殻表は平滑で殻口外唇内壁が紫褐色に染まり、多数の襞を有する。殻色は灰白色の地に茶褐色の不定形斑紋を散らす。蓋は赤褐色で細い爪形。殻長 40 mm 内外。

分布の概要 : 沖縄島（主に金武湾、中城湾、羽地外海）、宮古島、石垣島、西表島。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種の所属するスイショウガイ類は亜熱帯域に広く分布する種が多く、本種もその中に包含される普通種である。

生態的特徴 : アマモ場の海藻の間に紐状の卵嚢を産み付ける。藻食性。
 生息地の条件 : 規模の大きな干潟のアマモ場やその周辺の砂礫底に生息する。コアマモーマツバウミジグサ群落などのアマモ場干潟に特徴的な種である。

個体数の動向 : 西表島等開発の少ない先島諸島沿岸では個体数は少なくないが、石垣島南部や川平湾等では2010年以降、顕著に減少している。沖縄島では羽地内・外海や東海岸の一部（うるま市海中道路付近や北中城村久場崎）で局所的にまとまった個体群が生残しているにすぎない。沖縄市泡瀬や沖縄島南部では埋立て、航路浚渫等による生息場所の直接的な破壊で生息場所が大きく消失した。

現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 本種を含むスイショウガイ類は多産種が多く、熱帯浅海域の生態系において、優占的な第一次消費者であり、肉食性種の餌資源としても重要な地位を占めていると考えられる。これらが大きく減少することで生態系の物質循環が滞り、連鎖的な生態系攪乱が生じる可能性がある。

生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所の消失、底質の悪化、貝殻、貝細工用採取による乱獲。

原記載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cumcharacteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 745, no. 440, as *Strombus urceus*. Type loc.: "in O. Asiae")

参考文献 : 久保弘文, 2005. オハグロガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課（編）, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 419-420.
 久保弘文, 2012. オハグロガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会（編）, 東海大学出版会, 秦野, 56.
 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名：久保弘文

- 和名：リュウキュウダカラ
 分類：腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 タカラガイ上科 タカラガイ科
 学名：Cypraea luchuana (Kuroda, 1960)
 方言名：モーモー
 カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ：該当なし
- 図の解説：p. 44. 糸満市. 撮影：久保弘文。
 形態：殻は本科中やや小型、卵球形、殻表は光沢が強く、灰青色で、灰褐色の小斑を散在させる。最大殻長約 20 mm。
- 近似種との区別：近似種ウスムラサキダカラは殻頂部に黒褐色色彩を有する別種で、個体変異もあり、分類学的に不詳な部分もあったが、分子系統解析で独立種であることが確認された。
- 分布の概要：沖縄島とその周辺離島、宮古、石垣、西表島に分布する沖縄県の固有種である。
- 生態的特徴：海藻類の他、海綿等も摂食する雑食性と考えられ、死サンゴ塊の隙間にドーム上の卵塊を産みつけ、それを保護する習性をもつ。
- 生息地の条件：潮通しの良いリーフ内のアマモ場やサンゴ礁に生息し、海藻や海綿を伴った清浄な底質を好む。
- 個体数の動向：沖縄島南部では埋立てによる直接的な生息場所の消失等で生息数が減少しており、タカラガイは収集目的になりやすく、乱獲の影響もあると思われる。
- 現在の生息状況：宮古島、八重山では沖縄島と比べ棲息範囲も狭く、特に八重山は個体数も非常に少ない。沖縄島でも先述理由で健全な個体群は限られている。
- 学術的意義・評価：数少ない沖縄県の海産貝類固有種であり、生物地理学的意義が非常に大きい。
- 生存に対する脅威：埋立てによる生息場所の消失、底質の悪化、タカラガイ収集による乱獲。
- 原記載：黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+104 pp. (p. 74, pl. 3, figs 40-45, as *Bistolida (Blasicrura) pallidula luchuana*. Type loc.: "沖縄")
- 参考文献：久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
 真野 進・淤見慶宏・倉持敦子・倉持卓司, 2013. 沖縄県石垣島より採集されたリュウキュウダカラ (軟体動物門, 腹足綱, タカラガイ科). 南紀生物, 55(1): 63-64.
 Meyer, C.P., 2003. Molecular systematics of cowries (Gastropoda: Cypraeidae) and diversification patterns in the tropics. *Biological Journal of the Linnean Society*, 79(3): 401-459.
 淤見慶宏・真野 進, 2005. 宮古島で発見されたリュウキュウダカラ. 九州の貝, (65) 27-31.

執筆者名：久保弘文

- 和名：ネコガイ
 分類：腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 タマガイ上科 タマガイ科
 学名：Eumaticina papilla (Gmelin, 1791)
 カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ：準絶滅危惧 (NT)
- 形態：殻は本科中、やや小型で、洋梨形、臍孔が開口し、殻表は細い螺溝が多数刻まれ、薄い淡黄色の殻皮に覆われる。殻の地色は白い。蓋は革質で薄く半月型。殻長 20 mm 内外。
- 近似種との区別：近似種ヒメミミガイは殻がより扁平で、臍孔が大きく開かないことから、区別される。
- 分布の概要：沖縄全域 (大東諸島等外洋島嶼を除く)。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較：本種の所属するタマガイ類は亜熱帯域に広く分布する種が多いが、本種は日本本土温帯域まで広く分布する広域種で、沖縄個体群は沖縄島に分布の中心があり、むしろ隔離個体群の可能性もある。
- 生態的特徴：貝食性で、餌となる貝の殻に穴を穿つ。砂底に埋入したまま匍匐し、砂粒を付けた卵塊 (通称砂茶碗) を産む。
- 生息地の条件：比較的富栄養で泥分の多い環境にも出現するが、潮通しの良い場所を好み、栄養の多い豊かな内湾環境を棲息条件とする。
- 個体数の動向：個体数の減少は埋立て等大規模な生息場所消失があり、明らかである。
- 現在の生息状況：沖縄島では中城湾・金武湾など大規模な内湾干潟に少ないながら確認されるが、先島諸島では殆ど記録が無く、非常に個体数が少ない。沖縄島中南部・宮古島南部・石垣島南部では港湾開発・埋め立て事業等で一部の生息場所が消失している。
- 学術的意義・評価：タマガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。
- 生存に対する脅威：内湾潮間帯に分布の中心をもち、埋立てに生息場所消失が最大の減少要因となる。
- 特記事項：愛知県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に掲載されている。
- 原記載：Gmelin, J.F., 1791. *Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis*. Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, pp. 3021-3910. (p. 3675, no. 20, as *Nerita papilla*. Type loc.: "frequens ad Tranquebariae littora")
- 参考文献：木村昭一, 2009. ネコガイ. "愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち

2009 “動物編一”, 愛知県環境調査センター (編), 愛知県環境部自然環境課, 名古屋, 536.
 木村昭一, 2012. ネコガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 57.
 久保弘文, 2005. ネコガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) —レッドデータおきなわ—”. 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 358.
 齋藤 寛, 2000. タマガイ科. “日本近海産貝類図鑑”, 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 250-267.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ヒメツメタガイ**
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 タマガイ上科 タマガイ科
 学名 : *Glossaulax cf. vesicalis* (Philippi, 1849)
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻は本科中、中型で、ドーム状の半球形、殻表は平滑で光沢があり、淡灰褐色。臍孔は大きく開き、小さいが明瞭な臍盤を形成する。蓋は革質、半月型。殻径 4 cm 内外。
 近似種との区別 : 沖縄では近似のツメタガイ類は他に知られていない。
 分布の概要 : 沖縄島羽地海域、金武湾、中城湾、大浦湾。
 生態的特徴 : 貝食性。主に夜行性で、砂底を匍匐し、砂粒を付けた卵塊 (通称砂茶碗) を産む。
 生息地の条件 : 沖縄においては、開放的な内湾の低潮線付近から水深 30 m 付近の清浄な細砂泥底で確認されている。
 個体数の動向 : 羽地外海や中城湾、金武湾においては個体群の減少が著しく、中城湾では埋立てにより生息場所が大幅に狭められた。大浦湾では湾内水路の潮通しの良い砂泥底に比較的健全な個体群が確認されている。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 本県では沖縄島の上に棲息し、久米島等周辺離島や先島諸島では記録が無く、生物地理学的意義が大きい。
 生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所の直接的破壊・消失・陸域からの栄養や土壌微粒子の過剰流入による底質悪化。
 特記事項 : 前回の改定では沖縄型としたが、本種のタイプ産地は中国の広東省で沖縄に近く、また奄美大島産貝類目録で和名新称となった経緯も考慮して、日本本土と南西諸島の個体群を亜種として区別する場合は、むしろ南西諸島産を担名亜種とし、日本本土の方を別亜種にするのが適切かもしれない。
 原記載 : Philippi, R.A., 1849 (for 1848). *Centuria tertia Testaceorum novorum*. *Zeitschrift für Malakozoologie*, 5: 151-160. (pp. 159-160, as *Natica vesicalis*. Type loc.: “Canton”)
 参考文献 : 久保弘文, 2005. ヒメツメタガイ沖縄型. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) —レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 472.
 黒田徳米, 1928. 奄美大島産貝類目録. 鹿児島県教育調査会, 鹿児島, 126 pp.
 齋藤 寛, 2000. タマガイ科. “日本近海産貝類図鑑”, 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 250-267.

執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

和名 : **テンセイタマガイ**
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 タマガイ上科 タマガイ科
 学名 : *Notocochlis robillardi* (Sowerby III, 1893)
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は本科中、中型で、亜球形、殻表は全体的に平滑だが、縫合直下は弱い皺ができる。殻色は殻口の肥厚した成貝では体層が光沢のある茶褐色で、殻口の肥厚しない亜成貝では褪せた灰褐色で、体層中央部に弱い螺条をめぐらす場合がある。縫合及び臍孔付近のみ帯状に白く色が抜ける。原殻および殻頂付近はやや黒ずむ。臍孔は狭く、わずかに開口し、臍盤は発達が悪く、ゆるやかに湾曲して肥厚するのみ。蓋は石灰質で、平滑で光沢があり、外縁に弱く細い溝を 2 本刻む。蓋の色は白く、下位にある核のみ焦茶色に染まる。殻径約 20 mm。
 近似種との区別 : 本種はホウシュノタマガイに類似するが、より大型化し、蓋の核に黒い斑紋が入り、目玉のような模様になるのが特徴である。
 分布の概要 : 沖縄島名護湾、中城湾、石垣島川平湾、崎枝湾および名蔵湾から知られる。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種の所属するタマガイ類は亜熱帯域に広く分布する種が多く、本種もその中に包含されるが、国外では具体的な産地記録が非常に乏しい。
 生態的特徴 : 貝食性、主に夜行性で、砂底を匍匐し、砂粒を付けた卵塊 (通称砂茶碗) を産む。
 生息地の条件 : 自然度の保たれた生物多様性の高い内湾のアマモ場周辺の細砂底～砂泥底に生息する。
 個体数の動向 : 沖縄島では元来極めて稀であるが、石垣島川平湾の湾奥及び水路部では 1999～2009 年のモニタリングでは毎回確認されてきた。しかし、2010～2015 年の定性モニタリングでは殆ど確認されていない。

現在の生息状況 : 石垣島川平湾では漁業調整規則(保護水面)により一定の保護がなされている。しかし、他の産地においては個体群規模が小さく、底質悪化や環境変化が進んでいる。

学術的意義・評価 : 熱帯砂底域に適応放散した貝食性貝類の一つで進化や生態学的研究において重要であり、中でも最も稀少な種の一つである。

生存に対する脅威 : 埋立てや底質の悪化、一部ではネットオークションでも出品されており、販売目的での収集。

特記事項 : 本種の1974年の最初の採集記録から、継続して生息が認められ、偶存種ではなく、定着種である。

原記載 : Sowerby, G.B. III, 1893. Description of twelve new species, chiefly from Mauritius. Proceedings of the Malacological Society of London, 1: 41-44, pl. 4. (p. 43, pl. 4, fig. 12, as *Natica Robilliardi*. Type loc.: "Mauritius")

参考文献 : 久保弘文, 2012. テンセイタマガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 59.
久保弘文, 2014. テンセイタマガイ. "レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 419.
久保弘文・石川 裕, 2004. 石垣島川平湾のタマガイ類. かいなかま, 38(1): 1-6.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ロウイロトミガイ**

分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 タマガイ上科 タマガイ科

学名 : *Polinices mellosus* (Hedley, 1924)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 最大約殻長 40 mm の卵球形の小型巻貝で、殻表は淡黄白色で光沢が強く、黒色の蓋をもつ。

近似種との区別 : 近似種は蓋の色で区別でき、トミガイ・シロヘソアキトミガイは共に藍色、ヘソアキトミガイは藍色と黒褐色の染め分けとなる。

分布の概要 : 国内の多くの文献には奄美大島以南、沖縄全域に分布するとされるが、実際には八重山諸島特有の種で、他地域では正式な分布記録が殆どない。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : トミガイ類中、最も分布に偏りがある。

生態的特徴 : 貝食性。主に夜行性で、砂中を潜って匍匐し、砂粒を付けた卵塊(通称砂茶碗)を産む。

生息地の条件 : アマモ場干潟の水深 2 m 付近までの砂泥底に生息。

個体数の動向 : 1990年代には石垣島を中心に干潟の多産種であったが、2008年頃から名蔵湾、川平湾を中心に著しく減少傾向にある。

現在の生息状況 : 環境省モニタリング 1000 による 2005 年以降の連続的に継続している毎年調査でも、ここ 5 年以内(2010 年以降)では、確認個体数は極めて僅かで最大 1~2 個/回に留まっている。

学術的意義・評価 : トミガイ類は熱帯浅海域に多種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。

生存に対する脅威 : 内湾潮間帯に分布の中心をもち、底質悪化や埋立てによる生息場所消失が最大の減少要因となる。

特記事項 : 世界的に見ても分布記録が乏しく、比較的詳細な各地の総説(フィジーやハワイ、南アフリカ等)でも記載がない。学名も混乱しており、Kabat (2000: 319-320, as *P. mellosus*) により蓋の特徴から *P. mellosus* に同定することが提案されているが、それ以外の文献は根拠に乏しい。

原記載 : Hedley, C., 1924. Some naticoids from Queensland. Records of the Australian Museum, 14: 154-162, pl. 22. (pp. 158-159, pl. 22, fig. 5, as *Uber mellosus*. Type loc.: "Eagle Island")

参考文献 : Kabat, A.R., 2000. Results of the Rumphius Biohistorical Expedition to Ambon (1990). Part 10. Mollusca, Gastropoda, Naticidae. Zoologische Mededelingen., 73(25): 345-380.
久保弘文, 2012. ロウイロトミガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 60.
久保弘文, 2014. ロウイロトミガイ. "レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 280.

執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

和名 : **ハブタエセキモリ**

分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 翼舌類 イトカケガイ上科 イトカケガイ科

学名 : *Epitonium lyra* (Sowerby II, 1844)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は本科中、中型で、殻長 10 mm 内外。円柱状の螺管を巻き上げた高円錐形、殻表には非常に繊細な縦肋を多数有し、殻色は白色地に不明瞭な褐色帯をめぐらす。蓋は丸く、革質で黒色。

近似種との区別 : 近似種リュウキュウイトカケはより殻が大きく、螺塔が細いこと、色帯を欠くことから、区別される。

分布の概要 : 沖縄全域(大東島海域等外洋域を除く)。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近似種セキモリ、クレハガイは共に日本本土に生息し、沖縄での分布重複例は知られていない。

生態的特徴 : 本科はイソギンチャクに寄生する種が多いといわれるが、本種はこれまで 10 例以上の観察事例があ

<貝類>

- るにもかかわらず、いずれも砂泥上を這い回っている状態で見つかっており、特定の宿主上で観察されたことがない。よって、日和見的寄生者である可能性が高い。
- 生息地の条件 : やや開放的な干潟の豊かなアマモ場に隣接した砂泥底に生息し、垂直分布の幅が狭く、最も陸域に近い渚線付近に生息場所が形成される。
- 個体数の動向 : 元来、個体数の少ない種で、沖縄島では糸満市から豊見城市沿岸に小規模な個体群が確認されていたが、大規模埋立てにより生息場所が大幅に縮小した。石垣島（川平湾や宮良湾）では2005年頃まで少ないながら生息が確認されたが、2010年以降のモニタリングでは確認が困難な状況となっている。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 日和見的寄生等生態的知見が不詳で、分類学的にも、類似した別種が存在している。
- 生存に対する脅威 : 最も陸域に近い渚線に生息場所を形成するため、海岸改変、埋立て等の影響を被りやすい。
- 原 記 載 : Sowerby, G.B. II, 1844. Descriptions of new species of *Scalaria*, collected by Mr. H. Cuming, to be figured in the fourth part of Thesaurus Conchyliorum. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1844: 10-14. (p. 13, as *Scalaria Lyra*. Type loc.: “Ins. Masbate, Philippinarum”)
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. ハブタエセキモリ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）—レッドデータおきなわ—”. 沖縄県文化環境部自然保護課（編）, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 423.
- 久保弘文, 2012. ハブタエセキモリ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会（編）, 東海大学出版会, 秦野, 62.
- 久保弘文, 2014. ハブタエセキモリ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）, ぎょうせい, 東京, 420.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : ナマリレイシダマシ
分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 アッキガイ上科 アッキガイ科
学 名 : *Orania livida* (Reeve, 1846)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形 態 : 殻長約3 cm、縦長の紡錘形。太い縦肋をめぐらし、肩が張る。水管溝は太く、殻口内は濃紫色。
- 近似種との区別 : ヒロウネレイシダマシは殻口が紫色となる点で類似するが、殻表に明瞭な縮緬彫刻を有する。
- 分布の概要 : 熱帯西太平洋域に地理分布があり、その北限にあたる琉球列島においては、奄美大島焼内湾と沖縄島羽地内海および塩屋湾のみから見出されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 羽地内海には同属の別種 (*Orania cf. ficula* (Reeve, 1848)) が知られているが、本別種は低潮線付近に出現し、垂直分布域が重複しない。
- 生態的特徴 : 内湾泥干潟の潮間帯上部の岩礫下に棲息する。同属には腐肉食種が多いことから、本種も腐肉食性の可能性があるが、詳細は不明。
- 生息地の条件 : 内湾奥部の汽水環境において、泥礫地が形成されていること。
- 個体数の動向 : 1990年代には数十から100個体以上の個体が棲息していたと推測されるが、2010年以降、減少傾向にあり、特に羽地内海の湾奥部では個体数が非常に減少している。
- 現在の生息状況 : 生息場所が狭い上、近年、減少傾向にあり、本県のみならず、奄美渡島の個体群の状況によっては全国レベルで絶滅リスクが高まっていると考えられる。
- 学術的意義・評価 : 熱帯域の個体群からは隔離された個体群であり、分類学的、生物地理学的に極めて重要である。
- 生存に対する脅威 : 分布域が内湾奥部に限定されるため、さまざまな環境改変によって、個体群が影響を受けやすい。羽地内海や塩屋湾は陸域開発にともなう大量の陸土流入が確認されており、周辺からの畜産排水等の影響による水質悪化にも曝されている。
- 原 記 載 : Reeve, L.A., 1846. Monograph of the genus *Buccinum*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 3: pls 1-14. (sp. 87, pl. 11, fig. 87, as *Buccinum lividum*. Type loc.: “Island of Negros, Philippines”)
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2017. 第5節 海の貝類. “名護市史「自然と人」”, 名護市教育委員会 市史編纂室（編）, 名護市教育委員会, 名護, 印刷中.
- 名和 純, 2005. ナマリレイシダマシ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）—レッドデータおきなわ—”. 沖縄県文化環境部自然保護課（編）, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 358-359.
- 土屋光太郎, 2000. アッキガイ科. “日本近海産貝類図鑑”, 奥谷喬司（編）, 東海大学出版会, 東京, 364-421.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : ウスイロバイ
分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 アッキガイ上科 バイ科
学 名 : *Babylonia kirana* Habe, 1965
方 言 名 : バイゲー

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

図の解説：p. 45. 金武湾. 撮影：久保弘文。
形態：殻は本科中、やや大型で厚く、殻表は平滑で光沢が強いが、生時は厚い殻皮を被る。殻色は不明瞭な紫桃色の斑紋を有し、蓋は革質で木葉型。最大殻長約 60 mm。

近似種との区別：県内においてバイ科の種は他にない。
分布の概要：沖縄島東岸および羽地内海。鹿児島県徳之島。宮古島でも近似種の死殻が複数個体確認されているが、別種と考えられる。

近縁な種及び群との分布状況の比較：鹿児島県徳之島の記録は死殻のみ。台湾に姉妹種のタイワンバイが分布する。
生態的特徴：20 個程度の卵（直径約 0.5 mm）をもつ卵塊から、短期（1 日以内）の浮遊期を経て稚貝となる。
生息地の条件：大規模な内湾の潮通しのよい安定した細砂底。
個体数の動向：与那原湾は沖縄島最大の生息場所で、本種を対象とする漁業も営まれていたが、埋立てにより、生息海域がほぼ消滅し、現在は絶滅状態にある。

現在の生息状況：金武湾石川沖は与那原湾に次ぐ、生息場所で、現在も細々とバイカゴ漁が営まれている。美味であり、水産資源としても重要である。

学術的意義・評価：沖縄島固有のバイ科であり、生物地理学的に非常に貴重である他、宮古海域に不詳種が存在し、早急な調査が必要である。

生存に対する脅威：埋立てによる生息圏消失が最大の減少要因となる。
特記事項：バイ類は以前エズバイ科に所属していたが、むしろマクラガイ科に近いとされ、現在はバイ科として独立して扱われている。

原記載：吉良哲明, 1959. 原色日本貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, 7+vii+2+240 pp., 1+71 pls. (p. 69, no. 28, pl. 26, no. 28, as *Babylonia pallida* Kuroda (not of Perry, 1811; not of Hirase, 1934). Type loc.: “台湾以南” [error])
Habe, T., 1965. Notes on the ivory shell genus *Babylonia* Schlüter (Mollusca). Bulletin of the National Science Museum, Tokyo, 8: 115–124, pl. 1. (p. 119, as *Babylonia kirana* (a replacement name for *B. pallida* Kira, 1959. See also Bieler & Petit, 2010: 138)

参考文献：Bieler, R. & Petit, R.E., 1990. On the various editions of Tetsuaki Kira's “Coloured Illustrations of the Shells of Japan” and “Shells of the Western Pacific in Color Vol. 1”, with an annotated list of new names introduced. Malacologia, 32: 131–145.
久保弘文, 2005. ウスイロバイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課（編）, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 360.
久保弘文, 2012. ウスイロバイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会（編）, 東海大学出版会, 秦野, 72.
久保弘文, 2014. ウスイロバイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類” 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）, ぎょうせい, 東京, 302.
久保弘文, 準備中. 海産貝類. “宮古島市史 自然編”, 頁未定（編）, 宮古島市教育委員会, 宮古島.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名：久保弘文

和名：オカトリノコガイ（新称）
分類：腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 アッキガイ上科 トリノコガイ科
学名：Marginellidae gen. & sp.
カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

図の解説：p. 45. 石垣島川平湾. 撮影：久保弘文。
形態：貝殻は本科中、中型で、殻長約 5 mm、長卵形で殻表は極めて平滑で光沢が強い。殻色は灰色を帯びるものの全体的に不透明で、螺塔および殻底は白く、体層に広い濁緑灰色帯を有する。軸唇下部に明瞭な 4 つの襞をもち、外唇には歯状突起は全くない。

近似種との区別：形状が類似するマクラコゴメガイは鮮やかな橙黄色と白帯を伴う殻色をもつこと、タマゴナリコゴメガイはより小型で全体が透明感のある淡黄色を呈することから容易に区別できる。

分布の概要：既存産地は石垣島川平湾のみ。
生態的特徴：トリノコガイ類は通常、亜潮間帯で深～深海に生息圏をもつが、本種は特異的に中潮線付近の干出する岩盤下に見られる。干出時は岩盤の窪地に静止しているが、上げ潮時に水中へ没すると、活発に匍匐する。

生息地の条件：外洋に面しながらも樹木に覆われ、かつ岩礫が堆積した自然海岸に限られ、微視的には、隠蔽された岩盤裏などに棲みついている。

個体数の動向：2009 年に発見された際は狭い範囲に 20 個体が群棲していたが、2015 年の調査では数個体のみ確認したに過ぎない。

現在の生息状況：現在、確認されている生息場所は川平湾 1.3 km² 以下で、微視的条件下に絞り込めば更に狭い範囲に留まる。

学術的意義・評価：未記載種である可能性が高く、本科においては異例とも言える干出環境への適応等、進化生態学的にきわめて興味深い貝類である。

生存に対する脅威：現在、棲息が確認される場所は人為的改変の極めて少ない自然海岸に限定されるため、環境攪乱に

特記事項： による脆弱性は非常に大きいと考えられる。
パラオの Machercher 島の内陸部にある森林に囲まれたアンキアラインプールの潮間帯上部からも、類似した別種が見つかった（福田宏氏私信）。

執筆者名： 久保弘文

和名： ミノムシガイ
分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 アッキガイ上科 ミノムシガイ科
学名： *Vexillum balteolatum* (Reeve, 1844)
カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態： 殻は本科中、大型で、やや長い紡錘形、殻表は薄い殻皮を被覆し、殻は平滑で灰青色及び灰黒色帯をめぐらし、等間隔に縦肋を有する。軸唇に強い襞と殻口外唇内側に弱い襞をもつ。蓋は欠く。殻長 40~70 mm。

近似種との区別： ミスジミノムシは色帯が近似するが、体層肩部がなで肩で角張らないこと、縦肋がより細かく数が多いことから区別され、オオミノムシは殻形が似るが、より太く、体層の黒色帯が途切れることで区別される。

分布の概要： 沖縄全域（大東諸島等外洋性小島嶼を除く）、モルッカ諸島、フィリピン、熱帯太平洋。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 本種の所属するミノムシガイ類は亜熱帯域に広く分布する種が多く、本種もその中に含まれる普通種である。

生態的特徴： 海藻等にドーム状の卵嚢を産み付け、ホシムシ等を摂食すると推測される。

生息地の条件： 比較的富栄養で泥分の多い環境にも出現するが、本来は潮通しの良い場所を好み、栄養の多い豊かな内湾環境を棲息条件とする。

個体数の動向： 個体数の減少は、埋立て等大規模な生息場所消失があり、明らかである。

現在の生息状況： 沖縄島では中城湾・金武湾など大規模な内湾干潟に少ないながら確認されるが、先島諸島では色帯などの形態も異なり、個体数も非常に少ない。沖縄島中南部、宮古島南部、石垣島南部では港湾開発、埋立て等で大きく生息場所が消失している。

学術的意義・評価： ミノムシガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。

生存に対する脅威： 内湾潮間帯に分布の中心をもち、埋立てによる生息場所消失が最大の減少要因となる。

原記載： Reeve, L.A., 1844. Monograph of the genus *Mitra*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 2: pls 1-39. (sp. 54, pl. 8, fig. 54, as *Mitra balteolata*. Type loc.: "Mollucca and Philippine Islands (found at the islands of Zebu and Burias under stones at low water)")

参考文献： 久保弘文, 2005. ミノムシガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 360-361.

久保弘文, 2012. ミノムシガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 73.

久保弘文, 2014. ミノムシガイ. "レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, ぎょうせい, 東京, 303.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名： 久保弘文

和名： ハイイロミノムシ
分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 アッキガイ上科 ミノムシガイ科
学名： *Vexillum gruneri* (Reeve, 1844)
カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

形態： 殻は本科中、中型でやや長く、角張った紡錘形、殻表は平滑で淡灰青色の地に濃灰色帯と褐色螺糸をめぐらす。軸唇に 4 襞を有し、殻口外唇奥の内側に多数の弱い襞をもつ。蓋は欠く。殻長 30 mm 内外。

近似種との区別： ミノムシガイ類は近縁種が多いが、色帯パターンが種によって比較的安定しており、本種は淡灰青色の地に濃灰色帯と褐色螺糸をめぐらす特徴から他種と区別される。

分布の概要： 沖縄島東海岸および先島諸島（与那国島を除く）、フィリピン、熱帯太平洋。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 本種の所属するミノムシガイ類は亜熱帯域に広く分布する種が多く、本種もその中に含まれる普通種である。

生態的特徴： 砂中の多毛類等虫型の動物を捕食すると考えられるが、繁殖生態等は不明。

生息地の条件： 潮通しのよいアマモ場周辺の砂泥底に生息。垂直分布の幅は狭く、中・低潮線～水深 3 m 付近までに限られる。

個体数の動向： 沖縄島では非常に少なく、名護市大浦湾等の東海岸に生息する。先島諸島では宮古島南部、石垣島南部を中心に港湾開発、埋立てで多くの生息場所が消失した。

現在の生息状況： 2010 年頃まで川平湾や名蔵湾等では少なからず確認されてきたが、川平湾での 2012 年以降のモニタリングでは全く確認されていない。

学術的意義・評価： ミノムシガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。

生存に対する脅威 : 2010年以降、川平湾では底質の泥質化や富栄養化が著しく、減少要因となった可能性が高い。また内湾潮間帯に分布の中心をもち、底質悪化や埋立てによる生息場所消失が最大の減少要因となる。

原 記 載 : Reeve, L.A., 1844. Monograph of the genus *Mitra*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 2: pls 1-39. (sp. 119, pl. 16, fig. 119, as *Mitra Gruneri*. Type loc.: "Island of Masbate, Philippines (found on the reefs at low water)")

参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. ハイイロミノムシ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 474-475.

久保弘文, 2012. ハイイロミノムシ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 73.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : チビツクシ (ムラクモツクシ)

分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 アッキガイ上科 ミノムシガイ科

学 名 : *Vexillum rufomaculatum* (Souverbie, 1860)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 : 殻は本科中、小型で、紡錘形、殻表は多数の縦肋を有し、淡灰青色の地に褐色斑を散らす。軸唇に襞を有し、殻口外唇奥の内側に多数の弱い襞をもつ。蓋は欠く。殻長約 20 mm 以下。

近似種との区別 : ミノムシガイ類は近縁種が多いが、色帯パターンが種によって比較的安定しており、色彩的特徴から他種と区別される。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、ニューカレドニア。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種の所属するミノムシガイ類は亜熱帯域に広く分布する種が多く、本種もその中に包含される普通種である。

生態的特徴 : 砂中のホシムシ類等の虫様の動物を摂餌すると考えられるが、繁殖生態等は不明。

生息地の条件 : やや外洋に面し、規模の大きな干潟、アマモ場、あるいは、その周辺の中潮線の磯砂底に生息する。

個体数の動向 : 本種は小型ツクシガイ類の中で奄美群島・沖縄島のアマモ場干潟に特徴的な種で垂直分布域が狭く、沖縄島を中心に埋め立てや藻場環境の悪化により危機的状態にある。元々個体数は少ないが、特に1990年代から、沖縄島糸満、豊見城地先、沖縄市泡瀬等(中城湾)では大規模埋め立てによって生息場所自体が著しく減少した。

現在の生息状況 : 2010年以降のモニタリングでは沖縄島恩納村屋嘉田潟原で確認された他は、沖縄市泡瀬等では全く確認されなかった。

学術的意義・評価 : 小型ツクシガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。

生存に対する脅威 : 内湾潮間帯に分布の中心をもち、底質悪化や埋立てによる生息場所消失が最大の減少要因となる。

特 記 事 項 : 元々、沖縄や奄美からムラクモツクシという和名の種は知られておらず、チビツクシとして報告されていた。

原 記 載 : Souverbie, M., 1860. Descriptions d'espèces nouvelles de l'Archipel calédonien (5e article). Journal de Conchyliologie, 8: 311-326. (pp. 321-322, pl. 11, fig. 9, as *Mitra rufomaculata*. Type loc.: "Ins. Art. (Archip. Nov. - Caled.)")

参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. チビツクシ (ムラクモツクシ). "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 74.

久保弘文, 2014a. チビツクシ (ムラクモツクシ). "レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 303.

久保弘文, 2014b. 恩納村の貝類. "恩納村誌 第1巻自然編", 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : ヤタテガイ

分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 アッキガイ上科 フデガイ科

学 名 : *Strigatella scutulata* (Gmelin, 1791)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形 態 : 殻は中型、やや太短い紡錘形、殻色は黒褐色で、やや光沢があり、殻底と縫合下に十数の螺溝を有する。殻口は白く、内唇軸に明瞭な4つの襞が並ぶ。殻長 30 mm 内外。

近似種との区別 : 沖縄産ヤタテガイ類中最大種で、体層に縞模様ほとんど無く、螺塔が高く伸びる点で他種と区別される。

分布の概要 : 房総半島/北長門海岸以南、熱帯太平洋。沖縄島 (豊見城市与根、糸満市真栄里、佐敷町、羽地内海)、八重山 (川平湾) 等、沖縄全域に散在的に確認されている。

生態的特徴 : 肉食性で虫型動物 (ホシムシ類等) を捕食すると考えられる。

生息地の条件 : 沖縄島・石垣島共に内湾の岩礁域の潮間帯中部に分布が限定される。

個体数の動向 : 個体数は元々多い種ではないが、2005年頃までは羽地内海、中城湾、豊見城・糸満地先等における

夜間のモニタリングでは比較的確認事例が多かった。しかし、その後から現在に至るまでいずれの海域においても確認事例はほとんど無く、大幅に個体数が減少している可能性が高い。

現在の生息状況 :

同上。

学術的意義・評価 :

沖縄に出現する型をシロオビヤタテと呼び、縫合下が淡色になる個体が多く、日本本土の型と遺伝的系統が異なる可能性がある。熱帯砂底域に適応放散した肉食性貝類の一員で進化や生態学的研究において重要である。

生存に対する脅威 :

埋立てによる生息場所の消失、底質の悪化。

特記事項 :

熊本県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に位置づけられている。

原記載 :

Gmelin, J.F., 1791. Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, pp. 3021-3910. (p. 3452, no. 131, as *Voluta scutulata*. Type loc.: “Oceano indico”)

参考文献 :

久保弘文, 2005. ヤタテガイ (シロオビヤタテガイ). “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”. 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 425-426.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 :

久保弘文

和名 :

ツヤイモ

分類 :

腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 イモガイ上科 イモガイ科

学名 :

Conus boeticus Reeve, 1844

カテゴリー :

絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 :

殻は本科中やや小型、太短く、やや角張った倒立円錐形、殻表は毛羽立つ殻皮をまとい、殻表はほとんど平滑で殻底付近にのみ顆粒を生じることがあり、色彩は赤褐色の2帯と10数本の褐色点列を有する。殻口は白く、蓋は退化的で小さい。殻長 25 mm 内外。

近似種との区別 :

本科貝類は殻の色彩パターンが種ごとに比較的安定しており、本種の場合、褐色点列により種判別が比較的容易である。

分布の概要 :

和歌山県以南、沖縄島中部 (中城湾、金武湾、那覇~北谷)、先島 (宮古島、西表島)、フィリピン。

近縁な種及び群との分布状況の比較 :

やや小型で、色彩が異なる近似種ベニイモは、温帯域まで広く分布し、やや深い場所に生息する別種とされているが、生息場所や地域による変異の可能性もあり、分類学的検討を要する。

生態的特徴 :

肉食性。歯舌 (縁歯) が特殊化した矢舌を発達させ、矢舌に毒囊より貯留した毒を餌食に注射して麻痺させ捕食する。

生息地の条件 :

やや規模の大きな干潟のアマモ場やその周辺の砂礫底~泥礫底に生息地が形成される。

個体数の動向 :

1990年代前半までは、特に沖縄島中部の干潟では中城湾、金武湾を中心に個体数が少なくなかった。しかし、1990年代後半に与那原・西原地先の生息地が埋立てにより消失し、その後、2000年代に入って北中城村周辺の個体群が激減した。沖縄市泡瀬干潟では埋立て後に著しく個体数が減少し、2005年以降、全く確認されていない。また、石垣島では1970年代に記録があるが、1990年代の8年間の調査では確認されなかった。また2010年以降の川平湾におけるモニタリングでも出現していない。なお、沖縄では潮間帯に分布の中心があるが、泥っぽいサンゴ礁域の水深20 m付近でも、生息が確認されている。

現在の生息状況 :

同上。

学術的意義・評価 :

イモガイ類は熱帯サンゴ礁域に適応放散した肉食性貝類の代表的な分類群で進化や生態学的研究において重要である。

生存に対する脅威 :

干潟埋立てによる生息場の消失、富栄養化等による岩礫下の貧酸素化と硫化物汚染。

特記事項 :

IUCN カテゴリー: Least Concern (LC)。

原記載 :

Reeve, L.A., 1844. Monograph of the genus *Conus*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 1: pls 1-47, supp. pls 1-9. (sp. 226, pl. 42, fig. 226., as *Conus boeticus*. Type loc.: “Philippine Islands”)

参考文献 :

久保弘文, 2005. ツヤイモ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 426-427..
久保弘文, 2012. ツヤイモ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 75.
久保弘文, 2014. ツヤイモガイ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 304.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名 :

久保弘文

和名 :

ククリクチキレ

分類 :

腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 トウガタガイ上科 トウガタガイ科

学名 : *Cossmannica aciculata* (A. Adams in Sowerby II, 1854)
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は本科中、中型で殻頂に向かって著しく細く伸び、丸みを帯びた高円錐形、殻表には薄い殻皮を被覆し、殻自体は平滑で赤みを帯びた煉瓦色。最大殻長約 15 mm。

近似種との区別 : トウガタガイ類は近縁種が多いが、本種は特に大型で、煉瓦色の殻表が特徴的で、他種と区別できる。

分布の概要 : 沖縄島。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近似種アンパルクチキレは沖縄島から先島諸島まで広く分布し、出現頻度も高い。

生態的特徴 : 本科貝類は歯舌をもたず、寄生性とされているが、本種の宿主については不明。

生息地の条件 : 潮通しのよい低潮線のアマモ場に隣接する低潮線～水深1 m付近の砂泥～泥砂底に浅く潜って生息し、垂直分布の幅が狭い。

現在の生息状況 : 2010年以降泡瀬干潟の南側、2015年大浦湾調査では未確認である。大浦湾においては2015年に断片的な調査結果として、環境アセス関連報告書に出現記録がある。

学術的意義・評価 : 本種を含むトウガタガイ類は特定の宿主に寄生する種が多く、生態学的に興味深い分類群であり、本種はとりわけ大型でありながら、生態的に不詳な点が多く、研究が必要である。

生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所の消失、底質の悪化。

原記載 : Adams, A., 1854. Monographs of the genera *Eulima*, *Niso*, *Leiostraca*, *Obeliscus*, *Pyramidella*, and *Monoptygma*. Thesaurus conchyliorum, or, Monographs of Genera of Shells, Vol. 2, Part 15, 793–825, pls 169–172, GB. Sowerby II (ed.), GB. Sowerby II, London. (p. 809, no. 15, pl. 171, fig. 21, as *Obeliscus aciculatus*. Type loc.: “Cagayan, province of Misamis; twenty-five fathoms, sandy mud”)

参考文献 : 久保弘文, 2012. ククリクチキレ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 85.
 沖縄防衛局・いであ株式会社, 2015. 「シュワブ (H25) 水域生物等調査」調査報告書. 沖縄防衛局・いであ株式会社。

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ヒミツナメクジ
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 スナウミウシ目 Parhedyloidea 上科 ヒミツナメクジ科
 学名 : *Aiteng mysticus* Neusser, Fukuda, Jörger, Kano & Schrödl, 2011
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU)

図の解説 : p. 45. 左, 右下 : 宮古島平良荷川取崎. 中上 : 宮古島平良久松. 右上 : 与那国島空港北西. 撮影 : 福田 宏。

形態 : 体長 5 mm、体幅 2.5 mm。殻を欠き、小判形のナメクジ状で、頭触角を欠くが明瞭な眼を持つ。背面は平滑、茶褐色または白色で、多数の空胞化支持細胞が粒状に透けて見える。蹠面は平坦でベージュ色。

近似種との区別 : 国内に同じ科の別種は知られていない。タイ産のムシクイヒミツナメクジ (新称) *A. ater* Swennen & Buatip, 2009 は体長 8~12 mm と大形で、背面はより濃色。

分布の概要 : 宮古島 (久松松原、荷川取崎 (タイプ産地))、黒島 (仲本)、与那国島 (空港北西) の3島からのみ知られている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : この科はパラオ、バヌアツ、北オーストラリア等熱帯域から複数の種が採集されているが、大半は未記載で、分布の概要はまだ明らかでない。

生態的特徴 : 完全な夜行性で、深夜、飛沫帯の濡れた岩盤表層に現れて匍匐する。ムシクイヒミツナメクジは昆虫を捕食するとされるが本種の食性は不明。

生息地の条件 : 主として外洋に面した海岸岩礁 (特に隆起珊瑚) の海蝕洞内部やノッチの隙間に棲息し、ウニヒザラガイ、ブタハマチグサ、ヒヅメガイ、ソナレガイ、カシノメガイ等とともに深夜に活動するが、本種とヒヅメガイは河口マングローブ辺縁の砂泥底に埋もれた転石下にも産する。マングローブ砂泥底と外洋に面した岩礁は一見大きく異なる環境に見えるが、本種とヒヅメガイにとって何らかの共通した条件をそなえていると考えられる。

個体数の動向 : 同時に5個体以上確認された例はなく、個体数の少ない種と思われる。

現在の生息状況 : 外洋に面した岩礁では棲息状況に特に変化はないが、護岸等がなされれば壊滅の恐れもある。宮古島久松のマングローブの産地は集落に近く、生活排水流入や廃棄物投棄等による環境悪化が危惧される。

学術的意義・評価 : 本科を含むスナウミウシ類の研究を機に、異鰓類の高次分類が再編され、真後鰓類 *Euopisthobranchia* と汎有肺類 *Panpulmonata* が新設された。

生存に対する脅威 : 海岸や河口の護岸・埋立等改変、水質汚濁等により棲息可能な場所が狭められている。特にマングローブの棲息地は縮小や変質が顕著なため、本種への影響が懸念される。

特記事項 : 本科は汎有肺類の一員であり、「ウミウシの仲間」と呼ぶのは不適切。

原記載 : Neusser, T.P., Fukuda, H., Jörger, K.M., Kano, Y. & Schrödl, M., 2011. Sacoglossa or Acochlidia? 3D reconstruction, molecular phylogeny and evolution of Aitengidae (Gastropoda: Heterobranchia). *Journal of Molluscan Studies*, 77: 332–350. (pp. 341–346, figs 5B, 7B–F, 8–10, as *Aiteng mysticus*. Type loc.: “Shimozaki, Nikadori, Hirara, Miyako Island, Okinawa, Japan, 24° 49'49" N, 125° 16'42" E”)

参考文献 : 福田 宏, 2012. ヒミツナメクジ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 90.

福田 宏, 2014. ヒミツナメクジ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 311.
Jörger, K.M., Stöger, I., Kano, Y., Fukuda, H., Kneibelsberger, T. & Schrödl, M., 2010. On the origin of Acochlidia and other enigmatic euthyneuran gastropods, with implications for the systematics of Heterobranchia. BMC Evolutionary Biology, 10: 323.

執筆者名 : 福田 宏

和名 : **ダイトウオカモノアラガイ**
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 板顎下目 オカモノアラガイ上科 オカモノアラガイ科
学名 : “*Succinea*” sp.
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 45. 南大東島海軍棒. 撮影 : 早瀬善正.
形態 : 殻は殻長 8 mm、殻径 5.5 mm ほどの長楕円形で薄質、縫合は比較的くびれる。殻口は卵形で非常に大きく、殻長の 8 割近くを占める。殻口縁は反転せず薄い。軸唇は直線的でごく僅かにねじれ、臍孔はない。殻皮は淡黄色で弱い光沢を持つ。殻表は弱い成長脈の他に、殻頂-殻底方向とそれにほぼ直交する 2 方向の微細かつ不規則な線条を密に生じ、絹目状となる。胎殻は実体顕微鏡下ではほぼ平滑。殻長 13 mm 程度まで成長すると考えられる。生殖器は陰茎鞘後端が陰茎本体の後端付近を巻き込むため、一見ループ状となる。

近似種との区別 : 琉球列島に広く分布するヒメオカモノアラガイは、殻口がやや小さく（殻長の 7 割未満）、殻表は成長脈がやや粗く波打ち、線条を持たない。外来種ケショウオカモノアラガイも殻口がやや小さく、厚質で、殻表には細かい成長線のみを生じることで区別される。

分布の概要 : 南北大東島のみで確認されている。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 殻形態の似たヒメオカモノアラガイは琉球列島から日本本土まで広く分布する。

生態的特徴 : 林床のピロウ落葉などに付着しているのが確認される。生時は殻に泥を付着させていることが多い。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 2015 年以降の調査では南大東島の 2 地点でのみ生貝が確認されている。北大東島の長幕などで多数みられる殻長 13 mm ほどの死殻も殻表に同じ彫刻を持っており、かつては広範に棲息していた可能性が高い。また、南大東島のバリバリ岩ではダイトウアツマイマイとともに本種とみられる化石が見つかっており、有史以前から棲息していたと考えられる。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 大東諸島固有種の可能性があり、分類学的・生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 森林伐採や開墾による棲息地減少に加え、近年では温暖化と過剰乾燥により棲息環境が悪化していると考えられる。また、外来種ケショウオカモノアラガイとの競合や、ニューギニアヤリガタリクウズムシやツヤオオズアリなどの外来種による捕食の影響が懸念される。

特記事項 : 過去の記録にあるヒメオカモノアラガイも本種と思われるが、検証が必要。

参考文献 : 東 良雄・東 正雄, 1994. 大東島の陸産貝類相. Venus, 53: 161-173.

久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック—レッドデータおきなわ— 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—3. 北大東島・南大東島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.

増田 修・宇野 明・中原ゆうじ, 2015. 沖縄県大東諸島の陸産貝類の現状. かいなかま, 49(2): 21-44.

下謝名松栄, 1978. 南・北大東島および沖縄島南部地域の洞穴動物相. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第14集 沖縄県洞穴実態調査報告 I”. 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 75-112.

Ueshima, R., 1995. Rediscovery of *Neosuccinea kofui* Patterson, 1971 with notes on the taxonomic position of “*Succinea*” *lyrata* Gould, 1859 and “*S.*” *horticola* Reinhardt, 1877. Venus, 54: 161-173.

執筆者名 : 亀田勇一

和名 : **イオウジマノミガイ**
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 ハワイマイマイ上科 ハワイマイマイ科
学名 : *Elasmias kitaiwojimanum* (Pilsbry & Hirase, 1903)
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

図の解説 : p. 45. 1 (参考) : リュウキュウノミガイ. 2 (参考) : リュウキュウノミガイ属の一種. 3 : イオウジマノミガイ. 4 (参考) : ノミガイ. すべて南大東島. 撮影 : 亀田勇一 (標本), 和田慎一郎 (1b, 2b), 福田 宏 (3b).

形態 : 貝殻は小型 (殻長約 2.8 mm) で、殻径は幅広く (約 2 mm)、卵円形、極めて薄質。螺塔は小さいが、やや尖り、体層は大きく、周縁は丸い。殻は淡黄褐色で光沢を持ち、平滑。殻口は丸く、肥厚・反転しない。殻口内唇に弱い一歯を持つ。臍孔はない。

- 近似種との区別 : 日本産の本科の種とは、幅広い殻径を有し、体層が大きいことで識別できる。
- 分布の概要 : 小笠原諸島、火山列島、大東諸島および八丈島に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本産は一属一種であり、同属の種は太平洋の諸島に分布する。
- 生態的特徴 : 乾燥時は広葉樹やシダの生葉の裏面で休眠し、夜間や降雨時には葉上を匍匐し表面に付着する菌類などの有機物を摂食する。卵胎生。
- 生息地の条件 : 比較的湿潤な森林環境に棲息する。
- 個体数の動向 : 産地は少ないが、棲息地では比較的普通に確認することが出来、20世紀末と比べて極端な減少傾向は今のところ見られない。
- 現在の生息状況 : 棲息地では高密度に産するが、分布は極めて限定的である。
- 学術的意義・評価 : 小笠原群島をはじめ火山列島、大東諸島および八丈島と生物地理学的に興味深い分布を示す。しかし島嶼間での遺伝的差異の少なさから人為的に運ばれた可能性も考えられ、学術的価値の評価に際してはタイプ産地の標本などを加えた詳細な調査研究が必要である。
- 生存に対する脅威 : 産地が局限される最大の要因はヒトの入植に伴う開墾であると考えられる。近年では温暖化と過剰乾燥による棲息環境の悪化に加え、ニューギニアヤリガタリクウズムシやツヤオズアリなどの強力な捕食者が侵入している。小笠原諸島ではこれらの侵入した地域では微小貝類が激減しており、同じ海洋島である大東諸島でも、壊滅的な被害が懸念される。
- 特記事項 : IUCN カテゴリー : Vulnerable (VU)。
- 原記載 : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1903. Notices of new land shells of the Japanese Empire. Nautilus, 17: 52-55. (pp.53-54, as *Tomatellina kitaivojimana*. Type loc.: “Kita-Iwojima, Izu”)
- 参考文献 : 東 良雄・東 正雄, 1994. 大東島の陸産貝類相. Venus, 53(3): 161-173.
黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, 106pp. +3pls.
黒住耐二, 1992. 北大東島の陸産貝類, “沖縄県天然記念物調査シリーズ第31集 ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 73-90.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
- 執筆者名 : 和田慎一郎・亀田勇一・黒住耐二* *前回改訂版 (2005) における黒住による記載内容を一部引用した。

- 和名 : **ダイトウジマスナガイ**
- 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 サナギガイ上科 キバサナギガイ科
- 学名 : *Gastrocopta (Sinalbinula) armigerella daitojimana* Kuroda, 1960
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 図の解説 : p. 45. 1a, 1b, 1c : ダイトウジマスナガイ 北大東島 (1a, 1b), 南大東島 (1c). 2 (参考) : スナガイ 与那国島. 撮影 : 福田 宏 (1b), 亀田勇一 (1a, 1c, 2).
- 形態 : 殻は微小 (殻長約 1.8 mm) で、殻径はやや太い (約 0.9 mm)、卵形で、螺塔は高い。殻表は平滑で、やや光沢を持ち、半透明白色。殻口は、肥厚・反転し、殻口内に多数の歯を持つ。
- 近似種との区別 : 琉球列島にも広く分布するスナガイ *G. (S.) armigerella armigerella* は、殻が短く、縫合が浅く、下軸歯が二分される傾向が強い。
- 分布の概要 : 南北大東島の固有亜種。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 名義タイプ亜種のスナガイは琉球列島から日本列島に広く分布するが、本亜種は大東諸島で分化したものと考えられる。
- 生態的特徴 : 比較的自然度の高い森林の林床に生息する。
- 生息地の条件 : 湿性の森林が保たれていること。
- 個体数の動向 : 20世紀末から現在の間にかなり激減した。
- 現在の生息状況 : 南北大東島での調査では、生貝の確認は稀であった。
- 学術的意義・評価 : 主に海岸部に生息している群であるが、海洋島の大東諸島では内陸部にまで生息地を拡大しており、生態的解放が生じていると考えられる。
- 生存に対する脅威 : 森林伐採や農薬の散布。
- 原記載 : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, 106 pp., 3 pls. (p. 77, as *Gastrocopta armigerella daitojimana*. Type loc.: “南大東島”).
- 参考文献 : 東 良雄・東 正雄, 1994. 大東島の陸産貝類相. Venus, 53(3): 167-173.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
黒住耐二, 1992. 北大東島の陸産貝類, “沖縄県天然記念物調査シリーズ第31集 ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 73-90.
Matsui, S., Akatani, K., Matsuo, T. & Sugihara, S., 2010. Invasion of the snail-eating flatworm *Platydemus manokwari* on Minami-daito Island. Japanese Journal of Applied Entomology and Zoology, 54(3): 143-146.
- 執筆者名 : 黒住耐二

和名 : ラッパガイ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 “サナギガイ上科” キバサナギガイ科

学名 : *Hypselostoma insularum* Pilsbry, 1908
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧I類 (CR+EN)

図の解説 : p. 45. A, 生体 : 与那国島. B : 伊良部島. 撮影 : 亀田勇一 (A, 生体), 久保弘文 (B).
形態 : 貝殻は微小 (殻長約 1.6 mm) で、殻径は幅広く (約 1.5 mm)、薄質だが、やや堅固。螺塔はやや高く、円錐形。体層は大きく、周縁は角張る。殻は黄褐色で鈍い光沢を持ち、ほぼ平滑。殻口は突出し、卵形で、肥厚・反転する。殻口内部に多くの歯を持つ。

近似種との区別 : 日本産本科の他種とは、側面から見ると正三角形で、殻口がラッパ様に突出する形態から明瞭に区別できる。

分布の概要 : 宮古島・伊良部島・波照間島・与那国島の石灰岩地に点在して分布する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県に分布するラッパガイ類としては、他に比較すべき種は知られていない。

生態的特徴 : 傾斜のある石灰岩壁や凹凸の激しい石灰岩の隙間にぶら下がるように付着し、降雨で十分な湿気を帯びる際には岩上を活発に匍匐する。棲息する石灰岩の多くは、微細な淡緑灰色の微細藻類が被覆しており、これを摂食している可能性がある。

生息地の条件 : 森林環境下の石灰岩地。
個体数の動向 : 宮古島野原岳、宮古市街地のウタキ周辺や伊良部島牧山では石灰岩地の乾燥が進行し、生息場所が減少している。与那国では比較的普通だが、天蛇鼻では減少傾向にある。

現在の生息状況 : 伊良部では1箇所のみ、与那国では比較的普通だが、波照間島での現状は不明。

学術的意義・評価 : 東南アジアに多くの種が分化するグループの一員で、北限種、よって進化生態学、生物地理学的に極めて重要である。

生存に対する脅威 : 森林伐採による石灰岩地の乾燥、宅地や基地、あるいは墓地造成等の開発による生息場所自体の消失。

原記載 : Pilsbry, H.A., 1908. Two genera of land snails new to Japan and Korea. The Conchological Magazine, Kyoto, 2: 39-42. (pp. 41-42, fig. 2, as *Hypselostoma insularum*. Type loc.: “Yonakunijima, Ryukyu”)

参考文献 : 久保弘文, 準備中. 陸産貝類. “宮古島市史 自然編”, 宮古島市教育委員会, 宮古島.
久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告一. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+104 pp.
黒住耐二, 2005. ラッパガイ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 330.
湊 宏, 1976. 与那国島の陸産貝類相. Venus, 35(4): 163-184.
湊 宏, 1977. 与那国島のラッパガイ覚え書. Nature Study, 23(9): 11-12.
湊 宏, 1980. 宮古群島の陸産貝類相. Venus, 39(2): 83-99.
上島 励, 2014. ラッパガイ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 102.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ミジンサナギガイ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 “サナギガイ上科” キバサナギガイ科

学名 : *Truncatellina insulivaga* (Pilsbry & Hirase, 1904)
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は微小 (殻長約 1.6 mm、殻径約 0.7 mm) で、螺塔が高く細長い円筒形、やや薄質。幼層が低円錐形のため、殻頂はきわめて鈍い。体層は小さく、周縁は円い。殻は淡い茶褐色で、弱い成長脈があるものの比較的平滑なため、鈍い光沢を持つ。殻口は円に近い楕円形で、唇縁は薄く反転する。殻口軸唇の奥の方に弱い一つの歯状突起を持ち、体層背面には斑点状の短いブリカが透過され見える。臍孔部は狭くスリット状。

近似種との区別 : 日本産の同科の多くの種は短い円筒形で歯状突起を有する。本種はきわめて小型の細長い円筒形であり、殻口内部に目立つ歯状突起がない特徴により、各種と容易に識別できる。

分布の概要 : 化石が喜界島から産出するとされ、現生は、奄美大島、与論島と沖縄諸島に分布する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本産は一属一種の本種のみで、東洋区の分布。成長肋が明瞭で粗い同属種が、旧北区やエチオピア区に複数種分布する。

生態的特徴 : 海岸林の林床の落葉層下に生息する。
生息地の条件 : 内陸部には生息せず、海岸に面した低木林や針葉樹林の落葉下に生息する。
個体数の動向 : 情報が少なく、明確な動向は不明。しかし、海岸林は明らかに減少しており、それと共に個体数が減少していると考えられる。

現在の生息状況 : 沖縄島や久米島、伊平屋島 (野甫島) の海岸に面した林では、まとまった個体数が、ごく狭い範囲

- に集中して生息している。
- 学術的意義・評価 : 本種および本属の種は北海道、本州、四国、九州などには分布しない。ヨーロッパ～ロシアにかけての旧北区や南アフリカにも多様性を示す属が沖縄島を中心に分布することは生物地理学的にも興味深く、重要であり、本種および本種の生息地の環境は貴重である。
- 生存に対する脅威 : 海浜性種であり、道路工事や護岸工事などの開発による海岸林減少の影響はきわめて大きいと考えられる。
- 特記事項 : 微小種であることが発見例の少ない一因と考えられるものの、多くの調査においても生息確認されることが少ない。広域に分布するものの、生息域は限定的な種と考える。本種の属の所属検討が必要かもしれない。
- 原記載 : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1904. Descriptions of new land snails of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 56: 616–638. (pp. 631–632, as *Pupa insulivaga*, Type loc.: “Yoronjima, Osumi”)
- 参考文献 : 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, xvi+343 pp., 80 pls.
Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127–149.
知念盛俊, 1984. 沖縄の陸産貝. “全国大会記念誌「沖縄の生物」”, 日本生物教育会沖縄大会「沖縄の生物」編集委員会 (編), 沖縄生物教育研究会, 那覇, 337–355.
知念盛俊, 1992. 中城城跡と周辺の陸産貝類. “中城村史 第二巻 資料編1”, 中城村史編集委員会 (編), 中城村役場, 中城, 238–243.
知念盛俊・治井正一・儀間一恵, 1995. 大宜味村の陸・淡水棲貝類. “大宜味村の自然, 大宜味村動植物調査報告書, 大宜味村文化財調査報告書 (4)”, 大宜味村教育委員会 (編), 大宜味村教育委員会, 大宜味, 295–327.
久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245–340.

執筆者名 : 早瀬善正

- 和名 : ヤエヤマクチミゾガイ
- 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 “サナギガイ上科” クチミゾガイ科
- 学名 : *Enteroplax yaeyamensis* Habe & Chinen, 1974
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態 : 殻は微小 (殻径約 2 mm) で、低い円錐形。殻表には規則的で明瞭な縦肋があるが、底面はほぼ平滑で、濃褐色。殻口は、肥厚・反転し、殻口内の内唇側に 2 本、底面に 3 本の歯を持つ。臍孔は狭く開く。
- 近似種との区別 : 日本産のクチミゾガイ類とは、小型で螺塔が高く、八重山諸島に分布することで、容易に区別できる。本種の分類学的位置については再検討が必要。
- 分布の概要 : 八重山諸島の固有種で、石垣島と西表島に生息する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種はフィリピンに分布する *Enteroplax* に分類されていたが、分類学的位置については再検討が必要。
- 生態的特徴 : やや標高の高い林内の落葉下やオオタニワタリの内部等に生息する。海岸林からの報告もあるが、主要な生息地ではないと思われる。
- 生息地の条件 : 同上。
- 個体数の動向 : 定量的なデータがないので不明であるが、個体数は時期や場所によるバラつきが大きい。至適な生息環境が減少しているため、個体数も減少していると思われる。
- 現在の生息状況 : 多数の個体が採集されることもあるが、生息地は散在し、稀産種といえる。
- 学術的意義・評価 : クチミゾガイ科としては琉球列島に生息する唯一の種であり、生物地理学的に重要。
- 生存に対する脅威 : 開発に伴う森林の伐採および林床の乾燥化。
- 特記事項 : 特になし。
- 原記載 : 波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121–128, pls 15–17. (pp. 122, 124, pl. 17, figs 3–4, as *Enteroplax yaeyamensis*. Type loc.; “Sonai, Iriomote Island, Yaeyama Group”)
- 参考文献 : 湊 宏, 1982. 日本のクチミゾガイ類. ちりぼたん, 13(2): 30–31.
知念盛俊, 1990. 西表島の陸産貝類. “平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書”, 環境庁自然保護局 (編), 環境庁自然保護局, 東京, 267–275.

執筆者名 : 上島 励

- 和名 : ニシキキセルモドキ
- 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 キセルモドキ上科 キセルモドキ科
- 学名 : *Luchuena eucharistus* (Pilsbry, 1901)
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

形態： 貝殻はこの属としては非常に大型（殻長約 29 mm）で、殻径はやや太い（約 14 mm）塔状。殻質はやや厚く、殻口は反転肥厚する。殻表は平滑、やや光沢を持ち、淡紫褐色の地に黄白色の火炎彩を持つ。

近似種との区別： 西表島で同所的に棲息するリュウキュウキセルモドキは遙かに小型で細い。

分布の概要： 西表島山間部。

近縁な種及び群との分布状況の比較： リュウキュウキセルモドキは与那国島を含む八重山諸島に、ウスチャイロキセルモドキ種群が沖縄島、沖永良部島等に棲息している。

生態的特徴： 冬場の乾燥期では比較的低い樹上に見られるが、雨期には非常に高いところに登ることがある。好む樹種は不明だが、直径 10 cm～50 cm 程度の中型樹木に付着していることが多い。

生息地の条件： 本種は殆ど枝分かれの少ない垂直な樹木のみに見られ、これらは鳥などが捕食しにくい形状の樹木であると推測される。また、樹幹表面に生えるカビ類を餌としている可能性があり、好適な照度や湿度の安定した環境が不可欠であると考えられる。

個体数の動向： 西表島カンピラ、マリウドウの滝周辺では 1990 年代は比較的多産し、観察個体数も幼貝を入れると 10 個体以上に上ったが、2010 年以降の調査では、毎回、2～3 個体が確認される程度まで減少していた。

現在の生息状況： 西表島の山間部に広く棲息していると考えられるが、近年、多く来襲している大型台風により森が荒れており、総じて生息数の減少が推測される。

学術的意義・評価： 台湾との類縁関係が指摘されている八重山諸島の陸産貝類にあって、本種は類縁種が台湾に知られておらず、湿潤で自然度の高い西表島のジャングルのみで生きながらえている特筆すべき固有種である。今後の分子系統解析などの結果によっては固有希少種であるだけで無く、新たな生物地理学、進化生物学的等の学術的価値が見いだされる可能性がある。

生存に対する脅威： 日本産キセルモドキ類中、最も美麗な種で、収集目的などで乱獲されやすいほか、森林環境の不安定化による個体数減少や個体群消失が危惧される。

原記載： Pilsbry, H.A., 1901. Notices of new Japanese land snails. The Nautilus, 14: 127-129. (pp. 128-129, as *Buliminus eucharistus*. Type loc.: "Loo Choo Is.")

参考文献： 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, xvi+343 pp., 80 pls.
知念盛俊, 1976. 陸産貝類. "生態写真集 沖縄の生物", 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212-243.
知念盛俊, 1990. 西表島の陸産貝類. "平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書", 環境庁自然保護局 (編), 環境庁自然保護局, 東京, 267-275.
波部忠重, 1956. 日本産陸産貝類の解剖学的研究. キセルモドキ科の種群. 動物学雑誌, 65(7): 262-266.
黒田徳米, 1945. キセルモドキ属に就いて. 貝類学雑誌, 14(1-4): 43-62, pl. 3.
黒住耐二, 2005. ニシキキセルモドキ. "改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ -", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 330-331.
湊 宏, 2014. ニシキキセルガイモドキ. "レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 110.

執筆者名： 久保弘文

和名： リュウキュウキセルモドキ
分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 キセルモドキ上科 キセルモドキ科

学名： *Luchuena luchuana* (Pilsbry, 1901)
カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) (リュウキュウキセルガイモドキ)

形態： 殻長 18～26 mm、殻径 6～8 mm、やや太い紡錘形で縫合はほとんどくびれない。狐色の地に、淡黄色の火炎彩ないしは縞状の模様をもつ。殻表の光沢はやや弱く、螺状脈も比較的弱く不鮮明。殻口縁は白く、よく反転して肥厚する。

近似種との区別： ニシキキセルモドキと比べ、本種はより小型であることで区別される。また、殻表に明瞭な火炎彩や縞状の模様を生じ、螺状脈は非常に弱いことで琉球列島産の他種とは識別できる。

分布の概要： 宮古諸島、石垣島・西表島、与那国島、台湾に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 西表島にニシキキセルモドキ、台湾にタイワンキセルモドキが分布する。本種は一見分布が広いが、少なくとも島嶼グループごとに別種である可能性が高く、個々の種の分布域は他種と同等であると考えられる。

生態的特徴： 自然度の高い森林の樹木を棲息場所とする樹上棲種である。飼育下ではマット状に生えるカビを好んで摂食する様子が観察されており、野外でも菌類を餌としている可能性がある。

生息地の条件： 同上。樹上棲で乾燥には比較的強いが、強く乾燥する場所には棲息できない。

個体数の動向： 与那国島では 2000 年代中頃まで多産していたが、現在は激減し、2015 年の調査では数個体確認できたのみであった。石垣島では 1990 年代まで東部石灰岩地や於茂登岳山麓に多産していたが、現在、著しく減少した。西表島ではもともと密度はさほど高くない。宮古諸島では最近伊良部島で死殻が 1 個報告されているのみで、現状不明。

現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 本種は具体的なタイプ産地が不明な上に隠蔽種を含む可能性が高く、分類学的再検討が必要である。
 生存に対する脅威 : 本種は基本的に森林棲かつ樹上棲であり、開発等による森林の減少・分断は直接的な脅威となる。しかし、一見人の手が入っていない森林においても確認数は減少しており、温暖化やそれに伴う乾燥化、降水パターンの変化、強い台風の増加といった環境変化も棲息に影響を及ぼしている可能性が高い。
 原 記 載 : Pilsbry, H. A., 1901. Notices of new Japanese land snails. The Nautilus, 14: 127-129. (p.129, as *Buliminus luchuanus*. Type loc.: "Loo Choo Is.")
 参 考 文 献 : 久保弘文, 準備中. 陸産貝類. "宮古島市史 自然編", 宮古島市教育委員会, 宮古島.
 湊 宏, 1999. 日本のキセルガイモドキ科貝類の概説. ちりぼたん, 30: 49-58.
 湊 宏, 2006. 八重山諸島産キセルガイモドキ科貝類の2種. 南紀生物, 48: 50-54.
 湊 宏, 2007. 伊良部島(宮古諸島)から記録されたリュウキュウキセルガイモドキ. ちりぼたん, 38: 12-14.
 執 筆 者 名 : 亀田勇一

和 名 : **クメジマキセルモドキ (新称)**
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 キセルモドキ上科 キセルモドキ科
 学 名 : *Luchuena* sp.
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし
 図 の 解 説 : p. 45. 標本: 久米島町真謝. 生体: 久米島町宇江城. 撮影: 亀田勇一 (標本), 福田 宏 (生体).
 形 態 : 殻は殻長 21 mm, 殻径 8.2 mm でやや薄質、やや太い紡錘形で螺層の膨らみは弱い。臍孔は狭く浅い。殻表には火炎彩をもち、殻皮は淡い黄褐色。殻表にはほぼ全面に不規則な螺状脈をもつ。殻口は反転し、肥厚する。
 近似種との区別 : 本種は殻表全面に明瞭な螺状脈を持つ点がウスチャイロキセルモドキと共通するが、より大型で大きく、殻表に火炎彩を持つことで相違する。オオシマキセルモドキはより小型で細く、リュウキュウキセルモドキは殻表の螺状脈が弱く不明瞭になることで区別される。
 分布の概要 : 久米島でのみ確認されており、固有種の可能性が高い。東ほか (1992) にあるリュウキュウキセルモドキは本種であると思われる。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ウスチャイロキセルモドキおよび沖縄島の類似種群を含む単系統群として、中琉球 (沖永良部島～久米島) に分布すると考えられる。同属のオオシマキセルモドキ種群は沖永良部島以北、キカイキセルモドキは喜界島～沖縄島、リュウキュウキセルモドキは先島諸島に分布する。
 生態的特徴 : 自然度の高い森林の樹木を棲息場所とする樹上棲種である。飼育下ではマット状に生えるカビを好んで摂食する様子が観察されており、野外でも菌類を食している可能性がある。
 生息地の条件 : 同上。
 個体数の動向 : 稀産種であり、近年の調査では自然林 2 地点でしか確認されていない。同属の種は琉球列島全体で強い減少傾向が見られており、本種も同様である可能性が高い。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : リュウキュウキセルモドキ属は琉球列島内で大きな遺伝的分化を生じており、諸島あるいは島嶼ごとに固有な系統が多く存在する。本種はウスチャイロキセルモドキ種群の中では殻形態が特異で分布も他とは隔たっており、分類・生物地理・進化生態学の各面からの研究が必要である。
 生存に対する脅威 : 基本的に森林棲かつ樹上棲と考えられるため、開発等による森林の減少・分断は直接的な脅威となる。比較的湿潤な自然林で確認されており、温暖化やそれに伴う乾燥化などが進めば、近い将来姿を消す可能性がある。
 参 考 文 献 : 東 正雄・東 良雄・平田義浩, 1992. 久米島の陸産貝類相. Venus, 50: 264-269.
 湊 宏, 1999. 日本のキセルガイモドキ科貝類の概説. ちりぼたん, 30: 49-58.
 執 筆 者 名 : 亀田勇一

和 名 : **ニシキコギセル**
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
 学 名 : *Proreinia elegans* (Habe, 1962)
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
 図 の 解 説 : p. 45. 西表島. 標本: 黒住耐二 (千葉県立中央博物館 CBZM), 撮影: 久保弘文 (生体).
 形 態 : 貝殻は中型 (殻長約 17.5 mm) で、殻径はやや太く (約 4.5 mm)、短い紡錘形で、薄質。殻は縫合下に淡黄色の帯状部を持ち、他は濃紫褐色で、成長に沿った火炎彩がある。殻表の成長肋は弱く、やや光沢がある。殻口縁は薄く、特に内唇付着部で弱く、殻口はやや四角形。殻口内の上板・下板とも弱く、下軸板はない。主襞・上腔襞・下腔襞とも短い。
 近似種との区別 : 本種は、大型であること、殻が淡黄色と濃紫褐色に染め分けられることで同属の他種と区別できる。
 分布の概要 : 西表島にのみ分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属の種は、奄美諸島・トカラ列島から本州南岸・伊豆諸島に分布する。

- 生態的特徴 : 樹幹で見られる樹上性種である。卵胎生。
生息地の条件 : 人為的影響の極めて少ない自然度の高い湿性の森林。
個体数の動向 : 記載時から低密度での生息が知られていたが、近年でも確認例は稀である。
現在の生息状況 : 現在も低密度であり、確認記録も極めて少ない。
学術的意義・評価 : 西表島の固有種であり、本属の中では最大種。
生存に対する脅威 : 森林伐採などによる林内の乾燥化。
原 記 載 : 波部忠重, 1962. 沖縄八重山群島西表島産キセルガイ科の2種: ニシキコギセル (新種新称) とイリオモテコギセル. *Venus*, 22(2): 113-117. (pp. 113-115, 116-117, figs 1, 4, as *Reinia* (*Proreinia*) *elegans*. Type loc.: “八重山群島西表島ゴザ岳尾根筋”)
参 考 文 献 : 知念盛俊, 1976. 陸産貝類. “生態写真集沖縄の生物”, 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212-243.
波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls 15-17.
湊 宏, 1984. 日本産陸棲貝類の生殖器の研究-XXII. キセルガイ科 (8): イーストレーキコギセル属とヒロクチコギセル属. *Venus*, 43(2): 172-181.
富山清升, 1985. ニシキコギセル *Proreinia elegans* (Habe) とイーストレーキコギセル *Proreinia eastlakeana vaga* (Pilsbry) の生殖器. ちりぼたん, 16(2): 49-51.

執 筆 者 名 : 黒住耐二

- 和 名 : イトヒキツムガタノミギセル
分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
学 名 : *Pulchraptix longiplicata* (Pilsbry, 1908)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

- 図 の 解 説 : p. 46. 阿嘉島. 撮影: 久保弘文.
形 態 : 貝殻は小型(殻長約 10 mm)で、細長い、ノミギセル類としては太く、やや堅固。殻は褐色で、殻表は平滑で光沢がある。殻口縁は厚く、殻口内の上板は明瞭だが、下板は殻口からは見えず、下軸板は殻口縁に出現する。体層内部腔襞では、主襞・上腔襞とも極めて長く、殻口近くに達する。
近 似 種 と の 区 別 : 本種は、単一種で一属を形成し、他のノミギセル類とは、螺塔が太短いことや主襞・上腔襞とも極めて長く、殻口からも端部が見え、月状襞に連続しないことで区別できる。

- 分 布 の 概 要 : 慶良間諸島(阿嘉島、渡嘉敷島)にのみ生息する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 慶良間諸島の固有属で、近縁な種は不明。
生態的特徴 : やや自然度の高い森林の落葉下等に生息する地上性種である。
生息地の条件 : 湿度の高い落葉下や倒木下に生息する。
個体数の動向 : 定量的なデータがなく不明。
現在の生息状況 : 慶良間諸島では産地が限定され、いずれの産地でも個体数は少ない。
学術的意義・評価 : 慶良間諸島の固有属(固有種)で生物地理学的に興味深い。
生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採、林床の乾燥化。
原 記 載 : Pilsbry, H.A., 1908 (for 1907). New Clausiliidae of the Japanese Empire—XI. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 59: 499-513, pls 32-34. (p. 506, pl. 33, figs 25-29, as *Clausilia* (*Heterozaptyx*) *longiplicata*. Type loc.: “Kerama-jima, Ryukyu”)
参 考 文 献 : 知念盛俊・治井正一・儀間一恵, 1996. 陸・淡水産貝類. “沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県環境保健部自然保護課 (編), 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇, 447-456.
湊 宏, 1981. 日本産陸棲貝類の生殖器の研究-XVII. キセルガイ科 (4): 琉球列島産の5種. *Venus*, 39 (4): 236-242.
湊 宏, 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究. *Venus*, suppl., 2: 1-212, tables 1-6, pls 1-74.

執 筆 者 名 : 上島 励

- 和 名 : 沖縄島のサカヅキノミギセル
分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
学 名 : *Selenoptyx* cf. *inversiluna* (Pilsbry, 1908)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) (サカヅキノミギセル)

- 図 の 解 説 : p. 46. 標本: 恩納村. 生体: 大宜味村. 撮影: 久保弘文.
形 態 : 殻長 8.8~11.2 mm、殻径 2.4~2.8 mm。殻の形態はミカヅキノミギセルに似る。主襞はやや長く、体層の2/3から3/4周ほど。上腔襞と月状襞は連結し、角の丸い「厂」形。上腔襞は上に凸の緩い

弧状で、始端付近で月状襞に接続するが、完全に一続きの1本の曲線になることは少ない。月状襞は下に凸の曲線を描いて上板の上端付近で滑層に達し、上板の始端付近まで延びる。生殖器では陰茎後端部に長さ0.7~1.5 mmほどの明瞭な陰茎付属肢を有する。

近似種との区別 : 産地によって多少の変異があるが、ミカヅキノミギセルとサカヅキノミギセルの中間的な形態を示す。殻形態の大部分は前者によく似ているが、腔襞がより奥に位置する点は後者に類似する。陰茎付属肢の長さは地域間で変異が大きく、単一種でない可能性もある。

分布の概要 : 沖縄島の自然度の高い森林で確認されている。地上棲。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属のミカヅキノミギセルは伊平屋島に、サカヅキノミギセルは慶良間諸島と久米島に分布する。

生態的特徴 : 比較的湿度の高い自然林で確認されることが多い。同所的に棲息するノミギセルが枯れ木も利用し、這い上る性質があるのに対し、本種は枯れ木ではなく、石灰岩路頭表面や落葉下で主に確認される。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 比較的稀産で、どの地点でも少数個体が確認される程度である。1ヶ所で数個体が固まって見出され、その周囲では見つからないという場合も多く、パッチ状に点在して棲息する可能性が高い。

現在の生息状況 : 同上。近年の記録の大半は恩納村以北であり、それより南側での現状は不明。

学術的意義・評価 : 同属2種の地理的分布の間を埋める存在であり、分類学的・系統地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 本種は基本的に森林棲であり、開発等による森林の減少・分断は直接的な脅威となる。しかし、人の手も入っておらず、一見環境の変化も少なそうな森林においても確認数は減少しており、温暖化やそれに伴う乾燥化、降水パターンの変化、強い台風の増加といった環境変化が影響を及ぼしている可能性が高い。

原記載 : サカヅキノミギセルの項を参照。

参考文献 : 福田 宏・多々良有紀, 2009. 久米島のサカヅキノミギセル (有肺目: キセルガイ科). *Molluscan Diversity*, 1: 1-5.

久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.

湊 宏, 2009. 沖縄本島ネクマチヂ山のミカヅキノミギセル. *ちりぼたん*, 40: 8-14.

執筆名 : 亀田勇一

和名 : ミカヅキノミギセル

分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科

学名 : *Selenoptyx noviluna* (Pilsbry, 1908)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー** : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻は殻長9.5 mm前後、殻径2.5 mm弱の紡錘形。殻表は赤褐色で縫合下は白色、細かい成長肋を持つ。殻口縁はよく肥厚するが、体層からは遊離しない。上板と下軸板は明瞭で唇縁に達するが、下板は見えない。主襞はやや長く、体層の1/2~3/4周ほどになる。上腔襞と月状襞はほぼ連続し、角の丸い「厂」形。はじめ主襞とほぼ平行に奥へ伸び、体層径の1/4付近で強く曲がり、軸唇上端付近で滑層下に達する。上腔襞から月状襞への移行部では上腔襞が僅かに奥側へ突出し、角が出来る場合もある。生殖器では陰茎後端部に長さ1 mmほどの明瞭な陰茎付属肢を有する。

近似種との区別 : 腔襞の位置と陰茎付属肢の大きさによりサカヅキノミギセルと区別できる。沖縄島の本属個体群と殻の形態はよく似るが、後者は陰茎付属肢が比較的短い。

分布の概要 : 伊平屋島固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島から久米島にかけて、同属の種や個体群が分布する。

生態的特徴 : 比較的湿度の高い森林に棲息する。林縁部に比較的多く棲息し、倒木下などでは時に群棲する。地上棲。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 21世紀初頭までは記録も比較的多く、腰岳林道脇のガレ場に多産したが、最近では目にする数は減少傾向にある。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : キセルガイ類としては数少ない沖縄諸島固有のグループであり、詳細な分類・生態・系統地理学的研究によって実態の把握に努める必要がある。

生存に対する脅威 : 自然林より、むしろ林縁部に多く棲息する傾向があるため、道路拡張などの局所的な改変が大きな影響を与えかねない。更に林縁付近は温暖化等の気候変化の影響を直に受けるため、存続基盤は比較的脆弱といえる。

原記載 : Pilsbry, H. A., 1908 (for 1907). *New Clausiliidae of the Japanese Empire—XI. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia*, 59: 499-513, pls.32-34. (p.510, pl.34, figs.34-39, as *Clausilia* (*Selenoptyx*) *noviluna*. Type loc.: “Iheya-jima, Ryukyu”)

参考文献 : 知念盛俊, 1976. 陸産貝類. “生態写真集 沖縄の生物”, 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212-243

Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). *Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands*, 3: 127-149.

知念盛俊・治井正一, 1976. 伊平屋島・伊是名島の陸・淡水貝類 (予報). 沖縄生物教育研究会誌, (9): 37-43.

川名美佐男, 2003. 伊平屋島の陸産貝類の近況. *かいなかま*, 37(1): 20-24.
湊 宏, 2009. 沖縄本島ネクマチヂ山のミカヅキノミギセル. *ちりぼたん*, 40: 8-14.
魚住賢司・山本愛三・品川和久・反田栄一, 1980. サカヅキノミギセル *Zaptyx (Selenoptyx) inversiluna* とミカヅキノミギセル *Z. (S.) noviluna* の比較的研究. *九州の貝*, (15): 5-12.

執筆者名 : 亀田勇一

和名 : オキナワギセル
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
学名 : *Stereophaedusa valida* (Pfeiffer, 1850)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 46. 1a, 1b, 2 : オキナワギセル 南城市玉城 (1a, 1b), 今帰仁村今泊 (2). 3(参考) : スジイリオキナワギセル 国頭村辺戸. 撮影 : 亀田勇一.

形態 : 殻は細長い塔型であるが、成貝では幼層が欠失し、殻頂部の折れた形状となる。中型 (殻頂欠損での殻長 27.9~34.2 mm 程) で、殻径はやや太い (約 7.3~8.1 mm 程)。色彩は、中南部の個体群が淡黄褐色で本部半島の個体群が茶褐色となる。殻表の成長肋はやや粗く明瞭であり、光沢はなく曇る。殻口縁は薄い幅広く、殻口内の上板・下板・下軸板は明瞭である。腔壁は、主翼がやや短いほか、月状翼を欠き、短く同程度の長さの上腔壁と下腔壁を持つ。

近似種との区別 : ミヤコオキナワギセルは、より小型で黒褐色の殻の特徴のほか、宮古島の固有種であり分布が異なる。沖縄島北部の森林に生息するスジイリオキナワギセルは、幅広い黒褐色の色帯と火炎彩の特徴により、単色の殻色の本種と区別できる。

分布の概要 : 沖縄島北部の一部 (本部半島)・中南部のみに生息する種である。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ミヤコオキナワギセルは宮古島のみに分布する。スジイリオキナワギセルは沖縄島北部の良好な森林環境のみに分布する。本種は沖縄島の本部半島と中南部地域に分布する。

生態的特徴 : 樹幹に付着して生息する樹上性の種である。稚貝を産出する卵胎生種である。

生息地の条件 : 人の手が多く加わらない自然林の環境に生息する。

個体数の動向 : 減少傾向が進行していると思われる。

現在の生息状況 : 沖縄島南部では特に生息地の減少が進んでいる。

学術的意義・評価 : スジイリオキナワギセルやミヤコオキナワギセルなどの種分化を考える上で、重要な種である。

生存に対する脅威 : 沖縄島の南部および本部半島ともに近年の開発が著しく、特に南部の開発の速度が凄まじく、宅地造成の他、墓地建設による伐採も著しい。本種の生息する自然林が急速に消滅している。

特記事項 : ここでは本部半島に生息する殻の色彩が茶褐色の型を同種と見なした。茶褐色型の特徴は他地域の個体に推移することなく、本部半島固有の特徴であり、別個体群とすべきかもしれない。今後の分子系統解析が必要である。なお湊 (1994) など多くの文献は本種の記載者・年を「Küster, 1847」としてきたが、Nordsieck (1997) が指摘した通り、Küster による本種の記載は図版が 1857 年、文章が 1860 年に刊行された (Smith & England, 1937; Johnson, 1968; Coan & Kabat, 2015) ため、Pfeiffer (1850) が記載した同綴の学名に先取され、記載者・年は Pfeiffer, 1850 とするのが適切である。

原記載 : Küster, H.C., 1844-1862. Die Schliessschnecken und die verwandten Gattungen *Clausilia*, *Balea*, *Cylindrella* und *Megaspira*. Systematisches Conchylien-Cabinet von Martini and Chemnitz, 1(14): 1-355, pls 1-38. (p. 209, no. 206 (1860), pl. 23, figs 1-3 (1857), as *Clausilia valida* Pfeiffer, Type loc.: "Liew-Kiew")
Pfeiffer, L., 1850 (for 1849). Nachträge zu L. Pfeiffer Monographia Heliceorum. Zeitschrift für Malakozoologie, 6(7): 106-112. (p. 106, no. 23b, as *Clausilia vallida*, Type loc.: "Liew Kiew")

参考文献 : Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
Coan, E.V. & Kabat, A.R., 2015. Annex 2: Collation of the *Systematisches Conchylien-Cabinet* (1837-1920). 2,400 Years of Malacology (13th Edition). The American Malacological Society, 65 pp.
[http://www.malacological.org/downloads/epubs/2400-years/2400collations\(Kuster\).pdf](http://www.malacological.org/downloads/epubs/2400-years/2400collations(Kuster).pdf) (2016年12月30日閲覧)

Johnson, R.I., 1968. Martini and Chemnitz (Kuester's edition) *Systematisches Conchylien-Cabinet*, 1837-1920, a complete collation. *Journal of the Society for the Bibliography of Natural History*, 4(7): 363-367.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

湊 宏, 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究, *Venus*, suppl., 2: 1-212, tables 1-6, pls 1-74.

Nordsieck, H., 1997. Nomenclatural critique of Minato's (1988, 1994) papers. *Venus*, 56(1): 62-65.

Smith, E.A. & England, H.W., 1937. Martini and Chemnitz (Kuester's edition) *Systematisches Conchylien-Cabinet*, 1837-1918. *Journal of the Society for the Bibliography of Natural History*, 1(4): 89-99.

執筆者名 : 早瀬善正・福田 宏・久保弘文

和名 : ヨナグニダワラ

分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ネジレガイ上科 タワラガイ科

学 名 : *Sinoennea yonakunijimana* (Pilsbry & Hirase, 1909)

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧I類 (CR+EN)

形 態 : 貝殻は微小(殻長約4 mm)、円筒型(殻径約2 mm)で、螺塔は高い。最終3層はほぼ円筒型であるが、殻頂側は円錐型でやや尖る。殻は白色で、殻表には強い縦肋が密に分布する。殻口は広がって厚くなり、殻口内には3つの強い歯があり殻口は狭まる。

近似種との区別 : 本種は、殻サイズが中型で、殻頂部が円錐型になることによって、琉球列島の同属他種と区別できる。また、分布は与那国島に限定される。

分布の概要 : 与那国島にのみ分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島にはコメツブダワラが、宮古島にはミヤコダワラが分布する。

生態的特徴 : 自然林の落葉下に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 森林の乾燥化により減少している。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 与那国島の固有種で、生物地理学的にも重要。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

原 記 載 : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1909 (for 1908). New land Mollusca of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 60: 586-599. (p. 594, as *Ennea iwakawa yonakunijimana*. Type loc.: "Yonakunijima, Loochoo")

参 考 文 献 : 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.

湊 宏, 1976. 与那国島の陸産貝類相. Venus, 35(4): 163-184.

湊 宏, 2014. ヨナグニダワラガイ. "レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 148.

執 筆 者 名 : 上島 励

和 名 : マサキベッコウ

分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学 名 : *Bekkochlamys masakii* (Kuroda, 1960)

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

図 の 解 説 : p. 46. 撮影: 上島励。

形 態 : 貝殻はこの科としては大型(殻径約15 mm)で、螺塔は低い(殻長約7 mm)。螺層はやや細かく巻き、縫合はほとんど凹まず、体層周縁は丸い。殻は薄く、茶褐色の半透明で、殻表はほぼ平滑で、強い光沢がある。殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。臍孔は小さい。

近似種との区別 : 本種は、ベッコウマイマイよりも螺層の巻きが細かく、最終層は急激に広くならない点で異なる。オキナワテラマチベッコウとは生殖器の形態が異なり、分布域も異なる。ヤエヤマヒラベッコウとは殻が著しく大きいことで区別できる。

分布の概要 : 西表島・尖閣諸島から知られている。石垣島、与那国島からの記録は誤りと思われる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属別種としては、ベッコウマイマイが奄美から久米島に、ヤエヤマヒラベッコウは八重山諸島に分布する。

生態的特徴 : 自然林の落葉下、倒木下に生息する。

生息地の条件 : 西表島では標高の高い自然林にのみ生息する。

個体数の動向 : 尖閣諸島では現地調査が長らく行われていないが、野生化したヤギによる自然植生の破壊が進行しており、個体数は減少していると思われる。西表島でも至適な生息環境は減少している。

現在の生息状況 : 西表島では標高の高い自然林に生息するが、少ない。尖閣諸島では上記理由により、現在の生息状況は不明であるが、野生化したヤギの食害による生息環境悪化の進行が懸念される。

学術的意義・評価 : 尖閣と八重山にまたがって分布し、生物地理学的に重要。

生存に対する脅威 : 尖閣諸島では、野生化したヤギの食害による自然植生の破壊、林床の乾燥化、土壌流出による生息地の消失。西表島では、開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特 記 事 項 : 尖閣諸島と西表島の個体群が同種であるか、分類学的再検討が必要。

原 記 載 : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録(頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+104 pp. (pp. 79-80, pl. 1, fig. 4; pl. 2, fig. 27, as *Pseudhelicarion masakii*. Type loc.: "尖閣魚釣島")

参 考 文 献 : 知念盛俊, 1979. 尖閣列島の陸産貝類. 沖縄生物学会誌, (17): 19-27.

波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls 15-17.

上島 励, 2014. マサキベッコウ. "レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 348.

執筆者名： 上島 励

和名： オキナワテラマチベッコウ (新称)
分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Bekkochlamys* sp. 1
カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 46. 大宜味村ネクマヂチ山. 撮影：早瀬善正.
形態： 貝殻はこの科としては大型(殻径約18mm)で、螺塔は低く(殻長約7mm)、上面はやや扁平、螺層はやや細かく巻き、縫合はほとんど凹まず、体層周縁は丸い。殻は薄く、褐色の半透明で、殻表は平滑で、強い光沢がある。殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。臍孔は小さい。

近似種との区別： 同所的に生息するベッコウマイマイに似るが、螺管の巻きがより細かく、特に体層が急激に広がらない。螺塔も低く、上面はより扁平で、殻口はより小さい。生殖器の形態も異なる。

分布の概要： 沖縄島北部に固有。

近縁な種及び群との分布状況の比較： テラマチベッコウは鹿児島県に分布し、未記載種が台湾に分布する。

生態的特徴： 自然林の湿った落葉下や倒木下に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 生息環境の悪化により減少している。

現在の生息状況： 生息地は少なく、いずれの産地でも個体数は少ない。

学術的意義・評価： 近縁種が鹿児島県と台湾に分布し、生物地理学的に重要。

生存に対する脅威： 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項： 未記載種。

参考文献： 早瀬善正, 2017. 沖縄県大宜味村のオキナワテラマチベッコウ (ベッコウマイマイ科) の繁殖と成長. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

執筆者名： 上島 励

和名： ヤエヤマヒラベッコウ (新称)
分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Bekkochlamys* sp. 2
カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 46. 撮影：上島励.
形態： 貝殻は本属としては小型(殻径約9mm)で、螺塔は低く、上面はやや扁平、螺層はやや細かく巻き、縫合はほとんど凹まず、体層周縁は丸い。殻は薄く、褐色の半透明で、殻表は平滑で、強い光沢がある。殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。臍孔は小さい。

近似種との区別： 西表島に生息するマサキベッコウや沖縄島周辺に分布するベッコウマイマイとは、殻が著しく小型であることで容易に区別できる。生殖器の形態も異なる。

分布の概要： 西表、石垣島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 本種と同属別種の類縁関係は明らかでないが、マサキベッコウが八重山諸島、尖閣諸島に、ベッコウマイマイが久米島、沖縄島、奄美、徳之島に分布する。

生態的特徴： 自然林の落葉下や倒木下に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 過去のデータがないが、個体数がきわめて少なく、至適な生息環境が減少しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況： 同上。

学術的意義・評価： 八重山諸島の固有種で生物地理学的に重要。

生存に対する脅威： 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項： 未記載種。

執筆者名： 上島 励

和名： ウラウズタカキビ (新称)
分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Coneplecta* sp.
カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 46. A: 恩納村(早瀬善正採集). B: 宮崎県(西 邦雄氏採集). 撮影：久保弘文.
形態： 殻は微小で、殻長約3mmの高円錐型で、螺層は多く、周縁は弱く角張る。殻は薄質で淡褐色の半透

明。殻底には細かい螺旋彫刻がある。

近似種との区別： タカキビに似るが、より小型であることと、殻底には細かい螺旋彫刻があることで区別できる。

分布の概要： 本土から琉球列島にかけて広く分布するが、生息地は少ない。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 近縁と思われるタカキビが本土に分布する。

生態的特徴： 広い葉の裏や、落葉下に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 過去の記録がないため、不明。

現在の生息状況： 沖縄島北部の1地点で1個体が得られたのみであるが、生息地および個体数ともに少ないと思われる。

学術的意義・評価： 本州から琉球列島にまたがって分布する数少ない陸貝で、生物地理学的に興味深い。生息地は少なく、保全すべき種である。

生存に対する脅威： 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項： 未記載種。データが少ないため過小評価されているが、きわめて少ないベッコウマイマイ類と思われる。

執筆者名： 上島 励・久保弘文

和名： キヌツヤベッコウ属の一種 (6)

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Nipponochlamys* sp. 6

カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 46. 撮影：上島励。

形態： 貝殻は小さく(殻径約 4.5 mm)、螺旋は低い。螺旋はやや密に巻き、体層周縁は丸い。殻口は三日月型で、殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。殻は褐色で、殻表には細かい成長線が密にあり、曇った外観を呈する。臍孔はほぼ閉じる。

近似種との区別： ヨナグニベッコウよりも著しく小型であることで異なる。琉球列島産のキヌツヤベッコウ属の他種とは生殖器の形態で区別できるが、外見での識別は極めて困難である。

分布の概要： 石垣島からのみ知られる。西表島にも生息する可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較： クメジマベッコウは久米島、ヨナグニベッコウは与那国島、*N. sp. 1* と *N. sp. 2* が沖縄島、*N. spp. 3-5* は伊平屋島に分布する。

生態的特徴： 自然林の湿った落葉下に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 過去の記録はないが、本種に至適な生息環境は減少、悪化しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況： 個体数はきわめて少ない。

学術的意義・評価： キヌツヤベッコウ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要なグループである。いずれの種も狭い地域の固有種であり、保全の重要性は高い。

生存に対する脅威： 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項： 未記載種。

執筆者名： 上島 励

和名： ヨナグニベッコウ

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Nipponochlamys* sp. 7

カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU)

図の解説： p. 46. 与那国島アヤマヒビル館裏の林。撮影：早瀬善正。

形態： 貝殻は小さく(殻径約 6 mm)、螺旋は低い。螺旋はやや密に巻き、体層周縁は丸い。殻口は三日月型で、殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。殻は赤褐色で、殻表には細かい成長線が密にあり、曇った外観を呈する。臍孔はほぼ閉じる。

近似種との区別： 琉球列島産のキヌツヤベッコウ属は長らくトクノシマベッコウ1種とされていたが、多数の隠蔽種が存在することが判明した。本種を含むこれらの近似種はいずれも生殖器の形態で区別できるが、外見での区別は一部の種の組み合わせを除いて極めて困難である。石垣島産の *N. sp. 6* とは貝殻が大きいことで区別できる。

分布の概要： 与那国島にのみ分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： クメジマベッコウは久米島、*N. spp. 1-2* が沖縄島、*N. spp. 3-5* は伊平屋島、*N. sp. 6* が石垣島に分布する。

生態的特徴： 自然林の湿った落葉下に生息する。

生息地の条件： 同上。

<貝類>

個体数の動向 : かつては多産したが、森林の乾燥化により減少した。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : キヌツヤベッコウ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要なグループである。いずれの種も狭い地域の固有種であり、保全の重要性は高い。
生存に対する脅威 : 森林の伐採および林床の乾燥化。
特記事項 : 湊 (1976) で *Luchuconulus* sp.として報告されたが、*Nipponochlamys* 属の未記載種である。
参考文献 : 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島, *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中。
湊 宏, 1976. 与那国島の陸産貝類相. *Venus*, 35(4): 163-184.
上島 励, 2014. ヨナグニベッコウ (新称). “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 351.

執筆者名 : 上島 励

和名 : オーステンキビ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
学名 : *Parakaliella austeniana* (Pilsbry, 1901)
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧I類 (CR+EN)

図の解説 : p. 46. 撮影 : 上島励。
形態 : 貝殻は微小 (殻径約 3 mm) で、殻長はやや長く (約 3 mm)、低い円錐形で、螺層は細かく巻く。螺管はやや膨らみ、周縁は丸い。臍孔は狭い。殻色は淡褐色で殻表に細かい成長脈がある。殻口は肥厚・反転しない。
近似種との区別 : 本種は琉球列島に分布するキビ類とは、やや大型で螺塔が高く、殻表に微細な成長脈があることで区別できる。また、分布域は八重山に限定される。
分布の概要 : 西表島、石垣島にのみ生息する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 殻形態が類似するキビ類とは必ずしも近縁でないため、現時点では比較は困難である。
生態的特徴 : 石灰岩地の湿った自然林の落葉下に生息する。
生息地の条件 : 同上。
個体数の動向 : 本種は標高の低い石灰岩地の湿った森林に生息するため、生息環境が開発により悪化している。生息地、個体数ともに減少している。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 八重山の固有種であり、減少しているため、保全の重要性は高い。
生存に対する脅威 : 開発による自然林の消失、林床の乾燥化。
特記事項 : 過去の採集記録には誤同定が少なからず含まれており、八重山以外からの報告は誤りだと思われる。
原記載 : Pilsbry, H.A., 1901. New land shells from the Loo Choo Islands and Japan. *The Nautilus*, 15: 18-24. (pp. 20-21, as *Kaliella Austeniana*. Type loc.: “Yaeyama Island”)
参考文献 : 波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls 15-17.
平瀬興一郎, 1908. 日本陸産貝類図説 (十三). 介類雑誌, 2(7): 221-226, pl. 18.
上島 励, 2014. オーステンキビ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 161.

執筆者名 : 上島 励

和名 : エイコベッコウ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
学名 : *Takemasaia eikoe* (Azuma, 1983)
カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)

形態 : 中型のベッコウマイマイ類で、殻径約 7 mm。螺塔はやや低く、螺管は膨らみ、周縁は丸い。殻色は黄褐色で、殻表には微細な成長脈が密にあり、曇った外観を呈する。
近似種との区別 : 沖縄島北部に生息するグードベッコウよりも小型で光沢がないことで区別できる。
分布の概要 : 沖縄島北部にのみ生息する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 類似種との類縁関係が明らかではないので、現時点では比較が困難。
生態的特徴 : 樹上性で、標高の高い広葉樹林の樹幹、葉の裏に生息する。
生息地の条件 : 同上。
個体数の動向 : 過去のデータがないが、沖縄島北部の生息環境が減少、悪化しているため、本種も減少していると思われる。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 沖縄島北部の固有種で、保全の重要性は高い。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。
 原 記 載 : 東 正雄, 1983. 沖縄県産陸貝 (ベッコウマイマイ科) 一新種. 兵庫生物, 8(4): 197-198. (pp. 197-198, fig. a-c, as *Luchuconulus eikoeae*. Type loc.: “沖縄本島国頭郡辺野喜西銘岳”)
 参 考 文 献 : 東 正雄・平田義浩, 1996. 沖縄産エイコベッコウ “*Luchuconulus*” *eikoeae* の再発見と生殖器について. ちりぼたん, 27: 12-13.

執 筆 者 名 : 上島 励

和 名 : タネガシマヒメベッコウ
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
 学 名 : *Yamatochlamys tanegashimae* (Pilsbry, 1901)
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

図 の 解 説 : p. 47. 名護市. 撮影:久保弘文.
 形 態 : 貝殻は微小で、殻径約4mm、螺塔は低い。螺層はやや細かく巻き、体層周縁は丸い。縫合はほとんど刻まれない。殻色は半透明の茶褐色、殻表は滑らかで、光沢が強く、きわめて微細な螺状彫刻が縫合付近や殻底にあるが、ほぼ平滑。臍孔は狭い。

近似種との区別 : 琉球列島に生息する同サイズのベッコウマイマイ類とは、殻表の光沢が強く、彫刻がほとんどないこと、螺層が密に巻くことで区別できるが、貝殻のみによる識別は困難である。

分布の概要 : 沖縄島以北の琉球列島に分布する。九州からの記録は再検討する必要がある。沖縄県では沖縄島北部と久米島から知られる。他の離島にも生息する可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近似種との類縁関係が明らかではないので、現時点では比較が困難。

生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下や倒木の下に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 過去のデータがないが、沖縄島北部では至適な生息環境が減少、悪化しているため、本種も減少していると思われる。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 沖縄県では沖縄島北部と久米島に生息し、生息環境が悪化しているため保全すべき種である。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特 記 事 項 : 本種についての過去の採集記録には誤同定が多く、正確な分布域については再検討が必要。

原 記 載 : Pilsbry, H.A., 1901. Notices of new land snails from the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 496-502. (pp. 498-499, as *Macrochlamys tanegashimae*. Type loc.: “Tane-ga-shima”).

執 筆 者 名 : 上島 励

和 名 : コシダカハチジョウヒメベッコウ (新称)
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
 学 名 : *Yamatochlamys* sp. 1
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

図 の 解 説 : p. 47. 撮影:上島励.
 形 態 : 貝殻は微小で殻径約2.5mm、螺塔はやや高い。螺層は細かく巻き、体層周縁は丸い。殻色は赤褐色で、胎殻には微細な点刻が螺旋状に並び、殻底には弱く細かい螺状彫刻がある。臍孔は狭い。

近似種との区別 : ハチジョウヒメベッコウに彫刻が酷似するが、螺塔が高く、生殖器の形態も異なる。

分布の概要 : 沖縄県では沖縄島北部にのみ生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 過去のデータがないが、個体数は非常に少なく、沖縄島北部では生息環境が悪化しているため減少していると思われる。

学術的意義・評価 : 近縁種であるハチジョウヒメベッコウは本土周辺で不連続な分布をしており、本種が琉球列島に生息することは生物地理学的に興味深い。本種が生息する沖縄島北部では生息環境が少なくなっており、保全の必要性は高い。

特 記 事 項 : 未記載種。

執 筆 者 名 : 上島 励

和 名 : ヨナグニシロベッコウ (新称)
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
 学 名 : *Helicarionidae* gen. & sp.

〈貝類〉

カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 47. 与那国島. 撮影：久保弘文。
形態： 貝殻は小さく（殻径約 4.5 mm）、螺塔はきわめて低く、上面はほぼ平ら、螺層はやや細かく巻き、縫合はほとんど凹まず、体層周縁は丸い。殻は薄く、白色の半透明で、殻表は平滑で、光沢がある。殻口縁は薄く、反曲しないが、軸唇内部はわずかに肥厚する。臍孔は狭い。
近似種との区別： 琉球列島に生息する他のベッコウマイマイ類とは、殻が小型、白色、扁平であることで容易に区別できる。
分布の概要： 与那国島にのみ分布する。
近縁な種及び群との分布状況の比較： 近縁と思われる種は琉球列島および台湾から知られていない。
生態的特徴： 自然林内の深く埋もれた石灰岩の裏や、石灰岩の礫が深く堆積した場所に生息する。
生息地の条件： 同上。
個体数の動向： 採集が困難であるため過去のデータがなく、不明。
現在の生息状況： 上記のような特殊な環境に生息し、生貝を見つけることは困難だが、死殻は点在するので、与那国島の石灰岩地には広く生息する可能性がある。
学術的意義・評価： 与那国島の固有種で、近縁種が不明で分類学的に重要。
生存に対する脅威： 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。
特記事項： 未記載種。
参考文献： 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中。

執筆者名： 上島 励

和名： ヨナグニナメクジ (新称)
分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 オオコウラナメクジ上科 ナメクジ科
学名： *Meghimatium* sp.
カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 47. 撮影：上島励。
形態： 体長 4 cm 前後の中型のナメクジで、外套膜は背面と一体化し、貝殻はない。体色は灰色から褐色で、背面には対になった黒い縦帯がある。
近似種との区別： 外見上はナメクジに酷似するが、生殖器の形態が異なる。
分布の概要： 日本では与那国島にのみ生息する。
近縁な種及び群との分布状況の比較： 最も近縁なナメクジ類は台湾に生息し、その分類学的な関係については詳細な検討が必要。
生態的特徴： 森林の落葉下、倒木下などに生息し、しばしば林縁など開放的な環境にも生息する。
生息地の条件： 同上。
個体数の動向： かつては多産したが、森林の乾燥化により激減した。
現在の生息状況： 同上。
学術的意義・評価： 日本では与那国島にのみ生息し、台湾との関連など生物地理学的にも重要。与那国島の他の固有種よりも開けた環境に強いので、脆弱性は低い可能性がある。
生存に対する脅威： 森林の伐採、林床の乾燥化。
参考文献： 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中。

執筆者名： 上島 励

和名： ウロコケマイマイ
分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
学名： *Aegista lepidophora* (Gude, 1900)
カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧I類 (CR+EN)

形態： 殻径約 6~10 mm、ソロバン玉状で、螺塔は低く、やや薄質。体層周縁の角は明瞭。殻皮は明茶褐色で、剥がれやすい粗い鱗片状突起を持つ。殻口はやや弱く肥厚し、反転する。臍孔は広く開き、その縁は角立たない。
近似種との区別： 本種は、小型であること、殻表の三角状突起が明瞭で粗いこと、周辺に角を持つことで、琉球列島の他種と識別できる。
分布の概要： 沖縄島や久米島・慶良間諸島等の沖縄諸島に分布する。
近縁な種及び群との分布状況の比較： 奄美諸島にはマルテンスオオベソマイマイとその亜種トクノシマオオベソマイマイ

イオオシマフリーデルマイマイ、マメヒロベソマイマイが分布する。また沖縄島北部のみに局所分布するヘリトリケマイマイの他、沖縄諸島にはイトマンマイマイ、トウガタホソマイマイが分布する。この他台湾にも近縁種が分布する。

- 生態的特徴： 林床の倒木・石下、落葉中に生息する地上棲種である。
- 生息地の条件： 同上。
- 個体数の動向： 生息地は点在するが個体数が多く見られる場所は少ない。また死殻のみが見られる地点も多い。
- 現在の生息状況： 同上。
- 学術的意義・評価： 本種を含めた近縁種群は互いに表現型の差が著しく、近縁種間の表現型多様化を研究する上で良いモデルである。加えて本種を含めた近縁種群は一部の台湾の種と単系統となるが、八重山諸島には近縁種は見られない (Hirano et al., 準備中)。このように中琉球の系統は遺存的であると考えられ、また本種は沖縄諸島のみで見つかることから、進化生物学的に保全すべき価値が高い。
- 生存に対する脅威： 生息地の一部には、捕食者としてニューギニアヤリガタリクウズムシをはじめとした陸生プラナリア類が確認されているが、影響については不明。
- 特記事項： カドマルウロコケマイマイとは遺伝的・形態的にほとんど差がみられないため、本種に統一する。一方で沖縄島の中では体サイズにバリエーションが見られる。
- 原記載： Gude, G.K., 1900. Further notes on helicoid land shells from Japan, the Loo-Choo, and Bonin Islands, with descriptions of seven new species. Proceedings of the Malacological Society of London, 4: 70–80, pl. 8. (p. 76, pl. 8, figs 3–5, as *Eulota (Plectotropis) lepidophora*. Type loc.: “Loo-Choo Islands”.)
- 参考文献： 知念盛俊, 1965. 沖縄産陸産貝の採集と標本の作り方 (I). 沖縄生物学会誌, 2: 77-88.
Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
知念盛俊, 1989. 佐敷町産陸棲貝類. “佐敷町史三 自然”, 佐敷町史編集委員会 (編), 佐敷町役場, 佐敷, 324-334.
福田 宏・青柳 克・亀田勇一, 2017. 沖縄県渡名喜島の非海産貝類相. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. Molecular Phylogenetics and Evolution, 70: 171–181.
加藤次雄, 1959. 沖縄の陸棲貝. 三重生物, (9): 73-75.
久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.

執筆者名： 平野尚浩・黒住耐二* *前回改訂版 (2005) における黒住による記載内容を一部引用した。

- 和名： トウガタホソマイマイ
- 分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
- 学名： *Aegista turrita* (Gude, 1900)
- カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
- 形態： 殻径約 6.5 mm、殻長約 11 mm で、螺塔の高い円錐形、螺層は僅かに膨らみ、やや薄質。体層周縁の角は明瞭で強く尖る。殻は淡黄褐色で、殻表に明瞭な殻皮の突起や毛を持たず、ほぼ平滑。殻口は弱く肥厚し、反転する。臍孔は反転した軸唇に被われて狭い。生殖器には矢囊およびその付属器官がある。
- 近似種との区別： 本種は、周縁角が明瞭で強く尖ることにより、ナガシリマルホソマイマイやタカラホソマイマイと容易に識別できる。
- 分布の概要： 沖永良部島と沖縄島を含む沖縄諸島に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 琉球列島では遺存的な系統の一員で、奄美諸島にマルテンスオオベソマイマイ・オオシマフリーデルマイマイ・マメヒロベソマイマイ、沖縄諸島に本種とヘリトリケマイマイ・ウロコケマイマイ・イトマンマイマイが分布する。先島諸島に近縁種はおらず、台湾に近縁種が棲息する。
- 生態的特徴： 時に個体数が増加することがあるものの、継続して高密度を保っていない。沖縄島中部では森林内の草本に付着していた。久米島では道端のススキの根元に見られた (福田宏、私信)。
- 生息地の条件： 攪乱の大きくない林縁環境の存在。草本類の繁茂が共通の条件である。
- 個体数の動向： 確認地点が減少しているようであり、個体数は減少傾向にあると考えられる。
- 現在の生息状況： 時にまとまって確認されることもあるが、確実な生息地を示すのは困難。
- 学術的意義・評価： 中琉球の固有種であり、生物地理学的に重要。また、本種を含むオオベソマイマイ類は種間でも殻形態の変異が著しく、近縁種間の表現型多様化を研究する上で良いモデル系である。
- 生存に対する脅威： 農地拡大や施設造成などによる林縁部の改変。特に草本類など植物の伐採、刈り取りは生息環境を攪乱する可能性がある。
- 原記載： Gude, G.K., 1900. Further notes on helicoid land shells from Japan, the Loo-Choo, and Bonin Islands, with descriptions of seven new species. Proceedings of the Malacological Society of London, 4: 70–80. (pp. 75–76, pl. 8, figs 1–2, as *Ganesella turrita*. Type loc.: “Loo-Choo Islands”)
- 参考文献： 東 正雄・東 良雄・平田義浩, 1992. 久米島の陸産貝類相. Venus, 50(4): 264-269.

- 知念盛俊, 1965. 沖縄産陸産貝の採集と標本の作り方 (I). 沖縄生物学会誌, 2(4): 77-88.
 Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
 知念盛俊, 1989. 佐敷町産陸棲貝類. “佐敷町史 三 自然”, 佐敷町史編集委員会 (編), 佐敷町役場, 佐敷, 324-334.
 知念盛俊, 1992. 中城城跡と周辺の陸産貝類. “中城村史 第二巻資料編 1”, 中城村史編集委員会 (編), 中城村役場, 中城, 238-243.
 早瀬善正・波部忠重, 1998. ホソマイマイ属2種の生殖器形態についての知見. ちりぼたん, 28: 59-62.
 Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. Molecular Phylogenetics and Evolution, 70: 171-181.

執筆者名: 黒住耐二・平野尚浩

- 和名: **イッシキマイマイ**
 分類: 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
 学名: *Satsuma caliginosa caliginosa* (Adams & Reeve, 1850)
 カテゴリ: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ: 準絶滅危惧 (NT)
- 形態: 殻は西表島では殻径約 35 mm 前後だが、石垣島では大型化し、殻径 46 mm に達する。螺塔はやや低く、体層周縁は丸い。成貝の殻口は横長の楕円形、底唇部はやや直線的で、殻口の反転する手前で内側に張り出して突起を形成する。臍孔は狭いが明瞭。地色は鉛色～茶褐色で、周縁と臍孔部に色帯をもつ。
- 近似種との区別: 殻口が変形し、明瞭な突起を形成することで他種とは区別される。
 分布の概要: 石垣島と西表島の固有亜種。
 近縁な種及び群との分布状況の比較: 与那国島に亜種ヨナグニマイマイ、台湾北部にタンスイマイマイが分布する。
 生態的特徴: 石垣島と西表島の自然度の高い森林の林床に生息する。地上棲傾向が強いが、樹幹等の高さ 1 m 程度までは活動範囲に含まれる。捕食者であるイワサキセダカヘビへの対抗策として、殻口の突起・強い筋肉・自切などの防衛手段を発達させている。
- 生息地の条件: 同上。
 個体数の動向: 20 世紀終わり頃までは山中で大型の個体を比較的容易に目にすることが出来ていたが、近年では確認が困難になっている。石灰岩地では密度は高くなる傾向があるが、まとまった数の確認は容易ではない。
- 現在の生息状況: 同上。
 学術的意義・評価: 日本で唯一、狭義の *Coniglobus* (ドングリマイマイ類) の系統に属する種として、生物地理学的にも重要である。
- 生存に対する脅威: 本種の主な棲息地は自然林であり、開発による森林面積の減少・分断が個体数の減少に繋がっている。近年の温暖化や乾燥の進行も林内の湿度を下げ、棲息環境を狭めている可能性が高い。
- 原記載: Adams, A. & Reeve, L. A., 1850. Mollusca. “The Zoology of the Voyage of H.M.S. Samarang, under the Command of Captain Sir Edward Belcher, C.B., F.R.A.S., F.G.S., during the Years 1843-1846”, Adams, A. (ed.), Reeve & Benham, London, i-x, 1-87, pls. 1-24. (p.62, pl.16, fig.6, as *Helix caliginosa*. Type loc.: “Island of Mindanao, Philippines” [error])
- 参考文献: 知念盛俊, 1970. 八重山の陸産貝類. 沖縄生物教育研究誌, (4): 26-30.
 知念盛俊, 1990. 西表島の陸産貝類. “南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究 平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書”, 環境庁自然保護局 (編), 環境庁自然保護局, 東京, 267-275.
 波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls. 15-17.
 Hosono, M. & Hori, M., 2008. Divergent shell-shape as an anti-predator adaptation in tropical land snails. The American Naturalist, 172(5): 726-732.

執筆者名: 亀田勇一・黒住耐二* *前回改訂版 (2005) における黒住による記載内容を一部引用した。

- 和名: **ヤンバルヤマタカマイマイ**
 分類: 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
 学名: *Satsuma eucosmia* ssp.
 カテゴリ: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (オキナワヤマタカマイマイ*)

*本改訂(沖縄県)はオキナワヤマタカマイマイのうち沖縄島北部の本種個体群は形態的分化が見られるため、分けて扱った。

- 図の解説 : p. 47. A, D : 国頭村伊地. B : 国頭村辺野喜. C : 国頭村与那. E : 大宜味村津波. F : 名護市源河. 撮影 : 亀田勇一.
- 形態 : 貝殻は殻径約 22 mm、螺塔の高い円錐形で薄質。体層周縁は丸いか、ごく弱い角を持つ。殻皮は光沢を持ち、色彩や色帯には著しい変異がある。臍孔は狭く開く。殻口は白色で、弱く肥厚し、反転する。
- 近似種との区別 : 沖縄島中南部に棲息するオキナワヤマタカマイマイに比べ、殻は小型で螺塔が高く、周縁角は弱い。生殖器では陰茎がより短く、陰茎付属肢が大型であることで区別される。分布の重なるシラユキヤマタカマイマイは、生殖器の陰茎が長く、陰茎付属肢と膈後端の肥厚が弱いことで識別できる。
- 分布の概要 : 沖縄島の恩納村以北（通称ヤンバル）でのみ確認されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島南部に名義タイプ亜種オキナワヤマタカマイマイ、沖永良部島に亜種オキナワヤマタカマイマイが分布する。
- 生態的特徴 : 樹上棲で、樹冠が発達して照度や乾燥が抑えられた森林内の樹木を主な棲息場所とする。石灰岩地や沢沿い、蔓植物やクワ科の大木が多い場所では密度が高くなる傾向がある。
- 生息地の条件 : 同上。
- 個体数の動向 : 2000年代前半までは一度の調査で多数の個体を確認できる場所が多かったが、2010年以降の調査では一様に棲息密度が低下している。また、林道工事などにより森林の縮小・分断が進んでいるほか、集落の山手などでは道路沿いの樹木の伐採等により、少しずつ棲息地が失われている場所もある。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 琉球列島で多様化を遂げた固有の系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものとしてきわめて重要である。
- 生存に対する脅威 : 本種は樹上棲であり、棲息に適した森林の消失や急激な変化は大きな脅威となる。遊歩道の建設、林縁の枝打ち、被覆する蔓植物・下草の過剰な除去も林内の風通しをよくし、林内の乾燥化をもたらす要因となる。また、台風による地面への落下や、樹木の倒壊に伴う林内の照度の増加は捕食圧の上昇に繋がるため、こうした自然災害の頻度や規模の増加も大きな脅威である。
- 特記事項 : 過去にクマドリヤマタカマイマイとして沖縄島から報告されたものは、本種またはシラユキヤマタカマイマイの誤同定である。
- 参考文献 : Kameda, Y. & Kato, M., 2008. Systematic revision of the subgenus *Luchuhadra* (Pulmonata: Camaenidae: *Satsuma*) occurring in the central Ryukyu Archipelago. *Venus*, 66: 127-145.
久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
久保弘文, 2017. 第4節 陸産貝類. “名護市史「自然と人」”, 名護市教育委員会 市史編纂室 (編), 名護市教育委員会, 名護, 印刷中.
竹内将俊・小峰幸夫・野村昌史, 2001. 琉球列島に固有なオキナワヤマタカマイマイ類の地理的分布と生息環境. *野生生物保護*, 6: 91-107.
Takeuchi, M. & Takeda, Y., 2016. Dependence of the endangered arboreal snail *Satsuma (Luchuhadra) eucosmia eucosmia* (Camaenidae) on *Ficus* (Moraceae) trees as its main habitat. *Molluscan Research*, 36: 231-238.

執筆者名 : 亀田勇一

- 和名 : シラユキヤマタカマイマイ
- 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
- 学名 : *Satsuma largillierti* (Pfeiffer, 1849)
- カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 図の解説 : p. 47. A : うるま市勝連平安名. B : 名護市源河. C : 名護市名護. D : 平安座島. E : 国頭村与那. F : 北中城村渡口. 撮影 : 亀田勇一.
- 形態 : 貝殻は殻径 17~29 mm、螺塔のやや高い円錐形で、殻頂は鈍い。体層周縁には弱い〜明瞭な角を持つ。多くは淡黄白色の地色で、無帯または周縁に1本の色帯を持つ。臍孔は狭く開く。殻口は白色で、弱く肥厚し、反転する。
- 近似種との区別 : 分布域の重なるオキナワヤマタカマイマイよりも殻は低平になる傾向があるが、確実には区別できない。生殖器では陰茎が長く、陰茎付属肢と膈後端の肥厚が弱いことで識別できる。
- 分布の概要 : 沖縄島の浦添市以北と周辺の小島嶼、沖永良部島で確認されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 琉球列島中部で多様化している樹上棲の系統の一員で、沖縄島と周辺の小島嶼には本種とアマノヤマタカマイマイ・オキナワヤマタカマイマイ (ヤンバルヤマタカマイマイを含む) の3種が分布する。
- 生態的特徴 : 樹上棲で、樹冠が発達して照度や乾燥が抑えられた森林の樹木を主な棲息場所とするが、やや風通しのよい林縁部を好む傾向にある。石灰岩地や沢沿い、蔓植物・クワ科植物の多い場所では密度が高くなる傾向がある。
- 生息地の条件 : 同上。
- 個体数の動向 : 2000年代前半までは一度の調査で多数の個体を確認できる場所が多かったが、2010年以降の調査では一様に棲息密度が低下している。また、林道工事などにより森林の縮小・分断が進んでいるほか、林縁部の開発や枝打ちによる個体群の縮小も確認されている。
- 現在の生息状況 : 同上。

〈貝類〉

- 学術的意義・評価 : 琉球列島で多様化を遂げた固有の系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものとしてきわめて重要である。
- 生存に対する脅威 : 本種は樹上棲であり、棲息に適した森林の消失や急激な変化は大きな脅威となる。林縁部を好む傾向があるため、林縁の枝打ち、被覆する蔓植物・下草の除去は個体群や棲息場所の消失に直結する。また、台風による地面への落下や、樹木の倒壊に伴う林内の照度の増加は捕食圧の上昇に繋がるため、自然災害の頻度や規模の増加も大きな脅威である。
- 特記事項 : 過去にクマドリヤマタカマイマイとして沖縄島から報告されたものは、本種またはヤンバルヤマタカマイマイの誤同定である。
- 原記載 : Pfeiffer, L., 1849. Monographia Heliceorum. Zeitschrift für Malakozoologie, 6: 66-79, 81-95, 106-112. (pp.78-79, no.847a, as *Helix Largillierii* Philippi. Type loc.: “Liew-Kiew”)
- 参考文献 : Kameda, Y. & Kato, M., 2008. Systematic revision of the subgenus *Luchuhadra* (Pulmonata: Camaenidae: *Satsuma*) occurring in the central Ryukyu Archipelago. *Venus*, 66: 127-145.
久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
久保弘文, 2017. 第4節 陸産貝類. “名護市史「自然と人」”, 名護市教育委員会 市史編纂室 (編), 名護市教育委員会, 名護, 印刷中.
竹内将俊・小峰幸夫・野村昌史, 2001. 琉球列島に固有なオキナワヤマタカマイマイ類の地理的分布と生息環境. *野生生物保護*, 6: 91-107.

執筆 者 名 : 亀田勇一

和 名 : オモロヤマタカマイマイ
分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
学 名 : *Satsuma omoro* Minato, 1982
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 : 貝殻は中型 (殻径約 25 mm)、螺塔の高い円錐形で、殻頂はやや鈍い。比較的厚質で、体層周縁には鈍いが明瞭な角を持つ。地色は黄白色で、周縁に 0~2 本の色帯をめぐらし、臍孔部に色帯をもつこともある。臍孔は狭く開く。殻口縁は白色で、やや強く肥厚し、反転する。生殖器では陰茎内壁の形態が独特で、同属の種の多くが縦襞状の彫刻を持つのに対し、本種ではヘリンボーン状の横襞となる。

近似種との区別 : 琉球列島産の同属の樹上棲種と比べ、やや厚質で螺塔の膨らみが弱く、周縁角も明瞭なことで区別できる。生殖器では陰茎の途中で陰茎付属肢をもち、後半部が幅広くなることで明確に識別される。

分布の概要 : 久米島固有種。島内の広い範囲に棲息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 琉球列島中部で多様化している樹上棲の系統の一員で、姉妹種であるウラキヤマタカマイマイが宮古諸島に分布する。

生態的特徴 : 森林内の樹木等を棲息場所とする樹上棲種で、産卵は樹幹や石灰岩塊の窪みに行く。樹冠が発達して照度や乾燥が抑えられた森林の樹木を主な棲息場所とするが、風通しのよい林縁部や集落内の植栽にも棲息し、蔓植物が絡み合う藪などにも多産することがある。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 2000年代前半までは一度の調査で複数の個体を確認できる場所が多かったが、近年では棲息密度が低下している。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 琉球列島で多様化を遂げた固有の系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものとしてきわめて重要である。

生存に対する脅威 : 本種は樹上棲であり、棲息に適した森林の消失や急激な変化は大きな脅威となる。林縁部を好む傾向があるため、林縁の枝打ち、被覆する蔓植物・下草の除去は個体群や棲息場所の消失に直結する。また、台風による地面への落下や、樹木の倒壊に伴う林内の照度の増加は捕食圧の上昇に繋がるため、自然災害の頻度や規模の増加も大きな脅威である。

原記載 : 湊 宏, 1982. 沖永良部島・久米島のオキナワヤマタカマイマイ種群. *Venus*, 40(4): 187-194. (pp.188-190, 191-192, figs.1-4, pl.2, figs.1-4, as *Satsuma omoro*. Type loc.: “久米島 具志川村具志川~北原間 (石灰岩地の灌木林)”)

参考文献 : 東 正雄・東 良雄・平田義浩, 1992. 久米島の陸産貝類相. *Venus*, 50: 264-269.
Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). *Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands*, 3: 127-149.

Kameda, Y. & Kato, M., 2008. Systematic revision of the subgenus *Luchuhadra* (Pulmonata: Camaenidae: *Satsuma*) occurring in the central Ryukyu Archipelago. *Venus*, 66: 127-145.

湊 宏, 1982. 沖永良部島・久米島のオキナワヤマタカマイマイ種群. *Venus*, 40(4): 187-194.

品川和久, 1978. 沖縄県久米島における陸産貝類採集記録. *かいなかま*, 12(2): 4-14.

竹内将俊・小峰幸夫・野村昌史, 2001. 琉球列島に固有なオキナワヤマタカマイマイ類の地理的分布と生息環境. *野生生物保護*, 6: 91-107.

執筆 者 名 : 亀田勇一

和名：リュウキュウヒダリマキマイマイ
 分類：腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
 学名： *Satsuma perversa* (Pilsbry, 1931)
 カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態：殻は左巻きで殻径 27 mm 内外、螺塔はやや低く、体層周縁は丸い。蜂蜜色の地に細い周縁色帯をめぐらす。臍孔は明瞭に開く。生殖器では陰茎付属肢は比較的長いが、鞭状器と陰茎本体はほぼ同長で、近縁種に比べ極端に短い。

近似種との区別：琉球列島の同属他種とは、左巻きで厚質、螺塔がやや高く、体層周辺に細い色帯のみを持つことによつて識別できる。

分布の概要：久米島固有種。
 近縁な種及び群との分布状況の比較：琉球列島中部で多様化している地上棲 *Satsuma* の一員であり、久米島には本種とクメジママイマイ、シュリマイマイ、ミヤコマイマイが棲息している。姉妹種と考えられるトナキマイマイが渡名喜島と慶良間列島に分布する。

生態的特徴：地上棲種で、自然林や二次林林床の倒木下や落葉下、石灰岩礫の間などに棲息する。クメジママイマイやミヤコマイマイなどと同所的にも棲息する。

生息地の条件：同上。
 個体数の動向：棲息範囲は比較的広いが、まとまった個体数が確認できる場所は少ない。近年では森林面積の減少や温暖化・異常乾燥による林床の荒廃で棲息可能な環境が限られてきており、個体群の縮小が進んでいると考えられる。

現在の生息状況：同上。
 学術的意義・評価：琉球列島で多様化を遂げた系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものである。特に本種は沖縄諸島のシュリマイマイ種群の中で唯一種分化とともに巻きの逆転を生じており、生物地理学的・進化的に重要である。

生存に対する脅威：ドリリーネや低標高の林のような人里に近い環境にも棲息するため、集落周辺の開発に伴う林の縮小・消失など、人間の活動による棲息環境の破壊が最大の脅威となる。また、久米島特産であるため、マニアの採集圧も無視できない。分布の重なるミヤコマイマイは国内外来種の疑いもあり、近年久米島でも増加傾向にあると考えられるため、生態的な競合が懸念される。

原記載：Pilsbry, H. A., 1931. Japanese land mollusks. Nautilus, 45: 29-30. (p.30, as *Euhadra mercatoria perversa*. Type loc.: "Loochoo")
 参考文献：東 正雄・東 良雄・平田義浩, 1992. 久米島の陸産貝類相. Venus, 50: 264-269.
 湊 宏, 2001. シュリマイマイ種群とオオシママイマイ種群の種類とその分布. ちりぼたん, 32: 24-31.
 品川和久, 1978. 沖縄県久米島における陸貝採集記録. かいなかま, 12(2): 4-14.

執筆者名：亀田勇一

和名：トナキマイマイ
 分類：腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
 学名： *Satsuma* sp.
 カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ：該当なし

図の解説：p. 47. 渡名喜島. 撮影：青柳 克
 形態：殻は殻径 30 mm 弱、螺塔はやや低く、周縁は丸い。臍孔は狭いが明瞭に開く。蜂蜜色の地に細い周縁色帯をめぐらす。シュリマイマイがもつ螺層上面と殻底の幅広い色帯を持たないか、持っても色が淡いため、明るい色の個体が大半である。生殖器は陰茎本体と鞭状器がともに短く、ほぼ同長となる点がリュウキュウヒダリマキマイマイと共通する。

近似種との区別：殻・生殖器ともリュウキュウヒダリマキマイマイに似るが、本種は右巻きである。シュリマイマイよりも殻は周縁が丸く、螺塔がより高く、色も明るいことで、生殖器は陰茎本体と鞭状器がほぼ同長かつ短いことで区別される。

分布の概要：慶良間諸島と渡名喜島の固有種。
 近縁な種及び群との分布状況の比較：沖縄島にはシュリマイマイとミヤコマイマイ、久米島にはそれに加えてリュウキュウヒダリマキマイマイも棲息するが、間に位置する渡名喜島や慶良間諸島では本種以外ほとんど確認されていない。

生態的特徴：林床の倒木下や落葉下に棲息する地上棲種である。草地にも死殻がよく見られ、棲息場所として利用している可能性が高い。

生息地の条件：同上。
 個体数の動向：過去の記録が乏しく、動向の把握は困難。近年では台風などの影響で森林の荒廃が目立つこともあり、増加しているとは考えにくい。

現在の生息状況：渡名喜島では産地が極めて限定的であり、明治期の山焼きで大打撃を受けて以来、未だに回復できてないと推定される。慶良間諸島では死殻は各所で確認できるが、その数と比べて生貝は少なく、密度は高くない。

〈貝類〉

学術的意義・評価 : 未記載種。系統的にシュリマイマイとリュウキュウヒダリマキマイマイの間に位置する種であり、進化的にも重要。

生存に対する脅威 : 渡名喜島の現状が示す通り、人間活動による棲息環境の破壊が最大の脅威となっている。座間味島では草刈り後の地面にウロコケマイマイやヒラセアツブタガイなどととも本種の殻が散在していたことがあり、森林伐採だけでなく、草地の開発や縮小も本種の棲息域を狭める可能性が高い。

特記事項 : 渡嘉敷島ではミヤコマイマイまたはシュリマイマイの記録もあり、移入または混棲している可能性がある。

参考文献 : 知念盛俊, 1978. 阿嘉・慶留間・屋嘉比島の陸・淡水貝類. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第12集 ケラマジカ実態調査報告 III”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 163-170.

福田 宏・青柳 克・亀田勇一, 2017. 沖縄県渡名喜島の非海産貝類相. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

亀田勇一, 2017. シュリマイマイ類 (腹足綱: ナンバンマイマイ科) の分布と国内移入状況. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

黒住耐二, 1981. 慶良間列島座間味村の陸産貝類相. *沖縄生物学会誌*, 19: 47-51.

執筆者名 : 亀田勇一

和名 : **イボイボナメクジ属の一種 (1)**

分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 アシヒダナメクジ上科 ホソアシヒダナメクジ科

学名 : *Granulilimax* sp. 1

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 小型のナメクジで、体長は約2 cmで、体は細い。背面には細かい顆粒状の突起が密生し、表面は粘液で覆われない。背面は茶褐色で、正中線に沿って不明瞭な黒い縦帯があり、正中線上にも弱い縦帯が出現することもある。頭触角は短く、小触角は白くて先端が僅かに二分する。

近似種との区別 : 近似種とは生殖器の形態で区別されるが、外見上での識別は極めて困難。与那国島に分布域が限定される。

分布の概要 : 与那国島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 宮古島に *G. sp. 3*、西表島に *G. sp. 2* が分布し、台湾にも未記載種が生息する。

生態的特徴 : 広葉樹林の湿った落葉下や石の下に生息する。肉食性で他の陸産貝類を捕食する。

生息地の条件 : 林床の湿度が保たれていることが必須。

個体数の動向 : かつて与那国島では多産したが、森林の乾燥化により激減した。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 本科は琉球列島で多くの固有種に分化しており、生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、餌となる陸産貝類の減少。

特記事項 : 未記載種。

執筆者名 : 上島 励

和名 : **イボイボナメクジ属の一種 (3)**

分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 アシヒダナメクジ上科 ホソアシヒダナメクジ科

学名 : *Granulilimax* sp. 3

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 47. 撮影 : 上島励。

形態 : 小型のナメクジで、体長は約2 cmで、細い。背面には細かい顆粒状の突起が密生し、表面は粘液で覆われない。背面は茶褐色で、正中線に沿って不明瞭な黒い縦帯がある。頭触角は短く、小触角は白くて先端が僅かに二分する。

近似種との区別 : 近似種とは生殖器の形態で区別されるが、外見上での識別は極めて困難。宮古島に分布域が限定される。

分布の概要 : 宮古島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 与那国島に *G. sp. 1*、西表島に *G. sp. 2* が分布し、台湾にも未記載種が生息する。

生態的特徴 : 広葉樹林の湿った落葉下や石の下に生息する。肉食性で他の陸産貝類を捕食する。

生息地の条件 : 林床の湿度が保たれていることが必須。

個体数の動向 : 過去の記録がないので、不明。

現在の生息状況 : 個体数は少ない。

学術的意義・評価 : 本科は琉球列島で多くの固有種に分化しており、生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、餌となる陸産貝類の減少。

執筆者名 : 上島 励

和名 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (3)
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 アシヒダナメクジ上科 ホソアシヒダナメクジ科
 学名 : Rathouisiidae gen. & sp. 3
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 該当なし

図の解説 : p. 47. 撮影 : 上島 励
 形態 : 中型のナメクジで、体長は4 cm前後で、本科としてはやや大きく、太い。背面には細かい顆粒状の突起が密生し、表面は粘液で覆われない。背面は紫がかつた灰色で、細かく不規則な茶色い斑点が多数ある。頭触角は短く、小触角は白くて先端が僅かに二又する。

近似種との区別 : 宮古島から西表島に分布するホソアシヒダナメクジ科の一種 (2) に酷似するが、生殖器の形態が異なる。

分布の概要 : 与那国島にのみ分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (1) が奄美大島から久米島に、ホソアシヒダナメクジ科の一種 (2) が宮古島から西表島に分布する。

生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下や石の下に生息する。肉食性で他の陸産貝類を捕食する。

生息地の条件 : 林床の湿度が高いことが必須。

個体数の動向 : かつては多くみられたが、森林の乾燥化により激減した。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 本科は琉球列島で多くの固有種に分化しており、生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、餌となる陸産貝類の減少。

特記事項 : 未記載種。

執筆者名 : 上島 励

和名 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (4)
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 アシヒダナメクジ上科 ホソアシヒダナメクジ科
 学名 : Rathouisiidae gen. & sp. 4
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 該当なし

図の解説 : p. 47. 撮影 : 上島 励
 形態 : 小型のナメクジで、体長は3 cm前後で、本科としてはやや太い。背面には細かい顆粒状の突起が密生し、表面は粘液で覆われない。背面は淡褐色で、細かい斑点が多数ある。頭触角は短く、小触角は白くて先端が僅かに二又する。

近似種との区別 : 外見はホソアシヒダナメクジ科の一種 (1) に似るが、生殖器の構造が異なる。

分布の概要 : 沖縄島の固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (6) は沖縄島北部、ホソアシヒダナメクジ科の一種 (5) は八重山諸島に分布する。

生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下や石の下に生息する。肉食性で他の陸産貝類を捕食する。

生息地の条件 : 林床の湿度が高いことが必須。

個体数の動向 : 過去のデータがないので不明であるが、至適な生息環境が減少しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況 : 分布範囲は狭く、個体数も少ない。

学術的意義・評価 : 本科は琉球列島で多くの固有種に分化しており、生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、餌となる陸産貝類の減少。

特記事項 : 未記載種。

執筆者名 : 上島 励

和名 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (6)
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 アシヒダナメクジ上科 ホソアシヒダナメクジ科
 学名 : Rathouisiidae gen. & sp. 6
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 該当なし

図の解説 : p. 48. 撮影 : 上島 励
 形態 : 小型のナメクジで、体長は2.5 cm前後で、本科としては細い。背面には細かい顆粒状の突起が密生し、表面は粘液で覆われない。背面は黒色で、斑点や帯はなく、腹面は白色。頭触角は短く、小触角は白くて先端が僅かに二又する。

近似種との区別 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (4) とは体が細く、背面が黒いことで区別できる。ホソアシヒダナメクジ科の一種 (5) は外見が酷似するが、生殖器の形態が異なる。

分布の概要 : 沖縄島北部にのみ生息する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (5) は八重山諸島に分布する。
生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下や石の下に生息する。肉食性で他の陸産貝類を捕食する。
生息地の条件 : 林床の湿度が高いことが必須。
個体数の動向 : 過去のデータがないので不明であるが、至適な生息環境が減少しているため、個体数も減少していると思われる。
現在の生息状況 : 分布域が狭く、個体数はきわめて少ない。
学術的意義・評価 : 本科は琉球列島で多くの固有種に分化しており、生物地理学的に重要である。
生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、餌となる陸産貝類の減少。
特記事項 : 未記載種。
執筆者名 : 上島 励

和名 : ナラビオカミミガイ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Auriculastra duplicata* (Pfeiffer, 1855)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻長 5 mm、殻径 3 mm。殻は卵形で厚く不透明、鈍い光沢を帯びた淡黄色で色帯を欠く。縫合下に微細顆粒列がある。殻口外唇内側は僅かに肥厚する。内唇前方に 1 個の強いパリエタル歯を持ち、軸唇の褶は前後に 2 つ並ぶ。沖縄島産個体は本州～九州産よりやや小型、淡色で、輪郭はより楕円形に近く、軸唇の襞もより小さいため、遺伝的に異なる系統の可能性がある。

近似種との区別 : ナガオカミミガイとナズミガイは殻の色と質感が似るが、殻形で容易に区別される。
分布の概要 : 三河湾～九州、沖縄島 (塩屋湾、羽地内海、今帰仁村大井川河口)、中国大陸。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県では塩屋湾、羽地内海、大井川河口に限定され、他のオカミミガイ科の種より格段に分布域が狭い。

生態的特徴 : 泥上の有機物等を摂食すると思われる。恐らく浮游幼生期を経る。
生息地の条件 : 河口汽水域マングローブの泥底または砂泥底における転石、朽木、落葉等の下に、デンジハマシノミ、ウルシヌリハマシノミ、ナズミガイ等と共に見られる。

個体数の動向 : 塩屋湾・羽地内海・大井川河口のいずれも、近年のマングローブや転石地の消失に伴い、年々棲息範囲が狭められている。

現在の生息状況 : 場所によっては今も個体数は少なくないが、そもそも産地が 2 つの湾と 1 河口にしか存在しないので、環境変化が生じると容易に絶滅しかねない。

学術的意義・評価 : 本州～九州のナラビオカミミガイと同種か別種かいまだに決着がついておらず、軟体の解剖学的比較や分子系統解析が必要である。別種ならば沖縄島北部固有種の可能性が浮上し、稀少性は飛躍的に高まる。

生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。

特記事項 : 愛知・三重・愛媛・高知各県と九州全県のレッドデータブック掲載種。
原記載 : Pfeiffer, L., 1855. Descriptions of seven species of Cyclostomacea and Auriculacea, from Mr. Cuming's collection. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1854: 150-152. (p. 151, as *Melampus duplicatus*. Type loc.: "—?")
久保 (2005) の挙げた「原記載」は本種とは無関係である。

参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島 羽地内海 (名護市屋我地島南岸/名護市羽地～国頭郡今帰仁村我部井). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114.
福田 宏・久保弘文・木村昭一, 2012. ナラビオカミミガイ沖縄型. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 92.
木村昭一, 2014. ナラビオカミミガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 311.
久保弘文, 2005. ナラビオカミミガイ沖縄型. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 364-365.
増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : サカマキオカミミガイ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Blauneria leonardi* Crosse, 1872
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形 態 : 殻長 5 mm、殻径 1.7 mm。殻は左巻、前後に長い紡錘形、殻表は成長脈以外は平滑、光沢が強く、無色半透明。殻頂は鈍く尖り、胎殻は異旋する。殻口外唇は肥厚せず、内唇のパリエタル歯は 1 個で、軸唇に低い褶を 1 個持つ。
- 近似種との区別 : 日本産オカミミガイ科中、唯一の左旋種で、近似する種はない。
- 分布の概要 : 沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、グアム、パラオ、フィリピン、ニューカレドニア。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属の他種はカリブ海に *B. heteroclitia* (Montagu, 1808) が知られるのみ。
- 生態的特徴 : 湿潤な環境の朽木や泥上の、有機物等を摂食すると考えられる。胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。
- 生息地の条件 : 河口マングローブ林周辺の塩性湿地において、中潮帯の湿った砂泥底に棲息し、転石等遮蔽物が豊富な環境に限られる。崩れかけた朽木や転石下に潜み、多くの場合カドカドガイ属と同所的に見られる。
- 個体数の動向 : 1990 年代前半まで沖縄島の羽地内海や佐敷湿地では少なくなかったが、その後両産地とも護岸造成や乾燥化等で急減または消滅した。宮古島の島尻や久松でもマングローブ公園造成や乾燥等のため大半が壊滅した。石垣島・西表島でも局所的で、個体数は少ない。
- 現在の生息状況 : 国内の現存産地は合計 10 箇所以下で、そのすべてが狭く小規模である。
- 学術的意義・評価 : 沖縄県は本種の世界的北限分布域であり、他国でも記録例は少ない。
- 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸、道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、水質・土壌汚染。特に、塩性湿地の朽木や廃棄されたビニール袋等の漂着物が撤去・焼却されると、個体群に致命的打撃を与えることがある。温暖化に伴う湿地の乾燥化も懸念される。さらに、国内産個体は稀少価値が高く、標本蒐集家や販売業者が乱獲する恐れがある。
- 特記事項 : 本種の学名は *B. quadrasi* Moellendorff in Quadras & Moellendorff, 1895 とされることが多いが、これは *B. leonardi* の異名と考えられる。
- 原 記 載 : Crosse, H., 1872. Diagnoses molluscorum Novae Caledoniae incolarum. Journal de Conchyliologie, 20: 69-75. (p. 71, as *Blauneria Leonardi*. Type loc.: "in vicinio civitatis Noumea dictae, Novae Caledoniae")
 Quadras, J.F. & Moellendorff, O.F. von, 1895. Diagnoses specierum novarum ex insulis Philippinis. Nachrichtenblatt der Deutschen Malakozoologischen Gesellschaft, 27: 73-88. (p. 76, as *Blauneria quadrasi*. Type loc.: "in insula Masbate")
- 参 考 文 献 : Crosse, H., 1872. Description d'espèces inédites provenant de la Nouvelle-Calédonie. Journal de Conchyliologie, 20: 349-359, pl. 16.
 Franc, A., 1956. Mollusques terrestres et fluviatiles de l'archipel Néo-Calédonien. Mémoires du Muséum National d'Histoire Naturelle, Nouvelle Série, Série A Zoologie, 13: 1-197, pls 1-9.
 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島 羽地内海 (名護市屋我地島南岸/名護市羽地~国頭郡今帰仁村 我部井); 宮古島 平良市久松漁港 (久貝)~久松松原. "日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状", 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114-115.
 木村昭一, 2000. 宮古島のオカミミガイ科貝類相. ちりぼたん, 31: 69-81.
 久保弘文, 2005. サカマキオカミミガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) -レッドデータおきなわ-", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 431.
 久保弘文, 2012. サカマキオカミミガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 92.
 久保弘文, 2014. サカマキオカミミガイ. "レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 312.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執 筆 者 名 : 福田 宏・久保弘文

- 和 名 : 大東諸島のスジケシガイ類似種
- 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
- 学 名 : *Carychium* sp.
- カ テ ゴ リ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 図 の 解 説 : p. 48. 北大東島. 撮影 : 久保弘文。
- 形 態 : 殻長 1.7-2.1 mm、殻径 0.9 mm、螺塔は高い円錐形で縫合はよくくびれる。殻は白色、ほぼ不透明で光沢は弱く、殻表にはやや粗い成長肋を生じるが、個体群によっては平滑。殻口はやや歪な楕円形、全縁でよく肥厚する。外唇は反転し、殻口の肥厚部をこえて外側へ広がりヒレ状となる。殻口内では内唇と外唇中ほどに歯状突起をもつ。軸唇はややねじれ、内方へやや盛り上がる。
- 近似種との区別 : 日本本土に分布するスジケシガイは本種よりも大型で、より細長くなることで区別される。琉球列島に広く分布するナガケシガイは、より細長い円筒形で光沢が強く、殻口の肥厚と外唇歯が弱いことで識別できる。
- 分布の概要 : 南北大東島のみで確認されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属の種は日本本土にケシガイ、スジケシガイ、エゾケシガイ、ニホンケシガイが、琉球列島周辺にナガケシガイが分布する。

<貝類>

生態的特徴 : 自然林内の腐植質やオオタニワタリの葉の間など、水気のある場所に群生する。
生息地の条件 : 同上。
個体数の動向 : 2015～2016年の調査では、北大東島の長幕でのみ生貝が確認された。南大東島でもドリーネ内部や幕の石灰岩礫の奥から死殻が見つかっており、最近まで棲息していたと考えられる。個体群がパッチ状に点在するために発見は容易ではないが、近年は島全体が過剰に乾燥することが多く、林床の乾燥とともに棲息できる環境も減少している可能性が高い。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 大東諸島固有種の可能性があり、分類学的・生物地理学的に重要である。
生存に対する脅威 : 森林伐採や開墾による棲息地減少に加え、近年では温暖化や過剰乾燥により棲息環境が悪化していると考えられる。また、ニューギニアヤリガタリクウズムシやツヤオオズアリなどの外来種による捕食の影響が懸念される。
特記事項 : 東・東(1994)の記録したケシガイ・スジケシガイは本種であると考えられる。
参考文献 : 東 良雄・東 正雄, 1994. 大東島の陸産貝類相. Venus, 53: 161-173.
執筆者名 : 亀田勇一

和名 : デンジハマシイノミ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Melampus (Detracia) ovuloides* Baird, 1873
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻長6mm、殻径3.5mm。殻は卵形でやや厚質、殻頂は尖り、胎殻は乳頭状に突出する。殻表は鈍い光沢と顕著な稲妻模様を持ち、紫褐色から黄褐色の個体まで色彩変異が激しい。螺層上部や体層肩部に方形の小孔列を螺状に巡らす。外唇内側に7-9個の歯状突起を持ち、内唇のパリエタル歯は1-2個で、軸唇は強くくびれ、その前方にある褶が強い牙状に突出する。頭部-腹足は灰白色で、頭触角の先端は黒い。

近似種との区別 : 南西諸島に産する *Detracia* 亜属の種は他にコメツブハマシイノミが知られるが、後種はより小形で、前後に長い紡錘形の殻を持つため識別は容易である。

分布の概要 : 沖縄島北部(塩屋湾、羽地内海)、サモア、オーストラリア北・西部。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : コメツブハマシイノミは奄美大島、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、竹富島、西表島、与那国島、台湾蘭嶼、フィリピンまでの広範囲から知られるが、本種は国内では沖縄島北部以外で全く産出例がない。

生態的特徴 : 泥上の有機物等を摂食すると思われる。胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。
生息地の条件 : 河口マングローブ辺縁高潮帯の軟泥底・砂泥底に半ば埋もれた転石下にナラビオカミミガイ、ナズミガイ、ウルシヌリハマシイノミ等と共に見られる。コメツブハマシイノミが内湾だけでなく外洋に面した海岸にも産するのに対し、本種は大規模な内湾奥のマングローブ湿地に限定される。

個体数の動向 : 国内では沖縄島北部西岸の大きな内湾からしか知られていない。1990年代までは場所によっては多産したが、もともと各個体群の規模は小さく、棲息範囲も狭かった。

現在の生息状況 : 現存産地は合計5箇所以下で、いずれも小規模であり、環境変化が生じると容易に失われかねない。特に羽地内海では最近15年間で激減し、特に1990年代に多産していた我部祖河川河口では水質悪化により壊滅状態となり、危機的状況に陥っている。

学術的意義・評価 : 沖縄島は本種の世界的北限分布地であるだけでなく、他地域から大きく隔離されており、遺伝的な差異がみられる可能性もある。

生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。

原記載 : Baird, W., 1873. Shells. "Jottings during the Cruise of H.M.S. Curaçoa among the South Sea Islands in 1865", Brenchley, J.L. (ed.), Longmas, Green & Co., London, 431-454, pls 37-42. (p. 442, pl. 39, figs 9, 10, as *Melampus (Tifata) ovuloides*. Type loc.: "Tutuila, Samoan Group")

参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島 国頭郡大宜味村塩屋 大保大川河口(塩屋湾奥)・沖縄本島 羽地内海(名護市屋我地島南岸/名護市羽地～国頭郡今帰仁村我部井). "日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状", 花輪伸一・佐久間浩子(編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 113-114.

福田 宏, 2014. デンジハマシイノミ. "レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 314.

福田 宏・木村昭一, 2012. デンジハマシイノミ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 98.

久保弘文, 2005. デンジハマシイノミガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)-レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 364.

増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相(2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : **アツクチハマシイノミ**
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
 学名 : *Melampus cristatus* Pfeiffer, 1854
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

形態 : 殻は本科の中では中型、卵形に近い紡錘形、殻表はやや光沢のある赤褐色、微細な螺条脈を多数有する。殻頂は乳頭状に突出し、殻底に臍帯をもつ。殻口内部は白く、外唇内側が極端に肥厚し、内唇軸に強く明瞭な1つの襞と弱い襞が数個並び、外唇内側には細かい歯が多数並ぶ。殻長7~12mm。
 近似種との区別 : ハマシイノミ類は近似種が多いが、本種は殻頂が乳頭状に突出し、殻口外唇内側が著しく肥厚することから区別される。
 分布の概要 : 沖縄島、先島諸島。
 生態的特徴 : ハマシイノミ類中、最も隠蔽的生態を有し、表面的な観察では外部から容易に確認できない。
 生息地の条件 : マングローブからサンゴ礁性岩礁域まで広く分布するが、自然海岸が残存し、豊かな海岸植相に覆われ、かつ土壤微粒子による目詰まりの無い岩礫集積地のみ棲息する。生息場所の殆どが局所的である。
 個体数の動向 : 沖縄島では1990年代前半に糸満市などサンゴ礁海岸でごく稀に確認されたが、現在、自然海岸が大きく消失し、殆ど確認されない。宮古島島尻マングローブ林に隣接する生息地は埋め立てにより消滅した。石垣島、西表島では極めて狭い範囲にごく稀に見いだされる。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 熱帯域の潮間帯中上部に著しく適応放散した海棲有肺類の一員であり、進化生態学的に重要である他、海陸の狭間における極めて脆弱な環境の指標種として保全生物学的価値が極めて大きい。
 生存に対する脅威 : 自然海岸の消失、陸域からの土壤微粒子の大量流入と沈積による岩礫間隙の閉塞。
 原記載 : Pfeiffer, L., 1854. Descriptions of six new species of Auriculacea, from the collection of H. Cuming, Esq. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1854: 121-122. (p. 122, no. 5, as *Melampus cristatus*. Type loc.: "Philippine Islands")
 参考文献 : 木村昭一, 2000. 宮古島のオカミミガイ科貝類相. ちりぼたん, 31(3): 69-81.
 木村昭一, 2014. アツクチハマシイノミガイ. "レッドデータブック2014, ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 94.
 久保弘文, 2005. アツクチハマシイノミガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 477-478.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

執筆 者 名 : 久保弘文

和名 : **ウルシヌリハマシイノミ**
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
 学名 : *Melampus nucleolus* Martens, 1865
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻長11mm、殻径7mm。殻はやや角張った卵形で厚く、殻表は鈍い光沢を帯び、濃紫褐色~赤褐色。殻口外唇内側が顕著に肥厚し、その上に約10個の歯状突起が並んで畝状となり殻口を著しく狭める。内唇に2~3個のパリエタル歯を持ち、軸唇の褶は低いが明瞭。
 近似種との区別 : 類似するハマシイノミよりは小型、チビハマシイノミよりは大型で、どちらと比べても螺塔がやや低く、殻口外唇内側の肥厚が甚大なことと、体層殻底に弱い螺溝を数本巡らすことで識別される。
 分布の概要 : 沖縄島北部 (塩屋湾、羽地内海、大浦湾)、宮古島、石垣島、西表島、タイ、アンボン島、セラム島。福田・木村 (2012) と福田 (2014) が挙げた「久米島」は誤記で、同島での確実な記録はまだない。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 南西諸島産河口棲ハマシイノミ属の中では、ホソハマシイノミ、チビハマシイノミ、ヌノメハマシイノミ等と比べて格段に産地数・個体数が少なく、局所的に産する。
 生態的特徴 : 泥上の有機物等を摂食すると思われる。胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。
 生息地の条件 : 河口マングローブ辺縁高潮帯の軟泥底・砂泥底へ半ば埋もれた転石下に、ナズミガイ、ナラビオカミミガイ、デンジハマシイノミ、オウトウハマシイノミ、ニワタズミハマシイノミ等と共に見られる。
 個体数の動向 : かつて比較的高密度で棲息していた沖縄島大保大川 (塩屋湾奥) と大浦川の河口では、近年マングローブ及び転石地の一部がそれぞれ消失し、本種の棲息範囲も著しく縮小した。宮古島島尻の産地も1998年から始まったマングローブ遊歩道整備事業に伴う開発により失われた。
 現在の生息状況 : 現存産地は合計15箇所以下で、その大半が小規模であり、環境変化が生じると容易に失われかねない。
 学術的意義・評価 : 沖縄県は本種の分布の世界的北限である。
 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壤汚染。

- 特記事項 : 従来国内の文献では本種の種小名を *nucleus* と綴っていたが、正しくは *nucleolus* である。
- 原記載 : Martens, E. von, 1865. Über neue Landschnecken aus Ost-indien und über zwei Seesterne von Costa-Rica. Monatsberichte der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1865: 51-59. (p. 55, as *Melampus nucleolus*. Type loc.: “Amboina und Ceram”)
- 参考文献 : 久保 (2005) の挙げた「原記載」は本種とは無関係である。
- 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島 国頭郡大宜味村塩屋 大保大川河口 (塩屋湾奥); 沖縄本島東北岸 国頭郡東村慶佐次 (慶佐次川河口)~名護市大浦 (大浦川河口)~金武町 (億首川河口); 宮古島 平良市久松漁港 (久貝)~久松松原. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 113-115.
- 福田 宏, 2014. ウルシヌリハマシノミ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 314.
- 福田 宏・木村昭一, 2012. ウルシヌリハマシノミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 99.
- 木村昭一, 2000. 宮古島のオカミミガイ科貝類相. ちりぼたん, 31(3): 69-81.
- 久保弘文, 2005. ウルシヌリハマシノミガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 363-364.
- 増田 修・内山りゆう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
- 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆 者 名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : ニワタズミハマシノミ
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
 学名 : *Melampus sculptus* Pfeiffer, 1859
 カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU)

形態 : 殻長 12 mm、殻径 6 mm。殻は砲弾形で殻頂は尖り、硬質堅固、殻皮は鈍い光沢を持ち、レモン色からチョコレート色、殻頂から体層の中程まで顕著な縦肋を刻む。殻口外唇は多少肥厚するものの概して薄く、内側に4~9個の歯を持ち、内唇に小さなパリエタル歯を3個、軸唇に1個の低い褶を持つ。

近似種との区別 : 砲弾形の殻形と強い縦肋は日本産ハマシノミ属の中でも比類のない特徴で、他種との区別は容易。ホソハマシノミは殻形が似るが縦肋を欠き、幅広い色帯を巡らす個体が多い。スジハマシノミは殻頂附近に縦肋を持つが体層になく、殻形が卵形で、殻色は薄紫色の個体が多い。

分布の概要 : 沖縄島、久米島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島、東南アジア、ハワイ、ニューカレドニア。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 南西諸島産河口棲ハマシノミ属の中では、ホソハマシノミ、チビハマシノミ、ヌノメハマシノミ等と比べて格段に産地数・個体数が少なく、局所的に産する。キヌメハマシノミよりさらに少ない。

生態的特徴 : 泥上の有機物等を摂食すると思われる。胎殻の形態から推測して、恐らく浮游幼生期を経る。
 生息地の条件 : 河口マングローブ辺縁高潮帯の軟泥底・砂泥底に半ば埋もれた岩石や朽木・落葉等の下に棲息し、ナズミガイ、ウルシヌリハマシノミ、オウトウハマシノミ等と共に見られる。

個体数の動向 : ウルシヌリハマシノミと同様、国内の産地数・個体数ともに少ない種で、近年は特に沖縄島でマングローブの縮小に伴い減少傾向が強い。

現在の生息状況 : 宮古島、石垣島、西表島では現在も健全な産地が認められるが、小規模な河口に形成された個体群が多く棲息範囲も狭い。久米島では稀産である。

学術的意義・評価 : 沖縄県は本種の分布の世界的北限である。
 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀕海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。

特記事項 : 学名の記載年を1850、1855とした文献が多いが、1859が正しい。また和名は「ニハタズミ〜」「ニハタズミ〜」と記されることがあるが現代仮名遣いではニワタズミが正しい。

原記載 : Pfeiffer, L., 1859. Descriptions of two new species of *Melampus*, from Mr. Cuming's Collection. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1859: 29-30. (pp. 29-30, as *Melampus sculptus*. Type loc.: “Admiralty Islands”)

- 参考文献 : 久保 (2005) の挙げた「原記載」は本種とは無関係である。
- 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島東北岸 国頭郡東村慶佐次 (慶佐次川河口)~名護市大浦 (大浦川河口)~金武町 (億首川河口); 宮古島 平良市久松漁港 (久貝)~久松松原; 石垣島 宮良川 (石垣市宮良)・磯辺川河口 (石垣市磯辺). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114-115.
- 福田 宏, 2014. ニワタズミハマシノミ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 315.
- 福田 宏・久保弘文・木村昭一, 2012. ニワタズミハマシノミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 99.
- 木村昭一, 2000. 宮古島のオカミミガイ科貝類相. ちりぼたん, 31(3): 69-81.
- 久保弘文, 2005. ニハタズミハマシノミガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 363-364.

物編) -レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 362.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆 者 名 : 福田 宏・久保弘文

和 名 : キヌメハマシイノミ
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
 学 名 : *Melampus sulculosus* Martens, 1865
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 殻長 12 mm、殻径 7 mm。殻は卵形でやや薄く、淡黄色～茶褐色で、2～5本の螺旋色帯をもつ個体はトリコハマシイノミと呼ばれていたが色彩変異 (つまり異名) に過ぎない。殻表は縫合下で毛状突起となる殻皮で覆われ、光沢を欠き、多数の細い螺旋溝を巡らす。殻口外唇は薄く、内側に弱い歯状突起が5～8個並ぶ。内唇に3～4個のリエタル歯を持つがこれらも貧弱である一方、軸唇の褶は強い。

近似種との区別 : ヌノメハマシイノミは殻表で顕著な螺旋溝と成長脈が交わって格子目状彫刻を成す。オウトウハマシイノミは殻表に光沢があり、体層の中央部に螺旋溝を欠く。本州～九州に産するキヌカツギハマシイノミはより小形で、殻長に対する殻径の割合が大きいの。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、アンボン島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 南西諸島産河口棲ハマシイノミ属の中では、ウルシヌリハマシイノミ、ニワタズミハマシイノミ、オウトウハマシイノミと比べると産地数がやや多いが、ホソハマシイノミ、チビハマシイノミ、ヌノメハマシイノミ等よりは格段に少ない。

生態的特徴 : 泥上の有機物等を摂食すると思われる。胎殻の形態から推測して恐らく浮游幼生期を経る。

生息地の条件 : 河口マングローブ辺縁高潮帯の軟泥底・砂泥底において、転石や崩れかけた朽木の下部に見られる。

個体数の動向 : 1990年代には稀産と言われていたが、近年南西諸島各地から個体群が見出されている。しかし人為的攪乱の少ないマングローブ湿地にのみ見られ、どの産地でも棲息密度が低いため、依然として普通種とは言いがたい。

現在の生息状況 : 現存産地は合計20箇所以下で、その大半が小規模であり、環境変化が生じると容易に失われかねない。

学術的意義・評価 : 沖縄県をはじめ、奄美諸島を含む南西諸島は本種の世界的な北限分布域である。

生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。

特記事項 : 鹿児島県レッドリストに絶滅危惧Ⅰ類として掲載されている。IUCNカテゴリー: Least Concern (LC)。

原 記 載 : Martens, E. von, 1865. Über neue Landschnecken aus Ost-indien und über zwei Seesterne von Costa-Rica. Monatsberichte der Königlichen Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1865: 51-59. (p. 55, as *Melampus sulculosus*. Type loc.: “Amboina, an der Mündung des Weynitu-Flüsschens mit der vorigen [= in the mouth of the Weynitu Rivulet with the previous (*M. nucleolus*)]”)
 久保 (2005) の挙げた「原記載」は本種とは無関係である。

参 考 文 献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島東北岸 国頭郡東村慶佐次 (慶佐次川河口)～名護市大浦 (大浦川河口)～金武町 (億首川河口). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114.

福田 宏・久保弘文, 2012. キヌメハマシイノミ (トリコハマシイノミ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 100.

木村昭一, 2000. 宮古島のオカミミガイ科貝類相. ちりぼたん, 31(3): 69-81.

久保弘文, 2005. キヌメハマシイノミガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) -レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 430.

久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.

増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆 者 名 : 福田 宏・久保弘文

和 名 : オウトウハマシイノミ
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
 学 名 : *Melampus* sp.
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態** : 殻長 8.5 mm、殻径 4.8 mm。殻は卵形でヌノメハマシノミに似るが、体層の中程は弱い成長脈を除き平滑で、螺肋は縫合下と殻底に限られる。螺層上部と体層の縫合下では螺肋と縦肋が交わって格子目状をなす。殻頂は乳頭状に突出する。殻表は鈍い光沢があり、淡桃色または淡茶褐色で、時に不明瞭な茶褐色の色帯を巡らす。外唇は薄く、内側に 4~11 個の歯を具え、内唇に 4 個の細かいパリエタル歯、軸唇に 1 個の低い褶を持つ。
- 近似種との区別** : キヌメハマシノミは殻表全体に細かい螺肋を巡らし、光沢を欠く。ヌノメハマシノミは殻表全体で顕著な螺溝と成長脈が交わって格子目状彫刻を成す。チビハマシノミや本州~九州に産するキヌカツギハマシノミはより小形で、殻長に対する殻径の割合が大きく、殻表に螺肋を持たない。
- 分布の概要** : 沖縄島、宮古島、伊良部島、石垣島、西表島。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較** : 南西諸島産河口棲ハマシノミ属の中では、ホソハマシノミ、チビハマシノミ、ヌノメハマシノミ等と比べて格段に産地数・個体数が少なく、局所的に産する。キヌメハマシノミよりさらに少ない。
- 生態的特徴** : 泥上の有機物等を摂食すると思われる。胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。
- 生息地の条件** : 河口マングローブ辺縁高潮帯の砂泥底へ半ば埋もれた転石下に、サカマキオカミミガイ、ヒメシノミミミガイ、ニワタズミハマシノミ、キヌメハマシノミ等と共に見られる。
- 個体数の動向** : 沖縄島と伊良部島では少なく、宮古島、石垣島、西表島が国内最大の産地であるが、ニワタズミハマシノミ同様大半の個体群が小規模な河口に形成され、棲息範囲も狭い。
- 現在の生息状況** : 沖縄島豊見城市与根の産地は 1997 年に埋立てられて消失し、同様に河口や海岸の改変によって壊滅した個体群は多数に上ると思われる。
- 学術的意義・評価** : 東南アジアから既に記載されている可能性もあるが現時点で適切な学名を見出すに至っていない。
- 生存に対する脅威** : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。
- 参考文献** : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 宮古島 平良市久松漁港 (久貝)~久松松原; 石垣島 宮良川 (石垣市宮良)・磯辺川河口 (石垣市磯辺). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114-115.
 福田 宏, 2012. オウトウハマシノミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 100.
 福田 宏, 2014. オウトウハマシノミ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 316.
 木村昭一, 2000. 宮古島のオカミミガイ科貝類相. ちりぼたん, 31(3): 69-81.
 久保弘文, 2005. オウトウハマシノミガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) —レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 363.
 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : コデマリナギサノシタタリ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Microtralia* sp.
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) **環境省カテゴリー** : 準絶滅危惧 (NT)

図の解説 : p. 48. 標本: 石垣島. 生体: 宮古島久松. 撮影: 木村昭一氏 (標本), 福田 宏 (生体).
形態 : 殻長 5 mm、殻径 3 mm。殻は卵形、薄く半透明で光沢が強く、桃色、黄褐色または白色。殻頂は尖る。幼貝では明瞭な螺溝を殻表全面に巡らす。成貝では殻底のみ顕著となる。殻口外唇は薄く単純、内唇に 2 個のパリエタル歯、軸唇に強い褶を 1 個持つ。胎殻は異旋し、乳頭状に突出する。頭部・腹足は無色半透明、頭触角は太短く扁平で、先端が篋状に広がり、内側基部にごく小さな黒い眼がある。蹠面は前足と後足に溝で分たれる。

近似種との区別 : ナギサノシタタリは殻がより前後に細長くて螺塔が高く、殻色は常に白く、桃色や黄褐色の個体は現れない。また後種の頭触角は細く、先端の尖る針状を呈す。

分布の概要 : 宮古島、石垣島、西表島、与那国島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種は先島諸島のみで確認されているのに対し、ナギサノシタタリは北海道~沖縄県 (沖縄島、久米島など) に産するだけでなく、ニューカレドニアの *M. alba* (Gassies, 1865)、ニュージーランドの *M. insularis* (Powell, 1933)、北米大西洋岸の *M. ovulum* (Pfeiffer, 1840) とともに区別が困難で、南北両半球の太平洋のみならず大西洋まで、極端に広く分布する可能性がある。

生態的特徴 : 胎殻の形態から推測して、恐らく浮游幼生期を経る。

生息地の条件 : 内湾のマングローブ湿地辺縁や、外洋に面した海岸石灰岩礁 (特に海蝕洞内) において、飛沫帯の水分を多く含む砂泥・軟泥に埋もれた転石の下に見られる。カドカドガイ属やサカマキオカミミガイ等と随伴することが多い。

個体数の動向 : 産地はいまだ数箇所しか知られておらず、分布は著しく局所的で、個体数も少ない。
現在の生息状況 : どの産地も狭く小規模で、宮古島等では最近の埋立で消滅した産地もある。
学術的意義・評価 : 国外からの報告は見当たらず、未記載種にして先島諸島固有種の可能性が濃厚。ナギサノシタタリは極端に分布が広い可能性があるのと好対照である。
生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、水質・土壌汚染。
参考文献 : 福田 宏・青柳 克, 2017. 沖縄県渡名喜島の非海産貝類相. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
 早瀬善正・増田 修, 1997. 石垣島産ナギサノシタタリガイの近似種. *かいなかま*, 31(1): 1-2.
 木村昭一, 2000. 宮古島のオカミミガイ科貝類相. *ちりぼたん*, 31(3): 69-81.
 木村昭一・福田 宏, 2012. コデマリナギサノシタタリ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 100.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. *ピーシーズ*, 横浜, 240 pp.
 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆 者 名 : 福田 宏

和名 : ヒメヒラシイノミ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Pythia nana* Bavay, 1908
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻長 15 mm、殻径 9 mm。殻はやや薄く、背腹に扁平された零形で、殻頂は尖る。茶褐色の地に濃色の不規則な雲状模様を散らす。殻口外唇内側に 3 個前後の低い歯状突起を並べ、内唇に 2 個の牙状のパリエタル歯、軸唇に強い褶を持つ。

近似種との区別 : 日本産ヒラシイノミ属中、最も小さく細長い殻を持つ。
分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、北大東島、南大東島、多良間島、西表島、与那国島、台湾。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本のこの属の種はどれも分布が不連続である。大東諸島と与那国島では本種のみ知られる。

生態的特徴 : 生活史は未詳だが、直達発生の可能性はある。
生息地の条件 : 内湾のマングローブ湿地辺縁や、外洋に面した海岸石灰岩岩礁において、飛沫帯上部～瀬海陸地の植物根元、朽木・転石下に見られる。
個体数の動向 : 局所的に産し、奄美大島、大東諸島、多良間島、与那国島では海岸飛沫帯、西表島ではマングローブに限られる。沖縄島では両方の環境に産する。
現在の生息状況 : どの産地も狭く小規模で、特に西表島では危機的である。大東諸島では死殻しか確認できない産地も存在する。
学術的意義・評価 : 島ごとに別種の可能性もあり、詳細な検討が必要。
生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。

特記事項 : 鹿児島県レッドリストに絶滅危惧Ⅰ類として掲載。
原記載 : Bavay, A., 1908. Une nouvelle espèce de *Pythia* trouvée aux Liu-Kiu (Loochoo). *The Conchological Magazine* (Kyoto), 2: 1-2. (pp. 1-2, textfig., as *Pythia nana*. Type loc.: “Loochoo Insulas”)
参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
 木村昭一, 2012. ヒメヒラシイノミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 101.
 久保弘文・黒住耐二, 1995. 生態/検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 那覇, 264 pp.
 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブック—レッドデータおきなわ— 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—3. 北大東島・南大東島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
 黒住耐二, 1992. 北大東島の陸産貝類. “ダイトウオオコウモリ—保護対策緊急調査報告書. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第31集”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 73-90.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. *ピーシーズ*, 横浜, 240 pp.
 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆 者 名 : 福田 宏

和名 : コンゴウイシマテ
分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 イガイ目 イガイ上科 イガイ科
学名 : *Lithophaga canalifera* (Hanley, 1844)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

〈貝類〉

- 図の解説 : p. 48. 糸満市. 撮影: 久保弘文.
形態 : 殻は本科では中型、細長い砲弾型で、最後部はやや尖る。殻表は前部に光沢がある褐色の殻皮があるが、後部から背部は厚く石灰化し、それが放射状かつ矢羽状の彫刻となる。
近似種との区別 : 背部に見られる石灰質沈着の彫刻が特有で、他種と明瞭に区別される。
分布の概要 : 和歌山県以南、県内では沖縄島南部（既知産地は糸満市のみ）。中国南部、オーストラリア。
生態的特徴 : 岩盤に穿孔し、ろ過食性と考えられる。
生息地の条件 : 非常に潮通しが良く、かつ陸水の影響を少なからず受ける潮間帯中部の硬化した泥岩に穿孔する。
個体数の動向 : 1990年代～2005年頃までは個体数は少ないが確認されてきた。しかし、2016年7月に実施した調査では同箇所からは全く確認出来なかった。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 極めて記録の少ない稀少なイシマテ類であり、分類学的にも、生物多様性の観点からも非常に重要である。
生存に対する脅威 : 既往産地においては富栄養によるアナアオサの被覆、腐敗などで岩盤表面への悪影響が懸念され、周辺海域では埋立て等海岸改変も著しく、潮流の変化や停滞などの影響も減少要因として否定できない。
特記事項 : 希少種であることや、穿孔性で確認しにくいことなどから他所での記録が全くない。
原記載 : Hanley, S., 1844. Descriptions of new species of Mytilacea, &c. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1844: 14–18. (pp. 16–17, as *Lithodomus canaliferus*. Type loc.: “Found in rocks, isle of Zebu”)
参考文献 : Huber, M., 2010, Compendium of bivalves 1. A Full-Color Guide to 3'300 of the World's Marine Bivalves: A Status on Bivalvia after 250 Years of Research, ConcBooks, Hackenheim, 901 pp.
Okutani, T. & Matsukuma, A., 2004. A supplement to a Catalogue of Molluscs of Wakayama Prefecture, the province of Kii — 1. Bivalvia, Scaphopoda and Cephalopoda. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, Special Publication Series, 7: 1–51.
王禎瑞, 1997. 中国動物志 軟体動物門 双殻綱 貽貝目. 科学出版社, 北京, 268 pp., 16 pls.
執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ヌバタママクラ**
分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 イガイ目 イガイ上科 イガイ科
学名 : *Modiolus aratus* (Dunker, 1857)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態 : 最大殻長約 60 mm。横長箱形の二枚貝類で、黒色の殻皮を纏う。貝殻後端の肩部が明瞭に角張る。ヌバタマ（射干玉）とは植物（ヒオウギ）の黒い種のこと。殻は薄く、殻内は銀白色。
近似種との区別 : 類似種ホソスジヒバリ、サザナミマクラは後端の形態が異なるほか、貝殻中央に淡色の帯があり、染分け状になることから区別される。
分布の概要 : 奄美大島、沖縄島羽地内海、石垣島名蔵湾、西表島、インド・太平洋。
生態的特徴 : 足糸で礫に固着し、他のイガイ類と同様、主に植物プランクトンを鰓でろ過して摂食すると推測される。
生息地の条件 : 内湾の中潮線のコアマモ等アマモ類が繁茂する砂礫～泥礫底で、潜砂深度は非常に浅く、表在的に棲息する。
個体数の動向 : 沖縄島では羽地内海に稀に生息していたが、2008年に少数個体が確認されているが、それ以降の調査では未見である。先島諸島では個体数は少ないながら、1999年～2008年頃まで台風後の打上げ等で確認されてきた。
現在の生息状況 : 本種は元々垂直分布の幅が狭く、本来の生息密度が低い。沖縄島羽地内海では2005年以降まったく見つかっておらず、2010年以降、石垣島でも報告例がない。
学術的意義・評価 : 南西諸島が分布の北限で、奄美から八重山まで広く分布するが記録が少なく、散在的で、生物地理学的に興味深い分布パターンを有している。
生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変によるアマモ場の消失、陸域からの過剰栄養負荷による水質汚濁や底質悪化。
原記載 : Dunker, G., 1857. Mytilacea nova collectionis Cumingianae. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1856: 358–366. (p. 361, no. 10, as *Volsella arata*. Type loc.: “In Novae Hollandiae litore septentrionali”)
参考文献 : 久保弘文, 2012. ヌバタママクラ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 107.
久保弘文, 2014. ヌバタママクラ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 383.
名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1–44.
名和 純, 2005. ヌバタママクラ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 336–337.
執筆者名 : 久保弘文・亀田勇一

和名 : **サザナミマクラ**
分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 イガイ目 イガイ上科 イガイ科
学名 : *Modiolus flavidus* (Dunker, 1856)

カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

形態： 殻長 3~6 cm。前後に長く伸びた形状。殻は薄く、後縁部は丸みを帯びる。殻頂から後縁にかけ薄い筋が入る。

近似種との区別： 同属のホソスジヒバリガイ、ヌバタママクラとは殻の背側が突出せず丸みを帯びること、リュウキュウヒバリガイとは殻皮毛を欠くことにより容易に区別できる。

分布の概要： 沖縄全域 (海草藻場)。

生態的特徴： 内湾の潮間帯以深に発達する海草藻場に生息する。

生息地の条件： 清浄な海草藻場の細砂泥底。同所的に近縁種のホソスジヒバリガイも見られるが、本種の密度は極めて低い。

現在の生息状況： 沿岸域の改変による海草藻場の消滅や縮小により、個体数は減少傾向にあると考えられる。

学術的意義・評価： 恩納村屋嘉田海域では大型化する本種の変異型か、あるいは非常に近縁の別種が確認されており、分類等の検討に資する情報収集が待たれる。

生存に対する脅威： 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。

原記載： Dunker, G., 1856. Mytilacea nova collectionis Cumingianae.. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1856: 358-366. (pp.364-365, no. 21, as *Volsella flavida*. Type loc.: "In sinu ad Manilam")

参考文献： 久保弘文, 2005. サザナミマクラ. "改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)-レッドデータおきなわ-", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 445.

久保弘文, 2012. サザナミマクラ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 107.

執筆者名： 小澤宏之

和名： **ホソスジヒバリガイ**

分類： 二枚貝綱 翼型亜綱 イガイ目 イガイ上科 イガイ科

学名： *Modiolus philippinarum* (Hanley, 1843)

方言名： スベンガル (屋我地島)

カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

形態： 殻長 10 cm。前後に長く伸びた形状。殻は薄く、後縁部に殻皮毛を有する個体もいる。

近似種との区別： 同属のサザナミマクラが同様の環境に生息するが、本種はより大型で、前背縁がより突出する。

分布の概要： 沖縄島、久米島、先島諸島 (波照間島や与那国島等、大規模藻場の発達しない小島を除く)。

生態的特徴： 低潮線から水深 5 m 前後の海草藻場に半埋生し生息する。足糸を用いて海草類の地下茎やサンゴ礁などに固着する。成貝の殻皮毛には、しばしば幼若個体が付着しているのが観察される。食用種のため、潮間帯では採取圧が高い。

生息地の条件： リュウキュウスガモなどの大型海草類が優占する海草藻場。潮下帯の海草藻場では、同所的にリュウキュウサルボウが見られることが多い。

個体数の動向： 金武湾の採取圧の無い水深 3 m 前後の海草藻場では、老成個体が 32 個体/m² の高密度で生息していた (2003 年)。現状は不明。

現在の生息状況： 沿岸域の改変による海草藻場の消滅や縮小により、特に個体数は減少傾向にある。

学術的意義・評価： 潮間帯付近では、乱獲による影響を受けていると考えられる。資源管理の取り組みが必要。

生存に対する脅威： 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。

原記載： Hanley, S., 1842-1856. An Illustrated and Descriptive Catalogue of Recent Bivalve Shells. Williams and Norgate, London, xviii+392pp., pls.26. (p.235, pl.24, fig.26, as *Modiola Philippinarum*. Type loc.: "Philippines")

参考文献： 久保弘文, 2012. ホソスジヒバリ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 108.

名和 純, 2005. ホソスジヒバリガイ. "改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)-レッドデータおきなわ-", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 444.

執筆者名： 小澤宏之

和名： **スエヒロガイ**

分類： 二枚貝綱 翼型亜綱 カキ目 ハボウキ上科 ハボウキ科

学名： *Pinna atropurpurea* Sowerby I, 1825

方言名： キラブイ、トゥイミナー、タバクイナー

カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態： 最大殻長 40 cm に達する大型の鋭角亜三角形の二枚貝類。幼貝期の貝殻は非常に薄く、透明感のある灰褐色~紫褐色だが、老成すると厚く、緑褐色~紫褐色で、内面に鈍い真珠層が発達する。殻頂部の貝殻表面は剥離しやすく、時に真珠層が露出する。背縁は蝶番が全域に及ぶ。腹縁下部より足糸を伸ばし、砂泥中の地物や小石を付着させる。生時は干潟に半ば埋生した形で直立している。

〈貝類〉

- 近似種との区別 : 日本本土温帯域の内湾に分布するハボウキガイと非常に類似しているが、ハボウキガイは鳥羽状に薄く伸びて、殻全体のプロポーションが細く長いことから区別される。
- 分布の概要 : 奄美大島・沖縄島・フィリピン、インド・太平洋（宮古・八重山には分布しない）、東アフリカ
- 生態的特徴 : る過食性と考えられるが、繁殖や生理などの情報はほとんど無い。
- 生息地の条件 : 潮間帯中部～低潮線直下を中心として、潮通しのよい大規模干潟のアマモ場とそれに隣接する砂泥～砂礫底に生息する。
- 個体数の動向 : 大きく目立つことから、食用種として地元で潮干狩りの獲物となっており、とりわけ中城湾、羽地内海では乱獲され、大型個体が著しく減少した。
- 現在の生息状況 : 羽地内海では現在も、乱獲が継続しており、林立していた大型個体は、確認すら困難な状況にまで減少している。沖縄市泡瀬では埋立て後の干潟攪乱で減少したが、羽地内海ほどの壊滅的状況では無いため、これらを早急に保護あるいは資源管理する必要がある。
- 学術的意義・評価 : 北琉球の島嶼で隔離分布し、遺伝的分化が生じている可能性があり、生物地理学的に重要な個体群であると考えられる。2016年の奄美大島海峡での調査でも、本種は著しく減少しており、広範囲に棲息する沖縄島個体群の保全は一層重要となっている。なお、東アフリカから広く分布する本種が、なぜ先島諸島のみで欠落するかについては、大型種で、干潟に直立する生態を鑑み、過去3000年に約150～400年周期で5回も襲来したとされる先島諸島での大津波の影響も考えられる。
- 生存に対する脅威 : 食用目的での乱獲、埋立てや海岸改変による干潟の消失。
- 原 記 載 : Sowerby, G.B. I., 1825. A Catalogue of the Shells Contained in the Collection of the late Earl of Tankerville, Arranged According to the Lamarckian Conchological System; Together with an Appendix, Containing Descriptions of Many New Species. E.J. Stirling, London, vii+92+xxxiv pp., 8 pls. (p. v (in Appendix), no. 531a, as *Pinna atro-purpurea*. Type loc. not designated)
- 参 考 文 献 : Araoka, D., Yokoyama, Y., Suzuki, A., Goto, K., Miyagi, K., Miyazawa, K., Matsuzaki, H., & Kawahata, H., 2013. Tsunami recurrence revealed by *Porites* coral boulders in the southern Ryukyu Islands, Japan. *Geology*, 41: 919–922.
羽地内海の自然を守り育む会, 2008. 羽地内海うむするむん図鑑 羽地内海の多様な生きもの
人々の暮らし. 羽地内海の自然を守り育む会, 名護, 43 pp.
久保弘文, 2014. スエヒロガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 387.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : **サンゴガキ**
分 類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 カキ目 イタボガキ上科 イタボガキ科
学 名 : *Anomiostrea coralliophila* Habe, 1975
カ テ ゴ リ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

- 形 態 : 殻は本科中では小型で最大殻長約 30 mm。左右の殻は形態が異なり、右殻は平たく、左殻はお碗型で、両殻共に殻表には多数の放射肋を刻む。閉殻筋痕は楕円形で大きく、右殻では右側に偏在する。貝殻内面は白色で、周縁は刻まれる。
- 近似種との区別 : 類似した生息環境に見られるチャウンガキとは、殻表の放射肋によって区別できる。
- 分布の概要 : 沖縄島（名護市辺野古・羽地内海・大宜味村、糸満市）、フィリピン、インドネシア、中国（海南島）。
- 生態的特徴 : 埋れ石下に棲むスナモグリ類 *Neocallichirus jousseaumei* との共生関係が指摘されている。
- 生息地の条件 : 中～低潮線のアマモ場に隣接する砂泥～砂礫域の埋もれた岩下に生息する。しかし岩の下部に硫化水素が発生するような還元した環境では死滅していることが多く、生息できないと考えられる。
- 個体数の動向 : 羽地内海では泥質化した埋れ石下に生息場所が局所的に形成され、2014年調査では、生貝が数個体確認されている。
- 現在の生息状況 : 現在、沖縄島周辺では、都市下水や畜産排水等の富栄養化により、埋もれ岩下の環境は還元化しており、生存が脅かされている。埋立てによっても、沖縄島中南部を中心に生息地が多く消失している。
- 学術的意義・評価 : スナモグリの一種との共生関係や、埋れ石下環境への適応等特異な生態から学術的に重要な貝類であるが、分類学的にも正確な所属が未だ不詳である。
- 生存に対する脅威 : 生息場所である埋れ石下環境の都市・畜産排水など富栄養化や赤土沈積による悪化。埋立てによる生息場所の消失。
- 特 記 事 項 : 分類学的位置を不確定とする見解（稲葉・鳥越, 2004）もあるが、本稿では Huber (2010) に従った。
- 原 記 載 : Adams, A. & Reeve, L.A., 1850. Mollusca. “The Zoology of the Voyage of H.M.S. Samarang; under the Command of Captain Sir Edward Belcher, C.B., F.R.A.S., F.G.S., during the Years 1843–1846”, Adams, A. (ed.), Reeve & Benham, London, i-x, 1–87, pls 1–24. (p. 72, pl. 21, fig. 19, as *Ostrea pyxidata*. Type loc.: “Philippine Islands”)
Habe, T., 1975. New name for *Anomiostrea pyxidata* (Adams & Reeve) (Ostreidae). *Venus*, 33(4): 184. (p. 184, as *Anomiostrea coralliophila* (a replacement name for *Ostrea pyxidata* Adams & Reeve, 1850, not of Born, 1780))
- 参 考 文 献 : Goto, R., Ohsuga, K., & Kato, M., 2014. Mode of life of *Anomiostrea coralliophila* Habe, 1975 (Ostreidae): a symbiotic oyster living in ghost-shrimp burrows. *Journal of Molluscan Studies*, 80: 201–205.
Huber, M., 2010. Compendium of Bivalves. A Full-color Guide to 3,300 of the World's Marine Bivalves, ConchBooks, Hackenheim, 901 pp.
稲葉明彦・鳥越兼治, 2004. 世界のカキ (2) 各論. 西宮市貝類館研究報告, (3): 1–63, pls 1–13.

久保弘文 2012. サンゴガキ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 111.
 久保弘文, 2014. サンゴガキ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 385.
 名和 純, 2005. サンゴガキ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 319.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ミナミマガキ**
 分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 カキ目 イタボガキ上科 イタボガキ科
 学名 : *Crassostrea bilineata* (Röding, 1798)
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻高 9 cm 前後。殻は長卵形で、筋痕は濃黒紫色、周縁は丸みを帯び、黄金色や濃紫色で縁取られる。左殻 (固着面) は極めて厚くなる。殻表はタイヤなどに固着するものは鱗状輪肋が発達する個体が多く、岩盤では平滑な個体が多いが、形態変異は非常に大きい。

分布の概要 : 沖縄島 (塩屋湾、羽地内海、大浦湾、豊見城市瀬長島)。
 生態的特徴 : 内湾域に発達する干潟の中潮帯から低潮帯の岩礫地や干潟上の人工構造物などに固着。
 生息地の条件 : 干潟の大型の転石や、破棄された人工物 (タイヤやコンクリート塊) などに固着する。生息面積は狭いが、生息環境では高密度で分布する。生息地では殻高 10 cm を超える大型の死殻が見られるがそのサイズの生貝は見られない。

個体数の動向 : 沖縄島の羽地内海、塩屋湾では、内湾干潟の転石帯や廃棄されたコンクリート塊 (橋脚) などに高密度で固着している。

現在の生息状況 : 沖縄島の金武湾、漫湖、西表島では現在は見られない (山下, 2012)。生息地は減少傾向にある。
 生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。

原記載 : Chemnitz, J. H., 1785. Neues systematisches Conchylien-Cabinet. 8 Bd. Bey Gabriel Nikolaus Raspe, Nürnberg. 372pp., 102pls. (p.19, pl.71, fig.660, as *Ostrea parasitica* ... [not binominal]. Loc: “Indiae orientalis”)
 Röding, P. F., 1798. Museum Boltenianum sive Catalogus cimeliorum e tribus regnis naturae quae olim collegerat Joa. Fried. Bolten. Pars Secunda continens Conchylia sive Testacea univalvia, bivalvia & multivalvia. Typis Joh. Christi. Trappii, Hamburgi., viii+199pp. (p.170, no.166, as *Ostrea bilineata*. Type loc. not designated; described for Chemnitz, 1785: 19, pl.71, fig.660)

参考文献 : 稲葉明彦・鳥越兼治, 2004. 世界のカキ (2) 各論. 西宮市貝類館研究報告, (3): 1-63, pls. 1-13.
 山下博由, 2012. ミナミマガキ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 112.
 山下博由, 2014. ミナミマガキ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 386.

執筆者名 : 小澤宏之

和名 : **ウチワガイ**
 分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 フネガイ目 フネガイ上科 ベンケイガイ科
 学名 : *Tucetona auriflua* (Reeve, 1843)
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻長約 4 cm、やや縦長の亜円形の二枚貝類。殻質は厚く、殻表に白と褐色の雲状彩あるいは斑状彩と放射肋がある。内面は褐彫され、周縁は刻まれる。

近似種との区別 : 近似種ソメワケグリは放射肋が弱く、ほぼ平滑であり、明確に区別される。
 分布の概要 : 奄美諸島、沖縄島および周辺離島、先島諸島、フィリピン、インドネシア。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同所的に見られるソメワケグリは個体数も多く、単調で、やや攪乱された底質環境にも出現する。

生態的特徴 : 確認個体の多くが成貝で若貝が殆ど見られないことから、成長が遅いか、再生産能力が乏しい種と推測される。その他、詳細な生態は不明。

生息地の条件 : やや外洋に面した潮通しのよいアマモ場周辺やその沖合の細砂底～水深 20 m 付近までの礫砂～細砂礫底に確認される。

個体数の動向 : 1990 年頃まで沖縄周辺ではサンゴ砂由来の極めて清浄な砂浜が少なからず存在し、本種はそのような場所が生息場所であったが、その後、海浜改変による砂浜そのものの消失、陸土流出等による底質の泥質化により、現在は生息確認が困難となった。さらに沖合域の細砂底では海砂採取等による底質の攪乱があり、本種の生息数は大きく減少している。

現在の生息状況 : 本種は南西諸島に広く分布するが、浅海域面積の広い先島諸島では個体数密度は非常に低い。本種の主な生息域である潮下帯直下の清浄な粗砂底は泥質化や砂利採取により、著しく攪乱され、確実に棲息確認が可能な場所はほとんど無い。

学術的意義・評価 : 本種のような沖縄全域に広く分布し、垂直分布範囲も比較的大きい種であっても、加入後に健全に生育可能な場の悪化や消失が進行し、明らかに減少している種については、環境適応力が非常に小

さい可能性があり、生理、成長、繁殖等生物学的情報の集積・解明が重要であると考えられる。

生存に対する脅威 : 埋立て、陸土流出等による底質の泥質化、沖合域での海砂採取等による底質の攪乱。

原 記 載 : Reeve, L.A., 1843. Monograph of the genus *Pectunculus*. *Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals*, 1: pls 1-9. (sp. 17, pl. 4, fig. 17a-b, as *Pectunculus aurifluus*. Type loc.: "Island of Capul, Philippines (found in coral sand upon the reefs)")

参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ウチワガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 111.
久保弘文, 2014. ウチワガイ. "レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 385.
松隈明彦, 2000. タマキガイ科. "日本近海産貝類図鑑", 奥谷喬司(編), 東海大学出版会, 東京, 858-861.
水間八重・山下博由, 2002. 泡瀬干潟における機械による大規模な海草移植実験の現状について-主に海草場に生息する貝類に注目して-. 九州の貝, (59): 42-62.
名和 純, 2005. ウチワガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)-レッドデータおきなわ-", 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 335-336.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : ウミギク
分 類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 イタヤガイ目 イタヤガイ上科 ウミギク科
学 名 : *Spondylus barbatus* (Reeve, 1856)
方 言 名 : ブッタラフー、ピシミンナー
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 : 殻長 10 cm に達し、和名は海の菊という意味で、殻表に鈍い棘を放射状に多数突出させる。基本的には膨らみのある扇形だが、右殻で岩や岩礫に固着し、固着した岩の表面形状に合わせて、変形する。

近似種との区別 : シロトゲウミギクは殻の地色が赤褐色で、棘のみが白色となり、ヤブスマウミギクは全体が茶褐色を帯び、棘が短い。ミヒカリメンガイは棘が尖って短く、殻頂部に黒紫色の班紋を有する。メンガイはミヒカリメンガイと似るが、棘の発達が悪い。

分布の概要 : 房総半島以南 奄美大島(大島海峡)、沖縄島(羽地内海・塩屋湾・金武湾、中城湾)、中国大陸南部、フィリピン。

生態的特徴 : 海水毎、植物プランクトン等を吸い込んで、鰓でろ過して摂食する。稚貝期に足糸で付着した後、石灰化を行い、固着する。

生息地の条件 : 栄養が豊富でかつ潮通しの良い内湾の潮間帯中部～水深 20 メートル付近までの岩礫に固着。

個体数の動向 : 羽地内海は本種の最も高密度分布する生息域で、1990 年代には市場で流通する程、多産し、運天水路では低潮線の全ての岩礫下に本種が固着していたと言っても過言では無い。しかし、2000 年以降、乱獲によって個体数減少が進んでいる。

現在の生息状況 : 羽地内海では食用による乱獲により、著しく減少している。泡瀬では埋立てで生息場所が大きく減少し、金武湾では泥質化が進行し、減少傾向にある。しかし、上部浅海帯まで生息域が広がっており、刺網の混獲物などでも確認される。

学術的意義・評価 : ウミギク類は形が不定型で、特にサンゴ礁域では種数が多く、分類学的課題が多い。ウミギクは温帯に広く分布し、沖縄個体群の生物地理的起源の解明が必要である。

生存に対する脅威 : 食用による過剰な乱獲と埋立てによる直接的な生息場所消失が最大の脅威であるが、亜潮間帯における海底の泥質化も、付着基質である岩礫や貝殻が泥に埋没し、生息数が減少すると考えられる。

特 記 事 項 : 分類学的にウミギク科には不詳種が多く、日本本土のウミギクと同種かどうか検討を要する。

原 記 載 : Reeve, L.A., 1856. Monograph of the genus *Spondylus*. *Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals*, 9: pls 1-18. (sp. 16, pl. 4, fig. 16, as *Spondylus barbatus*. Type loc.: "Philippine Islands")

参 考 文 献 : 羽地内海の自然を守り育む会, 2008. 羽地内海うむるむん図鑑 羽地内海の多様な生きものと人々の暮らし. 羽地内海の自然を守り育む会, 名護, 43 pp.
名和 純, 2005. ウミギク. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)-レッドデータおきなわ-", 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 446.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : オキナガイ
分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 異靱帯上目 スエモノガイ上科 オキナガイ科
学 名 : *Laternula anatina* (Linnaeus, 1758)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 : 殻長約 3 cm、後端の細まった横長の楕円形。殻は非常に薄く、殻表は細顆粒を付着させる。貝殻後端は上部に反りかえり、裁断状で開口する。内面は弱い真珠光沢がある。

- 近似種との区別 : ソトオリガイは後端がやや狭まる点で類似するが、後端が反り返らず、殻高が低く、殻の膨らみも弱い。
- 分布の概要 : 本州～九州の内湾域および中国大陸沿岸、石垣島、西表島。
- 生態的特徴 : 近縁グループのソトオリガイ類はプランクトンのみならず陸起源の有機物を消化できる酵素を持っているとされるが、本種は生息場所がより開放的なアマモ場砂泥域にあるため、プランクトン食である可能性もある。
- 生息地の条件 : 潮通しの良いアマモ場周辺のリーフ水路や窪地の砂泥底。
- 個体数の動向 : 石垣島、西表島で確認されているが、名蔵湾等確認箇所が限定される上、個体数も非常に少ない。最新の記録でも2006年にさかのぼり、新川川から観音崎にかけての約4 kmの海岸線でのみ確認されている。本海岸は、1990年代から2015年に至るまで、富栄養のため、アナアオサが大量に堆積し、底質悪化が継続している。
- 学術的意義・評価 : 沖縄島および周辺離島から記録がない。
- 生存に対する脅威 : アマモ場の人為的攪乱、陸土の大量流入や都市排水などの水質汚濁による清浄環境の消失が生育阻害をもたらしている。
- 原 記 載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome I, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 673, as *Solen anatinus*. Type loc.: "O. Asiatici")
- 参 考 文 献 : 名和 純, 2005. オキナガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 400.
- 奥谷喬司, 2000. オキナガイ科. “日本近海産貝類図鑑”, 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 1036-1037.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文・福田 宏

- 和 名 : **ウラキツキガイ**
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ツキガイ目 ツキガイ上科 ツキガイ科
- 学 名 : *Codakia paytenorum* (Iredale, 1937)
- 方 言 名 : アカウツジナ (宮古島久貝・松原)
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)
- 形 態 : 殻長6 cm程度に達する満月型の白い二枚貝類。貝殻は厚みがあり、全面に均等な細い放射溝を有し、貝殻内面は周縁が鮮やかな紅色で、中央は黄色を呈する。
- 近似種との区別 : クチベニツキガイも同様に周縁が紅色を呈するが、より大型で膨らみが弱く、放射肋が太いことで区別される。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島、熱帯太平洋。
- 生態的特徴 : ツキガイ類は化学合成細菌との共生関係により異化的に栄養摂取することが知られている。
- 生息地の条件 : やや外洋に面した潮通しのよいアマモ場周辺の細砂～細砂礫質干潟に生息するが、通常は垂直分布が狭く、低潮線以深では生息密度が低い。宮古島等の生息状況からみると、地下浸透水や河川水の伏流等が存在する場所に生息場所が形成され、海底湧水が存在する環境では水深数 m の潮下帯に生息場所が局所的もしくは帯状に形成されることがある。
- 個体数の動向 : 1970～80年代まで、宮古島沿岸の重要な水産物であったが、1990年代に沿岸域の大規模改変による干潟環境の悪化に伴って激減した。沖縄島でも個体数密度は低く、生息数が大幅に減少している。
- 現在の生息状況 : 沖縄島では恩納村屋嘉田、沖縄市泡瀬等で小規模な個体群が生存している程度で、宮古島では依然壊滅的な状況が続いている。石垣島、西表島等火山性島嶼では元々個体数が少ない。
- 学術的意義・評価 : 水産上有用種であるほか、生息場所の特徴から海底湧水などの冷泉を利用している可能性が高く、生態学的に重要な研究対象と考えられる。
- 生存に対する脅威 : 海底湧水の水質悪化、堰き止め、赤土など微粒子の清浄砂底域への沈積による底質悪化。
- 原 記 載 : Iredale, T., 1937. Mollusca. The Middleton and Elisabeth Reefs, South Pacific Ocean. Australian Zoologist, 8(4): 232-261. (pp. 240-241, pl. 16, figs 2-3, as *Lentillaria paytenorum*. Type loc.: "Lord Howe Island")
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ウラキツキガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 117.
- 久保弘文, 2014. ウラキツキガイ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 390.
- 名和 純, 2005. ウラキツキガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 448-449.
- Taylor, J. & Glover, E.A., 2006. Lucinidae (Bivalvia) - the most diverse group of chemosymbiotic molluscs. Zoological Journal of the Linnean Society, 148(3): 421-438.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : **クチベニツキガイ**
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ツキガイ目 ツキガイ上科 ツキガイ科
- 学 名 : *Codakia punctata* (Linnaeus, 1758)

〈貝類〉

- カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 該当なし
- 形態： 殻長 10 cm 程度に達する満月形の白い二枚貝類。貝殻は厚みがあり、全面に均等な浅く広い放射肋を有し、貝殻内面は周縁が鮮やかな紅色を呈する。
- 近似種との区別： ウラキツギガイも同様に周縁が紅色を呈するが、より小型で膨らみが強く、放射肋が細いことで区別される。
- 分布の概要： 奄美大島、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島、ミクロネシア、フィリピン、インド・太平洋。
- 生態的特徴： ツキガイ類は化学合成細菌との共生関係により異化的に栄養摂取することが知られている。
- 生息地の条件： リーフ内の水深 1~20m 付近までの潮通しの良い砂礫~細砂底に棲息し、与那国島比川、恩納村瀬良垣等では海底湧水が存在する場所で多産した事例がある。
- 個体数の動向： 1970 年頃のオールドコレクションには頻出するが、1990 年代前半には恩納村、沖縄市泡瀬、本部町瀬底島、名護湾、宮古島などで散見される程度で、2000 年以降、古い死殻は見つかるが、新鮮な合弁個体は全く確認されなくなり、現在、極めて稀な二枚貝となってしまった。
- 学術的意義・評価： 生息場所の特徴から海底湧水などの冷泉を利用している可能性が高く、生態学的に重要な研究対象と考えられる。
- 生存に対する脅威： 海底湧水の水質悪化、堰き止め、赤土など微粒子の清浄砂底域への沈積による底質悪化。
- 原記載： Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 688, as *Venus punctata*. Type loc.: "O. indicio")
- 参考文献： 名和 純, 2005. クチベニツキガイ. "沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 448.
- Taylor, J. & Glover, E.A., 2006. Lucinidae (Bivalvia) - the most diverse group of chemosymbiotic molluscs. Zoological Journal of the Linnean Society, 148(3): 421-438.
- 執筆者名： 久保弘文

- 和名： カゴガイ
- 分類： 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ツキガイ目 ツキガイ上科 ツキガイ科
- 学名： *Fimbria soverbii* (Reeve, 1841)
- カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態： 殻長 90 mm に達する厚質大型の二枚貝類で、亜球形。成長輪肋が規則正しく刻まれ、細い放射肋と交差して籠状となる。
- 近似種との区別： 国内において近似種は無いが、より南方系のチヂミカゴガイは成長輪肋が縮れることから区別できる。
- 分布の概要： 高知県土佐沖ノ島以南、南西諸島、インド・太平洋。
- 生態的特徴： ツキガイ類は鰓葉等にバクテリアを共生させる種もあるが、本種は表在性で、ろ過食であると推測される。
- 生息地の条件： 潮通しのよいアマモ場やその周辺~沖合の水深 60 m 付近までの清浄な細砂~砂底に浅く埋在する。
- 個体数の動向： 中城湾では沖縄市泡瀬のアマモ場や砂質干潟に、少なからず生体が観察された。しかし、その後、当地区では大規模な埋立てがあり、一時期、多くの新鮮な死殻が認められ、その後、2011 年の調査では生貝はごく希にしか認められなくなった。元来、奄美・沖縄周辺ではサンゴ砂由来の極めて清浄な砂底域が多く存在していたが、近年、海浜改変による砂浜そのものの消失や赤土流入等による底質の泥質化が進行している。さらに沖合域水深 40~60 m 付近までの細砂底でも海砂採取等による底質の攪乱があり、本種の生息環境は著しく悪化し、個体数が激減していると考えられる。
- 現在の生息状況： 沖縄島 (中城湾) では沖縄市泡瀬のアマモ場では 2014~2015 年の調査時点では大規模攪乱による劣悪な状態は継続していた。
- 学術的意義・評価： ツキガイ類は化学合成細菌との共生や形態の特殊化など進化生物学的に近年、注目されており、本種についてもツキガイ類との共通の派生形質を持つことから、研究対象として注目される。
- 生存に対する脅威： 埋立て、海砂利採取などの大規模な海浜改変や海底攪乱、土壌微粒子の大量流入による底質の泥質化の進行が更なる個体数の現象をもたらす。
- 特記事項： 近年の研究では概ねカゴガイ科はツキガイ科に併合されている。
- 原記載： Reeve, L.A., 1841. Conchologia systematica, or Complete System of Conchology: in which the Lepades and conchiferous Mollusca are described and classified according to their natural organization and habits. Vol. 1. Longman, Brown, Green and Longmans, London, vi+195 pp., 129 pls, 1 table. (p. 81, pl. 58, figs 4-6, as *Corbis Soverbii*. Type loc. not designated)
- 参考文献： 久保弘文, 2012. カゴガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 117.
- 久保弘文, 2014. カゴガイ. "レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 391.
- 名和 純, 2005. カゴガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 386-387.

執筆者名：久保弘文

和名：アケボノガイ
 分類：二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
 学名：*Barrimysia cumingii* (A. Adams, 1856)
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態：殻は本科中、大型でやや厚く、幅広く膨らみのある扇形、殻表は殻頂部では平滑で光沢があるが、周縁部は緑褐色の殻皮をまとう。殻色は淡灰褐色～灰桃色。最大殻長約 25 mm。

近似種との区別：明瞭に大型な本種との近似種はない。

分布の概要：奄美大島、沖縄島および周辺離島、宮古島諸島、八重山諸島。

生態的特徴：アナエビ類との共生関係があるが、プランクトン等をろ過して摂食すると考えられる。軟体部が鮮紅色を呈することからヘモグロビンを保有していると考えられる。

生息地の条件：潮通しの良いサンゴ礁域に連続する自然度の保たれたアマモ場の深く埋まった岩盤下（埋れ石下）に生息し、殆ど移動しない。通常、アナエビ類が同居する。

個体数の動向：1990年代には羽地外海や糸満市南部、2005年頃までは石垣島底地湾、名蔵湾北岸の一部などに健全な生息状態が確認された。

現在の生息状況：埋れ石下の貝類の中で、潮通しが良く、かつ栄養に富んだ干潟やアマモ場に棲息し、現在、そういった場所の多くが、都市化や農業（肥料）、畜産排水等による富栄養、陸土微粒子の沈積によって無酸素化や目詰まりをおこし、場そのものが死の空間と化している。こうした状況は沖縄島中南部のみならず、人口密度の低い多良間島に至るまで、県下全域の広範囲に進行している。

学術的意義・評価：ウロコガイ類は熱帯・亜熱帯に様々な無脊椎動物との共生関係を成立させ、多岐にわたる種が分化しており、本種の場合も埋れ石下環境のアナエビ巣穴を利用する共生関係も含め、進化生態学的に重要な研究対象である。

生存に対する脅威：埋立てによる生息場所消失、富栄養や陸土過剰流入による海底空隙の環境悪化や閉塞が最大の脅威である。

原記載：Adams, A., 1856. Descriptions of thirty-four new species of bivalve Mollusca (*Leda*, *Nucula*, and *Pythina*) from the Cumingian Collection. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1856: 47-53. (p. 47, as *Pythina Cumingii*. Type loc.: "Gindulman, Isle of Bohol, sandy mud, 8 fathoms; Himmamailan, Isle of Negros, sandy mud, 3 fathoms")

参考文献：久保弘文, 2005. アケボノガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）—レッドデータおきなわ—", 沖縄県文化環境部自然保護課（編），沖縄県文化環境部自然保護課，那覇，446-447.
 久保弘文, 2012. アケボノガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会（編），東海大学出版会，秦野，155.
 久保弘文, 2014. アケボノガイ. "レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），ぎょうせい，東京，408.
 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版，浦添，263 pp.

執筆者名：久保弘文

和名：ヨコヅナケボリ（新称）
 分類：二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
 学名：*Borniopsis* sp.
 カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー：該当なし

図の解説：p. 48. 石垣島川平湾. 撮影：久保弘文。

形態：本科中、大型で殻長 17 mm、殻高 10 mm に達する。横長の亜三角型で、膨らみはやや弱い。殻頂はほぼ中央から、僅かに前よりに位置する。殻表には細かな成長脈と明瞭な毛彫り状放射肋を刻み、淡褐色の殻皮を纏う。

近似種との区別：セワケガイより横長でナタマメケボリより殻高が高い、いわば中間的な形態を有するが、非常に大型化することで区別できる。外観的にはヨーロッパ産の *Pseudopythina macandrewi* (P. Fischer, 1867) に酷似する。

分布の概要：既知産地は石垣島川平湾のみ。

生態的特徴：何らかの共生関係が推測されるが、不明。

生息地の条件：湾奥干潟の潮間帯下部の砂泥～砂礫底に生息する。

個体数の動向：川平湾奥の干潟から見いだされた未記載種と考えられる希少種である。2010年以降の5年にわたるモニタリングでは死殻は毎年確認されているが、生体は2年間の計3個体が確認されたに過ぎない。川平湾はかつて貝類の宝庫として知られていたが、現在は様々な人的要因と考えられる底質悪化で、危機的状況にあり、本種の中でも重要な保全対象種と考える。

現在の生息状況：現在、棲息が確認されている面積は広く見積もっても約10haに過ぎない。

学術的意義・評価：ウロコガイ類は他の無脊椎動物と共生関係を成立させ、熱帯・亜熱帯に多岐にわたる種が分化しており、進化生態学的に重要。

生存に対する脅威：埋立て。陸域からの土壌微粒子の過剰流入や過剰な栄養負荷による底質悪化。

〈貝類〉

- 特記事項 : 本種生息場所は沖縄県漁業調整規則で指定された保護水面にあたる。共生生態が不明で、希少種であり、棲息面積が著しく狭いため、保全の予防原則から絶滅危惧Ⅱ類 (VU) とした。
- 参考文献 : Huber, M., 2015. Compendium of Bivalves, 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
- Morton, B.S. & Scott, P.H., 1989. The Hong Kong Galeommatacea (Mollusca: Bivalvia) and their hosts, with descriptions of new species. Asian Marine Biology, 6: 129–160.
- 執筆者名 : 久保弘文

和名 : セワケガイ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
学名 : *Byssobornia adamsi* (Yokoyama, 1924)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態 : 殻は本科中、中型でやや薄く、やや角張った扁平な扇形、殻表は錆色の殻皮をまとい、殻表は中央から左右に分かれる微顆粒を伴う放射肋を多数刻む。殻皮をはがした場合の殻色は白色。最大殻長 10 mm 程度。
- 近似種との区別 : 錆色の殻皮をもつ点でナタマメケボリと類似するが、より殻高が高く、角張った殻形であることから区別される。
- 分布の概要 : 日本本土温帯域 (太平洋側の内湾域)、奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島。
- 生態的特徴 : 泥岩や泥質干潟の石下にすむが、ユムシ類と同居し、共生生態を有する。
- 生息地の条件 : 岩礁が多い内湾で、かつ潮通しのよい低潮線付近の岩礫～泥礫底に確認されている。
- 個体数の動向 : 1990年代には金武湾、羽地内海、大浦湾、2005年頃には名蔵湾などで健全な個体群が確認されている。
- 現在の生息状況 : 2012年以降、沖縄島羽地内海での調査では生貝の棲息が全く記録されず、金武湾でも確認事例が無い。沖縄島中南部では埋立てによる生息場所の消失も大きい。
- 学術的意義・評価 : ウロコガイ類は熱帯・亜熱帯に様々な無脊椎動物との共生関係を成立させ、多岐にわたる種が分化しており、本種の場合も埋れ石下環境のユムシ類巣穴を利用する共生関係も含め、進化生態学的に重要な研究対象である。
- 生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所消失、富栄養や陸土過剰流入による海底空隙の環境悪化や閉塞が最大の脅威である。
- 原記載 : Yokoyama, M., 1924. Mollusca from the Coral-Bed of Awa. The Journal of the College of Science, Imperial University of Tōkyō, 45(1): 1–62, i–iii, pls 1–54. (pp. 47–48, no. 86, pl. 4, figs 3–4, as *Galeomma adamsi*. Type loc.: “Numa”)
- 参考文献 : Goto, R., Kawakita, A., Ishikawa, H., Hamamura, Y. & Kato, M., 2012. Molecular phylogeny of the bivalve superfamily Galeommatoidea (Heterodonta, Veneroida) reveals dynamic evolution of symbiotic lifestyle and interphylum host switching. BMC Evolutionary Biology, 12: 172.
- 久保弘文, 2005. セワケガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 447.
- 久保弘文, 2012. セワケガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 156.
- 久保弘文, 2014. セワケガイ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 410.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : オオツヤウロコガイ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
学名 : *Ehippodonta gigas* Kubo, 1996
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態 : 殻は本科中、大型で薄く、扁平な幅広い扇形、殻表は平滑で光沢があり、純白色。最大殻長 20 mm 程度。
- 近似種との区別 : ミナミウロコガイと類似するが、本種は大型で彫刻がなく、区別される。
- 分布の概要 : 沖縄島、石垣島、タイ国 (プーケット島)。
- 生態的特徴 : 泥岩や泥質干潟の埋れ石下にすむが、アナジャコ類等の巣穴で見られることが多く、他動物の巣穴を利用し、片利共生すると考えられる。食性はろ過食者であり、珪藻や渦鞭毛藻類を摂食すると考えられる。
- 生息地の条件 : 内湾域の潮間帯中～下部に棲息し、節足動物 (アナジャコ等) によって、造られた海底地中の空隙に棲息する。
- 個体数の動向 : 本種のタイプ産地 (豊見城市与根干潟等) は 1997 年に埋立てにより消滅し、個体群は絶滅した。2000年代に入って、糸満市の一部と羽地内海、石垣島名蔵湾で新産地が見つかった。しかし、いずれの産地も生息密度は非常に低く、陸土流入の沈積による石下の目詰まりや富栄養化によるアナア

オサの腐敗などにより、底質環境が悪化し、個体数は減少している。

学術的意義・評価 : 泥岩の空隙(巣穴)などにおいて二枚の貝殻を180度広げて、匍匐するという二枚貝類としては著しく特殊化した生態を有し、共生関係も含め、進化生態学的に重要な研究対象である。

生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所消失、陸土過剰流入による海底空隙の閉塞が最大の脅威である。

原 記 載 : Kubo, H., 1996. *Ehippodonta gigas* n.sp. (Bivalvia: Galeommatoidea) from Okinawa Island, southwestern Japan. *Venus*, 55(1): 1-5. (pp. 1-4, figs 1-6, as *Ehippodonta (Ehippodonta) gigas*. Type loc.: "Yone, Tomigusuku Village, southwestern coast of Okinawa Island, 26°08' N 127°40' E, under boulder on intertidal zone at muddy rock shore")

参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. オオツヤウロコガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)ーレッドデータおきなわー", 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 385-386.

久保弘文, 2012. オオツヤウロコガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 157.

久保弘文, 2014. オオツヤウロコガイ. "レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 411.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : **ダンダラマテガイ**

分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 無面目 マテガイ上科 マテガイ科

学 名 : *Solen kurodai* Habe, 1964

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形 態 : 最大殻長50 mm程のマテガイ類である。直線的なフォルムで、細長い。淡灰紅色と淡紅桃色の段だら模様(幅のある横縞)を有し、殻表には透明感のある褐色の殻皮を纏って、光沢がある。生時、新鮮な個体の貝殻はピンク色を帯びるが、死後は時間と共に退色する。

近似種との区別 : マテガイに似るが、より小型で、段だら模様が明瞭であるため、区別される。

分布の概要 : 日本本土温帯域(千葉県以南)、沖縄島金武湾、中城湾、羽地外海、中国に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄ではマテガイとの分布上の重複はない。

生態的特徴 : 強力な斧足を用いて、細砂〜砂に垂直に潜掘し、他のマテガイ類と同様、刺激を与えると水管を自切し、防御反応の一種と考えられる。

生息地の条件 : 潮通しの良い低潮線〜水深5 m付近までの外浜干潟やウミヒルモとそれに隣接する細砂〜砂底に生息する。

個体数の動向 : 沖縄島は南限分布地である。1990年代前半まで沖縄島東海岸の大浦湾、与那原湾、中城湾に多産したが、2000年以降に、与那原湾では埋立て、佐敷干潟は底質悪化によって消滅した。中城湾北部では泡瀬干潟の東端付近の細砂底で確認されるが、個体数は少ない。1990年代後半に金武湾照間沖水深2〜5 mに局所的な生息場所が確認されたが、その後の生息実態は不明である。名護市大浦湾では近年まで健全な個体群が見られたが、2007年頃より個体数が激減した。羽地外海ではきわめて稀である。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 沖縄島は南限かつ隔離分布地であり、遺伝的に固有集団を形成している可能性が高く、生物地理学的に極めて重要である。

生存に対する脅威 : 埋立て、アマモ場の人為的攪乱、陸土の大量流入や都市排水などの水質汚濁による清浄環境の消失。

特 記 事 項 : 愛知県レッドデータブックで絶滅危惧ⅠA類、千葉県レッドデータブックで重要保護動物(環境省や他の自治体の絶滅危惧ⅠB類に相当)に位置づけられている。

原 記 載 : Habe, T., 1964. Razor shells in Japan and its adjacent areas. *Bulletin of the National Science Museum, Tokyo*, 7(1): 7-16, pl. 1. (p. 10, pl. 1, fig. 13, as *Solen kurodai*. Type loc.: "Tanabe Bay")

参 考 文 献 : 愛知県環境部, 2015. 第3次レッドリスト レッドリストあいち2015. 愛知県環境部, 名古屋, 48 pp.

黒住耐二, 2011. ダンダラマテ. "千葉県の保護上重要な野生生物ー千葉県レッドデータブックー動物編 2011年改訂版", 千葉県レッドデータブック編集委員会(編), 千葉県環境生活部自然保護課, 千葉, 472.

名和 純, 2005. ダンダラマテガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)ーレッドデータおきなわー", 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 324-325.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : **マテガイ**

分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 無面目 マテガイ上科 マテガイ科

学 名 : *Solen strictus* Gould, 1861

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)

形 態 : 殻長8 cm。殻は細長い筒型。殻表は光沢のある殻皮に覆われている。軟体部の外套膜は黒色に縁取

<貝類>

- られ、若い個体では顕著である。
- 近似種との区別 : 沖縄県では、同所的にはジャングサマテガイやホソバラフマテガイが見られる場合があるが、これらの種と比べマテガイはより大型で直線的な形状を有すること、また外套膜の先端部が黒いバンドになることから容易に区別できる。
- 分布の概要 : 北海道南部～九州、朝鮮半島、中国（黄海・渤海）、沖縄島の羽地内海および塩屋湾。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本州周辺の砂質干潟に多産する。県内においては、沖縄島羽地内海および塩屋湾のみに分布している。
- 生態的特徴 : 干潟低潮帯の砂底～砂泥底にやや深く潜って生息する。以前は産地で若い個体が多く、老成個体が稀であったが、近年は老成個体が多産する傾向にある。
- 生息地の条件 : 砂質干潟の潮間帯下部に生息する。ウミジグサ類やウミヒルモなどの小型海藻類が優占する海草藻場でも生息が確認されている。
- 個体数の動向 : 羽地内海では、成貝が 32 個体/m²の密度で生息している（2015 年時点）。塩屋湾では、羽地内海に比べ密度は低く、老成個体も僅かに見られる程度である。
- 現在の生息状況 : 羽地内海では、1990 年代と比較し増加傾向にあると考えられる。塩屋湾は、密度が低い状況は変わらない。
- 学術的意義・評価 : 県内では、沖縄島の 2 海域にのみ生息する種であり、浮遊幼生期を持つが生息地が極めて限定的であるのは興味深い。
- 生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。加えて、近年羽地内海では塩を用いた採取が見られるようになり、急激に採取圧が高まっていることから、乱獲による個体群の縮小が危惧される。
- 原 記 載 : Gould, A. A., 1861. Descriptions of shells collected in by the North Pacific Exploring Expedition. Proceedings of the Boston Society of Natural History, 8: 14-40. (p.26, as *Solen strictus*. Type loc.: "Hakodadi Bay")
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. マテガイ (沖縄島). "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 171.
- 久保弘文, 2014. 沖縄島北部のマテガイ. "レッドデータブック2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 438.
- 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
- 名和 純, 2005. マテガイ. "改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) -レッドデータおきなわ-", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 342-343.
- 執 筆 者 名 : 小澤宏之

和 名 : ハートガイ
分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ザルガイ上科 ザルガイ科
学 名 : *Lunulicardia hemicardium* (Linnaeus, 1758)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

- 形 態 : 最大殻長 30 mm 程度の菱形をした堅固な二枚貝類。殻表に細かな鱗片をもった放射肋がある。老成した個体以外は薄い褐色の殻皮を纏う。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、久米島、伊平屋島、宮古島、フィリピン、オーストラリア北部等。
- 生態的特徴 : 外套膜に渦鞭毛藻類を共生させ、光合成産物を栄養源の一部としている。よって、常に貝殻腹縁を上にして、砂上に横臥する。
- 生息地の条件 : 潮通しのよいウミヒルモやマツバウミジグサ等短葉のアマモ場とそれに隣接する細砂底の中潮線～水深 15 m 付近までに浅く埋在する。
- 個体数の動向 : 1990 年代前半までうるま市海中道路や沖縄市泡瀬のアマモ場では比較的多産したが、現在、海中道路ではほぼ絶滅、泡瀬では大規模な海浜改変以降、生息数が激減した。現在、沖縄島東海岸の大浦湾や金武湾など水深 7～15 m 付近の潮通しの良い細砂底で小型個体が観察されるが、かつてうるま市や沖縄市の潮間帯でみられたような大型個体は稀で、個体数密度も低い。
- 現在の生息状況 : 分布範囲が奄美から沖縄島周辺のみと考えられてきたが、2016 年 1 月に宮古島東南海域で棲息が確認された。2010 年以降の沖縄島周辺での回復傾向は認められない。
- 学術的意義・評価 : 主に沖縄島東海岸の湾域に生息し、沖縄島西海岸にも点々と分布するが、個体数は少ない。宮古島南部の亜潮間帯アマモ場でわずかに 1 個体のみ記録されたが、八重山諸島からは未記録であり、沖縄島を中心として個体群が維持されていると考えられる。よって沖縄島のハートガイは遺伝的に孤立した個体群の可能性があり、生物地理学的に非常に貴重である。
- 生存に対する脅威 : 埋立等のために、本種の個体群の多くは生息地ごと消失し、清浄な環境でのみ見つかるため、陸域からの過剰栄養負荷の増大で、本種の絶滅リスクはさらに高まる。
- 原 記 載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 678, as *Cardium hemicardium*. Type loc.: "O. Asiatico")
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ハートガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 119.
- 久保弘文, 2014. ハートガイ. "レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 222.
- 水間八重・山下博由, 2002. 泡瀬干潟における機械による大規模な海草移植実験の現状について一

主に海草場に生息する貝類に注目して。九州の貝, (59): 42-62.
 名和 純, 2005. ハートガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 337-338.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **イレズミザルガイ**
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ザルガイ上科 ザルガイ科
 学名 : *Vasticardium punctum* Kira, 1959
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻長 50~60 mm のよく膨らむ卵型の二枚貝類で、殻表に放射肋が多くあり、貝殻後部の放射肋がやや棘立ち、入れ墨のように黒く染まる。

近似種との区別 : リュウキュウザルガイは、より貝殻の幅が広がり、大型化する。コナガザルガイやフジイロザルガイは貝殻後部が黒く染まらない。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、南太平洋。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : インド洋から東南アジア、中国南部、海南島に分布するハナヤカザルガイの亜種と考えられ、先島諸島では記録されていない。なお、ミクロネシアからは標本記録がある。

生態的特徴 : やや礫の多い粗砂底を好み、潜砂深度は浅く、植物プランクトン等を鰓でろ過して摂食する。水管は短い。

生息地の条件 : 潮通しのよい低潮線~水深数 m のアマモ場に隣接したサンゴ磯質の砂礫地に浅く埋在する。

個体数の動向 : 沖縄島中南部では1990年代に既に個体数が激減し、北部においても2000年以降は減少傾向にある。

現在の生息状況 : 2010年以降の名護湾や羽地外海での潜水調査では、死殻すら確認困難であった。台風後の打上げでは本部半島や恩納村で稀に見いだされる。

学術的意義・評価 : ザルガイ類はサンゴ礁域において、多種が分化している大型二枚貝類の代表種群である。特に本種は先島諸島で記録が無いため、生物地理学的意義やその進化についての研究対象として意義が大きい。

生存に対する脅威 : 埋立てによる生息地消失、加えて陸域からの過剰栄養負荷や土壌微粒子の大量流入による底質悪化。
 特記事項 : コナガザルガイも奄美大島~沖縄島の固有種である可能性が高いが、知見が非常に少ないため、今後、情報収集に努める必要がある。

原記載 : 吉良哲明, 1959. 原色日本貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, 7+vii+2+240 pp., 1+71 pls. (p. 139, no. 9, pl. 55, no. 9, as *Vasticardium punctum* Kuroda. Type loc. not designated)

参考文献 : 徐風山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図志. 科学出版社, 北京, 336 pp.
 久保弘文, 2012. イレズミザルガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 119.
 久保弘文, 2014. イレズミザルガイ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 392.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ゴインザラ**
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
 学名 : *Arcopagimula inflata* (Gmelin, 1791)
 カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 最大殻長約 5 cm、満月のような丸みを帯びた楕円形で、後端前縁は直線的となり、やや突出する。殻表はやや光沢があり、平滑に見えるが、実際は極めて繊細な絹目状となる。淡褐色の薄い殻皮を纏うが、死殻では概ね剥がれている。

近似種との区別 : 近似種リュウキュウサラガイはより大型で膨らみが弱く、横長で、殻内面が黄色くなる。

分布の概要 : 和歌山県以南、奄美大島、沖縄島、先島諸島、中国南部、インド・太平洋。

生態的特徴 : 水管で海底面の有機物 (デトライタス) を吸い取って摂食すると考えられる。

生息地の条件 : 急深なサンゴ礁水路部の泥砂~細砂底、水深 2~20m 付近に生息する。

個体数の動向 : 本種は1990年代まで名護湾、金武湾、中城湾、羽地外海、糸満市、大浦湾、名蔵湾等で少なからず確認されてきたが、2005年頃から名護湾、金武湾、中城湾、糸満市、羽地外海では確認が容易ではない状況である。

学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。

生存に対する脅威 : 埋立て、航路浚渫等による湾内環境の攪乱、陸域からの土壌微粒子の過剰流入や過剰な栄養負荷による底質悪化や泥質化。

特記事項 : 同所的に棲息するズングリアゲマキヤカミブスマ等と比べると遙かに個体数が少ない上、ニッコウガイ類特有の海底の珪藻等を摂食する生態から、微粒子沈積に弱いと考えられる。

原 記 載 : Gmelin, J.F., 1791. Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, 3021–3910. (p. 3230, as *Tellina inflata*. Type loc.: “--”)

参 考 文 献 : 名和 純, 2005. ゴイシザラ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 456.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : ホシヤマナミノコザラ

分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科

学 名 : *Cadella hoshiyamai* (Kuroda, 1960)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

図 の 解 説 : p. 48. 1a: ホシヤマナミノコザラ 名護市. 1b: 糸満市. 2 (参考): ナミノコザラ 名護市. 撮影: 久保弘文.

形 態 : 殻長 10 mm 程度の垂三角形の小型二枚貝類。成貝はやや膨らむが、幼期～亜成貝期は扁平で、殻質は小型のニッコウガイ科としては、やや厚質。繊細な成長肋を均等に刻む。

近似種との区別 : 類似種ナミノコザラは、より横長で小型、殻頂部に白い矢絛状の模様を有する。

分布の概要 : 奄美大島、徳之島、沖縄島および西表島、中国海南島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : サング礁性海岸の汀線～水深 10 m には、ナミノコザラが棲息する。

生態的特徴 : 定在性の強い大型ニッコウガイ科と比べて、リーフの未発達な外浜干潟の汀線～潮間帯に棲息する。不安定な底質環境へ適応し、摂餌形態も単純な堆積物食者ではない可能性がある。

生息地の条件 : 非石灰岩性の細砂底 (サング礁由来の白砂ではなく、より比重が重い河川性の細砂) に生息する。

個体数の動向 : 沖縄島では 1990 年代までうるま市海中道路や照間海岸周辺に多産したが、埋立て式道路の拡張後に生息密度が著しく減少した。また羽地外海にも比較的健全な個体群があったが、2000 年前半から減少傾向にある。

現在の生息状況 : 名護市稲嶺付近の羽地外海、うるま市海中道路北側等沖縄島中北部では壊滅的な状況が継続している。西表島月が浜では狭い範囲に生息地が残っていたが、2015 年末の調査では確認できず。糸満市北名城では僅かに残存した狭い砂浜に生息地が残されていたが、2014 年の調査では全く見つからなかった。

学術的意義・評価 : 本種は非石灰岩質の砂浜環境という南西諸島では限定される分布様式を有し、生態学的、また生物地理学的意義が大きい。加えて、本科貝類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。

生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変による干潟の消失、陸域からの土壌微粒子の過剰流入による底質悪化や泥質化。

特記事項 : 本種の学名種小名は「*hoshiyamai*」とされることが多いが、正しい綴りは *hoshiyamai* である。

原 記 載 : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+104 pp. (p. 83, as *Arcopagia (Cadella) hoshiyamai*. Type loc.: “沖縄島”)

参 考 文 献 : 徐風山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図志. 科学出版社, 北京, 336 pp.

久保弘文, 2012. ホシヤマナミノコザラ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 120.

久保弘文, 2014. ホシヤマナミノコザラ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類” 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 394.

名和 純, 2005. ホシヤマナミノコザラ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 390.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : リュウキュウクサビザラ

分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科

学 名 : *Cadella smithi* (Lynge, 1909)

カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

図 の 解 説 : p. 48. A: うるま市海中道路. B: 名護市. 撮影: 久保弘文.

形 態 : 最大殻長約 7 mm の本科中小型の二枚貝類。垂三角形で腹縁は丸く、殻頂はやや前に傾く。殻の膨らみは成長すると大きくなり、明瞭な成長肋を刻む。殻色は白色～淡黄色で、ピンクや赤みを帯びる個体もある。

近似種との区別 : クサビザラとはより殻高が高く、成長輪肋が強いことで区別される。

分布の概要 : 沖縄島、西表島 (月が浜)、中国南部 (海南島)。

生態的特徴 : 本科他種の食性から類推して、均質な細砂からなる外浜干潟上で、やや長く伸びる水管を用い、海底面の珪藻等を吸い取って摂食すると推測されるが、詳細は不明である。

生息地の条件 : 非石灰岩性の細砂底 (サング礁由来の白砂ではなく、より比重が重い河川性の砂) の渚線～低潮線

- 直下に生息する。
- 個体数の動向 : 沖縄島では1990年代までうるま市海中道路周辺では多産したが、現在は生息密度が著しく減少した。また羽地外海に比較的健全な個体群があったが、2000年代前半から大幅に減少している。糸満市北名城の大規模な埋立てが行われた前面に残存した砂浜で狭い範囲に生息が残されていたが、現在、全く確認出来ない。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 本種は既知の国内分布域が沖縄島と西表島のみであり、生物地理学的に非常に重要な個体群である他、熱帯浅海域に多数種が適応放散するニッコウガイ科の一員であり、進化生物学的にも非常に重要である。
- 生存に対する脅威 : 埋立て、陸域からの土壌微粒子の過剰流入や過剰な栄養負荷による底質悪化や泥質化。
- 原 記 載 : Lyngø, H., 1909. Marine Lamellibranchiata. The Danish Expedition to Siam, 1899–1900. IV. Marine Lamellibranchiata. Memoires de l'Academie Royale des Sciences et des Lettres de Danemark, Copenhagen, ser. 7, Section des Sciences, 5(3): 97–299, pls 1–5. (pp. 194–195, pl. 3, figs 38–39, as *Tellina (Arcopagia?) Smithi*. Type loc.: “West of Koh Kut, 30 fathoms, sand, mud”.
- 参 考 文 献 : 徐鳳山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図誌. 科学出版社, 北京, 336 pp.
久保弘文, 2012. リュウキュウクサビザラ (和名新称). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 120.
久保弘文, 2014. リュウキュウクサビザラ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 395.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : ヒラセザクラ
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
- 学 名 : *Clathrotellina carnicolor* (Hanley, 1846)
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 殻は本科中、小型で、殻はやや薄質、よく膨らみ、殻表は放射肋と成長輪肋が交差して布目状となる。殻色は淡黄白色で、貝殻後端がやや突出する。殻長2~3 cm内外。
- 近似種との区別 : リーフエッジやドロップオフのサンゴ礁砂溜りには類似の別種が存在するが、本種より遙かに小さく、殻頂部に不明瞭で不定形の白斑を散在させる。
- 分布の概要 : 紀伊半島以南、南西諸島、中国南部、インド・太平洋。
- 生態的特徴 : 砂礫質の底質とアマモ類の地下茎等がマトリックス状になった場所に埋れ、長い水管を伸ばして、海底表面の有機質を吸い取って摂食すると考えられる。
- 生息地の条件 : 内湾の潮通しのよいホソバナミノハナやリュウキュウスガモの生えるアマモ場とその周辺の潮間帯細砂底に棲息する。
- 個体数の動向 : 2000年頃までは羽地内・外海や沖縄市泡瀬等のアマモ場で多産したが、現在、埋立てによる生息場所の消滅、アマモ類の枯死と底質の悪化で、個体数が激減している。
- 現在の生息状況 : 泡瀬では2014年調査でも回復の兆しは無く、羽地内海ではアマモ場自体が荒廃し、個体群の著しい減少状態が継続している。
- 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
- 生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変によるアマモ場の消失、陸域からの土壌微粒子の過剰流入による底質悪化や泥質化。
- 特 記 事 項 : 久保 (2012) で指摘した干潟の大型種とリーフ外の小型種とは別種で、後者は *C. tessellata* (Deshayes, 1855) とされた (Huber, 2015) ため、干潟種のみで評価した。
- 原 記 載 : Hanley, S., 1846. A monograph of the genus *Tellina*. Thesaurus conchyliorum, or, Monographs of Genera of Shells, vol. 1, Sowerby, G.B. II (ed.), 221–336, pls 56–66. (p. 263, no. 75, pl. 56, fig. 15, as *Tellina carnicolor*. Type loc.: “San Nicolas, Zebu”)
- 参 考 文 献 : Huber, M., 2015. Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
久保弘文, 2012. ヒラセザクラ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 120.
名和 純, 2005. ヒラセザクラ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 393.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : モチヅキザラ
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
- 学 名 : *Cyclotellina remies* (Linnaeus, 1758)
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形態 : 本科中、最大級で殻長 8 cm に達し、重厚、満月状の二枚貝類。やや膨らみ、殻表には同心円の明瞭な成長輪肋を刻み、淡褐色の殻皮を纏う。
- 近似種との区別 : 類似種ツキザラガイは奄美大島で記録されているが、沖縄県では未確認である。殻はさらに大型化し 11 cm に達し、殻頂部を中心に殻表に光沢がある他、外套線湾入がより浅い。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド-太平洋。
- 生態的特徴 : リーフ掘削後の浚渫現場などでしばしば確認されていることから、人力では容易に掘り出せないようなサンゴ礁の隙間や岩礁に隣接するアマモ場の岩礫間や干潟周辺の岩盤割れ目の砂泥に埋在していると考えられる。
- 個体数の動向 : 沖縄島では 1990 年代前半まで、石垣島では 2000 年代前半まで、大型台風後にリーフ内や河口域で打上げられた生貝がしばしば発見されてきた。沖縄島周辺の内湾域では岩礫質の干潟に死殻が多数存在するが、著しく風化したものが多く、これらが皆、人為的影響により斃死したのかどうかは不明である。
- 現在の生息状況 : 現在、生貝は元より、現生個体生存の証拠となる殻皮付きの合弁死殻も全く確認出来ない状況である。おそらく殆どの個体群は岩盤の隙間にクチャや赤土が目詰まりをおこして、還元化し、その中で埋没したまま斃死したと考えられる。
- 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
- 生存に対する脅威 : 陸域からの土壌微粒子の過剰流入や過剰な栄養負荷による底質悪化や泥質化。
- 原記載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 676, no. 48, as *Tellina remies*. Type loc.: “O. Europaeo & Indico”)
- 参考文献 : 久保弘文, 2012. モチヅキザラ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 121.
久保弘文, 2014. モチヅキザラ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 395.
松隈明彦, 1990. ニッコウガイ科二枚貝の再検討 (1) ツキザラガイ属. ちりぼたん, 20(4): 77-82.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : **チリメンジュロウジン**
- 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
- 学名 : *Heminetis plicata* (Valenciennes in Bruguière, 1827)
- カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態 : 殻は本科中、大型で薄質、膨らみは弱く、後方に弱く湾曲し、殻表は明瞭な成長輪肋が刻まれ、殻色は白色で、薄い淡灰色の殻皮をまとう。殻長 70mm に達する。
- 近似種との区別 : 類似種リュウキュウシラトリとは殻は白色で湾曲した扁平な形態が似ているが、本種より殻が厚く、成長輪肋が縮れることで区別される。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド・太平洋。
- 生態的特徴 : 本科貝類は水管で海底面の有機物 (デトライタス) を吸い取って食べる。
- 生息地の条件 : 1990 年代までの名護湾や羽地外海等にごく稀に見られ、清浄な細砂礫～礫砂の内湾域が生息条件と考えられる。
- 個体数の動向 : 羽地外海、名護湾では 2007 年以降、具体的な確認情報は無い。大浦湾では 2010 年以降にも新鮮な合弁個体が確認されており、数少ない生息場所として重要である。石垣島川平湾では 1999 年に風化死殻を 1 個体確認以降、全く確認事例がない。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
- 生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変による干潟の消失、陸域からの土壌微粒子の過剰流入による底質悪化や泥質化が棲息阻害となる。
- 特記事項 : 希少種は絶対的に個体数が少ないため、生息密度など具体的な情報が得がたく、ランクづけが難しい。なお本種の学名の記載年を「1846」としている文献が多いが、正しくは 1827 である。
- 原記載 : Bruguière, J.G., 1827. Tableau encyclopédique et méthodique des trois règnes de la nature: Vers, coquilles, mollusques et polypiers, Tomes 1-3. Chez Mme. veuve Agasse, Imprimeur-Libraire, rue des Poitevins, no. 6, Paris, 180 pp., 488 pls. (p. 154, pl. 287, fig. 3a-b, as *Tellina plicata* Val. Type loc. not designated)
- 参考文献 : 波部忠重, 1961. 続原色日本貝類図鑑. 保育社, 大阪, 4+ix+3+182pp., 46 app., 66 pls.
名和 純, 2008. 琉球列島の干潟貝類相 (1) 奄美諸島. 西宮市貝類館研究報告, (5): 1-42, maps 1-19, pls 1-16, tables 1-6.
- 執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

和名：リュウキュウサラガイ
 分類：二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
 学名：*Laciolina chloroleuca* (Lamarck, 1818)
 カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ：該当なし

形態：殻は本科中、大型で、殻はやや厚質、やや膨らむ。殻表は平滑で光沢があり、殻色はレモン色を帯びた乳白色で、内面が黄色味を帯びる。貝殻後端が嘴状に突出する。最大殻長 70 mm 程度。

近似種との区別：類似種ゴイシザラは、より小型で膨らみが強く、丸みを帯びて、殻内面が黄色くならない。

分布の概要：奄美大島、沖縄島、先島諸島、中国南部、インド・太平洋。

生態的特徴：水管で海底面の有機物（デトライタス）を吸い取って摂食すると考えられる。

生息地の条件：名護湾や大浦湾等の外洋に大きく開口した湾域や潮通しのよいサンゴ礁のラグーンなどの清浄なサンゴ礁性の細砂底、水深 1~20 m 付近までに生息する。

個体数の動向：本種は 1990 年代まで、沖縄市泡瀬や名護湾、羽地外海、恩納村屋嘉田口、本部町瀬底水路等で少なからず確認されてきた。これら海域には比較的清浄な細砂底が残存していたが、そういった環境は、かつての沖縄周辺に至る所に存在していたと考えられる。しかし、2010 年以降の沖縄周辺には宮古島や伊江島等一部の海域を残して多くは泥質化が進行し、本種の確認個体数も同時に激減した。

学術的意義・評価：ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。

生存に対する脅威：陸域からの土壌微粒子の過剰流入や過剰な栄養負荷による底質悪化や泥質化。

原記載：Lamarck, J.B.P.A. de M. 1818. Histoire naturelle des animaux sans vertèbres, présentant les caractères généraux et particuliers de ces animaux, leur distribution, leurs classes, leurs familles, leurs genres, et la citation des principales espèces qui s'y rapportent; précédée d'une introduction offrant la détermination des caractères essentiels de l'animal, sa distinction du végétal et des autres corps naturels, enfin, l'exposition des principes fondamentaux de la zoologie. Tome 5, Verdrière, Paris, 612 pp. (p. 524, no. 15, as *Tellina chloroleuca*. Type loc.: “.....”)

執筆者名：久保弘文

和名：モモイロサギガイ
 分類：二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
 学名：*Macoma nobilis* (Hanley, 1845)
 カテゴリ：絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ：絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

形態：殻は薄く、卵形。殻頂はほぼ中央に位置し、殻色は薄いピンク色でやや光沢がある。套線湾入は深く左右の殻で同形。後端はやや丸みを帯びた裁断状。殻長 20 mm 内外。

近似種との区別：沖縄において、同所的に見られる種、トガリュウシオガイやリュウキュウサクラガイに色調で類似するが、殻が扁平で、卵形になることで区別される。

分布の概要：日本では奄美大島と沖縄島、西表島に分布する。海南島、トンキン湾、ルソン島（マニラ湾）などの南中国海沿岸に地理分布を持つ。

生態的特徴：長く伸展する水管を用いて、泥上のデトライタスや微細な珪藻等を摂食すると考えられる。

生息地の条件：マングローブ林や河口域に隣接する湾筋の中潮線~下部の軟泥底に生息するが、潮汐による海水の浸入と陸水が影響し合うような一定規模以上の河口に限って記録されている。

個体数の動向：生息地が非常に少ない上に、規模の大きな河川に限られており、そうした河川の多くは大規模な河川改修が行われていて、個体群が減少している。例えば、漫湖（国場川水系）ではさまざまな河川改修が頻繁に行われており、1990 年代以降、生きた個体の採取事例が無く、現在は死殻がわずかに認められるのみとなっている。比較的まとまった個体群の存在する今帰仁村大井川では、赤土による河口域の底質汚染が著しく、生息範囲は非常に狭まっている。西表島では環境改変は少なく、比較的安定した生息環境と考えられるが、情報が不足している。

現在の生息状況：2005 年以降に今帰仁村大井川河口で生貝が確認されているほか、2015 年 12 月に西表島浦内川河口の軟泥底で新鮮な死殻が見つかった。

学術的意義・評価：ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。

生存に対する脅威：分布域が河口域の狭い範囲に限られるため、河川改修が、直接的影響を及ぼすと考えられる。また、本種は安定した底泥表面で有機質の餌を摂食するため、陸土の大量流入による底質環境悪化も生存に悪影響を及ぼす。

特記事項：分布が比較的広いことや、軟泥底は調査が困難であることから、絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) にするには根拠データが少なすぎるが、かといって情報不足 (DD) とするには、予防原則的にも無理がある。

原記載：Hanley, S., 1845. On the new species in the genus *Tellina*. Proceedings Zoological Society of London, for 1844: 164-166. (p. 165, as *Tellina nobilis*. Type loc.: “Orion, province of Bataan, isle of Luzon; fine black sand, at low water”)

参考文献：久保弘文, 2012. モモイロサギガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 122.
 久保弘文, 2014. モモイロサギガイ. “レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 228.

名和 純, 2000. 沖縄県における干潟と低湿地の貝類の現状. “特殊鳥類等生息環境調査XI (改訂版) - 沖縄県内の水辺環境に生息する生物種の概況 -”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 103-129.

名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.

名和 純, 2005. モモイロサギガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ -”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 那覇, 321-322.

斯下拉脱, O. A., 1965. 中国海双殻類軟体動物的桜蛤惣科. 海洋科学集刊, (8): 27-114, pls 1-13.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : コノハザクラ

分類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科

学名 : *Phylloda foliacea* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻は本科中、大型でやや厚質、膨らみは非常に弱く扁平で、横長の角張った楕円形、後方の右殻側に弱く湾曲し、殻表は弱い成長輪肋が刻まれ、後背縁の端にはやや粗い棘が並ぶ。殻色は鮮橙色で、薄い淡褐色の殻皮をまとう。殻長 80 mm に達する。

近似種との区別 : 日本近海に近似種はない。

分布の概要 : 沖縄島、先島諸島。

生態的特徴 : 本科貝類は水管で海底面の有機物 (デトライタス) を吸い取って食べる。

生息地の条件 : 水深約 3~15 m の内湾の泥砂~砂泥底。ウミヒルモ類が生えていることが多い。

個体数の動向 : 1990 年代に金武湾、中城湾、糸満、名護湾で確認されてきたが、2000 年以降、全く記録が無い。川平湾では 2005 年頃に風化した死殻が見いだされた。元々個体数の多い種ではなく、潜水調査が困難な透明度の悪く、かつ流れの速い水路部等を生息圏とするため、情報が不足しているが、産出情報が大きく途絶えており、明確に減少傾向が示唆される。

現在の生息状況 : 沖縄島を中心として、内湾の水路部、泥砂域は浚渫、埋立て、陸域からの土壌微粒子の沈積等で大きく攪乱が進行しており、そうした場所に生息圏を持つ本種は著しく生息状況が悪化していると考えられる。大浦湾では 2010 年以降にも新鮮な合弁個体が確認されており、数少ない生息場所として重要である。

学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。

生存に対する脅威 : 潮通しの良い細砂泥~泥砂の内湾域が生息条件と考えられ、埋立てや陸域からの土壌微粒子過剰流入によるヘドロ化、水路浚渫による攪乱が阻害要因となる。

原記載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 675, no. 39, as *Tellina foliacea*. Type loc.: “O. Indico”)

参考文献 : ダイビングチームすなっくスナフキン, 2015. 琉球弧沖縄島 大浦湾の貝. すなっくスナフキン出版会, 名護, 61 pp.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ウラキヒメザラ

分類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科

学名 : *Pinguitellina robusta* (Hanley, 1844)

カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は本科中、小型で、殻はやや厚質、よく膨らみ、殻表は平滑で光沢があり、殻色は乳白色だが、内面が黄色味を帯びる。貝殻後端が嘴状に突出する。最大殻長約 14 mm。

近似種との区別 : 類似種ミガキヒメザラは殻の膨らみが本種より弱く、小型で薄質、殻内面が黄色くならない。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、中国南部、インド・太平洋。典型的な個体は石垣島川平、鳩間島等の先島諸島で確認される。

生態的特徴 : 水管で海底面の有機物 (デトライタス) を吸い取って摂食すると考えられる。

生息地の条件 : サンゴ礁に隣接する水路や外浜干潟等潮通しのよい清浄な白質の細砂底、水深 1~15 m 付近までに生息する。

個体数の動向 : 2015 年 3 月に西表島・鳩間島間の砂底水深 15 m で新産地が見つかり、比較的深いところまで分布していることが判明した。本海域は、潮通しが極めて良く、パウダーサンドと呼ばれる極めて清浄な細砂底である。そういった環境は、1970 年代以前の沖縄周辺には多数存在したと考えられるが、現在、本県全域を見渡しても非常に少なくなってしまう。川平湾では、川平湾口部の狭い範囲にパウダーサンドからなる細砂底に本種が確認されていたが、2007 年以降、泥質化の進行に伴って、全く確認されていない。

学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。

生存に対する脅威 : 埋立て、陸域からの土壌微粒子の過剰流入や過剰な栄養負荷による底質悪化や泥質化。

特記事項 : ヒメザラ類は分類的に不詳であり、本書では、典型的な個体では、大型化し、後端が突出する種を対象としているが、単に内面が黄色いという定義だけでは複数種が混在すると考えられる。

原記載 : Hanley, S., 1844. Descriptions of new species of the genus *Tellina*, chiefly collected by H. Cuming, Esq. in the Philippine Islands and central America. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1844: 59-64. (p. 63, as *Tellina robusta*. Type loc.: "Isle of Annaa, South Seas, and isle of Burias, Philippines; sandy mud, low water")

参考文献 : 波部忠重, 1961. 続原色日本貝類図鑑. 保育社, 大阪, 4+ix+3+182pp., 46 app., 66 pls.
久保弘文, 2012. ウラキヒメザラ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 128.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **アオサギ**

分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科

学名 : *Psammotreta praeurpta* (Salisbury, 1934)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻は本科中、やや大型で薄質、膨らみはやや強く、丸みのある横長の亜三角形、後背縁に弱い稜角をもち、殻表は殆ど平滑だが、きわめて微細な成長輪脈を有する。殻色は灰白色で、青みがかった淡灰色の薄い殻皮をまとう。最大殻長 65 mm に達する。

近似種との区別 : 泥底に生息する近似種がいくつかあるが、そのうち、アワジチガイはより小型で、ゴイシザラはより丸みが強く、タイワンシラトリはより扁平であることから区別される。

分布の概要 : 日本本土温帯域の内湾、奄美大島、沖縄島、久米島 (白瀬川河口) および石垣島、西表島の内湾泥底。

生態的特徴 : 水管で海底面の珪藻や有機物 (デトライタス) を吸い取って摂食する。

生息地の条件 : 内湾の水深 5~20 m の軟泥底~泥底。

個体数の動向 : 1990 年代まで金武湾、羽地内海、名護湾、大浦湾等の内湾軟泥底において生存の証拠となる殻皮付き合弁個体が確認されてきた。しかし、同所的に棲息するズングリアゲマキヤカミブスマ等と比べると遙かに個体数が少ない上、ニッコウガイ類特有の海底の珪藻等を摂食する生態から、微粒子沈積に弱いと考えられ、2010 年以降、確認個体数が激減している。

現在の生息状況 : 2005 年に石垣島川平湾、2010 年に金武湾の浚渫泥中より殻皮付個体が確認されているが、羽地内海や名護湾からの記録は途絶えている。

学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。

生存に対する脅威 : 潮通しの良い軟泥底の内湾域が生息条件と考えられ、陸域からの土壌微粒子過剰流入によるヘドロ化、航路浚渫による内湾海底の大規模攪乱が生育阻害となる。

特記事項 : 愛知県レッドデータブックでは絶滅危惧ⅠA 類にランクされている。

原記載 : Philippi, R.A., 1843. Abbildungen und Beschreibungen neuer oder wenig gekannter Conchylien, unter mithilfe mehrer deutscher Conchyliologen, Band 1, Theodor Fischer, Cassel, 21-76, *Tellina* pls 1-2. (pp. 71-72, *Tellina* pl. 1, fig. 2, as *Tellina truncata* Jonas (not of Linnaeus, 1767). Type loc.: "in mare chinensi")
Salisbury, A.E., 1934. On the nomenclature of Tellinidae, with descriptions of new species and some remarks on distribution. Proceedings of Malacological Society of London, 21: 74-91, pls 9-14. (p. 90, as *Tellina praeurpta*, a replacement name for *Tellina truncata* Jonas in Philippi, 1843, not of Linnaeus, 1767)

参考文献 : 加藤 真・福田 宏, 1996. 二枚貝綱. "日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状", 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 65-73.
木村昭一, 2009. アオサギガイ. "愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック あいちー動物編一", 愛知県環境調査センター (編), 愛知県環境部自然環境課, 名古屋, 501.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **オオトゲウネガイ**

分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科

学名 : *Quadrans gargadia* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 最大殻長約 4 cm。扁平な正三角形に近い形の真白の二枚貝類で、貝殻の背縁に多数の小棘が並ぶ。殻表はやや光沢がある。

近似種との区別 : トゲウネガイは最大殻長 1 cm 程度で遙かに小型で、より膨らむ。

分布の概要 : 先島諸島 (宮古島、石垣島、西表島)。フィリピン、タイ、オーストラリア。

〈貝類〉

- 生態的特徴 : 水管で海底面の有機物(デトライタス)を吸い取って摂食すると考えられる。
生息地の条件 : 内湾~やや外洋の潮通しの良いアマモ場とその周辺の砂浜域に生息する。比較的清浄な細砂底~砂底を好み、また垂直分布幅も、主に潮間帯下部に確認され、かなり狭い。
個体数の動向 : 宮古島与那覇湾では1995年年頃まで、石垣島川平湾では2000年年頃までは少なからず生息していたが、現在、個体数が非常に減少している。
現在の生息状況 : 川平湾では2010年以降、継続したモニタリングを実施中であるが、生貝が確認困難な状況である。
学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。また本種は先島諸島が分布北限にあたり、生物地理学的にも重要な個体群である。
生存に対する脅威 : 陸域からの土壌微粒子の過剰流入や過剰な栄養負荷による底質悪化や泥質化。
原 記 載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cumcharacteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 674, no. 33, as *Tellina gargadia*. Type loc.: "O. Asiatico")
参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. オオトゲウネガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 128.
久保弘文, 2014. オオトゲウネガイ. "レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 398.
名和 純, 2005. オオトゲウネガイ. "改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)-レッドデータおきなわ-", 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 455.

執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : ウネイチョウシラトリ
分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
学 名 : *Serratina monomera* (Habe, 1961)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形 態 : 殻は本科中、やや小型で薄質、膨らみは弱く、亜三角形で殻頂がやや尖る、後背縁に強い稜角をもち、殻表は細かい明瞭な成長輪脈を多数刻む。殻色は純白色で、灰白色の薄い殻皮をまとう。殻長 25 mm 内外。
近似種との区別 : 近似種ヒワズウネイチョウはより殻高が高く、扁平で、後縁の隆起が細く弱いことから区別される。
分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、宮古島。
生態的特徴 : 水管で海底面の有機物(デトライタス)を吸い取って摂食すると考えられる。
生息地の条件 : 水深 2~10 m の清浄な砂~細砂の内湾域が生息条件と考えられる。
個体数の動向 : 1990年代までの名護湾や中城湾にごく稀に見られたが、2014年の名護湾での潜水調査では著しく生息環境が悪化しており、全く確認できなかった。大浦湾では2010年に採取記録があるが、現在、大規模基地建設のための入域禁止区域となっている。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
生存に対する脅威 : 陸域からの土壌微粒子の過剰流入や過剰な栄養負荷による底質悪化や泥質化。
特 記 事 項 : タイプ産地は宮古島。
原 記 載 : 波部忠重, 1961. 日本産貝類 15 新種. *Venus*, 21(4): 416-431. (pp. 420, 422, 430-431, as *Merisca monomera*. Type loc.: "沖縄宮古島")
参 考 文 献 : Huber, M., 2015. Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
久保弘文, 2012. ヒワズウネイチョウ(和名新称). "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 124.

執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : ヒワズウネイチョウ
分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
学 名 : *Serratina perplexa* (Hanley, 1844)
カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 形 態 : 殻は本科中、やや小型で薄質、膨らみは弱く、扁平。亜三角形で殻高が高く、殻頂が尖る。後背縁に細いが明瞭な稜角をもち、殻表は細かい成長輪脈を多数刻む。殻色は淡白色で、灰白色の薄い殻皮をまとう。殻長 30 mm 内外。
近似種との区別 : 近似種ウネイチョウシラトリはより殻高が低く、やや膨らみ、後縁の隆起が太く強いことから区別される。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド・太平洋。
 生態的特徴 : 水管で海底面の珪藻や有機物（デトライタス）を吸い取って摂食すると考えられる。
 生息地の条件 : ウミヒルモ等のアマモ場や細砂泥～泥砂の低潮線～10 mの内湾域に生息する。
 個体数の動向 : 1990年代まで羽地内海、中城湾、金武湾、糸満市等において少なからず確認されたが、2005年以降、採取記録が非常に少なく、2015年の羽地内海や中城湾での調査では全く確認できなかった。名蔵湾では2006年に確認されているが、その後、記録は無く、元々個体数が非常に少ないと考えられる。
 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
 生存に対する脅威 : 陸域からの土壌微粒子の過剰流入や過剰な栄養負荷による底質悪化や泥質化。
 特記事項 : 名和（2005）の「ウネイチョウシラトリ」は本種を指している。
 原記載 : Hanley, S., 1844. On new species of the genus *Tellina*, chiefly collected by Hugh Cuming, Esq. in the Philippine Islands and central America. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1844: 140-144, 146-149. (p. 149, as *Tellina perplexa*. Type loc.: “Bay of Manila; sandy mud, six fathoms”)
 参考文献 : Huber, M., 2015. Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
 久保弘文, 2012. ヒワズウネイチョウ（和名新称）. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会（編）, 東海大学出版会, 秦野, 124.
 名和 純, 2005. ウネイチョウシラトリ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課（編）, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 487-488.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ヒノデガイの一種**
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
 学名 : *Tellinella crucigera* (Lamarck, 1818)
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻長約4 cm、長楕円形。後端は、吻状に伸びてねじれる。殻形はダイミョウガイに似るが、殻表は細い輪脈に覆われ、鈍い光沢がある。褐色の放射彩がある。
 近似種との区別 : ヒノデガイと呼ばれてきた貝類には2種あり、もう一種はやや沖合の細砂底に棲む大型種で、放射彩が明瞭で、厚質の *T. rastellum* (Hanley, 1844) である。奄美・沖縄両貝類目録を著した黒田徳米博士の標本に準拠すれば、本種がヒノデガイであるが、和名出典の図（平瀬・瀧, 1951）を根拠とすれば、沖合の大型種にあたり、和名の混乱がある。さらに、サラサヒノデガイという和名を本種に使う例もあるが、この和名も原典（鹿間, 1964）では沖合の種にあたり、本種の和名はさらに検討を要する。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド・太平洋。
 生態的特徴 : 貝殻の右殻を上にして、横向きに潜っている。水管を後端から伸ばすが、比較的底質の不安定な粗砂底に棲息しており、他の大型ニッコウガイ類と同様の有機堆積物食者かどうかは不詳である。
 生息地の条件 : 潮通しの非常によい内湾～やや外洋の粗砂底に生息する。
 個体数の動向 : かつては沖縄島中南部にも少なくなかったが、現在ほとんど認められず、北部でも水質の良い海域にのみ生息する。先島諸島でも減少傾向にある。
 現在の生息状況 : 恩納村では狭い範囲に個体群が確認されているが、その他では2005年以降、産出記録がほとんど無い。2016年宮古島、2015年久米島でのドレッジ調査でも確認されていない。
 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
 生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変による干潟の消失、陸域からの土壌微粒子の堆積による底質悪化。
 原記載 : Lamarck, J.B.P.A. de M. 1818. Histoire naturelle des animaux sans vertèbres, présentant les caractères généraux et particuliers de ces animaux, leur distribution, leurs classes, leurs familles, leurs genres, et la citation des principales espèces qui s'y rapportent; précédée d'une introduction offrant la détermination des caractères essentiels de l'animal, sa distinction du végétal et des autres corps naturels, enfin, l'exposition des principes fondamentaux de la zoologie. Tome 5, Verdrière, Paris, 612 pp. (p. 522, no. 7, as *Tellina crucigera*. Type loc.: “...”)
 参考文献 : 平瀬信太郎・瀧 庸, 1951. 天然色写真版 日本貝類図譜. 松邑三松堂, 東京, xvii+3+46 pp., 134 pls.
 久保弘文, 2012. ヒノデガイの一種. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会（編）, 東海大学出版会, 秦野, 129.
 名和 純, 2005. ヒノデガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課（編）, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 391.
 鹿間時夫, 1964. 原色図鑑 続世界の貝. 北隆館, 東京. 12+212 pp, 70 pls.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ニッコウガイ**

〈貝類〉

- 分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
- 学 名 : *Tellinella virgata* (Linnaeus, 1758)
- 方 言 名 : アカイナ (名護市)
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
- 形 態 : 最大殻長 70 mm に達するニッコウガイ科の代表種である。朝日のような澄〜赤色の放射状色彩をもつ。後端はやや突出し、右殻側に僅かに傾く。前縁は丸くなり、殻頂はほぼ中央に位置する。生時は薄い褐色の殻皮を纏う。
- 近似種との区別 : 最も類似するのはヒメニッコウガイで、名の通り、より小型で横長、殻皮が薄く不明瞭で、殻表の光沢が強いことから区別される。
- 分布の概要 : 南西諸島 (大東諸島等外洋小島嶼を除く)、インド・西太平洋。
- 生態的特徴 : 砂中には右殻側を上にして、横向きに潜っており、後端がやや右殻側に傾いているのは、水管をそこから上部に伸ばすための適応形態と考えられる。海底面の微細藻や有機堆積物を吸引し、摂食する。
- 生息地の条件 : 内湾〜やや外洋の潮通しの良いアマモ場や周辺の砂底域に生息する。比較的清浄な細砂底を好み、また主な生息場所の垂直分布幅も狭く、潮間帯に多い。
- 個体数の動向 : 本種は 1980 年代以前の沖縄島をはじめとした南西諸島の干潟に、遍く多産した。かつて沖縄の本土復帰後の急激な陸域開発は、海域への甚だしい土壌流入をもたらしたが、おそらく、その頃に本種は最大のダメージを受けたと推測される。1980 年代に沖縄では、台風後にニッコウガイの貝殻が大量に打ち上がった事例が報告されているが、近年はそのような打ち上げ貝は稀にしか見られない。それでも 1990 年代までは泡瀬や羽地内海、川平湾等ではかなり個体群が存在していたが、2000 年以降、これら残された個体群も大きく減少した。
- 現在の生息状況 : 2014 および 2015 年の川平湾奥調査では共に少数個体が確認され、非常に低密度でも棲息が確認されている。羽地内海では 2013 年に湾中央の潮通しの良い細砂底で生貝が確認されている。一部産地に生貝確認が可能となっていること、分布域が広いことを鑑み、前版よりランクをひとつ下げた。一方、名護湾や泡瀬干潟等既往産地での産出は依然殆ど確認できない状況である。
- 学術的意義・評価 : かつての沖縄県各島沿岸における大型二枚貝類の優占種であり、物質循環や食物連鎖上重要な役割を果たしていたと考えられ、生態学的に学術的意義は非常に大きく、水産学的にも存在意義は大きいと考えられる。
- 生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変によるアマモ場の消失、陸域からの過剰栄養負荷による水質汚濁や底質悪化。
- 原 記 載 : Linnaeus, C. von, 1758. *Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 674, no. 35, as *Tellina gargadia*. Type loc.: "O. Indico")*
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ニッコウガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 129.
- 久保弘文, 2014. ニッコウガイ. "レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 231.
- 仲嶺俊子・波部忠重, 1983. タマガイ類に穴をあけられたニッコウガイ. ちりぼたん, 14(2): 26.
- 名和 純, 2005. ニッコウガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 340-341.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : キュウシュウナミノコ
- 分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 フジノハナガイ科
- 学 名 : *Donax (Tentidonax) kiusiuensis* Pilsbry, 1901
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 日本産本科中、最も小型種。殻長は 8 mm。白色で光沢があり、後方に延びる。
- 分布の概要 : 沖縄島 (大浦湾、金武湾)。
- 生態的特徴 : 潮間帯下部に深の細砂底に生息する。ホシヤマナミノコザラやリュウキュウクサビザラなどに混じり稀に見つかる。水深 3 m 前後の砂底域にも分布する。
- 生息地の条件 : 清浄な細砂底。
- 個体数の動向 : 大浦湾では、1 個体/ m²未満である (2015 年当時)。
- 現在の生息状況 : 元来密度の低い種であるが、近年は各産地で減少傾向にある。
- 生存に対する脅威 : 赤土の流入や埋立等の沿岸域の改変による底質環境の悪化。
- 原 記 載 : Pilsbry, H. A., 1901. *New Mollusca from Japan, the Loo Choo Islands, Formosa and the Philippines. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 193-210. (pp.207-208, as *Donax kiusiuensis*. Type loc.: "Hirado, Hizen")*
- 参 考 文 献 : 福田 宏・久保弘文, 2012. キュウシュウナミノコ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 131.
- 久保弘文, 2005. キュウシュウナミノコガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護

課, 那覇, 389.

執筆 者 名 : 小澤宏之

- 和 名 : **ウスムラサキアシガイ**
 分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 シオサザナミ科
- 学 名 : *Gari lessoni* (Blainville, 1826)
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)
- 形 態 : 最大殻長 4 cm 程度の長方形の二枚貝類。殻は薄く、殻表の前縁から後部の 3 分の 1 程度の範囲に斜め方向の繊細な彫刻を飾る。淡褐色の殻皮は薄く剥がれやすいが、腹縁には残存する個体が多い。
- 近似種との区別 : ウスベニマスホは同様に薄質の長方形で類似するが、淡橙色の放射彩を有し、区別される。
- 分布の概要 : 奄美大島以南、沖縄島、石垣島、西表島、熱帯インド・太平洋に広く分布。
- 生態的特徴 : プランクトンを鰓でろ過摂食すると思われるが、詳細は不明。
- 生息地の条件 : 河口域に隣接する滞筋や、低潮線～水深 8 m の泥砂底～泥礫底に生息する。
- 個体数の動向 : 羽地内海、塩屋湾等沖縄島北部の内湾域では潮通しの良い細砂泥底に少なからず生息していたが、1990 年代後半に、富栄養にともなうアナアオサが大発生して底質を被覆し、底質が還元して、大量に死滅している状況を確認した。沖縄島中城湾奥では 1990 年頃に水深 8 m のアマモ場からドレッジによって本種が得られているが、2000 年以降は確認できていない。
- 現在の生息状況 : 羽地内海、名蔵湾などかつて産出のあった干潟海域では 2005 年以降も著しく個体数の少ない状態は継続している。川平湾奥での 2010 年以降のモニタリングでは死殻すら確認されていない。
- 学術的意義・評価 : シオサザナミ科は汽水域の潮間帯から外洋の下部浅海帯砂底域まで多様な種が分化しているが、自然度の豊かな環境に依存する種が多く、希少種も少なくない。よって生態のみならず分類学的課題も多い。
- 生存に対する脅威 : 富栄養化に伴い大発生したアナアオサの底質被覆および底質還元、陸域からの赤土など土壌微粒子の大量流入と堆積による底質悪化。
- 特記事項 : 前版における *Gari* sp. は本種を示す。垂直分布が潮間帯から水深 10 m 以深までと幅広いため、過去にも健全な個体群が観察されている中城湾や金武湾の亜潮間帯域等での生息状況調査が必要。
- 原 記 載 : Blainville, H.M.D. de, 1826. *Psammobie*, *Psammobia*. Dictionnaire des sciences naturelles, dans lequel on traite méthodiquement des différens êtres de la nature, considérés soit en eux-mêmes, d'après l'état actuel de nos connoissances, soit relativement à l'utilité qu'en peuvent retirer la médecine, l'agriculture, le commerce et les arts. Suivi d'une biographie des plus célèbres naturalists, Pars 2 Règne organisé, Tome 43. Cuvier, F. (ed.), F.G. Levrault, Paris, 476-482. (pp. 480-481, as *Psammobia Lessoni*. Type loc.: "Des côtes de Bourou, l'une des Moluques")
- 参 考 文 献 : Huber, M., 2015. Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
 久保弘文, 2012. ウスムラサキアシガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 132.
 久保弘文, 2014. ウスムラサキアシガイ. "レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 392.
 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
 名和 純, 2005. *Gari* sp. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 393-394.

執筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : **ミナトマスホガイ**
 分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 シオサザナミ科
- 学 名 : *Psammotaena inflata* (Bertin, 1880)
 カ テ ゴ リ ー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)
- 形 態 : 殻長 5 cm。殻は卵形、白色から薄紫色。薄い殻皮に覆われるが、剥げ落ちている個体も多い。殻の内面は紫色。
- 近似種との区別 : マスホガイに比べ全体的に丸みを帯びる。
- 分布の概要 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生態的特徴 : マングローブ林内の滞筋や河口域の砂礫泥底で、深さ 20~30 cm に埋在する。
- 生息地の条件 : 内湾域でマングローブ林の発達する河口域が産地となる。産地によってはマスホガイと同所的に見られる。
- 個体数の動向 : 沖縄島北部の産地では減少傾向にあり、羽地内海の産地では、生貝が確認されていない (2015 年時点)。金武町億首川や読谷村長浜川河口では大規模ダム建設後に個体数が大幅に減少した。

〈貝類〉

- 現在の生息状況 : 沖縄島では各産地で減少傾向にある。底質環境の悪化が要因と考えられるが詳細は不明。
学術的意義・評価 : 各産地で生息範囲は非常に狭い。そのため生息条件を明らかにし、減少要因を究明する必要がある。
生存に対する脅威 : 底質環境の悪化。
原 記 載 : Bertin, M. V., 1880. Revision des garidées du Muséum d'Histoire Naturelle. Nouvelles Archives du Muséum d'Histoire Naturelle, Deuxième série, 3: 57-129, pls.4-5. (pp.93-94, no.28, pl.4, fig. 1a-b, as *Hiatula inflata*. Type loc. not designated)
参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ミナトマスオ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 133.

執 筆 者 名 : 小澤宏之

和 名 : ナノハナガイ
分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 アサジガイ科
学 名 : *Leptomya adunca* (Gould, 1861)
カ テ ゴ リ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

形 態 : 殻長約 30 mm の小型二枚貝類。殻は扁平な卵円型で、後端が細く伸び、先端がやや尖る。殻表は微細な成長脈があり、薄い灰褐色の殻皮を纏う。殻頂部内面に弾帯受を有する。

近似種との区別 : シロナノハナガイは殻がやや堅く、殻皮が薄く、貝殻後端の突出が弱い。
分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、久米島、石垣島に分布。
生態的特徴 : ニッコウガイ類に類似した微細藻等の堆積有機物食と考えられるが、詳細は不明。
生息地の条件 : 潮通しが良く、水質が清浄なアマモ場の砂泥底にやや深く埋在して生息している。特に自然度が高く、種多様性が豊かな干潟にのみ生息する。

個体数の動向 : 沖縄島泡瀬干潟では 1990 年代前半まで極めて健全性の高い干潟が形成されていて、少ないながら生体が観察されたが、その後、底質の悪化が進行し、全く確認できない。石垣島川平湾や、名護市大浦湾、羽地内海でも、風化した死殻は多数存在し、かつては多産していたと思われるが、現在、生体の発見は著しく困難で、ほぼ絶滅状態と考えられる。小浜島や久米島等の水質、底質共に清浄なアマモ場において、ごく稀に新鮮な合弁死殻が確認されるので、各地に局所的に残された健全なアマモ場にわずかに生残している可能性がある。

現在の生息状況 : 2015 年 12 月に久米島南西岸のアマモ場で比較的健全な個体群が見つかった。本海域は久米島漁協のナマコ保護区予定海域のため、改変されにくいと考えられる。その他の海域では死殻が多いが生体は皆無で、回復の兆候は全くない。

学術的意義・評価 : 本種は多くのアマモ場で大量の死殻が確認されながら、生体の発見例が極めて乏しいが、その死滅原因が不明である。よって死殻の年代測定等を行い、絶滅要因を探ることで、保全上重要な新知見がもたらされる可能性がある。

生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変によるアマモ場の消失、陸域からの過剰栄養負荷による水質汚濁や底質悪化。
原 記 載 : Gould, A.A., 1861. Descriptions of shells collected in the North Pacific Exploring Expedition. Proceedings of the Boston Society of Natural History, 8: 14-40. (p. 24, as *Neaera adunca*. Type loc.: “Kagosima Bay, sandy mud, 12-15 fathoms”)

参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ナノハナガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 135.
久保弘文, 2014. ナノハナガイ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 224.
名和 純, 2005. ナノハナガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 323.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : コバコガイ
分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 アサジガイ科
学 名 : *Montrouzieria clathrata* Souverbie in Souverbie & Montrouzier, 1863
カ テ ゴ リ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 : 殻は本科中、非常に小型で、横長のやや丸みを帯びた箱形、殻はやや膨らみ、殻表は多数の明瞭な放射肋があり、成長輪肋と交差して、籠目状となる。色彩は淡白色で、薄い淡褐色の殻皮を纏う。殻長約 10 mm 以下。

近似種との区別 : 奄美大島から知られる別属のカケラガイは、やや類似するが、より三角形状で、彫刻が密である。
分布の概要 : 国内では沖縄島東海岸のみ。台湾、海南島、ニューカレドニア。
生態的特徴 : ろ過食性と考えられるが、その他、繁殖等の詳しい生態は不明。
生息地の条件 : 内湾の低潮線直下～水深 20 m の岩礫間隙に半穿孔状態で埋在して生息する。
個体数の動向 : 沖縄島東海岸の湾域のみで記録され、金武湾、中城湾では過剰な土壌流入や港湾・埋立地造成による沿岸域の開発が著しく、個体数の減少が著しい。

現在の生息状況 : 沖縄市泡瀬北岸で 2013 年の調査では岩盤の隙間に、泥の詰まった多くの死殻が確認されたが、生貝は皆無であった。岩盤の隙間にクチャや赤土が蓄積し、目詰まりをおこして、還元化して、コバコガイは斃死していると考えられる。

学術的意義・評価 : 世界的に見ても記録のほとんど無い希少種である。国内では沖縄島の内湾域のみで生物地理学的に

非常に重要である。

生存に対する脅威 : 埋立てや航路浚渫など大規模攪乱や、シルト・泥分の大量流入・蓄積による、岩礫間隙の閉塞。
 特記事項 : 本種は *Montrouzieria Souverbie* in *Souverbie & Montrouzier*, 1863 のタイプ種 (単型) であるが、属の記載 (pp. 282–284) においては「*Montrouzieria*」と異なる綴りで表記されている。その直後の本種の記載では「*Montrouzieria*」と記されており、また文法的にも語尾を *-ia* とするのが正しい。したがって *Montrouzieria* は誤植と考えられ、国際動物命名規約第4版の条 32.5 に定める「訂正しなければならない綴り (不正な原綴り)」に相当するため、*Montrouzieria* を用いるのが適切である。なお、タイプ標本の図を見る限り、殻表彫刻は、よく一致すれど、殻全体の形が異なっており、検討が必要である。

原 記 載 : Souverbie, M. & Montrouzier, R.P., 1863. Descriptions d'espèces nouvelles de l'Archipel calédonien. *Journal de Conchyliologie*, 11: 276–287, pl. 12. (pp. 283–284, pl. 12, fig. 5, as *Montrouzieria clathrata* Souverbie. Type loc.: “Noumea (Nov. Caledonia, in coralliis”).

参 考 文 献 : 波部忠重, 1976. 日本産二枚貝類8新種. *Venus*, 35(2): 37–46.
 徐鳳山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図誌. 科学出版社, 北京, 8+336 pp.
 Huber, M., 2015. *Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families*. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
 久保弘文, 2012. コバコガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ペントスのレッドデータブック”, 日本ペントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 136.
 久保弘文, 2014. コバコガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 394.

執 筆 者 名 : 久保弘文・福田 宏

和 名 : オキナワドブシジミ
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ドブシジミ上科 ドブシジミ科
 学 名 : *Sphaerium okinawaense* Mori, 1937
 カ テ ゴ リ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 : 丸みを帯びた卵形で殻長 8 mm 程度。殻は薄く、生時は桃色を帯びた灰色で光沢があるが、死後は退色し、乾燥すると脆い。

近似種との区別 : 本属は沖縄県では本種 1 種とされているが、本土産ドブシジミとの外見上の区別は困難。今後、比較解剖や分子系統解析が必要である。

分布の概要 : 沖縄島、渡名喜島、久米島、伊平屋島、石垣島、西表島、与那国島。

生態的特徴 : 卵胎生で稚貝を産む。ろ過食性。

生息地の条件 : 湧水起源の安定した湿地の泥底を好み、田芋畑や水田等で流れの緩やかな安定した水路等に生息する。

個体数の動向 : 沖縄島中南部において、1960 年まで棲息記録があり、水田の消失と共に大きく減少した淡水性二枚貝である。近年は沖縄島周辺の田芋や水田等が残っている地域や離島、石垣島東部の溜め池、西表島、与那国島の水田で記録があるに過ぎず、更なるサトウキビ等への畑作化や様々な農地転用などによって、生息場所は著しく減少していると考えられる。

学術的意義・評価 : 島嶼間での遺伝的交流については不明で、ヒラマキガイ類のように広域分布種であるかも知れないが、一方で固有の遺伝的集団の可能性もあり、早急な分子系統解析等の研究が必要と考えられる。

生存に対する脅威 : 溜め池や水田等陸水環境の消失、移入種による食害、競合。

原 記 載 : Mori, S., 1937. On the classification of the Japanese *Sphaerium* (4). *Venus*, 7(4): 170–172. (pp. 170–172, as *Sphaerium japonicum okinawaense*. Type loc.: “Ryūtan (Syuri, Okinawa)”).

参 考 文 献 : 福田 宏・青柳 克・亀田勇一, 2017. 沖縄県渡名喜島の非海産貝類相. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
 名和 純, 2005. オキナワドブシジミ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 458.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : オフクマスオ
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 オオノガイ目 オオノガイ上科 オオノガイ科
 学 名 : *Distugonia decurtata* (A. Adams, 1851)
 カ テ ゴ リ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形 態 : 本科中、中型、殻長 4 cm に達し、薄質でよく膨らむ。後端は突出し、先端は裁断状。薄く褐色の殻皮を纏い、左殻貝殻内面の殻頂下に横長の弾帯受がある。

近似種との区別 : 近縁種クシケマスオは 1 cm 程度で、本種と比べ遙かに小さく、かつ貝殻後端の突出部の形状も異なる。

分布の概要 : 紀伊半島以南、南西諸島 (内湾域)、インド・太平洋、中国南部沿岸。

生態的特徴 : 詳しい生態は不明だが、近縁の仲間にはスナモグリ の巣穴を活用する種も知られており、何らかの無脊椎動物との共生関係が疑われる。しかし、基本的にはプランクトン食性であろう。

〈貝類〉

- 生息地の条件 : 自然度が豊かで、種多様度が高い河口域に確認されることが多いが、上部浅海帯水深 10 m 付近の細砂～泥砂底でも記録がある。
- 個体数の動向 : 干潟域において確認されてきた事例は断片的で、既往産地においては、自然度の低下と共に、確認困難となっているが、大部分の個体群減少を裏付ける根拠は乏しい。よって前回改定時の絶滅危惧 I A 類 (CR) よりランクを引き下げた。
- 現在の生息状況 : 沖縄島および石垣島の内湾域 (羽地内海・塩屋湾および名蔵湾) では底質の悪化が進行し、現在、生体の確認が困難となっている。しかし、西表島の水深 10 m 内外の河口水路から殻皮付き合弁死殻が数百個体単位で採集された例もあり、亜潮間帯に生息場所が形成されている可能性がある。2011 年には沖縄島大浦湾の河口域低潮線付近で少数の生貝が採集されたが、泥質化が進行し、生息範囲はきわめて局所的であった。
- 学術的意義・評価 : 近縁種にスナモグリ的一种との共生関係が知られており、特異な生態が不詳な部分の多い学術的に重要な貝類である。
- 生存に対する脅威 : 本種の生息場所である砂泥域は、都市下水や畜産排水などの富栄養化と赤土沈積で、著しく底質が悪化し、埋立て等による間接的悪影響も脅威となる。
- 特記事項 : 1990 年代より、干潟域においては出現個体数が著しく少ないため、予防原則を適応して絶滅危惧 II 類 (VU) としたが、亜潮間帯域における生息実態の把握が必要である。なお本種の学名種小名を「*decurvata*」とするのは誤綴。
- 原記載 : Adams, A., 1851. Monograph of *Sphaenia*, a genus of lamellibranchiate Mollusca. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1850: 86–89, pl. 10. (pp. 88–89, as *Sphaenia decurtata*. Type loc.: “in insulis Philippinis”, “Catanuan, province of Tayabas, island of Luzon, in sand at low water”)
- 参考文献 : 加藤 真・福田 宏, 1996. 二枚貝綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 65–73.
久保弘文, 2012. オフクマスオガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 167.
久保弘文, 2014. オフクマスオ. “レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 413.
久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック—レッドデータおきなわ— 第 2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—2. 西表島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
名和 純, 2005. オフクマスオ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 326.
- 執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

和名 : リュウキュウアリソガイ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 バカガイ科
学名 : *Mactra grandis* (Gmelin, 1791)
方言名 : タンパラミナー (名護市)
カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)

- 形態 : 殻長 10 cm に達する大型の二枚貝類。横長の亜三角形でやや膨らみ、殻表は紫褐色で平滑であるが、その上に褐色の殻皮を纏う。
- 近似種との区別 : リュウキュウバカガイは殻表が淡黄褐色であり、容易に区別される。
- 分布の概要 : 沖縄島、石垣島、西表島、台湾、海南島、中国南部、インド・太平洋。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : リュウキュウバカガイは奄美大島や宮古島に分布するが、本種はそれらの島々では確認されていない。
- 生態的特徴 : 潜砂位置が浅く、干潟表面にひょうたん型の穴が確認される場合がある。刺激を与えると水管から潮を吹くので、羽地内海では棒で海底をたたいて、これを目安に潮干狩りをしてきた。潜砂深度は浅く、植物プランクトン等を鰓でろ過して摂食する。水管はやや短い。
- 生息地の条件 : 内湾奥部の中～低潮線の泥砂底～細砂泥底に浅く埋入する。
- 個体数の動向 : 潮干狩りの獲物として採取されやすく、羽地内海や塩屋湾では乱獲傾向にある。また、羽地内海や沖縄島中南部の内湾奥では富栄養化により緑藻 (アナアオサ) が異常繁殖し、初夏の大潮干潮時に、干潟が覆われて腐敗し、酸欠状態となって、本種の大量斃死が確認されている。沖縄島中南部では、埋立てによる干潟消失で多くの個体群が減少した。
- 学術的意義・評価 : 沖縄県は本種の分布北限域にあたり、生物地理学的に重要。大型で可食部が大きいことから水産上も有用であり、羽地内海などではかつては高い密度で棲息していたため、食物連鎖上も生態的意義が大きい。
- 生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変による干潟の消失、陸域からの過剰栄養負荷による水質汚濁やアナアオサ被覆などによる底質悪化。
- 原記載 : Gmelin, J.F., 1791. Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, 3021–3910. (p. 3259, no. 12, as *Mactra grandis*. Type loc.: “--”))
- 参考文献 : 羽地内海の自然を守り育む会, 2008. 羽地内海うむするむん図鑑 羽地内海の多様な生きものとの暮らし。羽地内海の自然を守り育む会, 名護, 43 pp.
徐鳳山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図誌. 科学出版社, 北京, 8+336 pp.
久保弘文, 2012. リュウキュウアリソガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデー

タブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 140.
 久保弘文, 2014. リュウキュウアリソガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 403.
 名和 純, 2005. リュウキュウアリソガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 387-388.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : トウカイタママキ
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 バカガイ科
 学名 : *Mactra* aff. *pulchella* Philippi, 1846
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

図の解説 : p. 48. 大浦湾. 撮影 : 久保弘文.
 形態 : 殻長約 15 mm 内外の、横長の二等辺三角形を呈する小型二枚貝類。殻表は平滑で光沢が有り、うっすらと灰褐色の殻皮を纏い、太い褐色放射彩を飾る。殻頂はやや前方に寄る。
 近似種との区別 : 近縁種のナガタママキは、殻長 2 cm 程度とより大型で、放射彩が細くて数が多い他、殻頂がほぼ中央に位置する。
 分布の概要 : 種子島、奄美大島、徳之島、沖縄島北部、西表島 (トッドウマリ浜 : 別名月が浜)、台湾、中国南部 (海南島)。
 生態的特徴 : 砂中に浅く埋在して、海水ごと植物プランクトン等を吸い込んで、鰓でろ過摂食する。
 生息地の条件 : 非石灰岩性の外浜干潟や内湾の細砂質底、中潮線～水深 5 m 付近に生息する。
 個体数の動向 : 羽地外海では 2007 年以降、佐敷干潟での確認事例は 2005 年以降、全くない。大浦湾では水深 2 m 付近の細砂底に非常に少ないながら確認されている。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : バカガイ類は地理的分化が著しいグループで、分子系統解析によって、亜種や遺伝的に異なる地域個体群となる可能性が高く、今後の研究が期待される。本種はサンゴ砂の卓越する沖縄県において、むしろ非石灰質の外浜干潟に適応し、生態学的にも興味深い二枚貝類である。
 生存に対する脅威 : 埋立て、陸土の大量流入や都市排水などの水質汚濁が最大の減少要因と考えられる。
 原記載 : Philippi, R.A., 1846. Abbildungen und beschreibungen neuer oder wenig gekannter Conchylien, unter Mithilfe mehrer deutscher Conchyliologen, Band 2. Theodor Fischer, Cassel, *Mactra*, Tab. II, 71-74. (pp. 71-72, *Mactra* pl. 2, fig. 3, as *Mactra pulchella*. Type loc.: “China”)
 参考文献 : Huber, M., 2010. Compendium of Bivalves. A Full-color Guide to 3,300 of the World’s Marine Bivalves. A Status on Bivalvia after 250 Years of Research. ConchBooks, Hackenheim, 901 pp.
 久保弘文, 2014. トウカイタママキ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 404.
 久保弘文・山下博由, 2012. トウカイタママキ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 141.
 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : オトメタママキ
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 バカガイ科
 学名 : *Mactra* sp.
 カテゴリ : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

図の解説 : p. 48. 大浦湾. 撮影 : 久保弘文.
 形態 : 殻長約 10 mm の丸みを帯びた三角形の小型二枚貝類。殻表は光沢が強く、薄いピンク色で、殻頂が紅彩される他、後背縁も淡い赤紫色に染まる。水管は先端付近が赤褐色を帯び、水管幹部中央に白い斑紋が破線状に 3 本透けて見える。
 近似種との区別 : タママキガイ *Mactra cuneata* Gmelin, 1791 に似るが、遥かに小型で、殻表の光沢が強く、殻の膨らみが強いことで、区別される。
 分布の概要 : 沖縄島東海岸の金武湾、大浦湾と鹿児島県徳之島。
 生態的特徴 : 砂中に浅く埋在して、海水ごと植物プランクトン等を吸い込んで、鰓でろ過して摂食すると考えられる。
 生息地の条件 : リーフの発達が弱い河口域に隣接する内湾の細砂底に生息し、特に底質は造礁サンゴ由来ではなく、陸地起源の砂質を好む。
 個体数の動向 : 1990 年代後半まで金武湾の水深 2～5 m 付近の細砂底に生息していたが、2000 年以降、確認されていない。徳之島では 1997 年、打上げによる死殻の報告以外は記録が無い。大浦湾では、2007 年頃までは潮間帯に健全な個体群が見られたが、その後、大浦川河川浚渫後に泥質化が進行し、個体

<貝類>

- 数が激減した。大浦湾では低潮線から水深5 m付近までの細砂底にも生息環境があるが、底質環境は総じて泥質化が進行しており、その範囲も縮小傾向にある。
- 現在の生息状況 : 金武湾では2010年以降も確認されていないが、大浦湾では清浄な細砂底を中心に生息が確認されている。しかし、世界的に見ても、既知の分布域が非常に狭い希少種である。
- 学術的意義・評価 : 現在、確実に生息が確認出来る場所は大浦湾のみであり、未記載種の可能性もあり、生物地理学、及び進化生態学的にも極めて貴重な貝類である。
- 生存に対する脅威 : 湾内の泥質化、大規模な海洋環境攪乱。本種は大浦湾に少なからず個体群が残存するため絶滅危惧Ⅱ類 (VU) としたが、分布域が非常に狭く、かつ分断されており、少しでも個体群維持に問題が生じれば絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) に、即、昇格させるべきと考える。今後、当該生息域の環境攪乱等に対して、継続的なモニタリングが極めて重要である。
- 特記事項 : 生息海域に限られ、他海域から分断された湾域であることから、対象湾域の全体的な生態系保全が必要と考えられる。
- 参考文献 : 久保弘文, 2012. オトメタママキ (和名新称). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 141.
久保弘文, 2014. オトメタママキ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 233.
土田英治・黒住耐二, 1997. 奄美諸島徳之島, 山の海岸の貝類—特に外洋性砂浜群集について—, ちりぼたん, 27(3-4): 75-79.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : オオシマホクロガイ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 バカガイ科
学名 : *Oxyperas aspersa* (Sowerby I, 1825)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形態 : 殻は本科中、中型で、横長の亜三角形、殻表は薄い殻皮が覆い、弱い成長輪脈が多数刻まれる。殻色は灰白色地にほくろの様な黒褐色斑を散在させ、その多少は個体変異がある。最大殻長 5cm に達する。
- 近似種との区別 : 日本本土の内湾に生息するホクロガイは輪肋がより粗く、殻色が灰褐色であることで区別できる。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、久米島、先島諸島、フィリピン～インド洋。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ホクロガイは瀬戸内海等温帯域に分布するが、沖縄には生息しない。
- 生態的特徴 : 埋るる過食性であるが、その他、繁殖等の詳しい生態は不明。
- 生息地の条件 : 潮通しの良いサンゴ礁水路や湾域の低潮線直下～水深 10 m の砂礫～礫底。
- 個体数の動向 : 潜水調査では 1990 年代はサンゴ礁の粗砂底などで散見された種であるが、1995 年頃から出現頻度が減り、2015 年以降では恩納村万座毛に注ぐ河川水路や、名護湾で殻皮付き合弁死殻が確認されたが、それ以外は皆無な状況である。本部町南部から恩納村北部に至る名護湾岸では台風後に合弁死殻がしばしば打上げられる。先島諸島では産出は非常に少ない。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : バカガイ科の中では特異な形態をしており、日本本土内湾域のホクロガイとの関係も含め、系統分類学的に独特の種群と考えられる。
- 生存に対する脅威 : 生息地の条件にも記したとおり、清浄なサンゴ礁性礫底を好む。これはかつての沖縄県では普通に存在した環境だが、赤土など土壌微粒子の堆積や礫間の目詰まり、富栄養に伴う底質の還元化等が本種の生育阻害要因であろう。
- 原記載 : Sowerby, G.B. I, 1825. A Catalogue of the Shells Contained in the Collection of the late Earl of Tankerville, Arranged According to the Lamarckian Conchological System; Together with an Appendix, Containing Descriptions of Many New Species. E.J. Stirling, London, vii+92+xxxiv pp., 8 pls. (p. ii (in Appendix), no. 117, as *Maetra aspersa*. Type loc. not designated)
- 参考文献 : 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : チトセノハナガイ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 チトセノハナガイ科
学名 : *Anatinella nicobarica* (Gmelin, 1791)
カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形態 : 殻長約 3 cm、殻は薄い。殻表は、細かい布目状となり、後端部がやや尖る。歯には、よく発達した靱帯受けが見られる。
- 分布の概要 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生態的特徴 : 内湾低潮帯～潮下帯の粗砂泥底 (ウミジグサ、ウミヒルモ海草藻場) に低い密度で生息している。
- 生息地の条件 : 海草藻場とその周辺の潮間帯から水深 5 m 付近に分布する。
- 個体数の動向 : 稀な種で、密度に関する情報は無い。
- 現在の生息状況 : 現状は不明。ただし、過去に沖縄島名護市東岸で台風襲来後に海草類に混じり数十個体の生貝の打

ち上げが複数回確認されたこともあり、沿岸の海草藻場に分布の中心があると考えられる。

学術的意義・評価 : 1科1属1種の二枚貝類であり、進化生態学的にも貴重な種である。

生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。海草藻場の環境保全が重要である。

原 記 載 : Gmelin, J. F., 1791. *Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis.* Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, 3021-3910. (p.3221, no.12, as *Mya nicobarica*. Type loc.: “ad insulas Nicobaricas”)

参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. チトセノハナガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 144.

久保弘文, 2014. チトセノハナガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 402.

名和 純 2005. チトセノハナガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 321.

執 筆 者 名 : 小澤宏之

和 名 : **ハナグモリ**

分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 シジミ上科 ハナグモリ科

学 名 : *Glaucanome chinensis* Gray, 1828

カ テ ゴ リ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧II類 (VU)

形 態 : 殻長2 cm程度の横長の二枚貝類。殻は薄いが、厚い灰褐色の殻皮を纏い、後端にかけて楡皮茸状となる。沖縄の個体は殻皮が畝状に発達するものがあり、マツカゼハナグモリと呼ばれていた。

近似種との区別 : 沖縄県内に近似種は生息していない。

分布の概要 : 東京湾以西の内湾域、沖縄島、西表島、東南アジア、インド。

生態的特徴 : 潮間帯上～中部の泥干潟上縁部に比較的浅く潜っており、珪藻等植物プランクトンを主としたろ過食性貝類である。

生息地の条件 : 安定した内湾奥の潮間帯上部～中部に形成されるやや堅い泥質地に汀線帯(リップルマーク)に沿って個体群を形成する。

個体数の動向 : 沖縄島では1990年代まで糸満市から豊見城市に至る塩性湿地帯、佐敷周辺や中城湾北部のマングローブ縁辺部等に多産したが、それら個体群の多くは海浜埋立てにより、生息地ごと消失した。羽地内海では富栄養によるアナアオサの大発生に伴う底質被覆や還元化で、酸欠状態となり、しばしば二枚貝類の大量斃死が確認されているが、本種も同様に激減している可能性がある。

現在の生息状況 : 沖縄島では2010年以降でも羽地内海などで殻皮付きの死殻が打ち上がっているの、生存していると思われる。泡瀬では最湾奥のやや堅くしまった中潮線付近の泥底に見られるが、その生息範囲は大きく見積もって0.33km²程度と極めて狭い。

学術的意義・評価 : 先島諸島にまで分布を広げているが、生息地が分断されており、遺伝的交流が乏しい可能性も高く、集団遺伝学的解析が求められている。

生存に対する脅威 : 陸域との接点にあたる潮間帯上部に生息するため、埋立てが最大の脅威であるが、羽地内海では富栄養に伴う海藻マット被覆による酸欠や腐敗が生息環境を悪化させている。

原 記 載 : Gray, J.E., 1828. *Spicilegia Zoologica; or Original Figures and Short Systematic Descriptions of New and Unfigured Animals.*, Part 1. Treüttel, Würtz and Co., London, 12 pp, 11 pls. (pp. 6-7, pl. 3, fig. 13, 13a, as *Glaucanome Chinensis*. Type loc.: “China”)

参 考 文 献 : 名和 純, 2005. ハナグモリ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 343-344.

Wang, S., Jin, B., Qin, H., Sheng, Q. & Wu, J., 2015. Trophic dynamics of filter feeding bivalves in the Yangtze estuarine intertidal marsh: stable isotope and fatty acid analyses. *PLoS One*, 10(8): e0135604.

山下博由, 2012. ハナグモリ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 139.

山下博由, 2014. ハナグモリ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 402.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : **マダライオウハマグリ**

分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科

学 名 : *Pitar limatulus* (Sowerby II, 1851)

カ テ ゴ リ : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧I類 (CR+EN)

形 態 : 殻長約30 mmの丸みを帯びた亜三角型の二枚貝類。生時は殻表に砂を付着させ、貝殻後部の殻表にジグザグ状の細かい彫刻をもつ。殻色は全体的には淡黄白色だが、蝶番周辺が黒く染まる。

〈貝類〉

- 近似種との区別 : イオウハマグリはより丸みがあり、蝶番付近が黒く染まらないことで区別されるが、そもそも生息環境が重複しない。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島東海岸（大浦湾・金武湾・中城湾）、沖縄島西海岸（糸満市西崎・瀬長島・屋嘉田潟原・羽地外海等）、インドネシア、オーストラリア（クイーンズランド州北部）。
- 生態的特徴 : 砂中に浅く埋在于、海水ごと、植物プランクトン等を吸い込んで、鰓でろ過して摂食する。水管はやや短く、潜砂行動は不活発で、アマモの隙間や礫砂間に収まるように潜っている。よって、一旦、掘り起こされるとすぐ元に戻れない。
- 生息地の条件 : 潮通しのよい中潮線～水深2 m付近までのアマモ場とそれに隣接する細砂底に浅く埋在于する。
- 個体数の動向 : 1980年代後半まで羽地外海や沖縄市泡瀬では多産したが、現在、羽地外海では水質悪化やシルト堆積でほぼ消滅、泡瀬では埋立て後によりアマモ場が荒廃し、激減した。埋立て後に二次的に形成された細砂域での確認事例も1例のみあるが、現在、すべての分布域で個体数が著しく減少している。
- 現在の生息状況 : 泡瀬では埋立て事業後、著しく減少したが、2014年の調査では沖縄市泡瀬北岸で、台風後に数十個単位の殻皮付き合弁死殻が確認された。したがって、潜在的な個体群維持能力は未だに有している可能性があるが、同地以外では、生息事例が非常に乏しい。
- 学術的意義・評価 : 本種は先島諸島から記録が無く、生物地理学的に非常に重要であるほか、内湾性アマモ場に特徴的に見られ、生態学的にも興味深い二枚貝類である。
- 生存に対する脅威 : 本種は垂直分布の幅が狭く、すでに埋立てや海岸改変のために、多くのアマモ場が消失し、本種の個体群の多くは生息地ごと消失している。また、清浄な環境でのみ見つかるため、都市排水などの陸域からの過剰栄養負荷の増加が、生息阻害要因となる。
- 特記事項 : 属の所属については、殻表にジグザク彫刻を有することから、アジロポリハマグリ属 *Hyphantosoma* に属すとする文献 (Huber, 2010) もあるが、アジロポリハマグリ *H. intricatum* (Dautzenberg, 1907) は洞窟性の著しく堅固な大型種で、本種と同属とは考えにくく、今後、属のタイプ種を含め、再検討が必要。
- 原記載 : Sowerby, G.B. II, 1851. A monograph of the genus *Cytheraea*. Thesaurus conchyliorum, or, Monographs of Genera of Shells, vol. 2, Sowerby, G.B. II (ed.), 611-648, pls 127-136. (p. 640, no. 98, pl. 136, figs 200-201, as *Cytheraea limatulum*. Type loc.: "unknown")
- 参考文献 : Huber, M., 2010. Compendium of Bivalves. A Full-color Guide to 3,300 of the World's Marine Bivalves. A Status on Bivalvia after 250 Years of Research. ConchBooks, Hackenheim, 901 pp.
久保弘文, 2012. マダライオウハマグリ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 151.
久保弘文, 2014. マダライオウハマグリ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 241.
名和 純, 2005. マダライオウハマグリ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 561pp.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : リュウキュウアサリ
- 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科
- 学名 : *Tapes literatus* (Linnaeus, 1758)
- 方言名 : ヤジーナー (名護市)
- カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)
- 形態 : 最大殻長約10 cmに達する横長楕円形の平たい二枚貝類。
- 近似種との区別 : リュウキュウアサリ類には類似種が多く、ヒメリュウキュウアサリ、スリガハマ等が知られている。いずれも本種より小型である。また本種の幼貝期とは成長肋が粗いこと、殻に膨らみがあることで区別できる。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島及び周辺離島、先島諸島、フィリピン、オーストラリア。
- 生態的特徴 : サンゴ礫の多い粗砂底を好み、礫間にはまり込むようにして生息する。刺激を与えると水管から潮を吹くので、かつては羽地や泡瀬地区などでは棒で海底をたたいて、これを目安に潮干狩りをしてきた。潜砂深度は浅く、植物プランクトン等を鰓でろ過して摂食する。水管はやや短い。
- 生息地の条件 : 潮通しのよいアマモ場とそれに隣接する砂礫～礫底の中潮線～水深2 m付近までに浅く埋在于する。
- 個体数の動向 : 垂直分布が浅場に限定され、礫底を中心にいわれるガレ場を好む大型種であり、沖縄島・石垣島周辺では陸域からの赤土堆積による目詰まりで生息環境が著しく悪化した。特に沖縄島では中南部地区の埋立て事業が本格化する1980年代後半から激減した。先島諸島でも、全体に減少傾向にある。元々、魚市場で山積みされて売られていたほどの普通種であったが、沖縄島周辺、特に糸満・豊見城沿岸、中城湾等では埋立てや航路浚渫により、多くの生息地が消失し、市場からも姿を消した。
- 現在の生息状況 : 泡瀬では埋立て事業後、著しく減少したが、2014年の調査では沖縄市泡瀬北岸で、台風後に複数の合弁死殻が確認されている。また、名護湾、大浦湾でも合弁個体の打上げは見つかっているため、壊滅的な状況には達していないと考えられる。
- 学術的意義・評価 : かつての沖縄沿岸における大型二枚貝類の優占種であり、物質循環や食物連鎖上重要な役割を果たしていたと考えられ、生態学的意義は非常に大きく、水産学的にも存在意義は大きいと考えられる。
- 生存に対する脅威 : 埋立てによる生息地消失、加えて陸域からの過剰栄養負荷や土壌微粒子の大量流入によるサンゴ礫

- 間の目詰まりで、本種の生息条件は著しく悪化する。
- 特記事項：大型で殻が比較的薄く、肉が大きく美味であることから、サンゴ礁周辺干潟の優良な水産資源のひとつである。
- 原記載：Linnaeus, C. von, 1758. *Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 689, no. 124, as *Venus literata*. Type loc.: “Europa australi & India”)*
- 参考文献：羽地内海の自然を守り育む会, 2008. 羽地内海うむしるむん図鑑 羽地内海の多様な生きもの人々の暮らし. 羽地内海の自然を守り育む会, 名護, 43 pp.
- 久保弘文, 2012. リュウキュウアサリ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 152.
- 久保弘文, 2014. リュウキュウアサリ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 408.
- 名和 純, 2005. リュウキュウアサリ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 345-346.
- 執筆者名：久保弘文

4) 準絶滅危惧 (NT)

- 和名：ヤジリスカシガイ
- 分類：腹足綱 古腹足亜綱 スカシガイ上科 スカシガイ科
- 学名：*Macroschisma cuspidatum* (A. Adams, 1851)
- カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)
- 形態：殻は細長い笠型で前端が狭まる。貝殻の頂部が開口し、殻質は薄く、淡白色の地に黒色斑を散在させる。殻長 10 mm 内外。
- 近似種との区別：殻が細長く、前端が狭まる種は他になく、区別は明瞭。
- 分布の概要：沖縄島、規模の大きなアマモ場を保有する先島諸島。
- 生態的特徴：生時は緑色の軟体部に砂をうっすらと被ってアマモの隙間に隠れているため、ほとんど生貝の観察事例がない。藻食性と考えられるが、詳しい食性は不明である。
- 生息地の条件：潮通しの良い干潟のアマモ場やその周辺の細砂底に生息し、清浄な海域を好む。
- 個体数の動向：沖縄島ではうるま市海中道路付近や沖縄市泡瀬干潟に比較的多かったが、いずれも埋立てや海岸改変の影響で生息場所が大きく消失し、個体数が減少した。沖縄島南部でも糸満市、豊見城市では、埋立てにより、著しく生息地が縮小したが、埋立地前縁に残存する小規模なアマモ場に狭い範囲ながら、僅かな個体群の生残が確認された。先島諸島では、現在も、小浜島細崎や石垣島名蔵湾西北岸、崎枝湾等の底質が清浄で潮通しの良いアマモ場には、広く生息している。
- 学術的意義・評価：捕食者の多い亜熱帯海域において隠れ込みや擬態に適応し、貝殻を著しく細長い形に特殊化させており、生態学的意義は大きい。
- 生存に対する脅威：埋立て等浅海砂底域の消失、底質の泥質化や富栄養等の悪化。
- 原記載：Adams, A., 1851. A monograph of *Macrochisma* [sic], a genus of gasteropodous Mollusca belonging to the family Fissurellidae. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1850: 202–203. (p. 202, as *Macrochisma cuspidata* [sic]. Type loc.: “Cagayan, in insulis Philippinis”)
- 参考文献：久保弘文, 2005. ヤジリスカシガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 401.
- 久保弘文, 2012. ヤジリスカシガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 16.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
- 執筆者名：久保弘文

- 和名：クマノコ
- 分類：腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ上科 クボガイ科
- 学名：*Chlorostoma xanthostigma* A. Adams, 1853
- カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：該当なし
- 図の解説：p. 48. 名護市喜瀬 撮影：久保弘文。
- 形態：殻は中型でやや厚く、円錐形、殻表は濃緑灰色でやや光沢があり、臍域は鮮緑色に染まる。最大殻径約 40 mm。

- 近似種との区別 : 沖縄に産するクボガイ科は本種のみ。他の大型のニシキウズ上科貝類は模様があるが、本種はこれを欠くので明瞭に区別できる。
- 分布の概要 : 福島県／能登半島～奄美大島、県内では沖縄島北部のみ。台湾。
- 生態的特徴 : 藻食性、雌雄異体、体外受精。
- 生息地の条件 : 陸水の影響を受ける外洋に面した巨石の混じる転石帯。潮間帯に限定され、垂直分布域が狭い。
- 個体数の動向 : 1990年代に多産した名護市喜瀬や今帰仁村大井川河口などでは2000年以降、著しく減少した。その他の生息地でも海岸線道路の改修などで転石海岸の改変により、一部で縮小している。
- 学術的意義・評価 : 本邦では沖縄島を南限とする生物地理学的に極めて貴重な個体群で、また沖縄海域における唯一のクボガイ科貝類であり、種多様性上も重要である。
- 生存に対する脅威 : 河口改修や大量の陸土流入による岩礁表面への被覆。
- 特記事項 : 沖縄島北西岸の転石地帯には本種をはじめ、エナメルアマガイやクロタマキビモドキ等地理的に特異分布をする種が多いが、先述の通り、具体的な減少等に関する情報が不足している。学術的に重要であるので、今後、ランクづけに必要な情報の整備が望まれる。
- 原記載 : Adams, A., 1853. Contributions towards a monograph of the Trochidae, a family of gasteropodous Mollusca. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1851: 150-192. (p. 183, no. 32, as *Chlorostoma xanthostigma*. Type loc.: “—?”)
- 参考文献 : 久保弘文, 2005. クマノコ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 465.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
- 執筆者名 : 久保弘文

和名 : **オオベソスガイ**
分類 : 腹足綱 古腹足亜綱 ニシキウズ上科 リュウテン科
学名 : *Lumella cinerea* (Born, 1778)
方言名 : チンボーラー (広義)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 図の解説 : p. 49. 石垣島. 撮影 : 久保弘文.
- 形態 : 殻は厚く、背の低い球形で殻表は殆ど平滑でくすんだ緑灰色。臍孔は明瞭に開く。殻径 30～50 mm。石灰質の厚い蓋を持つ。
- 近似種との区別 : カンギクとは殻表が平滑で大型化する事により区別は明瞭。
- 分布の概要 : 八重山諸島、台湾。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 小笠原諸島に分布するオガサワラスガイは別種であり、インド・太平洋広域にわたる種間・個体群間の分子系統解析など分類学的再検討が必要と考えられる。
- 生態的特徴 : 藻食性で夜間ならびに満潮時に活動する。休止時には岩礫基部の砂中に隠れ込むことがある。
- 生息地の条件 : 外洋に面した非石灰岩性の玉石帯や岩礫地で、陸域からの淡水伏流 (浸み出し) がある場所を好む。
- 個体数の動向 : 石垣島北部や西表島東部等、場所によって個体数が大きく減少し、個体サイズの小型化が見られる。
- 現在の生息状況 : 人為的改変の少ない西表島西部等では豊かな個体群が認められる場所があるが、概ね減少傾向にある。
- 学術的意義・評価 : 宮古諸島、沖縄島周辺に分布せず、八重山諸島が世界的に見ても分布北限で、生物地理学的に重要であり、生息場所も限定されることから生態的に興味深い研究材料となる。
- 生存に対する脅威 : 潮間帯の藻食性小型巻貝類はチンボーラーとして、潮干狩りの対象となり、本種もその中に包含されるが、場所によっては乱獲され、個体群の縮小やサイズの小型化が認められる。
- 原記載 : Born, I.E. von, 1778. Index rerum naturalium Musei Caesarei Vindobonensis. Verzeichniss der Natürlichen Seltenheiten des K.K. Naturalien Kabinets zu Wien. Erster Theil, Schalthiere. Pars 1, Testacea. ex Officina Krausiana, Vindobonae, 38+458+82 pp. (pp. 356-357, as *Turbo cinereus*. Type loc. not designated)
- 参考文献 : 久保弘文, 2005. オオベソスガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 401-402.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263pp.
- 執筆者名 : 久保弘文

和名 : **タオヤメユキスズメ (ヌノメミヤコドリ)**
分類 : 腹足綱 アマオブネ型亜綱 Cycloneritimorpha 目 アマオブネ上科 ユキスズメ科
学名 : *Phenacolepas tenuisculpta* Thiele, 1909
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形態 : 殻は本科中では小型、やや長い楕円の笠形で、殻頂は前端に位置し、胎殻は平滑で大きい。殻表は褐色の殻皮を被り、細かい格子状彫刻を有する。軟体は赤橙色。最大殻径 5 mm 程度。
- 近似種との区別 : 近似種ミヤコドリはより大型で、よく膨れ、丸みが強い。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、久米島、先島諸島、フィリピン、南太平洋。

生態的特徴 : 埋没した岩盤下(埋れ石)で殆ど移動しない可能性がある。軟体部が赤く、貧酸素に対応し、ヘモグロビンを持っていると考えられる。その他、詳しい生態は不明。

生息地の条件 : 潮間帯の、赤く酸化的環境にある埋れ石の下面(黒く還元的な環境には少ない)。

個体数の動向 : 1990年以降に埋立てにより、沖縄島中南部では豊見城市、糸満市、与那原町等で生息地の大きな消失が生じた。内湾的な干潟周辺の岩盤下に潜む習性から、都市部や離島を問わず、農産地域等の富栄養化傾向にある海域において、底質の悪化による生息場所の制限を総じて受けている。

現在の生息状況 : 現在も環境悪化が継続している。

学術的意義・評価 : 埋れ石下環境への適応等、特異な生態から学術的に重要な貝類である。

生存に対する脅威 : 都市下水や畜産排水等の富栄養化と赤土沈積による、埋れ石下環境の悪化。埋立てによる生息場所の消失。

原 記 載 : Thiele, J., 1909. Cocculinoidea und die Gattungen *Phenacolepas* und *Titiscania*. Systematisches Conchylien-Cabinet von Martini und Chemnitz, Bd. 2, Abt. 11a, (539): 1-48, pls 1-6. (p. 37, pl. 6, figs 10-11, as *Phenacolepas tenuisculpta* (Garrett in MS). Type loc.: "Pazifischer Ozean bei den Fidschi-Inseln")

参 考 文 献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱. "日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状", 花輪伸一・佐久間浩子(編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
福田 宏, 2012. タオヤメユキスズメ(ヌノメミヤコドリ). "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 26.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : **レモンカノコ**

分 類 : 腹足綱 アマオブネ型亜綱 Cycloneritimorpha 目 アマオブネ上科 アマオブネ科

学 名 : *Clithon pauluccianum* (Gassies, 1870)

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 殻は小型で、亜球形、殻表は平滑で光沢があり、変異に富んだ鮮やかな色彩の模様を有する。蓋はレモン色。殻径約 10 mm 以下。

近似種との区別 : 近似種ハナガスマカノコ、ヒメカノコは、蓋が濁灰色であることから区別できる。

分布の概要 : 汀線に安定した陸水伏流のある沖縄県全域の島嶼。

生態的特徴 : 同種の貝殻上や小石等にドーム状の卵嚢を産み付け、孵化してベリジャー幼生となる。藻食性。

生息地の条件 : 汀線付近の伏流環境に生息する。

個体数の動向 : 宮古・石垣両島では伏流水の富栄養化と還元化によって、硫化物による底質悪化などが見られ、生息に適さなくなっている他、沖縄島は埋め立てや人工護岸化等のために自然海岸自体が消失し、生息場所が大きく減少している。

学術的意義・評価 : 汽水性アマオブネ類は両側回遊性で、生態学的研究の解明に重要な研究材料である。本種は河川の遡上こそしないが、伏流環境に選択的に着底して、生息場所を形成する。

生存に対する脅威 : 伏流水の富栄養化による底質悪化。埋立てによる生息場所消失。地下水や陸水利用のために生じる伏流水の枯渇。

特 記 事 項 : 広域に分布する両側回遊性種で、分布域が広いと考えられることなどから、個体群の維持は海流の状況の変動による幼生供給の多寡にも影響される可能性がある。また、自然海岸の消失が著しく、総じて生息環境が悪化の一途を辿っているため、各個体群は今後の存続が懸念される。なお、本種の学名は従来「*Clithon souverbiana* (Montrouzier, 1863)」とされることが多かったが、これはキンランカノコに相当し、両種の学名は長年に渡って取り違えられてきた(福田他, 2014)。

原 記 載 : Gassies, J.B., 1870. Diagnoses d'espèces inédites provenant de la Nouvelle-Calédonie. Journal de Conchyliologie, 18: 140-150. (pp. 149-150, no. 22, as *Neritina Paulucciana*. Type loc.: "Lifu, insularum Loyalty")

参 考 文 献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱. "日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状", 花輪伸一・佐久間浩子(編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
福田 宏・藤野睦子・江田伸司, 2014. 岡山県倉敷市高洲で生貝が見出されたウミヒメカノコ(腹足綱:アマオブネ科), ならびに同種とキンランカノコ・レモンカノコを巡る同定の混乱. 倉敷市立自然史博物館研究報告, (29): 29-38.
Komatsu, S., 1986. Taxonomic revision of the neritid gastropods. Special Publication of the Mukaishima Marine Biological Station, for 1986: 1-69.
久保弘文, 2012. レモンカノコ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 18.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執 筆 者 名 : 久保弘文・福田 宏

和 名 : **ヒラマキアマオブネ**

分 類 : 腹足綱 アマオブネ型亜綱 Cycloneritimorpha 目 アマオブネ上科 アマオブネ科

学 名 : *Nerita planospira* Anton, 1838

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

〈貝類〉

- 形態 : 殻は大型で厚く、角張った半球形、螺層上部が偏圧し、平巻き状となる。殻表は螺条を多数めぐらし、内唇には皺がある。蓋は黒灰色で微顆粒を有する。殻径約 30 mm 以下。
- 近似種との区別 : 近似種アマオブネはより小型で平巻きにならず、輪廓は半球状をなす。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、宮古島、八重山諸島、台湾、中国南部沿岸、インド・太平洋。
- 生態的特徴 : マングローブ林内に生息し、藻食性で、下げ潮時直後に活動することが多い。
- 生息地の条件 : マングローブ林の幹の根元や気根上（中潮線）のみに付着する。垂直分布の幅が狭く、マングローブ林があればどこにでもいるというわけではなく、乾燥の進んだ環境では見られない。
- 個体数の動向 : 今のところ、西表島では個体数は少なくない上、同島の生息環境は自然公園法で保護されているが、沖縄島金武町億首川流域・羽地内海、石垣島川平湾・宮良湾等で減少傾向にある。
- 学術的意義・評価 : マングローブ生態系特有の種として生態学的価値が高い。
- 生存に対する脅威 : マングローブ環境の攪乱や鑑賞・標本用または飼育用採取による乱獲。
- 原記載 : Anton, H.E., 1838 (for 1839). Verzeichniss der Conchylien welche sich in der Sammlung von Herrmann Eduard Anton befinden. Herausgegeben von dem Besitzer. Eduard Anton, Halle. xvi+110 pp. (p. 30, no. 1153, as *Nerita planospira*. Type loc. not designated)
- 参考文献 : 久保弘文, 2012. ヒラマキアマオブネ, “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 21.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー2. 西表島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中。
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : アラハダカノコ
- 分類 : 腹足綱 アマオブネ型亜綱 Cycloneritimorpha 目 アマオブネ上科 アマオブネ科
- 学名 : *Neritina asperulata* Récluz in Sowerby, 1849
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 殻は中型で、へしゃげた半球形、殻表はざらざらした殻皮が被覆し、荒肌状となる。殻口内唇は橙黄色。殻径 10~20 mm 程度。蓋は黒褐色で平滑。
- 近似種との区別 : 他の陸水アマオブネ類と比べ、貝殻が薄く弱い。近似種キジビキカノコはより小型で内面滑層は灰白色である。
- 分布の概要 : 沖縄島、石垣島、西表島。
- 生態的特徴 : 岩盤や貝殻上にドーム上の卵囊を産み付け、卵囊からベリジャー幼生が浮出し、海へ下って、成長し、再び河川を遡上すると考えられている。
- 生息地の条件 : 河口閉塞がなく、淀みの少ない河川の中流域に生息する。夜行性で、やや隠蔽された岩の隙間などに棲む。
- 個体数の動向 : 沖縄島では北部 3 河川、中部 1 河川で記録されている。八重山ではアマオブネ類の多様性が高い限られた河川だけに生息する。しかし、すべての河川で個体数が少ない。沖縄島中部の 1 河川では大規模な河川改修があり、現在は生息が認められなくなった。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 両側回遊性で生態学的研究の解明に重要な材料である。移動性に乏しく、長期的な河川環境の安定性を鑑みる指標としても重要である。
- 生存に対する脅威 : 自然度の高い河川に出現する傾向があるため、都市排水や様々な水質悪化、人為的要因による流れの停滞や渇水が懸念される。
- 特記事項 : 本種の学名記載年を「1853」または「1855」としている文献があるが、正しくは 1849 である。
- 原記載 : Récluz, M.C., 1849. Monograph of the genus *Neritina*. Thesaurus conchyliorum, or, Monographs of Genera of Shells, vol. 2, Sowerby, G.B. II (ed.), 507-546, pls 59-66. (p. 512, no. 20, pl. 114, figs 160-161, as *Neritina asperulata*. Type loc.: “On small stones in a rivulet, Island of Luzon”)
- 参考文献 : 久保弘文, 2002. 沖縄県産陸水性アマオブネガイ類の日本新記録2種. ちりぼたん, 33(1-4): 33-39.
久保弘文, 2005. アラハダカノコ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 348.
久保弘文, 2012. アラハダカノコ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 21.
- 執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

- 和名 : クロズミアカグチカノコ
- 分類 : 腹足綱 アマオブネ型亜綱 Cycloneritimorpha 目 アマオブネ上科 アマオブネ科
- 学名 : *Neritina* sp.
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 殻は本科中、中型で、半卵形、殻表は黒褐色の殻皮が被覆し、殻口内面滑層は濃褐色。殻径 20 mm 以下。蓋は漆黒色。

近似種との区別 : 近似種カバクチカノコ、クリグチカノコ等はより丸みが強く、蓋に放射彩を有する。
分布の概要 : 沖縄島北部、石垣島、西表島、与那国島。
生態的特徴 : 岩盤や貝殻上にドーム上の卵囊を産み付け、卵囊からベリジャー幼生が浮出し、海へ下って、成長し、再び河川を遡上すると考えられている。
生息地の条件 : 自然環境が保全された河川の上流域の滝等に生息し、他の多くの陸水性アマオブネ類は偶発的に堰等の人工的な環境にも認められることがあるが、本種はそれがほとんど無い。おそらく本種はその形状から、岩表面の凹凸のある地形への棲み場要求があると推測される。
個体数の動向 : 石垣島の一部生息場所では2014年の渇水で全滅した。西表島では比較的健全な生息場所が残っている。沖縄島北部では個体数が非常に少なく、偶発的な可能性が高い。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 両側回遊性で生態学的上、重要な研究材料である。移動性に乏しく、成熟個体群の維持された場所では長期的な河川環境の安定性を鑑みる指標としても重要である。
生存に対する脅威 : 狭い範囲に生息することから収集家によって乱獲されやすい。
参考文献 : 福田 宏, 1996, 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
 久保弘文, 2005, クロズミアカグチカノコ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 404-405.
 久保弘文, 2012, クロズミアカグチカノコ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 22.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

執筆 者 名 : 久保弘文

和名 : ヤエヤマヤマトニシ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
学名 : *Cyclophorus radians* Kuroda, 1960
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 貝殻は中型 (殻径 25~30 mm) で、螺塔はやや高く、臍孔は狭い。殻はやや厚い。螺層は膨らみ、縫合は深く窪み、体層周縁の弱く角張る。殻色は淡橙色で、体層周縁に暗褐色の色帯を持つことが多く、底面に細くて弱い色帯を複数持つことがあり、上面には多数の斑点を持つ。殻表は平滑。殻口は全縁で丸く、殻口縁は少し広がり肥厚する。

近似種との区別 : 琉球列島のヤマトニシ類は形態が酷似した種が多数存在する一方で、種内変異が激しく、形態に基づく識別は極めて困難である。本種は、八重山諸島に分布する唯一のヤマトニシであり、他の種とは識別できる。

分布の概要 : 八重山諸島の石垣島と西表島にのみ分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島から宮古島にかけてリュウキュウヤマトニシ、伊平屋島にイヘヤマヤマトニシとヒメオキナワヤマトニシ、沖縄島にクニガミヤマトニシ、イトマンヤマトニシ、オキナワヤマトニシが、台湾には *C. friesianus* Moellendorff, 1883 他数種が分布する。

生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 定量的なデータはないが、本種の生息に適した森林環境は減少、悪化しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況 : 西表、石垣島に生息するが、他のヤマトニシ類よりも自然林への依存性が高く、個体数も少ない。

学術的意義・評価 : ヤマトニシ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

原記載 : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+104 pp. (p. 71, as *Cyclophorus turgidus radians* (Pilsbry & Hirase, MS.). Type loc.: “八重山西表島”)

参考文献 : 東 正雄, 1995. 原色日本産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, xvi+343 pp., 80 pls.
 波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls 15-17.

執筆 者 名 : 上島 励

和名 : リュウキュウヤマトニシ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
学名 : *Cyclophorus turgidus* Pfeiffer, 1851
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)*

*ミヤコヤマトニシ 準絶滅危惧 (NT). 本改訂(沖縄県)はミヤコヤマトニシをリュウキュウヤマトニシの地域集団として扱った。

〈貝類〉

- 形態 : ヤマトニシとしては小型から大型(殻径17~35mm)で、螺塔はやや高く、臍孔は開く。殻は厚い。螺層は膨らみ、縫合は深く窪む。体層周縁は一般に角張るが、その程度は強い竜骨になるものから、ほぼ丸いものまで変異する。殻色は白色から褐色で、体層周縁に暗褐色の色帯を持つことが多く、底面に細くて弱い色帯を複数持つことがあり、上面には多数の斑点を持つ。殻口は全縁で丸く、殻口縁は少し広がり肥厚する。貝殻の大きさ、形、色、周辺角の強さ、臍孔の広さにおいて、地理的変異が極めて著しく、同じ種とは思えないほどの変異性を示す。
- 近似種との区別 : 琉球列島のヤマトニシ類は形態が酷似した種が多数存在する一方で、種内変異が激しく、形態に基づく識別は極めて困難である。特に本種は地理的変異が激しく、形態による識別は一部の地域集団を除くと不可能である。
- 分布の概要 : 沖縄島と周辺の島、慶良間諸島、久米島、宮古島にかけて広く分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島には本種の他にクニガミヤマトニシ、イトマンヤマトニシ、オキナワヤマトニシが生息し、伊平屋島にはイヘヤマトニシ、ヒメオキナワヤマトニシ、八重山諸島にはヤエヤマヤマトニシ、台湾には *C. friesianus* Moellendorff, 1883 他数種が分布する。
- 生態的特徴 : 自然林の落葉下に生息することが多いが、林縁などの開けた環境にも生息する。
- 生息地の条件 : 同上。
- 個体数の動向 : 一部の地域集団では分布域が縮小した証拠があるが、他の集団の動向は不明。
- 現在の生息状況 : 地域集団によって生態的特性が異なり、攪乱された環境でも多産する集団がある一方で、湿った自然林を好む一部の地域集団では分布域が減少している。
- 学術的意義・評価 : ヤマトニシ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要。
- 生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、近縁種との交雑。
- 特記事項 : ミヤコヤマトニシ *C. miyakoensis* Pilsbry & Hirase, 1905 は独立種とされてきたが、本種の地域集団に過ぎない。本種は形態や生態に地理的変異が激しく、場所によっては減少していることが明らかなので、保全は地域集団単位で行う必要がある。宮古島の地域集団は、ミヤコヤマトニシとして宮古島市自然環境保全条例保全種(2005年)に指定されている。
- 原記載 : Pfeiffer, L., 1851. *Conspectus emendatus generum et specierum Cyclostomaceorum*. Zeitschrift für Malakozoologie, 8: 129-144. (pp. 139-140, no. 88, as *Cyclophorus turgidus*. Type loc.: "Liew Kiew")
- : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1905. *New land mollusks of the Japanese Empire*. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 57: 705-719. (p. 705, as *Cyclophorus turgidus miyakoensis*. Type loc.: "Miyako, in the Southwestern group of the Ryukyu Islands")
- 参考文献 : 東正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, xvi+343 pp., 80 pls.
- 執筆者名 : 上島 励

和名 : **イヘヤマトニシ (新称)**
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
学名 : *Cyclophorus* sp. 1
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 図の解説 : p. 49. 撮影 : 上島 励。
- 形態 : 貝殻は中型(殻径25mm前後)で、螺塔はやや高く、臍孔は狭い。殻はやや厚い。螺層は膨らみ、縫合は深く窪み、体層周縁は角張る。殻色は白色から褐色で、体層周縁に暗褐色の太い色帯を持つことが多く、底面にも細くて弱い色帯を複数持つことがあり、上面には多数の斑点を持つ。殻表は平滑。殻口は全縁で丸く、殻口縁は少し広がり肥厚する。
- 近似種との区別 : 琉球列島のヤマトニシ類は形態が酷似した種が多数存在する一方で、種内変異が激しく、形態に基づく識別は極めて困難である。本種は、伊平屋島の固有種で、伊平屋島の南部に生息するヒメオキナワヤマトニシとは分布域を異にする。
- 分布の概要 : 伊平屋島の固有種で、伊平屋島の南部を除くほぼ全域に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 伊平屋島には本種の他にヒメオキナワヤマトニシが生息し、沖縄島から宮古島にかけてリュウキュウヤマトニシ、沖縄島にクニガミヤマトニシ、イトマンヤマトニシ、オキナワヤマトニシ、八重山諸島にはヤエヤマヤマトニシ、台湾にはマキヒダヤマトニシ *C. friesianus* Moellendorff, 1883 他数種が分布する。
- 生態的特徴 : 主として自然林の落葉下に生息するが、林縁や道路脇などの開けた環境にも生息する。
- 生息地の条件 : 同上。
- 個体数の動向 : 過去のデータはないが、個体数は多い。
- 現在の生息状況 : 自然林に多いが、人為的環境にも生息し、個体数は多い。
- 学術的意義・評価 : ヤマトニシ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要。
- 生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、近縁種との交雑。
- 特記事項 : 未記載種。
- 執筆者名 : 上島 励

和名 : **クニガミヤマトニシ (新称)**
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ヤマトニシ科
学名 : *Cyclophorus* sp. 3
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 49. 撮影 : 上島 励

形態 : 貝殻はヤマタニシとしては中型(殻径 20~30 mm)で、螺塔はやや高く、臍孔は狭い。殻は厚い。螺層は膨らみ、縫合は深く窪み、体層周縁は角張る。殻色は淡橙色で、体層周縁に暗褐色の色帯を持つことが多く、底面に細くて弱い色帯を複数持つことがあり、上面には多数の斑点を持つ。殻表は平滑。殻口は全縁で丸く、殻口縁は少し広がり肥厚する。

近似種との区別 : 琉球列島のヤマタニシ類は形態が酷似した種が多数存在する一方で、種内変異が激しく、形態に基づく識別は極めて困難である。本種は、沖縄島北部にのみ生息し、他の種と分布域を異にする。

分布の概要 : 沖縄島北部にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島から宮古島にかけてリュウキュウヤマタニシ、伊平屋島にイヘヤマタニシとヒメオキナワヤマタニシ、沖縄島には本種の他にイトマンヤマタニシ、オキナワヤマタニシ、八重山諸島にはヤエヤマヤマタニシが、台湾にはマキヒダヤマタニシ *C. friesianus* Moellendorff, 1883 他数種が分布する。

生態的特徴 : 主として自然林の湿った落葉下に生息するが、林縁などの開けた環境にも生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 過去のデータがないので、不明。

現在の生息状況 : 多くの場所では多産するが、産地によっては少ない。

学術的意義・評価 : ヤマタニシ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、近縁種との交雑。

特記事項 : 未記載種。

執筆者名 : 上島 励

和名 : **イトマンヤマタニシ (新称)**

分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマタニシ上科 ヤマタニシ科

学名 : *Cyclophorus* sp. 4

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 49. 撮影 : 上島 励

形態 : 貝殻はヤマタニシとしては小型から中型(殻径 20~25 mm)で、螺塔はやや高く、臍孔は狭い。殻は厚い。螺層は膨らみ、縫合は深く窪み、体層周縁は弱く角張る。殻色は淡橙色で、体層周縁に暗褐色の色帯を持つことが多く、底面に細くて弱い色帯を複数持つことがあり、上面には多数の斑点を持つ。殻表は平滑。殻口は全縁で丸く、殻口縁は少し広がり肥厚する。

近似種との区別 : 琉球列島のヤマタニシ類は形態が酷似した種が多数存在する一方で、種内変異が激しく、形態に基づく識別は極めて困難である。本種は、沖縄島南部にのみ生息し、他の種と分布域を異にする。

分布の概要 : 沖縄島南部にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島から宮古島にかけてリュウキュウヤマタニシ、伊平屋島にイヘヤマタニシとヒメオキナワヤマタニシ、沖縄島には本種の他にクニガミヤマタニシ、オキナワヤマタニシ、八重山諸島にはヤエヤマヤマタニシが、台湾にはマキヒダヤマタニシ *C. friesianus* Moellendorff, 1883 他数種が分布する。

生態的特徴 : 落葉下に生息するが、自然林のみならず、道路脇や人家近くなどの開けた環境にも多産する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 動向は不明であるが、個体数は多い。

現在の生息状況 : 個体数は多く、道路脇や人家近くなどの開けた環境にも多産するため、乾燥や環境の変化に強い種。

学術的意義・評価 : ヤマタニシ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要。

生存に対する脅威 : 近縁種との交雑。

特記事項 : 未記載種。個体数は多く、環境変化にも強いと思われるが、分布域が狭く、近縁種との交雑が起きているため注意が必要。

執筆者名 : 上島 励

和名 : **ヤエヤマアツブタガイ**

分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマタニシ上科 ヤマタニシ科

学名 : *Cyclotus taivanus peraffinis* Pilsbry & Hirase, 1905

方言名 : フタグワチンナン (総称)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻径約 14~15 mm の光沢の強い淡赤褐色の平巻状の殻と、石灰質の厚い蓋を持つ。

近似種との区別 : 石垣・西表両島には本属は本種のみ産し、同じく厚い蓋を持つヤエヤマヒラセアツブタガイは殻に光沢を持たない点で容易に区別できる。

分布の概要 : 石垣・西表両島の山間部に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 台湾にはタイワンアツブタガイなど複数種が分布しているが、それらと同種群と考えられる。

生態的特徴 : 落葉と礫の堆積した場所に生息する。

<貝類>

- 生息地の条件 : 同上。
個体数の動向 : 西表島では少なくない。石垣島では南部の石灰岩地帯を中心に確認されるが個体数は多くない。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 沖縄諸島・宮古諸島では確認されておらず、石垣・西表両島と台湾のみに分布する種群で、生物地理学的に重要である。
生存に対する脅威 : 西表島では安定した生息環境が広がっているが、石垣島では南部を中心に森林伐採による林床の乾燥、宅地や墓地造成等の開発による生息場所自体の消失が進んでいる。
原 記 載 : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1905. New land mollusks of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 57: 705-719. (pp. 705-706, as *Cyclotus taivanus peraffinis*. Type loc.: "Yaeyama, Ryukyu Islands")
参 考 文 献 : 知念盛俊, 1976. 陸産貝類. "生態写真集 沖縄の生物", 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212-243.
波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls 15-17.
池辺進一, 1973. 西表島の陸産貝. かいなかま, 6(4): 9-12.
黒住耐二, 2005. ヤエヤマアツブタガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) -レッドデータおきなわ-", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 411.
李彦錚・陳文徳, 2003. 自然観察図鑑3 蝸牛. 親親文化事業有限公司, 台北, 287 pp.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : **アオミオカタニシ**
分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマタニシ上科 ヤマタニシ科
学 名 : *Leptopoma taivanum* Moellendorff, 1883
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形 態 : 殻は小さく (殻径約 1.5 cm)、螺塔はやや高く (殻長約 1.5 cm)、円錐型。螺管はよく膨らみ、体層周縁は丸く、縫合は深い。殻口は円形で、殻口縁は広がる。殻は白色から半透明で、薄く、外套膜および上層の軟体部の表面は鮮やかな緑色で、生時にはその色が殻を透けて見える。臍孔は狭い。蓋は褐色で、円形。
近似種との区別 : 樹上性で、半透明の殻を持ち、緑色の軟体部が殻から透けて見えることで、他のヤマタニシ類とは容易に区別できる。
分布の概要 : 台湾から奄美にかけて広く分布する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : *Leptopoma* 属はアジアを中心に分布し、同種および近縁種 *L. tigris* Lee & Wu, 2001 が台湾に生息する。
生態的特徴 : 樹上性で、主として葉の裏に生息する。自然林のみならず、人家近くの林や林縁にも生息する。
生息地の条件 : 同上。
個体数の動向 : 比較的個体数は多いが、人家近くでは生息環境が失われることがあり、全体的には減少していると思われる。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 南アジア系の陸産貝類で、日本はこの属の北限にあたる。
生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、乱獲。
特記事項 : 学名は再検討が必要。
原 記 載 : Moellendorff, O.F. v., 1883. Materialien zur Fauna von China. Jahrbücher der Deutschen Malakozoologischen Gesellschaft, 10: 272-288, pl. 10. (pp. 287-288, pl. 10, fig. 4, as *Leptopoma taivanum*. Type loc.: "ad Sakuli prope Takao insulae Formosa")
参 考 文 献 : 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, xvi+343 pp., 80 pls.
執 筆 者 名 : 上島 励

和 名 : **ヤエヤマヒラセアツブタガイ**
分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマタニシ上科 ヤマタニシ科
学 名 : *Platyrhaphe hirasei yaeyamensis* Kuroda, 1960
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形 態 : 最大殻径 11 mm に達する。平巻状の白い殻と石灰質の厚い蓋を持つ。生時には殻に泥を付着させて擬態化する。
近似種との区別 : 与那国島を除く八重山諸島には本属は本種のみ産し、ヤエヤマアツブタガイとは光沢のある殻を持たない点で容易に区別できる。
分布の概要 : 石垣島、西表島、波照間島。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属の種は沖縄県各島嶼に分布しているが、それぞれ形態的に非常に類似し、ヨナグニアツブタガイとも外見上の区別は困難である。台湾の文献では、台湾産の同属の種を沖縄島のヒラセアツブタガイと同種としているが、再検討が必要。

生態的特徴 : 降雨時には石灰岩上で、殻を立てて匍匐する。繁殖等詳しい生態は不明。
 生息地の条件 : 主に石灰岩地に見られ、落葉や土壌の堆積する石灰岩の窪み等に棲息する。
 個体数の動向 : 西表島南部、波照間島では少なくないが、石垣島では東・南部の石灰岩地帯を中心に2013年の干ばつの影響で著しく個体数が減少した。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : ヒラセアツブタガイ類は奄美群島では記録が無いにも関わらず、沖縄島～台湾に分布し、中琉球から台湾という特異な地理的分布をもち、生物地理学的に重要で、各島嶼間の種分化や類縁関係等においても未解明な部分が多く、進化生物学的意義も大きい。
 生存に対する脅威 : 火山性土壌が多い石垣島、西表島においては石灰岩地が限定されており、農地開拓等による森林伐採等生息場所の破壊が最も悪影響を及ぼすと考えられる。
 特記事項 : 石垣・西表と波照間島の個体群にはサイズなどに若干の形態的差異が見られる。
 原記載 : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録(頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+104 pp. (p. 72, as *Platyrrhaphe hirasei yaeyamensis*. Type loc.: “八重山石垣島, 西表島”)
 参考文献 : 知念盛俊, 1990. 西表島の陸産貝類. “平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書”, 環境庁自然保護局(編), 環境庁自然保護局, 東京, 267-275.
 波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls 15-17.
 黒住耐二, 2005. ヤエヤマヒラセアツブタガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)―レッドデータおきなわ―”, 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 412-413.
 李彦錚・陳文徳, 2003. 自然観察図鑑3 蝸牛. 親親文化事業有限公司, 台北, 287 pp.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ミヤコゴマガイ**
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ゴマガイ科
 学名 : *Diplommatina (Sinica) immersidens* Pilsbry & Hirase, 1904
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

図の解説 : p. 49. A: ミヤコゴマガイ型. B: ワキシメゴマガイ型. すべて宮古島産. 撮影: 亀田勇一.
 形態 : 殻長 3.5~4 mm, 殻径 1.7~2 mm, 太い紡錘形で縫合はやや浅い。螺塔はやや丸みのある円錐形。淡黄褐色で規則的な成長肋を持つ。殻口は円形で軸歯は弱く、腔壁はやや長い。緊線から約1層成長して殻口を形成するとミヤコゴマガイ、さらに 1/4~3/4 層余分に成長して殻口を形成するとワキシメゴマガイやコシボソゴマガイと名付けられた形態になる。

近似種との区別 : クメジマゴマガイやヤエヤマゴマガイとは、殻表の成長肋が粗く、縫合のくびれが浅く、太い紡錘形となることで区別される。

分布の概要 : 池間島、下地島を除く、宮古諸島固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 八重山諸島にヤエヤマゴマガイ、久米島にクメジマゴマガイが分布する。

生態的特徴 : 林床の落葉下に棲息し、林縁部にも多産する傾向がある。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 棲息地では比較的多産するが、産地は減少傾向にある。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 琉球列島では中型のゴマガイ類は島ごとに種分化して固有種となっており、進化的・生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 林内だけでなく林縁にも棲息するため、道路拡張などの局所的な森林の改変が個体群に打撃を与える可能性がある。また、ニューギニアヤリガタリクウズムシやツヤオズアリなど外来の捕食者の影響も懸念される。

特記事項 : ワキシメゴマガイ・コシボソゴマガイは本種の種内変異として扱った。宮古島市自然環境保全条例 保全種(ミヤコゴマガイ・コシボソゴマガイ・ワキシメゴマガイ) (2005年)。

原記載 : Pilsbry, H. A. & Hirase, Y., 1904. Descriptions of new land snails of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 56: 616-638. (pp.623-624, as *Diplommatina (Sinica) immersidens*. Type loc.: “Miyakojima, Riukiu”)

参考文献 : Chinen, M., 1976. Land shells of Miyako-jima and adjacent Islands. Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 2: 89-94.

Ikehara, S., Abe, T., Omine, T., Chinen, M. & Shimojima, M., 1977. Preliminary study on the forest floor macrofauna in the Ryukyu Islands. Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 55-74.

久保弘文, 準備中. 陸産貝類. “宮古島市史 自然編”, 宮古島市教育委員会(編), 宮古島市教育委員会, 宮古島.

湊 宏, 1980. 宮古群島の陸産貝類相. Venus, 39(2): 83-99.

湊 宏, 1985. 再びワキシメゴマガイとコシボソゴマガイ. ちりぼたん, 16(1): 17-19.

大原健司, 1994. 宮古諸島の陸産貝類相. かいなかま, 28(3): 1-7.

執筆者名 : 亀田勇一

<貝類>

和名 : クメジマゴマガイ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ゴマガイ科
学名 : *Diplommatina (Sinica) kumejimana* Pilsbry & Hirase, 1904
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻は日本産ゴマガイ類としては中型で、殻長 3.0 mm、殻径 1.4 mm。螺塔は高い円錐形で、体層と次体層はほぼ同幅。淡黄褐色で螺層には細かい成長肋を持つ。殻口は円形で肥厚反転し、軸唇下部はやや尖る。腔襞はやや長い。

近似種との区別 : 本種は螺塔が高い円錐形になる点でヨナグニゴマガイ (ウオズミゴマガイ) に類似するが、成長肋が細かく、腔襞がやや長く、かつ殻口も比較的大きいことで区別される。

分布の概要 : 久米島の固有種で、島内には石灰岩の有無にかかわらず比較的広く分布している。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ミヤコゴマガイが宮古諸島に、ヤエヤマゴマガイが石垣島・西表島に分布する。

生態的特徴 : 比較的自然度の高い森林の林床落葉下に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 湿度の高い自然林で棲息が確認されるが、まとまった個体数が見出される場所は減少傾向にある。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 琉球列島では中型～大型のゴマガイ類は島ごとに種分化して固有種となっており、進化的・生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 林内だけでなく林縁にも棲息するため、道路拡張などの局所的な森林の改変が個体群に打撃を与える可能性がある。また、温暖化や乾燥化が進んで林床の環境が変われば、速やかに減少する可能性もある。

原記載 : Pilsbry, H. A. & Hirase, Y., 1904. Descriptions of new land snails of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 56: 616-638. (p.623, as *Diplommatina (Sinica) kumejimana*. Type loc.: "Kumejima, Riukiu").

参考文献 : 東 正雄・東 良雄・平田義浩, 1992. 久米島の陸産貝類相. Venus, 50: 264-269.

知念盛俊, 1976. 陸産貝類. "生態写真集 沖縄の生物", 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212-243.

Chinen, M., 1976. Land shells of Miyako-jima and adjacent Islands. Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 2: 89-94.

増田 修, 2014. クメジマゴマガイ. "レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 271.

品川和久, 1978. 沖縄県久米島における陸貝採集記録. かいなかま, 12(2): 4-14.

執筆者名 : 亀田勇一・黒住耐二* *前回改訂版 (2005) における黒住による記載内容を一部引用した。

和名 : クニガミゴマガイ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ゴマガイ科
学名 : *Diplommatina (Sinica) lyrata lyrata* (Gould, 1859)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻長 3 mm、殻径 1.5 mm、螺塔は高い円錐形で縫合のくびれはやや弱い。淡い赤褐色で規則的な成長肋を持つ。殻口は丸い六角形状で、軸唇下部は嘴状にやや突出する。腔襞はやや長く、体層の 1/3 程度。

近似種との区別 : トクノシマゴマガイとは、軸唇下部の突出がより明瞭で、次体層背面の肋が粗いことで区別される。

分布の概要 : 沖縄島と伊平屋島の山地に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 亜種のトクノシマゴマガイは奄美諸島に分布する。

生態的特徴 : 比較的自然度の高い森林に棲息する。地上棲。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 沖縄島産のゴマガイ類としては比較的個体数は多い方であるが、棲息できる環境はある程度限られており、確認数は減少傾向にある。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 琉球列島では中型のゴマガイ類は島ごとに種分化して固有種となっており、進化的・生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 自然度の高い湿潤な環境を好むため、伐採だけでなく林道建設・拡張などの局所的な森林の改変でも棲息に悪影響を及ぼしかねない。また、温暖化や乾燥化が進んで林床の環境が変われば、分布域全体で急速に減少する可能性もある。

原記載 : Gould, A. A., 1859. Descriptions of new species of shells brought home by the North Pacific Exploring Expedition. Proceedings of the Boston Society of Natural History, 7: 138-142. (p.138, as *Paxillus lyratus*. Type loc.: "Loo Choo Islands")

参考文献 : 知念盛俊, 1965. 沖縄産陸産貝の採集と標本の作り方 (I). 沖縄生物学会誌, 2(4): 77-88.

知念盛俊, 1976. 陸産貝類. "生態写真集 沖縄の生物", 新星図書, 沖縄, 212-243.

Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.

知念盛俊・治井正一・儀間一恵, 1995. 大宜味村の陸・淡水棲貝類. "大宜味村の自然, 大宜味村動植物調査報告書, 大宜味村文化財調査報告書 (4)", 大宜味村教育委員会 (編), 大宜味村教育委員会, 大宜味, 295-327.

久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
 増田 修. 2014. クニガミゴマガイ. “レッドデータブック2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 272.

執筆者名 : 亀田勇一・黒住耐二* *前回改訂版(2005)における黒住による記載内容を一部引用した。

和名 : **ヨナグニゴマガイ**
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマトニシ上科 ゴマガイ科
 学名 : *Diplommatina (Sinica) yonakunijimana* Pilsbry & Hirase, 1909
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

図の解説 : p. 49. A, B: ヨナグニゴマガイ型. C: ウオズミゴマガイ型 (Holotype of *D. uozumii* Minato, 1976; NSMT-Mo 49716). 撮影: 亀田勇一.

形態 : 殻長 3.2~4 mm, 殻径 1.7~2 mm. 螺塔は高い円錐形。淡黄褐色で規則的な成長肋を持つが、緊線より前方では平滑となることもある。殻口は円形で軸歯は弱く、腔壁はやや短い。緊線から約1層成長して殻口を形成するとウオズミゴマガイ、さらに 1/4~3/4 層余分に成長して殻口を形成するとヨナグニゴマガイと名付けられた形態になる。

近似種との区別 : 体層や自体層が著しくくびれる個体が出現する点はミヤコゴマガイに類似するが、本種は螺塔の輪郭が直線的で、腔壁も短いことで識別される。

分布の概要 : 与那国島固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本産で近縁な種は今のところ不明。形態変異の傾向が似るミヤコゴマガイは宮古諸島に分布する。

生態的特徴 : 比較的自然度の高い森林の湿った落葉下に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 湿度の高い自然林で棲息が確認されるが、まとまった個体数が見出される場所は減少傾向にある。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 琉球列島では中型のゴマガイ類は島ごとに種分化して固有種となっており、進化的・生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 林内だけでなく林縁にも棲息するため、道路拡張などの局所的な森林の改変が個体群に打撃を与える可能性がある。近年の過剰乾燥も棲息地が減少している要因と考えられる。

特記事項 : ウオズミゴマガイは本種の種内変異として扱った。

原記載 : Pilsbry, H. A. & Hirase, Y., 1909 (for 1908). New land Mollusca of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 60: 586-599. (pp.588-589, as *Diplommatina yonakunijimana*. Type loc.: “Yonakunijima, Osumi”)

参考文献 : 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う希少貝類棲息実態調査報告ー1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.

前田和俊・太田 秀・鹿野康裕・上島 励, 1987. 横須賀市自然博物館所蔵平瀬貝類標本目録 (II) 陸産貝類 (2) 前鰓亜綱, 有肺亜綱 (オナジマイマイ科を除く). 横須賀市博物館資料集, (11): 1-71.

湊 宏, 1976. 与那国島の陸産貝類相. Venus, 35: 163-183.

執筆者名 : 亀田勇一

和名 : **ヤエヤマヘナタリ**
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニツノガイ上科 キバウミニナ科
 学名 : *Pirenella asiatica* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし

図の解説 : p. 49. 西表島由布島. 撮影: 久保弘文.

形態 : 殻長 13.2~16.9 mm. 殻はヘナタリに酷似するがより細く、螺層の3本の螺肋のうち縫合下のものが最も太く、そのすぐ下の螺肋の2倍の幅を持つ。殻口外唇の肥厚はヘナタリより弱い。

近似種との区別 : 上記参照。

分布の概要 : 八重山諸島 (石垣島、西表島)、中国南部、台湾、ベトナム、シンガポール。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄県ではカワアイがほぼ全域、ヘナタリが沖縄島のみに産するのに対し、本種は石垣・西表両島でしか確認されていない。

生態的特徴 : 干潟表層の菌類や藻類を摂食する。本種も恐らくヘナタリ同様、浮游幼生期を経る。

生息地の条件 : ヘナタリとほぼ同様であるが、本種は流水に洗われるより清浄な粗砂底を好む傾向がある。

個体数の動向 : 本県では石垣・西表両島に限られ、川平湾、仲良川、古見、船浦等に産するが、生息場所は局在的である。

現在の生息状況 : 個体数は少なくないが、今後の環境変化によって減少する可能性もある。

学術的意義・評価 : 八重山諸島は本種の世界的北限かつ日本唯一の産地である。西表島船浦は本種のタイプ産地である。

<貝類>

- 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立等の開発、マングローブ破壊、水質・土壌汚染。
- 特記事項 : これまでもっぱらヘナタリと混同されてきたが、形態及び分子系統解析によって別種とみなされた。
- 原記載 : Reid, D.G. & Ozawa, T., 2016. The genus *Pirenella* Gray, 1847 (= *Cerithideopsilla* Thiele, 1929) (Gastropoda: Potamididae) in the Indo-West Pacific region and Mediterranean Sea. *Zootaxa*, 4076: 1–91. (pp. 53–56, figs 1, 2T, 3A, 4C, D, 15B, 18, as *Pirenella asiatica*. Type loc.: “Funaura Bay, Iriomote Is., Okinawa Pref., Japan”)
- 参考文献 : 福田 宏・木村昭一, 2012. ヘナタリ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 29.
- Kamimura, S., Itoh, H., Ozeki, S. & Kojima, S., 2010. Molecular diversity of *Cerithidea* gastropods inhabiting Suncheon Bay, and the Japanese and Ryukyu Islands. *Plankton & Benthos Research*, 5 (Supplement): 250–254.
- Kojima, S., Kamimura, S., Iijima, A., Kimura, T., Kurozumi, T. & Furota, T., 2006. Molecular phylogeny and population structure of tideland snails in the genus *Cerithidea* around Japan. *Marine Biology*, 149: 525–535.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 生態/検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 那覇, 264 pp.
- 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1–44.
- 名和 純, 2005. ヘナタリ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)–レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 418.
- 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1–81, figs 1–33, pls 1–20, tables 1–3.
- 小澤智生, 2017. 最近なされたフトヘナタリ科 (新生腹足亜綱: オニノツノガイ上科) の分類学的改定–特に日本近海産の構成種の改定に関連して. ちりぼたん, 印刷中.
- Ozawa, T., Yin, W., Fu, C., Claremont, M., Smith, L. & Reid, D.G., 2015. Allopatry and overlap in a clade of snails from mangroves and mud flats in the Indo-West Pacific and Mediterranean (Gastropoda: Potamididae: *Cerithideopsilla*). *Biological Journal of the Linnean Society*, 114: 212–228.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : ヘナタリ

分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニノツノガイ上科 キバウミナ科

学名 : *Pirenella nipponica* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻長 16.6~32.6 mm. 殻は細長い塔形、殻頂は尖り、厚質堅固。各螺層に黄褐色の螺肋を 3 本巡らし、縫合下の 1 本は他の 2 本より幅広い。体層の腹面左側に太い縦張肋を持つ。殻口外唇は著しく肥厚反転し、前端は前管溝を超えて籠状に突出する。蓋は円く多旋型、革質で濃茶褐色。

近似種との区別 : カワアイは赤茶褐色で、螺肋は成長脈で切られて顆粒状となり、殻口前端的の突出が弱い。ヤエヤマヘナタリ、スエヒロヘナタリの項も参照。

分布の概要 : 東京湾・能登半島～沖縄島、韓国、中国東岸、台湾。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : カワアイは宮城県～先島諸島、韓国、中国、台湾、ベトナムまで分布する。

生態的特徴 : 干潟表層の菌類や藻類を摂食する。夏季に産卵し、12~20 日の浮游幼生期を経て、成熟まで 2 年を要する。

生息地の条件 : 河口汽水域中～低潮帯の砂泥底表層。

個体数の動向 : 本県では沖縄島に限られ、塩屋湾、羽地内海、大浦湾、泡瀬、佐敷等に産する。

現在の生息状況 : 個体数は少なくないが、今後の環境変化によって減少する可能性もある。

学術的意義・評価 : 沖縄島は国内の分布最南限であり、世界的にも台湾に次いで南の産地である。

生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立等の開発、マングローブ破壊、水質・土壌汚染。

特記事項 : 従来の学名 *Cerithideopsilla cingulata* (Gmelin, 1791) は別種で、日本には分布しない。

原記載 : Reid, D.G. & Ozawa, T., 2016. The genus *Pirenella* Gray, 1847 (= *Cerithideopsilla* Thiele, 1929) (Gastropoda: Potamididae) in the Indo-West Pacific region and Mediterranean Sea. *Zootaxa*, 4076: 1–91. (pp. 56–59, figs 1, 3C–E, 4E, F, 15C, 19, as *Pirenella nipponica*. Type loc.: “Kushida R., Matsunase, Matsusaka, Mie Pref., Japan”)

参考文献 : 福田 宏・木村昭一, 2012. ヘナタリ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 29.

Kamimura, S. & Tsuchiya, M., 2004. The effect of the feeding behaviour of the gastropods *Batillaria zonalis* and *Cerithideopsilla cingulata* on their ambient environment. *Marine Biology*, 144: 705–712.

Kojima, S., Kamimura, S., Iijima, A., Kimura, T., Kurozumi, T. & Furota, T., 2006. Molecular phylogeny and population structure of tideland snails in the genus *Cerithidea* around Japan. *Marine Biology*, 149: 525–535.

Meziane, T. & Tsuchiya, M., 2000. Fatty acids as tracers of organic matter in the sediments and food web of a mangrove/intertidal flat ecosystem, Okinawa, Japan. *Marine Ecology Progress Series*, 200: 49–57.

名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1–44.

名和 純, 2005. ヘナタリ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)–レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 418.

名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1–81, figs 1–33, pls 1–20, tables 1–3.

小澤智生, 2017. 最近なされたフトヘナタリ科 (新生腹足亜綱: オニノツノガイ上科) の分類学的改定–特に日本近海産の構成種の改定に関連して. ちりぼたん, 印刷中.

Ozawa, T., Yin, W., Fu, C., Claremont, M., Smith, L. & Reid, D.G., 2015. Allopatry and overlap in a clade of snails from mangroves and mud flats in the Indo-West Pacific and Mediterranean (Gastropoda:

Potamididae: *Cerithideopsilla*). Biological Journal of the Linnean Society, 114: 212–228.

執筆者名： 福田 宏・久保弘文

和名： **イボウミニナ**
 分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニノツノガイ上科 ウミニナ科
 学名： *Batillaria zonalis* (Bruguère, 1792)
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 絶滅危惧II類 (VU)

形態： 殻長 40 mm。ウミニナ科としては大型。殻全体は細長く、殻口外唇の上部が深く湾入する。
 近似種との区別： 殻口外唇の上部が深く湾入する点で近縁種と明確に判別できる。
 分布の概要： 沖縄島（主に東岸の内湾干潟）、西表島。
 生態的特徴： 高密度で見られることがある。干潟上のデトリタスを摂食する。
 生息地の条件： 内湾干潟の礫を含む砂泥底に見られる。中潮線から低潮線にかけて分布。
 個体数の動向： 沖縄島の生息地では、大きな変化はない。
 学術的意義・評価： 本州周辺の個体群では減少傾向にあるのに対し、沖縄県の個体群は比較的健全な状況にある。
 生存に対する脅威： 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。
 原記載： Bruguère, J. G., 1792. Encyclopédie méthodique, ou par ordre des matières. Histoire naturelle des vers, Tome 1. Chez Panckoucke, Paris, 757pp. (pp.497-498, no.39, as *Cerithium zonale*. Type loc. not designated)
 参考文献： 木村昭一, 2014. イボウミニナ. “レッドデータブック2014 –日本の絶滅のおそれのある野生生物 –6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 276.
 木村昭一・福田 宏, 2012. イボウミニナ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 31.
 名和 純, 2005. イボウミニナ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) –レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 419.

執筆者名： 小澤宏之

和名： **サナギモツボ**
 分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニノツノガイ上科 スナモツボ科
 学名： *Finella pupoides* A. Adams, 1860
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 絶滅危惧II類 (VU)

図の解説： p. 49. A: 石垣島名蔵湾. B: 名護湾. C: 羽地内海. 撮影：久保弘文。
 形態： 殻長 4 mm、殻径 1.5 mm。殻は細長い蝸形で、螺層の膨らみと縫合のくびれは強い。殻表に細い螺肋を等間隔に巡らし、成長脈と交わって格子目状となる。殻表は淡黄褐色で、縫合下・周縁・殻底に茶褐色の色帯を巡らす。殻口は小さく壺形。蓋は円く赤褐色、革質半透明で多旋型。頭部・腹足はベージュ色で、頭部と口吻の側面は黒く縁取られる。短い外套触角を持つ。足は狭く細長い。沖縄県産個体には殻の太さや縦肋の強さに大きな変異があり、複数種が混在している可能性もあるため再検討が必要である。
 近似種との区別： シヤマツボは各螺層に2~5本の強い螺肋がある。ツヤマツボは光沢が強く、螺肋が低く幅広い。
 分布の概要： 三陸海岸・佐渡島~南西諸島、熱帯インド-太平洋。
 近縁な種及び群との分布状況の比較： シヤマツボは沖縄県でも那覇市、南城市佐敷から産出記録がある (Hasegawa, 1998)。一方、ツヤマツボは主として温帯域に見られ、沖縄県では明確な記録がない。
 生態的特徴： 未詳。
 生息地の条件： 内湾奥~湾口部の低潮帯~潮下帯の海底表層を匍匐する。軟泥底にも砂底にも見られるが、湾奥の砂泥底に最も多く、特にアマモ場を好む。
 個体数の動向： かつては東北以南の広い範囲で普通種であったが、九州以北では近年激減した。一方、奄美大島と沖縄県には現在も健在産地が複数ある。
 現在の生息状況： 潮間帯下部~潮下帯上部に産する微小種のため見つけにくく、沖縄県ではいまだ調査不足であるが、未知の産地が多く存在する可能性がある。
 生存に対する脅威： 埋立や海底浚渫などの海岸開発、水質汚濁。
 特記事項： 愛知・熊本・鹿児島各県レッドデータブック掲載種。
 原記載： Adams, A., 1860. On some new genera and species of Mollusca from Japan. Annals and Magazine of Natural History, Ser. 3, 6: 331–337. (p. 336, as *Finella pupoides*. Type loc.: “Tsu-Sima; 26 fathoms. Korea Strait; 46 fathoms”)
 参考文献： 愛知県環境調査センター (編), 2009. 愛知県の絶滅の恐れのある野生生物–レッドデータブック あいち–2009動物編. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋, 651 pp.
 福田 宏, 2012. サナギモツボ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 28.
 福田 宏, 2014. サナギモツボ. “レッドデータブック2014–日本の絶滅のおそれのある野生生物 –6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 278.
 Hasegawa, K., 1998. A review of Recent Japanese species previously assigned to *Eufenella* and *Crathrofenella* [sic] (Mollusca: Gastropoda: Cerithioidea). Memoirs of the National Science Museum,

Tokyo, (31): 165-186.

執筆者名： 福田 宏

和名： ミジンゴマツボ

分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 ワカウラツボ科

学名： *Liroceratia sulcata* (Boettger, 1893)

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧II類 (VU)

形態： 殻長 2 mm、殻径 0.9 mm。殻は円筒形で厚く、殻色は本来白色であるが多くの場合硫化化合物を沈着させて濃赤褐色を呈する。殻表はレール状の強い螺肋を体層で約 8 本、次体層で約 5 本、等間隔に巡らす。殻頂は平坦で胎殻は中央が凹む。殻口外唇は肥厚する。蓋は革質で黄褐色半透明、少旋型。頭部-腹足は無色半透明で目立った彩色がない。

近似種との区別： ジーコンボツボの項を参照。

分布の概要： 紀伊半島 (田辺湾)、奄美大島、石垣島、フィリピン、パプアニューギニア。

近縁な種及び群との分布状況の比較： ジーコンボツボの項を参照。

生態的特徴： 未詳だが、胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。

生息地の条件： 内湾湾口部やマングローブ辺縁において礫混じりの砂泥干潟に半ば埋もれた石の下に見られ、亜熱帯の埋もれ石下還元環境に特徴的な貝類群集の一員である。

個体数の動向： ミヤコドリやニセゴマツボ等と同所的に産するが、それらの種より産地・個体数ともに少なく、沖縄県でも既知産地は数箇所にとどまる。

現在の生息状況： 微小種のため見つけにくく、沖縄県ではいまだ調査不足であるが、未知の産地が多く存在する可能性もある。

生存に対する脅威： 護岸・埋立・海底浚渫等海岸環境の改変、水質汚濁。

特記事項： *Pellamora minutata* Laseron, 1956 は異名。

原記載： Boettger, O., 1893. Die marinen Mollusken der Philippinen, nach den Sammlungen des Herrn José Florencio Quadras in Manila. Nachrichtenblatt der Deutschen Malakozoologischen Gesellschaft, 25: 97-115. (p. 99, as *Cingula sulcata*. Type loc.: "Cebu")

Laseron, C.F., 1956. The families Rissoinidae and Rissoidae (Mollusca) from the Solanderian and Dampierian zoogeographical provinces. Australian Journal of Marine and Freshwater Research, 7: 384-484. (pp. 424-425, 477, fig. 99, as *Pellamora minutata*. Type loc.: "Port Moresby, New Guinea")

参考文献： 江川和文, 1993. 奄美大島産リソツボ科 Rissoidae 貝類の図説. 九州の貝, (40/41): 75-117.

福田 宏, 2012. ミジンゴマツボ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 40.

福田 宏, 2014. ミジンゴマツボ. "レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 292.

長谷川和範, 2000. カワグチツボ科. "日本近海産貝類図鑑", 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 162-165.

Lozouet, P. & Plaziat, J.-C., 2008. Mangrove Environments and Molluscs. Abatan River, Bohol and Panglao Islands, Central Philippines. ConchBooks, Hackenheim, 160 pp.

三長孝輔・三長秀男, 2006. 和歌山県田辺湾奥部干潟に生息する貝類. かきつばた, (32): 7-14.

三長孝輔・三長秀男, 2015. 和歌山県田辺湾奥部干潟に生息する貝類 II. かきつばた, (40): 2-16.

Ponder, W.F., 1984. A review of the genera of the Iravadiidae (Gastropoda: Rissoacea) with an assessment of the relationships of the family. Malacologia, 25: 21-71.

執筆者名： 福田 宏

和名： ニセゴマツボ

分類： 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 ワカウラツボ科

学名： *Pellamora reflecta* Laseron, 1956

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

図の解説： p. 49. 殻 (左): 石垣島名蔵. 殻 (右): 南城市安座真. 生体: 石垣島崎枝. 撮影: 久保弘文 (殻, 左), 福田 宏 (それ以外).

形態： 殻長 2.7 mm、殻径 1.4 mm。殻は円筒形で厚く、殻色は本来白色であるが多くの場合硫化化合物を沈着させて橙色～褐色を呈する。殻表は縦肋と螺肋が交わって格子目状を成し、螺肋間に微細な螺脈を巡らす。殻頂は平坦。殻口外唇は肥厚する。蓋は革質で黄褐色、辺縁の核を中心に成長脈が同心円状を成す。頭部-腹足は無色半透明、白色斑を散在する。

近似種との区別： ウチノミツボに酷似するが、後種は微細な螺脈を欠く。ジーコンボツボの項も参照。

分布の概要： 紀伊半島 (田辺湾)、奄美大島、沖縄島、石垣島、オーストラリア北部。

近縁な種及び群との分布状況の比較： ジーコンボツボの項を参照。

生態的特徴： 胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。

生息地の条件： 内湾湾口部の礫混じりの砂泥干潟に半ば埋もれた石下に産し、タオヤメユキスズメ等と共に亜熱帯

の埋もれ石下還元環境に特徴的な貝類群集の一員である。

- 個体数の動向 : 沖縄県ではジーコンボツボやミジンゴマツボより産地は多いが、既知産地は数箇所のみ。
 現在の生息状況 : 個体群はいずれも小規模で、狭い範囲に限定される。
 生存に対する脅威 : 護岸・埋立・海底浚渫等海岸環境の改変、水質や底質の汚濁。特に埋もれ石下の棲息環境は、陸土微粒子の大量流入により目詰まりを生じやすい。
- 特記事項 : 属の所属はGolding (2014) を参考にして、原記載での見解に戻した。
 原記載 : Laseron, C.F., 1956. The families Rissoinidae and Rissoidae (Mollusca) from the Solanderian and Dampierian zoogeographical provinces. Australian Journal of Marine and Freshwater Research, 7: 384-484. (pp. 423-424, 477, fig. 94, as *Pellamora reflecta*. Type loc.: "Darwin")
- 参考文献 : 江川和文, 1993. 奄美大島産リソツボ科 Rissoidae 貝類の図説. 九州の貝, (40/41): 75-117.
 福田 宏・久保弘文, 2012. ニセゴマツボ, “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 38.
 Golding, R.E., 2014. Molecular phylogeny and systematics of Australian 'Irvadiidae' (Caenogastropoda: Truncatelloidea). Molluscan Research, 34: 222-257.
 長谷川和範, 2000. カワグチツボ科, “日本近海産貝類図鑑”, 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 162-165.
 三長孝輔・三長秀男, 2006. 和歌山県田辺湾奥部干潟に生息する貝類. かきつばた, (32): 7-14.
 三長孝輔・三長秀男, 2015. 和歌山県田辺湾奥部干潟に生息する貝類 II. かきつばた, (40): 2-16.
 Ponder, W.F., 1984. A review of the genera of the Irvadiidae (Gastropoda: Rissoacea) with an assessment of the relationships of the family. Malacologia, 25: 21-71.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

- 和名 : エドガワミズゴマツボ (ウミゴマツボ)
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 ミズゴマツボ科
 学名 : *Stenothyra edogawensis* (Yokoyama, 1927)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 図の解説 : p. 49. 豊見城市漫湖. 撮影 : 福田 宏.
 形態 : 殻長 2.5 mm, 殻径 1.5 mm. 殻は背腹に扁圧された卵円錐形、やや薄く半透明、光沢あるオリーブ色、体層背面に不明瞭な褐色斑をもつ。体層が殻長の 3/4 を占め、殻口は極端に小さく円形。殻表に微細な螺旋状点刻列を多数巡らす。蓋は円形、革質で少旋型、内面に一對の低い突起を持つ。

- 近似種との区別 : オキナワミズゴマツボはより大形で、点刻列は不明瞭または欠き、褐色斑もない。
 分布の概要 : 宮城県万石浦・若狭湾～九州、沖縄島。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島の各島には他に淡水棲のオキナワミズゴマツボが産する。
 生態的特徴 : 藻類等を摂食する。10～20個が一列に連なる卵を夏季に固い基質上に産み、2日後に浮游幼生となり、短期間で定着後、成熟する。

- 生息地の条件 : 内湾奥の河口汽水域下流部、干潟中～低潮帯の砂泥・軟泥底表層や藻類上。
 個体数の動向 : 沖縄島では羽地内海、中城湾、漫湖で記録され、場所によっては多産する。
 現在の生息状況 : 個体数は少なくないが、今後の環境改変によって減少する可能性もある。
 学術的意義・評価 : 沖縄島は本種の分布最南限である。
 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立等の開発、マングローブ破壊、水質・土壌汚染。
 特記事項 : 沖縄島の個体群は本州～九州産と形態的に識別困難であるが、大隅諸島～与論島に産出例がなく、産地が飛び離れているため遺伝的な差異を検討する必要がある。

- 原記載 : Yokoyama, M., 1927. Mollusca from the Upper Musashino of western Shimosa and southern Musashi. Journal of the Faculty of Science of the Imperial University of Tokyo, Ser. 2, 1: 439-457, pls 51-52. (p. 452, pl. 51, fig. 13, as *Rissoa (Amphithalamus) edogawensis* [sic]. Type loc.: "Ichikawa")

- 参考文献 : Fukuda, H., 1994. Estuarine mollusks of the Edogawa Drain, central Honshu, Japan. Science Report of the Takao Museum of Natural History, (16): 1-14.
 福田 宏, 2012. エドガワミズゴマツボ (ウミゴマツボ, ミヤジウミゴマツボ, ミジンウミゴマツボ, ミヤジマウミゴマツボ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 44.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
 名和 純, 2005. ウミゴマツボの一種. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 417-418.
 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.
 Tataru, Y., 2015. Life history of *Stenothyra edogawensis* (Gastropoda: Stenothyridae) in the innermost part of Tokyo Bay, Japan. Venus, 73: 71-74.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

〈貝類〉

和名 : オイランカワザンショウ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 カワザンショウ科
学名 : Assimineidae gen. C & sp.
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

図の解説 : p. 50. 標本 : 宮古島平良荷川取成川 クーラ水辺公園. 生体 : 石垣島白保 轟川. 撮影 : 福田 宏.
形態 : 殻長 3.5 mm, 殻径 2 mm. 殻は高円錐形で光沢が強く、茶褐色、殻底に明瞭な白帯を巡らし、殻口軸唇は鮮やかな紅色。縫合下の螺溝は明瞭。臍孔は狭く開き、その周囲に螺状陵角を巡らす。蓋は革質で半透明、少旋型。

近似種との区別 : ヨシダカワザンショウとホンジュサンカワザンショウに似るが、両種よりも螺層の膨らみと縫合の縊れが弱く、殻底の白色帯と軸唇の紅色がより鮮明。

分布の概要 : 種子島、屋久島、奄美大島、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ヨシダカワザンショウは北海道南部～九州、ホンジュサンカワザンショウは韓国南部に限られる。

生態的特徴 : 未詳。

生息地の条件 : 河口マングローブ内や辺縁の砂泥底の転石、落葉、朽木等の下に見られ、時に汽水域上流や淡水域にも産する。多くの場合サツマクリイロカワザンショウ、アシヒダツボが随伴する。

個体数の動向 : 南西諸島の河口棲カワザンショウ科の中では普通種であるが、マングローブ縮小に伴い、棲息可能範囲は徐々に減少傾向にある。

現在の生息状況 : 沖縄島と久米島では多産するが、先島諸島では少ない。

学術的意義・評価 : 未記載種。沖縄県は分布の最南限。本種とヨシダカワザンショウ、ホンジュサンカワザンショウに対して新属の創設が必要。

生存に対する脅威 : マングローブ伐採、河口や海岸の護岸・埋立、水質や底質の悪化。

参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島 国頭郡大宜味村塩屋 大保大川河口 (塩屋湾奥). “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 113-114.

福田 宏, 2012. オイランカワザンショウ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 47.

増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 : 福田 宏

和名 : マルシロネズミ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 シロネズミ上科 シロネズミ科
学名 : *Vanikoro helicoidea* (Le Guillou, 1842)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻は本科中では大型、亜球形、臍孔は明らかに開く。殻表は多数の微細螺条をめぐらし、灰白色。殻径 20 mm 程度。蓋は革質で薄く、殻口に比べて、小さく退化的。

近似種との区別 : 類似種カゴメシロネズミは殻表に縮れた縦肋があることで区別される。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島及び周辺離島、宮古島、石垣島、西表島他、インド・太平洋。

生態的特徴 : 岩盤の下で殆ど移動せず、定在的生活を行い、雄性先熟で雄雌が同所的に生息し、成熟と共に緑がかる丸みを帯びた楕円形の卵嚢を、自らが生息する岩下面の狭い空間に産み付ける。

生息地の条件 : 潮間帯下部～水深 2 m 付近までのアマモ場における埋れ石下に生息する (黒く還元的な環境には見られない)。

個体数の動向 : 沖縄島中南部では 1990 年以降の埋立てにより、生息地が大きく消失した。都市部や農畜産地域に隣接する内湾的なアマモ場では富栄養により、埋れ石下の環境が還元化し、生息確認が困難な状況である。

現在の生息状況 : 沖縄島中南部を中心に、アマモ場環境の悪化は継続、拡大している。

学術的意義・評価 : 埋れ石下環境への適応等特異な生態から、学術的に重要な貝類である。

生存に対する脅威 : 富栄養化と赤土沈積による埋れ石下環境の悪化。埋立てによる生息場所の消失。

特記事項 : 非常に類似した 2 種がアマモ場とリーフ上にそれぞれ存在し、分類学的課題が残っている。

原記載 : Le Guillou, M.E., 1842. Description de quelques espèces nouvelles des genres *Natice*, *Sigaret* et *Ampullaire*. *Revue Zoologique par la Société Cuvierienne*, for 1842: 104-105. (p. 105, no. 5, as *Sigaretus helicoideus*. Type loc.: “Amboine”)

参考文献 : 久保弘文, 2005. マルシロネズミ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 415-416.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **フタツアナスカシカシパンヤドリナ**
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 シロネズミ上科 ハナゴウナ科
 学名 : *Hypermastus ryukyuensis* Matsuda, Uyeno & Nagasawa, 2010
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 50. 大浦湾. 撮影 : 久保弘文.
 形態 : 殻は本科中、中型で、非常に細長い円錐形、殻表は平滑で光沢が強く、体層及び次体層は白く陶器質であるが、螺層上部は半透明で濁灰色の中腸腺の色が透けて見える。殻長 10 mm。蓋は非常に薄く、革質で木の葉型。

近似種との区別 : カシパンヤドリナに比べて、大型で、より長い紡錘形であること、殻色が体層で、より白く陶器質であることなどから区別される。

分布の概要 : 既往産地は沖縄島大浦湾のみ。

生態的特徴 : フタツアナスカシカシパンの下面に外部寄生し、通常、大小2個体が並んで付着しており、それらは雌雄と考えられる。

生息地の条件 : フタツアナスカシカシパンが生息可能な、栄養が多くかつ清浄な砂泥底。

個体数の動向 : 大浦湾における、基地建設に伴う一部環境アセスメント関連の報告書（例えば沖縄防衛局・いであ株式会社, 2015: 714）では数年に渡る出現記録がある。

現在の生息状況 : 2005 年以降大浦湾の水路付近ではフタツアナスカシカシパン自体の個体数変動が著しく、本種は、それに依存しているため、長期的観察が必要である。

学術的意義・評価 : 本種を含むハナゴウナ類は棘皮動物に外部寄生する種が多く、進化生態学的に興味深い分類群である。

生存に対する脅威 : 本種は既存産地が大浦湾の内湾砂泥底のみであり、埋立て等の大規模な環境攪乱がもたらされれば、絶滅リスクの著しい増大は回避できない。

特記事項 : 本種の主要生息域は現在、辺野古基地建設に伴う入域制限区域に該当し、個体数動向等の把握には調査許可を必要とする。

原記載 : Matsuda, H., Uyeno, D. & Nagasawa, K., 2010. A new species of *Hypermastus* (Prosobranchia: Eulimidae) associated with *Echinodiscus tenuissimus* (Echinoidea: Atricleidae) from off Okinawa, Japan., *Venus*, 69: 17–23. (pp. 18–22, figs 1, 2A–C, E, as *Hypermastus ryukyuensis*. Type loc.: “Oura Bay off Sedake, Nago, Okinawa-jima Island, North West-Pacific, Japan”)

参考文献 : 沖縄防衛局・いであ株式会社, 2015. 「シュワブ (H25) 水域生物等調査」調査報告書 第4章. 沖縄防衛局・いであ株式会社, 那覇, 部分引用。

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ネジマガキ**
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 スイショウガイ上科 スイショウガイ科
 学名 : *Strombus gibbosus* (Röding, 1798)
 方言名 : ティラジャー(マガキガイを含む総称)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は本科中、やや小型で、歪んだ紡錘形、殻表は平滑で褐色彩を飾る。殻の巻きが歪んで、殻軸が捻れ、ねじれた螺管となる。殻長 60 mm に達する。蓋は赤褐色で細い爪形。

近似種との区別 : 近似種マガキガイは螺塔が低く、殻口内が鮮やかな橙色であることから、区別される。

分布の概要 : 沖縄全域で見られるが、沖縄島では散在的。宮古諸島、八重山諸島。

生態的特徴 : マツバウミジグサ類やコアマモ等の比較的陸地に近いアマモ場干潟の中潮帯に見られ、垂直分布の幅が狭い。石垣島川平湾では4~5月に紐状の卵嚢を砂上やアマモに産み付ける。藻食性。

生息地の条件 : やや外洋に面し、規模の大きな干潟の、潮通しがよい清浄なアマモ場やその周辺の砂底に限定される。

個体数の動向 : 沖縄島の分布は限定的で個体群規模も小さい。沖縄島西岸の恩納村瀬良垣のラグーンに形成されていた個体群は2008年に漁港造成事業によって埋立てられ消滅した。石垣島川平湾でも2010年以降の調査では確認個体数が減少している。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 本種を含むスイショウガイ類は多産種が多く、熱帯浅海域の生態系において、特定海域に集中して生息する。大型藻食性種であり、肉食性種の餌資源としても重要な位置を占めている。

生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所の消失、底質の悪化、貝細工用具殻採取による乱獲。

原記載 : Röding, P.F., 1798. *Museum Boltenianum sive Catalogus cimeliorum e tribus regnis naturae quae olim collegerat Joa. Fried. Bolten. Pars Secunda continens Conchylia sive Testacea univalvia, bivalvia & multivalvia. Typis Joh. Christ. Trappii, Hamburgi, viii+199 pp. (p. 62, no. 786, as *Lambis gibbosa*. Type loc. not designated)*

参考文献 : 久保弘文, 2005. ネジマガキ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 420.
 久保弘文, 2012. ネジマガキ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”,

日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 55.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ヒダトリガイ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 スイショウガイ上科 スイショウガイ科
学名 : *Strombus labiatus* (Röding, 1798)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 殻は本科中、小型で、殻長 40 mm 内外。やや角張った紡錘形、殻表は体層内側に強く波打った縦肋が多数刻まれ、背面は肩部に隆起が発達するのみで平滑。殻口外唇内壁は鮮橙色の地に一部が黒褐色に染まり、そこに多数の襞を刻む。殻色は灰緑色と灰白色の斑状で、背面は帯状になる。
- 近似種との区別 : 近似種ムカシタモトとは螺塔が低く、より小型で、殻口内が紫褐色に染まらないことから、オハグロガイとは殻表の彫刻が単調なことから、それぞれ区別される。
- 分布の概要 : 和歌山県以南、奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド・太平洋。
生態的特徴 : 海藻の間に紐状の卵嚢を産み付ける。藻食性。
生息地の条件 : 外洋水の影響があり、かつ、小規模な陸水の伏流や小河川が隣接する海草干潟や、その周辺の砂礫底に生息する。コアモモ帯や、マクリやイバラノリ等の紅藻類がマット上に広がった群落の隙間にも生息する。
- 個体数の動向 : 沖縄島中南部では埋立てや港湾造成等で、生息場所が減少し、それに伴い一部の個体群も消失した。先島諸島では宮古島、西表島を中心に未だ産地は少なくない。
- 現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 本種を含むスイショウガイ類は、熱帯浅海域の生態系において、多数の種が適応放散し、進化生態学的に重要な研究対象である。
- 生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所の消失、底質の悪化、貝細工用具殻採取による乱獲。
原記載 : Röding, P.F., 1798. Museum Boltenianum sive Catalogus cimeliorum e tribus regnis naturae quae olim collegerat Joa. Fried. Bolten. Pars Secunda continens Conchylia sive Testacea univalvia, bivalvia & multivalvia. Typis Johan. Christi. Trappii, Hamburgi, viii+199 pp. (p. 63, no. 806, as *Lambis labiata*. Type loc. not designated)
- 参考文献 : 久保弘文, 2012. ヒダトリガイ (フトスジムカシタモト). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 55.

執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ヒロクチリスガイ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 タマガイ上科 タマガイ科
学名 : *Mammilla melanostomoides* (Quoy & Gaimard, 1832)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 殻は本科中、中型で、洋梨形、殻表は平滑だが、成長休止で生じた縦脈が多少認められる。生時は薄い淡黄色の殻皮に覆われるが、死殻では剥がれやすい。殻の地色は白く、不明瞭な黒斑列が2列ある。最大殻長 30 mm に達する。蓋は革質で薄く、半月型。最大殻長 30 mm に達する。
- 近似種との区別 : 近似種ヌノメリスガイは殻が厚質で殻表に布目彫刻があり、ユキネズミガイは殻がより丸みを帯びて膨らみ、軸唇が直線的で強いことで区別される。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド・太平洋。
生態的特徴 : 貝食性、主に夜行性で、砂底を匍匐し、砂粒を付けた卵塊 (通称砂茶碗) を産む。
生息地の条件 : 陸水の流入 (小河川や伏流) があり、潮通しのよい礫砂質の開放性干潟が隣接する場所に多く、垂直的には汀線直下に見られることが多い。タマガイ類の中ではリスガイと共に最も陸地側に生息圏を有する種である。
- 個体数の動向 : 元来、少産種であるが、1990年代後半から沖縄島北部西岸域や南部西岸で、人工護岸化による汀線付近の砂流失や人工ビーチ造成による自然海岸消失により、多くの個体群生息場所が生息場所個体群ごと消失した。先島諸島でも赤土流入が著しい場所では、清浄な砂礫底の泥質化が進行し、生息環境が悪化した。
- 現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 熱帯砂底域に適応放散した貝食性貝類の一つで、進化や生態学的研究において重要である。
生存に対する脅威 : 人工護岸化に伴う自然海岸の消失、埋立て、底質悪化。
原記載 : Quoy, J.R.C. & Gaimard, P., 1832-1833. Voyage de Decouvertes de l'Astrolabe, exécuté par ordre du Roi, pendant les années 1826-1827-1828-1829, sous le commandement de M. J. Dumont d'Urville. Zoologie, Tome 2: Mollusques. J. Tastu, Paris, 686 pp., 26 pls. (pp. 229-230, pl. 66, figs 4-8, as *Natica melanostomoïde* [sic]. Type loc.: “Nouvelle-Guinée et la Nouvelle-Irlande”)
- 参考文献 : 久保弘文, 2012. ヒロクチリスガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 58.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : アラゴマフダマ
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 タマガイ上科 タマガイ科
 学名 : *Naticarius onca* (Röding, 1798)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU)

形態 : 殻は本科中、中型で、亜球形、殻表は平滑で、薄い褐色の殻皮に覆われる。殻の色彩は白地で、海層において黒褐色の斑が5列に並ぶ。殻長約 20 mm。蓋は石灰質で半月型、表面に多数の溝を有する。

近似種との区別 : 近似種モザイクタマガイはより小型で、蓋に多数の溝を持たないことから、区別される。

分布の概要 : 沖縄全域 (大東島海域等強外洋域を除く)。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種の所属するタマガイ類は亜熱帯域に広く分布する種が多く、本種もその中に包含される。

生態的特徴 : 貝食性。主に夜行性で、砂上を匍匐し、砂粒を付けた卵塊 (通称砂茶碗) を産む。

生息地の条件 : 潮通しのよい中潮線～水深 20 m 付近までのアマモ場とそれに隣接する細砂～粗砂底に生息する。

個体数の動向 : 1990 年代前半まで沖縄島南部やうるま市海中道路周辺で普通に確認されたが、埋立てを主とした海岸改変により、アマモ場環境が消失した荒廃し、個体数が大幅に減少した。沖縄市泡瀬では 2000 年代前半まで少なからず確認されたが、埋立て後、生息確認が困難な状況である。なお、恩納村や大浦湾には亜潮間帯から上部浅海帯に、生息域が広がっている。

現在の生息状況 : 2016 年での大浦湾における夜間調査では、水深 3～7 m 付近の砂底で一度に十数個体が確認され、健全な個体群の残存が確認された。

学術的意義・評価 : 熱帯砂底域に適応放散した貝食性貝類の一つで、進化生態学的研究において重要である。

生存に対する脅威 : 埋立てや底質の悪化、ネットオークション等、販売目的での収集。

特記事項 : 環境省レッドデータブックでは干潟における広範な生息環境悪化のため、絶滅危惧II類 (VU) とした。

原記載 : Röding, P.F., 1798. Museum Boltenianum sive Catalogus cimeliorum e tribus regnis naturae quae olim collegerat Joa. Fried. Bolten. Pars Secunda continens Conchylia sive Testacea univalvia, bivalvia & multivalvia. Typis Johan. Christi. Trappii, Hamburgi, viii+199 pp. (p. 147, no. 1844, as *Cochlis onca*. Type loc. not designated)

参考文献 : 久保弘文, 2005. アラゴマフダマ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 420-421.

久保弘文, 2012. アラゴマフダマ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 59.

久保弘文, 2014. アラゴマフダマ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 280.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : イガムシロ
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 エゾバイ上科 オリイレヨフバイ科
 学名 : *Hebra horrida* (Dunker, 1847)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は本科中、小型、亜球形、殻表は粗い縦肋と細かい螺条が交差し、暗褐色帯をめぐらす。殻口外唇内側に多数の襞を刻む。殻長 10mm 程度。

近似種との区別 : 近似種トゲムシロ (ウニムシロ) は殻表に光沢を有することで、区別される。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、台湾 (墾丁)、インド・太平洋。

生態的特徴 : ムシロガイ類は腐肉食性が殆どであるが、本属は雑食性とされる。アマモ上に這い上がり、葉上の珪藻等を摂餌していると推測される。

生息地の条件 : 潮通しのよい中潮線のアマモ場に生息し、活動時はアマモ上に這い上がる。垂直分布の幅は狭く、河口周辺や伏流水の存在する場所に多い。

個体数の動向 : 沖縄島では恩納村沿岸・大浦湾、宮古島では狩俣海岸、石垣島では底地湾・浦底湾・川平湾等に生息し、個体数は多くはないが、狭い範囲に密集する傾向がある。いずれの生息場所も自然度の高いアマモ場に限られており、環境悪化や埋立て等の影響で減少傾向にある。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : ムシロガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。

生存に対する脅威 : 垂直分布の幅が狭いことから、埋立てによる生息地破壊やアマモ場の環境攪乱が脅威となる。

原記載 : Dunker, G., 1846, 1847. Diagnoses Buccinorum quorundam novorum. Zeitschrift für Malakozoologie, 3: 170-172 (1846; p. 171, no. 5, as *Buccinum scabrum* (not of Anton, 1838). Type loc.: “ignota”); 4: 59-64

参 考 文 献 : (1847; p. 49, footnote, as *Buccinum horridum* (a replacement name for *B. scabrum* Dunker, 1846)).
Cernohorsky, W.O., 1984. Systematics of the family Nassariidae (Mollusca: Gastropoda). Bulletin of the
Auckland Institute and Museum, (14): 1-356.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : ヒメオリイレムシロ
分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 エゾバイ上科 オリイレヨフバイ科
学 名 : *Niotha stoliczkana* (G. & H. Nevill, 1874)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 殻長約 15 mm. 殻表には太くて明瞭な縦肋がある。内湾の泥の多い環境では殻色が暗灰色で、潮通しのよい清浄な砂底では淡黄白色となる個体が多くなるが、個体変異に過ぎない。

近似種との区別 : オキナワハナムシロと類似するが、遙かに小型である。
分布の概要 : 奄美大島、加計呂間島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。インド-西太平洋域に分布域を形成し、その分布北限にあたる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ムシロガイ類は亜熱帯域に広く分布する種が多く、本種もその中に包含される普通種である。

生態的特徴 : やや内湾的なアマモ場や砂底干潟に生息し、索餌や潮汐等条件によって活発に砂底を匍匐する。腐肉食性とされるが、比較的新鮮な餌のみを好み、弱った貝類なども集団で襲うことがある。

生息地の条件 : 比較的富栄養で泥分の多い環境にも出現することから、有機汚染には比較的強い可能性があるが、潮通しの良い場所を好み、止水条件下では生息できないと推測される。

個体数の動向 : 沖縄島を中心に埋立て等による大規模な生息場所消失があり、個体数の減少は明らかである。

現在の生息状況 : 先島諸島では場所によっては比較的多産し、沖縄島でも少ないながら各所に確認されるが、沖縄島中南部・宮古島南部・石垣島南部では港湾開発・埋立て等で一部の生息場所が消失している。石垣・西表両島海域では自然公園法や保護水面で開発行為や採取が制限されている場所がある。

学術的意義・評価 : ムシロガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。

生存に対する脅威 : 内湾潮間帯に分布の中心をもち、埋立てによる生息場所消失が最大の減少要因となる。

特記事項 : 本種の学名を *N. nodifer* (Powys, 1835) のシノニムとする見解があるが、この学名はオキナワハナムシロに相当し、全くの別種である。

原 記 載 : Nevill, G. & Nevill, H., 1874. Descriptions of new marine Mollusca from the Indian Ocean. Journal of the Asiatic Society of Bengal, 43(2): 21-30, pl. 1. (pp. 24-25, pl. 1, fig. 8, as *Nassa (Telasco) Stoliczkana*. Type loc.: "Calicut")

参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ヒメオリイレムシロ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 69.

名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, Vol. 4.

名和 純, 2005. ヒメオリイレムシロ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 359.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : マタヨフバイ
分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 高腹足目 新腹足亜目 エゾバイ上科 オリイレヨフバイ科
学 名 : *Telasco lurida* (Gould, 1850)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 殻は本科中、やや大型、体層肩部が角張った卵球形、殻表は平滑で不明瞭な雲状斑を有し、殻底に数条の螺溝をめぐらす。殻口内は紫褐色に染まり、殻口外唇内側に多数の襞を刻む。最大殻長約 25mm。

近似種との区別 : 近似種ヨフバイモドキはより小型、肩部が丸いことから、区別できる。

分布の概要 : 沖縄島北部、石垣島、西表島。

生態的特徴 : 腐肉食性で、魚やカニ等の死体に集合して摂食する。

生息地の条件 : 河口域に近く、かつ潮通しのよいアマモ場とそれに隣接する泥砂底で、垂直分布の幅は非常に狭く、潮間帯中部にのみ見られる。

個体数の動向 : 先島諸島 (石垣・西表両島) では場所により個体数は少なくないが、沖縄島周辺では分布範囲が非常に狭く、個体群規模は極めて小さい。

現在の生息状況 : 2010年頃まで確認されていた大浦湾奥の個体群は、2015年の調査では未確認。

学術的意義・評価 : ムシロガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。

生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所の消失、底質の悪化。

原 記 載 : Gould, A.A., 1850. Descriptions of the shells brought home by the U.S. Exploring Expedition. Proceedings of the Boston Society of Natural History, 3: 151-156. (p. 153, as *Nassa lurida*. Type loc.: "Samoa Islands, Tutuilla")

参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. マタヨフバイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇,

473-474.
 久保弘文, 2012. マタヨフバイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 70.
 大須賀 健, 2000. 奄美・沖縄におけるオリエロヨフバイ科数種の産出記録 (2). 九州の貝, (54): 35-39.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : クリイロムシロ (クリイロヨフバイ)
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 エゾバイ上科 オリエロヨフバイ科
 学名 : *Zeuxis olivaceus* (Bruguère, 1789)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 最大殻長約 5 cm に達する本科最大の一つ。螺塔に縦肋及び殻底に螺条をめぐらし、体層の殻表は概ね平滑。殻色は褐色を帯びた黒灰色で、体層中央に不明瞭な淡色帯を有する場合もある。
 近似種との区別 : 本種に匹敵するこの科の内湾性大型種は知られていない。
 分布の概要 : インド-西太平洋域に地理分布を形成し、その北限にあたる南西諸島においては、奄美大島と沖縄島、西表島浦内川河口 (八木洋史私信) で確認されている。
 生態的特徴 : 索餌や潮汐等条件によって活発に砂底を匍匐する。腐肉食性とされるが、比較的新鮮な餌のみを好む。
 生息地の条件 : 隣接する河口水路の水深1~10 m付近に生息し、マングローブ域が隣接する環境に多いが、全く無関係な場合もある。
 個体数の動向 : 沖縄島中北部の産地では生息範囲が狭く、中には航路浚渫の影響により泥底が削られ、生息確認が困難な状況な事例もある。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : ムシロガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。
 生存に対する脅威 : 浚渫や海岸改変等による、安定した河口域の泥砂底の攪乱。
 原記載 : Bruguère, J.G., 1789-1792. Encyclopédie méthodique, ou par ordre des matières. Histoire naturelle des vers, Tome 1. Chez Panckoucke, Paris, 757 pp., 95 pls. (p. 272, no. 38, as *Buccinum olivaceum*. Type loc.: “l’océan Américain ... les cotes de la Guadeloupe” [error])
 参考文献 : 久保弘文, 2012. クリイロムシロ (クリイロヨフバイ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 71.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ヨウラクレイシダマシ
 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 アッキガイ上科 アッキガイ科
 学名 : *Muricodrupa* aff. *fiscella* (Gmelin, 1791)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 殻は小型、太短く、角張った紡錘形、殻表は粗い格子状彫刻と縦張肋を有する。殻口は紫で外唇内側に歯が並ぶ。殻長 20 mm 内外。
 近似種との区別 : ヨウラクレイシダマシには 2 種が混在し、内湾の潮間帯の岩礫地に生息する種と外洋に面したサンゴ礁の岩礫下に生息する種 *M. fiscella* があるが、当掲載種は内湾の種である。外洋の種は国内では稀であり、ヨウラクレイシダマシという和名は前者に相当すると推定される。
 分布の概要 : 沖縄島中北部 (中城湾、金武湾、大浦湾、羽地内海、塩屋湾等)、石垣島 (名蔵湾)、西表島。
 生態的特徴 : 肉食性。
 生息地の条件 : 潮間帯中部の泥と微細な海藻に被われた岩盤上。
 個体数の動向 : 沖縄島中南部、特に中城湾では埋立ての影響で生息場所が大きく減少した。
 現在の生息状況 : 埋立てによる生息場所消失以外にも、羽地内海では、岩盤上への泥の過剰堆積や海藻の腐敗で黒紫色に還元化している場合も多く、そのような場所での生息は難しい。
 学術的意義・評価 : 類似種が多く、分類学的に課題がある他、肉食性貝類として内湾潮間帯の岩盤における食物連鎖上の役割も重要。
 生存に対する脅威 : 干潟埋立てによる生息場所の消失、陸土微粒子の大量流入と泥質化、富栄養化等による岩礫下の貧酸素化と硫化物汚染。
 特記事項 : インドネシアやフィリピンに分布するマドモチレイシダマシ *M. funiculus* (Wood, 1828) にも類似しており、この種を本種の異名とする見解もあるため、検討を要する。
 原記載 : Gmelin, J.F., 1791. Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, 3021-3910. (p. 3552, no. 160, as *Murex fiscellum*. Type loc.: “ad insulam Pulo Condore, prope Sinam”)
 参考文献 : Houart, R., 1995 (for 1994). The Ergalataxinae (Gastropoda, Muricidae) from the New Caledonia region with some comments on the subfamily and the description of thirteen new species from the Indo-West Pacific. Bulletin du Muséum National d’Histoire Naturelle, Paris, Sér. 4, 16(Section A, 2-4): 245-297.
 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名：久保弘文

和名：カノミノムシ

分類：腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 アッキガイ上科 ミノムシガイ科

学名：Vexillum sanguisuga (Linnaeus, 1758)

カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態：殻は本科中、やや大型で、長い紡錘形、殻は布目状で鮮紅色斑を帯状にめぐらし、等間隔に縦肋を有する。軸唇に強い襞と殻口外唇内側に弱い襞をもつ。殻表には薄い淡褐色の殻皮を被覆する。最大殻長約 50 mm。

近似種との区別：ベニシボリミノムシと赤色の斑が有することで類似するが、本種は点列が 2 列で数が少ないことで区別される。

分布の概要：先島諸島。

近縁な種及び群との分布状況の比較：大型ミノムシガイ類の多くは、北は沖縄島まで分布するが、本種は宮古島が北限である。

生態的特徴：砂中の多毛類等の虫型の動物を捕食すると推測される。

生息地の条件：潮通しのよいアマモ場周辺の低潮線～水深 5 m 付近までの細砂底に生息し、特にパウダーサンドと呼ばれる白質で泥分の少ない清浄な底質を好む。

個体数の動向：石垣島と宮古島南部地先では埋立事業で一部の生息場所が消失した。また八重山諸島では赤土の流入が著しく、底質が泥質化し、特に川平湾では 2010 年以降、確認記録が無い。

現在の生息状況：先島諸島においても赤土流入や富栄養化に伴って造礁サンゴ由来の細かな白砂からなる海底は激減しているため、本種の個体数も大きく減少していると考えられる。

学術的意義・評価：ミノムシガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。

生存に対する脅威：陸土微粒子の大量流入や富栄養化に伴う白砂底の底質悪化や埋立てによる生息場所消失。

特記事項：別名カノコシボリミノムシ(黒田)は、より古い和名であるが、ベニシボリミノムシとの混乱を避け、カノミノムシを用いる。

原記載：Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 732, no. 364, as *Voluta sanguisuga*. Type loc.: "M. Mediterraneo" [error])

参考文献：久保弘文, 2005. カノミノムシ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)ーレッドデータおきなわー", 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 475.

久保弘文, 2012. カノミノムシ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 74.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名：久保弘文

和名：コトツブ

分類：腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 イモガイ上科 マンジ科

学名：*Eucithara marginelloides* (Reeve, 1846)

カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態：殻長 10 mm 以下、紡錘形で螺層はやや低く、肩が張り、多数の太く強い縦肋を発達させ、体層においては約 9 本を数える。太い縦肋間には細く均一な螺条を多数めぐらす。殻色は縦肋が灰白色で、縦肋間は青みがかかった灰色に染まり、加えて 5~6 本の鮮橙褐色の色帯を巡らす。和名は、このような繊細な彫刻と色彩から、多数の弦を張った美麗な琴を連想したのであろう。

分布の概要：奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド・太平洋。

生態的特徴：肉食性と考えられるが、詳しい生態は不明。

生息地の条件：潮通しがよく、清浄な細砂質干潟のウミヒルモ帯やその周辺の潮間帯細砂底に生息する。

個体数の動向：沖縄島では大浦湾や恩納村屋嘉田等の自然度の保たれた干潟に生残しているが、開発の著しい中南部地域では殆ど見いだされない。先島諸島では比較的広範囲に生息しており、沖縄島ほど産地が限られていないが、川平湾内の調査では 2010 年以降、著しく減少傾向にある。

現在の生息状況：同上。

学術的意義・評価：コトツブ類は亜熱帯のサンゴ礁域において様々な種が分化し、種多様性が非常に高く、分類学的未詳種を多く含み、課題が多い。本種はその中の代表的な種であり、最も浅い場所に生息するため、自然度の高い海草干潟の指標種として重要である。

生存に対する脅威：埋立て等による生息場所の消失、陸土微粒子の大量流入や富栄養化に伴う底質悪化。

原記載：Reeve, L.A., 1846. Monograph of the genus *Mangelia*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 3: pls 1-8. (sp. 6, pl. 1, fig. 6a-b, as *Mangelia marginelloides*. Type loc.: "island of Burias, Philippines (found in sandy mud at the depth of seven fathoms)")

参考文献：久保弘文, 2012. コトツブ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日

本ベントス学会（編），東海大学出版会，秦野，76.

執筆者名：久保弘文

- 和名：クダボラ
 分類：腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 イモガイ上科 クダボラ科
 学名：*Turris crispa* (Lamarck, 1816)
 カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)
- 形態：殻は本科中、やや大型で、細長い紡錘形、殻表は細い螺糸を多数めぐらし、白色の地に小褐色斑を散在させる。水管は長く延びる。殻長約 40~60 mm。蓋は革質で木葉型。
- 近似種との区別：本土に生息するミノボラはクダボラの一型とされるが、色彩がより鮮明で殻質が厚く、大成することにより区別され、生息水深も異なることから、別種と考えられる。沖縄全域の浅海砂泥域に生息する同属のトラフクダマキは、より螺肋の稜角が強く、圧縮された紡錘形であることから識別される。
- 分布の概要：奄美大島、沖縄島、先島諸島、台湾。
 生態的特徴：多毛類を捕食すると考えられるが、詳細は不明。
 生息地の条件：大規模なアマモ場や隣接するリーフ内の砂礫底に限定される。
 個体数の動向：元来、多産種ではないものの、1990 年代半ばまで、沖縄島では名護市屋我地島東岸や沖縄市泡瀬、恩納村屋嘉田等のアマモ場では普通種であった。しかし、現在、確認事例はほとんど無い。
- 現在の生息状況：沖縄島での生息環境は埋立てで大きく狭められている。一方、先島諸島では個体数は少ないものの、確認できる場所が残っている。しかし、元々沖縄島に見られた生息状況と比べれば、貧弱である。
- 学術的意義・評価：熱帯浅海域で適応放散した肉食性貝類の一つで進化生態学的に重要である。
 生存に対する脅威：埋立てや航路浚渫等による生息場所消失やアマモ場環境の荒廃。
 原記載：Lamarck, J.B.P.A. de M., 1816. Tableau encyclopédique et méthodique des trois règnes de la nature. Mollusques testacés. Chez Henri Aggase, Paris, 16 pp., pls 391-488. (p. 8, pl. 439, fig. 4, as *Pleurotoma crispa*. Type loc. not designated)
- 参考文献：久保弘文, 2005. クダボラ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 426.
 久保弘文, 2012. クダボラ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 77.
 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名：久保弘文

- 和名：スジイモ
 分類：腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 イモガイ上科 イモガイ科
 学名：*Conus figulinus* Linnaeus, 1758
 カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)
- 図の解説：p. 50. 1a, 1b (参考)：コゲスジイモ 大浦湾. 2：スジイモ 大浦湾. 撮影：久保弘文。
- 形態：殻は、太短く、倒立円錐形で、殻頂はやや尖る。殻表は平滑で光沢があり、青灰色の地に紫褐色の線状彩を多数めぐらす。殻皮はやや厚い。
- 近似種との区別：近縁種コゲスジイモは殻頂が尖らず、平巻状で、殻皮が毛羽立つ。
- 分布の概要：和歌山県以南、奄美大島、沖縄島および周辺離島、宮古諸島、八重山諸島、フィリピン~東アフリカ。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較：コゲスジイモはより泥質地に出現する傾向がある。
- 生態的特徴：矢舌に毒囊より貯留した毒を餌 (多毛類) に注射して麻痺させ捕食する。
 生息地の条件：河川水や伏流水の影響を受ける河口干潟周辺とその延長にあたる水路部の細砂底、潮間帯~水深 5 m 付近に生息。
 個体数の動向：1980 年代後半まで沖縄島や八重山の河口干潟に普通に生息していたが、現在、沖縄島を中心に環境が改変されて、個体数が激減したと考えられる。
- 現在の生息状況：現在も西表島浦内川河口などの亜潮間帯に生息している可能性があるが、2015 年 12 月のおける低潮線直下での夜間調査 (2 日間) では死殻すら見つからなかった。宮古島では 2016 年 1 月与那覇前浜-2 m でのドレッジ 10 分曳きで幼貝が 1 個体確認された。
- 学術的意義・評価：イモガイ類は熱帯サンゴ礁域に適応放散した肉食性貝類の代表的な分類群で、進化生態学的に重要であり、その中でも本種は攪乱を受けやすい河口周辺に生息するため、準絶滅危惧種 (NT) として登載した。
- 生存に対する脅威：内湾や河口付近における埋立てや浚渫等の攪乱、底質悪化。
 特記事項：IUCN カテゴリー：Least Concern (LC).
 原記載：Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 715, no. 267, as *Conus figulinus*. Type loc.: “. .”)

〈貝類〉

- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. スジイモ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 427.
久保弘文, 2012. スジイモガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 75.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : コゲスジイモ
分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 イモガイ上科 イモガイ科
学 名 : *Conus laroisii* Kiener, 1846
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

図 の 解 説 : p. 50. 1a, 1b: コゲスジイモ 大浦湾. 2 (参考): スジイモ 大浦湾. 撮影: 久保弘文.
形 態 : 殻は、太短く、倒立円錐形。殻皮は厚く、毛羽立つ。殻表は平滑で光沢があり、青灰色の地に紫褐色の線状彩を多数めぐらす。

近似種との区別 : 近縁種スジイモは殻頂が尖り、円錐状に高まり、殻皮が毛羽立たない。

分布の概要 : 沖縄島、石垣島、西表島、フィリピン～東アフリカ。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : スジイモは、より清浄な砂質を好み、分布範囲が広い。

生態的特徴 : 矢舌で毒を餌 (多毛類) に注射して麻痺させ捕食する。冬季から春季にかけ河口域低潮線付近に狭い範囲に集まり産卵する。

生息地の条件 : 河川水や伏流水の影響を受ける河口域周辺と、その延長にあたる水路部の、泥砂底の潮間帯～水深 2 m 付近に生息場が形成される。

個体数の動向 : 1990 年代後半まで沖縄島や八重山諸島の河口干潟に少ないながら確認されてきたが、2010 年以降、全く確認されず、個体数が大きく減少していると考えられる。

現在の生息状況 : 2014 年以降の大浦川や浦内川河口等での夜間調査では全く確認されず、宮古島ではこれまで記録が無い。

学術的意義・評価 : イモガイ類は熱帯サンゴ礁域に適応放散した肉食性貝類の代表的な分類群で、進化生態学的研究において重要であり、その中でも本種は攪乱を受けやすい河口周辺に生息するため、準絶滅危惧 (NT) として登載した。

生存に対する脅威 : 内湾河口付近の埋立てや浚渫による攪乱。

特 記 事 項 : IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。なお、久保 (2012) が沖縄県産個体に対して使用した亜種名 *C. laroisii* [sic] *insignis* Dautzenberg, 1937 は、*C. insignis* Sowerby I, 1833 の新参同名であるため無効である。

原 記 載 : Kiener, L.C., 1844–1850. Genre Cone (*Conus*, Lin.). “Spécies Général et Iconographie des Coquilles Vivantes, Comprenant la Collection du Muséum d’Histoire naturelle de Paris, la Collection Lamarck, celle du Prince Masséna (appartenant maintenant a M. B. Delessert) et les Découvertes Récentes des Voyageurs”, Vol. 2, Kiener, L.-C. (ed.), J.-B. Baillière et Fils, Paris, 1–379, pls 1–111 [1–48 (1846); 49–160 (1847); 161–192 (1848); 193–240 (1849); 241–[379] (assumed to be 1850); pls 4,6 (1844); 2–3, 5, 7–32, 34–36, 38, 40–50 (1845); 33, 37, 39, 51–52, 54–56, 57–68, 74–77 (1846); 1, 69–73, 78–103 (1847); 104–106 (1848); 107 (1849); 108–111 (1850)]. (pp. 91–92, no. 75, pl. 65 fig. 1, as *Conus Laroisii*. Type loc.: “la mer de l’Inde”) Dautzenberg, P., 1937. Gastéropodes marins. 3 - Famille Conidae. Résultats Scientifiques du Voyage aux Indes Orientales Néerlandaises de LL. AA. RR. Le Prince et la Princesse Lé Belgique. Mémoires du Musée royale d’histoire naturelle de Belgique, Ser. 2, 18: 1–284, pls 1–3 [not seen]. (p. 108, pl. 1, fig. 6. Type loc.: “Amboina”)

参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. コゲスジイモ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 75.

執 筆 者 名 : 久保弘文・福田 宏

和 名 : ヤナギシボリタケ
分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 イモガイ上科 タケノコガイ科
学 名 : *Acuminia penicillata* (Hinds, 1844)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形 態 : 殻は本科中、やや小型で、細く高い螺塔を有し、殻表は光沢があり、乳白色で、縦の黒い縞模様 (柳紋り模様) を装う。殻長約 40 mm に達する。

近似種との区別 : 近似種シマタケはより大成し、縞模様が直線的である。

分布の概要 : 沖縄全域 (大東島海域を除く)。

生態的特徴 : 埋在性のホシムシ等虫型の動物を捕食する。

生息地の条件 : 外洋に面したリーフ内汀線直下の細砂底や、潮通しの良いアマモ場に隣接した細砂底。

個体数の動向 : 元々、稀少な種であったが、2010 年以降、全く確認されていない。沖縄島、宮古島、石垣島等都市部や大規模耕作地等陸域開発の著しい海域では、かつて至る所に存在していたサンゴ礁性の清浄な水質と底質の白い砂浜が、人為的要因によって大きく消失した。本種をはじめとするタケノコガイ

類やマクラガイ類は清浄な白砂の砂底において高い多様性を示し、1990年頃までは辛うじて、生息場所が各島に点在する形で維持されてきたが、現在、陸地・海域とも一定の保全措置がなされた恩納村や先島諸島の一部海域、人口密度の低い離島部等で局所的に生息が認められるに過ぎない。

- 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : タケノコガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。
 生存に対する脅威 : 陸土微粒子の大量流入や富栄養化に伴う白砂底の底質悪化や、埋立てによる生息場所消失。
 原 記 載 : Hinds, R.B, 1844. Descriptions of new shells, collected during the voyage of the Sulphur, and in Mr. Cuming's late visit to the Philippines. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1843: 149-168. (pp. 157, 165, as *Terebra penicillata*. Type loc.: "Seychelles")
 参 考 文 献 : 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
 土田英治, 2000. タケノコガイ科. "日本近海産貝類図鑑", 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 668-685.
 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : **カエンタケ**
 分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 イモガイ上科 タケノコガイ科
 学 名 : *Terebra chlorata* Lamarck, 1822
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形 態 : 殻は本科中、やや大型で、高い螺塔を有し、殻表はやや光沢に乏しく、白色の地に、縦の紫褐色の火炎模様を散在させる。殻長 50~90 mm。
 近似種との区別 : 近似種ゾウゲタケは黒褐色の点列をもち、リュウキュウタケは地色が淡黄褐色であり、区別される。
 分布の概要 : 沖縄全域 (大東島海域を除く)。
 生態的特徴 : 埋在性のホシムシ等虫型の動物を捕食する。
 生息地の条件 : 外洋に面したリーフ内の汀線直下の砂底や、潮通しの良いリーフ内の細砂底。
 個体数の動向 : 恩納村や先島諸島の一部など健全な砂底域の存在する場所では少ないながら見られるが、名護湾等底質悪化が進行している海域では確認が困難であり、著しく減少している。かつて至る所に存在していたサンゴ礁性の清浄な水質と底質の白い砂浜が、人為的要因によって大きく消失し、一定の保全措置がなされた恩納村や先島諸島の一部海域、人口密度の低い離島部等で生息が認められるに過ぎない。

- 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : タケノコガイ類は熱帯浅海域に多数種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。
 生存に対する脅威 : 陸土微粒子の大量流入や富栄養化に伴う白砂底の底質悪化。
 原 記 載 : Lamarck, J.B.P.A. de M. de, 1822. Histoire naturelle des animaux sans vertèbres, présentant les caractères généraux et particuliers de ces animaux, leur distribution, leurs classes, leurs familles, leurs genres, et la citation des principales espèces qui s'y rapportent; précédée d'une Introduction offrant la détermination des caractères essentiels de l'Animal, sa distinction du végétal et des autres corps naturels, enfin, l'exposition des Principes fondamentaux de la Zoologie, Tome 7. Verdière, Paris, 711 pp. (p. 288, no. 14, as *Terebra chlorata*. Type loc.: "...")
 参 考 文 献 : 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
 土田英治, 2000. タケノコガイ科. "日本近海産貝類図鑑", 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 668-685.
 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : **カヤノミガイ**
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 原始的異鰓類 オオシノミガイ上科 オオシノミガイ科
 学 名 : *Pupa sulcata* (Gmelin, 1791)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形 態 : 殻は本科中、やや大型で、卵形、灰白色の地に緋状の黒褐色色彩を有し、殻表は多数の細かい螺溝をめぐらし、薄い殻皮で覆われる。殻長約 10~20 mm。
 近似種との区別 : 近似の普通種コシノミガイはより小型で細く、黒色の方形斑を有することで区別は容易である。
 分布の概要 : 沖縄島名護湾、屋嘉田潟原、大浦湾、中城湾、先島諸島。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 熱帯性の代表的なカヤノミガイ類には、本種の他、ベニフカヤノミガイやタイワンカヤノミガイが同様に清浄な細砂底を好む。
 生態的特徴 : 食性、繁殖など詳細な生態はほとんど知られていない。
 生息地の条件 : 潮通しのよいアマモ場とその周辺の中潮線~水深2 mの細砂底に生息場所が形成される。
 個体数の動向 : 沖縄島では恩納村や名護市大浦湾等から記録があるが、他では記録が少ない。先島諸島では、2005年頃まで川平湾等では普通に確認されてきたが、同湾での 2010 年以降のモニタリングでは全く確認されていない。
 現在の生息状況 : 潮間帯付近の個体群は減少している。一方、個体数としては非常に少なく、低密度だが、亜潮間帯から上部浅海帯に分布域が広がっている海域もある。
 学術的意義・評価 : 砂底域に適応した種群であり、進化生態学的に興味深いグループであるが、食性や繁殖等の生態的

な情報は殆ど判っていない。
生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所の消失、底質の悪化。
原 記 載 : Gmelin, J.F., 1791. Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, 3021–3910. (p. 3436, no. 3, as *Voluta sulcata*. Type loc.: “- - -”)
参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. カヤノミガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 429.
久保弘文, 2012. カヤノミガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 80.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : コヤスツララ
分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 真後鰓下綱 頭楯目 ナツメガイ上科 オオコメツブガイ科
学 名 : *Acteocina koyasensis* (Yokoyama, 1927)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

図 の 解 説 : p. 50. 佐敷干潟. 撮影 : 久保弘文.
形 態 : 殻長 3.5 mm、殻径 2 mm。殻は円筒形、黄色～赤茶褐色、鈍い光沢を持ち、殻表全体に微細な螺溝を巡らす。肩部は角張り、縫合は溝状。殻口は前方が広くて後方は狭まり、外唇は薄く鋭い。軟体は白色で頭楯は幅広い。
近似種との区別 : 沖縄県の汽水域では本種に似た種は他に知られていない。コメツブツララは本種に酷似するが、螺溝が縫合下と殻底に限られ、殻色も淡い。
分布の概要 : 陸奥湾～九州、沖縄島、石垣島、西表島、中国南部、台湾、フィリピン。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : コメツブツララは本州～九州、種子島の数箇所から知られる。
生態的特徴 : 恐らく肉食で、浮游幼生期を経る。
生息地の条件 : 大規模な内湾奥に注ぐ河口汽水域下流部の干潟中・低潮帯において砂泥底または軟泥底の表層を匍匐し、干潮時にも乾燥せず水が残る場所を好む。
個体数の動向 : 近年生貝が確認された産地は全国でも 10 箇所以下しかない。干潟の環境悪化に伴って減少傾向にある。
現在の生息状況 : 沖縄県の 3 島では 2015～2016 年にも棲息が確認され、他県に比べると健在であるが、どの産地でも棲息範囲は狭い。
学術的意義・評価 : 日本の内湾棲頭楯類全種の中で、最も汽水域寄りに産する特異な種として貴重。
生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立等の開発、マングローブ破壊、水質・土壌汚染。
特 記 事 項 : コメツブツララは同種の変異かも知れず、詳細な比較検討が必要。
原 記 載 : Yokoyama, M., 1927. Mollusca from the Upper Musashino of western Shimôsa and southern Musashi. Journal of the Faculty of Science, Imperial University of Tokyo, Ser. 2, 1: 439–457, pls 51–52. (p. 448, pl. 51, fig. 1, as *Tornatina koyasensis*. Type loc.: “Koyasu”)
参 考 文 献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11–63.
福田 宏・久保弘文, 2012. コヤスツララ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 81.
名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1–81, figs 1–33, pls 1–20, tables 1–3.
Oyama, K., 1973. Revision of Matajiri Yokoyama's type Mollusca from the Tertiary and Quaternary of the Kanto Area. Palaeontological Society of Japan, Special Papers, (17): 1–148, pls 1–57.

執 筆 者 名 : 福田 宏・久保弘文

和 名 : アンパルクチキレ
分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 トウガタガイ上科 トウガタガイ科
学 名 : *Colsymnola hanzawai* (Nomura, 1939)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 殻長約 9～12 mm。非常に長い塔形で、螺塔が非常に高く、10～12 層を数える。殻表は平滑で白く、薄い殻皮を纏う。殻口軸唇はねじれ、中央部に襞をもつ。
近似種との区別 : ククリクチキレは大きさや形状が類似するが、殻色が煉瓦色であることから区別される。
分布の概要 : 奄美大島 (大島海峡)、沖縄島、八重山諸島。
生態的特徴 : 生息場所が広範で、特定のホスト上にみられないことから、日和見的寄生者と考えられる。
生息地の条件 : 淡水影響の強い干潟の中潮線、泥砂底に生息。
個体数の動向 : 和名になっている石垣島名蔵アンパル以外に、奄美大島、沖縄島周辺の東西の河口干潟 (読谷村～大浦湾や金武湾) 等と広範で、かつては沖縄島全域に広く分布していたと考えられる。しかし、1990 年代後半～2000 年前半にかけて、中南部では埋立てにより干潟が大規模に消失し、生息場所が大き

- く減少した。八重山諸島では石垣島名蔵アンパルで、生息密度が 255 個体/㎡と推定されており、多産する上、ラムサール条約で開発行為が制限されている。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 本種のタイプ産地は沖縄島。既往産地は奄美大島～八重山諸島であり、生物地理学的に重要であるが、小型種のため、十分な調査がなされているとは言えず、課題がある。
- 生存に対する脅威 : 港湾開発、埋立て等による生息場所の消失。
- 原 記 載 : Nomura, S. 1939. Summary of the fossil and Recent Japanese Pyramidellidae, with the description of several new species. "Jubilee Publication in the Commemoration of Professor H. Yabe M.I.A. Sixtieth Birthday, vol. 1", Yabe Kyoju Kanreki Kinen Kai (ed.), Tōhoku Imperial University, Sendai., 119–156, pl. 9. (pp. 132–133, pl. 9, fig. 28, as *Syrnola* (s.s.) *hanzawai*. Type loc.: "Okinawa-zima, Okinawa-ken (Recent)")
- 参 考 文 献 : 小菅丈治・堀 成夫, 2005. トウガタガイ科の一種 *Colisyrnola hanzawai* (Nomura), n. comb. アンパルクチキレ (新称) の再発見と石垣島名蔵アンパル干潟からの記録. 南紀生物, 51 (1): 37-39.
- 久保弘文, 2012. アンパルクチキレ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 85.
- 三浦知之・三浦 要, 2015. 加計呂麻島の海岸湿地に生息する甲殻類と貝類の記録. Nature of Kagoshima, 41: 209-222.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : ニライカナイゴウナ
- 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 トウガタガイ上科 トウガタガイ科
- 学 名 : *Leucotina* sp.
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形 態 : 殻は本科中、小型で、丸みを帯びた細長い紡錘形、殻表は褐色の薄い殻皮で覆われ、殻は灰白色～黒灰色で、多数の螺旋状刻点列をめぐらす。殻長約 5～10 mm。蓋は革質で三日月形。
- 近似種との区別 : 同科の小型種シロヒメゴウナとは殻色や光沢のある殻表などから区別は容易である。
- 分布の概要 : 沖縄島中北部、石垣島、オーストラリア。
- 生態的特徴 : ソメワケグリ、リュウキュウザルガイ、リュウキュウバカガイなどの二枚貝類に外部寄生する。
- 生息地の条件 : 潮通しのよい海草藻場周辺の低潮帯～水深 40 m 付近までの砂底・細砂底に生息する。
- 個体数の動向 : 1980 年代後半まで沖縄市泡瀬周辺ではホストとなる二枚貝類が豊かに生息し、本種もそれに伴って普通に確認されたが、現在、泡瀬では埋立て後に、アマモ場環境が荒廃し、生息面積が減少した。金武湾北部 (水深 30 m)、名護湾 (5～20 m)、大浦湾 (6～15 m)、石垣島 (21 m) 等でも確認され、上部浅海域に生息圏が広がっている可能性が高いが、総じて、それでも底質悪化等によりホスト自体が減少しており、本種も同様に減少傾向にあると考えられる。

- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 本種を含むマキモノガイ類・イソチドリ類は二枚貝類に外部寄生する種が多く、生態学的に興味深い分類群である。
- 生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所の消失、底質の悪化。
- 特 記 事 項 : オーストラリア産個体との分類上の関係については検討を要する。
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. ニライカナイゴウナ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 476.
- 久保弘文・山下博由, 2012. ニライカナイゴウナ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 87.
- 小菅丈治, 2007. 石垣島米原沖で採集されたニライカナイゴウナ (軟体動物門, 腹足綱, イソチドリ科) 沖縄生物学会誌 45: 39-42.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : オオシイノミクチキレ
- 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 トウガタガイ上科 トウガタガイ科
- 学 名 : *Milda ventricosa* (Guérin-Méneville, 1831)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形 態 : 殻は本科中、大型で、太短い滴形。殻表は成長脈を除き平滑で、白灰青色の地に灰黒色の火炎彩及び斑紋を有する他、薄い殻皮で覆われる。最大殻長約 30 mm。
- 近似種との区別 : シイノミクチキレ類は近縁種が多いが、本種はとりわけ大型で殻表が平滑であり、他種と区別できる。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、台湾、フィリピン、ベトナム等。
- 生態的特徴 : 本科貝類は歯舌をもたず、寄生性とされるが、本種の宿主は不明。
- 生息地の条件 : 潮通しのよい中潮線～水深 2 m 付近までのアマモ場とその周辺の細砂泥底。
- 個体数の動向 : 1990 年代前半までうるま市海中道路付近や名護市屋我地島東岸では普通であったが、2000 年以降は

個体数が激減し、現在も同様である。沖縄市泡瀬では2000年代前半まで少なからず確認されたが、埋立て後にアマモ場が荒廃し、生息数が激減した。宮古島では与那覇湾での記録があるが、2016年1月の与那覇前浜のアマモ場調査では全く確認されなかった。八重山では小浜島細崎や西表島を中心に少ないながら、現在も散見される。

- 現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 本種を含むトウガタガイ類は特定の宿主に寄生する種が多く、生態学的に興味深い分類群である。本種はとりわけ大型でありながら、生態的不詳な点が多い。
生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所消失、底質悪化。
原 記 載 : Guérin-Méneville, F.É., 1831. Magasin de zoologie, Première Année, Première Partie, Classe V; Mollusques. Chez Lequien fils, Paris, 40 pp., 40 pls. (p. 2, pl. 2, figs 1-2, as *Pyramidella ventricosa*. Type loc.: "l'île de Vanikoro")
参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. オオシイノミクチキレ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編) -レッドデータおきなわ-", 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 429.
久保弘文, 2012. オオシイノミクチキレ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 87.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : リュウキュウヒラマキモドキ
分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 水棲目 ヒラマキガイ上科 ヒラマキガイ科
学 名 : *Polypylis usta* (Gould, 1859)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

図 の 解 説 : p. 50. 恩納村. 撮影: 齊藤 匠.
形 態 : 殻径 5 mm、殻長 2 mm 前後。殻は逆台形型の円盤状である。殻頂上側の面は極めて平坦で、殻頂は狭く深く窪む。また、体層内部の殻頂側には襞状の構造物が3~4個認められる。付着物に覆われていない場合、殻色は赤みがかった深い飴色で、表面にはニスのような艶がある。

近似種との区別 : 形態的には本州以北に分布するヒラマキモドキに酷似する。本種の方がやや殻長が大きい傾向にあると思われるが、決定的な識別点となるかは不明である。

分布の概要 : 山口県、九州~南西諸島、朝鮮半島、台湾。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : ヒラマキモドキが北海道~本州に分布する。ミャンマーやベトナムなどの東南アジア、中国東部、ロシア極東地域などにも同属の近縁種が分布すると考えられるが、本種との関係は不明である。

生態的特徴 : 詳細は不明であるが直達発生と思われる。
生息地の条件 : 還元的な陸水域を中心に、水田、ため池、ハス田、川などに広く生息する。
現在の生息状況 : 産地においては多産することも多い。
学術的意義・評価 : 東アジア一帯に分布する広域分布種であり生物地理学的な研究の材料として好適である。
生存に対する脅威 : 湿地や河川などの陸水域は埋め立て、護岸などによる環境変化の影響を受けやすい。
特 記 事 項 : 本州以北に分布するヒラマキモドキとは遺伝的に区別される。また、学名に問題がある可能性があり、再検討が必要である。

原 記 載 : Gould, A. A., 1859. Description of shells, collected by the North Pacific exploring expedition. Proceedings of the Boston Society of Natural History, 7: 40-45. (p.41, as *Segmentina usta*. Type loc.: "Loo Choo Islands")
参 考 文 献 : 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240pp.
Mori, S., 1938. Classification of the Japanese Planorbidae. Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Ser. B, 14(2): 279-300, pls.1-7.

執 筆 者 名 : 齊藤 匠

和 名 : リュウキュウノミガイ属の一種
分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 ハワイマイマイ上科 ハワイマイマイ科
学 名 : *Pacificella* sp.
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

図 の 解 説 : p. 45. 1 (参考): リュウキュウノミガイ. 2: リュウキュウノミガイ属の一種. 3 (参考): イオウジマノミガイ. 4 (参考): ノミガイ. すべて南大東島. 撮影: 亀田勇一 (標本), 和田慎一郎 (1b, 2b), 福田 宏 (3b).

形 態 : 殻長約 3.2 mm、殻径約 1.6 mm、やや塔型に近く、極めて薄質。螺塔は高く尖り、体層はやや大きい。殻は淡褐色で光沢があり、平滑。殻口は卵形で、肥厚・反転はしない。殻口内唇に強い一歯を持つ。臍孔はない。

近似種との区別 : リュウキュウノミガイとは、体層の膨らみが弱く螺塔が高いこと、また内唇の歯状突起がやや大きいことで区別できる。火山列島に分布する同属のハタイノミガイとは区別が極めて困難で、判断に

- は遺伝的な解析を要する。同所的に棲息するノミガイとは、臍孔の有無によって明確に区別できる。
- 分布の概要： 大東諸島と八重山諸島で確認されている。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 近縁種であるリュウキュウノミガイとは、同所的には確認されていないが分布域が重複する。火山列島には同属のハタイノミガイが分布する。
- 生態的特徴： 主に林床の落葉や草本などを棲息場所として利用し、付着する菌類などの有機物を摂食する。卵胎生。
- 生息地の条件： 同上。
- 個体数の動向： ごく最近認識された隠蔽種であり、上記2地域に分布する以外のことは分かっていない。
- 現在の生息状況： 同上。
- 学術的意義・評価： 同属の近縁種が火山列島からマリアナ諸島にかけて分布しており、受動的分散によって海を越えて移動する陸産貝類の代表的な例として生物地理学的に極めて重要なグループである。
- 生存に対する脅威： 農地開拓等による棲息地の縮小が影響を及ぼしている。また近年ニューギニアヤリガタリクウズムシやツヤオオズアリといった外来の捕食者による壊滅的な被害も懸念される。
- 特記事項： リュウキュウノミガイ同様正確な棲息情報はごく限られているが、分布はより局限される可能性が高いため、準絶滅危惧 (NT) として扱う。
- 参考文献： 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励, 2017. 沖縄県レッドデータブックーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー3. 北大東島・南大東島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中。
Wada, S., Kameda, Y. & Chiba, S., 2014. Different evolutionary patterns among the micro land snail grouped in the Ogasawara Islands. "Island Biology 2014 Program Abstracts", Organizing Committee of Island Biology 2014, the International Conference on Island Evolution, Ecology, and Conservation (ed.), University of Hawaii at Manoa, Honolulu, 57-58.
<https://docs.google.com/viewer?a=v&pid=sites&srcid=aGF3YWlpLmVkdXpc2xhbmRiaW9sb2d5MjAxNHxneDo0NzOwYjlkZWQyNjk1NmE1>
- 執筆者名： 和田慎一郎・亀田勇一

- 和名： キバサナギガイ
- 分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 “サナギガイ上科” キバサナギガイ科
- 学名： *Vertigo hirasei* Pilsbry, 1901
- カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 形態： 貝殻は微小で、殻長約 1.5 mm、太短い円筒形または蝸型 (殻径約 1 mm) で、殻頂は丸い。殻は薄く、半透明の茶褐色で、殻表は滑らか。殻口は弱く広がり、殻口内には 1 本のパリエタル歯、2 本のパラタル歯、1 本の軸唇歯があり、歯の発達具合には変異がある。
- 近似種との区別： シモチキバサナギよりも殻が太短く、ミジンサナギガイよりも大型であることで区別できる。
- 分布の概要： 北海道から八重山諸島にかけての広域から知られる。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 同属のヤマトキバサナギとナタネキバサナギが九州以北に分布する。
- 生態的特徴： 海岸近くの落葉下に生息する。
- 生息地の条件： 同上。
- 個体数の動向： 定量的なデータはないが、生息環境は海岸近くの開発によって減少しており、個体数も減少していると思われる。
- 現在の生息状況： 同上。
- 学術的意義・評価： 琉球列島では最近でも生息が確認されているが、本土では産地が減少しており、保全対象となっている。
- 生存に対する脅威： 開発による生息環境の消失。
- 特記事項： 分類学的再検討が必要。
- 原記載： Pilsbry, H.A., 1901. Notices of new Japanese land snails. *The Nautilus*, 14: 127-129. (p. 128, as *Vertigo Hirasei*. Type loc.: "Yanagawa, prov. Chikugo, Kiusiu Id.")
- 参考文献： Pilsbry, H.A. & Cooke, C.M., 1918-1920. Pupillidae (Gastrocoptinae, Vertigininae). *Manual of Conchology, Second Series: Pulmonata*, 25: i-ix, 1-401, pls 1-34.
上島 励, 2014. キバサナギガイ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 104.
- 執筆者名： 上島 励

- 和名： スターズギセル
- 分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
- 学名： *Euphaedusa stearnsii stearnsii* (Pilsbry, 1894)
- カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)
- 形態： 日本最大のコギセル属の種であり、殻長 31 mm 達する。貝殻は細長く、灰色がかった栗色で、やや光沢がある。プリカは月状壁を欠く。

〈貝類〉

- 近似種との区別 : 石垣島と竹富島の固有亜種で、同所的にみられるキセルガイ類はすべて本亜種より小型で、容易に区別される。
- 分布の概要 : 石垣島では主に南部～北東部に点在して生息し、西部（川平・崎枝）および北端部（平久保）での状況は不詳である。竹富島では集落内で採集例がある。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 西表島に生息するイリオモテコギセルと姉妹亜種関係にあり、尖閣諸島のセンカクコギセルも同種群に含まれる。宮古、沖縄両島には近縁種は知られていない。
- 生態的特徴 : 冬期の低温で乾燥した気候下では樹木のうろや、石灰岩の窪み、落葉下にて休眠するが、その他の季節は概ね樹上や石灰岩などの垂直面に付着し、降雨・高湿時には匍匐する。卵胎生。
- 生息地の条件 : 比較的自然度の高い環境下に生息するが、森林と隣接したコンクリート壁など人工環境下でも見られることがある。
- 個体数の動向 : リゾート建設や宅地等造成により、自然林が減少している石垣島南部では生息場所自体が縮小しており、1990年代には夥しい個体数が確認されていた西部の石灰岩地でも減少傾向にある。竹富島では1970年代には既に、ごく狭い範囲に限定されていた。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : コギセル属は中国大陸南部に近縁種が多いとされるが、琉球列島では石垣・西表両島と尖閣諸島に限定され、生物地理学的に重要である。
- 生存に対する脅威 : 比較的自然度の高い森林の樹上に見られ、人為的な森林消失、伐採や台風による森林荒廃による、林内照度上昇の結果として生じる鳥害や乾燥が脅威となる。
- 原 記 載 : Pilsbry, H.A., 1894. Notices of new Japanese mollusks. The Nautilus, 8: 47-48. (pp. 47-48, as *Clausilia (Stereophaedusa) Stearnsii*. Type loc.: "Yaeyama (Okinawa), Loo Choo Is.")
- 参 考 文 献 : 知念盛俊, 1976. 陸産貝類. "生態写真集 沖縄の生物", 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212-243.
波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls 15-17.
湊 宏, 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究, Venus, suppl., 2: 1-212, tables 1-6, pls 1-74.
黒住耐二, 2005. スターズギセル. "改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 434.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文・福田 宏

-
- 和 名 : **イリオモテコギセル**
- 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
- 学 名 : *Euphaedusa stearnsii iriomotensis* Kuroda, 1960
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 日本産コギセル属中大型の部類に属し、殻長 21 mm に達する。貝殻は細長く、栗色かかった灰褐色で、やや光沢が有る。プリカは月状壁を欠く。
- 近似種との区別 : 西表島固有亜種で、同所的にみられるキセルガイ類は、すべて本亜種より小型のため容易に区別される。
- 分布の概要 : 西表島のほぼ全域に点在して生息し、南部の石灰岩地帯では比較的個体数は多い。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 石垣島・竹富島に生息するスターズギセルの亜種で、尖閣諸島のセンカクコギセルも同種群に含まれる。宮古、沖縄両島には近縁種は知られていない。
- 生態的特徴 : 冬期の低温で乾燥した気候下では樹木のうろや、石灰岩の窪み、落葉下にて休眠するが、その他の季節は概ね樹上や石灰岩などの垂直面に付着し、降雨・高湿時には匍匐する。卵胎生。
- 生息地の条件 : 比較的自然度の高い環境下に生息するが、森林と隣接したコンクリート壁など人工環境下でも見られることがある。
- 個体数の動向 : 農地や牧場等造成により、自然林が減少している西表島南部及び東部では生息場所自体が縮小しており、1990年代に多産した仲間川下流海岸林においても減少傾向にある。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : コギセル属は中国大陸南部に近縁種が多いとされるが、琉球列島では石垣・西表両島と尖閣諸島に限定され、生物地理学的に重要である。
- 生存に対する脅威 : 比較的自然度の高い森林の樹上に見られ、人為的な森林消失、伐採や台風による森林荒廃、林内照度上昇の結果として生じる鳥害や乾燥が脅威となる。
- 原 記 載 : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+104 pp. (p. 79, pl. 2, figs 22-24, as *Euphaedusa stearnsii iriomotensis*. Type loc.: "八重山西表島")
- 参 考 文 献 : 知念盛俊, 1976. 陸産貝類. "生態写真集 沖縄の生物". 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212-243.
知念盛俊, 1990. 西表島の陸産貝類. "平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書", 環境庁自然保護局 (編), 環境庁自然保護局, 東京, 267-275.
黒住耐二, 2005. イリオモテコギセル. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 434-435.

執筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : **ニセノミギセル**
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科

学 名 : *Parazptyx thaumatopoma* (Pilsbry, 1905)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 殻長 11.1 mm、殻径 2.6 mm、螺塔は高い円錐形。殻は褐色でやや薄質、殻表には明瞭で細かい成長肋をもち、体層では殻口に向けて次第に強く粗くなる。殻口は体層からわずかに離れて突出し、弱く肥厚する。上板と下軸板は明瞭で唇縁に達するが、下板はほぼ見えない。主襞は体層の 1/3~1/2 ほど。上腔襞は短く、前方へ傾く。月状襞は下に凸の弧状で、上腔襞終端と軸唇上端付近を結ぶ線上に位置するが、いずれにも接しない。縫合襞はない。

近似種との区別 : 上腔襞と月状襞が離れること、および閉弁に板状突起を持つことで他のノミギセル類とは区別される。

分布の概要 : 伊平屋島から久米島にかけての小島嶼（慶良間諸島、渡名喜島など）に分布する。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ミカヅキノミギセル属も類似の分布域を持つが、本種は沖縄島では記録されていない。

生態的特徴 : 主に自然林に生息し、特に林縁部で密度が高い。
 生息地の条件 : 同上。
 個体数の動向 : 少数の個体が採集される場合が多く、まとまった個体数が見出される機会は少なくなっている。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 沖縄諸島固有種であり、系統地理学的に重要。
 生存に対する脅威 : 本種が多く棲息する林縁部は、道路拡張などの局所的な変化の影響を強く受けるほか、温暖化等の気候変化の影響も受けやすく、存続基盤は比較的脆弱といえる。

原 記 載 : Pilsbry, H. A., 1905. New Clausiliidae of the Japanese Empire. —X. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 56: 809-838, pls.52-57. (pp.834-835, pl.57, figs.100-104, as *Clausilia (Parazptyx) thaumatopoma*. Type loc.: “Kumejima, Ryukyu”)

参 考 文 献 : Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
 知念盛俊, 1978. 阿嘉・慶留間・屋嘉比島の陸・淡水貝類. “沖縄県天然記念物調査シリーズ第12集 ケラマジカ実態調査報告 III”, 沖縄県教育委員会 (編), 沖縄県教育委員会, 那覇, 163-170.
 黒住耐二, 1981. 慶良間列島座間味村の陸産貝類相. 沖縄生物学会誌, (19): 47-51.
 湊 宏, 1981. 日本産陸棲貝類の生殖器の研究 XVII: キセルガイ科 (4): 琉球列島産の5種. Venus, 39: 236-242.
 湊 宏, 1995. 古宇利島の陸産貝類. ちりぼたん, 26: 44-48.

執筆 者 名 : 亀田勇一・黒住耐二* *前回改訂版(2005)における黒住による記載内容を一部引用した。

和 名 : **スジイリオキナワギセル**
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科

学 名 : *Stereophaedusa fasciata* (Sykes, 1893)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

図 の 解 説 : p. 46. 1a, 1b, 2 (参考): オキナワギセル 南城市玉城 (1a, 1b), 今帰仁村今泊 (2). 3: スジイリオキナワギセル 国頭村辺戸. 撮影: 亀田勇一.

形 態 : 成貝は幼層が欠失し、中型(殻頂欠損での殻長 24.9-28.9 mm 程、殻径約 7.1-7.5 mm 程)。色彩は縫合と殻底付近が淡黄色で、中央部は幅広い黒褐色(暗い栗色)の帯となる。色帯上には成長線に沿う細く弱い黄白色の火炎彩が認められる。

近似種との区別 : 本種の殻は明瞭な色帯を有し、分布も沖縄島北部に限定。単色のミヤコオキナワギセル、オキナワギセルとは、色彩や分布域で区別できる。

分布の概要 : 沖縄島北部山地の良好な森林環境のみに分布する。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ミヤコオキナワギセルは宮古島のみ。オキナワギセルは沖縄島中南部や本部半島の森林に限定される。

生態的特徴 : 樹幹に付着する樹上性の種。稚貝を産出する卵胎生。
 生息地の条件 : 大径木の樹幹に生息するので、やんばるの森林環境維持が必要。
 個体数の動向 : 開発行為や採集圧により徐々に減少傾向にある。
 現在の生息状況 : 沖縄島北部の良好な自然林内では、比較的安定的な個体群が維持されている。
 学術的意義・評価 : オキナワギセル種群の分化を検討する上において、重要な種。
 生存に対する脅威 : 沖縄島北部の森林は比較的保護されているが、道路工事などによる荒廃も散見される。他に、採集

圧も少なからずあると考える。

- 特記事項：ファイリオキナワギセル *S. perfasciata* (Pilsbry, 1901) は、本種の異名である。
原記載：Sykes, E.R., 1893. *Clausilia (Stereophaedusa) valida*, Pfr. var. nov. *fasciata*. The Conchologist, 2: 118. (p. 118, as *Clausilia (Stereophaedusa) valida* var. *fasciata*. Type loc.: “Lieu-Chieu”)
Pilsbry, H.A., 1901. The land mollusks of the Loo Choo Islands: Clausiliidae. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 409–424, pls 22–23. (p. 411, as *Clausilia (Stereophaedusa) valida* var. *perfasciata*. Type loc.: “the province of Kunchan, Okinawa Island”)
参考文献：Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127–149.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 生態／検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名：早瀬善正

和名：サキシマノミギセル
分類：腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
学名：*Tyrannozyptyx adulta* Käufel, 1930
カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

図の解説：p. 39. 1 (参考)：タカラノミギセル 尖閣諸島. 2：サキシマノミギセル 石垣島. 3 (参考)：ヨワノミギセル 石垣島. 撮影：久保弘文.

形態：殻は小型 (殻長約 10 mm) で、細く (殻径約 2 mm)、細長い塔型で、殻頂は尖る。殻はノミギセル類としては厚く、暗褐色で、殻表は滑らか。殻口は、外唇側が少し凹んで歪み、殻口縁は厚く肥厚する。殻口内の上板は発達し、下軸板は殻口縁に出現する。下板は発達せず、殻口からはほとんど見えない。プリカは側面に位置し、主襞は長く、月状襞は強く発達し、短い上腔襞と融合する。

近似種との区別：ヨワノミギセルよりもプリカが側面にあること、ツヤノミギセル近似種よりもプリカが腹側近くに位置することで区別できる。

分布の概要：石垣島と西表島の固有種。

近縁な種及び群との分布状況の比較：ツヤノミギセル近似種が西表島、ヨワノミギセルが石垣島に分布する。

生態的特徴：広葉樹林の落葉下、倒木下に生息する。

生息地の条件：同上。

個体数の動向：定量的なデータはないが、本種は林縁にも生息し、至適な生息環境は道路や畑の拡張で減少しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況：西表島では広く分布するが、石垣島では生息地が少ない。

学術的意義・評価：*Tyrannozyptyx* は八重山諸島で複数の種に分化しており生物地理学的に重要である。本種は石垣島で生息地が限定されるため、地域個体群としての保全も必要である。

生存に対する脅威：開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

原記載：Käufel, F., 1930. Beitrag zur Kenntnis der zytychoiden Phaedusinen. Archiv für Molluskenkunde, 62: 51–55, pl. 2. (p. 52, no. 2, pl. 2, fig. 4a–d, as *Tyrannozyptyx adulta*. Type loc.: “Sachieda: Yaeyama”)

参考文献：波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121–128, pls 15–17.

湊 宏, 2014. サキシマノミギセル. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 423.

執筆者名：上島 励

和名：ヨワノミギセル
分類：腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
学名：*Tyrannozyptyx diminuta* Käufel, 1930
カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

図の解説：p. 39. 1 (参考)：タカラノミギセル 尖閣諸島. 2 (参考)：サキシマノミギセル 石垣島. 3：ヨワノミギセル 石垣島. 撮影：久保弘文.

形態：殻は小型 (殻長約 10 mm) で、細く (殻径約 2 mm)、細長い塔型で、先端は尖る。殻は褐色で、殻表は滑らかで光沢がある。殻口は、外唇側が少し凹んで歪み、殻口縁は肥厚する。殻口内の上板は発達し、下軸板は殻口縁に出現する。下板は発達せず、殻口からはほとんど見えない。プリカは腹面に位置し、主襞は長く、月状襞は強く発達する。短い上腔襞があり、殻口側の末端で月状襞と融合する。

近似種との区別：サキシマノミギセル、ツヤノミギセル近似種に似るが、プリカが腹面に位置することで区別できる。

分布の概要：本種は西表島からも記録があるが誤同定と思われ、石垣島の固有種と考えられる。

近縁な種及び群との分布状況の比較：ツヤノミギセル近似種が西表島、サキシマノミギセルが西表島、石垣島に分布す

生態的特徴 : える。
 生態的特徴 : 広葉樹林の落葉下、倒木下に生息する。
 生息地の条件 : 同上。
 個体数の動向 : 本種は自然林のみならず、林縁や開放的な環境にも生息する。このような場所では至適な生息環境が消失、悪化しているため、個体数は減少していると思われる。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : *Tyrannozyptyx* は八重山諸島で複数の種に分化しており生物地理学的に重要である。
 生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。
 原 記 載 : Kaüfel, F., 1930. Beitrag zur Kenntnis der zapytychoiden Phaedusinen. Archiv für Molluskenkunde, 62: 51-55, pl. 2. (p. 53, no. 3, pl. 2, fig. 5a-d, as *Tyrannozyptyx deminuta*. Type loc.: “Sachieda und Nangura: Yaeyama”)
 参 考 文 献 : 波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls 15-17.
 湊 宏, 2014. ヨワノミギセル. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 423.
 執 筆 者 名 : 上島 励

和 名 : ツヤノミギセル
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
 学 名 : *Tyrannozyptyx polita* (Kaüfel, 1930)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 殻は小型 (殻長約 10 mm) で、細く (殻径約 2 mm)、細長い塔型で、先端は尖る。殻は黄褐色で、殻表は滑らかで光沢がある。殻口は、洋梨型で、殻口縁は少し肥厚する。殻口内の上板は発達し、下軸板は殻口縁に出現する。下板は発達せず、殻口からはほとんど見えない。プリカは側面に位置し、主襞は長く、月状襞は強く発達する。短い上腔襞があり、その中心付近で月状襞と融合し、T 字型を呈する。

近似種との区別 : サキシマノミギセル、ヨワノミギセルとはプリカが側面にあり、上腔襞と月状襞が T 字型を呈することで区別され、分布域も異なる。ツヤノミギセル近似種とはプリカが背面に達しないことで区別される。

分布の概要 : タイプ産地は「石垣島名蔵」とされ、また西表島からの記録もあるが、これらは誤りであり、与那国島の固有種である。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : サキシマノミギセルが西表島と石垣島、ツヤノミギセル近似種が西表島、ヨワノミギセルが石垣島に分布する。

生態的特徴 : 自然林の落葉下や倒木下に生息するが、林縁の開けた環境にも生息する。
 生息地の条件 : 同上。
 個体数の動向 : 森林の乾燥化により近年減少した。
 現在の生息状況 : 森林の乾燥化により近年減少したが、他の固有種よりも乾燥に強いと思われる。
 学術的意義・評価 : *Tyrannozyptyx* は八重山諸島で複数の種に分化しており生物地理学的に重要である。
 生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。
 原 記 載 : Kaüfel, F., 1930. Beitrag zur Kenntnis der zapytychoiden Phaedusinen. Archiv für Molluskenkunde, 62: 51-55, pl. 2. (pp. 51-52, no. 1, pl. 2, fig. 3a-c, as *Hemizyptyx polita*. Type loc.: “Nangura: Yaeyama”)
 参 考 文 献 : 波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls 15-17.
 久保弘文・福田 宏・早瀬善正・亀田勇一・黒住耐二・上島 励・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック—レッドデータおきなわ— 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告—1. 与那国島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
 湊 宏, 2014. ツヤノミギセル. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 422.

執 筆 者 名 : 上島 励

和 名 : ツヤノミギセル近似種
 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 キセルガイ上科 キセルガイ科
 学 名 : *Tyrannozyptyx* sp.
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

図 の 解 説 : p. 50. 西表島浦内川上流. 撮影 : 久保弘文.
 形 態 : 殻は小型 (殻長約 10 mm) で、細く (殻径約 2 mm)、細長い塔型で、先端は尖る。殻は暗褐色で、殻表は滑らか。殻口は、外唇側が少し凹んで歪み、殻口縁は肥厚する。殻口内の上板は発達し、下軸板は殻口縁に出現する。下板は発達せず、殻口からはほとんど見えない。プリカは側面から背面に

かけて位置し、主襞は長く、月状襞は強く発達し、短い上腔襞と融合する。
近似種との区別 : ツヤノミギセルと混同されていたが、本種はツヤノミギセルよりもプリカが背面に位置し、分布域も異なる。サキシマノミギセルにも酷似するが、プリカがより背面に位置することで区別できる。
分布の概要 : 西表島にのみ生息する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : ツヤノミギセルが与那国島、ヨワノミギセルが石垣島、サキシマノミギセルが西表島、石垣島に分布する。
生態的特徴 : 西表島の標高の高い自然林の落葉下、倒木下に生息する。
生息地の条件 : 同上。
個体数の動向 : 不明。
現在の生息状況 : 採集例は少ない。
学術的意義・評価 : *Tyrannozaptyx* は八重山諸島で複数の種に分化しており生物地理学的に重要である。
生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。
特記事項 : 未記載種。
参考文献 : 波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls 15-17.

執筆者名 : 上島 励

和名 : ツヤカサマイマイ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 “コハクガイ上科” カサマイマイ科

学名 : *Videnoida cathcartae* (Reeve, 1854)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 貝殻は中型で殻径 17 mm 前後、螺塔は著しく低く(殻長約 6 mm)、扁平な円盤型。螺層は細かく巻き、体層周辺は鋭く角張る。殻底はやや膨らみ、臍孔は広く開き、臍孔周辺は角張らない。殻はやや薄くて赤褐色、底面は光沢がある。殻口は薄く、反曲肥厚しない。

近似種との区別 : 沖縄島周辺に生息するオオカサマイマイとは、殻が小さく、臍孔周辺は角張らないことで区別される。分布域も異なる。

分布の概要 : 八重山諸島(石垣島、西表島、与那国島)に生息する。タイプ産地は宮古島とされているが、誤りと思われる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島から奄美大島にかけてオオカサマイマイが、奄美大島から大隅諸島にかけてタカカサマイマイが分布し、台湾にはマルカサマイマイ等が分布する。

生態的特徴 : 広葉樹林内の倒木や、立ち枯れの木の樹幹に生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 定量的なデータはないが、至適な生息環境が減少しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : カサマイマイ類は琉球列島に広く分布するが、地域ごとに別種が分布し、生物地理学的に重要。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項 : 地域集団間の遺伝的分化が大きいため、分類学的な再検討が必要。保全は地域集団単位で検討する必要がある。なお本種の学名種小名は多くの文献で「*cathcartae*」とされてきたが、正しくは *cathcartae* である。本科の所属する上科は前提的な見解であり、今後変更される可能性がある。

原記載 : Reeve, L.A., 1854. Monograph of the genus *Helix*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 7: pls 1-210. (sp. 1427, pl. 203, fig. 1427, as *Helix Cathcartae*. Type loc.: “island of Typinsan, Meiacoshimas”)

参考文献 : 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, xvi+343 pp., 80 pls.

平瀬興一郎, 1908. 日本陸産貝類図説 (十). 介類雑誌, 2(3): 80-86, pl. 15.

上島 励, 2014. ツヤカサマイマイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 423.

執筆者名 : 上島 励

和名 : ヒメカサキビ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 “コハクガイ上科” シタラ科

学名 : *Trochochlamys subcrenulata* (Pilsbry, 1901)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は小型(殻長約 1.6 mm、殻径約 2.5 mm)で薄い。周縁は鋭いキールとなる。螺塔部は細かな成長肋が明瞭で、殻底は弱い螺溝の彫刻となる。

近似種との区別 : 本種の殻は濃褐色、そろばん玉形。沖縄県下の種ではナハキビに似るが、ナハキビは淡黄褐色、低円錐形であり区別できる。

分布の概要 : 本州(関東以南)、四国、九州、奄美大島、沖縄島に分布。

近縁な種及び群との分布状況の比較：九州以北の個体群と奄美大島や沖縄島の個体群との間には、殻形態に差異は認められない。

生態的特徴：生態的な見解が殆ど知られていない。広域分布する種であるが、発見される個体数はいずれの場所でも少数である。

生息地の条件：本州では山麓部や海岸林などの比較的乾燥した常緑樹林の落葉下に見られる。沖縄島では山林の比較的良好な自然林の落葉下に見られる。

個体数の動向：元々少数個体が確認される程度であるので、大幅な増減の傾向は認められない。

現在の生息状況：沖縄島の良好な森林環境に生息する。生息地域では少数個体が確認される程度である。

学術的意義・評価：沖縄島の個体群は、本種の南限分布個体群と考えられるので、生物地理学的にも貴重な個体群である。

生存に対する脅威：沖縄島では生息地が限られており、近年の急速な開発の影響が懸念される。

特記事項：本種の亜種とされる場合のあるサツマヒメカサキビは、平瀬與一郎標本では本種と殻形態が異なるので別種と考える。なお、Hausdorf (1998) や Bouchet & Rocroi (2005)、Burke (2013) では、シタラ科 (キビガイ科) Euconulidae をコハクガイ上科 Gastrontoidea に、ベッコウマイマイ科 Helicarionidae をベッコウマイマイ上科 Helicarionoidea に位置付け、両科を異なるグループに分類している。日本国内に生息するキビガイ類・シタラ類・小型のベッコウマイマイ類においても、シタラ科に位置付ける見解は既に多く見られる (e.g. Schileyko, 2002)。この沖縄県レッドデータブックで、本種がシタラ科とされているのは、本種の執筆担当者がこの分類見解に従ったことによる。この他にも既に日本国内においては、以前ベッコウマイマイ科とされていた多くの種がシタラ科に位置付けられているのも実情である (茨城県生活環境部環境政策課, 2016 など)。ただし、この場合においても、大きな外套葉で殻を覆う特徴を持つ種に関しては、ベッコウマイマイ科に位置付けている場合が多い。一方、この沖縄県レッドデータブックでは、ベッコウマイマイなど *Bekkochlamys* 属の種、宮古島固有の未記載種、オキナワベッコウなど現時点でもベッコウマイマイ科に属すと見なされている種に加えて、いわゆるキビガイ類・シタラ類などのシタラ科に該当すると考えられる種 (本種を除く) がベッコウマイマイ上科のベッコウマイマイ科に位置付けられているのは、それらの種の執筆担当である上島励博士の「ベッコウマイマイ類やその近縁グループの上位タクサとの関係上、シタラ科はベッコウマイマイ科に含めるべき」とする見解によるものである。このように、シタラ科およびベッコウマイマイ科の分類は、いまだ確定的でない。シタラ科とベッコウマイマイ科が真に科や上科レベルで相違するグループなのかという点に関しては、今後の分子系統解析などの研究の成果が待たれる状況である。

原記載：Pilsbry, H.A., 1901. New Japanese marine, land and fresh-water Mollusca. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 385-408, pls 19-21. (p. 404, as *Kaliella subcrenulata*. Type loc.: "Kochi, Tosa, Shikoku Island")

参考文献：Bouchet, P. & Rocroi, J-P., 2005. Classification and nomenclator of gastropod families. Malacologia, 47(1-2): 1-397.

Burke, T.E., 2013. Land Snails and Slugs of the Pacific Northwest. Oregon State University Press, Corvallis, 344 pp.

Hausdorf, B., 1998. Phylogeny of the Limacoidea *sensu lato* (Gastropoda: Stylommatophora). Journal of Molluscan Studies, 64: 35-66.

茨城県生活環境部環境政策課 (編), 2016, 茨城における絶滅のおそれのある野生生物 動物編 2016年改訂版 (茨城県版レッドデータブック). 茨城県生活環境部環境政策課, 水戸, 4+327 pp.

久保弘文, 2014a. 恩納村の貝類. "恩納村誌 第1巻 自然編", 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.

久保弘文, 2014b. 陸産貝類. "平成25年度地域生物多様性保全計画 (大宜味村地域連携保全活動計画) 策定事業報告書", 環境省・大宜味村 (編), 環境省・大宜味村, 大宜味, 136-157.

Schileyko, A. A., 2002. Treatise on Recent terrestrial pulmonate molluscs, Parts 8, 9. Ruthenica, Supplement 2: 1035-1166, 1167-1307.

執筆者名：早瀬善正

和名：ベッコウマイマイ
 分類：腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名：*Bekkochlamys perfragilis* (Pilsbry, 1901)
 カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：情報不足 (DD)

図の解説：p. 50. 国頭村辺野喜. 撮影：早瀬善正.
 形態：日本産ベッコウマイマイ類では最大級で、殻径 18 mm に達する。生時は外套膜が淡い鼈甲色の貝殻を大きく被覆し、そのため貝殻は平滑で光沢が強い。

近似種との区別：沖縄島北部に生息するオキナワテラマチベッコウと類似しているが、螺管が体層で急激に大きくなること、軟体部が灰褐色のマダラ模様で、広く貝殻を覆うことから区別できる。

分布の概要：沖縄島及びその属島と奄美大島・徳之島に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較：オキナワテラマチベッコウは沖縄島北部の固有種であるが、本種は奄美大島・沖縄島に広く分布する。

生態的特徴：冬季～初春に成熟して産卵後は斃死し、寿命は1年と考えられる。

生息地の条件：自然度が高く、湿潤な森林に棲息し、乾燥時は倒木下、樹木のうろ等で過ごす。高湿時には落葉

- 上や樹幹を活発に匍匐する。
- 個体数の動向 : 現在でも沖縄島北部(国頭)山間部では個体数は少なくない。しかし、1990年代に多産した、本部半島、特に嘉津宇岳や八重岳では個体数が激減しており、2016年1月での調査では全く見つからなかった。また、中南部では確認事例が著しく少なく、都市化に伴う森林環境の減少で、生息地そのものが未調査のまま消失した可能性が高い。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 沖縄島・奄美大島共通の代表的な固有陸産貝類であり、分布域の成立過程等、生物地理学的意義は大きいと考えられる。
- 生存に対する脅威 : 人為的な森林消失、伐採や台風による森林荒廃や乾燥化は本種の生息阻害要因となる。また、外来種アジアベッコウやヒラコウラベッコウとの競合も危惧される。
- 原 記 載 : Pilsbry, H.A., 1901. New land Mollusca from Japan and the Loo Choo Islands. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 344-353. (p. 345, as *Macrochlamys perfragilis*. Type loc.: "Kunchan, Okinawa")
- 参 考 文 献 : 木村一貴, 2015. 沖縄に移入した外来カタツムリ *Macrochlamys* sp. が在来種に与える負の効果. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 17: 59-61.
久保弘文, 2012. 陸産貝類調査. "平成23年度地域生物多様性保全計画(大宜味村地域連携保全活動計画)策定調査業務報告書", 環境省・大宜味村(編), 環境省・大宜味村, 大宜味, 56-64.
久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. "恩納村誌 第1巻 自然編", 恩納村誌編さん委員会(編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
久保弘文, 2017. 第4節 陸産貝類. "名護市史「自然と人」", 名護市教育委員会 市史編纂室(編), 名護市教育委員会, 名護, 印刷中。
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

-
- 和 名 : **ボニンキビ**
- 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
- 学 名 : *Liardetia boninensis* (Pilsbry & Hirase in Hirase, 1908)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 図 の 解 説 : p. 50. A: ボニンキビ 恩納村(早瀬善正採集). B(参考): コスジキビ 名護市. C(参考): ナハキビ 名護市. 撮影: 久保弘文。
- 形 態 : 殻は微小で、殻径約2mm、螺塔はやや低く、低円錐型。螺層は細かく巻き、体層周縁は弱く角張る。殻は薄く、暗褐色、殻表には細かい成長脈が密にあり、微細な螺状彫刻を持つ。臍孔は狭い。殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。
- 近似種との区別 : コスジキビ (fig. YYY. B) よりも成長脈が細かく、螺塔が低いことで区別できる。ナハキビ (fig. YYY. C) は周縁が強く角張り、成長脈は更に弱い。
- 分布の概要 : 小笠原諸島、沖縄島、大東諸島から知られる。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : コスジキビは八重山諸島、大東諸島に分布する。
- 生態的特徴 : 森林の落葉下に生息し、開放的な環境にも見られる。
- 生息地の条件 : 同上。
- 個体数の動向 : 沖縄島では個体数は少ない。大東諸島では激減した。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 生存に対する脅威 : 不明。
- 特記事項 : 分類学的再検討が必要。IUCNカテゴリー: Vulnerable (VU)。
- 原 記 載 : 平瀬與一郎, 1908. 日本陸産貝類図説追加(一). 介類雑誌, 2(12): 403-409, pl. 22 (pp. 405-406, pl. 22, figs 31-33, as *Kaliella* (?) *boninensis* Pilsbry & Hirase オガサハラキビ. Type loc.: "小笠原兄島")
- 参 考 文 献 : 東 良雄・東 正雄, 1994. 大東島の陸産貝類相. Venus, 53(3): 161-173.
上島 励, 2014. ボニンキビ. "レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 423。
- 執 筆 者 名 : 上島 励

-
- 和 名 : **キヌツヤベッコウ属の一種 (1)**
- 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
- 学 名 : *Nipponochlamys* sp. 1
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 図 の 解 説 : p. 50. 撮影: 上島励。
- 形 態 : 貝殻は小さく(殻径約4.5mm)、螺塔は低い。螺層はやや密に巻き、体層周縁は丸い。殻口は三日月形で、殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。殻は褐色で、殻表には細かい成長線が密にあり、曇った外観を呈する。臍孔はほぼ閉じる。
- 近似種との区別 : 琉球列島産の *Nipponochlamys* キヌツヤベッコウ属は長らくトクノシマベッコウ 1種とされていた

が、多数の隠蔽種が存在することが判明した。本種を含むこれらの近似種はいずれも生殖器の形態で区別できるが、外見での区別は一部の種の組み合わせを除いて極めて困難である。

分布の概要： 沖縄島に広く分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： クメジマベッコウは久米島、ヨナグニベッコウは与那国島、*N. sp. 2*が沖縄島北部、*N. spp. 3-5*は伊平屋島、*N. sp. 6*が石垣島に分布する。また、本種に酷似した個体群が奄美大島にも生息する。

生態的特徴： 自然林の湿った落葉下、倒木や石の裏に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 過去の記録はないが、本種の至適な生息環境は減少、悪化しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況： 沖縄島に広く分布するが、南部では環境の悪化が著しく生息地が減少している。

学術的意義・評価： キヌツヤベッコウ属は琉球列島で多数の種に分化しており、生物地理学的に重要なグループである。いずれの種も狭い地域の固有種であり、保全の重要性は高い。

生存に対する脅威： 森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項： 未記載種である。本種に酷似した特徴を持つ奄美大島の集団については分類学的検討が必要。

執筆者名： 上島 励

和名： **グードベッコウ**

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Takemasaia gudei* (Pilsbry, 1901)

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

形態： 貝殻は中型（殻径約 9 mm）で、殻長はやや長く（約 6 mm）、やや高い円錐形で、螺管は細かく巻き、体層周縁は弱く角張る。底面は膨らみ、臍孔は狭い。殻は濃褐色で、殻表はほぼ平滑、光沢がある。

近似種との区別： リュウキュウカドベッコウに殻は似るが、生殖器の形態が異なる。

分布の概要： 奄美大島・徳之島・沖縄島北部に分布する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 他のベッコウマイマイ類との類縁関係は不明であるが、近縁種と思われるものが尖閣諸島に分布する。

生態的特徴： 自然林の湿った落葉下に生息する。石灰岩地に多い。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 一部の産地では個体数が減少している。

現在の生息状況： 沖縄島北部に生息するが、産地は少ない。石灰岩地では個体数は多いが、非石灰岩地では稀である。

学術的意義・評価： 奄美群島と沖縄島の関連を示す種であり、生物地理学的に重要。

生存に対する脅威： 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。

特記事項： 奄美諸島の個体群を含めて分類学的な再検討が必要。

原記載： Pilsbry, H.A., 1901. New land Mollusca from Japan and the Loo Choo Islands. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 53: 344-353. (pp. 345-346, as *Macrochlamys Gudei*. Type loc.: "Kunchan, Okinawa")

参考文献： 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, xvi+343 pp., 80 pls.

東 正雄・湊 宏, 1976. 奄美群島産グードベッコウの生殖器と歯舌について. *Venus*, 35 (1): 1-4.

上島 励, 2014. グードベッコウ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 424.

執筆者名： 上島 励

和名： **ホソスジベッコウ (新称)**

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科

学名： *Yamatochlamys sp. 2*

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 50. 撮影：上島励.

形態： 貝殻は微小で、殻径約 3 mm、螺塔は低く、螺層はやや細かく巻き、体層周縁は丸い。縫合はほとんど刻まれない。殻色は半透明の茶褐色、殻表は滑らかで、光沢が強く、弱い螺状彫刻を多数持つ。臍孔は狭い。

近似種との区別： タネガシマヒメベッコウに酷似するが、殻表に弱い螺状彫刻を巡らすことで区別される。

分布の概要： 沖縄県では八重山諸島にのみ生息する。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 近縁種は不明であるため、現時点では比較できない。

生態的特徴： 標高の高い自然林の湿った落葉下や倒木下に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 過去のデータがないが、個体数は少ない。

現在の生息状況： 同上。

学術的意義・評価 : 本種はトカラ列島にも生息し、琉球列島内で不連続な分布をするため、生物地理学的に興味深い。
生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。
特記事項 : 未記載種。

執筆者名 : 上島 励

和名 : **ベッコウマイマイ科の一種**
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
学名 : **Helicarionidae gen. & sp.**
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 51. 宮古島. 撮影 : 久保弘文.
形態 : 貝殻は小さく、殻径約 5 mm、螺塔は低く、上面はほぼ平らで、螺層はやや細かく巻き、体層周縁は丸い。縫合はほとんど刻まれない。殻色は半透明の褐色、殻表は滑らかで、光沢が強く、ほぼ平滑。臍孔は狭い。

近似種との区別 : 貝殻はタネガシマヒメベッコウ、ヤエヤマヒラベッコウに似るが、タネガシマヒメベッコウとはより大型で分布が宮古島に限定されていること、ヤエヤマヒラベッコウとはサイズが小さく分布域が異なることで区別できる。生殖器の形態も異なる。

分布の概要 : 宮古島、伊良部島にのみ分布する固有種。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : ベッコウマイマイ類では外見の似た種が必ずしも近縁ではなく、本種と近似種との類縁関係が明らかではないので、現時点では比較が困難。

生態的特徴 : 自然林の落葉下に生息する。
生息地の条件 : 同上。
個体数の動向 : 過去のデータがないが、宮古島ではやや広い範囲に生息し、個体数も少なくはない。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 宮古諸島の固有種で生物地理学的に重要。
生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化。
特記事項 : 湊 (1980) ではトクノシマベッコウに誤同定されたが、未記載種である。
参考文献 : 湊 宏, 1980. 宮古群島の陸産貝類相. Venus, 39(2): 83-99.

執筆者名 : 上島 励

和名 : **シュリケマイマイ**
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
学名 : **Aegista elegantissima (Pfeiffer, 1849)**
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻径 20 mm 内外、円盤形。半透明で殻皮は黄白色。体層周縁には強い角を持ち、この部分に長い毛を密生させる。それ以外の殻表面には明瞭な鱗片状突起はない。やや粗い成長肋を持つ。殻口は白色で、肥厚し弱く反転する。臍孔の縁は弱く角立つ。

近似種との区別 : 周縁角が強く、殻表面に顕著な鱗片状殻皮を欠くこと、殻皮色が半透明の黄白色であることで、琉球列島の同属他種と識別できる。

分布の概要 : 沖縄島と周辺の小島嶼にのみ生息する。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本部半島周辺の大型個体群は、クンチャンケマイマイとして区別されることもあるが、ここでは同一のものとして取り扱った。

生態的特徴 : 湿度が高く自然度豊かな森林内の琉球石灰岩に付着することが多い。
生息地の条件 : 同上。凹凸の多い石灰岩露頭に依存する。
個体数の動向 : かつては石灰岩の表面に多数の個体が見られる場所も多かったが、生息密度は減少傾向にある。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 沖縄諸島固有の系統である。
生存に対する脅威 : 石灰岩地の開削や、伐採による乾燥化などで容易に死滅する可能性がある。また、生息地の一部には捕食者として陸生プラナリア類が確認されているが、影響については不明。

特記事項 : 本部半島のクンチャンケマイマイとその他の地域の個体群との遺伝的な差は大きくなく、体サイズ以外の形態差が見られないため同種として扱う。

原記載 : Pfeiffer, L., 1849. Monographia Heliceorum. Zeitschrift für Malakozoologie, 6: 66-79, 81-95, 106-112. (p. 83, no. 1032a, as *Helix elegantissima*. Type loc.: "Liewkiew")

参考文献 : 知念盛俊, 1976. 陸産貝類. "生態写真集 沖縄の生物", 沖縄生物教育研究会 (編), 新星図書, 那覇, 212-243.
Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.

波部忠重, 1955. 日本産陸産貝類の解剖学的研究 (3). *Venus*, 18: 221-234.
 Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171-181.
 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
 湊 宏, 1995. 古宇利島の陸産貝類. *ちりぼたん*, 26: 44-48.

執筆者名 : 平野尚浩・黒住耐二* *前回改訂版 (2005) における黒住による記載内容を一部引用した。

和名 : クロイワオオケマイマイ
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科

学名 : *Aegista mackensii* (Adams & Reeve, 1850)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻径約 25~40 mm、円盤形で、螺塔はやや高まる。殻は厚質で殻皮は薄茶色~濃茶褐色。体層周縁には強い角を持ち、この部分に比較的長い毛を密生させる。他の殻表面には鱗片状突起があり、やや粗い成長肋を持つ。殻口は肥厚し弱く反転する。臍孔は広く開き、その縁は弱く角立つ。

近似種との区別 : 周縁角が強く殻表面に顕著な鱗片状殻皮を持つこと、殻皮色が茶色であること、比較的大型であることから琉球列島の同属他種と識別できる。

分布の概要 : 石垣島と西表島の他、台湾北部にも分布する。タイプ産地と考えられる宮古島では未確認。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 台湾産の個体と比較すると体サイズが異なるが、遺伝的にはほとんど差が見られない。

生態的特徴 : 林床の倒木・石下、落葉中に生息する地上棲種である。比較的開けた林縁や農地周辺の藪にも生息する。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 高密度で見られることもあるが、生息地は島内で点在している。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 海峡で隔てられた台湾に同種がおり生物地理的に興味深い。

生存に対する脅威 : 道路拡張、森林伐採、草地の刈り取りなどが減少させる要因として考えられる。

原記載 : Adams, A. & Reeve, L.A., 1850. *Mollusca*. “The Zoology of the Voyage of H.M.S. Samarang: under the Command of Captain Sir Edward Belcher, C.B., F.R.A.S., F.G.S., during the Years 1843-1846”, Adams, A. (ed.), Reeve & Benham, London, i-x, 1-87, pls 1-24. (p. 60, no. 9, pl. 15, fig. 6a-b, as *Helix Mackensii*. Type loc.: “Island of Ty-pin-san, Meiacoshimas”)

参考文献 : Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171-181.

執筆者名 : 平野尚浩・黒住耐二* *前回改訂版 (2005) における黒住による記載内容を一部引用した。

和名 : ナガシリマルホソマイマイ
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科

学名 : *Aegista meiacoshimensis* (Adams & Reeve, 1850)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻径約 4 mm、螺塔は細長い塔型。殻皮は薄い茶色。殻は全体に薄く、殻口外唇は弱く反転する。生殖器には矢嚢およびその付属器官を欠く。

近似種との区別 : トウガタホソマイマイは体層に顕著な周縁角を持ち、殻径が大きく、殻長がより鋭い点で本種とは異なる。シリマルホソマイマイとは塩基配列で識別が可能だが、今後の詳細な種間関係の検討が必要。

分布の概要 : これまでの調査で波照間島、石垣島、西表島で確認されている。タイプ産地とされる宮古島では未確認。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 尖閣諸島にタカラホソマイマイ、台湾にシリマルホソマイマイが分布する。

生態的特徴 : 海岸林などの林縁の倒木や琉球石灰岩に付着する。クワズイモなどの草本上で観察されることも多い。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 生息場所では高密度で見られることもあるが、生息が確認できない場所のほうが多い。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 海峡で隔てられた台湾に近縁種がおり生物地理的に興味深い。

生存に対する脅威 : 道路拡張、森林伐採、草地の刈り取りなどが減少させる要因として考えられる。

- 特記事項 : Hirano et al. (2014) の分子系統学的研究によって、台湾～琉球列島に産するホソマイマイ属の種はオオベソマイマイ属に所属させるのが妥当であることが示された。本種とタカラホソマイマイとの関係性については未検討。
- 原記載 : Adams, A. & Reeve, L.A., 1850. Mollusca. “The Zoology of the Voyage of H.M.S. Samarang; under the Command of Captain Sir Edward Belcher, C.B., F.R.A.S., F.G.S., during the Years 1843–1846”, Adams, A. (ed.), Reeve & Benham, London, i–x, 1–87, pls 1–24. (p. 58, no. 2, pl. 14, fig. 5, as *Bulimus Meiacoshimensis*. Type loc.: “Islands Ty-pin-san and Koo-Kien-san, Meiacoshima group, Yellow Sea”)
- 参考文献 : 早瀬善正・波部忠重, 1998. ホソマイマイ属2種の生殖器形態についての知見. ちりぼたん, 28: 59–62.
Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171–181.
- 執筆者名 : 平野尚浩・黒住耐二* *前回改訂版(2005)における黒住による記載内容を一部引用した。

和名 : **オオベソマイマイ**
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
学名 : *Aegista vermis* (Reeve, 1852)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT) (ミズイロオオベソマイマイとして)

形態 : 殻径 24 mm 内外、円盤形で螺塔は低い。殻皮色はやや青みがかった灰色または赤褐色。体層周縁には非常に弱い角を持ち、この部分は細い白帯を形成する場合がある。殻口はやや弱く肥厚し、反転する。臍孔は広く開く。

近似種との区別 : アカマイマイやオマオオベソマイマイは本種に比べて小型。

分布の概要 : 石垣島と西表島に生息。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 台湾にはタイワンオオベソマイマイやそれに近縁な別種が生息する。一方宮古島・伊良部島にはアカマイマイが、多良間島にはオマオオベソマイマイが分布する。

生態的特徴 : 林床の倒木・石下、落葉中に生息し、林縁や農地周辺の藪にも見られることがある。

生息地の条件 : 同上。

個体数の動向 : 高密度で見られることもあるが生息地は島内で点在しており限定的である。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 海峡で隔てられた台湾に近縁種がおり生物地理的に興味深い、分布範囲が狭いため保全が必要。

生存に対する脅威 : 道路拡張、森林伐採、草地の刈り取りなどが減少させる要因として考えられる。

特記事項 : ミズイロオオベソマイマイとは遺伝的な差がほとんどなく、2種を区別する殻色や輪郭など殻形態の違いも連続的なため、これらを種内変異の範囲として考え、本種に統一した。波照間島産のオオベソマイマイ属個体群(オマオオベソマイマイとされる場合がある)との関係性は未検討。また、タイプ産地は「Meiacoshima Group」(おそらく現在の宮古諸島)となっているため、宮古諸島に生息するアカマイマイなどを含めた分類学的再検討が必要。

原記載 : Reeve, L.A., 1851–1854. Monograph of the genus *Helix*. *Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals*, 7: pls 1–210. (sp. 424, pl. 80, fig. 424, as *Helix vermis*. Type loc.: “Meiacoshima Group”)

参考文献 : Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171–181.

Huang, C., Lee, Y., Lin, S. & Wu, W., 2014. Taxonomic revision of *Aegista subchinensis* (Möllerndorff, 1884) (Stylommatophora, Bradybaenidae) and a description of a new species of *Aegista* from eastern Taiwan based on multilocus phylogeny and comparative morphology. *ZooKeys*, 445: 31–55.

執筆者名 : 平野尚浩・黒住耐二* *前回改訂版(2005)における黒住による記載内容を一部引用した。

和名 : **パンダナマイマイ**
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
学名 : *Bradybaena circulus* (Pfeiffer, 1846)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー: 該当なし

形態 : 殻は中型(殻径約 25 mm)で、殻長は短く(約 15 mm)、分厚い円盤形。螺塔は平巻から低円錐形、周縁角は極めて強いものからほとんど目立たないものまで変異が大きい。殻色も黄白色から濃褐色まで様々で、周縁に色帯を持つものが多いが、無帯の個体もある。殻表は平滑で、殻の厚さにも変異が大きい。

近似種との区別 : 本種は、同属の外来種であるオナジマイマイとは、殻が大型・厚質であること、弱くとも周縁角の存在する場合がほとんどであることで区別できる。タメトモマイマイとも周縁角の存在と生殖器の副囊の発達が弱いことで識別される。

〈貝類〉

- 近似種との区別 : シュリマイマイやミヤコマイマイとは、螺層上面のみに規則的で強い皺状彫刻を持つことによって区別できる。
- 分布の概要 : 伊平屋島・伊是名島固有種。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 琉球列島で多様化している地上性の系統の一員で、近縁なリュウキュウヒダリマキマイマイは久米島に、シュリマイマイとミヤコマイマイは沖永良部島から久米島にかけて分布する。
- 生態的特徴 : 自然林の倒木下や落葉下に生息する地上棲種である。
- 生息地の条件 : 同上。
- 個体数の動向 : 自然林では比較的多くの個体が確認されるが、10年ほど前と比べると減少傾向にある。夏季には林道の側溝などに干からびて死んだ個体が多数見られることもある。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 琉球列島で多様化を遂げた系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものとして生物地理学的に重要である。
- 生存に対する脅威 : 湿度の保たれた森林環境が必要であり、森林の開削や温暖化等で林内の乾燥が進めば個体群の縮小に繋がる。また、ごく一部ではあるが外来の近縁種ミヤコマイマイが棲息地に侵入しており、影響が懸念される。
- 原 記 載 : Pfeiffer, L., 1857. Descriptions of fifty-eight new species of Helicea from the collection of H. Cuming, Esq. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1856: 324-336. (pp.328-329, no.23, as *Helix ammiralis*. Type loc.: "China")
- 参 考 文 献 : Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
知念盛俊・治井正一, 1976. 伊平屋島・伊是名島の陸・淡水貝類 (予報). 沖縄生物教育研究会誌, (9): 37-43.
亀田勇一, 2007. 与論島・伊平屋島におけるシュリマイマイの記録. ちりぼたん, 37: 183-185.
川名美佐男, 2003. 伊平屋島の陸産貝類の近況. かいなかま, 37(1): 20-24.
湊 宏, 2001. シュリマイマイ種群とオオシママイマイ種群の種類とその分布. ちりぼたん, 32: 24-31.
- 執 筆 者 名 : 亀田勇一・黒住耐二* *前回改訂版(2005)における黒住による記載内容を一部引用した。

- 和 名 : クロイワヒダリマキマイマイ
- 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 マイマイ上科 ナンバンマイマイ科
- 学 名 : *Satsuma yaeyamensis* (Pilsbry, 1894)
- カ テ ゴ リ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 貝殻は左巻きで殻径 27 mm 内外、螺塔は低く、やや薄質。体層周縁は丸い。淡褐色の地に1本の周縁色帯をもち、色帯の上下は明色となる。臍孔は広く開く。
- 近似種との区別 : 琉球列島産の他の左巻きの同属種とは、殻が低平で臍が広いことで識別できる。台湾ンマイマイとは、螺塔が低く、殻底の膨らみが強いことで区別される。
- 分布の概要 : 石垣島と西表島の自然度の高い森林の主に林縁附近に棲息する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 姉妹種台湾ンマイマイが台湾に分布する。
- 生態的特徴 : 自然林や二次林の林床、およびそれに隣接する草地などに棲息する地上棲種である。
- 生息地の条件 : 同上。
- 個体数の動向 : イッシキマイマイと同所的にも棲息し、かつては多産する場所も散見されたが、近年では減少傾向にある。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 琉球列島で多様化を遂げた系統の一員であり、琉球列島の生物相の独自性を特徴づけるものである。特に本種はシュリマイマイ類の中でも最も古くに分岐した種のひとつであり、生物地理学的・進化生物学的にきわめて重要である。
- 生存に対する脅威 : 本種の主な棲息地は自然林周辺であり、開発による森林面積の減少・分断が個体数の減少に繋がっている。近年の温暖化や乾燥の進行も林内の湿度を下げ、棲息環境を狭めている可能性が高い。
- 原 記 載 : Pilsbry, H. A., 1894. Notices of new Japanese mollusks, II. The Nautilus, 8: 9-10. (p.10, as *Helix (Euhadra) yaeyamensis*. Type loc.: "Yaeyama (Okinawa) Island, Loo Choo group")
- 参 考 文 献 : 知念盛俊, 1970. 八重山の陸産貝類 (II). 沖縄生物教育研究会誌, (4): 26-30.
知念盛俊, 1990. 西表島の陸産貝類. "南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究 平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書", 環境庁自然保護局 (編), 環境庁自然保護局, 東京, 267-275.
波部忠重・知念盛俊, 1974. 八重山群島石垣・西表両島の陸産貝類相とその生物地理学的意義. 国立科学博物館専報, (7): 121-128, pls. 15-17.
- 執 筆 者 名 : 亀田勇一・黒住耐二* *前回改訂版(2005)における黒住による記載内容を一部引用した。

- 和 名 : ドロアワモチ
- 分 類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 ドロアワモチ上科 ドロアワモチ科
- 学 名 : *Onchidium* sp.

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態： アワモチ類としては中型で、体長約 3.5 cm 前後、やや細く、肉厚。貝殻はなく、ナメクジ状。腹足は広く、足の幅は体幅とほぼ同じ。背面は灰色から褐色で、不規則な黒斑があり、大小のイボ状突起が多数あり、大きな突起は生時には長く突出して棘状になる。腹足は鮮やかなオレンジ色または明褐色。

近似種との区別： 他の日本産アワモチ類とは、足の幅が広く、明るい茶褐色またはオレンジ色であること、生時には背面の突起が著しく長く伸長して棘状になることで区別できる。

分布の概要： 本州中部から八重山諸島まで知られるが、分類学的な検討が進めば東南アジアに生息する種と同種になる可能性もある。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 日本産アワモチ類の類縁関係や分布状況はデータが少なく、現時点では比較が困難である。

生態的特徴： 内湾の泥干潟やマングローブに生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 泡瀬干潟では埋め立てにより減少した。他の場所でも至適な環境は減少、悪化しており、個体数は減少していると思われる。

現在の生息状況： 沖縄島周辺では個体数はやや多く、場所によって多産するが、本土や九州では生息地が減少している。

学術的意義・評価： 本土では生息地が減少しており、保全すべき種である。

生存に対する脅威： 干潟の埋め立て、環境悪化。

特記事項： これまで本種の種名としては *O. daemeli* Semper, 1885 や *O. hongkongense* Britton, 1984 が当てられてきたが、学名は未確定である。愛媛県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅰ類、熊本県レッドデータブックで絶滅危惧ⅠA類にランクづけされている。

参考文献： 福田 宏, 2012. ドロアワモチ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 90.
福田 宏, 2014. ドロアワモチ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 316.

執筆者名： 上島 励

和名： キボシアワモチ
分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 ドロアワモチ上科 ドロアワモチ科
学名： *Paraonchidium cf. fungiforme* (Stantschinsky, 1907)
カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態： アワモチ類としては中型で、体長約 4 cm 前後、やや細く、肉厚。貝殻はなく、ナメクジ状。腹足は広く、足の幅は体幅とほぼ同じ。背面は灰色から褐色で、不規則な黒色または茶褐色の小斑があり、個体によっては縦帯状になる。背面には黄色のイボ状突起が多数あり、生時には短い棘状になる。腹足は灰色。

近似種との区別： ヒメキボシアワモチに酷似するが、生殖器の形態が異なる。

分布の概要： 沖縄島周辺に生息するが、他の海域にも生息する可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 日本産アワモチ類の類縁関係や分布状況はデータが少なく、現時点では比較が困難である。

生態的特徴： 内湾の泥干潟に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 泡瀬干潟では埋め立てにより減少した。他の場所でも至適な環境は減少、悪化しており、個体数は減少していると思われる。

現在の生息状況： 同上。

学術的意義・評価： 内湾の泥干潟に生息し、減少しているため保全すべき種である。

生存に対する脅威： 干潟の埋め立て、環境悪化。

特記事項： アワモチ類は学名の整理がされていないため、学名は暫定的なものである。分類学的な検討が進めば東南アジアの種と同種になる可能性もある。

原記載： Stantschinsky, W., 1907. Zur Anatomie und Systematik der Gattung *Oncidium*. Zoologische Jahrbücher, Systematik, Geographie und Biologie der Tiere, 25: 353–402, pl. 12. (pp. 374–380, no. 2, pl. 12, figs 4–6, as *Oncidium fungiforme*, Type loc.: “Queensland”)

参考文献： 上島 励, 2014. キボシアワモチ (新称). “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 317.

執筆者名： 上島 励

和名： ヒメキボシアワモチ
分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 ドロアワモチ上科 ドロアワモチ科
学名： *Paraonchidium cf. keiense* (Hoffmann, 1926)

〈貝類〉

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態： アワモチ類としては中型で、体長約 3.5 cm 前後、やや細く、肉厚。貝殻はなく、ナメクジ状。腹足は広く、足の幅は体幅とほぼ同じ。背面は灰色から褐色で、不規則な黒色または茶褐色の小斑がある。背面には黄色のイボ状突起が多数あり、生時には短い棘状になる。腹足は灰色。

近似種との区別： キボシアワモチに酷似するが、生殖器の形態が異なる。

分布の概要： 沖縄島周辺に生息するが、他の海域にも生息する可能性がある。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 日本産アワモチ類の類縁関係や分布状況はデータが少なく、現時点では比較が困難である。

生態的特徴： 内湾の泥干潟に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： 泡瀬干潟では埋め立てにより減少した。他の場所でも至適な環境は減少、悪化しており、個体数は減少していると思われる。

現在の生息状況： 同上。

学術的意義・評価： 内湾の泥干潟に生息し、減少しているため保全すべき種である。

生存に対する脅威： 干潟の埋め立て、環境悪化。

特記事項： アワモチ類は学名の整理がされていないため、学名は暫定的なものである。分類学的な検討が進めば東南アジアの種と同種になる可能性もある。

原記載： Hoffmann, K., 1926. Die Nacktschnecken der Dänischen Expedition nach den Keie Inseln. Videnskabelige Meddelelser Dansk Naturhistorisk Forening, 81: 15–36. (pp. 18–24, figs 1–5, as *Oncidium keiense*. Type loc.: “Toeal (Kei-Inseln)”).

参考文献： 上島 励, 2014. ヒメキボシアワモチ (新称). “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 317.

執筆者名： 上島 励

和名： ゴマセンベシアワモチ

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 ドロアワモチ上科 ドロアワモチ科

学名： *Platevindex* sp.

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT)

図の解説： p. 51. 佐敷干潟. 撮影：久保弘文.

形態： アワモチ類としては中型から小型で、体長約 3 cm 前後、著しく扁平で小判型。貝殻はなく、ナメクジ状。腹足は狭く、足の幅は体幅の約 1/3 程度。背面は灰色から褐色で、大小のイボ状突起が多数ある。腹面は黒灰色から淡黄色。

近似種との区別： 琉球列島に生息するアワモチ類とは、扁平な体を持ち、腹足が狭いことで識別できる。

分布の概要： 奄美大島から八重山諸島まで分布するが、東南アジアに生息する種と同種になる可能性もある。

近縁な種及び群との分布状況の比較： 同属のセンベシアワモチは本州西部～九州に生息する。

生態的特徴： 汽水域マングローブの泥底、および転石や木の下等に生息する。

生息地の条件： 同上。

個体数の動向： マングローブ自体が減少しているため、個体数も減少している。

現在の生息状況： 沖縄島周辺では比較的多い。

学術的意義・評価： マングローブに依存しており、減少しているため保全すべき種である。

生存に対する脅威： 河川改修や護岸の埋め立てによる生息環境の消失、悪化。

特記事項： 複数の種を含む可能性があり、分類学的な検討が必要。分類学的な検討が進めば東南アジアの種と同種になる可能性もある。

参考文献： 福田 宏, 2012. ゴマセンベシアワモチ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 91.

福田 宏, 2014. ゴマセンベシアワモチ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 421.

執筆者名： 上島 励

和名： ホソアシヒダナメクジ科の一種 (1)

分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 アシヒダナメクジ上科 ホソアシヒダナメクジ科

学名： *Rathouisiidae* gen. & sp. 1

カテゴリー： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー： 該当なし

図の解説： p. 51. 撮影：上島励.

形態： 小型のナメクジで、体長は 3.5 cm 前後で、本科としてはやや太い。背面には細かい顆粒状の突起が密生し、表面は粘液で覆われない。背面は灰色から黒褐色で、細かい黒斑が多数あり、個体によ

ては正中線に沿った縦帯のように見えることもある。頭触角は短く、小触角は白くて先端が僅かに二分する。

- 近似種との区別 : 模様と外観はホソアシヒダナメクジ科の一種 (4) に似るが、生殖器の形態が異なる。
 分布の概要 : 奄美諸島から沖縄島にかけて分布し、久米島にも生息する。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (2) が宮古島から西表島、ホソアシヒダナメクジ科の一種 (3) が与那国島に分布する。
 生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下や石の下に生息するが、林縁に生息することもある。肉食性で他の陸産貝類を捕食する。
 生息地の条件 : 林床の湿度が低いことが必須。
 個体数の動向 : 不明。
 現在の生息状況 : 琉球列島産ホソアシヒダナメクジ科における分布としては比較的広く、また開放的な環境にも生息するが、いずれの産地でも個体数は少ない。
 学術的意義・評価 : 本科は琉球列島で多くの固有種に分化しており、生物地理学的に重要である。
 生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、餌となる陸産貝類の減少。
 特記事項 : 未記載種。
 執筆者名 : 上島 励

- 和名 : **ホソアシヒダナメクジ科の一種 (2)**
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 アシヒダナメクジ上科 ホソアシヒダナメクジ科
 学名 : **Rathouisiidae gen. & sp. 2**
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 図の解説 : p. 51. 撮影 : 上島 励。
 形態 : 中型のナメクジで、体長は 4 cm 前後で、本科としてはやや大きく、太い。背面には細かい顆粒状の突起が密生し、表面は粘液で覆われない。背面は紫がかかった灰色で、細かく不規則な茶色い斑点が多数ある。頭触角は短く、小触角は白くて先端が僅かに二分する。

- 近似種との区別 : 与那国島のホソアシヒダナメクジ科の一種 (3) に酷似するが、生殖器の形態が異なる。
 分布の概要 : 宮古島、石垣島、西表島に分布。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (1) が奄美大島から久米島に、ホソアシヒダナメクジ科の一種 (3) が与那国島に分布する。
 生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下や石の下に生息する。肉食性で他の陸産貝類を捕食する。
 生息地の条件 : 林床の湿度が高いことが必須。
 個体数の動向 : 過去のデータがないので不明であるが、至適な生息環境が減少しているため、個体数も減少していると思われる。
 現在の生息状況 : 個体数は少ない。
 学術的意義・評価 : 本科は琉球列島で多くの固有種に分化しており、生物地理学的に重要である。
 生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、餌となる陸産貝類の減少。
 特記事項 : 未記載種。
 執筆者名 : 上島 励

- 和名 : **ホソアシヒダナメクジ科の一種 (5)**
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 アシヒダナメクジ上科 ホソアシヒダナメクジ科
 学名 : **Rathouisiidae gen. & sp. 5**
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 図の解説 : p. 51. 撮影 : 上島 励。
 形態 : 小型のナメクジで、体長は 2.5 cm 前後で、本科としては細い。背面には細かい顆粒状の突起が密生し、表面は粘液で覆われない。背面は黒色で、斑点や帯はなく、腹面は白色。頭触角は短く、小触角は白くて先端が僅かに二分する。

- 近似種との区別 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (4) とは体が細く、背面が黒いことで区別できる。ホソアシヒダナメクジ科の一種 (6) は外見が酷似するが、生殖器の形態が異なる。
 分布の概要 : 西表島と石垣島にのみ分布する。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (4)、(6) は沖縄島に分布する。
 生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下や石の下に生息する。肉食性で他の陸産貝類を捕食する。
 生息地の条件 : 林床の湿度が高いことが必須。
 個体数の動向 : 過去のデータがないので不明であるが、至適な生息環境が減少しているため、個体数も減少していると思われる。
 現在の生息状況 : 個体数は少ない。
 学術的意義・評価 : 本科は琉球列島で多くの固有種に分化しており、生物地理学的に重要である。

〈貝類〉

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、餌となる陸産貝類の減少。
特記事項 : 未記載種。

執筆者名 : 上島 励

和名 : ホソアシヒダナメクジ科の一種 (7)
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 アシヒダナメクジ上科 ホソアシヒダナメクジ科
学名 : Rathouisiidae gen. & sp. 7
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 51. 撮影 : 上島 励。
形態 : 小型のナメクジで、体長は2 cm 前後で、本科としては細い。背面には細かい顆粒状の突起が密生し、表面は粘液で覆われない。背面は茶色で、斑点や帯はなく、腹面は白色。頭触角は短く、小触角は白くて先端が僅かに二分する。

近似種との区別 : 本種は小さく、背面が茶色で斑点がないことで、琉球列島産ホソアシヒダナメクジ類とは区別できる。

分布の概要 : トカラ列島から沖縄島にかけて分布するが、生息地は少ない。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁な種は不明。

生態的特徴 : 自然林の湿った落葉下や石の下に生息する。肉食性で他の陸産貝類を捕食する。

生息地の条件 : 林床の湿度が高いことが必須。

個体数の動向 : 過去のデータがないので不明であるが、至適な生息環境が減少しているため、個体数も減少していると思われる。

現在の生息状況 : 生息地が少なく、個体数も非常に少ない。

学術的意義・評価 : 本科は琉球列島で多くの固有種に分化しており、生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、餌となる陸産貝類の減少。

特記事項 : 未記載種。

執筆者名 : 上島 励

和名 : カタシノミミミガイ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Cassidula crassiuscula* Mousson, 1869
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻長 15 mm、殻径 9 mm。殻は縦長の卵形、厚質、濃紫褐色から黄褐色、殻皮は螺層上部で剛毛となる。殻口外唇は厚く肥厚して内側に強い突起を生じ、内唇にはパリエタル歯 2 個 (後方は貧弱、前方は明瞭) があり、軸唇の褶は低い。殻底の縞帯は強い。

近似種との区別 : ウラシマミミミガイは肩部が角張る。コウモリミミミガイは殻頂が細まって尖る。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島中～北部、石垣島、西表島、フィリピン、サモア、フィジー。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 南西諸島のこの属の大半は不連続に分布し、本種も沖縄県では 3 島に限られる。

生態的特徴 : 泥上の有機物等を摂食すると思われる。胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。

生息地の条件 : マングローブ林辺縁の高潮帯。砂泥底の転石・朽木下や岩盤の間隙等。

個体数の動向 : 沖縄島と石垣島では個体数は比較的多いが、棲息地は狭い。西表島では局限される。

現在の生息状況 : 沖縄島の一部では森林伐採に伴う河川流量の増大でマングローブ林床が攪乱され、減少した。

学術的意義・評価 : 沖縄県を含む南西諸島は本種の分布の世界的北限である。

生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。

特記事項 : IUCN と鹿児島県のレッドリストにそれぞれ Least Concern (LC)、絶滅危惧 I 類として掲載。なお、本種の学名はウラシマミミミガイ、コウモリミミミガイとの間で激しく混乱しており、再検討が必要である。

原記載 : Mousson, A., 1869. Faune malacologique terrestre et fluviatile des îles Samoa, publiée d'après les envois de M. le Dr. E. Graeffe. Journal de Conchyliologie, 17: 323-390, pls 14-15. (pp. 343-344, pl. 15, fig. 1, as *Cassidula crassiuscula*. Type loc.: "Upolu")

参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 沖縄本島東北岸 国頭郡東村慶佐次 (慶佐次川河口)～名護市大浦 (大浦川河口)～金武町 (億首川河口). "日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状", 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114.

木村昭一, 2012. カタシノミミミガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 93.

久保弘文・黒住耐二, 1995. 生態/検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 那覇, 264 pp.

名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 : 福田 宏

和名 : **ウラシマミミガイ**
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
 学名 : *Cassidula mustelina* (Deshayes, 1830)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 最大殻長 32 mm に達する個体が確認されているが、多くは 20 mm 内外。丸みを帯びた箱形で、殻口が大きく、縦長で、成熟すると外唇が著しく肥厚し、耳たぶのような形となる。殻表は繊細な螺条を多数めぐらし、やや光沢がある。殻色は灰色や栗色で、淡色の色帯をもつ型もある。

近似種との区別 : 近縁種カタシノミミガイはやや小型で、より丸みが強く、体層肩部が無で肩となる他、殻皮が残存している場合は毛羽立っており区別は容易である。

分布の概要 : 国内では沖縄島のみ。フィリピン、東南アジアに広く分布。
 生態的特徴 : マングローブの樹幹や林内倒木上に付着し、下げ潮の直後や、高湿、降雨時などに活発に匍匐する。
 生息地の条件 : 内湾のマングローブ林の潮間帯中部。
 個体数の動向 : 沖縄島中南部では 1990 年後半から 2000 年前半にかけて、埋立てを中心とする様々な海岸開発で、生息場所ごと個体群が消失した。北部の羽地内海や塩屋湾、東海岸のマングローブでは個体数は少なくないが、一部で陸化や河川改修による河口改変で、生息場所の縮小が認められる。

現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 太平洋北西海域における隔離分布域として生物地理学的にきわめて重要であり、マングローブ生態系特有の種としても生態的価値が高い。

生存に対する脅威 : マングローブ環境の攪乱や、鑑賞・標本用または愛玩用採取による乱獲。

特記事項 : IUCN カテゴリ : Data Deficient (DD)。
 原記載 : Deshayes, G.P., 1830–1832. Encyclopédie méthodique, ou par ordre des matières. Histoire naturelle des vers, Tome 2. Chez Mme. Veuve Agasse, Paris, 594 pp., pls 96–314. (p. 92, no. 14, as *Auricula mustelina*. Type loc. not designated)
 参考文献 : 木村昭一, 2012. ウラシマミミガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 93.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ヘゴノメミミガイ**
 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
 学名 : *Cassidula schmackeriana* Möllendorff, 1885
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

形態 : 殻は本科中、中型で、やや角張った卵球形、殻表は先端が分岐する毛状の殻皮と波状の螺溝を多数有し、殻色は黒褐色～淡黄褐色で帯状の色彩をもつものもある。殻口は広く、内唇に 2 歯、軸唇に 1 歯の牙状突起をもち、外唇内側には 3~4 個の歯が連続したような突起をもつ。殻長約 8-10 mm。

近似種との区別 : シノミミガイやカタシノミミガイに似るが、本種はより幅が広く、螺溝が粗く明瞭である。

分布の概要 : 国内は石垣島、西表島のみ。国外ではフィリピン、香港等。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本種の所属するオカミミガイ類は亜熱帯域に広く分布する種が多く、本種もその中に含まれるが、国外では具体的な産地記録は非常に乏しい。

生態的特徴 : 休止時は泥上の倒木等の隙間に潜りこんでいるが、活動時には表在的になり、倒木や泥の表面の有機物等を摂食する。

生息地の条件 : マングローブ林周辺の塩性湿地の中潮線に生息し、活動期にはマングローブ樹上に這い上がる。
 個体数の動向 : 石垣島の一部の場所では出現頻度が高く、2014 年の調査では増加傾向が見受けられた。海産無脊椎動物の保護区となっている川平湾奥では陸地化が進行し、2014 年、2015 年ともに目視定性調査では、生息未確認であった。

現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 八重山諸島を北限とする希少種で、生物地理学的に重要であり、マングローブ林内に特有なため生態学的にも重要。

生存に対する脅威 : 先島諸島では陸土の大量流入や河川水量の減少により、一部のマングローブ林では陸地化が進行している。貝類収集家の採集圧も懸念される。

原記載 : Möllendorff, O.F. von, 1885. Materialien zur Fauna von China. Jahrbücher der Deutschen Malakozoologischen Gesellschaft, 12: 349–398, pls 9–11. (pp. 354–355, as *Cassidula Schmackeriana*. Type loc.: “in insula Hongkong ad vicum Shankiwan”)
 参考文献 : 木村昭一, 2012. ヘゴノメミミガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 94.
 木村昭一, 2014. ヘゴノメミミガイ. “レッドデータブック 2014, 一日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 90.

- 木村昭一・久保弘文・木村妙子・増田 修, 2006. 石垣島に生息するヘゴノメミミガイ. ちりぼたん, 37: 57-61.
久保弘文, 2005. ヘゴノメミミガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 361-362.
増田 修・内山りゆう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
齊藤 匠・平野尚浩・内田翔太・山崎大志, 2017. 西表島で確認されたヘゴノメミミガイ (真有肺目: オカミミガイ科). Molluscan Diversity, 5: 印刷中.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : クロヒラシイノミ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Pythia pachyodon* Pilsbry & Hirase, 1908
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 最大殻長約 30 mm. 殻頂は尖り、殻形は背腹に扁圧された紡錘形で、殻口は大きく、内側に牙状突起を発達させ、外唇は斜め下方向へ伸展する。殻表は光沢が乏しく、殻色は濃い栗色の単色型と淡灰褐色の地に不明瞭な灰黒色の班を散在させる型がある。

近似種との区別 : マダラヒラシイノミは縫合に明瞭な皺がある他、内唇中央の歯状突起が棒状だが、クロヒラシイノミは中央の歯がやや板状に広がる。ヒメヒラシイノミは殻長 15 mm 程度で本種より、はるかに小さい。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島、台湾。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 石垣島、西表島では近縁のマダラヒラシイノミが共に分布する。

生態的特徴 : ヒラシイノミ類は浮遊幼生期を経るとされるが、本種は直達発生の可能性がある。

生息地の条件 : マングローブ縁辺や海岸植生を伴った河口域、塩性湿地の最上部。

個体数の動向 : 1980 年代では沖縄島全域において、各所で多産していたが、1990 年代に入り、糸満市西部や豊見城市、南城市佐敷等の南部個体群が埋立てにより大幅に減少した。沖縄市比屋根地区や羽地内海我部祖河等では 2000 年以降に埋立てや河川改修等で個体数が激減した。

現在の生息状況 : 現在、沖縄島北部、八重山諸島において、少なからず個体群は残存しているが、沖縄島南部等では生息環境自体が消失しており、個体群の再生は全く見られない。

学術的意義・評価 : 熱帯域の潮間帯上部に著しく適応放散した海棲有肺類の一員であり、進化生態学的に重要である。

生存に対する脅威 : 埋立てや護岸造成等による塩性湿地の消失。

原記載 : Pilsbry H.A. & Hirase, Y., 1908. New land and fresh-water Mollusca of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 60: 31-36. (p. 35, as *Pythia pachyodon*. Type loc.: “Loochoo (Okinawa) and Oshima, in the Ryukyu Islands”)

参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
木村昭一, 2012. クロヒラシイノミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 102.
名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : マダラヒラシイノミ
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Pythia pantherina* (A. Adams, 1851)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻長 25 mm、殻径 18 mm. 殻は厚く、背腹に扁圧された紡錘形で、柿の種子に似た外観を呈する。淡い藁色の地に薄茶色の不規則な雲状模様を散らす個体が多い。殻口外唇内側に 5 個前後の鋭い歯状突起を並べ、内唇に 2 個のリエタル歯、軸唇に強い褶を持つ。

近似種との区別 : クロヒラシイノミに似るが、本種は殻頂がより尖り、縫合下に皺状彫刻を刻み、リエタル歯の発達が弱い。

分布の概要 : 小笠原諸島父島、沖縄島、石垣島、西表島、台湾、フィリピン。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : クロヒラシイノミは奄美大島にも産する。オキヒラシイノミは沖縄県での文献記録があるが誤同定で、この種は南西諸島に分布しない。

生態的特徴 : 生活史や産卵、発生様式は未詳だが、直達発生の可能性がある。

生息地の条件 : 内湾奥～湾口部のマングローブ湿地辺縁、飛沫帯の隆起珊瑚間、瀬海陸地の林床の遮蔽物の下などに棲む。

個体数の動向 : 沖縄島では宜野湾市に残存していた最後の個体群が近年失われ、同島では絶滅した。

現在の生息状況 : 石垣島と西表島では今も個体数は少なくないが、各個体群の規模や棲息地面積は小さい。

生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀬海陸地の森林伐

採、水質・土壌汚染。
 特記事項：東京都・鹿児島県レッドリストにそれぞれ絶滅・情報不足として掲載。
 原記載：Adams, A., 1851. A monograph of *Scarabus*, a genus of air-breathing Gasteropodous Mollusca; from specimens in the Cumingian Collection. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1850: 147-152. (p. 152, as *Scarabus pantherinus*. Type loc.: "Siquejor; Philippines, woods, under stone")
 参考文献：福田 宏, 1996. 腹足綱. "日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状", 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63.
 木村昭一, 2012. マダラヒラシイノミ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 102.
 久保弘文・黒住耐二, 1995. 生態／検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 那覇, 264 pp.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
 名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館研究報告, (6): 1-81, figs 1-33, pls 1-20, tables 1-3.

執筆者名： 福田 宏

和名： **イシワリマクラ**
 分類： 二枚貝綱 翼型亜綱 イガイ目 イガイ上科 イガイ科
 学名： *Arenifodiens vagina* (Lamarck, 1819)
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT)

形態： 殻長 10 cm。前後に長く伸びた形状。殻は薄く、褐色の薄い殻皮を有する。
 近似種との区別： 同所的に見られる大型のイガイ科の種にはホソスジヒバリガイがあるが、本種は埋在性であるのに対し、ホソスジヒバリガイは半埋在性である。形態に関しては、本種は全体的に丸みを帯びるのに対し、ホソスジヒバリガイでは背側が伸びる。

分布の概要： 沖縄島 (羽地内海や中城湾などの内湾域)。
 生態的特徴： 主に内湾干潟の粗砂底に深く潜る。干潮時には、淡黄色の水管を干潟表面に僅かに出ていることがある。水管孔は、ひょうたん形で特徴的である。名護湾や中城湾 (水深 5 m) の砂底でも見られる他、恩納村では水深 20 m 付近からも見つかっている。

生息地の条件： 内湾干潟の潮間帯下部から潮下帯の細砂～粗砂底に生息する。干潟では、ウミジグサ類やウミヒルモなどの小型海草類からなる海草藻場で見られる。

個体数の動向： 沖縄県内の産地では、密度は低下傾向にある。潮間帯の個体群に関しては、収集家による乱獲が懸念される。

現在の生息状況： 潮下帯にも生息するが、広域に渡る詳細は不明。

学術的意義・評価： 干潟に巣穴を作るなど特殊な生態を持つが、繁殖等の基礎生態に関しては見解が無い。情報収集に務める必要がある。

生存に対する脅威： 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。

原記載： Lamarck, J.B.P.A. de M. de, 1819. Histoire naturelle des animaux sans vertèbres, présentant les caractères généraux et particuliers de ces animaux, leur distribution, leurs classes, leurs familles, leurs genres, et la citation des principales espèces qui s'y rapportent; précédée d'une introduction offrant la détermination des caractères essentiels de l'animal, sa distinction du végétal et des autres corps naturels, enfin, l'exposition des principes fondamentaux de la zoologie, Tome 6. Verdière, Paris, 232pp. (p. 112, no. 7, as *Modiola vagina*. Type loc.: "l'Océan indien")

参考文献： 久保弘文, 2012. イシワリマクラ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 107.
 名和 純, 2005. イシワリマクラ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 383.

執筆者名： 小澤宏之

和名： **クログチ**
 分類： 二枚貝綱 翼型亜綱 イガイ目 イガイ上科 イガイ科
 学名： *Xenostrobus atratus* (Lischke, 1871)
 カテゴリ： 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ： 該当なし

形態： 最大殻長約 1 cm の横長卵形の二枚貝類で、後端は末広がりと成る。殻縁は黒みを帯び、茶褐色の殻皮を纏う。殻はやや厚く、殻内は銀白色。

近似種との区別： 類似種スキゲヒバリはより大型で横長となり、貝殻表面に多数の放射状を有することから区別される。

分布の概要： 日本本土温帯域 (千葉県以南)、南西諸島では沖縄島が南限だが、中国大陸南部には広く分布する。
 生態的特徴： 海水ごと植物プランクトン等を吸い込んで、鰓でろ過して摂食する。

生息地の条件： 沖縄島中北部の内湾に生息し、金武・中城両湾では漁港のコンクリート壁にも確認されるが、潮間帯上部の一定ラインに出現する傾向がある。

個体数の動向： 沖縄島の内湾環境に多産するが、先島での記録が無い。直接的な個体数の減少傾向は不明だが、沖

現在の生息状況 : 縄島では内湾域の潮間帯上部の攪乱が著しく進行しているため、生息場所の減少はあると考察した。同上。

学術的意義・評価 : 日本本土ではごく普通種でありながら、先島諸島に生息が認められない点で、生物地理的に興味深く、分子系統解析等を用いて大陸遺存的な集団かどうかを解明する必要がある。

生存に対する脅威 : 潮間帯上部は埋立てによる生息地消失を最も被りやすいと考えられる。

特記事項 : 岩礁性種であり、同属にはコウロエンカワヒバリ等侵襲的移入種も含まれる。本種は漁港等人工環境下にも生息し、対象外とすることも考慮したが、非侵襲的な種とされる見解があり、対象とした。

原記載 : Lischke, C.E., 1871. Diagnosen neuer Meeres-Conchylien von Japan. Malakozoologische Blätter, 18: 39-45, 147-150. (pp. 44-45, as *Mytilus atratus*. Type loc.: “der Bucht von Nagasaki”)

参考文献 : Colgan, D.J. & da Costa, P., 2013. Invasive and non-invasive lineages in *Xenostrobus* (Bivalvia: Mytilidae). *Molluscan Research*, 33(4): 272-280.

名和 純, 2005. クログチ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 445.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ワシノハガイ**

分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 フネガイ目 フネガイ上科 フネガイ科

学名 : *Arca navicularis* Bruguière, 1789

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻長約 3~4 cm、長方形で良く膨らむ二枚貝類。蝶番は多数の鋸歯が並び、殻表には多数の放射肋を有し、成長脈と交差して、やや格子状となる。殻色は灰白色で、大きな矢絛状の褐色斑を散らす個体が多い。

近似種との区別 : 沖縄には類似種はいない。

分布の概要 : 日本本土温帯域を主な分布域とし、南西諸島では沖縄島がその南限で、先島諸島では記録が無い。しかし、国外では台湾、フィリピン、中国大陸南部をはじめ、東アフリカまで広く分布する。

生態的特徴 : 足糸でサンゴ礁や貝殻に付着する。

生息地の条件 : 沖縄島では中城湾、金武湾、羽地内海等、内湾の潮間帯下部~水深 10 m 付近のアマモ場や砂礁~礫底。

個体数の動向 : 泡瀬では埋立て事業後、金武湾では海中道路拡張に伴う大規模改変後にいずれも、かつての出現状況とは比較にならないほど減少している。しかし、水深 10 m 付近まで生息圏が広がっており、タイワンガザミ漁 (刺し網) などで海底から採取される岩礁にはしばしば発見される。羽地内海でも運天水路等の港湾工事に伴う海底構造物の引き上げ時に少ないながら生貝が確認されている。

現在の生息状況 : 2005 年以降、泡瀬干潟では激滅している。金武湾の潮通しの良い亜潮間帯の砂礁底では少なからず生息している。

学術的意義・評価 : 南西諸島では沖縄島を南限とし、遺存的な個体群の可能性がある。

生存に対する脅威 : 埋立てによる直接的な生息場所消失が最大の脅威。亜潮間帯における海底の泥質化によるサンゴ礁や貝殻等付着基質の埋没。

原記載 : Bruguière, J.G., 1789-1792. Encyclopédie méthodique, ou par ordre des matières. Histoire naturelle des vers, Tome 1. Chez Panckoucke, Paris, 757 pp., 95 pls. (p. 99, no. 4, as *Arca navicularis*. Type loc.: “de Saint-Domingue”)

参考文献 : 名和 純, 2005. ワシノハガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 444.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **サンゴナデシコ**

分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 イタヤガイ目 イタヤガイ上科 イタヤガイ科

学名 : *Coralichlamys madreporarum* (Sowerby II, 1842)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻は本科中、小型でやや薄く、縦に長い扇形、殻表に鱗片を伴う太さが不均一な 60 本以上の細かい放射肋をもち、殻色は灰白色の地に灰色と黒褐色の縞模様をもつ。前耳は後耳より遙かに大きい。殻長 20~30 mm。

近似種との区別 : 近似種ヤガスリヒョクは本種より肋数が少なく鱗片も少ない。シロスジナデシコは殻の色彩が類似するが、より縦長で大型となり、肋の大きさが均等で数が少ないことで、区別される。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、フィリピン。

生態的特徴 : 生きた造礁サンゴ類 (ミドリイシ科) 上に選択的に生息する。

生息地の条件 : サンゴ礁域のミドリイシ類が生息するリーフエッジ~礁水路部の低潮線~水深 3m 付近まで。

個体数の動向 : 外洋のミドリイシ科のサンゴ類にも付着するが、小型で生息密度は低い。一方、内湾域の個体群は大成し、生息密度も高く、特に羽地内海の運天水路では 1990 年代まで健全な個体群が確認されて

- きたが、2005 年以降観察されていない。1998 のサンゴ白化により、沖縄島、先島諸島のミドリイシ群集は大きく被度を低下させた経緯がある。
- 現在の生息状況 : 2013 年、2016 年と高水温に伴うミドリイシ類の白化による死滅現象は高頻度化してきており、予断を許さない状況であるが、人工的なサンゴ礁復元技術も同時に進行しているため、準絶滅危惧ランクに留めた。
- 学術的意義・評価 : 幼生着底時の、生きたサンゴによる捕食からの回避機構については不明だが、生態学的に興味深い研究対象となる。
- 生存に対する脅威 : 陸域からの様々な人為的負荷や、オニヒトデや白化による造礁サンゴ類の大規模な死滅。
- 特記事項 : 地球温暖化により世界的にサンゴ礁が壊滅的打撃を受ける状況が進んでおり、これに伴う動物の減少に対して、検討する必要がある。
- 原記載 : Sowerby, G.B. II, 1842. Monograph of the genus *Pecten*. Thesaurus conchyliorum, or, Monographs of Genera of Shells, vol. 1. Sowerby, G.B. II (ed.), Sowerby, London, 45-78, 81-82, pls 12-20. (p. 68, no. 70, pl. 14, fig. 68, as *Pecten madreporarum*. Type loc.: "the Red Sea")
- 参考文献 : 久保弘文, 2005. サンゴナデシコ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 445-446.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ヒナノヒオウギの一種
- 分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 イタヤガイ目 イタヤガイ上科 イタヤガイ科
- 学名 : *Mimachlamys cf. asperulata* (Adams & Reeve, 1850)
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形態 : 殻は本科では中型でやや薄く、縦に長い扇形、殻表に 23 本内外の放射肋をもつ。殻色は赤褐色の地に雲状斑を散在させ、放射状彩を飾る個体もある。前耳は後耳より遙かに大きい。最大殻長約 50 mm。
- 近似種との区別 : 瀬戸内海や伊勢湾などに生息するヒナノヒオウギに比べて大型化し、放射肋が 23 本内外 (ヒナノヒオウギは 18 本) と多い等異なる個体が多いが、変異が大きく、分類学的再検討を要する。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島 (羽地内海、金武湾、中城湾)、台湾、東南アジア。低潮線～水深 20 m 付近まで。
- 生態的特徴 : 岩礫に足糸で付着して生息し、プランクトンを摂食すると考えられる。
- 生息地の条件 : 内湾の泥礫底～砂礫底に生息し、岩礫や貝殻に付着する。
- 個体数の動向 : 羽地内海では 2005 年以降、減少傾向にあり、2013 年の調査では大潮干潮時に広範囲に探索したにも関わらず、数個体が確認されたに過ぎない。一方、金武湾奥の水深 5～15 m 内外の上部浅海域では個体数は少なくない。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 本種は先島諸島から記録がなく、生物地理的に大陸遺存の可能性もあり重要である。
- 生存に対する脅威 : 埋立て、陸土の大量流入や都市排水などの水質汚濁。
- 原記載 : Adams, A. & Reeve, L.A., 1850. Mollusca. “The Zoology of the Voyage of H.M.S. Samarang; under the Command of Captain Sir Edward Belcher, C.B., F.R.A.S., F.G.S., during the Years 1843-1846”, Adams, A. (ed.), Reeve & Benham, London, i-x, 1-87, pls 1-24. (p. 74, no. 4, pl. 21, fig. 13, as *Pecten asperulatus*. Type loc.: “Corean Archipelago”)
- 参考文献 : 速水 格, 2000. イタヤガイ科. “日本近海産貝類図鑑”, 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 896-911.
- 久保弘文, 2005. ヒナノヒオウギの一種. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 384.
- 久保弘文, 2012. ヒナノヒオウギの一種. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 115.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ソトオリガイ
- 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 異韌帯上目 スエモノガイ上科 オキナガイ科
- 学名 : *Laternula marilina* (Reeve, 1860)
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 図の解説 : p. 51. 羽地内海. 撮影 : 久保弘文.
- 形態 : 殻はやや透明感があり、薄質で、横長の卵形で前後端は開く。後端はやや伸展し、狭まるが、端部は裁断状である。殻表は微細顆粒が散在し、貝殻縁辺及び水管部は薄い褐色の殻皮を被る。
- 近似種との区別 : ヒロクチソトオリガイは後端が裁断状となる点で類似するが、より大型化し、後端が緩やかに広がる。
- 分布の概要 : 日本本土から中国大陸沿岸の内湾に分布し、奄美大島と沖縄島北部のみ隔離分布個体群がある。
- 生態的特徴 : ソトオリガイ類はプランクトンのみならず陸地起源の有機物を消化可能な酵素を持っており、内湾干潟における食物連鎖に関する安定同位体による解析でも、陸地起源の維管束植物などの遺骸等を

<貝類>

- 撰餌することが証明された。
- 生息地の条件 : 沖縄島羽地内海と塩屋湾の湾奥部、泥礫底のみに生息。
- 個体数の動向 : 羽地内海ではマングローブに隣接する潮間帯中部の狭い範囲に見られ、局所的には少なくない。塩屋湾では2002年頃から大保大川河口が攪乱されている。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 県内産の本種は沖縄島北部の内湾奥のみに分布する遺存的な個体群であり、生物地理学的意義が極めて大きい。
- 生存に対する脅威 : 埋立てや護岸工事による生息環境の消失が最大の脅威となる。
- 原 記 載 : Reeve, L.A., 1860, 1863. Monograph of the genus *Anatina*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 14: pl. 2 (1860); pls 1, 3, 4 (1863). (sp. 10, pl. 2, fig. 10, as *Anatina marilina*. Type loc.: "Australia")
- 参 考 文 献 : Kanaya, G, Takagi, S. & Kikuchi, E., 2008. Spatial dietary variations in *Laternula marilina* (Bivalva) and *Hediste* spp. (Polychaeta) along environmental gradients in two brackish lagoons. Marine Ecology Progress Series, 359: 133-144.
- 加藤 真・福田 宏, 1996. 二枚貝綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 65-73.
- 名和 純, 2005. ソトオリガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 347-348.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : ヒロクチソトオリガイ
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 異靱帯上目 スエモノガイ上科 オキナガイ科
- 学 名 : *Laternula truncata* (Lamarck, 1818)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 最大殻長約7 cm。殻は非常に薄く、長楕円形、後端は裁断状となり広く開く。
- 近似種との区別 : ソトオリガイは後端がやや狭まる点で区別される。
- 分布の概要 : 沖縄島、八重山諸島、中国南部沿岸、インド・太平洋。
- 生態的特徴 : ソトオリガイ類はプランクトンのみならず陸地起源の有機物を消化できる酵素を持っているとされ、本種も類似した摂餌生態を有すると考えられる。
- 生息地の条件 : マングローブ林や河口域に隣接する滞筋の、中潮線～下部の粗砂底～礫泥底に生息する。
- 個体数の動向 : 垂直分布の幅が狭く、沖縄島中部の内湾奥部では、埋立てによる攪乱で一部の生息場所と個体群が消失した。2000～2005年頃の西表島や石垣島 (名蔵湾・川平湾) での調査では個体数は少なからず確認された。
- 現在の生息状況 : 2010年以降は石垣島川平湾での毎年調査で一度も確認出来ない状況であり、著しく減少していると考えられる。西表島では2015年12月浦内川河口の軟泥底で確認された。なお、底質が著しく還元化している礫砂底でも生息が認められることから、硫化物にはある程度の耐性があると考えられるが、赤土堆積等により底質の固着化した場所では認められない。
- 学術的意義・評価 : 沖縄県を北限とするソトオリガイ類であり、栄養生態学的にも陸域起源の維管束植物遺骸を栄養源とするグループに属し、今後の研究が期待される。
- 生存に対する脅威 : 赤土等陸域からの土壌微粒子大量流入による底質悪化。
- 原 記 載 : Lamarck, J.B.P.A. de M. de, 1818. Histoire naturelle des animaux sans vertèbres, présentant les caractères généraux et particuliers de ces animaux, leur distribution, leurs classes, leurs familles, leurs genres, et la citation des principales espèces qui s'y rapportent; précédée d'une introduction offrant la détermination des caractères essentiels de l'animal, sa distinction du végétal et des autres corps naturels, enfin, l'exposition des principes fondamentaux de la zoologie, Tome 5. Chez Deterville et Verdière, Paris, 612 pp. (p. 463, no. 2, as *Anatina truncata*. Type loc.: "dans la Manche, près de Vannes")
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ヒロクチソトオリガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 168.
- 名和 純, 2005. ヒロクチソトオリガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 399-400.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : カブラツキガイ
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ツキガイ目 ツキガイ上科 ツキガイ科
- 学 名 : *Anodontia edentula* (Linnaeus, 1758)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 形 態 : 殻長約4cm、殻は円形で膨らみが強く、白色で、殻質は薄い。
- 分布の概要 : 沖縄島、伊良部島、宮古島、多良間島、石垣島、西表島、東南アジアに分布。
- 生態的特徴 : 干潟の砂礫底や海草藻場に深く埋在して生息する。近年の密度についての情報はないが、台風時の

打ち上げの状況などから判断すると、海草藻場に生息する埋在性二枚貝類の優占種と考えられる。健全な海草藻場が分布の中心と考えられる。赤土堆積の影響を受けやすく、赤土の影響が著しい海域では、死殻のみで生貝は見られない。

生息地の条件 : 健全な海草藻場が分布の中心と考えられる。赤土堆積の影響を受けやすく、赤土の影響が著しい海域では、死殻のみで生貝は見られない。

個体数の動向 : 屋嘉田潟原ではかつて約 10 個体/ m² が記録されているが、2016 年時には 1~2 個体/ m² に減少していた。他の産地での動向は不明。

現在の生息状況 : 生息環境の中心となる海草藻場の消滅や縮小に伴い個体群は縮小傾向にある。

学術的意義・評価 : 健全な海草藻場が本種の生息域と考えられ、健全な海草藻場の指標種と位置づけられる。

生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。

原 記 載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cumcharacteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823pp. (p.689, no.122, as *Venus edentula*. Type loc.: “in Indiis”)

参 考 文 献 : 名和 純, 2005. カブラツキガイ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 386.

執 筆 者 名 : 小澤宏之

和 名 : ショウゴインツキガイ

分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ツキガイ目 ツキガイ上科 ツキガイ科

学 名 : *Anodontia philippiana* (Reeve, 1850)

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

図 の 解 説 : p. 51. 西表島. 撮影 : 久保弘文.

形 態 : 殻長 8 cm. 殻は白色で膨らみが強く、薄い褐色の殻皮が発達する。殻表には、不均一で弱い輪脈が見られる。

近似種との区別 : 同所的にシワツキガイが生息するが、シワツキガイはより小型で輪脈が発達する。

分布の概要 : 沖縄島、八重山諸島。

生態的特徴 : 西表島の産地では、マングローブ樹種の支柱根の深い部分に生息する。過去には、豪雨時に隣りのマングローブが倒された後、底質中から洗い出された大型個体 (生貝) が干潟上で大量に採取されたことがある。

生息地の条件 : マングローブ林内の底質深く (50 cm 以深) に埋在する。西表島では同所的にシワツキガイやウラジロマスオが見られるが、それらの種よりも更に深く埋在する。

個体数の動向 : 詳細は不明であるが、沖縄島では死殻は確認されるものの、生貝の確認は僅かで減少傾向が著しい。

現在の生息状況 : 沖縄島の個体群は絶滅寸前と考えられる。西表島の個体群は健全である。

学術的意義・評価 : 鰓に化学合成共生生物である硫黄酸化細菌を持つ。

生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。特に底質環境の変化が大きな要因と考えられる。

特 記 事 項 : 前版 (名和, 2005) の「イセシラガイ」は本種のことである。

原 記 載 : Reeve, L. A., 1850. Monograph of the genus *Lucina*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 6: pls.1-11. (sp.23, pl.5, fig.23, as *Lucina Philippiana*. Type loc.: “—?”)

参 考 文 献 : 久保弘文・山下博由, 2012. ショウゴインツキガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 116.

久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック ーレッドデータおきなわー 第2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告-2. 西表島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.

名和 純, 2005. イセシラガイ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 484.

執 筆 者 名 : 小澤宏之

和 名 : シワツキガイ

分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ツキガイ目 ツキガイ上科 ツキガイ科

学 名 : *Austriella corrugata* (Deshayes, 1843)

カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 最大殻長 7 cm 程度。殻は、緩やかに肩の張った丸い形で、膨らみがある。殻質は幼若個体ではやや薄い、老成すると厚くなる。殻表に多数の明瞭な皺状の成長肋をもち、薄い淡黄褐色の殻皮を被る。

近似種との区別 : 同所に生息するショウゴインツキガイはやや殻が薄く、より大型化し、鉸歯が弱い他、皺状の肋が不明瞭で弱い。

分布の概要 : 国内では石垣島・西表島のみ。熱帯インド・太平洋に広く分布。

生態的特徴 : 鰓に化学合成桿菌を共生 (bacterial symbionts) させる特殊栄養生態が知られている。

生息地の条件 : 主にマングローブ林内の中潮線泥砂底に生息。

個体数の動向 : 石垣・西表両島共に自然公園法やラムサール条約等で保護され、生息環境は安定している。ただ、

〈貝類〉

一部のマングローブ林では道路工事等に伴う伐採や遊覧船等の往来による波浪浸食があり、本種への悪影響が懸念される。石垣島アンパルでは西表島と比べ個体密度が非常に低い。

現在の生息状況 : 西表島船浦でのモニタリングでは 2010 年は 0.33 個体/分で大型個体も確認されたが、2015 年は 0.05/分で、小型個体が優占した。

学術的意義・評価 : 国内では石垣・西表両島のマングローブに特有で、本種の分布の世界的北限であり、生物地理学、生物多様性保全等の観点において重要。

生存に対する脅威 : 人為的なマングローブ環境の攪乱。

原 記 載 : Deshayes, G.P., 1843. G Lucine. *Lucina*. Lamarck. Magasin de zoologie, d'anatomie comparée et de palaeontologie, Deuxième Série, Cinquième Année, Mollusques, Guérin-Méneville, F.É. (ed.), Arthus Bertrand, Paris, 1-2, pl. 82. (pp. 1-2, pl. 82, unnumbered figs, as *Lucina corrugata*. Type loc.: "la mer de Californie" [error])

参 考 文 献 : Glover, E.A., Taylor, J.D. & Williams, S.T., 2008. Mangrove-associated lucinid bivalves of the central Indo-West Pacific: Review of the "*Austriella*" group with a new genus and species (Mollusca: Bivalvia: Lucinidae). *The Raffles Bulletin of Zoology, Supplement*, (18): 25-40.

徐鳳山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図誌. 科学出版社, 北京, 8+336 pp.

久保弘文, 2012. シワツキガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 117.

名和 純, 2005. シワツキガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 449.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : チヂミウメ
分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ツキガイ目 ツキガイ上科 ツキガイ科
学 名 : *Chavania striata* (Tokunaga, 1906)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形 態 : 殻長 15 mm. 殻は白色でやや膨らみ、成長脈が発達する。

近似種との区別 : 同所的にカブラツキガイが見られるが、同サイズのカブラツキガイの幼貝よりは殻が厚く、またカブラツキガイでは軟体部が透けて見えるが、本種は見えない。

分布の概要 : 本州東北地方以南、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島。

生態的特徴 : 海草藻場の底質から 10~20 cm の深さに埋生し生息する。潮間帯下部から潮下帯にかけて分布。金武湾の水深 3 m 前後の海草藻場では、埋生性の二枚貝類では優占種となる。

生息地の条件 : 海草藻場の粗砂底。還元的な環境に適応した種と考えられる。

個体数の動向 : 金武湾の海草藻場 (水深 3 m) では、約 80 個体/m² の高密度で生息していた (2000 年当時)。現状は不明。

現在の生息状況 : 潮間帯の個体群は、沿岸域の改変に伴う海草藻場の縮小などの影響を受け、縮小傾向にあると考えられる。潮下帯に関しては現状不明。

生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。

原 記 載 : Tokunaga, S., 1906. Fossils from the environs of Tokyo. *Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo*, 21, art.2: 1-96, pls.1-6. (pp.53-54, no.135, pl.3, fig.14a-b, as *Lassaea striata*. Type loc.: "Shinagawa (abundant), Oji and Tabata (rare)")

参 考 文 献 : 久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック - レッドデータおきなわ 第2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告-2. 西表島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.

名和 純 2005. チヂミウメノハナ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 449.

執 筆 者 名 : 小澤宏之

和 名 : ツキガイ
分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ツキガイ目 ツキガイ上科 ツキガイ科
学 名 : *Codakia tigerina* (Linnaeus, 1758)
カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形 態 : 最大殻長 13 cm 程度に達する満月型の白い二枚貝類。貝殻は厚みがあり、殻表全面に均等な放射肋と成長肋を有し、互いに交差して布目状となる。貝殻内面は黄白色を呈する。

近似種との区別 : クチベニツキガイは貝殻内面の周縁部が紅色を呈し、より小型で膨らみが弱く、放射肋が明瞭なことで区別される。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島、ミクロネシア、フィリピン、インド・太平洋。

生態的特徴 : ツキガイ類は化学合成細菌との共生関係により異化的に栄養摂取することが知られ、本種も海底湧水等特殊環境と関連した栄養生態を持つと考えられる。

生息地の条件 : リーフ内外の潮間帯~30 m 付近までの潮通しの良い岩礁に隣接した粗砂~砂礫底に生息する。

個体数の動向 : 1990年代には恩納村山田や糸満市摩文仁、具志頭村、玉城村奥武島等サンゴ礁の間の砂礫底にしばしば確認されてきたが、2005年以降は殆ど見られなくなった。2015年以降では恩納村谷茶口の水深30m付近でも確認されており、恩納村沿岸では海底湧水が各所に存在していることとの関連が示唆される。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 栄養生態学的に重要な研究対象と考えられる。

生存に対する脅威 : 海底湧水の水質悪化、堰き止め、赤土など微粒子の清浄砂底域への沈積による底質悪化。

原 記 載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome I, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 688, no. 112, as *Venus tigrina*. Type loc.: "in O. Indico")

参 考 文 献 : Glover, E.A. & Taylor, J.D., 2007. Diversity of chemosymbiotic bivalves on coral reefs: Lucinidae (Mollusca, Bivalvia) of New Caledonia and Lifou. *Zoosystema*, 29(1): 109–181.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : コヅツガイ
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ツクエガイ上科 ツクエガイ科
 学 名 : *Eufistulana grandis* (Deshayes, 1855)
 カ テ ゴ リ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 最大殻長4cm程度。細長い長方形で先端が屈曲した鉤状の薄い殻を有する。最大約13cmに達する円錐筒状の棲管を自ら形成し、内在する。棲管は生息場所によって材質が異なり、泥砂底では細かい砂粒を、泥礫底ではやや粗めの砂利や貝殻を纏う。かつては前者をコヅツガイ、後者をイシモチコヅツガイと呼んでいた。

近似種との区別 : 邦産既知種は1属1種。

分布の概要 : 房総半島以南、熱帯西太平洋域に分布。

生態的特徴 : 棲管先端の開口部のみを露出させて、ほぼ垂直に埋入し、摂餌及び呼吸する。

生息地の条件 : 潮通しの良い内湾の干潟～水深20m付近までの砂礫～泥礫底。

個体数の動向 : 潮間帯に生息する個体群は羽地内海のみで確認されており、1990年代は本部半島側と屋我地島側両方の貝殻混じりの砂礫泥底に広く分布していたが、2005年以降は本部半島側の我部祖河川河口や湧川東の河口域等の個体群が激減した。金武湾口や中城湾口には水深10m以深の泥砂底に生息するが、現状は不明。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 本種は先島諸島から記録が無く、沖縄島の内湾域に分布が限定され、温帯域からも地理的に大きく隔たっていて、遺存的な隔離集団の可能性が高く、極めて重要である。

生存に対する脅威 : 羽地内海等の潮間帯の個体群は赤土や富栄養など、様々な陸域からの人為的負荷や、埋立てが脅威となる。

原 記 載 : Deshayes, M.G.P., 1855. Descriptions of new shells from the collection of Hugh Cuming, Esq. Proceedings of Zoological Society of London, for 1854: 317–371. (p. 330, no. 58, as *Chaena grandis*. Type loc.: "Philippines, Zebu")

参 考 文 献 : 木村昭一・久保弘文, 2012. コヅツガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 153.
 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. *WWF Japan Science Report*, 4: 1-44.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : ヒノマルズキン
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
 学 名 : *Anisodevonia ohshima* (Kawahara, 1942)
 カ テ ゴ リ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 本科中、小型。殻は退化的で薄質、やや膨らみのある亜三角形、殻表は光沢に乏しく、殻頂付近がうっすらと赤みがる。軟体部は殻を覆い、斧足が蠕虫状に伸び、一見して貝類には見えない。最大殻長4mm。

近似種との区別 : 同様に無足ナマコ類に共生する類似種ヒナノズキンは、沖縄県に分布せず、殻頂付近が赤くならないことで区別される。

分布の概要 : 奄美大島、石垣島、西表島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ヒナノズキンは瀬戸内海、有明海等の温帯域に分布する。

生態的特徴 : 無足ナマコ的一种であるヒモイカリナマコ *Patinapta ooplax* (von Marenzeller, 1881) 上に強く吸着し、他のケボリガイ類等のウロコガイ科貝類よりホストへの依存が高いと考えられる。

生息地の条件 : 内湾域の潮通しのよい中潮線～低潮線付近の砂泥～泥礫底に生息する。

個体数の動向 : 個体数は、産地によっては少なくないが、水平・垂直ともに分布が限定されることから、生息地の改変や環境悪化に曝されれば生存が危惧される。

現在の生息状況 : 川平湾奥における2010年以降の調査では未確認で、絶滅が危惧されるが、名蔵湾では不詳。

<貝類>

- 学術的意義・評価 : 著しく特殊化した共生二枚貝類であり、生態学および進化的生物学的意義は大きい。
生存に対する脅威 : 川平湾奥では総じて二枚貝類が減少しているが、赤土など土壌微粒子のみならず、富栄養化による底質の還元化も悪影響を及ぼしている可能性がある。
特記事項 : 現存生息地はラムサール条約(名蔵湾)、自然公園法(西表・石垣両島)、沖縄県漁業調整規則(川平保護水面、名蔵保護水面)等の法律により、一定程度保護されている。
原記載 : 河原辰夫, 1942. 無足海鼠に寄寓する二枚貝の1新種ヒノマルズキン (*Devonia ohshimai* sp. nov.). *Venus*, 11(4): 153-164, pl. 3. (pp. 153-163, textfigs 1-2, pl. 3, figs 1-7, as *Devonia ohshimai*. Type loc.: “石垣島の名蔵川々口”, “東経 124°9' 20”, 北緯 24°23' 50”)
参考文献 : Kato, M., 1999. Morphological and ecological adaptations in montacutid bivalves endo- and ecto-symbiotic with holothurians. *Canadian Journal of Zoology*, 76(8): 1403-1410.
小菅文治, 2001. ヒノマルズキンの石垣島における生息状況. *沖縄生物学会誌*, 39: 5-10.
執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ホシムシアケボノガイ**
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
学名 : *Barrimysia siphonosomae* Morton & Scott, 1989
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

- 図の解説 : p. 51. 石垣島名蔵湾. 撮影 : 久保弘文.
形態 : 本科中、中型で殻高 6 mm 程度。殻は丸みを帯びた亜三角形、膨らみはやや弱い。殻頂はやや前方に偏り、殻表には細かな成長脈を刻み、灰褐色の殻皮を纏う。
近似種との区別 : アマミスジホシムシモドキと共生するアマミスジホシムシモドキヤドリガイはより横長で、殻が薄く、光沢がある
分布の概要 : 石垣島、西表島、香港。
生態的特徴 : スジホシムシモドキ類の巣穴に共生する。
生息地の条件 : マングローブ林に隣接する河口干潟の潮間帯中部、砂泥～砂礫底に生息する。
個体数の動向 : 2010年8月の石垣島名蔵湾での調査では生息地は数mの非常に狭い範囲に留まり、同所的に生息するユンタクシジミと比べ、個体数は10分の1にも満たなかった。
現在の生息状況 : 2015年の西表島浦内川河口における調査では未確認であった。
学術的意義・評価 : ウロコガイ類は他の無脊椎動物と共生し、熱帯・亜熱帯に多岐にわたる種が分化しており、進化的生態学的に重要。
生存に対する脅威 : 埋立て。陸域からの土壌微粒子の過剰な流入や栄養負荷による底質悪化。ホスト(スジホシムシモドキ類)の釣り餌用の大量採取。
特記事項 : ホストの正確な分類、特にスジホシムシモドキとアマミスジホシムシモドキの検討が必要。
原記載 : Morton, B. & Scott, P.H., 1989. The Hong Kong Galeommatacea (Mollusca: Bivalvia) and their hosts, with descriptions of new species. *Asian Marine Biology*, 6: 129-160. (pp. 145-146, pl. 1, fig. k, text-figs 15-16, as *Barrimysia siphonosomae*. Type loc.: “Hong Kong, Hong Kong Island, Tai Tam Bay; 21°15' N, 114°11' E; intertidal sandy mud flats in the burrows of *Siphonosoma cumanense*”)
参考文献 : Kosuge, T., 2009. Occurrence of the montacutid bivalve *Barrimysia siphonosomae* in Nagura Bay, Ishigaki Island, the Ryukyu Islands, as a new record from Japan. *Venus*, 68(1/2): 67-70.
久保弘文, 2014. ホシムシアケボノガイ. “レッドデータブック2014, ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 409.
久保弘文・山下博由, 2012. ホシムシアケボノガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 155.
執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ユウレイウロコガイ (新称)**
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
学名 : *Ehippodontomorpha hirsuta* Middelfart, 2005
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 図の解説 : p. 51. 糸満市. 撮影 : 久保弘文.
形態 : 殻は本科中、やや大型で非常に薄く、幅広く扁平な扇形、殻表は平滑だが、光沢は弱く、白色半透明。外套膜縁には多数の毛状で非常に長い触手が生え、貝殻は外套膜に包まれる。外套膜の背面は微細な疣状の小隆起が多数ある。その他、外套膜上には、前縁の入り水孔側に2本、後端の出水孔側に1本の細長い外套触手を発達させる。最大殻長 14 mm。
近似種との区別 : オオツヤウロコガイは大型で、殻がやや厚く、光沢があり、外套膜縁の触手は短い。
分布の概要 : 沖縄島、オーストラリア。
生態的特徴 : トラフシャコの巣穴壁面に、同化するようにへばりつく。平常時は毛状の白い触手をたなびかせ、上から見るとヒドロ虫類の見えるが、刺激を与えると、毛状触手は即座に収縮し、視界から消えて、巣穴の壁と同化する。このような様子を形容して幽霊鱗貝と命名する。貝殻を180度開いた状

- 態で斧足を使って、活発に匍匐する。
- 生息地の条件 : 潮通しのよい中潮線～低潮線付近のアマモ場とそれに隣接する細砂底に生息するトラフシャコの巣穴に生息。
- 個体数の動向 : 2000年頃までは名護市や糸満市、沖縄市泡瀬等では大型のトラフシャコの巣穴が散見され、本種も少ないながら確認されたが、現在、何れの産地でも、トラフシャコの巣穴自体が減少あるいは小型化する傾向が見受けられる。本種は大型の巣穴に見いだされることが多く、2010年以降は名護や泡瀬では全く確認できていない。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : ウロコガイ類は他の無脊椎動物と共生し、熱帯・亜熱帯に多岐にわたる種が分化しており、進化生態学的に重要。
- 生存に対する脅威 : 埋立て。ホスト（トラフシャコ）の採取。
- 特記事項 : 原記載での種小名は *hirsutus* であるが、Bouchet (2015) は *Ehippodontomorpha* の性を女性とみなし、種小名を *hirsuta* としている。ここでは後者に倣った。
- 原記載 : Middelfart, P., 2005. Review of *Ehippodonta sensu lato* (Galeommatidae: Bivalvia), with descriptions of new related genera and species from Australia. *Molluscan Research*, 25(3): 129–144. (pp. 138–140, figs 6A–F, 7A–B, 8, as *Ehippodontomorpha hirsutus [sic]*. Type loc.: “Rowes Bay, Townsville, Queensland”)
- 参考文献 : Bouchet, P., 2015. *Ehippodontomorpha* Middelfart, 2005. MolluscaBase, accessed through World Register of Marine Species at <http://www.marinespecies.org/aphia.php?p=taxdetails&id=391113> (2017年1月4日閲覧)
- 執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

- 和名 : ミナミウロコガイ
- 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
- 学名 : *Lepirodes layardi* (Deshayes, 1856)
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 殻長 10 mm 程度の半月形の非常に薄い殻をもち、殻表に多数の打痕状彫刻を有する。外套膜は半透明白色で貝殻全面を被い、多数の疣状突起をもつ。
- 近似種との区別 : 日本本土中南部以南に分布するウロコガイは殻表が顆粒状となる。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、フィリピン、タイ（プーケット）、香港。
- 生態的特徴 : 珪藻や渦鞭毛藻類をろ過摂食すると考えられる。
- 生息地の条件 : 主に内湾潮間帯（アマモ場、砂礫地）の埋没した岩礫（埋れ石）下に生息する。
- 個体数の動向 : 垂直分布が狭く、埋立ての影響を被りやすい。沖縄島南部の与根干潟や中城湾南部（与那原地先）では大規模な埋立てで生息場所がほぼ消失した。しかし、2005年以降も沖縄島羽地内海、先島諸島の内湾域では少ないながら確認されている。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 埋れ石下において二枚の貝殻を大きく開口させ、貝殻全面を外套膜によって覆い、二枚貝類としては特殊化した生態を有し、進化生態学的に重要な研究対象である。
- 生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所消失。陸土過剰流入による埋れ石下空隙の閉塞。
- 特記事項 : 2005年版沖縄県レッドデータブックではウロコガイとして掲載されている。
- 原記載 : Deshayes, G.P., 1856. Sur le genre *Galeomma*, Turton. *Proceedings of the Zoological Society of London*, for 1855: 167–171. (p. 169, no. 4, as *Galeomma Layardi*. Type loc.: “Insula Ceylonica”)
- 参考文献 : 徐鳳山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図誌. 科学出版社, 北京, 8+336 pp.
久保弘文, 2005. ウロコガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課（編）, 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 447–448.
久保弘文, 2012. ミナミウロコガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会（編）, 東海大学出版会, 秦野, 159.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : コハクマメアゲマキ
- 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
- 学名 : *Lepirodes porulosus* (Deshayes, 1856)
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 殻長 18 mm に達し、本科中やや大型で、横長の楕円形。本属としてはやや厚質。殻表は分岐状彫刻を欠き、微細な癩痕が散在し、光沢もある。殻色は淡黄白色。外套膜は乳白色で、殻頂の狭い範囲を残して貝殻全面を被い、多数の短い外套触手をもつ。
- 近似種との区別 : ニッポンマメアゲマキに類似するが、本種より大成し、殻がより厚い。
- 分布の概要 : 羽地内海、沖縄島（金武湾・中城湾等）、石垣島、フィリピン、タイ、オーストラリア等。
- 生態的特徴 : 外套膜により殻頂の一部以外の貝殻が被われ、腹縁を下にして、岩盤下に生息。ろ過食。
- 生息地の条件 : 潮通しのよいリーフ内のアマモ場や砂礫地のやや底質に埋没した岩礫下に生息。垂直分布はほぼ潮間帯のみで狭いが、水平的には開放的な藻場に隣接するサンゴ礁域にも生息し、比較的広い。

<貝類>

- 個体数の動向 : 沖縄島中南部、石垣島南部では埋立てにより、生息場所が大きく消失した。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 二枚貝類としては貝殻全面を外套膜によって覆い、匍匐能力を具えるなど特殊化した生態を有し、進化生態学的に重要。
生存に対する脅威 : 埋立て、陸土の大量流入や富栄養化による岩礫下の閉塞、酸欠。
特記事項 : 環境省第4次レッドリストでは本種の学名を *Lepirodes ambiguus* (Deshayes, 1856) としたが、再検討の結果、*L. porulosus* とする。
原記載 : Deshayes, G.P., 1856. Sur le genre *Scintilla*. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1855: 171–181. (p. 180, no. 33, as *Scintilla porulosa*. Type loc.: “Insula Boholensis Philippinarum”)
参考文献 : Huber, M., 2015, Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ユンタクシジミ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
学名 : *Litigiella pacifica* Lützen & Kosuge, 2006
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 本科中、中型で殻高 6 mm 程度。満月状の丸い二枚貝類で膨らみは弱い。殻頂はやや前方に偏り、殻表には細かな成長脈を刻み、灰褐色の殻皮を纏う。多くの個体は殻皮が殻頂から正中線上で剥離する。
近似種との区別 : 同じくスジホシムシと共生するフィリピンハナビラガイはより大きく、膨らみが強く、光沢がある。
分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、八重山諸島。
生態的特徴 : スジホシムシの体表や巣穴に共生する。
生息地の条件 : アマモ場周辺の砂泥質干潟の潮間帯から、サンゴ礁域に隣接する小規模な砂礫域に至る、比較的広い範囲に生息する。
個体数の動向 : 2002年に石垣島よりスジホシムシの体表から不明の二枚貝類として報告され、その後、奄美大島・沖縄島からも記録された。沖縄島泡瀬干潟では、埋立てによる攪乱で生息範囲が大きく減少した。比較的自然環境の安定した沖縄島のアマモ場（恩納村）や八重山諸島（名蔵湾・浦内川河口）では、現在も少なからず生息している。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : タイプ産地は石垣島名蔵湾である。ウロコガイ類は他の無脊椎動物と共生し、熱帯・亜熱帯に多岐にわたる種が分化しており、進化生態学的に重要。
生存に対する脅威 : 埋立て、陸域からの過剰な土壌微粒子の流入や栄養負荷による底質悪化。ホスト（スジホシムシ）の釣り餌用の大量採取。
原記載 : Lützen, J. & Kosuge, T., 2006. Description of the bivalve *Litigiella pacifica* n.sp. (Heterodonta: Galeommatoidae: Lasaeidae), commensal with the sipunculan *Sipunculus nudus* from the Ryukyu Islands, Japan. *Venus*, 65(3): 193–202. (pp. 194–200, 202, figs 1–5, as *Litigiella pacifica*. Type loc.: “Nagura Bay, Ishigaki island, Ryukyu Islands”)
参考文献 : 小菅文治, 2009. 奄美大島におけるユンタクシジミの記録とナタマメケボリガイの生息状況. ちりぼたん, 39(3/4): 166–169.
久保弘文・山下博由, 2012. ユンタクシジミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 160.
執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ツバサマメアゲマキ (新称)
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
学名 : *Phlyctaenachlamys lysiosquillina* Popham, 1939
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし
- 図の解説 : p. 52. 糸満市. A: 殻. B: 鉸歯. C: 生体. 撮影: 久保弘文。
形態 : 貝殻は非常に薄く、退化的で小さい。後端が三角形の翼状に張り出す。殻は外套膜下に完全に内在する。軟体部はウミウシ状で体表に無数のイボ状突起があり、前後端周辺に長短2種類の橙褐色の触手をもつ。
近似種との区別 : 同じくシャコ類巣穴共生のヨーヨーシジミ類は貝殻が外在し、丸い。
分布の概要 : 沖縄島、石垣島、オーストラリア（グレートバリアリーフ）。
生態的特徴 : トラフシャコの巣穴壁面に、細く長く特殊化した斧足後部で垂下し、時に活発に匍匐する。
生息地の条件 : 潮通しのよい中潮線～水深 2 m 付近までのアマモ場と、それに隣接する細砂底に生息するトラフシャコの巣穴に棲みつく。
個体数の動向 : 2000年頃までは名護市や糸満市、沖縄市泡瀬、石垣市川平等では大型のトラフシャコの巣穴が散見され、本種も多産したが、現在、何れの産地でも、トラフシャコの巣穴自体が減少あるいは小型化する傾向が見受けられる。本種は大型の巣穴に見いだされることが多く、2010年以降は名護や泡瀬

- では全く確認できていない。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : ウロコガイ類は他の無脊椎動物と共生関係を成立させ、熱帯・亜熱帯に多岐にわたる種が分化しており、進化生態学的に重要。
- 生存に対する脅威 : 埋立て。ホスト（トラフシヤコ）の採取や生態的制約（餌資源の減少）による減少や小型化。
- 原 記 載 : Popham, M.L., 1939. On *Phlyctaenachlamys lysiosquillina* gen. and sp. nov., a lamellibranch commensal in the burrows of *Lysiosquilla maculata*. British Museum (Natural History), Great Barrier Reef Expedition 1928–29, Scientific Reports, 6(2): 61–84. (pp. 62–83, figs 1–21, as *Phlyctaenachlamys lysiosquillina*. Type loc.: “The tubes of *Lysiosquilla maculata*, ... in the deep sand of the Sand Flat between the Sand Cay and the Thalamita Flat”)
- 参 考 文 献 : Mikkelsen P.M. & Bieler R., 1989. Biology and comparative anatomy of *Divariscintilla yoyo* and *D. troglodytes*, two new species of Galeommatidae (Bivalvia) from stomatopod burrows in eastern Florida. *Malacologia*, 31: 175–195.
- Yamashita, H., Haga T. & Lützen, J., 2011. The bivalve *Divariscintilla toyohiwakensis* n.sp. (Heterodonta: Galeommatidae) from Japan, a commensal with a mantis shrimp. *Venus*, 69(3–4): 123–133.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : セワケハチミツガイ
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
- 学 名 : *Pythina deshayesiana* Hinds, 1845
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 最大殻長約 10 mm。貝殻は白く、亜三角形で膨らみが強く、やや厚質。殻頂部から明瞭なハの字の放射肋 2 本が前後端に強く刻まれ、殻表には微細顆粒が多数存在する。靱帯は内在する。
- 近似種との区別 : ハチミツガイはハの字型放射肋を欠く。
- 分布の概要 : 奄美大島（大和村ヒエン浜）、沖縄島、先島諸島、台湾（恒春）、フィリピン、インドネシア（Great Sangir 島）。
- 生態的特徴 : 未詳。
- 生息地の条件 : リーフに遮蔽され、やや外洋に面した汀線付近の粗砂底にある埋れ石下環境に生息する。垂直分布が非常に狭く、生息場所には地下浸透水や河川水の伏流を伴うことが多い。
- 個体数の動向 : 1990 年前半まで比較的多産していた沖縄島北西岸では、防潮堤や埋立ての影響で伏流水が途絶え、生息地がかなり消失した。沖縄島北部や石垣島北西部では比較的外洋に面した場所に狭いながら生息場所が残されていたが、現在、減少傾向にある。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : ウロコガイ類は熱帯・亜熱帯に多岐にわたる共生種が分化しており、進化生態学的に重要。
- 生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所消失、富栄養や陸土過剰流入による埋れ石下環境の悪化や閉塞。
- 原 記 載 : Hinds, R.B., 1844–1845. The Zoology of the Voyage of H. M. S. *Sulphur*, under the Command of Captain Sir Edward Belcher, R.N., C.B., F.R.G.S., etc., during the Years 1836–42, Vol. II, Mollusca. Smith, Elder and Co., London, 2+72 pp., 21 pls. (p. 71, no. 297, pl. 19, figs 8–9 (1845), as *Pythina Deshayesiana*. Type loc.: “New Ireland”)
- Habe, T., 1960. New species of molluscs from the Amakusa Marine Biological Laboratory, Reihoku-cho, Amakusa, Kumamoto Pref., Japan. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 8(2): 289–298. (pp. 291, 294, figs 4–5, as *Melliteryx puncticulata flexuosa*. Type loc.: “Obama Bay, Fukui Pref.”)
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. セワケハチミツガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 163.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : フィリピンハナビラガイ
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
- 学 名 : *Salpocola tellinoides* (Hanley, 1857)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 II 類 (VU)
- 形 態 : 本科中、大型で殻高 10 mm 程度。満月状の丸い二枚貝類で膨らみは強く、後端はやや突出して嘴状。殻頂はほぼ中央で、殻表はやや光沢があり、腹縁や貝殻縁辺に淡褐色の殻皮を纏う。
- 近似種との区別 : 同じくスジホシムシと共生するユンタクシジミはより小さく、膨らみが弱く、光沢がない。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、八重山諸島。
- 生態的特徴 : スジホシムシの後部先端に強く附着し、片利共生関係があると考えられる。
- 生息地の条件 : アマモ場周辺の砂泥質干潟から亜潮間帯まで比較的広い範囲に生息する。
- 個体数の動向 : 沖縄における本種の分布は北限にあたり、個体密度が低い。1990 年頃より沖縄島周辺では赤土などの陸土流入の沈積や富栄養化による底質悪化により、ホストと共に個体数は減少傾向にあり、加えて中南部では埋立てにより生息地も大きく消失している。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : ウロコガイ類は他の無脊椎動物と共生関係を成立させ、熱帯・亜熱帯に多岐にわたる種が分化して

<貝類>

- 生存に対する脅威 : おり、進化生態学的に重要。
埋立て。陸域からの土壌微粒子の過剰流入や、過剰な栄養負荷による底質悪化。ホスト (スジホシムシ) の釣り餌用の大量採取。
- 特記事項 : *Fronssella philippinensis* Habe & Kanazawa, 1981 は異名。
- 原記載 : Hanley, S., 1857. Descriptions of four new species of Kelliadae in the collection of Hugh Cuming, Esq. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1856: 340–341. (p. 340, no. 2, as *Kellia tellinoides*. Type loc.: “Baclayon, Isle of Bohol, Philippines, under stones”)
波部忠重・金沢寿雄, 1981. フィリピン産共棲二枚貝の新種 (ブンブクヤドリガイ科). *Venus*, 40: 123–125. (pp. 123–125, figs 1–7, as *Fronssella philippinensis*. Type loc.: “フィリピン群島セブ島に近いマクタン島の潮間帯砂泥底”)
- 参考文献 : Huber, M., 2015, Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
久保弘文, 2012. フィリピンハナヒラガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 164.
Lützen, J., Kosuge, T. & Jespersen, Å., 2008. Morphology of the bivalve *Salpocola philippinensis* (Habe & Kanazawa, 1981) n.gen. (Galeommatoidae: Lasaeidae), a commensal with the sipunculan *Sipunculus nudus* from Cebu Island, the Philippines. *Venus*, 66(3–4), 147–159.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ベッコウマメアゲマキ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
学名 : *Scintilla philippinensis* Deshayes, 1856
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形態 : 貝殻は卵円型で、薄く膨らみは弱い。殻色は乳白色で平滑、透明感がある。外套膜は淡灰褐色で黒褐色の小突起を多数散在させる他、同色の太く長い指状の外套触手を前後に3本ずつ、計6本有し、これらを刺激により活発に動揺させる。
- 近似種との区別 : 貝殻は特徴に乏しいため、他種との識別は困難。外套膜の特徴は特異で近似種は知られていない。
- 分布の概要 : 沖縄島 (金武湾、中城湾、屋嘉田潟原、糸満市北名城、羽地内海等)、宮古島、石垣島、小浜島、西表島、フィリピン、タイ (プーケット)。
- 生態的特徴 : 貝殻は外套膜により殻頂の一部以外が被われ、腹縁を下にして、匍匐する。ろ過食と推定される。
- 生息地の条件 : 潮通しのよいリーフ内、潮間帯～水深2 mのアマモ場や砂礫地の岩礫下に生息する。
- 個体数の動向 : 生息場所である岩礫下が、陸土の大量流入や富栄養化により泥質化した場所では生息が認められない。沖縄島中南部では埋立て等により多くの生息場所が消失した。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 貝殻のほぼ全面を外套膜によって覆い、指状外套触手の伸展等、二枚貝類としては特殊化した生態を有し、進化生態学的に重要。
- 生存に対する脅威 : 埋立て、陸土の大量流入や富栄養化による岩礫下の閉塞、酸欠。
- 原記載 : Deshayes, G.P., 1856. Sur le genre *Scintilla*. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1855: 171–181. (p. 176, no. 14, as *Scintilla philippinensis*. Type loc.: “Insula Zebuensis Philippinarum”)
- 参考文献 : Lützen, J. & Nielsen, C., 2005. Galeommatid bivalves from Phuket, Thailand. *Zoological Journal of the Linnean Society*, 144(3): 261–308.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : パライロマメアゲマキ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
学名 : *Scintilla rosea* Deshayes, 1856
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

- 形態 : 殻は本科中、やや大型で横長、半透明で非常に薄く、やや膨らみのある卵型、殻表は多数の微細な顆粒を伴い、殻色は薄いバラ色またはレモン色。生時は濁灰黄色の外套膜が伸展して、殻全体を覆い、殻は見えない。最大殻長 16 mm。
- 近似種との区別 : 近似種ニッポンマメアゲマキは、生時に殻の一部が外套膜から露出すること、貝殻腹縁が大きく開口することで区別される。なお、本種群にはこれ以外にも希少な類似種が多く存在するが、その殆どが分類学的に不詳である。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、宮古島、フィリピン。
- 生態的特徴 : アマモ場周辺のやや埋れた石の下にすむが、多毛類やホシムシ類が同居する 경우가多く、何らかの共生生態をもつ可能性がある。
- 生息地の条件 : 主に内湾の潮間帯 (アマモ場、砂礫地) ～水深約5 mまでの岩礫下に生息する。
- 個体数の動向 : 沖縄島南部や中城湾では埋立てで生息場所が大きく消失した。沖縄島羽地内海、大浦湾では2011年以降の調査でも少なくない。
- 現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 貝殻全面を外套膜によって覆うといった二枚貝類としては特殊化した生態を有し、進化生態学的に重要な研究対象である。
 生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所消失。陸土過剰流入による海底空隙の閉塞。
 原 記 載 : Deshayes, G.P., 1856. Sur le genre *Scintilla*. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1855: 171-181. (p. 178, no. 25, as *Scintilla rosea*. Type loc.: “Zambalis, in insula Luzonica Philippinarum”)
 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. バライロマメアゲマキ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 158.
 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : ツマベニマメアゲマキ
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
 学 名 : *Varotoga anomala* (Deshayes, 1856)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 殻長 8 mm 程度。貝殻は非常に薄く、乳白色半透明で、膨らみが弱い楕円形、殻頂はほぼ中央に位置し、前背縁より後背縁が若干盛り上がる。外套後部の触手先端が赤く染まり、貝殻の前後背縁に微細な刻み目を有し、縁辺は微細な鋸歯状を呈する。

近似種との区別 : 貝殻前後背縁の刻み目の特徴は他に例を見ない。
 分布の概要 : 沖縄島、久米島、先島諸島、フィリピン、タイ。
 生態的特徴 : 通常埋れ石下の空隙で定在するが、岩盤への吸着のために先端が発達した斧足を有し、活発に匍匐する。ろ過食性。

生息地の条件 : 自然度の高い潮通しの良いリーフ内の死サンゴ下に生息する。
 個体数の動向 : 岩礫下が陸土の大量流入や富栄養化により泥質化した場所では、生息が認められない。沖縄島中南部では海岸改変により多くの生息場所が消失した。垂直分布の幅が狭いが、分布域は比較的広い。
 現在の生息状況 : 2000 年以前には沖縄島中南部の名城、奥武島等でも確認されていたが、現在は富栄養化や泥質化が進行し、確認が困難な状況となっている。

学術的意義・評価 : マメアゲマキ類は熱帯・亜熱帯に多くの種が分化し、外套膜が伸展して貝殻を被い、多数の触手を発達・特殊化させる他、斧足を腹足のように使って匍匐する等、進化生態学的に興味深い。
 生存に対する脅威 : 埋立て、陸土の大量流入や富栄養化による岩礫下の閉塞、酸欠。

原 記 載 : Deshayes, G.P., 1856. Sur le genre *Scintilla*. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1855: 171-181. (p. 181, no. 37, as *Scintilla anomala*. Type loc.: “Insula Samar Philippinarum”)
 参 考 文 献 : Huber, M., 2015. Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
 Lützen, J. & Nielsen, C., 2005. Galeommatid bivalves from Phuket, Thailand. Zoological Journal of the Linnean Society, 144(3): 261-308.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : リュウキュウマテガイ
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 無面目 マテガイ上科 マテガイ科
 学 名 : *Solen sloanii* Gray in Hanley, 1843
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 最大殻長 7 cm、偏圧した筒形の二枚貝類。殻は直線的で殻の前後端が開く。殻色は白色の地に赤褐色斑を散らす。殻表には灰褐色の殻皮を纏い、殻頂部付近で剥離する個体が多い。

近似種との区別 : 類似種マテガイは殻皮の光沢が強く、より細く、模様はない。
 分布の概要 : 紀伊半島潮岬周辺、高知県土佐沖ノ島以南、奄美大島、沖縄島、中国南部、インド・太平洋。
 生態的特徴 : 強力な斧足を用いて、砂～砂礫に垂直に潜孔する。他のマテガイ類と同様、刺激を与えると水管を自切し、これは防御反応の一種と考えられる。

生息地の条件 : 潮通しのよいアマモ場の細砂底～水深 20 m 付近までの細砂底～砂礫底に生息。
 個体数の動向 : 1970 年代まで沖縄島周辺ではサンゴ砂由来の極めて清浄なアマモ場砂底域が多く存在し、本種はそうした海域を生息場所としていた。しかし、1972 年の本土復帰以降、埋立て等による砂浜の消失、赤土の大量流入等による底質の泥質化により、生息場所が大幅に減少した。

現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 砂底での潜掘能力に長けたグループで生態学的に興味深い。本種は未だ先島諸島から記録が無く、生物地理的に重要。

生存に対する脅威 : 埋立て、アマモ場の人為的攪乱、陸土の大量流入、富栄養化による底質悪化。
 特 記 事 項 : 垂直分布の幅が広く、埋立て後に二次的に形成された細砂域 (ただし清浄な底質の場所に限られる) での確認事例もある。一部の局所的な場所をのぞいて、マテガイ科の種としては個体数が少ない。

原 記 載 : Hanley, S., 1843. [An illustrated, enlarged, and English edition of Lamarck's Species of Shells: comprising the whole of the recent additions in Deshayes' last French edition, with numerous species not noticed by that naturalist, accompanied by accurate delineations of almost all the shells described, and forming the third edition of the Index

testaceologicus, with illustrations by W. Wood]. W. Wood, London, 224+8+8 pp., 3 pls. (p. 12, "suppl. pl. 11, fig. 18", as *Solen Sloanii* Gray. Type loc. not designated)

参考文献：徐鳳山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図誌. 科学出版社, 北京, 8+336 pp.
久保弘文, 2012. リュウキュウマテガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 170.

執筆者名：久保弘文

和名：ホソバラフマテガイ
分類：二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 無面目 マテガイ上科 マテガイ科
学名：*Solen* sp.
カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態：殻長 40 mm の細長い二枚貝類。殻は細長く若干反り、茶色のまだら模様が入る。薄く光沢のある殻皮を有する。

近似種との区別：近似種と比較して、小型である。

分布の概要：奄美大島、沖縄島、西表島。

近縁な種及び群との分布状況の比較：バラフマテガイに似るが、本種はより小型で細長いことで区別できる。また海草藻場に生息するジャングサマテガイとは、より小型で細長く、殻に光沢があることで区別できる。

生態的特徴：低潮線から潮下帯の細砂底に生息する。マツバウミジグサやウミヒルモなどの小型の海草類からなる海草藻場でも見られる。金武湾 (与那城) では、潮下帯の低被度の海草藻場やその周辺の細砂底で見られるが、密度は低い。

生息地の条件：健全な低潮線から潮下帯の細砂底。

個体数の動向：中城湾の一部では、埋立により生息場所の多くが消滅した。大浦湾では、健全な個体群が維持されている。

現在の生息状況：沖縄島の大浦湾では 24 個体/㎡で生息する (2012 年当時)。西表島のトゥドゥマリ浜ではかつて死殻が見られたが、現状は不明。

学術的意義・評価：沖縄県及び奄美大島でのみ分布が確認されている。国外の分布は不明。

生存に対する脅威：埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。

参考文献：久保弘文, 2012. ホソバラフマテガイ (和名新称). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 171.

久保弘文, 2014. ホソバラフマテガイ. “レッドデータブック2014, ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 416.

名和 純, 2005. マテガイの一種. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 343.

執筆者名：小澤宏之

和名：カワラガイ
分類：二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ザルガイ上科 ザルガイ科
学名：*Fragum unedo* (Linnaeus, 1758)
カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態：丸みを帯びた箱形の二枚貝類で、殻長 7 cm に達する。放射肋上に赤褐色の鱗片状突起を等間隔で飾り、瓦屋根を髣髴させることが和名の由来である。

近似種との区別：オオヒシガイは同じく箱形のザルガイ類であるが、より小型で瓦状の鱗片を欠く。

分布の概要：沖縄島及び周辺離島、先島諸島、インド・太平洋。

生態的特徴：南西諸島のアマモ場干潟を代表する二枚貝類で、ろ過食以外に外套膜内へ渦鞭毛藻類を共生させて光合成産物を活用する特殊な栄養生態を持ち、垂直分布の幅が狭い。

生息地の条件：潮通しのよい中潮線～低潮線のアマモ場と隣接する砂・砂礫干潟に浅く埋る。

個体数の動向：沖縄島では近年の海浜改変による干潟の消失で多くの個体群が減少した。

現在の生息状況：2010 年以降の石垣島川平湾でのモニタリングではやや減少傾向であるが、2014 年沖縄市泡瀬北岸や恩納村等での調査では少なからぬ個体数を確認した。

学術的意義・評価：渦鞭毛藻類との共生関係は植物プランクトンの少ないサンゴ礁生態系特有の栄養摂取戦略であり、進化、生態両面で興味深い。

生存に対する脅威：埋立による生息地の消失、水質汚濁による透明度の低下、地球温暖化に伴う高水温・高照度化による渦鞭毛藻類との共生関係の破綻。

特記事項：外套腔内にカワラピンノという寄生特異性のあるカニの一種が棲んでいることがある。

原記載：Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 680, no. 68, as *Cardium unedo*. Type loc.: “. . .”)

参考文献：久保弘文, 2012. カワラガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 118.

名和 純, 2005. カワラガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 387.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ハツヒザクラ**
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
 学名 : *Arcopella isseli* (H. Adams, 1871)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし

形態 : 殻は本科中、小型で薄質、膨らみはやや強く、丸みを帯び、後背縁は弱い稜ができる。殻表は微弱的な成長輪が刻まれ、殻色は白色の地に不鮮明な橙～黄色の放射状彩を有する。殻長 10 mm 程度。
 近似種との区別 : 類似種ミガキヒメザラ、サツマヒメザラは、放射状色彩を欠く。
 分布の概要 : 日本本土温帯域、奄美大島、沖縄島中北部内湾域、宮古島、中国南部～紅海。
 生態的特徴 : 水管で海底面の有機物 (デトライタス) を吸い取って摂食すると考えられる。
 生息地の条件 : 内湾～やや外洋の潮通しのよいウミヒルモ類を中心としたアマモ場の細砂底～砂泥底に生息する。垂直分布は水深 2～10 m 付近まで広がる。
 個体数の動向 : 1990 年代には中城湾奥に位置する浜漁港沖水路や中城湾北部勝連半島南部の水路部等でドレッジにより確認されている。しかし、何れの場所も埋立てや航路浚渫により、生息場所自体が消失している。2010 年以降では名護湾や大浦湾水路部のウミヒルモ帯や羽地外海稲嶺沖水深 3 m 付近で確認されている。2015 年に宮古島与那覇前浜沖のウミヒルモ帯水深 7 m で確認されたが、他所での産出記録はない。

現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数の種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。
 生存に対する脅威 : 埋立て、陸域からの過剰な土壌微粒子流入や栄養負荷による底質悪化、泥質化。
 原記載 : Adams, H., 1871. Descriptions of twenty-six new species of shells collected by Robert M^r Andrew, Esq., in the Red sea. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1870: 788–793, pl. 48. (p. 790, pl. 48, fig. 10, as *Tellina (Arcopagia) isseli*. Type loc.: “Red Sea”)
 参考文献 : 徐鳳山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図誌, 科学出版社, 北京, 8+336 pp.
 Huber, M., 2015. Compendium of bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ハスメザクラ**
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
 学名 : *Jactellina transcalpta* (Sowerby III, 1915)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 最大殻長約 23 mm、楕円形の二枚貝類で殻表はやや光沢があり、全面に細かい成長脈と、後端から腹縁にかけて斜めの線条を多数刻む。殻色は淡い橙黄色～赤桃色で、死殻は時間と共に色褪せる。後端は右殻方向へやや歪む。
 近似種との区別 : 類似種ミクニシボリザクラはやや横長で、殻頂から放射状に紅彩を飾る個体が多いが、ハスメザクラにはこうした色帯は無い。
 分布の概要 : 紀伊半島以西の西日本太平洋岸、奄美大島、沖縄島、先島諸島、中国南部、インド・太平洋。
 生態的特徴 : 水管で海底面の有機物 (デトライタス) を吸い取って摂食すると考えられる。
 生息地の条件 : 内湾～やや外洋の潮通しのよいアマモ場の細砂底に生息する。垂直分布は潮間帯～水深 5 m 付近まで広がるが、アマモ類のある場所に限られる。
 個体数の動向 : 沖縄市泡瀬では 2000 年頃まで多産したが、埋立地周辺のアマモ場では個体数が激減した。また沖縄島南部では埋立てによりアマモ場が消失し、生息面積が大きく減少した。宮古島与那覇湾沖や石垣島川平湾、西表島等のアマモ場でも減少傾向にある。

現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数の種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
 生存に対する脅威 : 埋立て、陸域からの土壌微粒子の過剰流入や、過剰な栄養負荷による底質悪化や泥質化。
 原記載 : Sowerby, G.B. III. 1915. Descriptions of new species of Mollusca from various localities. Annals and Magazine of Natural History, Ser. 8, 16: 164–170, pl. 10. (p. 169, pl. 10, fig. 11, as *Macoma transcalpta*. Type loc.: “Oshima, Japan”)
 参考文献 : 波部忠重, 1961. 続原色日本貝類図鑑. 保育社, 大阪, 4+ix+3+182pp., 46 app., 66 pls.
 久保弘文, 2012. ハスメザクラ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”,

執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : トガリュウシオガイ
分類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
学名 : *Jitlada culter* (Hanley, 1844)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 殻長 10 mm 程度の亜三角形の二枚貝類。殻色は橙黄色で、薄い半透明の殻皮を纏う。後端はやや突出し、右殻側に僅かに傾く。前縁は丸くなり、殻頂はほぼ中央に位置する。
- 近似種との区別 : 同系色で、同所的に見られることがあるリュウキュウザクラは、殻がより縦長で、丸みを帯びることから区別される。
- 分布の概要 : 西日本太平洋岸・東シナ海沿岸の内湾域、奄美大島、沖縄島、先島諸島、台湾、海南島。
- 生態的特徴 : 右殻を上にして、斜めに潜っており、海底表面に長く伸ばした水管でデトライタスを吸引摂食する。河口の最奥部に生息することから、珪藻以外にも植物遺骸等も栄養源としている可能性がある。
- 生息地の条件 : 潮間帯中部の内湾、河口域の潮間帯中部の軟泥底に生息する。
- 個体数の動向 : 沖縄島中南部を中心に、内湾奥部の干潟が埋立てにより大きく消失しており、個体数の減少は否めない。
- 現在の生息状況 : 沖縄島中南部の干潟では依然減少傾向にある。西表島浦内川等の軟泥底では、短時間調査でも確認されているので個体数は少なくないと思われる。近年、日本本土まで広く分布することが判ってきた。
- 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数の種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
- 生存に対する脅威 : 河川改修、陸土の大量流入による底質環境悪化。
- 特記事項 : 最近の研究で、属の所属が従来の *Moerella* から新たな属 *Jitlada* へ変更された。
- 原記載 : Hanley, S., 1844. *New Tellinae*. *Proceedings of Zoological Society of London, for 1844: 68-72. (pp. 69-70, as Tellina culter. Type loc.: "Cagayan, province of Misamis, Mindanao; twenty-five fathoms, sandy mud")*
- 参考文献 : Huber, M., 2015. *Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families*. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
木村昭一・山下博由, 2012. トガリュウシオガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 124.
名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. *WWF Japan Science Report*, 4: 1-44.
名和 純, 2005. トガリュウシオガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) — レッドデータおきなわ —”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 339-340.
名和 純, 2009. 琉球列島の干潟貝類相 (2) 沖縄および宮古・八重山諸島. *西宮市貝類館研究報告*, (6): 1-81, pls 1-2.

執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : リュウキュウザクラ
分類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
学名 : *Jitlada philippinarum* (Hanley, 1844)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 本科では中型で、殻長 2~2.5 cm のやや丸みを帯びた亜三角形。殻はやや膨らみ、老成貝ではやや厚みを増す。殻色は橙色を帯びた桃色。殻表は平滑で薄い殻皮を纏う。
- 近似種との区別 : 同じく河口域に出現するトガリュウシオガイはやや小さく、後端が尖り、殻色が濃い桃色で、膨らみもやや強い。
- 分布の概要 : 奄美大島 (住用川河口)、南西諸島 (内湾域)、中国南部沿岸、インド・太平洋。
- 生態的特徴 : 水管で海底面の有機物 (デトライタス) を吸い取って摂食すると考えられる。
- 生息地の条件 : やや泥分の少ないマングローブ林周辺及び河口域の低潮線の細砂泥底~細砂底に生息する。
- 個体数の動向 : 1965年に佐敷町馬天での記録があるが、現在、沖縄島南部では確認が困難な状況である。かつては沖縄全域に生息していた可能性があるが、現在の主な産地は、沖縄島では北部に限られ、生息範囲が狭い。石垣・西表両島ではマングローブに隣接する河口域には多産地もある。
- 現在の生息状況 : 陸土の大量流入等河口域攪乱の著しい沖縄島北部では生息数が減少している。特に2000年頃まで多産した名護市東海岸の河口域でも泥質化が進行し、個体数が減少傾向にある。西表島では依然多産する。
- 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数の種が適応放散し、進化生物学的に意義深い。一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
- 生存に対する脅威 : 陸域からの土壌微粒子の過剰流入や、過剰な栄養負荷による底質悪化。

特記事項：日本の多くの文献が本種の学名種小名を *philippinensis* としてきたが、正しくは *philippinarum* である。
 原記載：Hanley, S., 1844. *New Tellinae*. Proceedings of Zoological Society of London, for 1844: 68–72. (p. 69, as *Tellina Philippinarum*. Type loc.: “St. Nicholas, isle of Zebu, and Jimmamailan, isle of Negros”)
 参考文献：Huber, M., 2015. *Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families*. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
 久保弘文, 2012. リュウキュウザクラ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 125.
 久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック ーレッドデータおきなわー 第2回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー2. 西表島. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中.
 坂田宏志, 1999. 日本産貝類ー菊池コレクションー 目録. 兵庫県立人と自然の博物館収蔵資料目録, (3): i-viii, 1-63, index 1-37.

執筆者名：久保弘文

和名：ミクニシボリザクラ
 分類：二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
 学名：*Loxoglypta compta* (Gould, 1850)
 カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：準絶滅危惧 (NT)

形態：殻長 20 mm 程度のピンクや黄色みを帯びた薄質・長卵形の小型二枚貝類。殻頂から放射状の色彩を飾り、後端背縁はやや尖る。殻表は多数の斜めの線条で刻まれる。
 近似種との区別：類似種ハスメザクラはやや殻高が高く、放射状紅彩を欠く。
 分布の概要：紀伊半島・宇和海以南、奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド・太平洋。
 生態的特徴：水管で海底面の有機物 (デトライト) を吸い取って摂食すると考えられる。
 生息地の条件：内湾～やや外洋の潮通しのよいアマモ場やその周辺の細砂底に生息する。垂直的には潮間帯下部から水深 10 m 付近まで。
 個体数の動向：奄美大島・沖縄島周辺では埋立て、底質の悪化等で生息地が減少した。宮古諸島伊良部島渡久地の浜沖や八重山諸島小浜島崎崎等、健全なアマモ場や細砂底が残存している場所では少なくない。
 現在の生息状況：2005 年頃まで石垣島川平湾では多産したが、2010 年以降のモニタリングでは著しく減少し、2015 年には生貝を未確認。2015 年名護湾でのハンドドレッジ調査でも未確認であった。
 学術的意義・評価：ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数の種が適応放散し、進化生物学的に意義深い。一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
 生存に対する脅威：陸域からの土壌微粒子の過剰流入や、過剰な栄養負荷による底質悪化。
 特記事項：小型のニッコウガイ類は種類が非常に多く、それらを逐一指定することは現実的に困難であるが、総じて生息場所や個体数が減少しており、何らかの包括的な評価も必要と考える。
 原記載：Gould, A.A., 1850. *Shells from the Exploring Expedition*. Proceedings of the Boston Society of Natural History, 3: 252–256. (p. 253, as *Tellina compta*. Type loc. not designated)
 参考文献：石川 裕, 2009. ミクニシボリザクラについて. まいご, (16): 7-9.
 久保弘文, 2012. ミクニシボリザクラ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 121.

執筆者名：久保弘文

和名：アマサギガイ
 分類：二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
 学名：*Macalia bruguieri* (Hanley, 1844)
 カテゴリー：準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー：絶滅危惧II類 (VU)

形態：殻長約 4 cm の卵円形のやや膨らみのある二枚貝類。殻はやや厚質で白色、灰色の薄い殻皮を纏う。
 近似種との区別：同所的に生息するリュウキュウシラトリは殻表が縮緬状で、貝殻がより扁平されることから区別は容易である。
 分布の概要：奄美大島、沖縄島、西表島 (死殻)、中国南部、シンガポール、タイ等に分布する。
 生態的特徴：長く伸びる水管を後端から伸ばして、海底の微細藻や有機堆積物を吸引し、摂食すると考えられる。
 生息地の条件：内湾奥の中潮線～低潮線直下の礫泥底に生息場所が形成され、主な生息水深は潮間帯下部と考えられる。
 個体数の動向：沖縄島中南部の内湾泥礫底は広範囲に埋立てられ、生息場所自体が著しく減少した。また湾内の航路浚渫の場に、本種の生息場所の多くが重なっている可能性があり、生息場所の攪乱は潮下帯へも及ぶと考えられる。
 現在の生息状況：2015 年 3 月に西表島で合弁死殻が確認されたが、これまでに生貝の報告事例はない。内湾奥の泥礫底に生息し、調査が困難なこともあり、確認事例は多くないが、実際は沖縄島の潮下帯の泥礫底には広範囲に生息している可能性がある。

<貝類>

- 学術的意義・評価 : 先島諸島における調査では依然、生貝確認事例は皆無であり、沖縄島個体群は隔離された個体群の可能性が高く、生物地理学的重要性は高い。
- 生存に対する脅威 : 埋立て、湾内の航路浚渫による生息場所の攪乱。
- 原 記 載 : Hanley, S., 1844. On new species of the genus *Tellina*, chiefly collected by Hugh Cuming, Esq. in the Philippine Islands and central America. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1844: 140-144, 146-149. (p. 142, as *Tellina Bruguieri*. Type loc.: “Ilo-Ilo, isle of Panhay; hard sand”)
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. アマサギガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 122.
- 名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
- 名和 純, 2005. アマサギガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 391-392.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

-
- 和 名 : **ダイミョウガイ**
- 分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
- 学 名 : *Pharaonella perna* (Spengler, 1798)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : ニッコウガイと並んで、ニッコウガイ科の南西諸島における代表的な大型種である。最大殻長 8 cm に達する。横長のやや膨らんだ木の葉形で、幼貝期は薄質半透明であるが、老成すると不透明でやや厚くなる。後端は突出して、右殻側に傾く。殻色は桃色～淡黄色。
- 近似種との区別 : トンガリベニガイと似るが、本種はより膨らみ、寸胴で、後端の突出が鈍い。
- 分布の概要 : 駿河湾以西の西日本、奄美大島、沖縄島、先島諸島、中国南部、インド・太平洋。
- 生態的特徴 : 貝殻の右殻を上にして、横向きに潜掘し、長く伸びる水管を後端から伸ばして、海底の微細藻や有機堆積物を吸引し、摂食する。
- 生息地の条件 : 内湾～やや外洋の潮通しのよいアマモ場とその周辺の細砂底～砂底に生息する。潮間帯～水深 10 m 付近まで生息し、比較的垂直分布の幅が広い。
- 個体数の動向 : 1990 年代以前には沖縄島中南部でも普通に見られたが、多くの生息場所が埋立てにより消失した。先島諸島や沖縄島北部では現在も少なからず生息している。
- 現在の生息状況 : 2013 年の羽地内海、2014 年泡瀬での調査では低潮線付近の細砂泥底に生貝が少なからず確認された。2015 年の石垣島川平湾調査では湾奥部での生息を確認した。
- 学術的意義・評価 : かつての沖縄県沿岸における大型二枚貝類の優占種の一つであり、物質循環や食物連鎖上重要な役割を果たしていたと考えられ、生態学的意義は大きい。
- 生存に対する脅威 : 埋立てによる干潟の消失、陸域からの過剰栄養負荷によって繁茂したアナアオサの海底被覆や、土壌微粒子による底質悪化。
- 原 記 載 : Spengler, L., 1798. Over det toskallede Slaegt *Tellinerne*. Skrifter af Naturhistorie-Selskabet. 4(2): 67-121, pl. 12. (pp. 79-80, no. 8, as *Tellina perna*. Type loc.: “Fra Ostindien”)
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ダイミョウガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 127.
- 熊本県希少野生動植物検討委員会, 2014. 熊本県の保護上重要な野生動植物-レッドリストくまもと 2014-. 熊本県環境生活部環境局自然保護課, 熊本, 135 pp.
- 名和 純, 2005. ダイミョウガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 390-391.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

-
- 和 名 : **トンガリベニガイ**
- 分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
- 学 名 : *Pharaonella rostrata* (Linnaeus, 1758)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
- 形 態 : 最大殻長約 5 cm 程度で、細く横長の平たい木の葉状で、幼貝期は非常に薄質であるが、老成すると不透明でやや厚くなる。後端は突出して、右殻側に傾く。殻色は紅・桃色～淡黄色等のバリエーションが多いが、放射彩は無い。
- 近似種との区別 : ダイミョウガイと似るが、本種はより平たく横長で、後端の突出がより鋭角となる。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄諸島、先島諸島、中国南部沿岸、オーストラリア、インド・太平洋。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近似種ダイミョウガイと比べると垂直分布域が広いが、均質な細砂底を好み、底質環境は限定的である。
- 生態的特徴 : 貝殻の右殻を上にして、横向きに潜っており、長く伸びる水管を後端から伸ばして、海底の微細藻や有機堆積物を吸引し、摂食する。

生息地の条件 : 内湾の低潮線～水深 15 m の細砂～細砂泥底に生息する。
 個体数の動向 : 1980 年代後半～1990 年代前半までは、金武湾奥や中城湾奥における 0.5 m 間口の小型ドレッジを用いての極めて狭い範囲の調査でも、生貝が複数回入網した。しかし、近年、泥質化や航路浚渫等で上部浅海域の環境が悪化して、個体数・個体群数の減少が著しい。中城湾、糸満市沿岸等では埋立てにより、一部の生息場所が消失した。
 現在の生息状況 : 2014 年の名護湾での潜水調査では著しく生息環境が悪化しており、全く確認できなかった。大浦湾では 2013 年に健全な個体群が確認されたが、2014 年 7 月以降、入域禁止区域となっていて、現状は不明。
 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数の種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
 生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変による干潟の消失、陸域からの土壌微粒子の過剰流入による底質悪化や泥質化。
 原 記 載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cumcharacteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 675, no. 43, as *Tellina rostrata*. Type loc.: “in O. Europaeo & Indico”)
 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. トンガリベニガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 127.
 久保弘文, 2014. トンガリベニガイ. “レッドデータブック2014, ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 398.
 名和 純, 2005. トンガリベニガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 389-390.
 執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : **チガイザクラ**
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
 学 名 : *Scissulina dispar* (Conrad, 1837)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
 形 態 : 殻長 25 mm 程度のピンクや黄色味を帯びた薄質、長卵形の小型二枚貝類。新鮮な個体の多くは殻頂からハの字形の放射状色帯を有する。殻は平坦で膨らみは弱く、後端背縁はやや角張る。殻表の彫刻が左右で異なり、右殻は多数の線条が斜めに刻まれるが、左殻は平滑で、和名はその相違を表現している。
 近似種との区別 : 類似種ミクニシボリザクラはやや横長で、両殻ともに彫刻を有する。
 分布の概要 : 奄美大島以南、沖縄島、先島諸島、東アフリカ、インド・太平洋。
 生態的特徴 : 水管で海底面の有機物 (デトライタス) を吸い取り、摂食する。
 生息地の条件 : サンゴ礁性の清浄な細砂底。
 個体数の動向 : 石垣島川平湾奥では 2000 年頃までは少なからず生息していたが、2011 年以降、個体数が大きく減少した。宮古島南部、石垣島南部では埋立てにより、生息面積が大きく減少した。
 現在の生息状況 : 2015 年、伊良部島渡久地浜沖水深約 5 m、西表島と鳩間島間水深約 10～15 m の非常に清浄な細砂底で比較的多産することが確認されたが、沖縄島、石垣島周辺ではそうした海域自体がほぼ消失しつつある。
 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数の種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
 生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変による干潟の消失、陸域からの土壌微粒子の過剰流入。
 原 記 載 : Conrad, T.A., 1837. Descriptions of new marine shells, from Upper California, collected by Thomas Nuttall, Esq. Journal of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, Ser. 1, 7: 227-268, pls 17-20. (p. 259, no. 4, as *Tellina dispar*. Type loc.: “the Sandwich Islands”)
 参 考 文 献 : Huber, M., 2015. Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families. ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
 久保弘文, 2014. チガイザクラ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 396.
 執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : **ネコジタザラ**
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
 学 名 : *Scutarcopagia linguafelis* (Linnaeus, 1758)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし
 形 態 : 最大殻長約 6 cm、丸みを帯びた木の葉形で良く膨らむ。殻表全面に多数の微細な鱗片を飾り、和名

は猫の舌のようにザラザラした形状を表している。殻色は白色で、多くの個体は殻頂部から放射状の紅彩で彩られるが、純白の変異型も稀に出現する。後端は右殻側に僅かに歪む。

- 近似種との区別 : サメザラガイは満月状で丸く、より大成し、鱗片が大きく粗いので区別は容易である。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、中国南部、南太平洋～マダガスカル。
- 生態的特徴 : 水管で海底面の有機物（デトライタス）を吸い取り、摂食すると考えられる。
- 生息地の条件 : 羽地内海や川平湾、大浦湾等の湾内ガレ場や、急深なサンゴ礁水路部の礫泥～礫砂底の水深1～10 m付近に生息する。
- 個体数の動向 : 本種は1990年代まで、羽地内海、糸満市、沖縄市泡瀬や名護湾、大浦湾、川平湾等で少なからず確認されてきたが、2000年以降では大浦湾、川平湾を除いて、確認個体数が大きく減少している。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数の種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる他、一次消費者として生態系の中で果たす役割も大きい。
- 生存に対する脅威 : 埋立て、陸域からの土壌微粒子の過剰流入や、過剰な栄養負荷による底質悪化。
- 原記載 : Linnaeus, C. von, 1758. *Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, genera, species, cumcharacteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata.* Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 674, no. 34, as *Tellina linguafelis*. Type loc.: “in O. Asiatico”)
- 参考文献 : Huber, M., 2015. *Compendium of Bivalves 2. A Full-color Guide to the Remaining Seven Families.* ConchBooks, Hackenheim, 907 pp.
名和 純, 2005. ネコジタザラ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 456.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ヒラザクラ
- 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
- 学名 : *Tellinides ovalis* Sowerby I, 1825
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 殻長約30 mm程度の平坦で薄い殻を持つ小判形の二枚貝類。殻色は桃色を帯びた淡橙色で、放射状色帯を伴う。
- 近似種との区別 : ヘラサギガイは同様に横長卵形の形状を有するが、白色で、模様を欠く。
- 分布の概要 : 房総半島以南の太平洋岸、能登半島以西の日本海、南西諸島、中国南部、インド・太平洋、紅海。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 本土産と南西諸島産との間では殻色や生息生態等が若干異なり、特に南西諸島の個体はオレンジ色が強く、ヒカンザクラと呼ばれるが、種内変異と考えられる。
- 生態的特徴 : 長く伸びる水管を後端から伸ばして、海底の有機物を摂食する。
- 生息地の条件 : 内湾～やや外洋の潮通しのよいアマモ場とその周辺の潮間帯～水深35 m付近の細砂底に生息する。
- 個体数の動向 : 沖縄島周辺では埋立てによる砂浜の消失、陸土流入等による底質の悪化で、潮間帯を中心に生息地が激減した。上部浅海帯においても泥質化や航路浚渫等で生息環境が悪化しており、中城湾、糸満市沿岸等では海浜改変により、一部の生息場所が消失した。
- 現在の生息状況 : 2014年の名護湾での潜水調査では著しく生息環境が悪化し、未確認。大浦湾では健全な個体群がある。羽地内海では2013年、ダイミョウガイと共に生貝が確認されている。
- 学術的意義・評価 : ニッコウガイ類は熱帯浅海域に多数の種が適応放散し、進化生物学的に意義深い研究対象となる。
- 生存に対する脅威 : 埋立てや海岸改変による干潟の消失、陸域からの土壌微粒子の過剰流入による底質悪化や泥質化。
- 原記載 : Sowerby, G.B. I., 1825. *A Catalogue of the Shells Contained in the Collection of the late Earl of Tankerville, Arranged According to the Lamarckian Conchological System; Together with an Appendix, Containing Descriptions of Many New Species.* E.J. Stirling, London, vii+92+xxxiv pp., 8 pls. (p. iii (in Appendix), no. 198, as *Tellinides ovalis*. Type loc. not designated)
- 参考文献 : 久保弘文, 2012. ヒラザクラ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 130.
名和 純, 2005. ヒラザクラ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 392-393.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ヘラサギガイ
- 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 ニッコウガイ科
- 学名 : *Tellinides timorensis* Lamarck, 1818
- カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧II類 (VU)
- 形態 : 最大殻長約50 mmの横長卵形の扁平な二枚貝類で、薄い殻皮を被り、淡白色で、繊細な成長輪脈を刻む他はほぼ平滑で、光沢がある。靱帯は外在し、黒褐色で大きい。後端は緩やかに傾斜し、やや

- 括れる。
- 近似種との区別 : ヒラザクラは同じく長卵形であるが、色彩が橙色から桃色で、放射彩を持つことで区別される。
- 分布の概要 : 沖縄島、西表島およびフィリピン、東南アジア。
- 生態的特徴 : 長く伸びる水管を後端から伸ばして、海底の有機堆積物を吸引し、摂食する。生息場所がマングローブ河口直下や滞筋に形成されることが多いため、陸地起源の植物遺骸等も栄養源としている可能性がある。
- 生息地の条件 : マングローブ林や河口域に隣接する滞筋等の細砂底～泥砂底に生息する。垂直分布の中心が中潮線付近にあり、ニッコウガイ科の中で最も陸域に近い生息域をもつ種の一つである。
- 個体数の動向 : 生息場所が陸域に近く、底質上のデトライタスを吸い取って摂食するため、無機質の赤土微粒子の大量堆積で、生存に対する悪影響を大きく被りやすい。沖縄島では 1990 年代前半まで豊産した場所もあったが、現在は中城湾等中南部を中心に大きく減少した。
- 現在の生息状況 : 2010～2011 年の調査では、沖縄島羽地内海や西表島等、大規模な干潟奥部には局在的であるが多産地が確認された。
- 学術的意義・評価 : 石垣島における調査では、本種の確認事例は皆無である。よって、沖縄島及び西表島個体群は、遺伝的な個体群である可能性が高く、生物地理学的重要性が高い。
- 生存に対する脅威 : 埋立て、湾内の航路浚渫による生息場所の攪乱。
- 原 記 載 : Lamarck, J.B.P.A. de M. de, 1818. Histoire naturelle des animaux sans vertèbres, présentant les caractères généraux et particuliers de ces animaux, leur distribution, leurs classes, leurs familles, leurs genres, et la citation des principales espèces qui s'y rapportent; précédée d'une introduction offrant la détermination des caractères essentiels de l'animal, sa distinction du végétal et des autres corps naturels, enfin, l'exposition des principes fondamentaux de la zoologie, Tome 5. Chez Deterville et Verdière, Paris, 612 pp. (p. 536, no. 1, as *Tellinides Timorensis*. Type loc.: "l'Océan des grandes Indes ou austral, près de Timor")
- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2012. ヘラサギガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 130.
久保弘文, 2014. ヘラサギガイ. "レッドデータブック2014, ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 399.
名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相, WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
名和 純, 2005. ヘラサギガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 392.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : ハスメヨシガイ
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 シオサザナミ科
- 学 名 : *Gari squamosa* (Lamarck, 1818)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 最大殻長約 4 cm、横長の舟形で膨らみは弱い。殻表に弱い斜めの線条を多数刻み、線条は殻頂方向から後端に向けて、強くなり、放射状に広がって、後端付近では平行に走る。
- 近似種との区別 : 類似種サカライマスオは大型でより厚く、彫刻が明瞭であり、生息水深もやや深い。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド・太平洋。
- 生態的特徴 : 植物プランクトン等を鰓でろ過して摂食すると考えられるが、詳しい生態は不明。
- 生息地の条件 : 内湾～やや外洋の潮通しのよいアマモ場の細砂～砂礫底に生息する。垂直分布は潮間帯～水 5 m 付近まで広がる。
- 個体数の動向 : 沖縄市泡瀬では 1998 年頃まで、名護湾では 2000 年前半まで、川平湾や名蔵湾では 2005 年頃まで少なからず確認されたが、現在、確認頻度は激減している。2010 年以降の調査では、羽地外海 (今帰仁村古宇利島周辺)、宮古島池間島、小浜島細崎等では少ないながら認められる。分布域が広いが、清浄なアマモ場周辺の砂礫底に依存しており、減少傾向は明らかである。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 自然度の高い亜熱帯域のアマモ場生態系には多種多様な二枚貝類が共存していて、本種群もその多様性を支える一員であり、生態学的、進化学的意義は大きい。
- 生存に対する脅威 : 埋立て、陸域からの土壌微粒子の過剰流入や、過剰な栄養負荷による底質悪化や泥質化。
- 原 記 載 : Lamarck, J.B.P.A. de M. de, 1818. Histoire naturelle des animaux sans vertèbres, présentant les caractères généraux et particuliers de ces animaux, leur distribution, leurs classes, leurs familles, leurs genres, et la citation des principales espèces qui s'y rapportent; précédée d'une introduction offrant la détermination des caractères essentiels de l'animal, sa distinction du végétal et des autres corps naturels, enfin, l'exposition des principes fondamentaux de la zoologie, Tome 5. Chez Deterville et Verdière, Paris, 612 pp. (p. 514, no. 9, as *Psammobia squamosa*. Type loc.: ".....")
- 参 考 文 献 : Willan, R.C., 1993. Taxonomic revision of the family Psammobiidae (Bivalvia: Tellinoidea) in the Australian and New Zealand region. Records of the Australian Museum, Supplement, 18: 1-132.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : ウラジロマスホ

〈貝類〉

- 分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 シオサザナミ科
- 学 名 : *Gari togata* (Deshayes, 1855)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 最大殻長 6 cm 程度の横長楕円形の二枚貝類。殻はやや厚く、殻頂はやや前寄りに位置し、靱帯は大きく外在する。殻表は黒褐色の厚い殻皮を纏い、やや光沢がある。内面は白い。
- 近似種との区別 : ミナトマスホは本種と比べ小型で薄く、内面が淡紫色で、白くならない。マスホガイも内面は紫色で、更に横長で大成する。両種はマングローブ林内よりも、その周辺や河口干潟に生息する。
- 分布の概要 : 石垣島、西表島、中国南部沿岸 (海南島等)、フィリピン。
- 生態的特徴 : プラクトンや有機物などを鰓で濾して摂食する。
- 生息地の条件 : マングローブ林内の中潮線付近の細砂～泥砂底に生息する。
- 個体数の動向 : 国内では八重山諸島 (石垣島アンパル、西表島) からのみ記録され、垂直分布幅も潮間帯中部に限定され狭い。一部のマングローブ林では道路工事等に伴う伐採や遊覧船の往来による波浪浸食があり、本種の生息に悪影響が懸念される。
- 現在の生息状況 : 西表島船浦でのモニタリングでは 2010 年は 0.5 個体/分、2015 年は 0.12/分であった。2015 年は埋したまま死亡している個体が少なからず見られた。
- 学術的意義・評価 : 国内では石垣・西表両島のマングローブに特有の種で、両島は本種の分布の北限であり、生物地理学的、生物多様性評価等において重要。
- 生存に対する脅威 : 遊覧船等の過度の往来や人為的改変等によるマングローブ環境の攪乱、陸土微粒子の沈積。なお、両島水域ともに自然公園法やラムサール条約等で保護されており、生息環境は安定している。
- 原 記 載 : Deshayes, M.G.P., 1855. Descriptions of new shells from the collection of Hugh Cuming, Esq. Proceedings of Zoological Society of London, for 1854: 317–371. (p. 318, no. 5, as *Psammobia togata*. Type loc.: “Philippine Islands”)
- 参 考 文 献 : Huber, M., 2010. Compendium of Bivalves. A Full-color Guide to 3,300 of the World’s Marine Bivalves. A Status on Bivalvia after 250 Years of Research. ConchBooks, Hackenheim, 901 pp.
久保弘文, 2012. ウラジロマスホ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 134.
久保弘文・西垣孝治・小澤宏之, 2017. 沖縄県レッドデータブック ーレッドデータおきなわー 第2 回改訂に伴う稀少貝類棲息実態調査報告ー2. 西表島. Molluscan Diversity, 5: 印刷中.
Willan, R.C., 1993. Taxonomic revision of the family Psammobiidae (Bivalvia: Tellinoidea) in the Australian and New Zealand region. Records of the Australian Museum, Supplement 18: 1–132.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : シロナノハナガイ
- 分 類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 アサジガイ科
- 学 名 : *Leptomya trigonalis* (Adams & Reeve, 1850)
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形 態 : 最大殻長約 25 mm。白い亜三角形の貝殻で、殻表には明瞭な細かい成長肋をもち、さらに肋間は細かく刻まれ、一見絹目状となる。靱帯は内在し、蝶番内側の靱帯受に収まっている。
- 近似種との区別 : ナノハナガイはより殻が薄く、後端が嘴状に突出する。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島全域、先島諸島、中国南岸 (海南島)。
- 生態的特徴 : サンゴ礁の割れ目などに溜まった礫間に埋れ、殆ど移動しないと考えられる。ろ過食性。
- 生息地の条件 : 潮通しのよい低潮線～水深 30 m のサンゴ礁～岩盤の割れ目等の砂泥地に埋れ、掘り出しが困難で生体の確認は難しい。
- 個体数の動向 : 垂直分布が広く、外洋域まで分布が広がっている。しかし、礫～岩盤帯の隙間に蓄積した細砂～シルト砂中に生息するため、赤土流入や富栄養化により、底質の悪化・還元化が進行すると、埋れたまま死滅する個体も多いと考えられる。
- 現在の生息状況 : 現在、比較的陸域からの影響が少ない恩納村や沖縄周辺離島のサンゴ礁域で少ないながら確認される。
- 学術的意義・評価 : 通常、砂や泥等の軟質底に多い種だが、沖縄のサンゴ礁域では複雑なサンゴの隙間やクレビス等の物理構造にモチヅキザラやコバコガイ、ウチトミガイ等多数の種が適応放散している。本種はその一員であり、進化生態学的に重要である。
- 生存に対する脅威 : 埋立て、シルト・泥分の大量流入・蓄積による岩礫間隙の閉塞。
- 原 記 載 : Adams, A. & Reeve, L.A., 1850. Mollusca. “The Zoology of the Voyage of H.M.S. Samarang; under the Command of Captain Sir Edward Belcher, C.B., F.R.A.S., F.G.S., during the Years 1843–1846”, Adams, A. (ed.), Reeve & Benham, London, i-x, 1–87, pls 1–24. (p. 83, no. 2, pl. 24, fig. 8, as *Thracia trigonalis*. Type loc.: “Sooloo Archipelago”)
- 参 考 文 献 : Huber, M., 2010. Compendium of Bivalves. A Full-color Guide to 3,300 of the World’s Marine Bivalves. A Status on Bivalvia after 250 Years of Research. ConchBooks, Hackenheim, 901 pp.
久保弘文, 2012. シロナノハナガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 137.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

和名 : ザンノナミダ
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 アサジガイ科
 学名 : *Semelangulus lacrimadugongi* Kato & Ohsuga, 2007
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 最大殻長 9 mm 程度。腹縁が丸みを帯びる亜三角形の非常に扁平な殻を持つ。後端は右殻側に僅かに傾き、やや突出する。

近似種との区別 : 極端に扁平な形態はアサジガイ科の他種に例を見ない。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、久米島、宮古島、多良間島、石垣島、西表島、小浜島。

生態的特徴 : 海底に浅く潜掘し、ろ過食性と考えられる。

生息地の条件 : 潮通しのよいウミヒルモ帯等のアマモ場の潮間帯～水深 10 m に浅く埋在する。

個体数の動向 : ウミヒルモ帯等浅海アマモ場は中城湾泡瀬地区をはじめ大規模な埋立てにより、生息面積自体が狭められており、生息数も減少していると考えられる。しかし、糸満市西崎や潮崎など埋立地の外側に二次的に形成された干潟でも生息が認められるため、周辺海域からの幼生加入があれば、新規生息環境へ棲み込める可能性がある。

現在の生息状況 : 川平湾で毎年実施しているモニタリングでは 2013 年以降、確認されていない。2009 年久米島でのドレッジ調査や 2015 年恩納村での潜水調査では水深 10～20 m 付近の砂底からも確認され、垂直分布の幅が広く、レッドデータ対象外とすべきか検討の必要もあるが、今回は予防原則的に準絶滅危惧 (NT) に留めた。

学術的意義・評価 : 著しく扁平な貝殻は二枚貝類中でも、際立って特殊化した形態と考えられる。

生存に対する脅威 : 埋立て、アマモ場の人為的攪乱、陸土の大量流入。

原記載 : Kato, M. & Ohsuga, K., 2007. A new tellinoidean bivalve in seagrass beds in the Ryukyu Archipelago. *Venus*, 65(4): 291–297. (pp. 293–297, figs 2–4, as *Semelangulus lacrimadugongi*. Type loc.: “Awase tidal flat, Okinawa-shi, Okinawa Island, Japan, 26°18'48" N, 127°50'50" E”)

参考文献 : 久保弘文, 2012. ザンノナミダ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 136.
 久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245–340.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ミナミキヌタアゲマキ
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ザルガイ目 ニッコウガイ上科 キヌタアゲマキ科
 学名 : *Solecurtus philippinarum* (Dunker, 1862)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻長約 4cm。本科としてはやや小さく、横長長方形。殻質は薄く、灰褐色の殻皮を薄く纏う。靱帯は外在して大きい。殻表に斜めの波状彫刻を弱く刻み、殻色は淡い桃紫色の地に殻頂から 2 本の白色の放射帯を飾る。

近似種との区別 : 他のキヌタアゲマキ類はより厚く、大成する。

分布の概要 : 沖縄島 (名護湾、大浦湾)、先島諸島、インド・太平洋。

生態的特徴 : 発達した斧足で活発に泥砂中を潜る。ろ過食性種。

生息地の条件 : 内湾の潮通しのよいアマモ場に隣接する泥砂底～細砂底。低潮線～水深 10 m 付近。

個体数の動向 : 海底の水管孔を確認した上で掘り出し採集を試みても、埋込深度が深い上、潜砂能力に長けており、見失う場合が多い。産出記録は少なく、沖縄島は北限分布域であり、かつ産地が多様性の高い自然度の高い内湾域に限定的で、個体数密度も低い。名護湾では底質悪化が著しく、2005 年以降、全く確認されていない。大浦湾では河口水路の延長線上の深みに生息場所が知られている。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 分布北限にあたり、生物地理学的意義が大きい。潜砂能力に富んだ形態へ特殊化し、水管自切も行えるなど、動物行動学的にも特筆すべき種である。

生存に対する脅威 : 陸土の大量流入、富栄養による底質悪化、大規模な内湾環境改変。

特記事項 : 日本の文献では従来、本種の学名種小名を「*philippinensis*」としてきたが、正しくは *philippinarum* である。記載年も 1861 でなく 1862 が正しい。

原記載 : Dunker, G., 1862. *Solenacea nova collectionis Cumingianae descripta*. *Proceedings of the Zoological Society of London*, for 1861: 418–427. (p. 424, no. 26, as *Macha philippinarum*. Type loc.: “Ad Philippinarum insulas”)

参考文献 : 久保弘文, 2012. ミナミキヌタアゲマキ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 138.

執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

- 和名 : カモジガイ
 分類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 バカガイ科
 学名 : *Lutraria arcuata* Reeve, 1854
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 最大殻長約 13 cm に達し、細長い舟形で、厚質。貝殻両端は大きく開口する。灰褐色の殻皮を纏うが殻頂周辺は剥離しやすい。
- 近似種との区別 : ヒラカモジガイはより小型で薄く、形もカモジガイより緩やかな弓なりに反り上がっている。
- 分布の概要 : 房総半島以南の太平洋岸、能登半島以西の日本海、南西諸島、中国南部、インド・太平洋。
- 生態的特徴 : 上げ潮時には水管を大きく開いて、プランクトンなどを鰓で濾して摂食する。
- 生息地の条件 : 内湾～やや外洋の潮通しのよいアマモ場とその周辺の細砂礫底～礫砂底に生息する。潮間帯～水深 10 m 付近まで生息し、サンゴ塊や礫間の隙間に填まるように生息することが多い。
- 個体数の動向 : 沖縄島羽地内海では 1990 年代には多産したが、2005 年以降、殆ど確認できない。石垣島では 2005 年頃までは浦底湾や底地湾等で亜潮間帯個体群がしばしば確認され、生息深度が比較的深いので、生息環境は安定していた。川平湾では 2007 年湾奥部に個体群を確認したが、2010 年以降のモニタリングでは全く確認されていない。
- 現在の生息状況 : 2012～2014 年羽地内海での調査でも生貝が全く記録されず、復活の兆しはなく、沖縄島の個体群は危機的状況にある。
- 学術的意義・評価 : 著しく大型化し、生息水深が浅いことなどを考慮すると、日本本土のカモジガイや南オーストラリアに分布するミナミカモジガイ *L. rhynchaena* Jonas, 1844 との類縁関係を再度、検討する必要がある。
- 生存に対する脅威 : 羽地内海の潮間帯では富栄養化によるアナアオサの大発生に伴う底質被覆や還元化で、酸欠状態となり、しばしば二枚貝類の大量斃死が確認されてきた。こうした現象の繰り返しが、現在の壊滅的な個体群消滅をもたらした可能性がある。
- 特記事項 : 日本本土の個体群と比べ、生息水深が浅く、別種あるいは地方型の検討も含め、集団遺伝学的な分子系統解析が必要である。本種をミナミカモジガイの異名とする見解もある。
- 原記載 : Reeve, L.A., 1854. Monograph of the genus *Lutraria*. *Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals*, 8: pls 1-5. (sp. 6, pl. 2, fig. 6, as *Lutraria arcuata*. Type loc.: "Philippine Islands")
- 参考文献 : Huber, M., 2015. *Lutraria arcuata* Reeve, 1854. *MolluscaBase*, accessed through World Register of Marine Species. <http://www.marinespecies.org/aphia.php?p=taxdetails&id=540474> (2017年1月4日閲覧)
 久保弘文, 2012. カモジガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 140.
 名和 純, 2005. カモジガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 388.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ユウヤケバカガイ
 分類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 バカガイ科
 学名 : *Mactra* cf. *artensis* Montrouzier in Fischer, 1859
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 該当なし
- 図の解説 : p. 52. 標本 : 名護湾. 生体 : 石垣島. 撮影 : 久保弘文。
- 形態 : 殻は本科中、小型で、やや横長の亜三角形、殻表は薄い淡褐色の殻皮に覆われ、きわめて弱い成長輪脈が刻まれる。殻色は淡い橙色を帯びた灰白色地に、淡橙褐色の細い放射状彩色をもち、殻頂部と背面には紫褐色色彩を有する。最大殻長約 30 mm。
- 近似種との区別 : 近似種ベニハマグリは殻がより薄く、鮮橙赤色に白点を散在させる。
- 分布の概要 : 沖縄島 (金武湾、名護湾および那覇沖)、石垣島、西表島。
- 生態的特徴 : 埋るる過食性であるが、その他、繁殖等の詳しい生態は不明。
- 生息地の条件 : 潮通しのよい内湾～リーフ水路の水深 20 m 付近までの清浄で均質な砂底に生息。
- 個体数の動向 : 本種は、かつて沖縄島周辺に広く存在した清浄な細砂底を生息場所としていた。しかし、現在、人為的影響による底質悪化で、生息場所が大幅に減少した。名護湾では 1995～2000 年頃まで確認していたが、その後、姿を消した。ドレッジ調査により 2010 年に石垣島では水深 20 m 付近で採取されている。2015 年の宮古島でのドレッジ調査では未確認。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : バカガイ類は地理的分化が著しいグループで、分類学的、進化的に重要である。
- 生存に対する脅威 : 陸上の大量流入や、富栄養による底質悪化。
- 特記事項 : *Mactra artensis* は南太平洋 (オーストラリアからニューカレドニア) から知られる種で、沖縄県に産するものとは分布域が離れ、かつ分断されており、別種の可能性もある。
- 原記載 : Fischer, P., 1859. Notes pour servir à la Faune malacologique de l'Archipel Calédonien. *Journal de Conchyliologie*, 7: 329-342. (pp. 334-335, as *Mactra Artensis* Montrouzier. Type loc.: "l'île Art")
- 参考文献 : Huber, M., 2010. *Compendium of Bivalves. A Full-color Guide to 3,300 of the World's Marine Bivalves. A Status on Bivalvia after 250 Years of Research*. *ConchBooks*, Hackenheim, 901 pp.
 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+104 pp.
- 執筆者名 : 久保弘文

和名 : ユキガイ
 分類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 バカガイ科
 学名 : *Meropesta nicobarica* (Gmelin, 1791)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻長 4~5 cm。殻は白色で、褐色の薄い殻皮を持つ。殻の後端部は開口する。殻表には放射細肋が発達する。

分布の概要 : 房総半島以南、沖縄島、石垣島、西表島、インド・太平洋。
 生態的特徴 : 藻場干潟の粗砂底で 10~20 cm の場所に埋在する。ウミジグサ類やウミヒルモなどの小型海草類が優占する海草藻場で密度が高く、同所的にダイミョウガイなどニッコウガイ科二枚貝類が見られる。

生息地の条件 : 小型の海草類が優占する海草藻場の潮間帯下部。
 個体数の動向 : 沖縄島羽地内海では、1~2 個体/m²未満 (2015 年調査) であり、減少傾向にある。
 現在の生息状況 : 沿岸域に発達する海草藻場の消滅や縮小に伴い、個体群は縮小傾向にあると考えられる。
 学術的意義・評価 : 内湾干潟の小型海草類が優占する限定的な環境に生息することから、そのような環境の指標性を有する。

生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。
 原記載 : Gmelin, J. F., 1791. *Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis.* Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, 3021-3910. (p.3261, no.24, as *Mactra nicobarica*. Type loc.: “ad insulas Nicobaricas”)

参考文献 : 木村昭一・山下博由, 2012. ユキガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 142.
 名和 純, 2005. ユキガイ. “改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 451-452.

執筆者名 : 小澤宏之

和名 : クチバガイ
 分類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 チドリマスオ科
 学名 : *Coecella chinensis* (Deshayes, 1855)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻長 3 cm。殻は白色で楕円形、黄褐色の薄い殻皮を有する。

分布の概要 : 北海道南部・ロシア沿海州以南、沖縄島、久米島、石垣島、朝鮮半島、中国大陸沿岸、フィリピン。
 生態的特徴 : 干潟の転石の混じる砂礫底に埋在し、透明の足糸で堆積物に付着する。
 生息地の条件 : 内湾奥の河口付近に発達する干潟の転石の混じる砂礫底。生息地は低塩分で淡水の影響下にある。
 個体数の動向 : 沖縄島の産地では、大きな変化はない。
 現在の生息状況 : 沖縄島では羽地内海や大浦湾に生息しており、両産地とも密度は約 10 個体/m²以上の密度で生息している (2015 年当時)。

学術的意義・評価 : 多産地の河口干潟では、優占種である。
 生存に対する脅威 : 護岸工事などによる底質の変化。河川等からの赤土流入。
 原記載 : Deshayes, M.G.P., 1855. *Descriptions of new shells from the collection of Hugh Cuming, Esq. Proceedings of Zoological Society of London, for 1854: 317-371.* (p.334, no.79, as *Caecella [sic] chinensis*. Type loc.: “Chinese Seas”)

参考文献 : 名和 純, 2005. クチバガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 452-453.

執筆者名 : 小澤宏之

和名 : オイノカガミ
 分類 : 二枚貝綱 異齒亜綱 真異齒下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科
 学名 : *Bonartemis histrio* (Gmelin, 1791)
 カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリ : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻長 30-40 mm、丸い形状で、やや膨らみ、僅かに光沢がある。殻表には明瞭で密な成長輪肋がある。島嶼間で貝殻の色調に変異差が認められ、先島諸島の型では赤褐色のジグザク模様を持つが、沖縄島型は模様が不明瞭で、薄紫がかかった灰桃色の色調となる。

近似種との区別 : サザメガイは、本種の先島諸島型と類似し、ジグザク模様を持つが、より模様が不鮮明で少なく、成長輪肋も弱い。

〈貝類〉

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、中国南部、インド・太平洋。
近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属のワカカガミは宮崎県～奄美大島に分布。
生態的特徴 : 砂中に浅く埋れ、植物プランクトン等を鰓でろ過摂食する。
生息地の条件 : 潮通しのよい干潟やリーフ内の砂～砂礫底に浅く埋れする。垂直分布が中潮線～水深 3m 付近と浅場に限定される。
個体数の動向 : 1990 年代まで、沖縄島南部ではかなり多産したが、海浜改変による生息場所の消失、陸域からの人為的影響による泥質化や富栄養化で、干潟環境が悪化し、大幅に個体数が減少している。先島諸島でも特に石垣島南部や川平湾では減少傾向にある。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 先島諸島型は奄美大島、中国南部やフィリピン産と同様であり、広範囲に産する型と考えられるが、沖縄島型は他地域では知られていない。よって、沖縄型は遺伝的特異集団の可能性があり、生物地理学的意義が大きい。
生存に対する脅威 : 海浜改変等による生息場所の消失、赤土流入等による泥質化や富栄養化。
特記事項 : 本属を *Dosinia* 属の中に亜属として包含させる見解もある。
原記載 : Gmelin, J.F., 1791. *Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis*. Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, 3021–3910. (p. 3287, no. 85, as *Venus histrio*. Type loc.: “in India”)
参考文献 : Huber, M., 2010. *Compendium of Bivalves. A Full-color Guide to 3,300 of the World's Marine Bivalves. A Status on Bivalvia after 250 Years of Research*. ConchBooks, Hackenheim, 901 pp.
久保弘文, 2012. オイノカガミ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 148.
名和 純, 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4: 1-44.
執筆者名 : 久保弘文

和名 : フジイロハマグリ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科
学名 : *Callista erycina* (Linnaeus, 1758)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
形態 : 最大殻長約 7 cm、横長の卵円形。靱帯は外在し、月面は明瞭で光沢がある。殻表には均質で太い成長輪肋を等間隔に刻み、薄い淡褐色半透明の殻皮を纏う。殻色は淡橙褐色の地に藤色の放射線を飾る。
近似種との区別 : 類似種ハナヤカワスレは最大でも殻長 3 cm 程度にしかない。同大のヌリツヤハマグリは輪肋を欠く。
分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、石垣島川平湾、中国南部、海南島、インド・西太平洋。
生態的特徴 : 砂中に浅く埋れ、植物プランクトン等を鰓でろ過して摂食する。
生息地の条件 : 沖縄島全域の、大規模なアマモ場が形成される潮通しの良い内湾および湾口部に生息する。低潮線から水深 30 m 付近までの細砂～砂泥底に生息している。
個体数の動向 : 1990 年代後半まで沖縄市泡瀬干潟では少ないながら確認された。現在、海浜開発の著しい沖縄島中南部では潮間帯付近に健全な個体群は全く認められない。
現在の生息状況 : 沖縄島北部では東海岸の湾域を中心に、亜潮間帯において、健全な個体群が点在しているが、潮間帯ではほとんど確認できない状況が続いている。
学術的意義・評価 : 熱帯浅海域に多数の種が適応放散したマルスダレガイ科の一員であり、進化生物学的に重要である。
生存に対する脅威 : 中城湾等では埋立てによる生息地の消失が最大の脅威となる。
原記載 : Linnaeus, C. von, 1758. *Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis*. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 686, no. 98, as *Venus erycina*. Type loc.: “in Europa”)
参考文献 : 徐鳳山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図誌. 科学出版社, 北京, 8+336 pp.
名和 純, 2005. フジイロハマグリ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) — レッドデータおきなわ —”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 396.
執筆者名 : 久保弘文

和名 : カミブスマ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科
学名 : *Clementia papyracea* (Gmelin, 1791)
カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
形態 : 殻は膨らみが強い丸みを帯びた亜三角形で、薄く脆い。後背縁はやや直線的で弱い稜角がある。殻表には同心円状に波状の皺を装う。生時は殻表に微細な砂を付着させる。

- 近似種との区別 : 沖縄県内に本属の他種は知られていない。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド・太平洋。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本本土温帯域に分布する近似種フスマガイ *Clementia vathelii* Mabile, 1901 は腹縁がより湾曲して丸みが強く前背縁のくびれが大きさい。なお、両種の分布域重複は知られていない。
- 生態的特徴 : 泥底～細砂底に約 20～30 cm 深く埋在して、長い水管を海底に開口させる。プランクトン等をろ過して摂食すると考えられる。
- 生息地の条件 : 内湾や河口域に隣接する滞筋の、低潮線～水深 20 m の均質な砂泥～細砂底に生息する。
- 個体数の動向 : 個体数は多くはないが、垂直分布が広く、分布域も広範囲で南西諸島全域に渡る。航路などで二次的に造成された水路の泥底等にも認められる。しかし、羽地内海では 1990 年代後半から潮間帯の個体群が激減した。なお、水管の開口部は内側がコーティングされた明瞭な貝穴として確認できるため、個体数の激減はこの貝穴が減ることにより推測できる。
- 学術的意義・評価 : フスマガイと形態的に酷似するが、これは日本本土の比較的深い場所に生息し、両種の分化に関しては進化生態学的に研究の余地が残っている。
- 生存に対する脅威 : 羽地内海では富栄養化で大発生したアナアオサによる底質被覆と呼吸水交換阻害（酸欠）が観察されており、富栄養化等による底質悪化が脅威となる。
- 原 記 載 : Gmelin, J.F., 1791. *Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis.* Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, 3021–3910. (p. 3257, no. 3, as *Mactra papyracea*. Type loc.: “ad insulas Nicobaricas”)
- 参 考 文 献 : 徐鳳山・張素萍, 2008. 中国海産双殻類図誌. 科学出版社, 北京, 8+336 pp.
久保弘文, 2012. カミブスマ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 147.
名和 純, 2005. カミブスマ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 396-397.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : **ダテオキシジミ**
- 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科
- 学 名 : *Cyclina sinensis* (Gmelin, 1791)
- 方 言 名 : クスイナー
- カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)
- 図 の 解 説 : p. 52. 泡瀬干潟. 撮影 : 久保弘文.
- 形 態 : 殻高約 5 cm、やや縦長の円形の二枚貝類。殻質は厚く、後端に放射肋と全面に細い成長肋を均等に刻み、光沢のある殻皮を被る。
- 近似種との区別 : 沖縄県産個体は本土産個体と比べて殻が厚く、また沖縄県産は放射肋が後縁部のみ明瞭で、殻中央および前縁部は微弱となり、布目状にならない。殻の内面は周辺部に刻み目があるが、その間隔は本土産より沖縄産個体の方が広く、より強い。両者は識別可能であり、沖縄県産をダテオキシジミ、本土産をオキシジミと呼ぶことにする。
- 分布の概要 : 国内では沖縄島のみで、遺伝的に近い集団は中国大陸に分布する。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : オキシジミは日本本土に分布し、ダテオキシジミとは分布が重複しない。
- 生態的特徴 : 潮間帯中部の泥干潟上縁部に比較的深く潜っているが、渦鞭毛藻類や有機懸濁物を鰓でろ過して摂食する。
- 生息地の条件 : 内湾最奥部の泥底にやや深く潜っており、地中が還元化している場合が多い。
- 個体数の動向 : 沖縄島中南部では 1990 年代に埋立てにより大幅に生息地が縮小し、特に与那原湾奥、糸満市真栄里、うるま市川田等では消滅した。
- 現在の生息状況 : 羽地内海、沖縄市泡瀬湾奥等では小規模ながら個体群が生残しており、個体数も少なくない。しかし、生息面積は羽地内海 0.42 km²、塩屋湾 0.25 km²、熱田干潟 0.33 km²、泡瀬湾奥南 0.23 km²、泡瀬湾奥北 0.1 km²、漫湖 0.1 km²、瀬長島周辺 0.34 km²、中城湾南部富祖崎 0.81 km²等で計 2.58 km²であり、その他小規模な生息地を併せても 10 km²に満たないと考えられる。
- 学術的意義・評価 : 沖縄島個体群は大陸遺存の可能性が示唆されていて、生物地理学的に極めて重要である。
- 生存に対する脅威 : 還元環境に生息することから底質の悪化に対しては比較的強いと考えられるが、最湾奥を生活圏とするため、埋立て等による生息場所の消失が最大の脅威となる。
- 特 記 事 項 : 古典的には沖縄県産オキシジミをダテオキシジミとして、区別して扱っており、本項でもその用法を踏襲した。*Cyclina sinensis* のタイプ産地は中国であるため、この学名はダテオキシジミに相当し、オキシジミではないと考えられる。
- 原 記 載 : Gmelin, J.F., 1791. *Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis.* Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel. Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, 3021–3910. (p. 3285, no. 91, as *Venus sinensis*. Type loc.: “in mari Sinam”)
- 参 考 文 献 : Ni, G., Li, Q., Kong, L. & Zheng, X., 2012. Phylogeography of bivalve *Cyclina sinensis*: testing the historical glaciations and changjiang river outflow hypotheses in northwestern Pacific. *PLoS One*, 7(11): e49487.
濱口昌巳・久保弘文・山下博由, 投稿予定. オキシジミ類の集団遺伝学的研究. *Fauna Ryukyuan*.

羽地内海の自然を守り育む会, 2008. 羽地内海うむしるむん図鑑 羽地内海の多様な生きもの
 人々の暮らし. 羽地内海の自然を守り育む会, 名護, 43 pp.
 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+104 pp.
 名和 純, 2005. オキシジミ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッド
 データおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇,
 347.
 山下博由, 2012. オキシジミ (沖縄島). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデー
 タブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 147.
 山下博由, 2014. 沖縄島のオキシジミ. “レッドデータブック2014ー日本の絶滅のおそれのある野
 生生物ー6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京,
 437.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **スタレハマグリ**
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マル
 スダレガイ科
 学名 : *Marcia japonica* (Gmelin, 1791)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
 形態 : ハマグリ型の二枚貝類で最大殻長約 55 mm. 殻表はやや光沢があり、色彩は内湾奥部泥底の型は黄
 土色、礫質砂底型は灰褐色に褐色斑や放射条をもつ。また泥底型は後端が突出し、前後に長い
 が、砂礫底型は後端があまり突出せず、前後に短い。両型は形態的に線引きが困難であるが、詳しくは
 分子遺伝学的手法による研究を待ちたい。
 近似種との区別 : 先島諸島に分布するヤエヤマスタレは形態的に類似し、別亜種か同種の可能性もあるが、沖縄島内
 湾奥泥地の黄土色型が出現しない。沖縄島と先島諸島の間には、様々な種で遺伝的分化が生じてい
 るため、ヤエヤマスタレの沖縄島産と先島諸島の両型も、遺伝的に異なる可能性がある。
 分布の概要 : 和歌山県那智勝浦町以南、奄美大島、沖縄島、中国南部、ニューカレドニア、インド。
 生態的特徴 : プランクトン等のろ過食性。
 生息地の条件 : 潮間帯上部～中部の干潟に生息し、垂直分布幅は狭い。
 個体数の動向 : 1980年代は那覇市公設市場でリュウキュウアサリ等と共に筥に盛られて大量に販売されていた。し
 かし1990年代に始まった沖縄島中南部の埋立てと共に、その光景は消え、多くの個体群が生息場所
 ごと消失した。現在、内湾域の各所で点々と生息し、個体数は少なくないが、生息地の消失、個体
 数減少は続いている。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 内湾潮間帯の優占種で、物質循環や水質浄化に大役を果たしていたと考えられる生態学的意義の大
 きい種である。
 生存に対する脅威 : 垂直分布の幅が狭いため、最大の脅威は埋立て。その他、都市排水等、極端な過剰栄養負荷の増加。
 原記載 : Gmelin, J.F., 1791. Caroli a Linné. Systema naturae per regna tria naturae, secundum classes, ordines, genera,
 species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Ed. 13, aucta, reformata. Impensis Georg. Emanuel.
 Beer, Lipsiae, Tome 1, Pars 6, 3021–3910. (p. 3279, no. 48, as *Venus japonica*. Type loc.: “---”)
 参考文献 : Chen, J., Li, Q., Kong, L. & Zheng, X., 2011. Molecular phylogeny of venus clams (Mollusca, Bivalvia,
 Veneridae) with emphasis on the systematic position of taxa along the coast of mainland China. *Zoologica
 Scripta*, 40: 260–271.
 木村昭一, 2012. スタレハマグリ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデー
 タブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 149.
 名和 純, 2005. スタレハマグリ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレ
 ッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那
 覇, 460-461.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : **ウスカガミ**
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マル
 スダレガイ科
 学名 : *Pardosinia amphidesmoides* (Reeve, 1850)
 カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし
 形態 : 殻長 30 mm 以下、やや角張った満月形の二枚貝類。殻はカガミガイ類としては薄く、白色で、褐色
 の放射彩や小班がある。殻頂は紫褐色を帯びる。
 近似種との区別 : 沖縄に本種と見間違える種は他に無い。
 分布の概要 : 紀伊半島～奄美大島、沖縄島、先島諸島、インド・太平洋 (ニューカレドニア～ケニア)。
 生態的特徴 : プランクトンを鰓でろ過摂食する。その他繁殖・初期生活史等、詳細は不明。
 生息地の条件 : 潮通しのよい内湾～やや外洋に面した潮間帯～水深 5 m のアマモ場と、その周辺の細砂～礫砂底に
 生息する。

個体数の動向 : かつては沖縄島中南部にも少なくなかったが、現在ほとんど認められず、北部でも水質の良い海域にのみ生息する。先島諸島では非常に稀。

現在の生息状況 : 2000年頃まで、名護湾や恩納村屋嘉田水路の潮間帯から水深5m付近までの細砂底で死殻が散見され、沖縄市泡瀬では2014年台風後に合弁死殻を確認した。その他では2005年以降、産出記録がほとんど無い。2015年久米島、2016年宮古島での調査でも確認されていないが、元々、希少種であるため、沖縄島以外での減少傾向は不明。

学術的意義・評価 : カガミガイ類は地理的分化が著しいグループで、生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 陸土の大量流入、富栄養化による底質悪化。

特記事項 : 不詳種でクチベニカガミ *Dosinia radiata* (Reeve, 1850) が本県から記録されているが、本種よりもむしろサザメガイに近い種と考えられる。

原記載 : Reeve, L.A., 1850. Monograph of the genus *Artemis*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscos Animals, 6: pls 1-10. (sp. 48, pl. 8, fig. 48a-b, as *Artemis amphidesmoides*. Type loc.: "Island of Burias, Philippines (in coarse sand at the depth of six fathoms)")

参考文献 : 平瀬信太郎, 1934. 天然色写真 日本貝類図譜. 松島三松堂, 東京, 217 pp., 129 pls.
Lamprell, K. & Whitehead, T., 1992. Bivalves of Australia, Vol. 1. Crawford House Press, Bathurst, xiii+182 pp.
名和 純, 2005. ウスカガミ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 397.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ユウカゲハマグリ

分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科

学名 : *Pitar citrinus* (Lamarck, 1818)

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 最大殻長約 50 mm の丸みを帯びた膨らみの強い二枚貝類。貝殻前部は黄白色に、後部淡赤褐色に染分けられる個体が多く、放射彩を飾る個体もある。

近似種との区別 : オミナエシよりも貝殻の丸みが強く、生息場所も隣接するが重複しない。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島、台湾、フィリピン、インドネシア、オーストラリア。

生態的特徴 : プランクトン等をろ過して摂食する。

生息地の条件 : 中潮線のホソバナミノハナ等のアマモ場とそれに隣接する砂泥～砂礫底に浅く埋在する。

個体数の動向 : 沖縄島では中南部地区の埋立てが本格化する 1980 年代後半から激減した。オミナエシ属で最も浅い場所に生息するため、陸域からの影響を最も被りやすく、沖縄島南部や羽地内海等、かつての多産地でも、大きく減少している。

現在の生息状況 : 石垣島では 2010 年以降、中城湾北部では 2014 年以降も少なからず見られる。しかしながら、1990 年前半まで多産した沖縄島南部の糸満市、中城湾南部、羽地内海では、依然、生存個体数が非常に少ない状況が継続している。

学術的意義・評価 : 本種はかつての沖縄県沿岸海域の健全な干潟上部において、高密度に生息していた二枚貝類の一つで、アマモ場や内湾における物質循環や水質浄化に大きな役割を担っていた生態学的重要種である。

生存に対する脅威 : 垂直分布の幅が狭いため、最大の脅威は埋立て。極端な都市排水等、過剰栄養負荷の増加。

原記載 : Lamarck, J.B.P.A. de M. de, 1818. Histoire naturelle des animaux sans vertèbres, présentant les caractères généraux et particuliers de ces animaux, leur distribution, leurs classes, leurs familles, leurs genres, et la citation des principales espèces qui s'y rapportent; précédée d'une introduction offrant la détermination des caractères essentiels de l'animal, sa distinction du végétal et des autres corps naturels, enfin, l'exposition des principes fondamentaux de la zoologie, Tome 5. Chez Deterville et Verdière, Paris, 612 pp. (p. 567, no. 24, as *Cytherea citrina*. Type loc.: "les mers de la Nouvelle-Hollande")

参考文献 : 久保弘文, 2012. ユウカゲハマグリ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 150.
久保弘文, 2014. ユウカゲハマグリ. "レッドデータブック 2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 407.
名和 純, 2005. ユウカゲハマグリ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 460.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : イオウハマグリ

分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科

学名 : *Pitar sulfureus* Pilsbry, 1904

カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻長 3 cm。膨らみが強く、黄白色。生時は殻表に砂粒や泥を付着させている。殻の内面は薄い橙色。
 分布の概要 : 房総・男鹿半島以南、奄美大島、沖縄島、西表島、インド・太平洋。
 生態的特徴 : 内湾干潟の砂泥底の表面付近に生息する。泥分が多い環境で見つかるが、密度は高くない。
 生息地の条件 : 内湾干潟の砂泥底。主に潮間帯中部に分布。
 個体数の動向 : 沖縄島の産地では、周辺環境の悪化により減少傾向にある。
 現在の生息状況 : 沖縄島の産地では、密度は低い。西表島に関しては現況不明。干潟の浅い場所に生息し、河川からの赤土の流入などの影響を受けやすい種である。
 生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。
 原 記 載 : Pilsbry, H.A., 1904. New Japanese marine Mollusca: Pelecypoda. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 56: 550-561, pls.39-41. (pp.553-554, pl.39, figs.7-9, as *Pitar sulfurea*. Type loc.: "Fukura, Awaji")
 参 考 文 献 : 木村昭一, 2012. イオウハマグリ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会(編), 東海大学出版会, 秦野, 152.
 木村昭一, 2014. イオウハマグリ. "レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類", 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), ぎょうせい, 東京, 407.
 名和 純, 2005. イオウハマグリ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編)—レッドデータおきなわ—", 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 460.
 執 筆 者 名 : 小澤宏之

和 名 : トモシラオガイ
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科
 学 名 : *Redicirce sulcata* (Gray, 1838)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻は本科中、小型で膨らみがあり、薄質、丸みを帯びた亜三角形、殻表は明瞭な成長輪肋を多数刻み、殻色は白地に黒褐色～褐色の模様を散らす。殻長 20 mm 内外。
 近似種との区別 : シラオガイおよびアツシラオガイは遙かに大型化することで区別され、同サイズの幼貝では殻が扁平であることで区別される。
 分布の概要 : 駿河湾以南、奄美大島、沖縄島および周辺離島、先島諸島、インド・太平洋～紅海まで。
 生態的特徴 : 砂底に浅く埋在するろ過食性種であるが、その他、繁殖等の詳しい生態は不明。
 生息地の条件 : やや外洋に面した水深 1～10 m 付近の潮通しの良い細砂底～砂底に生息する。
 個体数の動向 : 1990 年代前半までは金武湾口(うるま市平安座地先)や中城湾(浜比嘉島や泡瀬沖)等で場所によっては多産したが、現在、泥質化や航路浚渫による底質攪乱で減少した。
 現在の生息状況 : 2015 年、宮古島与那覇前浜～来間島周辺のウミヒルモ帯水深 7 m 付近にて少ないながら見つかり、その他、石垣島北部水深 10 m 付近からも確認された。沖縄島の個体群は大きく減少していることは明らかであり、先島諸島も含め、今後、モニタリングが必要。
 学術的意義・評価 : 沖縄島の健全な環境が維持された亜潮間帯の砂浜域は、本種をはじめとするろ過食性小型二枚貝類の多様性が高く、自然度の評価に役立つなど生態学的意義が大きい。
 生存に対する脅威 : 泥質化や富栄養化などによる底質悪化。浚渫等による内湾潮下帯の底質攪乱。
 特 記 事 項 : 紅海からスエズ運河を経由して、地中海へ分布を拡大した移入種の一つとされた。
 原 記 載 : Gray, J.E., 1838. Catalogue of the species of the genus *Cytherea*, of Lamarck, with the description of some new genera and species. The Analyst; a Quarterly Journal of Science, Literature, Natural History, and the Fine Arts, 8(24): 302–309. (pp. 307–308, as *Circe sulcata*. Type loc. not designated)
 参 考 文 献 : Huber, M., 2010. Compendium of Bivalves. A Full-color Guide to 3,300 of the World's Marine Bivalves. A Status on Bivalvia after 250 Years of Research. ConchBooks, Hackenheim, 901 pp.
 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
 Miemis, H., 2004. New data concerning the presence of Lessepsian and other Indo-Pacific migrants among the molluscs in the Mediterranean Sea with emphasize on the situation in Israel. Turkish Journal of Aquatic Life, 2(2): 117–131.
 執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : オウギカノコアサリ
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 マルスダレガイ上科 マルスダレガイ科
 学 名 : *Veremolpa levicostata* (Kuroda, 1960)
 カ テ ゴ リ ー : 準絶滅危惧 (NT) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻は本科中、小型で、横長のやや角張った楕円形、殻表は多数の明瞭な放射肋があり、成長輪肋と交差して、弱い鬚状となる。殻色は淡黄白色の地に細かな灰褐色斑を散在させ、その濃淡などは個体変異で様々である。殻長 16 mm 以下。

- 近似種との区別 : 本種と同様、砂底に分布するカノコアサリは後背縁に鱗片状突起を有すること、チリメンカノコアサリはより膨らみが強く、丸みを帯びた殻形と、より放射筋が弱く、格子状の彫刻を呈することで区別される。
- 分布の概要 : 房総半島以南の外浜及び潮通しの良い内湾の砂浜域、奄美大島、沖縄島、インドネシア。
- 生態的特徴 : 砂底に浅く埋るる過食性種であるが、その他、繁殖等の詳しい生態は不明。
- 生息地の条件 : 内湾～外浜の低潮線～水深 10 m 付近の細砂～細砂泥底に生息する。
- 個体数の動向 : 1980 年代後半～1990 年代前半までは名護湾や羽地外海、金武湾でチリメンカノコアサリと同所的に比較的多くの個体が見受けられたが、1990 年以降、泥質化や航路浚渫等で上部浅海域の環境が悪化して、個体数が大きく減少した。
- 現在の生息状況 : 2014 年の名護湾での潜水調査では著しく生息環境が悪化しており、全く確認できなかった。大浦湾には健全な個体群がある。
- 学術的意義・評価 : 沖縄島の健全な環境が維持された湾域は潮通しの良い細砂～粗砂域が広がっていて、本種をはじめとする過食性小型二枚貝類の多様性が高く、生態学的意義が大きい。
- 生存に対する脅威 : 清浄な砂底域における泥質化や富栄養化などによる底質悪化が脅威となる。
- 特記事項 : 沖縄をタイプ産地とし、国外での産出記録がほとんど無い。なお種小名を「*laevicostata*」とするのは誤綴。
- 原 記 載 : 黒田徳米, 1960. 沖縄群島産貝類目録 (頭足類を除く). 琉球大学教務部普及課, 那覇, iv+104 pp. (pp. 82-83, as *Timoclea levicostata*. Type loc.: “奄美大島”)
- 参 考 文 献 : 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
倉持卓司, 2009. 三浦半島より採集されたオウギカノコアサリ (二枚貝綱: マルスダレガイ科). 神奈川自然誌資料, (30): 49-50.
- 執 筆 者 名 : 久保弘文

5) 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)

- 和 名 : 沖縄島のゴマオカタニシ
- 分 類 : 腹足綱 アマオブネ型亜綱 Cycloneritimorpha 目 ゴマオカタニシ上科 ゴマオカタニシ科
- 学 名 : *Georissa japonica* Pilsbry, 1900
- カ テ ゴ リ ー : 絶滅のおそれのある地域個体群(沖縄島) (LP) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)
- 図 の 解 説 : p. 52. A: 糸満市摩文仁 (標本: 早瀬善正). B: 恩納村. 撮影: 久保弘文.
- 形 態 : 殻は微小 (殻長 1.7~2.2 mm, 殻径 1.3~1.7 mm 程度) で淡赤色。タニシ形で縫合は深く、明瞭な螺肋を有す。蓋は石灰質で、薄く硬い半月型。
- 近似種との区別 : フクダゴマオカタニシの殻表の彫刻は繊細な螺条となる。リュウキュウゴマオカタニシは、より円みを帯びた形状と繊細な螺条により本種と区別できる。
- 分布の概要 : 本州 (関東以南)、四国、九州 (各島嶼を含む)、奄美諸島、沖縄県下の各島嶼に分布。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 沖縄島ではフクダゴマオカタニシ、八重山ではリュウキュウゴマオカタニシが同所に生息。
- 生態的特徴 : 石灰岩地の石灰岩壁や礫に付着するほか、林床の落葉下にも生息する。
- 生息地の条件 : 沖縄県下では、石灰岩地の自然林環境が不可欠である。
- 個体数の動向 : 沖縄島では元々稀産である。与那国島、波照間島などの八重山列島には多い。
- 現在の生息状況 : 乾燥化の著しい与那国島でも多数確認される。ただし、沖縄島では、稀少である。
- 学術的意義・評価 : 本土個体群と遺伝的に異なる可能性がある。特に沖縄島個体群は稀少で、保護の必要がある。
- 生存に対する脅威 : 本土個体群は多数個体が生息する場合が殆どであるが、沖縄島では生息数がきわめて少なく、開発の影響が懸念される。
- 特記事項 : 分類の再検討がされ、沖縄県の本種は、九州以北産とは別種の可能性がある (狩野・福森, 2016)。八重山諸島などではさほど危機的状況になく、このランク (LP) は、沖縄島個体群に該当する。なお、本個体群は準絶滅危惧 (NT) に相当する。
- 原 記 載 : Pilsbry, H.A., 1900. Notices of new Japanese land snails. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 52: 381-384. (p. 384, as *Georissa japonica*, Type loc.: “Kashima, Harima”)
- 参 考 文 献 : 狩野泰則・福森啓晶, 2016. ゴマオカタニシ類の進化と邦産種の多様性. 日本貝類学会平成28年度大会 (習志野) 研究発表要旨集, 日本貝類学会, 東京, 39.
久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
- 執 筆 者 名 : 早瀬善正

6) 情報不足 (DD)

和名 : ヒメケハダヒザラガイ
 分類 : 多板綱 新ヒザラガイ亜綱 ヒザラガイ目 ケハダヒザラガイ亜目 ケハダヒザラガイ上科 ケハダヒザラガイ科
 学名 : *Acanthochitona achates* (Gould, 1859)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 平たい 8 枚の殻を持つヒザラガイ類で、9 対の棘の束が体の左右に並んで、毛が生えたように見える。体長 2 cm 程度。
 分布の概要 : 北海道南部から温帯域に広く分布し、沖縄県が南限とされるが、調査事例が少なく、詳細は不明。
 生態的特徴 : 内湾の岩盤や転石に付着し、表面の藻類を摂食する。
 生息地の条件 : 内湾～リーフの発達の良い転石海岸まで幅広く見られる。
 個体数の動向 : 調査事例が少なく、現状不明。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : 日本本土の普通種であるが、遺存的な個体群の可能性はある。しかし、ランク選定に必要な遺伝的及び生態的情報が不足しており、情報不足 (DD) とした。
 生存に対する脅威 : 内湾潮間帯の個体群は、埋立てによる生息場所消失が最大の減少要因。
 原記載 : Gould, A.A., 1859. Descriptions of shells, collected by the North Pacific Exploring Expedition. Proceedings of the Boston Society of Natural History, 7: 161-166. (p. 165, as *Chiton (Acanthochaetes) achates*. Type loc.: "Kikaia and Hakodadi Bay")
 参考文献 : 名和 純, 2005. ヒメケハダヒザラガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 400-401.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : ウニヒザラガイ
 分類 : 多板綱 新ヒザラガイ亜綱 ヒザラガイ目 クサズリガイ亜目 クサズリガイ上科 クサズリガイ科
 学名 : *Acanthopleura spinosa* (Bruguère, 1792)
 方言名 : クジマ (ヒザラガイ類の総称)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻は漆黒色で光沢があり、肉帯上に多数の顕著な棘状剛毛が発達する。体長 100 mm に達する。
 近似種との区別 : 漆黒色の光沢のある殻と顕著な棘状剛毛により、他種とは明瞭に区別できる。
 分布の概要 : 宮古島、伊良部島、与那国島、魚釣島。
 近縁な種及び群との分布状況の比較 : オニヒザラガイ・リュウキュウヒザラガイは沖縄県全域の岩礁域全般に分布するが、本種は宮古島、伊良部島、与那国島、魚釣島等の海蝕崖の発達する限られた場所に生息する。
 生態的特徴 : 鉄分を高密度に含有する強い歯舌を持ち、岩盤上の藻類を摂食する。
 生息地の条件 : 外洋に面した波当たりの強い岩礁潮間帯で、海蝕崖の割れ目や洞窟に生息する。夜行性で、深夜に表層へ這い出し、夜明け方に岩盤の窪みの奥へ巧妙に潜り、日中に姿を見せることは少ない。
 個体数の動向 : 宮古島の一部の海蝕洞では大型個体が全く見られなくなったが、海蝕洞以外にも生息場所は周辺に広がっている。
 現在の生息状況 : 宮古島では市街地付近の一部の海岸でも比較的普通に観察される。
 学術的意義・評価 : 沖縄島や石垣島、西表島等の主要な島で分布が欠落しており、生物地理学的に重要。
 生存に対する脅威 : 大型で棘が発達する形態から収集目的での乱獲が危惧される。
 特記事項 : 準絶滅危惧 (NT) の要件に対して、具体的な情報が乏しく、現状は情報不足 (DD) とする。
 原記載 : Bruguère, J.G., 1792. Description de deux coquilles, des genres de l'Oscabrion et de la Pourpre. Journal d'histoire naturelle, 1: 20-33, pl. 2. (pp. 25-28, pl. 2, figs 1-2, as *Chiton spinosus*. Type loc.: "inconnue")
 参考文献 : 藤岡義三・黒住耐二, 1980. 尖閣列島の海産貝類. 沖縄生物学会誌, (18): 51-58.
 久保弘文, 2005. ウニヒザラガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編)ーレッドデータおきなわー”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 463-464.
 齋藤 寛, 2000. 多板綱. “日本近海産貝類図鑑”, 奥谷喬司 (編), 東海大学出版会, 東京, 4-23.
 Sasaki, M., Hamaguchi, M. & Nishihama, S., 2006. Distribution of *Acanthopleura spinosa* (Polyplacophora: Chitonidae) on Miyako and Irabu islands, Okinawa. Venus, 65: 165-168.

執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

和名 : ウロコイシマキ
 分類 : 腹足綱 アマオブネ型亜綱 Cycloneritimorpha 目 アマオブネ上科 アマオブネ科
 学名 : *Clithon squarrosus* (Récluz, 1844)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は中型で、亜球形、殻色は濃褐色の地に緑灰色の横帯をめぐらす。殻表は細かい凹凸が多数あり、殻皮が厚く被覆する。殻径約 10~20 mm。蓋は灰色で裏側の中央が黒ずむ。

近似種との区別 : 近似種イガカノコ、イシマキガイとは殻表にある多数の凹凸の特徴により区別される。

分布の概要 : 沖縄島、石垣島、西表島、フィリピン。

生態的特徴 : 岩盤や貝殻上にドーム上の卵嚢を産み付け、卵嚢からベリジャー幼生が浮出し、海へ下って、成長し、再び河川を遡上すると考えられている。

生息地の条件 : 岩礫が点在し、流れがある河川の中流。

個体数の動向 : 汽水性アマオブネガイ類の中で産出状況が最も少ない種であるが、両側回遊性で、海流伝播により、広範に分散しており、時に都市部の河川でも出現することがある。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 両側回遊性で生態学的研究の解明に重要な研究材料である。

生存に対する脅威 : ダム取水や河口閉塞など渇水や遡上阻止などの要因となる人為的環境改変。

特記事項 : 個体数が少ない希少種であるが、近年沖縄島北部でも確認され、分布拡大の様相を示唆する一方、消長も激しいため、情報不足 (DD) とした。なお本種の学名種小名は従来「*squarrosus*」とされることが多かったが、属名 *Clithon* の性は中性であるので、種小名の語尾は *-um* とすべきである。また記載年は 1843 でなく 1844 が正しい。

原記載 : Récluz, M.C.A., 1844. Descriptions of new species of *Nerites*, collected by Mr. Cuming in the Philippine Islands. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1843: 168-176. (p. 174, no. 16, as *Nerita squarrosa*. Type loc.: “Jimamailan, isle of Negros: on stones in a mountain-stream”)

参考文献 : 久保弘文, 2002. 沖縄県産陸水性アマオブネガイ類の日本新記録2種. ちりぼたん, 33(1-4): 33-39.
久保弘文, 2005. ウロコイシマキ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) — レッドデータおきなわ —”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 465.

執筆者名 : 久保弘文・福田 宏

和名 : シリコケゴマガイ

分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 原始紐舌類 ヤマタニシ上科 ゴマガイ科

学名 : *Diplommatina (Sinica) ventriosa* Pilsbry & Hirase, 1904

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻は日本産ゴマガイ類としては中型で、殻長 2.8 mm、殻径 1.6 mm。膨れた紡錐形で縫合は深く、体層は次体層よりかなり小さい。くすんだ赤褐色。螺層には不明瞭な細かい成長肋を持つ。殻口は円形、肥厚し反転する。緊線は外唇上端付近にあり、腔襞は長く、体層径の 1/3 ほどになる。

近似種との区別 : 同じく久米島から記録のあるリュウキュウゴマガイは小型であることで、クメジマゴマガイは螺塔が高く、殻口が大きいことで区別される。

分布の概要 : 久米島産として 20 世紀初頭に記録 (原記載) があるのみである。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 久米島からは本種のほか、リュウキュウゴマガイとクメジマゴマガイが記録されている。

生態的特徴 : 不明。

生息地の条件 : 不明。

個体数の動向 : 不明。

現在の生息状況 : 不明。

学術的意義・評価 : 久米島産として記載されたが、原記載とタイプ標本以外一切の記録がなく、正体不明。まずは再発見と実態の把握が必要である。

生存に対する脅威 : 不明。他のゴマガイ類の生息から考えれば、森林の減少や乾燥化が脅威として挙げられる。

原記載 : Pilsbry, H. A. & Hirase, Y., 1904. Descriptions of new land snails of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 56: 616-638. (pp.622-623, as *Diplommatina (Sinica) ventriosa*. Type loc.: “Kumejima, Riukiu”)

参考文献 : 安藤保二, 1972. ゴマガイ銘々伝 (第6回). 貝なかま, 5(4): 1-5.
Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
黒田徳米, 1963. 日本非海産貝類目録. 日本貝類学会, 東京, vi+71pp.
品川和久, 1978. 沖縄県久米島における陸貝採集記録. かいなかま, 12(2): 4-14.

執筆者名 : 亀田勇一・黒住耐二* *前回改訂版 (2005) における黒住による記載内容を一部引用した。

和名 : スエヒロヘナタリ

分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 オニノツノガイ上科 キバウミニナ科

学名 : *Pirenella microptera* (Kiener, 1841)

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 殻長 24.9~53.8 mm。殻はヘナタリに似るがより細く、螺層の 3 本の螺肋のうち縫合のすぐ上のも

- 近似種との区別 : のが最も太い。縦肋は強い。殻口外唇の後端が翼状に著しく突出する。上記参照。また彫刻はカワアイやヌノメヘナタリに似るが、それらの種は本種ほど殻口後端が突出しない。
- 分布の概要 : 西表島、中国南部、ベトナム、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : ヘナタリ、ヤエヤマヘナタリの項も参照。ヌノメヘナタリは伊勢湾、羊角湾、韓国(順天湾)、中国に分布する。
- 生態的特徴 : 未詳。
- 生息地の条件 : マングローブ周辺の砂泥底・軟泥底表層。国外でも、同属の他種と比べて少ない。
- 個体数の動向 : 近年の確実な記録は西表島で一例あるのみ (Sälgeback & Savazzi, 2006: fig. 11N-P)。その個体も化石である可能性が否定できない。
- 現在の生息状況 : 未詳。現生個体は存在しない可能性もあり、調査が必要。
- 学術的意義・評価 : 西表島産が現生個体とすれば、本種の現在の世界的北限かつ日本唯一の産地である。
- 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立等の開発、マングローブ破壊、水質・土壌汚染。
- 特記事項 : 波部・小菅 (1966) は本種をヘナタリの「型」としたが、別種である。
- 原記載 : Kiener, L.-C., 1841-1842. Genre Cérîte (*Cerithium*, Adanson). "Spécies Général et Iconographie des Coquilles Vivantes, Comprenant la Collection du Muséum d'Histoire naturelle de Paris, la Collection Lamarck, celle du Prince Masséna (appartenant maintenant a M. B. Delessert) et les Découvertes Récentes des Voyageurs", Vol. 5, Kiener, L.-C. (ed.), J.-B. Baillièrre et Fils, Paris, 1-104. (pp. 93-94, pl. 30, fig. 3, as *Cerithium microptera*. Type loc.: "l'océan Indien")
- 参考文献 : 波部忠重・小菅貞男, 1966. 原色世界貝類図鑑 (II)《熱帯太平洋編》. 保育社, 大阪, viii+194 pp., 68 pls.
小澤智生, 2017. 最近なされたフトヘナタリ科 (新生腹足亜綱: オニノツノガイ上科) の分類学的改定-特に日本近海産の構成種の改定に関連して. ちりぼたん, 印刷中。
Ozawa, T., Yin, W., Fu, C., Claremont, M., Smith, L. & Reid, D.G., 2015. Allopatry and overlap in a clade of snails from mangroves and mud flats in the Indo-West Pacific and Mediterranean (Gastropoda: Potamididae: *Cerithideopsilla*). Biological Journal of the Linnean Society, 114: 212-228.
Reid, D.G. & Ozawa, T., 2016. The genus *Pirenella* Gray, 1847 (= *Cerithideopsilla* Thiele, 1929) (Gastropoda: Potamididae) in the Indo-West Pacific region and Mediterranean Sea. Zootaxa, 4076: 1-91.
Sälgeback, J. & Savazzi, E., 2006. Constructional morphology of cerithiform gastropods. Paleontological Research, 10: 233-259.

執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : ウズツボ
分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 クビキレガイ上科 フロリダツボ科
学名 : *Dolicrossea* sp.
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

図の解説 : p. 52. 宮古島狩俣 撮影 : 福田 宏。
形態 : 殻長 1.8 mm、殻径 1.5 mm。殻は独楽形で薄く半透明、殻表に微細だが明瞭な螺肋を多数巡らす。顕著な縦肋はなく、不明瞭な成長脈を刻むのみ。殻口外唇は肥厚しない。臍孔は広く開き、臍域は強い螺状陵角で囲まれ、その内側にもう 1 本の太い肋が走る。蓋は革質、少旋型。頭触角は太く棍棒状。外套触角は明瞭。足の後端中央が大きく彎入し、その背面から長い後足触角が生じて、先端は銀杏の葉に似た形に広がる。それらの触角すべてが顕著な剛毛を持つ。

近似種との区別 : ウズツボ属 *Dolicrossea* Iredale, 1924 はほとんど研究例がなく、近縁種も未詳。下記の各産地の個体には複数種が混在する可能性もあるが、比較が不十分のためここでは暫定的に同種とみなす。

分布の概要 : 伊豆下田、八丈島、能登増穂ヶ浦、瀬戸内海 (香川、広島、山口各県)、五島列島 (宇久島)、小笠原諸島 (父島)、宮古島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 未詳。

生態的特徴 : 未詳。

生息地の条件 : 内湾湾口の平坦な岩礫地中・低潮帯において、転石下の還元的環境にナギツボ・サザナミツボ等と共に見られる。砂浜で打上死殻が得られ、潮下帯にも産する可能性が高い。

個体数の動向 : 沖縄県では宮古島狩俣で死殻 1 個が確認されたのみ。

現在の生息状況 : 上記死殻が得られた場所の附近や、他島の類似した環境に個体群が現存する可能性がある。

学術的意義・評価 : この属は独特の形態を示し、系統的位置の詳細な検討が必要。軟体の内部形態の把握や分子系統解析は、いまだなされたことがない。

生存に対する脅威 : 護岸・埋立・海底浚渫等海岸環境の改変、水質汚濁。

特記事項 : 従来本種は *Crossea bellula* A. Adams, 1865 に同定されてきたが、*C. bellula* のシタイプ (パリ自然史博物館所蔵) を見ると本種とは異なると考えられるため、本種に対してその学名を用いるのは誤同定である。*C. bellula* は本種と殻の形態が酷似するものの、系統的に全く異なる一群に属す。古腹足亜綱の一員で上科の所属が未詳の *Crosseolidae* Hickman, 2013 がそれで、この科はワタゾコシタダミ属 *Conradia* A. Adams, 1860, ツキヨシタダミ属 *Crossea* A. Adams, 1865, *Crosseola* Iredale, 1924 などの属を含む (Hickman, 2013)。ウズツボ属と *Crosseolidae* は亜綱の所属すら異なるにもかかわらず、殻の形態が驚くほど似ているが、辛うじて以下の 2 点が異なる : 1) ウズツボ属の殻は薄く半透明の硝子質であるが、*Crosseolidae* では比較的厚く、不透明で乳白色を呈する ; 2) ウズツボ属の殻表

の彫刻は螺肋だけが目立ち、顕著な縦肋を欠き、殻口外唇も肥厚は生じないが、Crosseolidae では螺肋に加えて明瞭な縦肋を持つ種が多く、特に、殻口外唇が縦張肋状に著しく肥厚する。沖縄県では、Crosseolidae に属すと考えられる未詳種の死殻 1 個体が恩納村前兼久沖リーフスロープ（水深 7 m）で採集されている（久保，未発表）。その個体は殻長 1.2 mm、殻径 0.9 mm で、殻表は螺肋と縦肋が交わって格子状となり、殻口外唇外側は太い縦張肋状に肥厚し、螺肋はその上に載る。胎殻表面には顆粒状の彫刻がある。これに対し、ウズツボの胎殻の表面は平滑である（Fukuda, 1993: 72, pl. 8, fig. 94）。

- 参 考 文 献 : Fukuda, H., 1993. Marine Gastropoda (Mollusca) of the Ogasawara (Bonin) Islands. Part 1: Archaeogastropoda and Neotaenioglossa. Ogasawara Research, (19): 1-86.
 福田 宏, 2001. 内湾の貝類「最後の楽園」周防灘—そして私たちがなすべきこと. 日本ベントス学会誌, 56: 33-41.
 福田 宏, 2012. ウズツボ, “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 41.
 Hickman, C.S., 2013. Crosseolidae, a new family of skeneiform microgastropods and progress toward definition of monophyletic Skeneidae. American Malacological Bulletin, 31: 1-16.
 Muséum National d'Histoire Naturelle, Paris (France), 2016. Collection: Molluscs (IM). Set of 2 specimens MNHN-IM-2000-31037. <https://science.mnhn.fr/institution/mnhn/collection/im/item/2000-31037>

執 筆 者 名 : 福田 宏・久保弘文

和 名 : **イワカワトキワガイ**
 分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 タマキビ型亜目 ヤツシロガイ上科 ヤツシロガイ科

学 名 : *Malea pomum* (Linnaeus, 1758)
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

形 態 : 殻は本科中、中型で、卵球形、殻表は光沢が強く、多数の螺溝を刻み、淡褐色の地に白色の斑を散在させる。殻口はやや広く、外唇内側に強い襞を有す。殻長約 50~80 mm。蓋はない。

近似種との区別 : 沖縄県産の本科中、殻口内唇に襞をもつ種は本種のみ。

分布の概要 : 沖縄県全域（大東諸島を除く）。

生態的特徴 : 昼間は砂中に埋れし、夜行性で、ナマコ類を専食する。

生息地の条件 : 潮通しの良い清浄な砂底域を好むが、単なる砂地ではなく、栄養の多い豊かなアマモ場等と隣接する環境を生息条件とし、波打ち際にも出現する。

個体数の動向 : 個体数の減少は埋立て等大規模な生息場所消失から明らかであるが、非常に浮遊期間が長く分散能力が高い種であり、評価が難しい。

現在の生息状況 : 沖縄島（恩納村）や周辺離島など、比較的清浄な砂浜環境では少ないながら確認されるが、底質悪化の進行している沖縄島中南部、北部東海岸の一部では確認困難な状況にある。

学術的意義・評価 : 浮遊幼生（ベリジャー）が殻長 5 mm 程度まで大成し、長期浮遊能力を保有すると推測されるが、実際の幼生生態や着底条件などは全く判っていない。

生存に対する脅威 : 埋立て、底質悪化。

特 記 事 項 : 本種は遠隔水域からの新規加入が十分期待でき、種として絶滅リスクは非常に低いが、健全な加入・育成に必要な生育環境の悪化や消失が進行している現状がある。これらをいかに評価するか検討を要する。

原 記 載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cumcharacteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 735, no. 379, as *Buccinum pomum*. Type loc.: “. . .”)

- 参 考 文 献 : 久保弘文, 2005. イワカワトキワガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）—レッドデータおきなわ—”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 422-423.
 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.

執 筆 者 名 : 久保弘文

和 名 : **オリレヨフバイ**
 分 類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 エゾバイ上科 オリレヨフバイ科

学 名 : *Nassarius arcularia* (Linnaeus, 1758)
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形 態 : 殻は本科中、やや大型、角張った卵球形で、縫合は深く溝状となる（和名「折り入れ」の語源）。肩部に強い縦肋を刻み、殻口内唇滑層が広く張り出して肥厚する。殻色は乳白色で縦肋間が暗色に染まる。殻長約 25 mm。

近似種との区別 : 近似種イボヨフバイはより縦長で、縫合下が等間隔に褐色に染まり、縦肋が弱い。

分布の概要 : 国内では他に奄美大島、県内では石垣島のみ、インド・太平洋。

生態的特徴 : 索餌や潮汐等条件によって活発に砂底を匍匐する。腐肉食性であるが、比較的新鮮な餌を好む。

〈貝類〉

- 生息地の条件 : 潮通しのよい中～低潮線のアマモ場に隣接する細砂底に浅く潜る。垂直分布の幅が狭く、潮間帯中下部にのみ見られる。
- 個体数の動向 : 石垣島では2007年～2012年まで名蔵湾・川平湾等の狭い範囲に生息が確認されてきた。この間名蔵湾では幼貝が少なくとも3年連続して確認された。
- 現在の生息状況 : 川平湾では2013年以降、出現していない。名蔵湾では2014年の調査で単一個体が確認されたが、その後、確認できていない。
- 学術的意義・評価 : ムシロガイ類は熱帯浅海域に多数の種が適応放散し、進化生物学的に意義深い。
- 生存に対する脅威 : 埋立て。
- 特記事項 : 沖縄島では近年全く確認されていない一方で、奄美大島で小規模な個体群の記録がある等、分布様式が特異で、海流伝播の可能性もあるため、長期的調査が必要である。
- 原記載 : Linnaeus, C. von, 1758. Systema naturae per regne tria naturae, secundum classes, ordines, genera, species, cum characteribus, differentiis, synonymis, locis. Editio decima reformata. Tome 1, Animalia. Impensis Direct. Laurentii Salvii, Holmiae, 823 pp. (p. 737, no. 395, as *Buccinum arcularia*. Type loc.: “. . .”)
- 参考文献 : 久保弘文, 2005. オリイレヨフバイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 473.
- 久保弘文, 2012. オリイレヨフバイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 68.
- 久保弘文, 2014. オリイレヨフバイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 302.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : キツネノムシロ
- 分類 : 腹足綱 新生腹足亜綱 吸腔上目 高腹足目 新腹足亜目 エゾバイ上科 オリイレヨフバイ科
- 学名 : *Niotha venusta* (Dunker, 1847)
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)
- 形態 : 本科中やや大型 (約 2 cm)、殻は丸みを帯びた紡錘形で、殻長はやや尖る。殻表には多数の螺溝と縦肋をもち、縫合部ではやや波打つ。殻口は滑層が発達し、外唇内側に瘤が5～9あり、うち1つはやや強い。内唇上部にも瘤が1つある。殻色は灰褐色で不明瞭な白帯を1本巡らす。
- 近似種との区別 : カキノテムシロは一回り小さく、殻表の彫刻も異なる。
- 分布の概要 : 先島諸島、台湾、フィリピン、インドネシア、アンダマン諸島、バヌアツ。
- 生態的特徴 : 肉食性で、弱った動物や死後間もない腐肉を摂食する。
- 生息地の条件 : 河口が隣接する開放性干潟の、汀線付近の砂泥底に生息するが、個体数は少ない。
- 個体数の動向 : 南方系種で、2002～2007年の6年間、石垣島宮良川河口で観察した結果、少数ながら新規加入個体が毎年、継続して観察されたが、2010年以降のモニタリングでは全く確認されていない。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 先島諸島は本種の分布北限にあたり、生物地理学的意義がある。
- 生存に対する脅威 : 垂直分布の幅が狭く、最も陸域に近い生息場所であり、海岸改変、埋立て等の影響を被りやすい。
- 特記事項 : 宮良川河口域において、とりわけ大きな環境攪乱が見受けられない状況下で、近年、出現が途絶えており、南方からの不安定な幼生到達による消長の可能性も否定できず、情報不足 (DD) に留めた。
- 原記載 : Dunker, G., 1847. Diagnoses Buccinorum quorundam novorum. Zeitschrift für Malakozoologie, 4: 59–64. (p. 59, no. 1, as *Buccinum venustum*. Type loc.: “ignota”)
- 参考文献 : 久保弘文, 2012. キツネノムシロ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 69.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : ヒメヒラマキミズマイマイ
- 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 水棲目 ヒラマキガイ上科 ヒラマキガイ科
- 学名 : *Gyraulus* sp.
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)
- 図の解説 : p. 52. 西表島古見. 撮影: 齊藤 匠.
- 形態 : 殻径 2 mm 前後。殻は薄い円盤状で、殻頂はわずかに窪む。螺管は殻口部で広がらず、端正に巻く。殻質は極めて薄く、透明感のある乳白色であるが、しばしばサビ状の付着物に覆われる。
- 近似種との区別 : 形態が類似するヒラマキミズマイマイとは、より小型で殻径に対して殻長が小さいこと、螺管の巻きが密なことで識別できる。
- 分布の概要 : 青森県以南の本州、四国、九州、伊豆諸島八丈島、小笠原諸島父島、宮古島 (死殻)、石垣島、西表島。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁の別種と思われる個体が北海道から得られている。
- 生態的特徴 : 詳細は不明であるが直達発生と思われる。

- 生息地の条件 : 湧水のある湿地、溪流の淀みや、山間のわずかに流れのある水路などに生息する。生息には還元的でない陸水環境が必要であると考えられる。
- 個体数の動向 : 沖縄県では近年になってはじめて見出された種である。ヒラマキミズマイマイとの区別がやや難しいため従来の調査では見落とされてきた可能性が高い。
- 現在の生息状況 : 本州の一部生息地では多産することもあるが、沖縄県下の産地ではヒラマキミズマイマイやカワコザラと同所的に見られ、密度は極めて低い。
- 学術的意義・評価 : 島嶼部を含め散在的に分布するため、生物の分散過程を研究する良い材料である。
- 生存に対する脅威 : ヒラマキガイ科貝類の中でも特に脆弱な陸水環境に生息する種であり、水域そのものの開発のみならず、生息域周辺の開発による水質汚濁や湧水の枯渇などが脅威となりうる。
- 特記事項 : 学名に関しては再検討中であり、*Gyraulus* sp. とした。IUCN カテゴリー : Data Deficient (DD) (as *Gyraulus pulcher*)。
- 参考文献 : 福田 宏, 2010. ヒメヒラマキミズマイマイ. “岡山県版レッドデータブック 2009 動物編”, 岡山県野生動植物調査検討会 (編), 岡山県生活環境部自然環境課, 岡山, 328.
Mori, S., 1938. Classification of the Japanese Planorbidae. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Ser. B*, 14(2): 279-300, pls.1-7.
齊藤 匠・平野尚浩・内田翔太・山崎大志, 2017. 石垣島および西表島におけるヒメヒラマキミズマイマイ (腹足綱: ヒラマキガイ科) の発見. *Molluscan Diversity*, 5: 印刷中。
- 執筆者名 : 齊藤 匠・福田 宏

- 和名 : レンズヒラマキ (クルマヒラマキ)
- 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 水棲目 ヒラマキガイ上科 ヒラマキガイ科
- 学名 : *Helicorbis* cf. *cantori* (Benson, 1850)
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

形態 : 殻径 8 mm、殻長 2 mm 前後。殻はそろばんの玉のような円盤状で周縁は明瞭に角張る。殻頂側の面は平坦で、殻底側の面は緩やかなマウンド状である。また、殻頂は広く窪む。付着物に覆われていない場合、殻色は飴色で表面には艶がある。

分布の概要 : 東海地方～南西諸島、朝鮮半島、台湾、中国東部、インド?

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 同属の近縁種は日本列島には存在しないと考えられる。また、モンゴル、シベリア南東部などに近縁種が複数存在する。一方、中国大陸やインドに存在する類似種との関係は不明であり、本種の学名は再検討する必要がある。

- 生態的特徴 : 詳細は不明であるが直達発生と思われる。
- 生息地の条件 : やや還元的な陸水域を好み、湿地、ハス田、河川のワンドや岸辺の植物帯、用水路などに多い。
- 個体数の動向 : 過去の調査と比べ沖縄島では産地が増加している。
- 現在の生息状況 : 生息地点においては多産し、優先種となっている場合も多い。本州での産地は散在的である。
- 学術的意義・評価 : 東アジア一帯に分布する広域分布種であり生物地理学的な研究の材料として好適である。
- 生存に対する脅威 : 湿地や河川などの陸水域は埋め立て、護岸などによる環境変化の影響を受けやすい。
- 特記事項 : 産地の不自然な急増が認められ、国内・国外からの移入が疑われる個体群が存在する。遺伝的特徴の解析など慎重な検討が必要である。もし、移入が発生していた場合、在来の個体群は危機的状況におかれている可能性が高い。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。

- 原記載 : Benson, W. H., 1850. Characters of nine new or imperfectly described species of *Planorbis* inhabiting India and China. *The Annals and Magazine of Natural History; Zoology, Botany, and Geology, Ser. 2*, 5: 348-352. (pp.349-350, as *Planorbis cantori*. Type Loc.: “in stagnis Bengalensibus prope castra Barrackpore”)
- 参考文献 : Davis, G. & Yamaguchi, S., 1969. The freshwater Gastropoda of Okinawa. *Venus*, 28: 137-152.
増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240pp.

執筆者名 : 齊藤 匠

- 和名 : リュウキュウノミガイ
- 分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 直輸尿管類 ハワイマイマイ上科 ハワイマイマイ科
- 学名 : *Pacificella rucua* (Pilsbry & Hirase, 1905)
- カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

図の解説 : p. 45. 1: リュウキュウノミガイ. 2 (参考): リュウキュウノミガイ属の一種. 3 (参考): イオウジマノミガイ. 4 (参考): ノミガイ. すべて南大東島. 撮影: 亀田勇一 (標本), 和田慎一郎 (1b, 2b), 福田 宏 (3b).

形態 : 殻長約 2.7 mm、殻径約 1.8 mm、卵円錐形、極めて薄質。螺塔はやや小さく、やや尖り、体層は大きい。殻は淡褐色で光沢があり、平滑。殻口は卵形で、肥厚・反転はしない。殻口内唇に弱い一歯を持つ。臍孔はない。

近似種との区別 : 日本産の同属の種とは、体層の膨らみが強く、また内唇の歯状突起が極めて小さいことで区別ができる。同所的に生息するノミガイとは、臍孔の有無によって明確に区別できる。

〈貝類〉

- 分布の概要： 南西諸島の島々に点在する。タイプ産地は慶良間島。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： リュウキュウノミガイ属の一種とは、同所的には確認されていないが分布が重複する。火山列島には同属のハタイノミガイが分布する。
- 生態的特徴： 主に林床の落葉や草本などを棲息場所として利用し、付着する菌類などの有機物を摂食する。卵胎生。
- 生息地の条件： 同上。
- 個体数の動向： 人里に近い林にも棲息しており、開発等により棲息地や個体数は減少傾向にある。
- 現在の生息状況： 同上。
- 学術的意義・評価： 同属の近縁種が火山列島からマリアナ諸島にかけて分布しており、受動的分散によって海を越えて移動する陸産貝類の代表的な例として生物地理学的に極めて重要なグループである。
- 生存に対する脅威： 農地開拓等による棲息地の縮小が影響を及ぼしている。また近年ニューギニアヤリガタリクウズムシやツヤオオズアリといった外来の捕食者による壊滅的な被害も懸念される。
- 特記事項： 従来の記録にはリュウキュウノミガイ属の一種が含まれている可能性が高く、過去の情報から動向を把握しようとするのは危険である。現地調査によって分布の実態を明らかにする必要があるため、情報不足 (DD) として扱った。
- 原記載： Pilsbry, H. A. & Hirase, Y., 1905. New land mollusks of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 57: 705-719. (p.718, as *Tornatellina rucuana*. Type loc.: “Kerama-jima, Ryukyu”)
- 参考文献： Wada, S., Kameda, Y. & Chiba, S., 2014. Different evolutionary patterns among the micro land snail grouped in the Ogasawara Islands. “Island Biology 2014 Program Abstracts”, Organizing Committee of Island Biology 2014, the International Conference on Island Evolution, Ecology, and Conservation (ed.), University of Hawaii at Manoa, Honolulu, 57-58.
<https://docs.google.com/viewer?a=v&pid=sites&srcid=aGF3YWlpLmVkdXxpc2xhbmRiaW9sb2d5MjAxNHxneDo0NzQwYjlkZWQvNjk1NmE1>
- 執筆者名： 和田慎一郎・亀田勇一

- 和名： リュウキュウカドベッコウ
- 分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
- 学名： *Luchuconulus okinawanus* Pilsbry, 1928
- カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 該当なし
- 形態： 貝殻は小型（殻径約 8 mm）で、螺塔はやや高く（殻長約 6.5 mm）、やや高い円錐形。螺層は細かく巻き、やや膨らみ、体層周縁は弱く角張る。殻は薄く、黄褐色、殻表は平滑で光沢がある。臍孔は狭い。殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。
- 近似種との区別： グードベッコウに似るが、生殖器の陰茎付属肢が小さく、鞭状器を持たないとされる。
- 分布の概要： 名護岳から記載された。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較： 近似種との類縁関係、種としての位置づけが不明で、現時点では比較できない。
- 生態的特徴： 不明。
- 生息地の条件： 不明。
- 個体数の動向： 原記載以降、信頼できる採集記録がない。
- 現在の生息状況： 不明。
- 学術的意義・評価： *Luchuconulus* 属のタイプ種であり、分類学的に重要。
- 生存に対する脅威： 不明。
- 特記事項： 本種の採集記録は複数の文献に散見されるが、筆者の知る限り原記載に特徴が完全に合致する標本は再発見されていない。類似種との関係など再検討が必要。
- 原記載： Pilsbry, H.A., 1928. Notes on some Japanese Zonitidae. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 80: 207-210. (p. 208, figs 3-7, as *Luchuconulus okinawanus*. Type loc.: “Nagodake, Okinawa, Riukyu Ids.”)
- 参考文献： Chinen, M., 1977. Land shells of Okinawa-jima and adjacent islands (exclusive of Truncatellidae, Assimineidae and Ellobiidae). Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands, 3: 127-149.
- 執筆者名： 上島 励

- 和名： マルキビ
- 分類： 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 柄眼亜目 曲輸尿管類 ベッコウマイマイ上科 ベッコウマイマイ科
- 学名： *Parakaliella bimarisi* (Pilsbry & Hirase, 1904)
- カテゴリー： 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー： 情報不足 (DD)
- 形態： 殻は微小で、殻径約 2 mm、螺塔はやや高く、低円錐型。螺層は細かく巻き、体層周縁は丸い。螺管は膨らみ、縫合はくびれる。殻は薄く、暗褐色、殻表には細かい成長脈が密にある。臍孔は狭い。

殻口縁は薄く、反曲肥厚しない。

近似種との区別 : 本種は琉球列島に生息する *Parakaliella* sp. よりも小型で螺管は膨らむことで異なる。ヒゼンキビに酷似するが、殻口内の滑層の発達が異なる。

分布の概要 : 那覇から記載された。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 近縁種は不明で、現時点では比較できない。

生態的特徴 : 不明。

生息地の条件 : 不明。

個体数の動向 : 本種の採集記録は複数の文献に散見されるが、筆者の知る限り特徴が完全に合致する標本は再発見されていない。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : 分類学的実体が不明。

生存に対する脅威 : 不明。

特記事項 : 分類学的再検討が必要。

原記載 : Pilsbry, H.A. & Hirase, Y., 1904. Descriptions of new land snails of the Japanese Empire. Proceedings of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 56: 616–638. (pp. 633–634, as *Kaliella bimaris*. Type loc.: “Naha, Okinawa Island, Riukiu”)

参考文献 : 平瀬與一郎, 1908. 日本陸産貝類図説 (十三). 介類雑誌, 2(7): 221–226, pl. 18.
上島 励, 2014. マルキビ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 430.

執筆者名 : 上島 励

和名 : **イボイボナメクジ属の一種 (2)**

分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 収眼亜目 アシヒダナメクジ上科 ホソアシヒダナメクジ科

学名 : *Granulilimax* sp. 2

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

形態 : 小型のナメクジで、体は細い。背面には細かい顆粒状の突起が密生し、表面は粘液で覆われない。背面は暗灰色で、正中線に沿って不明瞭な黒い縦帯がある。頭触角は短く、小触角は白くて先端が僅かに二分する。

近似種との区別 : 生殖器形態が近似種と異なると思われるが、幼体が2個体採集されたのみであり、再検討が必要。

分布の概要 : 西表島からのみ知られる。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : 宮古島に *G. sp. 3*、与那国島に *G. sp. 1* が分布し、台湾にも未記載種が生息する。

生態的特徴 : 自然林の落葉下に生息する。肉食性で他の陸産貝類を捕食する。

生息地の条件 : 不明。

個体数の動向 : 不明。

現在の生息状況 : 幼体が2個体採集されたのみで、個体数はきわめて少ないと思われる。

学術的意義・評価 : 本科は琉球列島で多くの固有種に分化しており、生物地理学的に重要である。

生存に対する脅威 : 開発による森林の伐採および林床の乾燥化、餌となる陸産貝類の減少。

執筆者名 : 上島 励

和名 : **コウモリミミガイ**

分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科

学名 : *Cassidula vespertilionis* (Lesson, 1830)

カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻は本科中、中型で、卵球形、殻表は等間隔に生じる殻毛と薄い皮膜状の殻皮を纏う他、明瞭な螺溝を多数めぐらす。殻口は広く、内唇に2歯、軸唇に1歯、外唇中央に強い1歯の突起を具える。殻長 12~17 mm。

近似種との区別 : 近似種ウラシマミミガイおよびカタシノミミガイは、螺溝がより細かいこと、螺塔が低く、より大型化することで区別できる。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、先島諸島のマングローブ林周辺の塩性湿地。

生態的特徴 : 活動期にはマングローブ樹上に這い上がり、活発に匍匐する。

生息地の条件 : マングローブ林周辺塩性湿地の中~高潮線に生息。

個体数の動向 : 石垣島の一部の場所では出現頻度が高く、1995~2015年の20年に渡って常に生息が認められ、近年はやや増加傾向にある。沖縄島では2000年前半まで豊見城市の一部で小さな個体群が確認されていたが、現在は埋立てにより、生息域ごと消失した。恩納村では2013年に生息が確認された。

現在の生息状況 : 同上。

学術的意義・評価 : マングローブに特有の、生態学的にも興味深い貝類であるが、分散や繁殖などは不詳である。

生存に対する脅威 : 先島諸島では陸土の大量流入や河川水量の減少により、マングローブ林の陸地化が進行している。本種は生息場所が限られている上、樹上性で見つかりやすく、貝類収集家の採集圧による個体数減

<貝類>

- 特記事項 : 少も考えられる。
石垣島の一部河川では近年、増加傾向が見受けられ、レッドリスト対象外とする考えもあったが、予防的に情報不足 (DD) として含め、長期的なモニタリング継続を期待したい。
- 原記載 : Lesson, M., 1830. Voyage autour du monde : exécuté par ordre du roi, sur la corvette de Sa Majesté, la Coquille, pendant les années 1822, 1823, 1824, et 1825, Tome Second, Partie I, Zoologie, Arthus Bertrand, Paris, 471 pp., 7+38+16 pls. (p. 340, no. 84, as *Auricula vespertilionis*. Type loc.: “les alentours du port Praslin, à la Nouvelle-Irlande, dans les lieux bas et submergés”)
- 参考文献 : 久保弘文, 2005. コウモリミミガイ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) — レッドデータおきなわ —”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 476-477.
久保弘文, 2014. 恩納村の貝類. “恩納村誌 第1巻 自然編”, 恩納村誌編さん委員会 (編), 恩納村役場, 恩納, 245-340.
久保弘文・福田 宏, 2012. コウモリミミガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 95.
久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝. 沖縄出版, 浦添, 263 pp.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : **カドバリコミミガイ**
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Laemodonta bella* (H. & A. Adams, 1855)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
- 形態 : 殻長 5 mm 以下の小型巻貝類。殻は太い紡錘形で、螺層肩部が角張って階段状となり、殻表は規則的で明瞭な螺肋をめぐらす。殻底は強い繃帯を発達させ、明瞭な偽臍孔を形成する。殻口は大きく、内唇に2つ、軸唇に1つ、外唇内側に2つの強い歯状突起がある。殻色は黄色味の強い藁色。
- 近似種との区別 : ヘソアキコミミガイとやや似るが、本種は著しく螺層肩部が角張るので区別できる。
- 分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、石垣島、タイ、フィリピン、ニューカレドニア～マダガスカルまで広く分布する。
- 生態的特徴 : コミミガイ類中、最も隠蔽的生態を有し、表面的な観察では外部から容易に確認できない。
- 生息地の条件 : サンゴ礁性岩礁域に広く分布するが、目詰まり等底質攪乱の無い岩礫集積地のみで生息し、殆どの生息場所が局所的である。
- 個体数の動向 : 非常に稀少で発見の困難な種であるため、個体数の具体的な増減が不明である。しかしながら内湾域においては陸域からの土壌流入や富栄養化など様々な負荷が岩礁域まで及んでおり、本種のような岩礫の狭く奥深い環境に棲む貝類が危機的状況に曝されていることは想像に難くない。
- 現在の生息状況 : 同上。
- 学術的意義・評価 : 熱帯域の潮間帯中上部に著しく適応放散した海棲有肺類の一員であり、進化生態学的に重要である他、海陸の狭間における極めて脆弱な環境の指標種として保全生物学的価値が極めて大きい。
- 生存に対する脅威 : 自然海岸の消失、陸域からの土壌微粒子沈積による岩礫間隙の閉塞。
- 特記事項 : 本種は小型種である上に、生息範囲が非常に広く、外洋域の岩礁にまで及んでおり、生息範囲の全体に占める相対的な攪乱程度が不明で、客観的な評価が難しい。IUCN カテゴリー : Least Concern (LC)。
- 原記載 : Adams, H. & Adams, A., 1855. Contributions towards the natural history of the Auriculidae, a family of pulmoniferous Mollusca; with descriptions of many new species from the Cumingian collection. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1854: 30-37. (p. 37, no. 1, as *Plecotrema bella*. Type loc.: “Philippines”)
- 参考文献 : 木村昭一, 2014. カドバリコミミガイ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎょうせい, 東京, 93.
増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. पीシーズ, 横浜, 240 pp.
- 執筆者名 : 久保弘文

- 和名 : **イササコミミガイ**
分類 : 腹足綱 異鰓亜綱 汎有肺下綱 真有肺目 オカミミガイ上科 オカミミガイ科
学名 : *Laemodonta octanfracta* (Jonas, 1845)
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)
- 形態 : 殻長 3 mm、殻径 2 mm。殻は零形、淡黄褐色、厚質堅固。螺層は膨らみ、縫合のくびれは弱い。殻表は剛毛を具えた強いレール状の螺肋を多数巡らす。外唇内側に強い歯を2個持ち、内唇の2個のバリエタル歯と軸唇の褶も強い。殻底に螺状稜角はない。
- 近似種との区別 : マキシジコミミガイに似るが遥かに小さい。
- 分布の概要 : 宮古島、石垣島、西表島、台湾、フィリピン、タイ、熱帯インド-西太平洋。
- 近縁な種及び群との分布状況の比較 : 日本産コミミガイ属中、カドバリコミミガイ同様産出例が少なく、先島諸島から稀に見出されるのみ。

生態的特徴 : 転石下の有機物等を摂食すると思われる。胎殻の形態から恐らく浮游幼生期を経る。
 生息地の条件 : 内湾と外洋に跨がって産し、マングローブ辺縁の砂泥底転石地や、海岸岩礁地高潮帯の底泥に埋もれた石の下に見られる。
 個体数の動向 : 熱帯域では普通種であるが、国内では少数が確認されたのみである。
 現在の生息状況 : 国内では生貝が同時に複数見られた例すら少なく、個体群が維持されていない可能性がある。
 学術的意義・評価 : 沖縄県は本種の分布の世界的北限である。
 生存に対する脅威 : 海岸や河口の埋立・護岸・道路や橋梁設置等の開発、マングローブ湿地の破壊、瀕海陸地の森林伐採、水質・土壌汚染。
 特記事項 : 種小名を *octanflacta* とした文献が多いが、正しくは *octanfracta* である。
 原記載 : Jonas, J.H., 1845. Neue conchylien. Zeitschrift für Malakozoologie, 2: 168-173. (pp. 169-171, as *Pedipes octanfracta*. Type loc.: "ad Insulas Sandwicensis?")
 参考文献 : 福田 宏, 1996. 腹足綱; 宮古島 平良市久松漁港 (久貝)~久松松原. "日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状", 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 11-63, 114-115.
 福田 宏・久保弘文, 2012. イササコミミガイ. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 97.
 Hubendick, B., 1956. A conchological survey of the genus *Plecotrema* (Gastropoda, Ellobiidae). Proceedings of the Malacological Society of London, 32: 110-126, pl. 23.
 久保弘文, 2005. イササコミミガイ. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 478.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 横浜, 240 pp.
 執筆者名 : 福田 宏・久保弘文

和名 : ヤマホトトギス
 分類 : 二枚貝綱 翼型亜綱 イガイ目 イガイ上科 イガイ科
 学名 : *Musculus japonica* (Dunker, 1857)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 準絶滅危惧 (NT)

形態 : 殻長 20 mm 前後。イガイ科としては小型で、殻は細長く、光沢が強い。薄い殻皮をまとい、ホトトギスガイ同様のジグザク模様を有する。
 近似種との区別 : 細長い形状とジグザク模様により区別される。
 分布の概要 : 房総・能登半島以南、沖縄島 (羽地内海、名護湾、金武湾、中城湾)、朝鮮半島。
 生態的特徴 : 内湾域の小型海草類の優占する海草藻場の潮間帯以深に分布。
 生息地の条件 : 内湾域の潮間帯以深の砂底の海草藻場に分布する。潮下帯では、海草類の坪刈り調査などで稀に見つかるが、密度は極めて低い。
 個体数の動向 : 各産地で稀なため、密度は不明。
 現在の生息状況 : 沖縄県内では、稀な種のため現状不明。
 学術的意義・評価 : 産出が稀なため、基礎生態の解明は進んでいない。
 生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。
 特記事項 : 千葉・愛知・岡山・熊本各県レッドデータブック掲載種。なお本種の記載年は 1856 とされることが多いが、実際は 1857 である。
 原記載 : Dunker, G., 1857. Mytilacea nova collectionis Cumingianae. Proceedings of the Zoological Society of London, for 1856: 358-366. (p.363, no.16, as *Volsella Japonica*. Type loc.: "In litore maris Japonici")
 参考文献 : 久保弘文, 2005. ヤマホトトギス. "改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータブックおきなわ", 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 480-481.
 山下博由・木村昭一, 2012. ヤマホトトギス. "干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック", 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 106.
 執筆者名 : 小澤宏之

和名 : オボロツキ
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ツキガイ目 ツキガイ上科 ツキガイ科
 学名 : *Monitilora simplex* (Reeve, 1850)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

図の解説 : p. 52. 宮古島荷川取沖. 撮影 : 久保弘文.
 形態 : 殻長 3 cm. 殻は白色で厚く、同心円状の繊細な輪脈が発達する。後端肩部はやや裁断状。
 分布の概要 : 沖縄県内では、沖縄島、宮古島、伊良部島で死殻の採集例がある。新鮮な死殻は、沖縄島泡瀬と宮古島久松の 2 箇所のみである。生貝の採集例は無い。
 生態的特徴 : 潮下帯の砂底域に生息すると考えられるが詳細は不明である。
 生息地の条件 : 泡瀬干潟では、台風後の打ち上げで海草藻場の二枚貝類に混じり新鮮な合弁の死殻が採集されたことがあり、おそらくは海草藻場周辺に生息する可能性が高い。

個体数の動向 : 詳細は不明。
現在の生息状況 : 生貝の確認はなく、詳細は不明。
学術的意義・評価 : 詳細は不明。
生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。
原 記 載 : Reeve, L. A., 1850. Monograph of the genus *Lucina*. Conchologia Iconica, or, Illustrations of the Shells of Molluscous Animals, 6: pls.1-11. (sp.11, pl.3, fig.11, as *Lucina simplex*. Type loc.: “North Australia”)
参 考 文 献 : 名和 純, 2005. オボロヅキ. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) -レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 485.

執 筆 者 名 : 小澤宏之

和 名 : **ガタツキ (コハギガイ)**
分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
学 名 : *Arthritica* cf. *reikoe* (Suzuki & Kosuge, 2010)
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 情報不足 (DD)

図 の 解 説 : p. 52. 西表島浦内川. 撮影: 久保弘文.
形 態 : 殻長・殻高とも 1.5 mm。殻は亜三角形、無色、前部が長く、殻頂は後方に寄る。内靱帯は細長い。明瞭な主歯、前側歯と、靱帯後方に側歯を持つ。*A. reikoe* の原記載に図示されたタイプ標本の走査型電子顕微鏡写真では、殻表は成長脈を除いて平滑であるが、沖縄県産個体は明瞭な顆粒をそなえる。

近似種との区別 : ガンヅキは亜卵形で、後部が本種より長い。また、下記の各産地の個体には複数種が混在する可能性もあるが、形態の検討がいまだ不十分のため、ここでは暫定的に同種とみなす。

分布の概要 : 陸奥湾、長面浦、東京湾、伊勢湾、紀伊水道沿岸、瀬戸内海、種子島、宮古島、西表島。

近縁な種及び群との分布状況の比較 : ガンヅキは瀬戸内海 (山口、愛媛、福岡各県) のみで知られ、メナシピンノの頭胸甲側縁や胸脚の節上に足糸で付着する。この属は他にオーストラリア南部やニュージーランドから数種が知られる。

生態的特徴 : 卵胎生で胎貝を殻内で保育する。この属は多毛類や十脚類と共生する種が知られるが、本種については未詳。

生息地の条件 : 内湾奥砂泥干潟中～低潮帯の底泥に浅く埋在する。

個体数の動向 : 沖縄県では宮古島東平安名崎と西表島浦内川河口で確認されたのみ。

現在の生息状況 : 生貝は浦内川だけで知られ、そこでの棲息範囲も狭く、密度は低い。

学術的意義・評価 : 他県産個体共々、種レベルの詳細な検討が必要。

生存に対する脅威 : 護岸・埋立・海底浚渫等海岸環境の改変、水質汚濁。また本種はその微小さのため、大雑把な貝類相調査では見落とされる恐れがある。

特 記 事 項 : 愛知県レッドリスト掲載種。

原 記 載 : Suzuki, T. & Kosuge, S., 2010. Description of a new species of *Lasaea reikoe* Suzuki & Kosuge, n.sp. from estuary area of Edogawa River, Tokyo Bay (Bivalvia, Erycinidae). Bulletin of the Institute of Malacology Tokyo, 3: 147-148, pls 46-47. (p. 47, pl. 46, figs 1-7, as *Lasaea reikoe*. Type loc.: “Estuary area of Edogawa River, Edogawaku, Tokyo, Japan”)

参 考 文 献 : 福田 宏, 2012. ガタツキ (コハギガイ). “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 154.

岡本正豊, 2012. 微小二枚貝コハギガイの千葉県4河口における棲息状況. 著者自刊, 柏, 44 pp.

佐藤慎一・多留聖典・福田 宏・多々良有紀, 2010. 2009年度軟体動物多様性学会夏季例会 (南三陸) 報告. Molluscan Diversity, 1: 54-60.

執 筆 者 名 : 福田 宏

和 名 : **ナタマメケボリガイ**
分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
学 名 : *Borniopsis ochetostomae* (Morton & Scott, 1989)
カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

形 態 : 殻は本科中、中型でやや硬質、膨らみのある長方形、殻表は厚い赤褐色の殻皮を纏い、微細な分岐状の彫刻を有する。最大殻長約 10 mm。靱帯は内在。

近似種との区別 : 同属セワケガイはより丸く、横長にならない。

分布の概要 : 奄美大島、沖縄島、八重山諸島、香港、タイ。

生態的特徴 : タテジマユムシ及びスジユムシの生息する穴に同居し、何らかの共生関係にあると考えられ、共生率の高い海域では 77%に及ぶ。軟体部は白く、貝殻腹縁から短い外套触手を多数露出するが、貝殻を被うことは無い。殻表にヒドロ虫の一種を共生させることがある。

学術的意義・評価 : 砂泥～泥礫干潟の中潮線～低潮線付近に生息する。

個体数の動向 : 生息地自体の消失はあるが、本県で過去5年ほど継続している調査では、川平湾では減少傾向が全く

なく、むしろ多産し、増加傾向すら感じられる。羽地内海でも同様の傾向がある。絶滅の危険性はないと考えられるが、あえて対象外とはせず、今回はこのような傾向を記録する意味で情報不足 (DD) として記録に留める。

- 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : ユムシとの共生二枚貝類であり、生態学的意義は大きい。
 生存に対する脅威 : 埋立てによる生息地の消失。
 特記事項 : 現存生息地の一部 (石垣島、西表島) はラムサール条約・自然公園法・沖縄県漁業調整規則 (保護水面) により、一定程度保護されている。
 原 記 載 : Morton, B. & Scott, P.H., 1989. The Hong Kong Galeommatacea (Mollusca: Bivalvia) and their hosts, with descriptions of new species. *Asian Marine Biology*, 6: 129–160. (pp. 135–136, pl. 1, fig. d, text-figs 5c, 6, as *Pseudopythina (Borniopsis) ochetostomae*. Type loc.: “Hong Kong, New Territories, Tolo Harbour, Ting Kok; 22°28'15" N, 114°12'45" E; intertidal sandy mud flats in the burrows of *Ochetostoma erythrogrammon* (Echiura)”)
 参 考 文 献 : 小菅丈治, 2009. 奄美大島におけるユンタクシジミの記録とナタマメケボリガイの生息状況. ちりぼたん, 39(3/4): 166–169.
 小菅丈治・久保弘文・西川輝昭, 2003. ユムシ類の巢孔に棲む二枚貝ナタマメケボリガイの琉球列島における分布と生態. 沖縄生物学会誌, (41): 7–13.
 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : アマミスジホシムシモドキヤドリガイ (新称)
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
 学 名 : *Nipponomysella* aff. *subtruncata* (Yokoyama, 1927)
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 該当なし

- 図 の 解 説 : p. 52. 読谷村長浜. 撮影: 久保弘文。
 形 態 : 貝殻はやや小型、最大殻長約 7 mm。丸みを帯びた横長のくさび状三角形で、殻頂は中央から前縁寄りの約 4 分 1 付近に位置する。側歯は不明瞭で、靱帯は大きく外在する。原殻は約 900 μm。
 近似種との区別 : 日本本土に分布するスジホシムシモドキヤドリガイはより小型である他、原殻が 300 μm 程度で小さく、殻頂部が前縁に寄ること、前後側歯が発達すること等で区別される。
 分布の概要 : 奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島。
 生態的特徴 : アマミスジホシムシモドキ *Siphonosoma funafuti* (Shiple, 1898) の体表に付着。
 生息地の条件 : 沖縄県においては、サンゴ礁岩盤のクレビス等に溜まった砂礫中やアマモ場等に生息するアマミスジホシムシモドキに付着している。
 個体数の動向 : 内湾干潟よりむしろ外洋に面したリーフ上に生息することから、生息場所の消失は少ないが、サンゴ礁域の荒廃により、岩盤凹部やクレビスへの微粒子堆積で、礫間の固着化や還元化による底質悪化が著しく進行している場合は本種の生息を認めない。
 現在の生息状況 : 同上。
 学術的意義・評価 : ウロコガイ類は他の無脊椎動物と共生関係を成立させ、熱帯・亜熱帯に多岐にわたる種が分化しており、進化生態学的に重要。
 生存に対する脅威 : サンゴ礁域の人為的攪乱、底質悪化。
 特記事項 : これまでスジホシムシモドキヤドリガイと混同されていた。
 参 考 文 献 : 西川輝昭, 1992. 星口動物門. “原色検索日本海岸動物図鑑 I”, 西村三郎 (編), 保育社, 大阪, 299–303.
 執 筆 者 名 : 久保弘文

- 和 名 : オサガニヤドリガイ
 分 類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 ウロコガイ上科 ウロコガイ科
 学 名 : *Pseudopythina macrophthalmensis* Morton & Scott, 1989
 カ テ ゴ リ ー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー: 準絶滅危惧 (NT)

- 形 態 : 殻は本科中、小型でやや硬質、膨らみのある亜三角形、殻表はやや光沢があり、紫褐色～淡褐色。最大殻長 3 mm。
 近似種との区別 : 類似種チリハギガイは、殻形がより角張った亜方形で光沢がより弱いことにより区別される。
 分布の概要 : 神奈川県以南、沖縄島、八重山諸島、香港、タイ。
 生態的特徴 : 砂泥～泥干潟のオサガニ類の脚等に付着しているが、砂泥域のドレッジサンプルによっても複数個体が得られる場合がある。
 生息地の条件 : マングローブ林や河口域、内湾の泥質干潟～水深 10 m 内外の泥礫底等に生息する。
 個体数の動向 : 生息数が季節によって大きく変動する上に、分布域も広く、場所によっては多産する。石垣島・西表島ではマングローブ林周辺の多くが、自然公園法やラムサール条約、沖縄県漁業調整規則で一定の保護がなされており、安定した生息地となっている。ただし沖縄島中城湾では埋立て等による攪乱で一部の生息地が消失した。
 現在の生息状況 : 同上。

〈貝類〉

- 学術的意義・評価 : オサガニ類との共生または巣穴利用をする二枚貝類であり、生態学的意義は大きい。
生存に対する脅威 : 埋立てによる生息地の消失。
特記事項 : 分布が広く、むしろ拡大傾向の疑いもあり、絶滅の危険性はないと考えられるが、今回はこのような傾向を記録する意味で情報不足 (DD) として記録に留める。
原記載 : Morton, B. & Scott, P.H., 1989. The Hong Kong Galeommatacea (Mollusca: Bivalvia) and their hosts, with descriptions of new species. *Asian Marine Biology*, 6: 129–160. (pp. 138–140, pl. 1, fig. f, text-figs 8B, 9–10, as *Pseudopythina macrophthalmensis*. Type loc.: “Hong Kong, New Territories, Tolo Harbour, Hoi Sing Wan; approximately 22°26' N, 114°15' E; intertidal on sandy mud; attached to the decapod *Macrophthalmus latreille* [sic]”)
参考文献 : 早瀬善正・上野信平・松永育之, 2009. 駿河湾久連地先におけるオサガニヤドリガイの分布記録. *ちりぼたん*, 40(1), 15–19.
小菅丈治, 2005. 石垣島におけるミナミメナガオサガニに着生するオサガニヤドリガイの個体数と殻長組成の季節変化. *沖縄生物学会誌*, (43): 21–25.
小菅丈治・伊谷 玄, 1994. オサガニ類に着生する二枚貝オサガニヤドリガイ (新称) の西表島からの記録. *Venus*, 53(3): 241–244.
久保弘文・木村昭一, 2012. オサガニヤドリガイ. “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 163.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : チドリマスオ
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 バカガイ上科 チドリマスオ科
学名 : *Donacilla picta* Dunker, 1877
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 該当なし

- 形態 : 殻は本科中、やや小型で、比較的薄質、後方に延びた亜三角形、殻表はやや光沢があり、淡黄緑褐色の地に緑褐色の放射状色彩を有する。殻長約 10 mm 以下。
近似種との区別 : 同科に近似種はないが、外見が似ているリュウキュウナミノコガイは同所的に見られる場合があり、特に幼貝は査定上混乱する可能性がある。しかし、リュウキュウナミノコガイは輪肋が明瞭で、殻質もより厚質であることで区別される。
分布の概要 : 房総・能登半島以南、沖縄島、石垣島、フィリピン、アンダマン海。
生態的特徴 : ろ過食性で、潮汐周期と関連した移動生態をもつと考えられる。
生息地の条件 : 潮間帯直下の汀線砂底。
個体数の動向 : 個体群出現の消長が大きく、減少としての判断が難しく、情報不足とする。しかし、自然度の高い砂浜域に生息するため、護岸造成や埋立て等海岸改変の影響を少なからず受けていると考えられ、定期的かつ長期的なモニタリングが必要である。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 非常に垂直分布幅の狭い二枚貝類であり、生息生態的に興味深い戦略を有している。
生存に対する脅威 : 埋立てや護岸造成等による自然海浜の消失。
原記載 : Dunker, G., 1877. *Mollusca nonnulla nova maris Japonici*. *Malakozoologische Blätter*, 24: 67–75. (p. 68, as *Donacilla picta*. Type loc.: “maris Japonici”)
参考文献 : 加藤 真・福田 宏, 1996. 二枚貝綱. “日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状”, 花輪伸一・佐久間浩子 (編), WWF Japan Science Report, 3: 65–73.
Takada, Y., Kosuge, T., Nishihama, S. & Katoh, M., 2002. Vertical distributions of *Actocheilus striata* and *Latona faba* (Bivalvia) on a subtropical sandy beach in Ishigaki Island, Japan. *Venus*, 61(3/4): 203–213.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : なし
分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 フタバシラガイ上科 フタバシラガイ科
学名 : *Diplodonta* sp. A
カテゴリー : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリー : 情報不足 (DD)

- 図の解説 : p. 52. 石垣島名蔵湾. 撮影 : 久保弘文。
形態 : 本科中、やや小型、殻は亜球形で、よく膨らみ、丸みを帯びるが、肩部はやや直線状で、前後は、やかに角張る。鉸歯は明瞭な主歯が 2 本あり、前部は二分する。側歯は欠く。殻表には薄い淡黄白色の殻皮を纏い、殻色は乳白色。靱帯は大きく外在する。最大殻長 20 mm。
近似種との区別 : *Diplodonta* sp. B は肩部が角張らず、なで肩で、前後端の殻皮が鏽状の沈着が認められる他、本種ほど大成しない。
分布の概要 : 沖縄島久志地先、うるま市屋慶名、石垣島名蔵湾。
生態的特徴 : 海草藻場に生息する。
生息地の条件 : 産出例が乏しく詳細は不明。
個体数の動向 : 近年の産出例は乏しく、現状は不明だが、生息海域での打上げ貝の観察事例は減少している。
現在の生息状況 : 同上。
学術的意義・評価 : 生息情報の集積と分類学的検討が必要。

生存に対する脅威 : 埋立等の沿岸域の改変による生息地の消滅や環境悪化。
 参考文献 : 名和 純, 2005. *Diplodonta* sp. A. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 485.

執筆者名 : 小澤宏之

和名 : なし
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 フタバシラガイ上科 フタバシラガイ科
 学名 : *Diplodonta* sp. B (*D. cf. obliqua* (Gould, 1861))
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 情報不足 (DD)

図の解説 : p. 53. 石垣島川平湾. 撮影 : 久保弘文。
 形態 : 最大殻長 1 cm 程度。やや歪んだ丸い形で膨らみのある殻をもつ。殻質は薄く、殻表にはごく微細な成長脈をもち、薄い淡黄褐色の殻皮を被る。殻頂はやや赤褐色を帯びるが、全体は淡い灰白色で、幼若個体はやや透明感がある。

近似種との区別 : *Diplodonta* sp. A は一回り大きく、殻頂が赤みを帯びない。
 分布の概要 : 沖縄島、石垣島、西表島。 *D. obliqua* は沖縄をタイプ産地とし、熱帯インド・太平洋に広く分布する。

生態的特徴 : スナモグリ類との共生関係が疑われるが、プランクトン食者と推測される。
 生息地の条件 : 河口域に隣接する滞筋の中潮線の粗砂底～礫泥底に生息し、同所的にスナモグリ類の一種 *Callianassidae* gen. & sp. が確認されることが多い。

個体数の動向 : 底質が還元化している礫砂底や、赤土堆積の著しい場所でも見つかることがある。しかし、垂直分布の幅が狭く、内湾奥では埋立てにより生息地の消失が危惧される。

現在の生息状況 : 2010 年以降の川平湾調査では毎年観察され、内湾奥の多様性の低い海域においても認められることがある。

学術的意義・評価 : 共生生態を示唆する生息実態から、生態学的に重要な研究対象と考えられる。

生存に対する脅威 : 埋立てによる生息場所の消失。

特記事項 : スナモグリ類の増加については、キサゴ類をはじめとする砂浜の貝類多様性を低下させ、底質環境劣化とする報告もあり、そうしたスナモグリ類との共生関係が明確となればむしろ環境悪化の指標となる可能性もあるため、今後、個体群増減の動向をモニタリングし、ランク付けを検討した方がよい。

原記載 : Gould, A.A., 1861. Descriptions of shells collected by the North Pacific Exploring Expedition. Proceedings of the Boston Society of Natural History, 8: 14-40. (p. 33, as *Mysia obliqua*. Type loc.: “Loo Choo”)

参考文献 : 久保弘文, 2012. フタバシラガイの一種。 “干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック”, 日本ベントス学会 (編), 東海大学出版会, 秦野, 145.
 名和 純, 2005. *Diplodonta* sp. B. “改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) - レッドデータおきなわ”, 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇, 449-450.

執筆者名 : 久保弘文

和名 : リュウキュウヒルギシジミ
 分類 : 二枚貝綱 異歯亜綱 真異歯下綱 不完全歯上目 マルスダレガイ目 シジミ上科 シジミ科
 学名 : *Geloina expansa* (Mousson, 1849)
 カテゴリ : 情報不足 (DD) 環境省カテゴリ : 絶滅危惧II類 (VU)

形態 : 最大殻長 13 cm に達する大型のシジミ類。貝殻はやや厚く、亜三角形でやや殻高が低く、殻幅が広い。靱帯は外在し、やや短く、殻表は淡黄褐色の殻皮に被われる。内面は白色。

近似種との区別 : ヤエヤマヒルギシジミは殻高が高く、丸みが強い。え、貝殻がより重厚化し、殻皮が更に厚く、濃褐色。

分布の概要 : 奄美大島以南、沖縄島 (稀産)、八重山諸島、フィリピン、アンダマン諸島。

生息地の条件 : マングローブ林内の中潮線の泥砂底に生息する。

個体数の動向 : ヤエヤマヒルギシジミが奄美大島・沖縄島に多産するのと比べ、本種は主に八重山諸島 (石垣アンパル、西表島) に生息し、ヤエヤマヒルギシジミより遙かに個体数が少ない。特に沖縄島では採集事例が非常に少ない。

現在の生息状況 : ヤエヤマヒルギシジミと比べ、稀少なため、増減傾向が不明である。2011 年に今帰仁村大井川河口で死殻 1 個体、2015 年 12 月に西表島浦内川河口で生貝 1 個体が、十数個体のヤエヤマヒルギシジミに混じって確認された。

学術的意義・評価 : マングローブ生態系では最大の二枚貝類であり、生態学的意義が大きいが、分散や個体群の集団遺伝的特性など不詳な点が多く、今後の研究が期待される。

生存に対する脅威 : マングローブ林の伐採や埋立てなどの攪乱。

原記載 : Mousson, A., 1849. Die Land- und Süßwasser-Mollusken von Java. Nach den Sendungen des Herrn Seminardirektors Zollinger. Friedrich Schulthess, Zürich, iv+126 pp., 22 pls. (pp. 89-90, no. 6, pl. 14,

<貝類>

unnumbered figs, as *Cyrena expansa*. Type loc.: “Oestliches Java”)
参 考 文 献 : 久保弘文・中井克樹, 2014. リュウキュウヒルギシジミ. “レッドデータブック2014—日本の絶滅
のおそれのある野生生物—6 貝類”, 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), ぎ
ょうせい, 東京, 400.

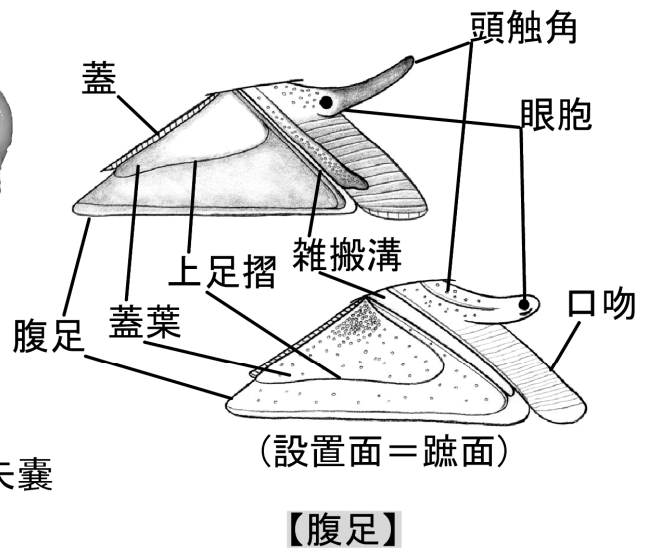
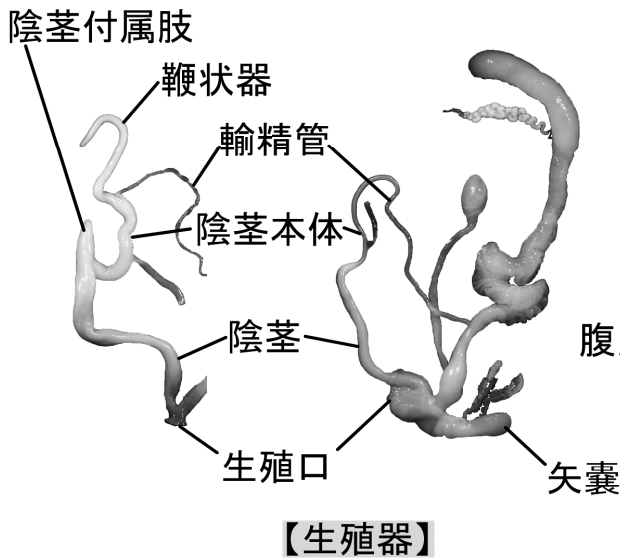
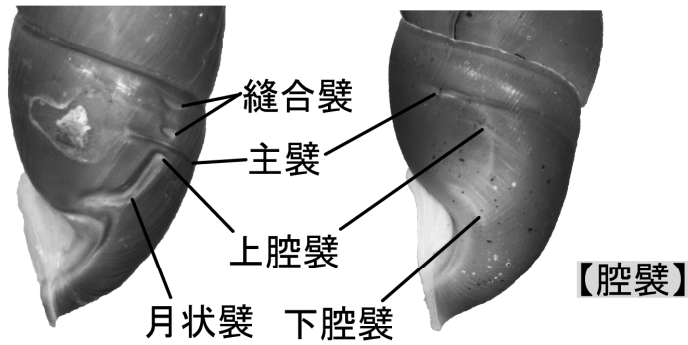
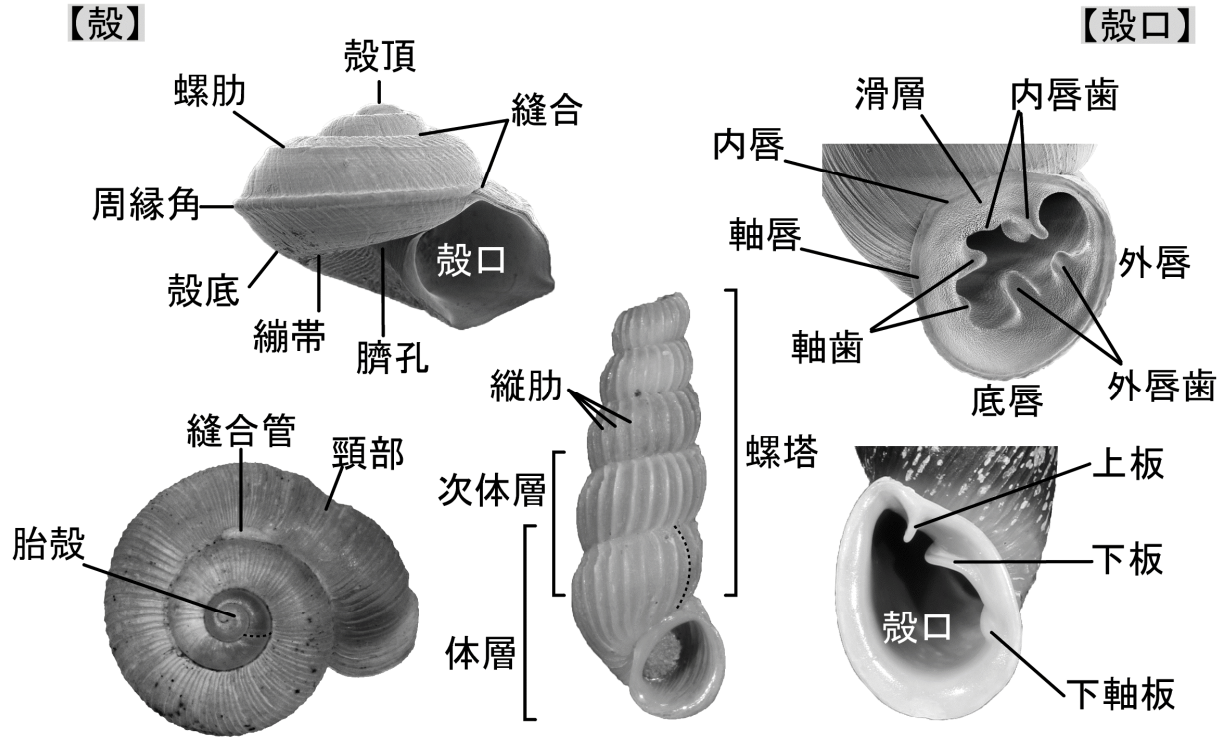
執 筆 者 名 : 久保弘文

(4) 専門用語集

用語集	読み	英訳および説明
(殻の部位)		
胎殻	たいかく	Protoconch. 最初期に形成される貝殻。ペリジャー期の殻や、直達発生種では孵化時に持っている殻がこれに相当する。
殻頂	かくちょう	Apex. 貝殻の頂点にあたる成長の開始点。多くの種では初期の殻がそこに存在する。
螺塔	らとう	Spire. 巻貝類の貝殻が螺旋状に上下方向に成長した結果、高まりとなった部分。種や個体変異によって高低差がある。
螺層	らそう	Whorl. 巻貝類の貝殻が成長にともなって螺旋状に伸びた部分。管状に伸びる場合は螺管と呼ぶ。
体層	たいそう	Body (またはlast) whorl. 貝殻の最終層、すなわち殻口から1周分の螺層を指す。
次体層	じたいそう	Penultimate whorl. 体層の次の螺層。体層は殻口の形成等により次体層と彫刻が異なる場合がある。
縫合	ほうごう	Suture. 巻貝類の貝殻が螺旋状に成長した部分を螺層または螺管と呼び、それらが互いに接したつなぎ目。
殻表	かくひょう	Shell surface. 貝殻の表面のこと。種によってキチン質でできた殻皮がある。
殻皮	かくひ	Periostracum. 殻表を覆うキチン質でできた皮で、種によっては、これを欠く。膜状や毛状、ピロード状等様々な形態がある。
体層周縁	たいそうしゅうえん	Periphery. 体層の最外縁を取り巻く部分。稜角や棘等が発達する場合がある。
虫様管	ちゅうようかん	縫合管 sutural tube. ムシオイガイ類の殻口背部に、縫合に沿って形成される呼吸用の管。
螺旋稜角	らじょうりょうかく	Spiral ridge. → 縷帯
縷帯	ほうたい	Fasciole. 巻貝類の殻底に形成される、巻き方向と平行な(つまり螺旋状の)稜角または隆起。この内側を臍域と呼ぶことが多い。「縫帯」は誤字。
臍孔	さいこう／へそあな	Umbilicus. 巻貝類の螺旋の中心に形成され、殻底(前方)に開口する凹み。
偽臍孔	ぎさいこう	Pseud(o)umbilicus. 巻貝類の臍孔と同様、殻底に形成された陥没であるが、殻底から殻頂まで達しないもの。
殻口	からぐち／かくこう	Aperture. 軟体部が出入りする巻貝類やツノガイ類の貝殻口部のこと。
滑層	かつそう	Callus. 軸唇からその上の貝殻口部(内唇)に上塗りする様に形成される、やや厚く光沢があり平滑な層。
軸唇	じくしん	Columella. 殻口のうち、巻貝類の螺旋の軸となる部分(殻軸)にあたる箇所。
軸歯	じくし	Columellar tooth. 貝殻の口部内側(軸唇)に形成される歯状突起。この突起が殻の奥まで板状に続く場合、殻軸板columellar lamellaともされる。
鋸歯	きよし	Serration. 貝殻の縁辺や口部に形成されたノコギリ歯状の彫刻のこと。 例: ヨロイノソデ等の外唇。
内唇歯	ないしんし	Parietal lamella/tooth. 殻口の内唇部に形成される歯状突起。
外唇歯	がいしんし	Palatal tooth. キバサナギガイ類などの貝殻の口部外側(外唇)に形成される歯状突起。この突起が殻の奥まで板状に続く場合、外唇板 palatal lamella とされる。
上板	じょうばん	Superior lamella. キセルガイ類の貝殻の口部の上方に形成され、鉛直方向に突出する板状の隆起。
下板	かばん	Inferior lamella. キセルガイ類の貝殻の内唇下部に形成される板状の隆起。
下軸板	かじくばん	Subcolumellar lamella. キセルガイ類の貝殻の軸唇下端に形成される板状の隆起。
鉸歯	こうし	Hinge tooth. 二枚貝類が貝殻を開閉させる支点(螺番)に形成される「かみ合せ」部分の凹凸の隆起。
閉殻筋痕	へいかくきんこん	Adductor scar. 二枚貝類が貝殻を開閉するために発達させた筋肉(貝柱)が貝殻に付着する部位にできた痕跡。
(殻表面の彫刻)		
螺条	らじょう	Spiral striae. 巻貝類において、螺旋状にできた貝殻表面の筋状彫刻。
螺肋	らろく	Spiral rib. 螺条と同様、巻貝類の螺旋状の彫刻であるが、特に太くて顕著なもの。
螺旋点刻列	らじょうてんこくれつ	Spiral line of dots. 巻貝類の螺条彫刻のうち、連続せず、破線状の点の並びとして生じたもの。 例: エドガワミズゴマツボ等。
螺溝	らこう	Spiral groove. 巻貝類において、凹んだ溝が螺旋状(巻き方向と同様)に刻まれたもの。 例: マドモチウミナヤカリントウカワニナ等。
成長脈	せいちょうみやく	Growth line. 貝殻の成長速度の差によって生じる微細な彫刻。巻貝類では縦方向、二枚貝類では輪状に生じる。粗さによって線(thread/line)→脈(riblet)→肋(rib)と呼び名が変わる。
縦肋	じゅうろく	Longitudinal (axial) rib. 巻貝類において、螺層上に現れる前後(殻頂-殻底)方向の隆起。
縦張肋	じゅうちやうろく	Longitudinal (axial) varix. 縦張肋。巻貝類において、螺層上の離れた位置に、一定間隔または不規則に現れる太い縦肋。
放射肋	ほうしやろく	Radial rib. 二枚貝類やツノガイ類に見られる殻頂から放射状に形成される隆起線。
(腔襞)		
ブリカ	ぶりか	腔襞 plica. ゴマガイ類、キバサナギガイ類、キセルガイ類の貝殻の内部(口部近くの体層)に形成される隆起線。主襞、月状襞、上腔襞、下腔襞などがある。

〈貝類〉

主襞	しゅへき	Principal plica. キセルガイ類の貝殻内の口部付近に形成される線状の隆起(プリカ)。最も上部に位置する最も長いものを指す。ノミギセル類では、その上に短い縫合襞 sutural plicaがある場合もある。
月状襞	げつじょうへき	Lunella. キセルガイ類の貝殻内の口部付近に形成される線状の隆起(プリカ)。「ノ」の字状の形状のものを指す。
上腔襞	じょうこうへき	Upper palatal plica. キセルガイ類の貝殻内の口部付近に形成される線状の隆起(プリカ)。主襞の直下のより短いものを指す。
下腔襞	かこうへき	Lower palatal plica. キセルガイ類の貝殻の口部付近に見られる線状の隆起(プリカ)。最も下方に見られる短いものを指す。
(蓋)		
少旋型	しょうせんけい	Paucispiral. 巻き数が少ない蓋で、多くの場合、核が辺縁にある。
多旋型	たせんけい	Multispiral. 巻き数が多い蓋で、核が中央にある。
ペグ	べぐ	Peg. 種類によって蓋の内側に形成される突出部。 例: アマオブネガイ科やウラウチヨダマカマフザンショウ等の蓋。
(軟体部外部形態)		
頭部-腹足	とうぶ-ふくそく	Head-foot. 巻貝類の軟体のうち、匍匐時に外套腔の外部に露出する部分。頭触角・眼・口吻などからなる頭部と、接地する蹠面や、蓋を載せる蓋葉などを含む。
頭触角	とうしゅつかく	Cephalic tentacle. 巻貝類の頭部にある1対の触角で、その内部に脳神経節から生じた触角神経が先端まで走っているもののみをいう。→眼胞
小触角	しょうしゅつかく	第二触角 secondary tentacle. 有肺類が持つ2対の触角のうち、下側に位置するもの。
眼胞	がんぼう	Bulge (または eye stalk). 巻貝類の触角の根元にある眼の周囲の膨らみで、脳神経節から生じた眼神経が眼まで達する。新生腹足類などでは頭触角とは別に生じるが、柄眼類では頭触角と癒合している。→頭触角
口吻	こうふん	Snout. 巻貝類の頭部において、口の周囲の筋肉が前方へ伸長して吻状となったもの。この中に口球と歯舌がある。
雑搬溝	ざっぱんこう	Omniphoric groove. イツマデガイ科・カワザンショウ科・クビキレガイ科に特有で、頭部-腹足の前方両側面に、外套腔内部から足の接地面まで斜めに走る繊毛を具えた溝。右の溝は糞や卵を体外へ排出し、左の溝は逆に、体外の新鮮な水を外套腔内へ運び込む。陸上進出に伴う適応の一環と考えられている。
上足褶	じょうそくしゅう	Suprapedal fold. イツマデガイ科の大半、クビキレガイ科の全種、カワザンショウ科の一部に特有で、頭部-腹足の両側面の、雑搬溝の後方から蓋葉にかけて横向きに生じる褶。
蓋葉	がいよう	Opercular lobe. 巻貝類のうち、蓋をもつ種において、蓋を支える筋肉塊で、腹足の後方背面にみられる。
後足触角	こうそくしゅつかく	Metapodial tentacle. 巻貝類の一部の種において、腹足後端に生じる触角で、繊毛を具え、水流を能動的に形成し、匍匐時のバランス確保等にも使用される。
蹠面	せきめん	Sole. 巻貝類の足の裏で、接地する部分。
外套膜	がいどうまく	Mantle. 軟体部を覆う膜状の組織で、貝殻をもつ種では、それを形成するための腺が存在する。
外套腔	がいどうこう	Pallial (または mantle) cavity. 軟体の一部(多くは前方)に生じる外套膜に包まれた空洞状の部分で、鰓・心臓・腎臓開口部・直腸・輸卵管など重要な器官群を具え、外部から水や空気が出入りする。体の外部と内部の間の緩衝帯として機能し、いわば港のような存在。全ての貝類の共有派生形質で、軟体動物門の重要な定義のひとつであり他の門にはない。
外套触角	がいどうしゅつかく	Pallial tentacle. 巻貝類の一部の種において、外套腔辺縁に生じる触角で、繊毛を具え、水流を能動的に形成する。
斧足	おのあし/ふそく	Foot (of bivalves). 二枚貝類が移動や底質への潜行のために発達させた筋肉。固着性や移動性に乏しい種は未発達な場合が多い。
(軟体部内部形態)		
歯舌	しげつ	Radula. 軟体動物に特有の摂餌・咀嚼器官で、口球の中にある。キチン質の基板上に微細な歯がおろし金状に複数並び、餌を削り取ったり、食道へベルトコンベアのように運ぶ。分類形質としても重要。イモガイ類は毒矢のように特殊化し、寄生種では退化することがある。
鞭状器 (マイマイ上科)	べんじょうき	Flagellum. 生殖器の陰茎本体後端部に位置する盲管状の器官。交尾時に精包の尾部を形成する。
矢囊 (マイマイ上科)	しのう/やのう	Dart sac. 交尾時に使用する恋矢 (dart) を収納する袋状の器官。
陰茎付属肢 (マイマイ上科)	いんけいふぞくし	Penial appendix (または caecum). 生殖器の陰茎から派生する盲管状の器官。
内臓塊	ないぞうかい	Visceral mass. 外套膜が内蔵を包んだ袋状となった部分。主に中腸腺や生殖腺からなる。
(その他)		
ベリジャー幼生	べりじゃーようせい	Veliger (larva). 軟体動物特有の螺旋状あるいはD字型の殻を保有した初期発生形態で、トロコフォア幼生から変態し、多くの場合プランクトンとなって水中を浮遊したのちに着底して稚貝となる。
直達発生	ちよくたつはっせい	Direct development. 直接発生。ベリジャー(浮遊)幼生期を経ず、卵から直接幼貝が孵化する発生様式。水中を漂う時期を経ないので、分布範囲が狭くなる傾向がある。
瀬海陸地	ひんかいりくち	Coastal area. 海岸に面した陸地の棲息環境。飛沫帯より上部で、満潮時も水没しないため完全な陸地であるが、海岸からさほど距離がない場所。



(5) 本書で採用した貝類の分類体系

本書に掲載された種の「分類」の項は、貝類以外の分類群においては、原則的に目と科のみが記されている。これに対し貝類では、綱・亜綱・下綱・上目・目・亜目・下目・上科・科のすべてを、全掲載種に対して記入した。これは貝類分類学独特の事情による。

動物のあらゆる分類群を見渡しても、貝類 (特に腹足綱と二枚貝綱) ほど、最近30年間で上位分類が激しく変動した群はない。1980年代ごろまでは「伝統的」分類体系が重用され、さほど大きな変動はなかったが、それ以降は頻繁に見直しや変更がなされてきた。1980・1990・2000・2010年代それぞれに刊行された貝類の主要な図鑑や目録を並べてみると、亜綱・上目・目といった群すらも一致せず、各年代で異なる体系が提唱されてきたことがわかるはずである。しかも今なお安定には程遠い過渡期であり、今後しばらくはこの状態が続くことは疑いない。このような大幅な変動が生じた理由は多数あるが、主要なものとしては、1) 以前は少数の限定的な分類群質 (鰓の位置、神経の捩れの有無、雌雄異体が同体か、歯舌、殻、蓋など) のみを偏重して分類体系が編まれていたが、近年は軟体部のあらゆる器官を、機能も考慮しつつ相同性を重視して総合的に見直すようになったこと、2) 分岐学的手法の導入、特に形質進化 (祖先的か派生的か) と類縁の関係の重視、3) 従来知られていなかった重要な新分類群の相次ぐ発見、4) 分子系統解析の飛躍的な進歩と普及、などが挙げられる。

昨今は、比較解剖や分子解析の結果得られる系統樹に基づいて、上位分類群が改めて認識し直されるようになった。ところが、腹足綱や二枚貝綱は、比較的少数の種から成る分岐の深い分類群が極めて多いため、それらの大半は亜綱・目などと既存のリンネ式ヒエラルキーでは対応しきれない。系統樹上の各単系統群 (クレード) にバランス良く上位分類群名を割り当てるのは困難極まる課題であり、いまだ適切な名称がないままのクレードも存在する。この結果、亜綱または上目の所属ははっきりしているものの、目の名前を持たない上科や科などが続出することとなった。

例えば腹足綱の古腹足類 (サザエ、アワビなどを含む群) は亜綱 (または上目) に相当するとされているが、その下に目がなく、亜綱のすぐ下にいくつもの上科が並んでいる。古腹足類という群全体を無理に目のランクに落とすと、それ以降に出現したとされる新生腹足類や異鰓類も目とせねば統一性とバランスを失うことになるが、それらの群は目と呼ぶにはあまりにも巨大で多様に過ぎる。かといって古腹足類の内部は、目レベルで細分できるほど多様化しているわけでもない。このため、亜綱 (または上目) と上科のみに留めて目を設置せずにおくほかないのである。また、オニツノガイ上科は、カワニナ、ウミニナ、ヘナタリ類といったレッドリスト定番グループを多く含み、貝類の保全の議論の上で欠かせない分類群であるが、この上科もやはり適切な目の名称が存在せず、大きな目録を作成する時に常に扱いに困ることになる。実際は、オニツノガイ上科+エンマノツノガイ上科で構成されるクレードがそのまま目に相当するのであるが、狭義の貝人 (=貝類研究者+同好者) の間ではその2上科の名前を言えば話が通じてしまうので、誰も目グループタクソンを敢えて提唱しようとしないうままである。このため、これらの上科においては、上科名が目としての機能も兼ねているため極めて重要な意味を持っている。

このように、分類群ごとに、亜綱や上目で表現される群、目で名指されることが多い群、上科の名前しかない群とさまざまであるため、貝類全体の目録を作成する時にはそれぞれの群に特有の事情を知悉していなければならない。こういう特殊事情も貝人之間だけなら大した問題にならないが、多くの人々は「なぜカワニナは亜綱の下がすぐ上科なのか。どうして目が無いのか」と戸惑うにちがいがなく、実際に私たちは近年、幾度となく同様の質問を貝人以外の人々 (例えばアセスメント調査員、地方自治体、自然保護団体、生態学・発生学・考古学研究者、農林水産業従事者、報道関係者など) から受けてきた。レッドリストまたはレッドデータブックは狭義の貝人だけのものではなく、それ以外の人々に宛てて刊行されるべきことは、誰しも異論はないはずである。だからこそここでは、多少とも貝類の上位分類における分かりにくさを緩和し、貝人とそれ以外の人々との意識のギャップを可能な限り埋めるべく、それぞれの種に対する適切な上位分類群のすべてを、掲載全種に対して記すこととした。また、本書に登載された種が属すそれぞれの科が、どのような亜綱~上科に属すのかが一目でわかるように、表1にすべての対応を明記したので参照されたい。

より具体的な留意事項を次に挙げる：

- 1) 先述の通り、腹足綱と二枚貝綱の分類は今なお大きな変動のさなかにある。このため、本書が刊行された直後にも、さらに大幅に変更された新体系が示される可能性がある。このような状況下で合理性を担保するためには、単純に、最新の体系を採用すること以外に方法はない。したがって今回は、インターネット上で現在広く利用されている MolluscaBase (2016) (海産種は WoRMS editorial board (2017) にもデータが共有されている) での体系を踏まえた。そこでの体系は、腹足綱は Bouchet & Rocroi (2005)、二枚貝綱は Bieler *et al.* (2014) に概ね基づいているため、それらの原著も併せて参照した。

- 2) ただし、唯一の例外はいわゆる後鰓類と有肺類であり、それらについては Jörger *et al.* (2010) を参照し、真後鰓類と汎有肺類を下綱として使用した。また、汎有肺類のうち柄眼類においては、Wade *et al.* (2006) に基づき、直輸尿管類と曲輸尿管類を単系統群として認めなかった。曲輸尿管類は Bouchet & Rocroi (2005) も非公式群 (下記3を参照) としている。
- 3) 腹足綱のうち、原始紐舌類、翼舌類、原始的異鰓類、直輸尿管類、曲輸尿管類は単系統群でなく、便宜的な非公式群 *informal group* である。これらの群はいまだ系統関係の把握が十分でなく、共通の祖先から派生したすべての子孫を包含できていない側系統群 (偽系統群) か、または祖先を異にする複数の群が混在している多系統群の可能性があるため、将来的に分解され、異なる名称が与えられるかもしれない。この5つの群は表1の中では括弧をつけて示し、本文ではランクを明記せず「～類」と記した。
- 4) 腹足綱は、日本で刊行された図鑑の中では現時点で最新の体系を使用している『干潟の絶滅危惧動物図鑑』(日本ベントス学会編, 2012) と比べて大きな枠組みの変更はない。ただ同書では、古腹足類、アマオブネ型類、新生腹足類、異鰓類はたんに「クレード」としてランクを明示しなかったが、MolluscaBase (2016)、WoRMS editorial board (2017) はそれら4群を明確に亜綱としており、この点が最大の変更点である。
- 5) 二枚貝綱は、『干潟の～』では Carter *et al.* (2011) の体系を踏まえていたが、その後の Bieler *et al.* (2014) でさらに大きな変更がなされたため、今回は『干潟の～』での体系とは大幅に異なっていることに留意されたい。特に、腹足類同様に目がない上位分類群 (ツクエガイ上科、ウロコガイ上科、ドブシジミ科、バカガイ上科、フタバシラガイ上科) が多数生じていることや、長年に渡って使用されなかった無面目がマテガイ上科を含む目として復活している。さらに、Imparidentia は Bieler *et al.* (2014) で初めて提唱されたため、和名はこれまで存在しなかった。Impari- は「不完全な」、dentia は「歯の」の意であるから、今ここでその和名を不完全歯類と新称する。
- 6) 下綱と上目はほぼ同義のランクであり、多くの貝類研究者も日頃意識して差異を明確化していないが、今回は実際の用法の傾向から判断して上下関係をつけた。
- 7) サナギガイ上科のキバサナギガイ科とクチミゾガイ科、及びコハクガイ上科/ベッコウマイマイ上科のカサマイマイ科、シタラ科、ベッコウマイマイ科やそれぞれの近縁分類群の分類は研究者間で異論があり、今回の貝類分科会委員の間でも最後まで意見の合意をみななかった。上記の Bouchet & Rocroi (2005)、MolluscaBase (2016) などでは、キバサナギガイ科とクチミゾガイ科両者をサナギガイ上科としているので今回もこれに倣ったが、Bouchet & Rocroi (2005: 282, note 248) は「側系統群または多系統群かもしれない」とも注釈しており、委員からも同様の意見が出たため、そのことを喚起する意味でこの上科を表1では括弧でくくり、本文ではコーテーションをつけて表記した。また、カサマイマイ科とシタラ科はともにコハクガイ上科、ベッコウマイマイ科はベッコウマイマイ上科に属すとされてきたが、これらも委員間で生じた議論を踏まえ、カサマイマイ科とシタラ科の種には上記サナギガイ上科と同様、本文で上科名にコーテーションをつけて表記した。シタラ科とベッコウマイマイ科については、日本産の種をどちらに所属させるかという点でも結論は得られていない。そのため、この2科に属す種については各執筆者個別の判断を尊重した。この結果、既存文献に従うならばシタラ科の一員とすべき種の一部も、本書ではベッコウマイマイ科として扱っている部分がある。これについてはヒメカサキビの特記事項を参照されたい。

最後に、貝類の分類体系のあまりの複雑さに戸惑われる人が多いため、その困惑と混乱を多少とも軽減すべく、ひとつ指針を提言したい。

亜綱、下綱、上目、目、亜目、下目、科の分類はいまだ著しく流動的で、研究者によって異論も多い。しかし、唯一、比較的安定しているランクがある。それは上科である。上科の分類は、先述の柄眼類の一部など今なお扱いが決着していない分類群もなくはなく、また近年もリソツボ上科とクビキレガイ上科が分離されるなど、多少の不安定さや変動はあるものの、それらはむしろ少数で例外的であり、腹足綱・二枚貝綱とも、全体としては実に安定している。数ある上位分類群の階級の中では、綱に次いで変化が少ないとさえ言えるであろう。極論すれば、上位分類群を少数だけ選択して記す場合、安定性を最も重視するのならば科すらも触れるのをやめて、綱と上科だけにしてもよいくらいである。ならば、現行の上科を一律1ランク下げて科として扱うという手も考えられなくもないが、これは結果的に極端な粗分類になるし、他の文献との整合性も確保できないので現実には難しい。ただ、ウロコガイ (上) 科はこの措置が実際に採用されている。この上科に含まれるとされてきたチリハギ科、ブンブクヤドリガイ科、コハクノツユ科などは人によって扱いが異なり、それぞれの科の定義すらも定かでないが、その一方でウロコガイ上科の単系統性は揺らがないので、暫定的に上科=科としているのである。本書もこれに倣い、ウロコガイ上科=ウロコガイ科とした。

<貝類>

したがって、これから貝類の分類と系統関係を勉強したい初心者は、まず上科とその関係を一通り理解するのが早道であろうと思われる。現行の目や科は複雑過ぎて、相互の関係を把握するまでどうしても時間がかかる。この意味もあり、本書の貝類の「分類」の項には、すべての種に対して上科の所属を明示することが何より重要と考えた。ただこの場合、「上科を書いているのに、なぜ目はないのか」とまたしても問われかねないので、ならばいっそすべてのランクを明記した方が誤解を招かずにすむだろうと判断したまでである。

参考文献：

- Bieler, R., Mikkelsen, P.M., Collins, T.M., Glover, E.A., González, V.L., Graf, D.L., Harper, E.M., Healy, J., Kawauchi, G.Y., Sharma, P.P., Staubach, S., Strong, E.E., Taylor, J.D., Tëmkin, I., Zardus, J.D., Clark, S., Guzmán, A., McIntyre, E., Sharp, P. & Giribet, G., 2014. Investigating the bivalve tree of life – an exemplar-based approach combining molecular and novel morphological characters. *Invertebrate Systematics*, 28: 32–115.
- Bouchet, P. & Rocroi, J.-P., 2005. Classification and nomenclator of gastropod families. *Malacologia*, 47: 1–397.
- Carter, J.G., Altaba, C.R., Anderson, L.C., Araujo, R., Biakov, A.S., Bogan, A.E., Campbell, D.C., Campbell, M., Chen, J., Cope, J.C.W., Delvene, G., Dijkstra, H.H., Fang, Z., Gardner, R.N., Gavrilo, V.A., Goncharova, I.A., Harries, P.J., Hartman, J.H., Hautmann, M., Hoeh, W.R., Hylleberg, J., Jiang, B., Johnston, P., Kirkendale, L., Kleemann, K., Koppka, J., Kříž, J., Machado, D., Malchus, N., Márquez-Aliaga, A., Masse, J.-P., McRoberts, C.A., Middelfart, P.U., Mitchell, S., Neveškaja, L.A., Özer, S., Pojeta Jr., J., Polubotko, I.V., Pons, J.M., Popov, S., Sánchez, T., Sartori, A.F., Scott, R.W., Sey, I.I., Signorelli, J.H., Silantiev, V.V., Skelton, P.W., Steuber, T., Waterhouse, J.B., Wingard, G.L. & Yancey, T., 2011. A synoptical classification of the Bivalvia (Mollusca). *Paleontological Contributions*, (4): 1–47.
- Jörger, K.M., Stöger, I., Kano, Y., Fukuda, H., Knebelberger, T. & Schrödl, M., 2010. On the origin of Acochlidia and other enigmatic euthyneuran gastropods, with implications for the systematics of Heterobranchia. *BMC Evolutionary Biology*, 10: 323.
- MolluscaBase, 2016. <http://www.molluscabase.org> (2017年1月9日閲覧)
- 日本ベントス学会 (編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック. 東海大学出版会, 秦野, xvii+285 pp.
- Wade, C.M., Mordan, P.B. & Naggs, F., 2006. Evolutionary relationships among the pulmonate land snails and slugs (Pulmonata, Stylommatophora). *Biological Journal of the Linnean Society*, 87: 593–610.
- WoRMS Editorial Board, 2017. World Register of Marine Species. <http://www.marinespecies.org> (2017年1月9日閲覧)

執筆者名： 福田 宏

表 1(1) 本書で扱った貝類の科の上位分類一覧 (その 1)

綱 Class	亜綱 Subclass	下綱 Infraclass	上目 Superorder	目 Order	亜目 Suborder	下目 Infraorder	上科 Superfamily	科 Family	
多板 Polyplacophora	新ヒザラガイ Neoloricata	なし	なし	ヒザラガイ Chitonida	ケハダヒザラガイ Achantochitonina クサズリガイ Chitonina	なし	ケムシヒザラガイ Cryptoplacoidea クサズリガイ Chitonoidae スカンガイ Fissurelloidea	ケハダヒザラガイ Acanthochitonidae クサズリガイ Chitonidae スカンガイ Fissurellidae	
	古腹足 Veligastropoda	なし	なし	なし	なし	なし	クボガイ Tegulidae ニシキウズ Trochoidea	クボガイ Tegulidae リュウテン Turbinidae ニシキウズ Trochidae	
腹足 Gastropoda	アマオブネ型 Neritimorpha	なし	なし	Cycloneritimorpha	なし	なし	ホウシュエビス Seguenzioidae ゴマオカタニシ Hydrocenoidea ヤマキサゴ Helicinoidea	サンショウガイモドキ Chilodontidae ゴマオカタニシ Hydrocenidae コハクカノコ Neritiliidae ユキスズメ Phenacolepadidae アマオブネ Neritidae	
	新生腹足 Caenogastropoda	なし	なし	(原始紐舌類 Architaenioglossa)	なし	なし	タニシ Viviparoidae	タニシ Viviparidae	
							ヤマタニシ Cyclophoroidea	ヤマタニシ Cyclophoridae ゴマガイ Diplommatinidae	
	新生腹足 Caenogastropoda	なし	なし	吸殻 Sorbeoconcha	高腹足 Hypsogastropoda	タマキビ型 Littorinomorpha	なし	オニツノガイ Cerithioidea	キバウミナ Potamididae ウミナ Batillariidae トゲカワミナ Thiariidae スナモツツボ Scalioidae
								タマキビ Littorinoidea	タマキビ Littorinidae
								リソツボ Rissooidea	リソツボ Rissoidae ホソスジチョウジガイ Rissoinidae
								クビキレガイ Truncatelloidea	フロリダツボ Elachisnidae カチドキシタダミ Clenchiellidae ワカウラツボ Iravadiidae イソコハクガイ Tornidae ミスゴマツボ Stenothyridae カワザンショウ Assimineidae イツマテガイ Pomatilopsidae クビキレガイ Truncatellidae
								シロネズミ Vanikoroidea	シロネズミ Vanikoridae ハナゴウナ Eulimidae
								スイショウガイ Stromboidea	スイショウガイ Strombidae
								タカラガイ Cypraeoidea	タカラガイ Cypraeidae
タマガイ Naticoidea								タマガイ Naticidae	
ヤツシロガイ Tonnoidea								ヤツシロガイ Tonnoidea	
(翼舌類 Ptenoglossa)								なし	イトカケガイ Epitonoidea
新生腹足 Neogastropoda	なし	なし	なし	なし	なし	なし	エソバイ Buccinoidea	オリレイヨフバイ Nassaridae	
							アツキガイ Muricoidea	アツキガイ Muricidae バイ Babyloniidae トリノコガイ Marginellidae ミノムシガイ Costellariidae フデガイ Mitridae	
							イモガイ Conoidea	マンジ Mangelidae クダボラ Turridae イモガイ Conidae タケノコガイ Terebridae	

表 1(2) 本書で扱った貝類の科の上位分類一覧 (その2)

綱 Class	亜綱 Subclass	下綱 Infraclass	上目 Superorder	目 Order	亜目 Suborder	下目 Infraorder	上科 Superfamily	科 Family			
腹足 Gastropoda	異鰓 Heterobranchia	(原始的異鰓類 Lower Heterobranchia)	なし	なし	なし	なし	ミズシタダミ Valvatoidea	カクメイ Corniostriidae			
		真後鰓 Euopisthobranchia	なし	頭楯 Cephalospidea	なし	なし	ナツメガイ Bulloidea	オオコメツブガイ Acteocinidae			
		汎有肺 Panpulmonata	なし	なし	なし	なし	なし	トウガタガイ Pyramidelloidea	トウガタガイ Pyramidellidae		
			水棲 Hygrophila	なし	なし	なし	なし	ヒラマキガイ Planorboidea	ヒラマキガイ Planorbidae		
			スナウミウシ Acochlidacea	なし	なし	なし	なし	Parhedyloidea	ヒミツナメクジ Aitengidae		
			柄眼 Stylommatophora	板顎 Elasmognatha	なし	なし	なし	なし	オカモノアラガイ Succinoidea	オカモノアラガイ Succinidae	
				(直輸尿管類 Orthurethra)	ハワイマイマイ Achatinelloidea	なし	なし	なし	ハワイマイマイ Achatinelloidea	ハワイマイマイ Achatinellidae	
					(サナキガイ Pupilloidea)	なし	なし	なし	(サナキガイ Pupilloidea)	キバサナキガイ Vertiginidae	
					キセルモドキ Enoidea	なし	なし	なし	キセルモドキ Enoidea	クチミソガイ Strobilopsidae	
				(曲輸尿管類 Sigmurethra)	キセルガイ Clausilioidea	なし	なし	なし	なし	キセルガイ Clausilidae	キセルガイ Clausilidae
					ネジレガイ Streptaxoidea	なし	なし	なし	なし	ネジレガイ Diapheridae	タワラガイ Diapheridae
					イトカケマイマイ Plectopyloidea	なし	なし	なし	なし	イトカケマイマイ Plectopyloidea	イトカケマイマイ Plectopylidae
					(コハクガイ Gastrodontoidea)	なし	なし	なし	なし	(コハクガイ Gastrodontoidea)	カサマイマイ Trochomorphidae
					ベッコウマイマイ Helicarioidea	なし	なし	なし	なし	ベッコウマイマイ Helicarioidea	シタラ Euconulidae
					オオコウラナメクジ Arionoidea	なし	なし	なし	なし	オオコウラナメクジ Arionoidea	ベッコウマイマイ Helicariionidae
マイマイ Helicoidea	なし	なし	なし		なし	マイマイ Helicoidea	ナメクジ Philomycidae				
取眼 Systelommatophora	なし	なし	なし	なし	なし	ナンパンマイマイ Camaenidae					
トロアワモチ Onchidoidea	なし	なし	なし	なし	トロアワモチ Onchidoidea	トロアワモチ Onchididae					
アンヒダナメクジ Veronicelloidea	なし	なし	なし	なし	なし	アンヒダナメクジ Rathouisidae					
オカミガイ Ellobioidea	なし	なし	なし	なし	なし	オカミガイ Ellobiidae					
二枚貝 Bivalvia	翼型 Pteriomorpha	なし	なし	イガイ Mytilida	なし	なし	イガイ Mytiloidea	イガイ Mytilidae			
				カキ Ostreida	なし	なし	なし	ハボウキ Pinnoidea	ハボウキ Pinnidae		
				フネガイ Arcida	なし	なし	なし	フネガイ Arcoidea	フネガイ Arcidae		
				イタヤガイ Pectinida	なし	なし	なし	イタヤガイ Pectinoidea	ペンケイガイ Glycymerididae		
	異歯 Heterodonta	真異歯 Euheterodonta	不完全歯 Imparidentia	異韌帯 Anomalodesmata	なし	なし	なし	スエモノガイ Thracioidea	イタヤガイ Pectinidae		
				ツキガイ Lucinida	なし	なし	なし	ツキガイ Lucinoidea	ウミキク Spondylidae		
				なし	なし	なし	なし	ツクエガイ Gastrochaenoidea	ウミキク Spondylidae		
				なし	なし	なし	なし	ウロコガイ Galeommatoidea	ウロコガイ Galeommatidae		
				無歯 Adapedonta	なし	なし	なし	なし	マテガイ Solenoida	マテガイ Solenidae	
				ザルガイ Cardida	なし	なし	なし	なし	ザルガイ Cardioidea	ザルガイ Cardidae	
				なし	なし	なし	なし	ニッコウガイ Tellinoidea	ニッコウガイ Tellinidae		
				なし	なし	なし	なし	フジハナガイ Donacidae	フジハナガイ Donacidae		
				なし	なし	なし	なし	シオササナミ Psammobiidae	シオササナミ Psammobiidae		
				なし	なし	なし	なし	アサンガイ Semelidae	アサンガイ Semelidae		
				なし	なし	なし	なし	キヌダアゲマキ Solecurtidae	キヌダアゲマキ Solecurtidae		
				なし	なし	なし	なし	ドブシジミ Sphaerioidea	ドブシジミ Sphaeridae		
				オオノガイ Myida	なし	なし	なし	なし	オオノガイ Myoidea	オオノガイ Myidae	
				なし	なし	なし	なし	ハカガイ Mactroidea	ハカガイ Mactridae		
				なし	なし	なし	なし	チトセノハナガイ Anatinellidae	チトセノハナガイ Anatinellidae		
				なし	なし	なし	なし	チドリマスオ Mesodesmatidae	チドリマスオ Mesodesmatidae		
				なし	なし	なし	なし	フタバシラガイ Ungulinoidea	フタバシラガイ Ungulinidae		
				マルスダレガイ Venerida	なし	なし	なし	なし	シジミ Cyrenoida	シジミ Cyrenidae	
				なし	なし	なし	なし	ハナクモリ Glaucanoida	ハナクモリ Glaucanidae		
なし	なし	なし	なし	マルスダレガイ Veneroidea	マルスダレガイ Veneridae						

レッドリスト選定時の候補種が属す科をすべて挙げた。このため、検討の結果リスト対象外となり、本書には掲載されなかった科も含めている。括弧で囲まれた分類群は単系統でないと考えられる非公認群。